昭和三年十二月一日發行（毎月一回一日發行）

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

12-1928

十二月號

491 12 43

第四十三年第十二號 第四百九十一



世の獵奇・變態蒐癖家・愛書好事家
退屈の嫌ひな智識人に告ぐ!!

梅原北明氏編纂の
決死的道樂出版

慶應四年から大正十五年十二月二十五日迄の新聞（明治年間から約二百種 大正年間から約百五種）の約三百五十種（目方にして六百噸）中より十數年の驚倒的努力を持續して大は政治・外交・敎育・經濟・社會暴動反逆事件より、小は大盜女盜・毒婦・心中・捕物・迷信・慘虐・性慾犯罪等々に至るまで社會全般に亘る事件の特に珍中の珍なるものをのみ集錄したもので、原稿枚數にして四萬五千枚。編者の如き日本一の古新聞蒐集家にして始めて出來得る文獻ものかと思ひます。如何に誰れが頑張つても材料がフン段にないと手がつけられない仕事です。事實これだけの原稿を揃へることは容易な業ではない。八萬圓ものベラ棒な蒐集費を要したと編者は事もなげに笑つてゐるが、この種の出版は五十か百の材料費で何十萬部と賣つて印税成金となる最近の圓本に現れるアハヤ小說やチャンバラ文藝ものとは、恰で性質を異にしてゐます。本を書いて金儲けをしたい人には、この藝當は逆立ちしたつて一寸出來ない興行もんですな。と云つて見得を切つて見たところで、まさか博士論文ものぢやなし、下手まごつくと禁止勳章ものかも知れないしろものです。圓本のお客は讀まぬがよし。小說家、チャンバラ文藝家變態性慾研究家唯一必携のたね本もろ〱の愛書好事家諸氏に珍藏して戴ければ吾等の道樂慾は遺憾なく第一回の射精濟みとなる次第希望者は内容明細書を請求して下さい。

▽明治大正珍無類の奇聞を頒つ會!!

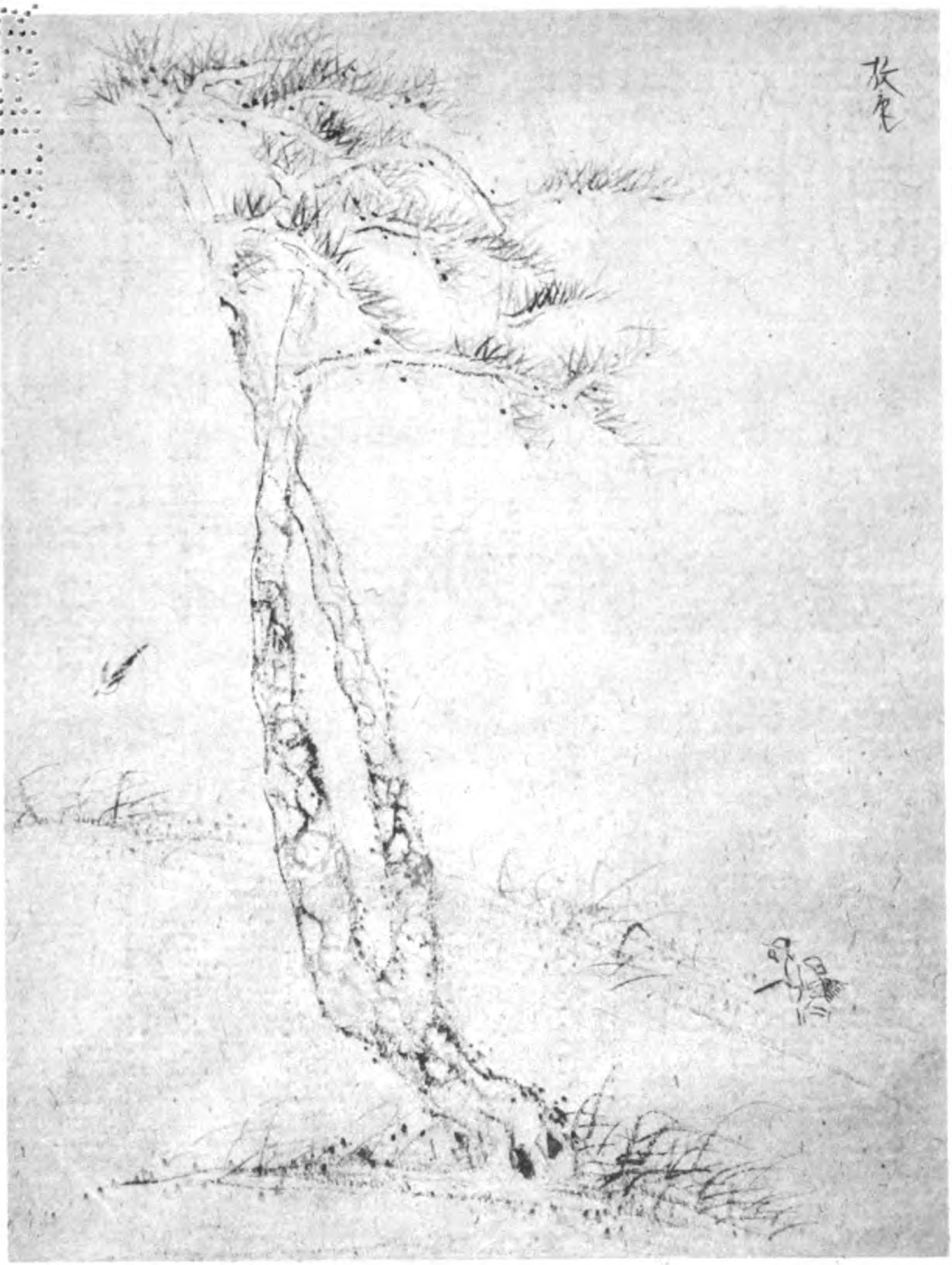
内容明細書はグロテスク社へ（東京市芝區本芝四ノ十六 電話高輪四九〇五番）


寫眞材料界ノ權威
アグフアの製品を
推薦す
Agfa
東京市麹町區丸之内仲通
十四番館五號
アグフア合名會社
大阪市東區南久寶寺町
四丁目七番地
アグフア合名會社



特選畫報


新マツダ
マツダ
どの電球よりも
もちよく
どの電球よりも
氣持のよい
光りの
新マツダランプ



野鳥　　小杉放庵筆

伊能嘉矩先生著

帝國學士院推薦

臺灣文化志（全三卷）

菊大判總布裝

背革・天金・函入

各冊千餘頁 挿畫各十數葉

定價各拾圓

送料（市内各十二錢 地方各三十六錢 臺灣各七十五錢）

福田德三氏序

柳田國男氏序

東京帝國大學教授 文學博士 市村瓚次郎先生

法學農學博士 新渡戸稲造先生

臺北帝國大學總長 文學博士 幣原坦先生

臺灣總督 川村竹治閣下

子爵 後藤新平閣下

推奬の大著述

東洋文化研究の一大寶庫

内容見本進呈

全國各地書店に有ります。萬一品切の節は直接小院に御申込下さい。

臺灣を政治的一版圖としてのみ見ず、地理的、歴史的、民族的に闡明する事は東洋文化を雙肩に擔ふ我が日本の學術的最大任務である。昭代の文運に際會し臺灣研究の最高權威伊能嘉矩先生三十年の努力に成れる本書の出現は實に我が學界が民族的に進出せる世界的實證の一大紀念碑である。帝國學士院の推薦を始め學界各方面の推奬を享くるに到つたのも決して偶然ではない。

臺灣の統治、開發に從事すると否とを問はず、苟も日本文化宣揚を念とする識者に伊能先生のこの偉大なる遺業が教ふる處は實に無限である。

東京・神田・駿河臺 ニコライ下

刀江書院

振替東京七三一一八番

電話神田 三二七一番 三一八九番

婦人

●●經濟的な社會苦悶が、どこまで增大して行くのであらう？ブルジョアもプロレタリアートも、金・金・金である。金をめぐる女の姿を極めるのも亦、近來の好題目ではございませんか？賣切れぬうちにお早くお求め下さい……

十二月特輯 金をめぐる女

◇兒玉尊臣氏新著◇

（津々たる趣味のうちに作歌の眞髓を會得せしむ）

好評激甚

趣味生活 和歌の作法

本書は趣味に生き和歌道に入らんとする人々の爲に編述したものである。內容は和歌を作らんとする程の人々は和歌史の大要を知らざるべからずとしてまづ日本和歌小史を述べ次に古來著名の歌學書を平易な現代文をもつて解釋し更に歌語斷片を叙して和歌を作らんとする氣分をそゝり最後に現代大家の名歌を歌題別に配し各歌題には作歌上に最も手引となる類語を羅列し津々たる趣味のうちに作歌の眞髓を會得せしめやうとするものである。三千年來の洗練を經た日本固有のもので而も我國民性に最も適はしい藝術である和歌の道を趣味生活を欲する人々に心からおすゝめする。——《大好評を博し注文殺到す》——

四六判最上表美本 全壹册四百餘頁

正價金貳圓 送料十二錢

石川誠著 **萬葉集 古今和歌集 新古今集 選釋** 和歌入門者の讀物として參考書として好適のもの大好評增刷す（七版） 金貳圓八拾錢 送料十八錢

上田文學博士 山田武司著 **參考 近世名家國文新釋** 苟も近世文學を語る者の必讀すべき最良の伴侶たる書（新刊） 金五圓八拾錢 送料廿七錢

吉澤文學博士 奥里將建著 **最新國文學史辭典** 嶄新な年表と系譜とは國文學研究者に絶好の師友たる物也（新刊） 金三圓三拾錢 送料廿七錢

新屋敷幸繁 **現代文學の鑑賞** 獨特の論と實際と詩人的熱とを以て態度方法を描き出した鑑賞讀本（新刊） 金壹圓八拾錢 送料十二錢

山名正太郎 **政談演說仕方と聽き方** 際物でなく眞に有益な指導書手引草精讀の價値十分（五版） 金壹圓五拾錢 送料金八錢

山名正太郎 **思潮文獻 日本自殺情死紀** 珍らしく興味ある本と大好評を博し賣行激甚再販賣切增刷（三版） 正價金貳圓 送料十八錢

日高瓊々彥 **國家に及ぼす宗教の害毒** 日蓮の如きも茲ではみぢめな馬脚を露出せるなり（三版） 金壹圓八拾錢 送料十二錢

春藤與市郎 **古今世界大陸戰史** 戰爭!!是れ何故に起る不戰條約の成否や如何先づ是れを戰爭史に觀よ本書は現代人の讀物として實に有益な書である（新刊） 金參圓貳拾錢 送料十八錢

春藤與市郎 **古今世界大海戰史**（新刊） 金貳圓八拾錢 送料十八錢

東京市神田區西小川町二ノ三 大同館發行 振替貯金口座東京八七貳番

支那の政治と日本の政治

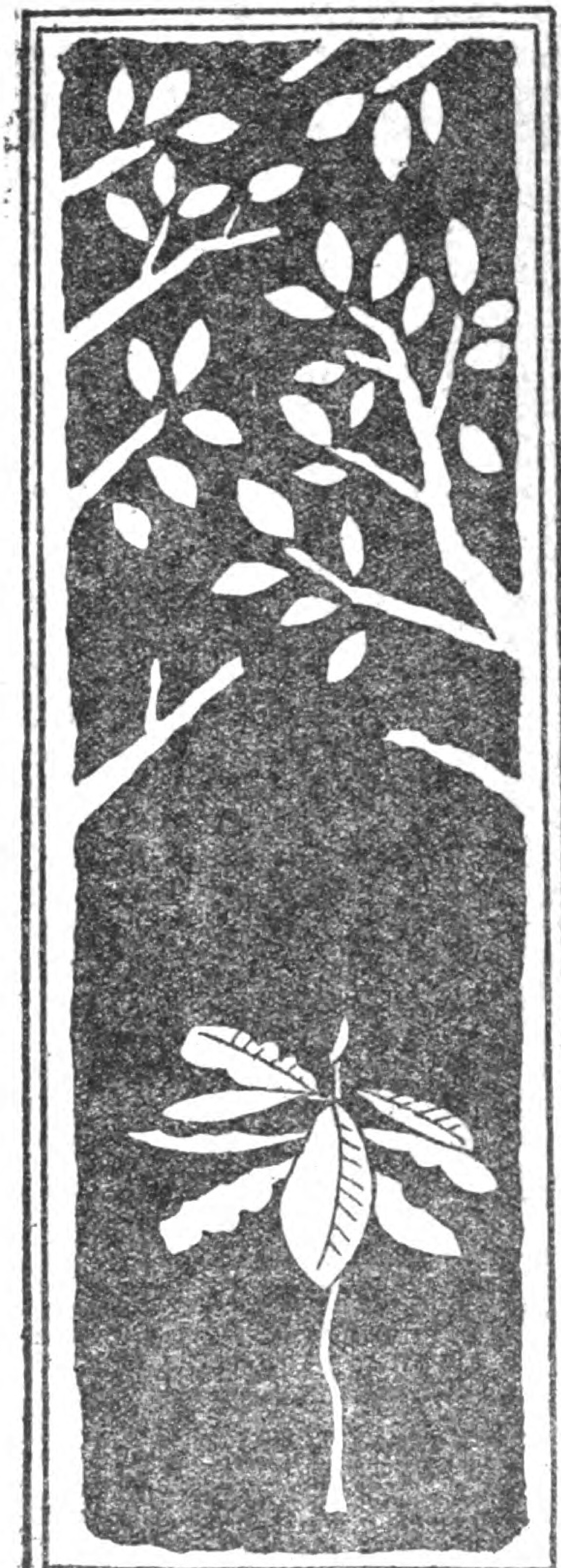
——(卷　頭　言)——

一、此間支那の視察を了へて歸つた人の話。『日本の對支政策は兎もすれば「人」に着眼し過ぎて困る。蔣介石がどうの、馮玉祥がどうの、甚しきは王正廷を換えて貰へば外交談判は樂に運べるなどと云ふ。袁世凱から段祺瑞、降つて張作霖などを相手に見ん事支那を料理し得たと自惚れてゐる人には尤もの考だが、何時までも時勢の變化に眼を閉ぢられては困る。個人の出來心で政治の行はれた時代はもう去つた。支那には今や何か知ら輿論といふ樣なものが出來てゐる。茲に何か問題が起る。すると必ず之に就き新聞などにも現はれ官界の要人に採用され一般識者階級からも支持を受け、且又我々外國人が聞いても成程と首肯される樣な意見が世上に浮み出る。而して色々な問題に付て現はれる斯うした種々の說明を比較綜合して觀ると、其間に亦自ら一種の脈絡が貫かれて居る樣に思はれる。私は學者でないから分り易い說明は出來ないが、斯んなのが所謂輿論と呼ばれるのではなからうか。果して然らば支那は昨今漸く輿論の支配する所となりつゝあると謂てよからう、從て支那が今後どう動くかは必ずしも私共に取て不可解の謎ではなくなつた。官界實業界の先輩などにも是非この新しい趨勢を見て貰ひたいものだ。孰れにしても對人方策は一刻も早く棄てゝ欲しい』と。

二、右の說の當否は別として、更に支那の斯うした動きは彼國最近の特有の現象だらうと其人が主張されるので、之には簡單に異議を申立てて置いた。何となれば斯かる意味の輿論は無論夙くから我國にもあるからである。現に看よ、昨今の日支交涉按件に關しても國民大衆の態度には略々歸する所が在るではないか。唯彼と我と違ふ所は、この國民大衆の支持と承認とを受くる輿論が其儘實際の支配力を有たず、實際の支配力を認められるものは極めて少數なる特權階級の作る所たる方針であることである。支那に新に現はれたものは日本にもあるのだ。たゞ日本にはもう一つ支那にないものがあつて、それが縱横無盡に跋扈して居るのだ。謂はば日本には二つの思想の對立がある、支那にはそれがない。

三、個人の出來心で天下の支配された時代は日本にもあつた。而して之に對抗した民衆の進攻的勢力は自ら彼等相互間の結束を促し、甘じて之に迎合するを恥とせざるブルジョア階級の支援を得てやがて一種の特權階級を作るに成功した。是に於て出來心で天下の左右さるると云ふ現象は跡を絶つたが、而も之に代つて天下を支配する意見は固より民衆の意慾とは何の關係もない。民衆それ自身の開發の遲かつた支那では、之に反し、永く官僚の徒に惰眠を貪るを許し僞に其專恣橫暴に苦しむことも久しかつたが、一度天運の廻り來て民衆の覺醒の始まるや、官界の覇者は一ト溜りもなく崩壞し、一足飛びに輿論を以て天下を支配するの新境地がひらかれたのである。我が日本が第一の段階を經て今正に第二の段階に惡戰苦鬪しつゝありと云ふを得ば、支那は第二の段階を飛び越えて急に第三段階に進んだものと云ふを妨げぬ。夫れ〳〵の國情に基き必然の理法に遵ふものとは云へ、殊に支那との關係の益々密なるを加ふる際、此邊の事も少しは考へなくてはなるまい。

中央公論



第四十三年第十二號
十二月號
四百九十一號

新勞農黨綱領の基調

大山郁夫

一 政黨と綱領

『一の新綱領は、しかし常に一の公けに樹てられた旗であつて、外界はそれによつてその黨を判定する。』――エンゲルス。

過去の惰性によつてのみ、わづかにその滅び行く勢力——よし現在に於て表面上どれほど大きく見えてゐようとも——を維ぎ止めてゐるブルジョア政黨に取つては、各自の綱領の如きものは、段々とただ外觀を繕ふ裝飾にすぎないものに化しつつあることは事實だ。

だが、勞働者農民無產市民その他一切の被壓迫民衆の結束を力として立ち、ひたすら輝ける前途への運命を開拓しつつ進んでゐる無產諸黨に取つては、決してさうではない。彼等に取つては、一の綱領、一の政策、一の宣言は、それらを起草し採用する當該各黨の本質および實際行動を精確に規定するものとして、極めて重要なる內容的意味を帶びしめられてゐるものであり、エンゲルスがゴータ綱領について言つた通りに、『一の公に樹てられた旗』である。そして、單に外界がそれによつてその黨の性質を判定するのみならず、更らに支配階級はそれへの參照によつてその對策を立て、また各黨が呼びかける大衆も、それを基準として、その去就を決定する。——かういふのが、少くとも我國に於ける最初の無產黨が出現した瞬間からの實情であつた。

二　日本の無產諸黨の綱領——その形式と內容

それに關聯して、ここに特に日本の無產諸黨の綱領の或る具體的實例を取り、その形式と內容との關係について若干說明して置くべき必要がある。

先づその形式の點からいへば、眞ッ先に思ひ出されるのは、かの今から三年前、結黨後三時間にして解散を強制された農民勞働黨の綱領の形式である。それは、今日見られる無產黨の綱領のそれとは、非常にその行き方をちがへてゐたものであつた。それは、當時『行動綱領』として問題にされたものであつて、つまり現在の慣行に從へば『政策』の項下に持ち來さるべき幾多の項目——たとへば『治安維持法・治安警察法その他一切の無產階級壓迫法令の撤廢』等々といふが如き——を列擧した風のものであつた。それから踰えて一昨年の三月五日に勞働農民黨が結成された時、『政策』および『宣言』とは獨立的に掲げられた綱領の形式が採用されたが、それが、その後次々と續々擡頭するに至つた全國的および地方

的各無產黨によつて、恐らく例外なく、踏襲されて來た型となつて、今日にまで及んでゐるのだ。

では、舊勞農黨のその綱領はどういふ樣式のものであつたか？　それはたゞ創立當時に於ける同黨の立黨の精神ともいふべき非常に概括的な原則的規定を含むところの、次の三つの簡單なる條項から成り立つてゐた。

一　我等は、我國の國情に即し、無產階級の政治的・經濟的・社會的解放の實現を期す。

二　我等は合法的手段により、不公正なる土地・生產・分配に關する制度の改革を期す。

三　我等は、特權階級のみの利害を代表する既成政黨を打破し、議會の徹底的改造を期す。

人はこれを一讀すれば、かゝる綱領は、唯その主體たる黨の性質を髣髴せしめ得るだけで、それ以外に黨が當面如何なる方向に向つて活動を開始しようとしてゐるのであるかの問題に殆んど答へてゐないといふことに氣附くであらう。

だが、それには一應相當の理由がある。そしてその說明は、まづ第一に創立當時舊勞農黨がその下におかれゐた一の特殊事情に關聯してなされなければならぬ。その頃同黨は、あらゆる點に於て、まだ危げな暗中模索時代を經過しつゝあつた。それは一方に於て、それ自身が直面しつゝあつた活動場面の客觀的情勢――更らに一層根本的には資本主義の歷史的發達の現段階の諸特徵――に關し、黨の實踐上に於て相當程度に信賴し得られるほどの明確なる理論的認識を具備するまでに至つてゐなかつたと同時に、他方に於てはまた、より手近な問題であつた自黨の構成の前途に關してさへも、透徹な見通しを持ち得ない狀態にあつた。

殊に最後の一點に關して、現在の立場から振り返つて見たまゝを一言すれば創立當時の舊勞農黨は、例の『左翼四團體』を除外した以外の幾多の傾向を異にする參加諸團體を辛くも抱合して組成されてゐたところの一個の無產階級的政治結社であつたが、その後の數個月間に亙つて、引き續きそれらの左翼四團體――後には三團體――に對する所謂門戶開放問題を中心として、極度に內部的不統一を暴らけ出さなければならない運命の下におかれてゐた。そして、かかる形勢は、創立當時の同黨をめぐる諸事情のうちに充分に孕まれてゐたのであつた。

一方からした不安な狀態の下に、他方更らに上から絕えず警戒の眼を光らして居た當局の監視の前に結集しなければな

らなかつた舊勞農黨の綱領は、必然的に、その意味の多かれ少なかれ茫漠たる群句を含まない譯には行かなかつた。

だが、それにしても、初期の舊勞農黨といへども、尙ほそれが當時に於て到達してゐた意識および實力に相應して、實際上政治的に經濟的に社會的に或る一聯の活動の展開を企ててもゐたし、またその活動によつて貫徹されべき諸要求、並にその目標、任務、態度、方針等々を持つてもゐたことは事實だ。しかるに、さうしたものが、少しも上揭の綱領の中に出てゐないのは、一體何故であるか？

それは實際上の便宜に對する考慮から來てゐるものである。綱領といふものは、若しそれを外國語でプログラムといはれてゐるものに相當するものと理解すれば、それは必ずしも概括的な原則的規定だけを含むべきものに限るべきではない。現に諸外國の諸多の實例を見れば、寧ろさうでない場合が多く、黨の當面の活動の目標、任務、態度、方針、およびその活動によつて貫徹されるべき諸要求、等々までが、總括的に揭げられてあるばかりでなく、屢々黨の活動の對象とされてゐる現實の場面の情勢に關する理論的認識までが堂々と開陳されてゐるやうなことすらある。だが、大體論としていへば、一般に原則的規定と見られ得るものは、より多く固定的であるのを普通とするものであつて、しかも、より多く概括的なものになればなるほど、益々さうである。そして、より多く固定的な規定ほど、修正なり變更なりの必要が、より少いといふことも、無論のことである。固定性の必要の最も多く、修正なり變更なりの必要の最も少いやうな若干の規定――主として原則的性質の――を、さうでない諸多の規定から引離して別個の一群としておくことは、普通の場合、少くとも便宜の要求に合致するものと見られる。現在日本の各無產黨の慣行に於て、『綱領』として形式上獨立の地位を與へられてゐるものは、つまりさうした種類の規定の一群である。そして、他の種類の諸多の規定はまた形式上別個の項目の下にまとめられてゐる。即ち、現在の慣行を基準として具體的にいへば、黨の當面の行動によつて貫徹されるべき諸要求は『政策』の項下に列擧されることになつて居り、またその行動の目標、任務、態度、方針、等々は『宣言』に於て表明されることになつて居る。であるから、若し我々が『綱領』をその最廣義に解釋するならば、現在の各無產黨の形式上の綱領は、實質上の綱領――少くともその形式上の綱領に政策と宣言とを加へて一團としたもの――の單なる一部を構成し

てゐるにすぎないものと見られることが出來るのである。

この意味に於て、創立當時の舊勞農黨の綱領・政策・宣言の綜合體をその實質上の綱領として見るとき、それは、初期の數個月間に於ける同黨の本質を極めて適切に反映してゐたものと見ることが出來る。何故か？

と同時に、それはまた、初期の數個月を經過した後の——殊に分裂の試練の淨火を潛り拔けて、更生とも言へるほどの大變化を遂げた後來の同黨の新しき姿態とは、非常に懸け離れたものになつてしまつたことも事實である。何故に？

私は次に、以上の二つの問題に對する解答を、初期の舊勞農黨の歴史への一瞥を通じて與へるであらう。

三　內訌時代の舊勞黨內に於ける二つの流れ

前に掲げられた舊勞農黨の綱領（形式上の。——以下のこの言葉が何等の斷りなしに用ひられる場合には、同じく「形式上の綱領」を指すものとして理解さるべきである）は、同黨の暗中模索時代の産物たることにふさはしく、その內容が餘りにも抽象的なものであり、またその狙ひどころが餘りにも漠然たるものでもあつた。にも拘らず、人はその上に二つの主張の流れが、霧中に光る二條の銀蛇の如き仄かな線を引いてゐたのを見ることが出來た。しかもそれらが、互に相反する方向に走つてゐることまでを、微かながらも認めることが出來た。

一の流れは、黨が勞働者農民の政治的同盟として、ブルジョア諸政黨に鋭く對立して居たといふ意識である。それは『無産階級の政治的・經濟的・社會的解放』といふ辭句の上に端的に表明されてゐた。

他の流れは、黨が階級協調主義的、議會萬能主義的、もしくは日和見主義的、改良主義的、一言にしていへば社會民主主義的政治結社であるといふ意識——もしくはその傾向——である。それは短きあの綱領の上に散布されてゐる若干の辭句によつて漠然と、そしてその第三項全部によつて、より明確に示唆されて居り、更らに宣言全體の感じ及びその中の可なり多くの表現によつて、より具體的に表書されてゐる。（上掲舊勞農黨綱領參照）かくの如く、初期の舊勞農黨內には、既に相反する方向を指す二つの傾向が含まれてゐて、當時その內容がまだ充分に展開するに至つてゐなかつた『單一無産政黨』

の外殻の中に雜居してゐて、同化もしきれず、分離もしきれず、といつて何れかの一方が他方に對して指導的地位に立つといふのでもなく、例の門戸開放問題を中心として極めて陰欝なる妥協的相剋の連續の間に不活潑なる數個月を送つた。

だが遂に決裂の日が來た。かの舊勞農黨の歴史に取つて永久に記念されるべき出來事となつてゐる大正十五年十月二十四日の第四回中央執行委員會に於て、門戸開放反對派であつた日本勞働總同盟外三團體の代表者たちは、開會劈頭に於て脱黨を聲明しつつ、勝ち誇れるものの如く傲然として退場した。それらの門戸開放反對派の代表者たちは、黨内に於て壓倒的に多數を占めてゐたにも拘らず、積極的に進んで門戸開放賛成派——日本農民組合および製陶同盟の代表者たち——を黨外に放逐することが出來ずに、自ら脱黨の道を擇んだのは、一に黨外に於ける戰鬪的大衆の門戸開放促進運動が猛烈に且つ組織的に行はれたためであるが、それは根本に於て、當時すでに我國の無産階級運動の最尖端が、階級協調主義的、議會主義的、日和見主義的、改良主義的——等々の——屬性を露骨に表面に押し出してゐた社會民主主義者に對する正しき無産階級的認識に到達してゐて、且つそれに對して强力なる抗爭を展開し得る階段にまで到達してゐたことを反映してゐたものである。

にも拘らず、その危機的瞬間に於て、敗れたる社會民主主義的意識を代表してゐた總同盟一派が、勝ち誇れる凱旋將軍の如く意氣軒昂として退場したのは、何のためであつたか？　それは、彼等が内心ひそかに恃むところがあつたからだ、そしてその恃むところといふのは第一に、門戸開放派と、この派が支持する左翼四個團體に對する支配階級の彈壓の激化の豫想であつた。第二に、そのこととの反動的影響として考へられるところの、彼等社會民主主義者に對する官憲の庇護の増進の下に於ける彼等自身の不當の發展の期待であつた。彼等が分裂後に至つて益々高聲に舊勞農黨に向つて共産黨呼ばはりをして、恰もそれを官憲の手に引渡さうとしてゐるかの如くに見える態度を取ることをも憚らなかつた有様は、さながら二個年後の今日に於て、日勞黨や無産大衆黨の内外に巣喰ふた左翼社會民主主義者たちが、新黨準備會に『極左』の烙印を捺して掛つてゐることの手本を示したものかの觀がある。右翼および左翼をこめての一切の社會民主主義者らが、それぞれの主張の上に見える著大な表面上の差異にも拘らず、無産階級的立場から見て結局一つ穴の貉であることは、か

うした點に於ても、如何に餘すところなく說明されてゐるかを見よ！

四　社民黨および日勞黨の本質とその綱領

舊勞農黨を脫退した總同盟の主唱の下に、その後幾ばくもなくして、社會民衆黨が結成された（十二月五日）。無產階級戰線の上に於て意識的に舊勞農黨との鋭き對立を策して出現した同黨が、如何に圖々しくもその本來の社會民主主義的色彩をその綱領の上にまで發揮し、そのために、「創立當時の舊勞農黨の稍々漠然としてゐる綱領の上にも僅かに片鱗を光らしてゐた無產階級的表現をさへも全く塗りつぶしたかは、眞に我々の驚歎に値するものがある。即ち、その綱領にいふ。

一　我々は勤勞階級本位の政治經濟制度を建設することを以て、健全なる國民生活を樹立することと確信し、之が實現を期す。

二　我等は資本主義の生產並に分配方法は健全なる國民生活を害するものであると認め、合理的手段によりて之が改革を期す。

三　我等は特權階級を代表する既成政黨並に社會進化の過程を無視する急進主義の政黨を排す。

『勤勞階級本位の云々』の如きごまかし的文句が如何に階級鬪爭の純眞性に逆らうてゐるかは、特に指摘するまでもあるまい。また『社會進化の過程を無視する急進主義の政黨を排す』の如き階級的に惡意を含む辭句が、直接には如何に舊勞農黨を敵に資ることになつて居り、從つて支配階級との妥協的取引の底意を割つて見せることになつて居るかについても多く言ふ必要はなからう。更らにこの綱領の全體の感じが、如何に社會民主主義そのものを結晶し具體化した姿として人の眼に映ずるかは、徹頭徹尾自明の事柄だ。

形式上の綱領が、それに關聯して發表される政策宣言と照らし合せてこそ、その全幅の眞意が讀まれると、我々が先きに述べた言葉は、この場合でもそのまま適用される。即ち、社民黨のその時の宣言は、右の形式上の綱領への社會民主主義的註釋であつた。だが玆で一言注意しておくべきことは、形式上の政綱は、單にその表面上の辭句だけによつて批判され

てはならない。それは、より以上に、その中に示されてゐる諸要求を戰ひ取るための現實の行動・態度、およびその行動・態度を指導する『運動方針』——明示的のものと暗默的のものとを問はず——との關聯に於て批判されなければならないのだ。社民黨がその時綱領・宣言と共に發表した政策は、舊勞農黨のそれと比べて大同小異のものであり、その後と雖も、大衆的共同戰線黨を標榜する各無產黨は、いづれも皆大體に於て舊勞農黨の政策を踏襲して、ただ幾分かの枝葉末節にわたる變更を加へてゐるにすぎない。それは、それらの諸黨が大衆黨的共同戰線黨として、勞働者、農民、無產市民大衆を黨の構成要素として立ち、且つ絕えずそれらの大衆に呼びかけてゐる關係上、それらの大衆の日常の現實要求を否でも應でも各自の政策として掲げなければならないところから來てゐるのである。このことは、現在の我國の諸多無產諸黨が大體に於て同一の社會層に立脚してゐるものであることを示してゐる。從つて、この點からは、たしかに各黨間の同一性が主張され得る。だが、それにも拘らず、我々は、それら各黨の實際上の行動・態度の異同を無視して、簡單にすべてを同一範疇に押し込め論ずることは無論出來ない。

社民黨の結黨に踵を接して、後來久しく左右兩翼の間を千鳥足に彷徨すべく運命づけられた中間派的政黨としての日勞黨が突如として出現した。それは、さきに勞農黨を脫出した總同盟の一部左翼幹部と日本農民組合の一部右翼幹部との合流の間から湧き上つたものである。彼等二た組の幹部たちは、彼等が日勞黨結成の計畫を進めつゝあつた當時、一方は總同盟の幹部として表面上社民黨の結成に奔走してゐたものであり、一方は日本農民組合幹部であつたと同時に勞農黨の幹部でさへあつたのである！　彼等は無產階級陣營內に於て常に最も嚴重に要求されてゐる組合員もしくは黨員としての規律を全然無視して、まづ豫め隱密の間に會合して日勞黨の膳立てを作つてから後に、突如として、それぞれ總同盟および勞農黨から——無論日本農民組合からも——脫退したのである。かくて日勞黨は分裂主義實踐者の一團を幹部とする朋黨的公黨として產れたものだといへるのであるが、それが爾來約一個年半後に產れ出た無產大衆黨の出現の雛形となつたことは、我我には不可解な一場の滑稽である。殊に、さうした分裂主義の實踐者らが、何時も型で捺したやうに、その母體に向つて分裂主義の捨て臺詞を投げ附けることに筋が決つてゐるといふに至つては。

舊勞農黨が同一陣營内に現はれ出たその意識的對立物の刺戟によつて益々戰鬪的大衆黨としての面目を發揮しようと用意してゐた時に當つて、わざわざ中間派を標榜して起つた日勞黨幹部は、舊勞農黨の創立當時に起草された例の些か漠然たる綱領を、これ幸ひと着服して、しかもその内容的意味を、左翼社會民主主義調を朗々と鮮やかに奏で出した宣言によつてそれに吹き込んだ。『我々は潔く左右兩翼と切斷して、無産階級運動の正道を樹立する時期に到着したのだ』といふのが、醉はせるやうな甘美な修辭で賑やかに飾り立てられたその宣言のエッセンスであつた。

我々は上來、舊勞農黨分裂時代に於て同黨から脱け出して行つて別々に立黨した社民黨および日勞幹部の本質とその各自の黨綱領との關係を究明して、その間に緊密なる不可分的聯關の存してゐることを見た。そして、その間の關係が、單に形式上の綱領を見ただけでは充分に把握できない場合でも、その實質上の綱領を檢討するに及んでは、最早誤りなく跡づけられ得る、といふのが、それから必然的に引出される結論である。

尙ほまたそれに關聯して、我々は次の樣々の教訓を學んだ。第一に、今日我々は、益々反動化し行く支配階級との鬪爭をあくまで鬪ひ拔くために、一方、支配階級との協調ぶりを公然と振り翳して左翼の陣營に迫り來る右翼社會民主主義に對し、他方、口に左翼的言辭を弄して實は左翼陣營を攪亂し、戰鬪的分子に向つて『極左』呼ばはりをすることによつて支配階級に教唆し、その彈壓政策に肯定の基礎を與へるやうな役割を演じてゐる左翼社會民主主義者に對しても、徹底的に抗爭しなければならない地位に置かれてゐるが、我々は彼等が如何なる過程を辿つて發展して來たかを見た。第二に我々は、今日我國の無産階級によつて最も切實に要求されてゐる『階級戰線の統一』が事實上誰れによつて破壞されて來たものであるかを見た。我々はこの問題の解決のためにも、口に統一を稱へしかも實踐に於て統一を破壞する社會民主々義者等を徹底的に克服する必要のあることを痛感する。第三に我々は、舊勞農黨分裂以前の期間に於ける所謂『單一無産政黨への要求』と今日の『戰線統一への要求』との間に非常に顯著な質的變化——形式的統一から實質的統一への——の起つて來てゐることを明かに認めることが出來た。それは、何よりも殊に、その間に挾まつ來た二個年に近き期間に於て起つ

た外部的事情の變化——特に支配階級の攻勢の壓力の急速なる加重——と、各黨大衆間の連續不斷の共同闘爭經驗でのものを通じて戰ひ取られた大衆の闘爭欲求の熾烈化的傾向のためでなければならぬ。

五　黨の實質的綱領の內容的發展とその客觀的標識

黨の形式上の綱領は比較的固定的である。だが、黨の行動は、その主體である黨の本質と外界の情勢との間の作用反作用の關係によつては、屢々眼まぐらしき速度を以て進展する。そして同樣に屢々、一旦黨の本質によつて方向づけられた黨の行動の進展が、却て黨の本質を發展せしめ、しかもその發展の極限に於て、時としては黨の本質を變化せしめさへする。この事は必ずしも合法黨の非合法黨への發展といつたやうなことを意味するものとは限らない。黨は、もしそれが戰闘的黨である限り、合法的黨としての範圍內に於ても、屢々前述の發展過程を辿る。このことは、既に舊勞農黨の短い歷史によつて充分に證明されたことである。私は、いまさうした場合の問題を究明しようとしてゐるのである。

では、前述の場合に於て、黨の綱領と黨の本質との間の關係は、どういふことになるのか？

もとより、黨の形式上の綱領は比較的に固定的だといへるだけで、絕對的に固定的だといへないことは無論だ。黨は隨時に黨の憲法ともいふべき規約に從つて、その形式上の綱領をも變へ得る。だが事實上、多くの場合に於て、樣々の關係から、その『得る』が中々容易でない。少くとも、過去の經驗——舊勞農黨のそれを含めての——に於てさうであつた。この意味に於て、黨の形式上の綱領は比較的に固定的だといへるだけだ。

そこで、比較的に固定的な黨の綱領と、屢々敏活に發展する黨の本質との間の關係は何ういふことになるか？　といふやうな問題も起つて來る。そして、それに答へるためにこそ、實質上の綱領を持ち出す必要も再び擡頭するのだ。

今その問題への決定的答案を暫く後廻はしにして、まづかかる場合の具體的實例の一つを、分裂後の舊勞農黨の情況の中から捉へて來て、一應その間の經緯を考察してみよう。

分裂後から——否、分裂續行中から既に——舊勞農黨は、一方に於て强硬なる彈壓政策と陰險なる分裂政策とを提げて

益々加重し行く壓力を以てそれの上にのしかかつて來た大敵である支配階級に直面し、他方に於て同一陣營内に在て裏切り行動を逞しくする社會民主主義者の挑發的刺激を受けて、依然として自他共にかつて想像しなかつた程急速度を以て、その本質を發展せしめかけた。にも拘らず、形式上の綱領は依然として變更されずにゐた。それは確定的鬪爭目標をも揭げてゐなければ、鬪爭の主體の構成や鬪爭の對象やをも示唆さへしてゐないやうな、言はば目鼻のつかない茫漠たるものであつた。それは最早、その時までに不斷の進行を續けて來た黨の行動を原則的に規定してゐるものでもなく、さうした行動の進展につれて異常の高度にまで發展して來た黨の本質を表現してゐるものでもなくなつて來てゐた。

黨の形式上の綱領は、まさしくさうであつた。だが、黨の實質上の綱領は、決してさうではなかつた。

私は前に既に、形式上の綱領は、それと同時に發表される宣言、政策、等々と併せて綜觀した上で、その內容的意味を判定しなければならないものであることを言つた。そして、少くともそれらのすべての綜合體を實質上の綱領といふべきだとも言つた。それは或る特定の一時點の靜止狀態について見て言つたものだが、我々は更らにそれと同一の事を、或る時點から他の時點へかけての運動狀態についても見なければならぬ。

異つた二つの時點間に於ては、ノルマルな黨はその行動に於て進展し、その本質に於て發展する。でなければ、それらの點に於て逆轉し後退する。そして、より熾烈に鬪爭——無論正しき鬪爭目標を追うて——する黨ほど、その鬪爭を通じて、より敏速に進展し發展する。そして最初に黨の行動や本質を規定した綱領・宣言・政策——一定時點に於ける實質上の綱領——を疾ツくに驅け拔けて、遙かにその先きに廻つてゐるやうなことすら、決して稀れにでなく起り得ることであり、またたとへば舊勞農黨の場合に於て、實際起つたことである。

かういふ場合に、刻々に進展する黨の現實の行動が刻々に發展する黨の本質の最後の決定者だといふのは、確かに正しい答へだが、しかし答への全部ではない。といふのは、正しい意味に於ける無產黨——特に大衆的行動黨——の場合に於ては、黨の行動はその行動の基準から引き離して考へられないのは無論だ。だとすると、その刻々に進展する行動の基準は如何にして客觀的に識別し得られるか？の問題が殘されてゐるからだ。

刻々に進展する黨の行動の基準は、その刻々の黨の本質によつて規定されるといふのもまた正しい答へだが、しかしそれも餘りに抽象的であること以外に尙ほ、その客觀的標識の問題をあとに殘す。では、刻々に進展する黨の行動の基準の客觀的標識はないか？　曰く、ある。今、簡單に結論だけを言はう。

正しき意味の大衆的行動黨の行動の基準は、ただ黨の幹部間だけの間で內密に含んで置かれるといふやうなことはあり得ない。大衆的共同戰線黨の幹部は、よし決して大衆に追隨する尻ッ尾でなく、それを指導する頭である關係にあるにしても、決して大衆の組織の外部に居るのでなく、常に大衆の組織の內部に居て、大衆の現實の日常利益と自由との擁護伸張のために、大衆と共に考へ、大衆と共に感じ、大衆と共に……一言でいへば、大衆と共に鬪爭するのだ。さういふ風に大衆と手を握り合つて遂行される鬪爭の展開の過程に於て必然的に刻々に新たに得られる黨の行動の基準は、直ちに或る形式――聲明、指令、方針書、決議、申合はせ、スローガン、等々、それぞれの場合に最もよく適合した形式――に於て、同一組織內の、更らにそこから延いて、より廣汎なる一般の、大衆に發表され、その討議に附託される。それはその決定を將來の或る時點に待たれるものと、既に幹部の權限內に於て確定的もしくは暫定的に取り決められたものとを問はないのだ。正しき大衆的行動黨は、自黨內に於て幹部の獨裁を排斥すると同時に、他黨との關係に於ても、幹部と幹部との間の秘密取引を絕對に拒否する。

かくて我々は、黨の刻々に進展する行動の刻々の基準の客觀的標識を、黨がその行動の進展の各段階に於て對大衆的規模に於て各種各樣の形式に於てする發表の上に見る。刻々に發展する黨の本質は、その發展の當該段階に於ける黨の行動によつて指し示されるが、その行動の基準の客觀的標識は、究竟そこにあるのだ。この場合にも我々は、當初に黨の後來の行動および本質を規定したその當初の形式上乃至實質上の綱領から眼を離してはならないが、同時に後來の行動の進展および本質の發展が、絕えず當初の形式上乃至實質上の綱領を擴大し變更して行く關係を見失つてもならない。かくて黨の實質上の綱領の內的發展の途上にも、絕えず主客地位轉換の運動が反復される。

最後に、不斷の鬪爭を展開する黨にあつては、黨の行動の進展および本質の發展が、最早やその當初の形式上も實質上

もの綱領の保有を許さなくなり、それらが徹底的に更新されるときが來ることがある。『その時だ、『一の新らしき綱領は、しかし常に一の公に樹てられた旗であつて、外界はそれによつて黨を判定する』といふ言葉が、文字通りのままで潑剌とした生命を帶びて我々に迫つて來るのは！ そして我々新黨準備會の陣營を護るものは、今まさしく、さうした時機に直面してゐるのだ。

六　新勞農黨の綱領・政策・宣言

舊勞農黨は、その分裂時代から解散までの果敢なる不斷の鬪爭經驗の集積によつて異常の高度にまで發展した姿に於ては、その創立當時に後來の黨の行動および本質を規定した綱領——形式上のも實質上のも——では到底說明の附かない行動および本質にまで到達してゐた。そして同黨は大衆的行動黨として、最早形式上實質上その綱領を更新しないで居られないほどの段階にまで發展してゐたが、しかし樣々の事情に妨げられて、それがまだ實現される運びに至らなかつた間に、田中反動政府の…………ために瓦解せしめられた。

だが、それは直ちに新黨準備會となつて更生して、今日となつては、如何なる彈壓を以てしても絕滅することの出來ない、あくまで牢乎たる存立の社會的根據を持つた左翼戰線の根强さを、全大衆の前に餘すところなく證明して來た。

新黨準備會は、その成立以來、荒れ狂ふ暴壓の嵐に逆らひ立ち、傍ら社會民主主義者の陰謀を反撥しつつ、中央および地方に於て全力的に戰はれた果敢强力なる日常鬪爭を通じて、漸次に破壞されたる組織と活動力とを再結束しつつ、猛然として、新勞農黨結黨準備のための鬪爭と『鬪爭のための戰線統一』とに向つて全努力で進んで來たが、今や準備會內外の情勢が結黨準備運動の成熟を認識せしめるやうになつたので、最近結黨準備計畫を具體的に確定し、先づそれを大衆討議に附し、更らにそれを十月二十四、五日の兩日に亘つて開かれた全國代表者會議に提出して議了した。

該會議に提出された重要諸案件の中に於て、殊に新黨の綱領、政策の草案および宣言骨子、等々の、いはゆる實質上の綱領が、それと深き聯關に立つ組織方針、運動方針、等々と相並んで、特に光彩を放つたのが見られた。

今それら重要諸案件のすべての内容本質を詳說し闡明することは、限られたる紙數が許さないことであるから、餘儀なく省くことにするが、しかし如何に簡單にでも、新黨の綱領、政策の草案および宣言骨子だけについては、その基調だけをでも茲に概說しておかなければならぬ。

まづ綱領草案は次の如く讀まれるものであつた。

（一）わが黨は合法的手段により勞働者農民無産市民その他全被壓民衆の利益の擁護と伸張のために鬪ふ。

（二）わが黨は全被壓民衆の政治的自由獲得のために鬪ふ。

（三）わが黨は無産階級戰線の統一を期す

この綱領草案が舊勞農黨の綱領に比して、本質的に形式内容を異にする理由、——それにも拘はらず兩者の間に、終始一貫する一脈の緊密なる内的聯關が跡づけられ得る理由は、既に述べたところによつて明かであらう。一言にしてつくせば、それは舊勞農黨およびその戰鬪的傳統を繼承し發展せしめて來た新黨準備會の不斷の鬪爭の集積を質的に壓縮し澄明に結晶せしめたものである。

この綱領草案の基調としては、大體次のことが言ひ得られる。

（イ）それはまづ、新黨が階級的大衆的政黨であることを明かにしてゐる。舊黨の綱領は大衆的階級的政黨の本質に對する暗中模索時代に起草決定されたために、この點に關して甚だ曖昧を極め、特にその中には、大衆的階級的政黨によつて到達し得られる限界を遙に超えた目標が掲げられてあつたが、それは新黨綱領草案には省かれてゐる。從つて、——

（ロ）新黨綱領草案は、新黨が大衆的階級的政黨として因つて以て立つところの社會的勢力、および新黨の鬪爭の目標・任務を明確に規定し、新黨が勞働者農民無産市民その他全被壓迫民衆の政治的經濟的日常利益の擁護並に伸長のために、更らに政治的自由獲得のために、大衆的階級的勞農政黨として鬪爭することを規定してゐる。大衆の日常利益の擁護伸長の鬪爭が必然的に政治的自由獲得鬪爭に緊密に聯結せしめられて進められなければならないものだといふことは、舊勞農黨時代以來の不斷の鬪爭經驗の集積によつて深められた最も肝要な認識である。さらに——

（八）新黨綱領草案は、新黨が勞働者農民の無産階級的政治戰線の統一に對する熾烈なる要求に鑑み、その實現を期して、階級的に勇敢に鬪爭すべきことを規定してゐる。この一點からいへば、新黨は一の過渡的性質を帶びるものであり、また新黨の前驅として活働して來た新黨準備會は、その結黨準備の過程に於て、絕えずこの方針の下に政治的戰線統一のために努力して來たのである。資本家、地主に對する鬪爭のための戰線統一は、新黨が階級的大衆的勞農政黨として强大化することなくしては達成され得ないことは無論である。

政策草案は大體舊黨の政策を踏襲し、ただその上に、新たに最近に於ける鬪爭展開の過程に於てその重要性が緊切に認められるに至つた若干の諸要求を追加したに止まつたものである。次に宣言の骨子は、新黨準備會が發脈以來當面した狀勢下に於て遂行して來た新黨の合法性獲得の過程、鬪爭によつて築き上げられた新黨の成立、その立黨の態度、その當面の任務並に中心的鬪爭――政治的自由獲得――の意義、鬪爭のための戰線統一に關する諸項目、等々の外に、更らに新黨の行動・態度の基準――特に新黨が大衆的階級的政黨として立ち、その幹部も大衆も一體になつて勞農大衆の利益伸張のために戰ふものであるが故に、勞働者農民を裏切る社會民主主義者の非階級的行動に反對して勞農大衆の鬪爭を階級的に助長し發展せしめる趣旨をも含めての――等々を新黨の宣言に於て全大衆の前に輝やかしく闡明しその無限に多望なる前途の勝利的行進の道を指し示すべきことを規定してゐる。

綱領草案の趣旨は全國代表者會議に於て滿場一致で可決され、ただその中の文句の取捨に就いての考慮および決定を常任幹事會に一任、政策草案は多少の修正を以て同じく滿場一致で可決され、宣言骨子は無條件で矢張り滿場一致で可決された。

かくて、新黨の旗は近く公に樹てられようとしてゐる。我々はそれが、勞働・農民・無產市民その他全被壓迫民衆の心からの熱烈なる歡呼の渦卷の中に迎へられるであらうことを確信する。

大衆無知時代

室伏高信

一

世界に何ごとが起つたか。私は起つたかといふ。これからの未來ではない。ユトピアなぞはわれ〳〵には何の用もない。五十年後の世界だとか、百年後の世界だとかいふこと位ひ無意味なものもないし、またそんなことが考へられる筈もない。私のこゝに問題としてゐることは世界に現實に何ごとが起つてゐるかといふことである。

世界に何ごとが起つたか。私は世界はこの數世紀來甞つて經驗したことのない重大な變化を遂げたといふことについて先づ世人の注意を喚起することを望む。この言葉は甚だ誇大なやうではあるが、この誇大のやうに見える言葉をもつてしても尙ほ不充分であると思はれるほどの重大な變化が世界の秩序、原則、實踐のうへに既になしとげられたことをわれ〳〵は最早や承認しないではゐられないのである。

諸君は先づ歐羅巴文明が終りを告げたといふことを注意すべきである。昨日までは世界の新しい秩序と精神であると思はれてきた歐羅巴文明がいつの間にか世界から消滅したといふことを諸君は先づ注意すべきである。といつたら、諸君はこれを甚だ突飛な說でもあるかのやうに思ふかも知れない。けれども諸君に尋ねるであらう、歐羅巴文明は今日は何處にあるかと。

もちろん今日も尙ほわれ〳〵の學者の諸君は歐羅巴をメシアだと考へてゐる。學者も政治家も實業家でさへも一度は必ず歐羅巴への巡禮をしたものでなくては新しい文明は理解されないかのやうに考へてゐるものゝ、今日も尙ほ跡を絕たないことは事實である。けれども今日伯林や巴里や倫敦やを尋ねること

が、バビロンや、埃及や、羅馬や、希臘や、支那や、印度やを訪ふことと果してどれだけの相違があらうか。彼等は明治時代の洋行者のやうに、果して新しい知識、新しい思想、新しい文明を携へて歸つてくるか。歐羅巴からの洋行歸りは今日は新知識であるどころか、三年も五年も歐羅巴に滯在したものの例外なしに經驗することは、必ず何ほどか時勢に後れたといふことである。若しも文明といふことが單に歐羅巴文明といふことの意味だとしたなら、それはもう沒落するとかしないとかの問題でない。それは十年も前に沒落してしまつたのだ。

歐羅巴は言葉のあらゆる意味において「舊大陸」となつてしまつた。伊太利のニッチはこれを歐羅巴は亞米利加への債務大陸となつたといふ言葉でいひあらはしてゐる。ニッチのいふたことは無論經濟上の意味にしか過ぎないが、私の見るところでは、歐羅巴は今日は言葉のあらゆる意味において亞米利加への債務大陸である。

二

このことは無論世界の中心が亞米利加へ移動したことを示してゐる。歐羅巴の覇權に對して亞米利加の覇權が、歐羅巴文明に對して亞米利加文明が取て代つたといふことを示してゐる。この點では誰れにも異論はないであらう。否、それだけでは何の他奇もないほどに既に業に一般的に知れ亘つたことである。ところがこの平凡な事實が尙ほ眞實には決して一般的に承認されてゐないといふ二つの證據がある。その一つは亞米利加の世界征服をもつて單に弗の支配に過ぎないと見ることであり、他の一つは亞米利加文明といふも單に歐羅巴文明の一發展に過ぎないと見てゐることとである。

亞米利加の弗が世界を支配してゐることはもとよりである。亞米利加は今日は世界の黃金の約半ばを保有してゐるばかりでない。即ち五十億弗に近い黃金をもつてゐるだけではなくして、世界の各國に對して百億弗以上の債權をもつてゐる。しかもこれは甞つて佛蘭西が金貸し國といはれたと同じ意味ではない。亞米利加は世界の債權國であるとともに、對外投資のうへからいつても、また國內產業のうへからいつても、世界の覇者である。されば亞米利加の弗が世界を支配するといふことに何の誇張もないが、けれども弗の支配は單に弗の支配だけに止まつてゐるか。亞米利加が今日の世界にもつてゐる意味は單に弗の所有者といふだけの意味であるか。

黃金から權力の生れることは既にいひ古るされた言葉である。黃金と權力との一致こそ資本主義の理想でもあり、實踐で

もある。しかもこの權力からイデオロギイの生れることも一般に承認された理論であるといつてい丶。弗、權力、イデオロギイ。この三つは不可分な關係において存在するといふとも、今日では何の他奇もない理論である。然らば何ゆえにこの弗の所有者、從つてまた權力の所有者としての亞米利加が世界のイデオロギイの製造者であるといふことができないか。

亞米利加の經濟的世界征服を知つてゐる人々が今日も尙ほ亞米利加には弗よりほかには何ものもないと考へてゐる。歐羅巴は依然として學問の世界であり、藝術の都であり、あらゆる文明と文化とは歐羅巴人の頭腦から生れてゐると人々は今日も尙ほ考へてゐる。何んといふ時勢れなことか！

試にわれ〱の周圍を見渡して見るがい丶。歐羅巴的な如何なる生活が存在するか。即ち亞米利加的でない生活がわれ〱のどこに存在してゐるか。あの丸ビルはどうだ。あのスポォツはどうだ。ジヤアナリズムはどうだ。自動車はどうだ。ジヤズはどうだ。キネマはどうだ。ラヂオはどうだ。通俗文學はどうだ。女權思想はどうだ。無宗教はどうだ。哲學の沒落はどうだ。この滔々たる黃金狂はどうだ。

亞米利加の弗が世界を支配してゐるに過ぎないと考へてゐることは既に世界の現實から甚だ遠い。亞米利加的イデオロギイが世界を支配してゐる。單に物質的關係において亞米利加が世界を支配してゐるといはれたのは既に昨日のことである。あらゆる文明といはれるものにおいて、若しくは文化といはれてゐるものにおいて、亞米利加的なものが今日の世界を支配する。われ〱の生活は今日は歐羅巴的な如何なるものでもなくして、亞米利加的、そしてたゞ亞米利加的である。亞米利加的なもののみが現實的である。より多く亞米利加的であるものはより多く現實的である。歐羅巴人が亞米利加人を輕蔑し、そしてまたわれ〱日本人までがこれに倣つて亞米利加を輕蔑する時代はとうに過ぎた。われ〱は實際に亞米利加的生活を營みながら、口先きで亞米利加を輕蔑するの二重人格は捨てべきである。そして素直にわれ〱が亞米利加的生活を營むでゐることを承認すべきである。われ〱は既に物質的にも精神的にも亞米利加の奴隷となりきつてゐるではないか。

三

亞米利加文明が歐羅巴文明の一發展であるに過ぎないと考へられてゐることは傷ましい無知である。この無知である、今日の時代理解をして全然誤謬に導いてゐるのは。如何にも歐羅巴文明の遺産がなくては今日の亞米利加文明を想像することはで

きないに相違ない。就中十九世紀の科學と機械とを受けつぐことなくしては今日の如何なる文明をも考へることはできない。されば今日の亞米利加文明は歐羅巴的科學と機械との果實であるといつてもよい。けれども驢馬と牝馬との間に生れたものが驢馬でもなく、牝馬でもないやうに、歐羅巴の遺産から生れた亞米利加文明は必ずしも歐羅巴文明の繼續ではない。そこには既に量から質への變化がある。これをしも發展といふのならばド・フリイス的發展といふのほかはない。

試に藝術のうへから觀察して見ようか、例へば文學について見ると、近代文明においての文學とは小說のことにほかならなかつた。ブルジョア時代の文學は小說によつて代表されてゐる。文學はこゝに表現から說明へと移つた。從つて藝術から非藝術へと移つたのである、けれどもそれには藝術的な努力もあり、臭ひもあり、見せかけもあり、要するにブルジョア的知識階級に訴えたものであるが、今日の世界にこの種の所謂藝術的小說が果してどれだけの讀者をもつてゐるか。歐米のあの夥しい職業婦人たちが手にしてゐる小說の種類について見るがいゝ。ドストエッスキーや、ストリンドベリイや、等々は今日は全く世界の田舍者である。今日は三上於菟吉の時代だといつてもいゝであらう。低級だといふこと勿れ。低級なものこそ現實であり、現實のみが常に勝利者である。比較的小六かしいものを好むで讀む日本人の間においてさへ、この大衆文學なるものの徹底的の勝利、そして所謂藝術的小說なるものの不可歸的の敗退振りを見よ。大衆ものによつて立つ所謂大衆雜誌なるものが百萬の讀者をもつてゐることの生きた事實を見るがよい。藝術的な小說の時代が終つて、然り十九世紀的文學の時代が終つて、新しい大衆的、亞米利加的文學の時代がきたのである。またあの表現の芝居に對する今日のキネマはどうか。それは近代的演劇の一發展であるのかそれとも沒落であるのか。芝居は歐羅巴である、キネマは亞米利加である。莊麗な、新しい、潑溂たるキネマの傍らにすゝけて立つてゐる劇場は歐羅巴的近代的劇藝術の發展を語つてゐるか沒落を示してゐるか。またあのジオニソス的な狂熱のジャヅの流行はどうだ。バッハ、モツアルトからベエトオベエ。ン、ワグナア、シトラウスに至るまでの歐羅巴的音樂の傳統は今日は何處にあるか。あのクリスチャン・サイエンスはどうだそこに如何なる神學的基督教の傳統が存在してゐるのか。またあの自由主義の完全なる沒落はどうだ。自由主義の名において起つた近代文明が政治的にも經濟的にも獨裁政治に終りつゝあるこの世界の新しい事實はどうか。自由貿易の祖國としての英國でさへ十億の關稅收入をもつてゐるといふ今日の事實は何を

われ〳〵に語つてゐるか。あの民主主義への打ちつゞく輕蔑と不信と反逆とは歐羅巴的近代文明の勝利であるか慘敗であるか。そしてまた歐羅巴的精神の最高代表者としての哲學の傷ましい沒落はどうだ。人々は今日も尙ほカントを、ヘエゲルを、フッサルを口にする。けれどもあの名高いカントやフヒヒテの自我が、スピノオザの實體が、一度は世界を席捲したヘエゲルの絕對精神が、若しくはあの村夫子然たるリツカアトの第三帝國なるものが、今日われ〳〵の生活に何の意味があり、關係があり、價値があるのか。嘗つては哲學は時代の知的表現だといはれた。時代の知的表現としての哲學が今日は何處にあるか。哲學は今日は如何なる時代の知的表現であるのか。哲學は今日は如何なる現實的理解でもなくして、贅澤な遊戲である。現實から離れたものの運命が沒落のほかないやうに、哲學の受取つた運命もまた何等の例外でもなかつたのである。歐羅巴的文明の知的表現としての哲學は既に終つたのである。そして新しい知的表現——ジヤアナリズムの時代が正に酣であるのを見よ。これが歐羅巴的近代的精神に對する新しい亞米利加的精神の勝利でなくて何んであらうぞ。實にイブセンや、ユウゴウや、ゾラや、ドストエフスキイや、ベエトオベンや、カントや、フヒヒテや、コブデン、ブライトやの時代が過ぎて、三上於菟吉や、ホワイトマンや、チヤアリイや、タニイや、ランラン、ラコストや、ソオネドや、ムツソリニや、デエリイ・メエルや、そしてメリイ・ベエカア・エツデイ等の時代がきたのである。

四

總じて歐羅巴文明を擔當したものは紳士と知識階級とである。中世から近代文明への移動は、法王と田舍貴族とから、都會の紳士と知識階級とへの推移を示してゐる。彼等は王制と教權政治と詩と神學と田舍とに對して、議會と科學と哲學と知的藝術と都會とをもつて置き換へたのである。これが世界の民衆化を示してゐたことはもちろんである。人々が民主主義の勝利を口にしたことは決して無意味なことばかりではなかつたのである。けれどもその民衆とは何か。シイエが人民とは第三階級であるといふたのは有名な話である。人民とはまことに第三階級であり、第三階級を代表したものは紳士と知識階級である。實に近代文明の悉くはこの基礎のうへに立つてゐた。政治や、經濟や、科學や、哲學や、藝術やがこれ等の人々によつて擔當されたばかりではない。政治も、經濟も、哲學も、科學も、藝術も、宗教でさへも、これ等の人々を相手として行はれたのである。さればこの文明の特色はたゞなる都會精神、ブルジョア精神、金錢

的世界觀といふただけでは不充分である。英國的紳士的生活と知識階級的知的精神とが金錢的世界觀と手を携へて發達してきたことを忘れてはならない。その道徳は紳階的ではあるが尙ほ平和的であり、その生活は個人的ではあるが自由であり、その政治は僞善的ではあるが尙ほ陛下の反對黨といふ言葉の示してゐるがごとくに紳士的であり、その紳士は常に自己の階級に對する矜持と希望とを持つてゐた。モリエイルの「ブルジョア紳士」が最もよく代表してゐるやうに、この紳士は一個の商人ではあるが、音樂や、舞踊や、擊劍の教師とともに哲學の教師をも雇ひ、そして彼の娘に對する求婚の青年が東洋風の衣裳を纏つて自ら土耳古皇帝の息子であるといふまでは結婚を承諾しないといふ、「距離のペエトス」を感じてゐたのである。このモリエイルのジュウルダンが哲學を學ばなければならなかつたやうに、哲學は正しく時代の知的表現であつたばかりではない。哲學の特質は知的哲學であることであり、傳達すべからざる直觀的哲學の代りに、傳達的進步的知的哲學であり、その哲學の一步一步は知性の進步の一步々々を示したのである。それはたゞに都會の商人的ジュウルダン的精神を代表しただけではなくして、紳士と知識階級――この距離のペエトスに訴え、またこの距離のペエトスにだけ訴えたのである。カントにしても、フヒヒテにしても、シエリングにしても、スピノオザにしても、ヘエゲルにしても、哲學は紳士と知識階級によつて、のために、のものとして存在した。實に近代哲學は徹頭徹尾紳士と知識階級との産物であるといふべきである。藝術にしてもこの特質は甚だ顯著である。小説が知識階級の藝術であることはこれを述べた。文藝復興期から最近のセザンヌ的色彩の科學、ピカソの幾何學、バラの「貴婦人と犬」のダイナミズムに至るまでの繪畫もまたもとよりである。音樂のごとくに陶醉の藝術といはれるものと雖もまた何等の例外でもない。實にカントの無上命法も、パルテノンの曲線も、ミケロ・アンジエロのコントラポストオも、ロダンの無限に複雜した曲律も、若しくはベエトオベンの交響樂における精神も、「合理主義と、テクニックと、知識の官僚政治の複雜した組織として、それは訓練された紳士と知識階級の組織と、理性と感情の産物として、またこれ等の訓練された紳士と知識階級の「距離のペエトス」において鑑賞されたのである。

こゝに歐羅巴文明の二つの特質が存在する。その一つは既に注意してきたやうに、この文明が純粹に紳士と知識階級の文明であつたといふことである。言葉を換へていへば、この文明は大衆とは無關係であり、大衆はたゞにこの文明の擔當者でなかつたのみではなくして、またこの文明を理解し、鑑賞し、享樂

することさへも許るされなかつたのである。實に社會主義のやうな大衆のための理論でさへも、マルクスの經濟學のスコラ主義が示してゐるやうに、それは純粹に知識階級の産物であつて、世界の大衆は到底これに接近することを許るされないのである。けれどもわれ／＼はまたこゝに第二の重大な特色が存在することをも忘れてはならない。この文明が常に傳達性的性質のうへにその基礎を置いてゐたといふことである。

總じて合理主義は傳達性的であり、非合理主義は傳達性的である。例へば直觀や體驗は說明することのできないものであり、また從つて甲から乙へ、乙から丙へとそのまゝに傳達することはできない。從つてまた甲の體驗のうへに乙の體驗を積み、乙の直觀のうへに丙の直觀を加へて、順次に梯子段を上へ上へと昇つてゆくことはできない。一回限り、たゞ一回限り。これが體驗や直觀や表現やまた從つて肉聲音樂や詩のやうな純粹藝術の本質である。從つてまたわれ／＼はこゝには發生と消滅と永久回歸とは存在するが、進歩も進化も發展も存在しえられるものでないことを注意すべきである。總じて非傳達性の世界においては進歩も進化も發展も存在しないのである。ところが言葉やロゴスの場合になると、甲から乙へ、乙から丙へと傳達のできるものであつて、その傳達の間においてマッハの所謂思惟の經濟が成り立つ。古き概念のうへに新しい概念を積み、一つの公理のうへに他の理論を築き、甲の發明のうへに乙の發明を基礎づけてゆくことが可能である。科學の成功は實にかくのごとき傳達性、かくのごとき思惟の經濟の賜であつて、今日の驚くべき機械の發展、學說の進歩はもちろんのこと、歐羅巴的文明のあらゆる進歩と進化と發展の秘訣はこの點に存在したといふべきである。もちろんそこには多くの天才が出現したことは事實である。例へばガリレオや、コペルニクスや、ベエコンや、ニユウトンや、ダアヰンや、ラマルクや、カントや、ヘエゲルや、ベエトオベンや、ワグナアや、ダギンチや、ゴツホや、セザンヌや、ゾラや、イプセンや、數ふるに遑のないほどの諸天才が出現したことはもちろんであるが、これ等の諸天才の特質は、例へば科學においてニユウトン、ジユウル、カルノオ、フアラデエ、マツクスエル、アインスタインと、一々數へるまでもなく、一人の天才はその後の天才の利用するところとなり、凡ての前代の諸天才の成就したところのものは、後のあらゆる諸天才の出發點となつたといふやうに、後代の諸天才は常に前代の諸天才の基礎のうへに立ち、そしてそのうへに一歩を踏み進めたのである。ニユウトンに比べてアインスタインが一層に完全に近いものとされるのは、後者が前者よりも後者

であるといふことの簡單な理由、即ち二百三十七年間後から生れたといふことの單純な理由によつて說明されるのである。この點はわれ〳〵の印度哲學や支那思想に比べるとまことによい對照である。例へばこゝに老子があつて莊子があり、等々がある。また孔子があつて孟子があり、等々が存在したのであるが、老子から莊子へ、孔子から孟子へと、その代を進めるに從つて、學問や思想に一步を進めるどころか、却つて退步の跡を殘した。亞細亞がその過去において歐羅巴に見ることのできないほどの諸天才を出現せしめたにもかゝはらず、その思想も學問も藝術も數千年來たゞ退步の一路か、少くとも停止の狀態をつゞけてきたのに對して、歐羅巴的哲學や藝術や總じて歐羅巴的近代文明が、宛かも梯子段を昇るがごとくに子々孫々に傳へて進步し、進化し、發展してきたのは抑も何ゆゑであらうか。前者が體驗や、直觀や、表現や、總じて慧智の非傳達性的世界に屬してゐたのに對して、後者が概念や、理性や、思惟や、系統や、組織や、總じて理智の傳達性的世界に屬してゐたことを示してゐるにほかならないのである。

五

歐羅巴文明の原理はこゝに進步の一語において要約することができる。それは進步すべき文明、進步せざるべからざる文明、そしてまた實に進步した文明である。進め！ベエコンや、デカルトや、スペンサアや、マルクスや、あらゆる時代のあらゆる諸天才が進めと號令してきたやうに、この文明は常に進步してもきたが、また常に自己を進步するもの、進步すべきものとして規定してきたのである。われ〳〵はこれによつて不斷に燦然たる進步の光景を見せられてきたばかりではなく、常に進步の祭壇のうへにわれ〳〵自身を捧げてきた。親は子のために、子は孫のために――その瞬間を樂しむといふたストアの精神に對して、常に未來のうへに限りなき希望と理想と條件とを置いてきた。われ〳〵の亞細亞が祖先を崇拜するといふたのに對して、歐羅巴文明は子孫崇拜の基礎のうへに立つてゐたのである。かくのごとき社會においてダアキンの進化論が狂熱的な歡迎をうけたといふことはもとよりそのところである。歐羅巴文明においての進步の理想はこれによつてその科學的基礎を獲得したからである。人々は常に明日の光景を夢みた。時代の指導者は常に明日の光景を指し示した。それによつて政治上のあらゆる罪惡も、經濟上のあらゆる窮乏も、發明家のあらゆる苦心も、道德上のあらゆる不德も、墮落も、不自由も、悉く忍耐しなければならないし、また忍ぶに價ひするものだとされてきた。人類も

社會も文明も永久發展の過程であるといふことが一般的に承認され、そしてまたこれに向つて疑を抱くやうなものは殆んど存在しなかつたのである。かくのごとくにして歐羅巴文明は存在し、また成功した。そしてまたかくのごとくにして十九世紀が過ぎた。今日においてさへ、世界に、人類も、社會も、文明も、永久的發展の過程であるといふの考が尚ほ依然としてその支配的勢力を維持してゐることはもちろんである。

何んといふ人間の馬鹿らしい樂天主義の長い過程であつたことか！永久的發展とはそも〳〵何ごとであらう！永久的發展とはそのこと自體既に一つの立派な自己矛盾ではないのか。進歩の眩惑のために人々は永久の世界においては發展もなく、進化もなく進歩もありえないといふことの簡單なる理論をさへも氣付くことができなかつたのである。何んといふ自己陶醉の長いことであつたのか！理性の文明、意識の科學の世界において、人々は遂に理性を失ひ、意識の悉くを失つてしまつたのだ。

しかも私のいはんとすることはかくのごとき理論的な理論ではない。現實には何ごとが起つてゐるか。世界は依然として發展し、進歩し、進化してゐるか。遠い未來を語らずと私はいふた。この世界には現實に何ごとが起つてゐるか。

六

ヘエゲルが嘗つて人間の自己疎外といふたことは甚だ意味深いことである。人間の歴史は自己發展の歴史であるとともに、また實に自己疎外の歴史でもある。われ〳〵は常にこの二面性において歴史を見るべきである。如何なる悲觀主義もわれわれを滿足せしめることができないやうに、如何なる樂觀主義もまたわれ〳〵を滿足せしめるには足りないのである。人間の自己發達といふことも一つの現實であるが、人間の自己疎外といふこともまた一つの現實であるからである。

蠶が繭を造り、そしてまたこの繭を破壞して出るやうに、人間は絶えず何ものかを造つてはゐるが、また絶えずこれを破壞してゐる。國家を造るのも人間であるが、これを滅ぼすものも人間である。文明を建設するものも人間であるが、これを破壞するものも人間である。かくのごとくにして埃及も、バビロンも、希臘も、羅馬も、或は興り、或は滅びて、人類興亡の跡が絶えずわれ〳〵の歴史において繰り返されたのはもちろんのこと、この間にあつて男女關係からいふならば亂婚があり、母權があり、一夫多妻があり、一夫一婦があり、哲學や藝術のうへからいふならば、理想主義が起るかと思へば現實主義が起

し、唯物主義、自然主義、印象主義、浪漫主義、表現主義、構成主義、未來派等々、これ等のものが必ず一時代に呼びかけてゐるとともに、また後から後からと打ちこわされてゆく。嘗つては資本主義的革命のために血を湧かしたことのある人間が、またやがてこれを憎み、これを輕蔑し、これを非難して社會主義の旗幟を樹てる。人間の生活自體も、またその生活の反映としての觀念の世界もかくして常に遊戯のくりかへしのやうに見えてゐる。けれどもこれはたゞなる人間の遊戯であるのか、それともそこには人間の我儘な遊戯以上の何等か必然の法則が働いてゐるのか。

人々はしば〳〵これを發展であるといはんとする。今日の世界においてはこの發展の理論が尙ほ決定的である。人間の樂天主義は、中佐から大佐となり、大佐から待命のために少將となつた場合でも尙ほ出世であるといはんとするし、現役大臣を退いて樞密顧問となつた時でさへも尙ほ發展だといはんとする。けれども蠶が繭を造つたことが發展であり、蛾が繭を破つて出ることも發展（人間は何ゆえにこの發展を阻止するか！）であり、蛾が卵となり、卵が蠶となることも發展であるといふのなら、世界に發展でないところの何ものが存在するか。一粒の種子地に落ちて草となり、草より花開き、實を結び、そしてまた地に落つる。その各々の行程を發展だと呼ぶのなら世界に發展でない如何なるものが存在するか。ニグロ婦人の腹からナポレオン部下の一將軍が生れ、その將軍の子にアレキサンドル・デュウマが生れ、父デュウマと一白耳義婦人の野合によつて小デュウマが生れた時に、われ〳〵はこゝに發展を語るは尙ほ甚だ可なりである。けれどもその小デュウマの子は今何處にあるか。ニコライとマリアの子としてトルストイの生れたことは一發展であるといへよう。けれども、トルストイが不肖の子をもうけた時に、それは進步であるか退化であるか。山縣有朋の後が伊三郎であり、伊藤博文の後が博邦であり、大隈重信の後が信常である時に、それは進化であるか退化であるか。われ〳〵は永久發展論のあらゆるナンセンスを語ることをやめよう。歴史は永久の發展でもなければ永久の沒落でもない。私は既に歴史の二面性を口にした。歴史は發展と沒落との交響樂である。ある時は發展であるが、ある時は沒落である。私はこゝに人間の自己疎外と自己解放とを見ることができると思ふ。自己解放が自己疎外となり、自己疎外がまた自己解放となる。發展と沒落との交響樂はかくのごとくにして永久的に繰りかへされてきたのである。

例へば人間は自給自足から物々交換、賣買へと發展し、金錢の世界となり、商人の世界となつたが、最初の自給自足から物

物交換への進出においては、それは人間にとつての自由の擴大であり、發展から發展へである。けれどもその賣買の制度が發展するとともに、即ち金錢の世界、都會の世界となるに至つてこの自由交換の性質は一轉して人間の桎梏にと轉化する。また例へば中世紀において職業軍人が農民の番犬として俸酬をうけてゐた時代においては、これ等の軍人は社會的に必要でもあれば、自由の擁護者でもある。けれどもこの軍人が次第にその富と權力とを集中して大名となり、王となるやうになると、それは一轉して共同社會の桎梏にと轉化する。近代資本主義と雖もそれがその機械生產によつて增加する人口を吸收するとともに、大衆的生產の序幕を切つておとした時には、それはたしかに人間の自己解放、自由、社會の若返りであつたに相違ない。けれどもこの資本主義もまたその進化の過程において遂に人間の桎梏にと轉化したことは人々の既に等しく注意してゐるところである。即ち人間の自己解放が一轉して自己を疎外の過程にと轉化したのである。けれどもまたこの自己疎外が極度に達した時である、人間の新しい自己解放、その出發點への還元、社會の新しい若返りがはじまつてくるのは。

七

資本主義が既に人間の桎梏に轉化したと考へるだけではまだ〱である。即ちマルクスの所謂資本家的生產方法が人間の桎梏にと轉化したと考へるだけではまだ〱である。資本主義文明そのものが既に人間の桎梏、然り人間の自己疎外の百パアセントに到達したではなかつたか。

資本主義的生產方法とマルクスのいふてゐるものについてはこゝには問はない。近代文明とわれ〱の呼びなすところの、この前古類ひのない、人類の理知の限りをつくした、この近代文明の全構造が、その根本において既に一つの自己疎外にと到達したのではなかつたか。

私はこゝに科學について語る。科學とともに、そして科學によつて近代文明の生れたものであることについては何人にも異論はない。近代文明と科學とはシノニムであるといつてもよい位いである。實に科學の發達の一歩々々こそは近代文明發展の一歩々々である。科學なくして近代文明を想像することができないやうに、科學の新しい發展なくしてはまた近代文明の新しい發展を望むことはできないのである。その科學は今日は如何に發展しつゝあるか?

科學の歷史はもとより科學の漸次的發達の跡を語つてゐる。例へばコペニクスが所謂コペニクス的轉回を以つてから、ガリ

レオが一歩を進めて力學の基礎を考へ、デカルトは幾何學の問題に一生面を開き、パスカルは數學上における蓋然の理法を發見し、ケプラアは惑星が楕圓形の軌道によつて運行すること等々を發見し、そしてこゝにニユウトンの天才が出現した。ニユウトンが林檎の落下するを見てから遂に萬有引力の法則を發見したことは汎く人の知るところ、また彼とライプニツツの努力によつて微分、積分が生れ、ラプラスは星雲說を說き、プラツクは熱量の測定法を、ダルトンは新しい原子說を、ジユウルはエネルギイ不滅の法則を、フアラデイは感應電流を、マツクスエルは電力の電波と光の傳派とに關する法則を發見し、かくの如くにして近代科學はアインスタインの物理的世界理解の頂點にと到達した。けれどもこの科學の進化の一歩々々について見るがよい。それはもちろん進化でもあり、進歩でもあり、發展でもあるが、その進歩の一歩々々において新しい法則が、新しい發見が、新しい學問の數々が加へられて、一歩は一歩より知識の組織は精密にもなつたが巾廣にもなり、そしてこゝに現代の尨然たる知識の一大教權的且つ官僚的組織が成りたつたのである。この教權的官僚的知識の尨然たる大組織が何ごとを成就しえたかはしばらく問はない。けれどもこの尨然たる組織がわれ／＼人間のうへに賦課したところの課題は抑も何んであるか。この尨然たる知識の官僚的教權的大組織の壓迫は抑もわれ／＼の時代に如何なる義務を負はせてゐるか。博學のアリストテレスよりも百倍も千倍もの知識を常備軍としてもたなければならないところの現代の學者は、一面からいへば甚だ羨やむべき寶の山に入りこむだやうでもあるが、けれども人間は常にかくのごとき意味に堪ええられるのであるか。更にこれ以上の重味に堪ええられるのであるか。この重味はわれ／＼の創造性を刺激するのであるか麻痺せしめるのであるか。現代の學生のあの試驗地獄といはれるものは抑もわれ／＼に何を語つてゐるのであるか。あの力の抜けた、專門的知識の若干をもつてはゐるが、專門以外には小供よりも無知であるばかりか、あの化石しきつた無創造・無生命の學者の諸君たちは抑もわれ／＼に何ごとを語つてゐるか。今日の普通の學生はたゞ學問のある低き段階について一般的知識を獲得するだけでもう疲れきつてゐる。この青年の生々の活力と交換によつて贏ちえたところの大學程度の學問が今日の最高學問から見て如何に低級で、如何に中途半端なものであることか！小學校からはじめて普通に行つて十六七年も書物と首つぴきによつてかちえられた知識の如何に淺ましいほどの憐れさであることか！否、學生などはどうでもよい、だが大學教授として一流の專門家らしく裝つてゐるものであ

つても、現代の最高學問の標準に到達するどころか、これに接近しえらたるほどのものが果して幾人あるのか。物理學の專門家が社會學について無知であるといふだけであるどころか、その自らの標榜する專門的範圍においてさへもそれの最高標準の知識に到達してゐるものが幾人あるのか。講義の前夜に下調べをしてくることによつて辛うじて學生の手前をつくろつてゐる英語教師や、外國人の書物の拾ひ讀みすることによつてやつとのことで二時間の講義を八部通りすませて匆々にひきあげてゆく大學教授についてはこゝには問はない。けれども一流の名聲ある專門家と雖も果してその專門についてどれだけの知識をもつてゐるかについて一考するならば、われ／＼は今日の專門家たるものが如何にその專門についてさへ無知であるかを注意しないではゐられないであらう。しかもわれ／＼はかくのごとき學者に對して汝は無知であると、罵りながら、これに向つて鞭を振りあげることができるか。われ／＼はそのたゞ無知なることを知るといふた、ソクラテスの時代に比べて、われわれの時代が知識の大洪水であることはもとよりである。けれどもわれ／＼の時代は眞の知識、知識を愛するの知識に到達したかどうかはしばらく問はない。われ／＼はわれ／＼の先輩等が築きあげた知識の全部門の前に立つて、今われはたゞわが無知たることを知る」といふこと以上に。何等かの自信をもちうるものが果して幾人あるのか。五人か、十人か、二十人かは知らない、一と握りだけの人間がある點まではこれに堪へるかも知れない。けれども少數の天才のみがこれに堪へられた時に、かくのごとき知識は知識としての何等かの根據をもつてゐるか。五人か十人のもののみが經驗した時にこれは經驗であるか神秘であるのか。また五人か十人のもののみによつて證明されたものが眞に證明されたのであるか。數人の學者が證明し、經驗したといふことと、數人の牧師が體驗し見神したといふことと、われ／＼大衆の立場からいつてそこに何等かの相違があるか。知識は今日は人間の桎梏にと轉化したのである。われ／＼人間の意識の解放者として出發してきた近代の科學は、その長い間の積み重ねの過程において遂に學者地獄にと轉化したのである。今日の學者は新しいことの創造どころか、古き學史の復習だけでも既にその一生を通じて、過分、こしておまりにも過分なる重荷となつたのである。若しも學者の子が生れながらにして學者であり、化學者の子が生れながらに化學的知識の相當量をもつてきたとするならば、問題はないであらう。けれども進化論のやかましい時代において人間の子供等が如何に進化してゐなかつたことであるか！生れた時は丸裸！凡ての小學生

がいゝろはから習ひはじめなければならないやうに、凡ての科學者はロオジア・ベエコンからはじめなければならないといふことが學問の進化に對しての何んといふ矛盾であることか！學門は正に進化した。けれども人間の子は依然たる丸裸であつた。學問が發展から發展への梯子段を昇つて行つた時に、人間もまたこの後を追隨して一段々々と昇つてゆかなければならなかつたのではあるが、けれども學問は梯子段の最後の一段を昇るだけで進化であつたのに對して、人間の子がその最初の一段から梯子段の全部を順次に昇つてゆかなければならなかつたことは、この科學の時代において何んといふ非科學的な人間の子供の拵へかたであらう！學問と人間とは遂に矛盾したのである。學問と人間との矛盾は次第に高まり、そして遂にその矛盾が極點に近づいてきたのである。しかもその學問は數學から數學へ、概念から概念へ、抽象から抽象へと昇りゆくに從つて、それが人間から遠くと離れてゆくことはもちろんである。學問は嘗つては、人間の學問であつたが、かくのごとくにして學問はそれ自體を一つの王國にと組織した。人間的王國のうちの王國である。イムペリユウム、イン、イムペリオである。學問と人間とは遂に二つの對立物にと轉化したのである。人間の知を愛するの情熱から出發したところの學問は、學問これ自身の進化の過程において、遂に人間と對するところの一敵國にと轉化したのである。如何にわれ／＼人間がこの敵國の建設のために貢物を捧げたことであるか！この學問が遂に徹底的にわれ／＼の近づくべからざる巨大なる敵國となるに至るまで。そして最後の瞬間に至るまでこの學問から何等かの恩惠のきたるであらうことを期待しつゝ。科學は最後にわれ／＼に如何なる知的恩惠を與へたか。曰く不可知論、曰く魔のごときあるもの、曰く知識は無知の大海において水の一滴のみ、曰く生命はわれ／＼の理解せざる特性である、等々。この科學の最後のためいきを見よ。しかもまた非空間的現象を自然現象のうちに掏りかへなければならなかつたところのエンテレヒイの理論を、また彼の微分方程式を不可能ならしめたところの量子論の勝利を見よ。經驗から出發して經驗を不可能ならしめ、數學の基礎のうへに立つて數學を不可能ならしめてゐるこの科學の自己否定振りを見よ。そしてまた彼の自然は飛躍せずの獨斷から出發して自然は飛躍なくしては進化することはできないといふところの、あの新しい進化論の見事なる自己清算振りを見よ。科學が人間の自己疎外の極點に達して、われ／＼が遂に科學への復讐の時がきたのではなかつたか。知識における人間の自己疎外から、知識における人間の自己解放への時が既にきてゐたのではなかつた

か。――こゝに確實にいひえられる一つのことがある。科學における進歩は既に停止したのであると。

　應用科學が尚ほ幾多の餘地をもつてゐることは事實である。けれども既に純粹科學がその進歩を停止した時に、應用科學の前途はまたもとより知るべきのみである。

　進歩の停止！　私はこれが今日の時代の特質だと信ずる。獨り科學においてのみではない。世界の人口增加が既に停止期に入つてゐるやうに、世界都會的膨脹の趨勢が停止したやうに、世界の工業主義が既に業に老衰してきたやうに、然り英國のあの何臺ともなき紡績機械が既に長い間の休止をつゞけてゐるやうに、あらゆる道德的なるものへの反逆が既にはじまつてゐるやうに、そしてまたあらゆる文明價値への否定が既にはじまつてゐるやうに、この文明の進歩は既に總括的に停止期に入つたのだと私は思ふ。十九世紀文明が進歩の文明であつたのに對して、二十世紀は進歩の停止においてその若き一歩を踏み出したのである。

八

　これはもちろん大衆の時代である。大衆の時代であることには何人にも異論はない。十九世紀が紳士と知識階級との時代であつたのに對して、今日は正しく大衆の時代である。昨日の藝術家が紳士を目標としたのに對して今日のそれは大衆のうへに目標を置かなければならぬ。昨日の小說家が知識階級の享樂物であつたのに對して今日の小說家はカフエの女給に媚を賣らなければならぬ。昨日の評論が遂に一個のモノグラフに過ぎなかつたのに對して今日のそれは尋常六年卒業の大衆に呼びかけなければならぬ。然り如何なる專制的な政治家と雖も今日は國民の大衆に膝を屈することは尚ほアル・スミスが汽車中の凡ての同乘者に握手をもとめたごとくでなければならぬ。これを阿呆らしいといふこと勿れ。阿呆らしきことを阿呆らしと感ずることは既にその人自體が時代から後れたことを示したのである。われ〳〵は時代に同化するのか、然らざれば時代の責罰をうけるかである。動的時代においては時代は神である。時代の前にはわれ〳〵は無力である。今日は正に大衆の時代である。より多く大衆的であるものがより多く現實的である。さればより多く大衆的であるものは祝福されるであらう。そして凡ての非大衆的なものは責罰をうけるであらう。私は既にこの時代がスポオトの時代、ジヤアナリズムの時代、ジヤヅの時代、キネマの時代。ラヂオの時代、大衆文學の時代、等等等であることを述べた。時代は正に紳士と知識階級からして大衆無特權者の時代に

變つてゐるのだ。十九世紀的進歩の擔當者としての紳士と知識階級の時代が終りを告げて二十世紀の大衆無識の時代に入つたのである。われ／＼は今やあらゆる方面において少數者のための學問、小數者のための藝術、小數者のための政治、少數者のための思想を葬つて、尋常六年卒業者を標準として凡ての新しい出發をはじめなければならぬ。否、われ／＼は既にこれをはじめたのである。こゝに知識の時代から無識の時代がある。ここに專門家の時代から素人の時代がある。こゝに意識の時代から無意識の時代がある。こゝに理性的から直觀的への時代がある。こゝに科學的、理論的から行動的實踐的への時代がある。こゝは文明的、價値的から野蠻的、無價値的への時代がある。直線は曲線よりも强く、强さは美であるといふたのはピカソであつた。民衆にはこの强さのみが理解される。太き直線のみが大衆の時代に呼びかける權利をもつてゐる。纖細、人工、軟弱、平和、上品、禮儀、紳士、理性、虛僞の時代からして行動、强力、野蠻、鬪爭、無形式、偶像打破、勇氣、正直の時代がきたのである。人々はこれを尙ほ進歩だといはんとするか。近代の進歩狂の諸君はこれをしも尙ほ進歩、進化、辨證法的發展といはんとするか。進歩は意識に、理性に、理論的科學的に、總じて傳達性の世界に屬する。行動、直觀、勇氣、野蠻、力、正直、無形式、意志、無意識の時代、總じて非傳達性の世界においては進歩なるものは存在しないのである。數學的音樂には進歩は存在するが喞々として訴へる蟲の音樂には進歩はないやうに。文明は進歩するところのものであるが、自然は進歩せさるところのものである。機械的世界は進歩する世界（從つてまた沒落する世界）であるが、直接表現の世界は進歩せざる世界（從つてまた沒落せざる世界）である。實に紳士と知識階級の時代が進歩の時代であつたのに對して、大衆無識の時代は進歩なるものを知らないのである。こゝにわれ／＼は時間的世界から悠久への世界の門に立つ。一度空間的から時間的へと解放された世界は、再び空間的とともに時間的から解放されるであらう。われ／＼はこゝに大衆無知の時代において叡智への光の射しこむでくるのを見る。進歩する知性の世界から進歩することなき叡智の世界へ。人間の自己疎外が遂にその沸騰點に達したのだ。

米國に於ける產業合理化運動の反面

北澤新次郎

一

過去數ヶ年に於ける、米國經濟界の好況は世界各國民の注目を喚起した。そして其の原因の奈邊にあるかを研究調査するものが頻りに出て來た。

蓋し、米國の近年の繁榮は同國に於ても、謎とせられた。然し、アメリカに於ける今日の經濟的好況の直接原因は何んといつても、歐洲戰亂に基づくものであると云ふことは爭へない事實である。即ち、米國は歐洲戰爭に際會して、一躍して所謂戰爭成金となつたと云ふことが出來る。歐洲諸國に當時物資を供給することによつて、從來、債務國であつたものが、急激に債權國となつた。そして、此等の物資を製造する上に、內國的には一方に勞力を節約する諸種の機械を發案利用し、他方には所謂產業の合理化運動なるものに依つて勞働能率を增進し、斯くして生產物の生產費を低下し、企業家は愈々巨額の利潤を獲得した。

戰後、歐洲諸國は戰爭に依つて受けた甚大なる打擊から經濟的再興の計畫と努力に餘念ない中に、アリカは戰爭に依つて捷ち得た順境に乘つて、銳意經濟界の改善に志したので、アメリカの經濟的狀態は愈々發展するに至つた。即ち、同國の企業家達は益々生產の機械化による大量生產を進展すると共に、一方には微妙なる廣告心理を利用して、大規模な廣告と巧妙なる販賣法に依つて、一般民衆の需要を標準化して、生產物の捌口を擴大してゐる。更に企業經營上に於ける從來の粗雜なる方法を極度に組織化して、以て企業能率の增進に努めてゐる。其の結果、アメリカの經濟界は曾つて見ない繁榮を呈し、企業利潤は增加し、勞働者の賃銀增加に依る生活の向上は何れの國も及ばないものであると云はれてゐる。

其處で、戰後の經濟的再興に努力してゐる歐羅巴諸國は、此のアメリカの繁榮に對しては、羨望の眼を以て見、經濟的復興の模範をアメリカに置く傾向を生じた。獨逸は頻りと米國の產業合理化運動を研究し、其れに其れを批評しつゝ、獨逸獨特の組織能力を發揮して、經濟界の再興に努めてゐる。イギリスに於ても亦產業の合理化は此の方面の努力を促してゐる。

之は單に歐羅巴許りではなく、我國に於ても近年、產業の合理化なるものは、一部の人々に依つて主張力說せらるゝに至つた。然らば、產業の合理化運動なるものは果して、何程の社會的價値を有するものであるか。其れは社會の大多數を構成する勞働者の生活狀態を改善するものであるか。また社會一般の人人の幸福を增進するものであるか。此點を少し分解して考察を試みることは、今後我國に於ける產業の合理化の隨喜者の參考になるところも尠くないであらう。

二

米國に於ける產業の合理化運動が、生產上に於ける空費を節約することに依つて、生產力を增加したことは爭はれぬ事實である。即ち、テイラー・システムや其他の企業管理上に於ける新方法に依つて、各種事業の濫費や冗費を節約し、他方、進步せる機械の採用に依つて財物の生產費を減少したことは著しいものである。例へば鋼鐵の年產額、一鎔鑛爐に對する銑鐵の年產額に就いて、此等をイギリスやドイツと比較すると、アメリカは確に高位にあることは次の表でも知ることが出來る。

鋼鐵年產額

	英國		獨逸		北米合衆國	
	Basic tons	Acid tons	Basic tons	Acid tons	Basic tons	Acid tons
1901—5	1,141,000	3,995,000	7,609,000	514,000	5,155,000	10,105,000
1913	—	—	—	—	20,344,626	10,801,081
1913—4	—	—	17,969,011	347,138	—	—
1915	3,438,781	4,912,160	—	—	—	—

鎔鑛に對する銑鐵の年產額

英國 1915 噸		北米合衆國 1915 噸		獨逸 1911 噸	
Cleveland	45,800	New york	120,300	Rheinland Westphalia Lorraine	67,400
Durham	39,400	Pennsylvania	106,700	Luxembourg	45,700
Cumberland	40,900	Alabama	80,000	Saarbezirk	50,000
Lincs.& Leices.	33,300	Ohio	117,100	——	
S. Wales	65,000	Illinois	135,900	——	
Scotland	15,500	——			

更にアメリカでは勞力を節約する機械の利用に就いては、常

に注意を怠らない。處がイギリス邊りでは此點に於ては保守的な國民性にも依るが、間に合ふ場合には從來の機械を依然として使用する場合がある。自分は今回マンチエスターに於ける二三の工場を見たが、これらの工場に使用する機械は同種類のアメリカの工場と比較すると餘程舊式のものを使用して居つた。偶々、新式の機械があると思ふと、其れは「合衆國製」のものであつたことに奇異の感じを與へられた。例へば炭鑛業に於いて使用する截炭機械の使用數並に其の生産高を見ても格段の相違があることは次の如くである。

截炭機械（一九一六年）

	英國	北米合衆國
機械使用數	三、四五九	一六、一九七
機械生産高	二六、三〇三、一一〇噸	二五三、二九五、九六〇噸
一機械に對する生産高	七、六〇一噸	一五、六三八噸

蓋し、今日の經濟界に浪費の多大なることは疑ひの餘地がない。尤も資本主義社會に於ては、生産、消費の調節の上に浪費の生ずることは必然的の事柄である。假に一歩讓つて、現在の社會組織を其儘肯定するとしても、經濟生活に於ける驚くべき濫費の存在することは事實で、スチユアート・チエースは其著「浪費の悲劇」中に此點を明快に指摘してゐる。そして、財物の生産上、浪費の原因の大部分は事業の管理に基づくものである。米國聯合工學協會の調査に依れば、諸種産業に於ける浪費の原因の大部分は企業管理に基づくものであることが立證されることは明白で、其は次の如くである。

産業の種類	管理に依る浪費	勞力に依る浪費	其他の原因に依る浪費	原因總計
建築業	65%	21%	14%	100%
製靴業	73%	11	16	100
金屬業	81%	9	10	100
印刷業	63%	28	9	100
洋服業	75%	16	9	100
織物業	50%	10	40	100

三

斯くして、産業の合理化に依つて從來産業界に多分に存在して居つた浪費を節約することが出來れば、それは結構な事である。そして之が爲に、財物の生産能力が増進し、生産費減少の效果を擧げることが出來れば、其れも亦不可でない。そして産

業の合理化に依つて資本家は利潤を增加し、勞働者の賃銀も亦同樣增加するが故に、產業の合理化はあらゆる方面に妥當なものであるとの結論に對しては、自分は共鳴するわけには行かない。其の理由は、產業合理化運動はそれ自身今日の產業界に於て、妥當なるものであつたとしても、それに依つて受ける資本家並に勞働者の利益は決して均等ではない。否、資本家はそれに依つて「獅子の割前」を受け、勞働者は名目的の收入の增加を得ても、それが必ずしも勞働者の生活改善に與つて力があることにはならない。否、勞働者は其の生產能力を著しく增大したにも關らず、其の收入は減少するといふ結果になることが屢々ある。

米國の勞働者は、同國に於ける經濟界の繁榮につれて、多少其の生活の改善を爲した點がないではないが、其れを資本家の巨大なる利潤獲得と比すれば、極めて微細なものである。一九二六年に於て賃銀勞働者（人口の六十三％）は、國民所得の三十八％を取得したのに對し三千弗以上の非賃銀所得者（全人口の六・四％）は三〇・三％を獲得して居る。更に賃銀勞働者は株券總額の一％を所持するが三千弗以上の非賃銀勞働者は七〇％を所有してゐる。米國の富は、顯著なる增大を見たにも關らず國民の五％は國富の八十％を所有するが國民の一％は富の五十九％を所有してゐる。從つて、米國に於ける勞働者の實際所得は、必ずしも顯著なる增大をしたものであるとは見られない。例令、彼等の名目上の賃銀は近年、增加したとしても一方物價の騰貴を見れば、其の實質賃銀は減少する場合もある。現今の紐育市に於ける生活費は一九一四年に於ける其れに比較すれば大體七十％の增加をしてゐる。其處で勞働者の賃銀は七十％を增大しなければ其の實際上の收入は減少したものと見て差支へはない。そしてそれだけの賃銀の增加を見た產業はどれもない。

產業の合理化には、新しき機械の採用を伴ふが、其れは必然的に失業者を增加する。尤も其の場合に於ても、此等の失業者は新しく展開された產業方面に轉職するから、何等の憂慮すべき事ではないと普通云はれて居るが、其れは事實に反してゐる。現在、經濟的繁榮を最も享樂してゐると稱せられるアメリカがイギリスやドイツよりも多數の失業者が存在し、それは三百萬に及んでゐる。そして勞働組合は頻りと此等の失業者の問題について世人の注意を喚起しやうとしてゐるが、經濟的繁榮の社會的雰圍氣に醉つてゐるアメリカでは割合に之が重大なる社會問題とはなつてゐない。けれども一度此の經濟的社會の變調を來した場合には、それが重大なる社會的結果を來すことは最も明白なる事柄でなければならない。

四

更に產業の合理化運動の反面に產業上の事故の激增したことを忘れてはならない。全國安全協會の調査に依れば、產業的事故は一九一九年から一九二〇年に掛けて二十七%を增加し、そして其後も增加の傾向があると云はれてゐる。ニュー・ヨーク州だけでも其の產業的事故は殆んど五十%の增加をしてゐる。そして此等の顯著なる產業的事故の增加の理由は、一は生產の速力の增加、二は複雜なる機械の使用、三は雇主の豫防設備の怠慢に歸着する。

近時、此等の產業上の事故は漸次世人の注意を喚起し、其の原因の何處にあるかを討究するやうになつた。旅行保險會社のエッチ・ダヴリュー・ハインリッヒは此頃七萬三千の產業事故を調査研究した結果を發表したが、其の最初の結論は、凡べての產業事故の九十八%は防止し得べきものであると云ふことである。そして、此等の八十八%は事業管理者の責任で、其の十%が勞働者の過失に基づくものであることを言明してゐる。之は勞働階級に取つては重大なる事實でなければならない。資本主義の下に於ては、產業的發展の凡べての重荷は常に勞働者に依つて負擔されねばならない事は不合理である。それは尠くとも不公平である。其れは社會進步の犧牲としては看過すべく餘りに重大なる事項ではあるまいか。

尤も、近時アメリカには幾多の會社の經營する溫情主義的な施設が出來て勞働者の負傷や事故の場合にそれを救濟する方法が設けられてゐる。それも結構だが、然し其種の施設は結局溫情主義で勞働者の自尊心や獨立心を毀損することが尠くない。否、さうした設備や外觀的に增加した賃銀の取得は、米國に於ける勞働者の自動的機關である勞働組合運動を極度に衰退に導いたことは爭はれない事實である。十年前に於ける米國の勞働運動は攻勢的な急進的な頑固なものであつた。けれども今日に於ては、それは著しく妥協的な躊躇的な否寧ろ廢頽的な氣分にある。そして、勞働組合員は減少し、增加するものは會社の御用組合員であるといふことは稱讚すべき現象ではない。

五

產業の合理化運動に依つて、米國の企業家は、一方に於て生產の機械化を計ると共に他方には、消費の標準化に依つて、商品市場を擴大する。そして、消費の標準化の手段は巧妙なる月賦販賣と大規模の廣告に依るものである。そして、アメリカの消費者は間斷なき廣告者の「買へ!」「買へ!」「買へ!」と

の勸告で、常に無意識的の抑壓を感じ、購買上に於ける明智なる選擇をなす餘裕がない程である。エドワード・ボックスは、米國に於ける廣告に對する年々の支出を次の如く計算してゐる。

新聞紙	六〇〇、〇〇〇、〇〇〇弗
直接廣告(折込、引札)	三〇〇、〇〇〇、〇〇〇
雜誌	一五〇、〇〇〇、〇〇〇
機關雜誌	七〇、〇〇〇、〇〇〇
工場雜誌	二七、〇〇〇、〇〇〇
看板	三〇、〇〇〇、〇〇〇
斬新廣告	三〇、〇〇〇、〇〇〇
デモンストレエション	二四、〇〇〇、〇〇〇
裝飾窓陳列	二〇、〇〇〇、〇〇〇
ポスター	一二、〇〇〇、〇〇〇
電車廣告	一一、〇〇〇、〇〇〇
活動寫眞	五、〇〇〇、〇〇〇
プログラム	五、〇〇〇、〇〇〇
總計	一、二八四、〇〇〇、〇〇〇弗

斯くして、此等の廣告費用は毎年十二億八千四百萬弗が消費される。米國に於ける全新聞紙面と廣告紙面との割合は七十%に對する四十%である。同國に於ける凡べての印刷物の八割は廣告事項からなつてゐる。アメリカに於ける或會社は、一九二三年に廣告費として、千二百萬弗を豫算に計上した。同年、銀行投資協會は廣告費として四千萬弗を使つた。

此等の廣告料は皆商品に轉嫁される。從つて、消費者のそれに依つて受ける打擊は甚大である。スチユアード・チエースの著「諸君の貨幣價値」を讀むものは、何人も斯くの如き浪費が生產上の浪費であることが理解される。しかも、其れは產業合理化の本家であるアメリカの事實である。

生產並に消費上に於ける浪費、冗費を節約することは重要である。併し、若し產業の合理化運動なるものが、單に資本主義の行詰りを打開せんとする老猾なる一手段であるならば、其れは斷じて排斥すべきことである。假に、さうでなくとも、若し其の結果が、其れに依つて受ける利益の大部分は資本家が掌握し、勞働者は單に糟をなめるに過ぎないものであるならば、それは社會的正義の名に於て不當であると云はなければならない。假令、それが產業的合理化運動といふ一見合理的に思はれる名に於て爲されるとも。

サラリーマン論

新居格

（A）先づその語辭に反對す

わたしはサラリーマン乃至俸給者と云ふが如き語辭に先づ反對する。その理由は、それらの語辭が、共に封建的イデオロギーを内含してゐるからである。プレーウアの「熟語寓話字典」に據ると、サラリーとは「鹽の日糧で、ローマ人は兵卒、下僕等の必需とする鹽並にその他の糧食を給した。それらの糧食は鹽と云ふ一般的な名前で呼ばれた。そして金錢が糧食に替えられたときになつても俸給は同じ名前（鹽）で殘つたのである」とある。宋史には「歲賜以爲㆓俸給㆒」とあり、服部字之吉、小柳司氣太兩氏共著の「詳解漢和大字典」で「俸」の文字を訴えると、「君主又は官から其臣屬や役人に年々或は月月あてがふ米若くば錢」と註釋を施してある。これらを見ると、われ〳〵が米鹽の資と云ふ場合のその米鹽は、ローマの鹽と支那であてがふ米とを合せたものに相當する。それは兎に角として、漢字による「俸」が極めて封建的な文字であることは分明である「サラリー」は一方に Civil Servant の糧食支給をも含んではゐるが、より多く兵卒の日糧支給に關係があり、當時のローマに於いては特にそうであることは疑を容れぬ。であるとすれば、「サラリー」特に「俸給」は封建的イデオロギーを多少の程度に於いて内含してゐるのは事實である。しかるに、官公吏を除く、被使用人たるサラリーマンは雇傭契約の上に立つてゐる。一定の勞務をなす代りに、月々にその對價を受けとるのに過ぎない。開業醫が診察料を、文士が原稿料を取ると同じ意味で、彼等は執務人として云はゞ執務料を受取るのである。たゞ開業醫、文士（著述家）辯護士等が所謂自由職業者である

のと異り、サラリーマンは特定の雇傭者に屬するだけの差である。しかし、そこには何等の君臣的關係はない。執務料を受取るべく執務をなす執務人であるに外ならない。從つて、執務の範圍に於いて命令されるのは當然ではあるが、その命令者對被命令者との間にはその間封建的イデオロギーを挿入しうべき餘地は全くないのである。しかるに、被使用人たる俸給者が例へば銀行員會社員が封建的意義を含む上述の如き語辭にかいして何等改訂的意思を抱こうともしないかの如く見えるのは若干の不滿であらねばならぬ。そうした語辭の含む封建的意義の嫌厭を感ずることとそのことが一箇の新しき社會當爲に動く所以であるとわたしには思はれるからである。

(B) サラリーマンの概念

漢字字典の俸給の意味に從へば、田中義一の如きは完全な一個の典型的サラリーマンであるにも拘らず、一般では恐らくは彼をサラリーマンであるとは云はないであらう。官公吏、被使用人にしても所謂中流階級以上のものは、サラリーマンの概念の中に含めてゐないのである。東京市役所統計課作製の「家計調査統計原表」(自大正十五年九月一日―至昭和二年八月三十一日)に給料生活者一ヶ月平均實收入表を見ると、二人世帶の一三五圓・八〇から八人世帶の一八九圓・〇九に及んでゐる。協調會の調査表を見ると、收入月額別として五十圓から三百圓までを俸給生活者の調査頭目にしてゐる。それらをもつてみるとサラリーマンは二、三百圓内外の收入をもつて最高の標準と見てゐるかの如く思はれる。さらに前掲東京市の原表によると給料生活者を官公吏、銀行會社員、教師、巡査に分けてゐる。官吏は「日本勞働年鑑」(大原社會問題研究所編輯、私の手許には昭和三年版がなかつたので二年版による)に據ると、勅奏任官、判任官、雇員(その數、三十八萬二千人)公吏として市町村長、助役收入役その他を擧示し教師の項(その數約卅萬)各種職業從業者の分明せる部分の員數を擧げてゐる。わたしがサラリーマン乃至俸給生活者の言葉が内含する封建的意義に反對動向をもてよと云つたのは官公吏、教員、巡査を除いた銀行員會社員の諸君に向つて云つたことは云ふまでもない

サラリーメンの中には相當若くば隨分の高額の俸給をえてゐるものもあらう。だが極めて小額の俸給生活者もある。それらの數字的研究はわたしの極めて不得意なことであるから略するが、サラリーメンと云へば自ら會通する觀念がある。わたしはそれに從つてわたしのサラリーメンを始めるより外はないのである。

（C）サラリーメンのデーリープログラム

サラリーメンは一定のデーリー・プログラムをもつのが常である。ラッシュアワーの出勤、執務、正午食と小憩、執務、四時退出、再びラッシュアワーの歸宅、これが彼等のもつプログラムである。近代的大都市に於いて群集人間が描がく交響樂の一つがラッシュアワーである。それは映畫「伯林」の如くに映畫化された場合には一箇の美でもある。しかし現實の登場者は苦痛である。江南文三君は東京第一中學の教師だが、日本海の孤島佐渡の相川中學より轉任し來つて第一の苦痛がラッシュアワーの出勤だと泌々筆者に洩らしたことがある。電車内の人いきれ、それに混入した各種の異臭特に澤庵の臭ひ……と彼は云つた。電車に乘降する際の混雜が第一耐え難いのに電車内の異臭がある。サラリーメンの仕事の一部に既に出勤時退出時の並々ならぬ努力が要る。執務時間の約八時間から解放されて彼等が歸宅した時には相當の疲勞がある。夜の彼等にして專門的の書物をよみ、若くば高級な書籍雜誌をよむことは概して苦痛とするらしい。プログラム外のプログラムを欲しない。で彼等の少なからざる部分が低級な娛樂雜誌か若くばありふれた娛樂に就く。「キング」程度の雜誌がよき侶伴となるのかも知れない。しかしそれは彼等を昂揚する所以ではない。わたしに云はせれば低劣な書籍雜誌をよむよりも、入浴して風綻するがいい。出來うるならば小量のよき書物のみを讀むことを勸める以外に何があらう。聰明と智性なきもののみが赤本と低劣卑俗な雜誌をよむのである。が、幸にも現代のよきサラリーメンはよき動向を執りつゝある。彼等は一定收入のある間に社會動勢に應じた觀察と研究とに步を進めてゐることに留意してゐる。彼等こそ機械人間であることを欲しない。過去のサラリーメンは或は因屬的關係に眠むり一身一家のはかない平安の夢を遙かの彼岸に到來する退職慰勞金の勘定に托したかも知れないが、現代

	月收三〇〇圓迄	月收二五〇圓迄	月收二〇〇圓迄	月收一五〇圓迄	月收一〇〇圓迄	月收五〇圓迄
20歲迄				1		
25――		1	4	10	3	
30――	4	7	13	34	21	1
35――	3	16	22	42	15	
40――	5	6	14	31	9	
45――	3	8	15	21	9	
50――	2	4	7	8	3	
55――	2	4	3	2		
56歲以上		3	4			

の彼等はもつと聰明な辨識をもつてゐる。彼等は最も大なる會

社にあつても、その退職慰勞金給與率は勤續十年にして退職當時の本俸の三十ケ月分、二十年にして退職當時の本俸の九十五ケ月乃至百三十ケ月であることを知つてゐる。しかも以上の標準率は日本に於いて最も大なる資本家會社のそれなのである。しからば、彼等の月給はどうであるか。協調會調査の表に前掲の如きがある。（四一頁參照）

この表によつて年齡とサラリーとの關係とを知ることが出來るが、同時に退職慰勞金給與率を乘じて彼等が受取るであらう金額も想像が出來ぬではない。前田一氏の豫想によれば五ケ年勤續者の平均俸給は三井物産にして帝大出身百十圓至百五十圓、私立大學出身百圓、專門學校八〇圓、中等程度の學校卒業生五〇圓、三菱合資も略同じである。それを十ケ年勤續者の平均俸給額豫想にして、三井物産、帝大出身で自二百圓至三百圓、私大出身で自百三十圓より二百圓、專門學校百圓－百五十圓、中等學校出身で七十圓、三菱合資もそれと大同小異。でかくの如き代表的な大會社で最もよく支給された額の三百圓に三十ケ月を乘じ退職慰勞金の九千圓が給與されるのである。しかも彼等は異常に激しき就職難を突破しえてさうである。

本稿が書店の店頭に出づる前後サラリーマン諸君にとつて最も喜悦得意、ボーナス時代に入り或はそれを近く迎へやうとする際であらう。

十二月暮の街がクリスマス・デコレーション若くば歳暮の賣出の裝飾で彩られてゐることとカフエーに、レストランにまた舗石道に彼等の揚々たる姿をも見るであらう。だが、彼等がボーナス一封を前にして考へること果して窓の外の冷闇を外にして明るい燈の下で得意の微笑を洩らすことであらうか。願はくば僕の議論を聞いてくれ給へ。

（D）サラリーマンの近代性

その前にもう一つ説明すべきことがある。それはサラリーマンの近代性に就いてである。近時日本のインダストリアリズムが著しく緊迫して所謂資本家は投資すべき生産の新しい對象を見失ひその代りに、享樂的投資に向つて進出し來つた傾向がある。各種の享樂機關たとへば最近に著しく目立つものはシネマ劇場の建築計畫である。わたしの推測にして誤たずは彼等はさらに大規模のカフエー、又はミユジツクホールの設立に進轉するのである。わたしはこの現象を想察して新社會的當爲を缺いだ彼等資本家が歡樂の墓穴を無意識に掘りつつあるものだと解釋した。彼等が漸くモダニズムの洗禮をうけて來たのである。尤もその前提に立つものは社會の事象そのものであるが、今

社會は崩壊の進路に明るい花をさかせるモダニズムと、社會更生の方途を取る機構的認識の推進と、その二大潮流を暖潮寒潮の如くに交叉させてゐる。キヤピタリストはその前者に就いた。無自覺なサラリーメンはそれと同じ方向に流れて行きつゝる。享樂主義的傾向、文化的虚飾、イーヂーゴーイングな快適慾、故に家狭ましと雖、小ブルジョア的色彩をつけ、服装に、擧措に持物に、行動にゼンツルマンリーの雅致を塗る。止むをえない、彼等の執務する場所は近代的高層建築の立ち並ぶビズネスセンタアである。アメリカの映畫によくあるオフイスそのまゝのオフイスであるからである。彼等がタリーンセーヴイングを每朝施こし、洋服の塵を丹念に掃ひ季節〳〵の登場者としての萬端を整へてゐる。即ち彼等の執務的環境は彼等を驅つて一種のモダン型を與へてしまつたのである。サラリーマンの衣服費並に交際費を職工に比較したものを見るに次ぎの如くになる。

調査會の調査による大正十年六月より大正十一年五月に至る實費支出額中交際費衣服費（但し月收入額五十圓の俸給生活者と職工とにとる）だけを摘錄する。

收入		衣服費	交際費
五十圓	俸給生活者	二三・二七	一四・七八
	職工	六・九六	六・二〇

執務に於いて近代型をもつサラリーメンは享樂に於いてもまた近代型を帶びる。彼等の趣味はよき部分としてのスポーツへの關心であり、シネマ、ダンス、カフエー（尤もこれは特に青年サラリーマンに就いてであるが）にもつながる。ビズネスセンタアの畫の執務より、ブルウヴアールの夜の遊歩にもなる。よしまた彼等の俸給額が少許で彼等の追求を現實的には不可能にさせてはゐるが、彼等の白日夢にはもろ〳〵の快適な情景がイスパニアの城廓として存するのである。ボーナス期に於いて彼等の抑壓された欲望が傍若無人の爆發をするのも當然である。一方近代型サラリーマンに配する近代型マダムは近時逐年自由感情を培養してゐる。所謂不貞事象の發生を最も頻繁に見るのはそれらのサラリーメンの家庭であることもサラリーメンの近代型と相關的に考察さるべきことではあるがこの點は傍系的問題であるが故にしばらく措くであらう。

（E）サラリーメンは何處へ

學士會名簿を見るとわたしはそれが一箇の俸給者名簿であるが如き感を抱かせられる。よく云へば、日本の知識階級は最も中堅的に現在の社會を構成してゐる有力な要素であると云はなければならぬ。しかし、一歩を進めて云へば、彼等は現在の社

會機構のセメントとなつて堅く固めてゐるのでもある。曾つては官僚政治を固める防柵となり、それにつゞいては資本主義に力を貸してその發達に寄與した。これが日本の知識階級が過去に於いて辿り來た經路であつた。

官公吏として銀行會社員としてまた其他として俸給生活を生活しつつあるサラリーメンは所謂中間階級としてプロレタリアとブルジョアとの間を浮動する立場をもつてゐる。過去に於いてまた現在に於いて俸給生活者の大多數はブルジョアに意識的乃至無意識的支援をして云ふところのプチブルの雰圍氣を釀成してゐるのである。だが經濟事情の變化と思想的考察は漸く俸給者生活者の上にも反省をもたらさずには居なかつた。彼等は先づその中間階級の地位を漸く明確に把持して來た。これは一つの大きな進前である。そのことは一方自己の歸屬しつつあるブルジョア社會の機構にたいして少くとも客觀的考察を加へしめ、他方時代の新しい登場者として擡頭して來た新興階級の動勢によつて力強く電撃させられた。一言にして云へば、時代の動向が彼等をして事實に面接せしめたのである。特に、普選實施の聲が一般的になつた前後から、彼等の少なからざる多數が新たに得るべき投票權を前にして考へ初めた。彼等の判斷は十分以上に既成政治に不信頼を抱かせてゐた。だと云つて彼等の生活的立場が直ちに新興階級に身を挺して投入することの勇氣はなく、必要もなかつた。比較的に既に進取的であつた工人俱樂部は彼等のもつ中間階級的立場を積極的に進出せしめ勤勞階級の包攝を綱領とする社會民衆黨と合流してその構成單位となつたのである。社會民衆黨の立場からすれば既成政黨を侮辱しながらも、進んで新興階級の勢力にも接近することが出來ず、この投票權の始末を考へてゐた俸給生活者をその新しい中間的立場に生かそうとしたのは同黨としてはよき着眼であつたと思はれる。

前にも云つた通り、現在のサラリーマンは明らかに二つの潮流を取つてゐる。その一つは近代型を助長させてプチブルの雰圍氣を作り上げつつ崩壞的な道途をとるものである。それらと雖、社會動勢を熟知してゐるのである。そして意識的乃至無意識的に逃避の形をモダニズムに見出したのである。この中間階級的浮動體はその方向を指さすと共に進出的積極的な姿をプロレタリア運動それ自體若しくばそれの指示するところと全く同じ方向をとらんとするのである。サラリーマンは何處へ行く。これはサラリーマンに附帶する興味ある疑問なのである。

（F）サラリーマンの社會運動としての消費組合運動

サラリーマンの團體として明確なプロレタリアのイデオロギーに導かれたものがある。それらは中間階級的意識を抛つて全然プロレタリア的色調を鮮明にしたものである。サラリーマン同盟の如き、日本俸給者組合評議會の如きがそれである。それらのことは後述するとして一般的に云へば、俸給生活者がもつ社會運動としては消費組合運動が適合的であると思ふ。消費組合運動に就いて書くのが本稿の目的ではないから略するが、今の場合、消費組合運動ほど俸給生活者に適合的なものはあるまいと云ふのは種々の理由がある。

一、消費組合運動は中間搾取の廢止を運動自體のうちに含む。それは地味ではあるが極めて基礎的、建設的な運動である。それは單なる台所の問題ではなくて、社會の更改を意味する大なる社會運動である。俸給生活者群にして既に新社會的動勢を偏知したものは何等かの意味で社會運動に參加する意思に動こう。消費組合への參加はサラリーマンの執務の上に(如何に頑迷保守的な雇傭者であつてもそれへの參加は勞働組合としての俸給組合の如く直接に雇傭者に抗戰する場合なきが故に)何等の支障を見ないで、一方有力なる社會運動の推進に與かること。

二、俸給生活者は定收入生活者である。そのことが消費組合員としてはよきコンデションを備へたもので、俸給生活者を構成要素とせる組合は概して良成績を示してゐる。これは工場を中心として地域を集約的にした工場勞働者の消費組合同樣である。

三、俸給生活者の生活が右の如く、定收入と云ふ強味な消極的な理由の外に、俸給生活者は積極的な理由をもつ。それは概して彼等の生活特に小額俸給生活者にとつて特にさうである。「東京に於ける少額俸給生活者家計の一研究」(大原社會問題研究所雜誌第二卷第二號所載)と題する權田保之助氏の研究のうちで同氏は次ぎのやうな要約的結論を導き出してゐる。

「我國少額俸給生活者の家計に於ける支出は、生活必需費に其七割を奪はれて……五八四頁 而して支出の七割を占むる生活必需費の中、其の五割七分を占むるものは飮食物費であるが、此の飮食物費に於いて半分以上を占むるものは實に米穀類である。然かも此の米穀類中にあつて米に對する支出は九割强を占めてゐる。五八六頁」尙同氏は「收入段階の上昇に伴うて生活必需費は漸減する傾向を示す」とも言つてゐる。この狀態即ち少額俸給生活者が生活必需品を特に飮食物費に支出の大半を奪はれる事實は積極的にも彼等が消費組合運動への必然的近接を示唆するものなのである。わたしは俸給生活者に一般的に消費組合運動が興隆することが望まれてならない。而してその動向が漸く著明になりつゝあることは大なる進歩と云はねばならないと思ふものである。

(G) サラリーメンの勞働組合としての將來的形態

サラリーメンで社會意識に目ざめたるものは全然プロレタリア意識と感情の上に立つてゐる。彼等は俸給生活者を雇傭勞働の一形態とし、俸給生活者の組合を組織して敢然として雇傭者にたいする勞働組合的態度を樹立してゐる。曾つて工人俱樂部が高級技術者の集團として階級戰線に立つ資格なしと云ふ非難を非難し、技術に與れるものの横斷的勞働組合であること、會員の殆ど全部が下級技術者の勞働者であると云ふ自覺が同俱樂部の基調であつて頭腦勞働者としての工人の利益を代表するのだと聲明したことがある。また日本俸給生活者組合聯盟はその綱領として(一)純然たる雇傭勞働の一形態であることを明かにし雇傭條件を維持改善することを述べ(二)に因襲的心理と屈從的態度とプチ・ブルジョア的個人主義と利己主義とは俸給生活者の雇傭條件を低下せしむるものであるとして排斥し(三)俸給生活者の組合は狹隘な職業的偏見に囚はれないで、共同の目的に向つて努力すると歸結してあつた。

現在の所俸給生活者の組合が如何なる名稱のもとに幾十個乃至幾百個あるか手許に材料がなかつたので摘記することは出來なかつたが、各地特に大都市には概ねあるやうである。

だがこゝで考察を要することは俸給生活者の組合は横斷的組合の形態をとつて成立してゐた。而してその組合も俸給生活者が中間階級である如く、その組合も中間階級的弱味をもつてはゐるなかつたらうかと思ふ。俸給生活者の組合だけが自主的に強き力をもつてどこまでも戰ひうる機關であるかどうか。これがでの資本家との抗爭の場合、俸給者の組合として當るよりも同じ主義傾向に立つ政黨若くば勞働組合なぞの支援を求めるのでなければ俸給生活者の組合が當然にもつ性質上、力強く戰ひえなかつたのではないか。例へば日本俸給者組合評議會は勞働組合として舊勞働組合評議會政黨としての舊勞農黨と何れも共通的根幹をもつものの、その各なる局面に現はれたものに過ぎない。で、あるとすれば、日本俸給者組合評議會の持つ問題はそれらの何れにも直接間接の關係をもつものとしてそれらの支援を當然に受けもし、また受けなければ力が乏しすぎるのである。そこで問題は俸給生活者組合に中心歸聚させてそれを力強くさせるにあるか、それとも俸給生活者の組合は形式的、タクチック的存在にさせて、俸給生活者を同一若くば類緣的勞働組合に産業別貫通をとるかである。例へば出版業に携はるコムミユニスト系の俸給生活者は同じイズムの關東出版勞働組合の內に內容的には加入し、その他の俸給生活者もそれ／＼の同一若くば類緣的勞働組合に屬すべきか。これは評議會系の俸給生活者組合評議會の面接した問題の一つであると云へなからうか。若しも俸給生活者の組合がトレード・ユニオンで行くとすれば、後者の方が徹底的な動向かも知れないのである。

サラリーマンを主題として考察するとき、そこには實に多くの觀點のあることを思ふ。本稿はその一部の略述に過ぎない。

プロレタリア演劇の問題

村山知義

一

「プロレタリア演劇の問題」といふ漠然たる題をかかげたが、私はこの小論で、現在の日本のプロレタリア演劇運動の理論と、具體的な活動情勢と、それを規定する特殊な主觀的客觀的條件と、將來の見透しとを、出來るだけ簡單に述べるといふことを企てたのである。

從つて敍述の順序は便宜的に、解り易いといふことを旨とした。

二

まづプロレタリア演劇運動の理論。

プロレタリア演劇運動の理論（演劇理論ではなしに）は一般的な藝術運動理論の中に包含されて發展した。そしてその地盤の上に劇團や觀客の組織の問題、定期公演と移動劇場の問題等特殊な問題が展開された。

此處では前者——一般的な運動理論——に觸れてゐる暇はない。

ただ、簡單に一言で片附けるならば次のやうに云へるであらう。

幾多の誤謬を經たのち、今や藝術と政治との正しい關係が認識された。それは藝術運動が正しい藝術運動の任務を知り且つ行ひ得る主體的條件××黨が確立されたためである。

藝術運動は無產階級解放運動の一翼である。それは確立した主體的條件の下に、直接のアジ・プロとプロレタリア藝術確立のための運動をする。その運動を遂行するための組織は藝術の

各專門部門毎に作られたグループのフエデレーションといふ形を取るべきである。

作家團、美術家團などと相並んで劇團が存在する。

革命的劇團には、職業的劇團（商賣劇團）專門劇團、移動劇團、勞働者劇團、農民劇團等の種類があり得る。それは夫々の任務に適つた組織を持つべきである。

職業的劇團はそれが職業的劇團であり得るやうな組織（スター・システムの如き）を取り、その有する經濟的優勢を利用し、（就中演劇上演の機構的方面の研究完成のために利用し、）專門的俳優を養成し、その影響範圍を地域的にも擴大し、勞働者農民に安くていい芝居を見せ、ブルジョア劇團の影響範圍を狹めるといふやうな長所を持つ。

專門劇團（何等かの理由で職業的劇團にはなり得ないが、しかし專門的演劇當事者より成る專門的劇團）は經濟的な條件のために充分な活動を妨げられるが、屢々職業劇團が忍ばなければならない妥協から自由であるといふ長所がある。

移動劇團は主として直接的アジ・プロの專門的機關である。（最近日本の官憲によつて入國を禁止されたサウエートの「藍服(シーナヤ・ブルーザ)劇場」は半ば職業的になつた移動劇團である。）それは必要に應じて敏速に出動し、最もその場合に適した簡單な演劇を上演する。

勞働者劇團は勞働者自身が組織する主として直接的アジ・プロのための劇團であつて、工場に重點を置いて組織し、經濟的政治的なモメントを捕へて演藝會を催し、又は集會を勢づけなどする。（「戰旗」七月號に千田是也が寄せた報告「獨逸の勞働者演劇に關する覺書」を讀まれたし。）

農民劇團は地域的に組織され、勞働者のそれとは當然內容形式の點で異るが、同じ目的で運動する。

（誤解を避けるために附言するが、直接的アジ・プロのための演劇とプロレタリア藝術確立のための演劇とは共に此處に擧げた各種劇團に於いて上演されるべきであるが、その機能上いづれを主とすべきかを指摘したのである。）

三

さて私はここで便宜上、日本の現在のプロレタリア演劇運動に現はれた特徴を見ようと思ふ。さうすることに依つて、日本のプロレタリア演劇運動の前に控えてゐる當面の問題が理解し易く、將來の見透しがつき易くなると思ふから。

日本の現在のプロレタリア演劇運動の特徴は次のやうに要約することが出來る。

1、極端な經濟的窮乏。
2、職業的劇團の皆無。
3、劇場を有する劇團の皆無。
4、專門的（況んや職業的）演劇當事者の僅少。（或ひは皆無。）
5、非常に重い政治的壓迫。
6、勞働者、農民自身の行ふ演劇の皆無。（一時的の例外はあるにしても。）

これ等を簡單に説明しよう。

1、極端な經濟的窮乏。

現在日本の左翼的劇團を數へると、左翼劇場を初めとして七つ八つあるが、いづれも窮乏そのものである。左翼劇場の場合を例にとつて見よう。左翼劇場は無財産で、しかも某劇場の大道具部を初め約三百圓程の未拂ひがある。東京で五六百人收容出來る小屋で二乃至四日うつと總支出約千圓を必要とする。九十九錢均一で三十錢乃至五十錢の勞働者券を出す。（それより高くては我々の演劇の眼目である勞働者の觀客は到底呼べない。）九十九錢の客が一日四百人四十錢の客が百人で四百三十六圓、三日で千二百七十八圓、この賣上げが八割回收出來ると九百九十圓である。常にギリギリの計算である。（そこへ5の公演直前の禁止命令といふのが三度に一度は來るといふ危險がある。小屋乃至大道具に手金が打つてあり、その他準備がしてあればそれだけ丸損である。旅興行の場合であればその損害は挽回し難い。）しかも何の資金もないので、切符の前賣でやり繰り、且つどこかから（或時は高利貸から）借りて來て費用に當てるのである。ドラマリーグ、組合、左翼の新聞等に依る觀客の組織（經濟的理由は觀客の組織の目的の一部でしかないが、）は全力を盡してゐるがまだ全く不充分である。

2、職業的劇團の皆無。

一箇の劇團が職業劇團（商賣劇團）であるためには、興行師乃至劇場がそれを「買ふ」なり「分」で契約するなりしてくれ、それに依つて劇團が座員の生活を、程度の差はあれ、保證出來なければならない。さういふ職業劇團は我々の側には一つもない。その原因の中、我々の側に罪のあるのは、我々の提供するプロレタリア演劇が「面白くない」といふことである。そして面白くない芝居はルナチヤルスキーも云ふ通り、「穴のあいた舟」である。勞働者は決して金を出して面白くない芝居を見なければならない義務はない。政府の側の罪は我々の演劇に公演し得る安全性を與へないことである。警視廳に於ける高等係と檢閲係との二重の檢閲、所轄署の署長の意志、及び臨檢の警官の意志、この四重の鎖を愈々細心に愈々大膽に我々の演劇の

劇團に巻きつけることである。そして興行師乃至劇場側の罪はプロレタリア演劇運動に何等の同情をも持たないことである。——いやこれは殆んと罪ではあるまい。何となれば、最も我々の演劇に同情を持つ可能性のある築地小劇場ですらも、最近は强硬な小屋代前金制を持ち出し、開演前に拂はなければたとへ客が押しかけて來ても追ひ返すと宣言したから。最後に時代の罪は、一般に演劇といふ藝術形態が映畫のために壓倒されて來たことである。その原因は長くなるから此處では省く。演劇を映畫に負けないやうな魅力あるものにしようといふ努力は例へばスペクタクルの流行といふやうな形で現はれたが、それが單に形式の上での努力であれば、映畫の必然的に持つ低劣な無内容性（その生産に費された大きな資本を回收するために映畫は内容を蹴飛ばして低級な觀衆に全力を傾倒して媚びさるを得ない。）に驅け込む危險をさへ持つて居る。演劇は演劇の持つ强味、即ち映畫よりももつと複雜な内容を言語に依つて表現し得ること、映畫程資本主義的經濟組織の上に立たず、從つてそれ程觀衆に媚びる必要のない事等を足場にすべきである。殊に現在の日本では、悲しむべきことであるが、プロレタリア映畫の生産提供は資本の無い事、大映畫會社の結束した攻勢が小プロダクションの存在を殆んと不可能ならしめてゐること、演劇の場合に更に上塗りした檢閲の酷烈さ等のため、殆んと望み得ない場合に當つては、プロレタリア演劇は優れた内容とそれに適つた形式を獲得することに依つてのみブルジョア映畫の惡影響下から觀衆をさらつてくるべきである。

3、劇場を有する劇團の皆無。

獨逸のピスカトールビューネは劇場を持つてゐた。（この六月につぶれてしまひはしたが。）だが日本のプロレタリア劇團は決して劇場を持つてゐない。ああ！自分の小屋がありさへしたたらなあ！」といふ嘆息は、私達がプロレタリア演劇運動を初めて以來嘆息し續けて來た嘆息である。劇場は劇團の要塞である。就中、公演直前の禁止といふ卑劣な切札が彼等の手中にある現在に於ては。

一つの切り取られた空間。適度に高められた舞台。たつたそれつきりでも私達は滿足するだらう。種々の集合も、血の出るやうな會場費をブル新聞社などに獻上しなくてすむ。

4、專門的（況んや職業的）演劇當事者の僅少。（或ひは皆無。）

、職業的プロレタリア劇團がない以上、どうして職業的プロレタリア演劇當事者があり得よう。（ブルジョア劇團に臨時に雇はれるのは意味が違ふ。）我々には專門的な人間の存在さへ殆んと許されてゐない。作家ならよい作品を書くに從つて食へるやう

になり得るが、我々の俳優はうまくなるに從つて忙がしくなるばかりで愈々食へなくなる。彼は或ひは下飜譯の時間を益々奪はれ、或ひは自由勞働に行く日を奪はれる。稽古に行く電車賃はしかも自辨である。だのに俳優は專門的な訓練を經、俳優になり切らなければ、よい俳優にはなれない。正直な勞働者や農民はまづい俳優を左翼の俳優だからと云つて寬恕しはしない。これは苦しいヂレムマである。

5、非常に重い政治的壓迫。

重い！それは狂氣的に重い！誰も本當とは思へないであらう。

まづ我々の運動は「興行」であると規定される。それは府縣令（東京は警視廳令）で取締られる。だから東京府で無削除で通つた脚本が大阪府では全然不許可になり得る。東京府で或る程度の削除で許可された脚本が三つとも文句なしに不許可になり得る。地方に出掛けるとき我々は腹案に五つ六つの脚本をどれでも出來るやうに準備を整へて行かなければならない。これだけでも不便此の上ないのに、縣令は自由に中央の指令に滲透されるから、旅のために二倍三倍とかさむ費用を丸損させるため提出した脚本全部を不許可にすることさへ出來る。我々は幾度もかかる屈辱を忍ばなければならなかつた。我々は例として東京府の取締規則を見よう。

取締規則の冒頭「總則」の第三條。

「公安風俗又ハ衞生上必要ト認ムルトキハ興行物又ハ興行ニ關シ、取締上必要ナル事項ヲ命ズルコトアルベシ。」

その標準乃至取締の方法は警察官吏の自由な認定にまかされる！

脚本を上演しようとするものは警視廳の檢閲を受けなければならぬ。（第六十六條一項。）許可されない場合は左の通り。

一、勸善懲惡ノ趣旨ニ背戻スルノ虞アリト認ムルトキ。
二、姦惡、卑猥又ハ慘酷ニ渉ルノ虞アリト認ムルトキ。
三、犯罪ノ手段方法ヲ誘致助成スルノ虞アリト認ムルトキ。
四、濫リニ時事ヲ諷シ、又ハ政談ニ紛シキモノト認ムルトキ。
五、國交親善ヲ阻害スルノ虞アリト認ムルトキ。
六、教育上惡影響ヲ及ボス虞アリト認ムルトキ。
七、前各號ノ外公安ヲ害シ、又ハ風俗ヲ紊ス虞アリト認ムルトキ。

何一つ洩れてはゐない！

脚本檢閲のためには警視廳に檢閲係がゐるが、我々の脚本の際には必ず高等係の許可を經させられる！尚一つの脚本の檢閲には約十日を要し、しかもそれを演じる劇場及び日時が確定し

てからでないと受け付けない。この事實は屢々公演直前の禁止となつて現はれる。我々は何度無駄に稽古し、何度無駄に諸般の準備をととのへたことか。

さてかうしてたとへ一旦許可されても第七十五條が待つてゐる。

公安風俗又ハ衞生ノ取締上必要アリト認メルトキハ第六十六條一項ノ許可ヲ取消スコトアルベシ。

更に警視廳の所謂「技藝者」に關する取締規則がある。

本令ニ於テ技藝者ト稱スルハ演劇興行又ハ觀物興行ニ出演シテ技藝ヲ爲スヲ業トスル者ヲ云フ。業トセザル者ト雖モ、興行ニ出演シテ技藝ヲ爲ストキハ第七十九條ノ規定ヲ準用ス。

その第七十九條といふのは、

二、公安ヲ害シ、風俗ヲ亂ス虞アル言辭所作扮裝其他ノ行爲ヲ爲サザルコト。

五、前各號ノ外、所轄警察署ノ命ジタル事項。

前項ノ規定ニ違反シタルトキハ、臨檢警察官吏ニ於テ、其出演ノ禁止、又ハ停止ヲ命ズルコトアルベシ。

かくて或時大阪で、我々は、散々に削除された脚本を貰ひ、且つ、その削除箇所を（その文句のみならず單に箇所の指示すらも）如何なる方法に依つても（單に小さく廊下に張り出すことに依つてすらも）觀客に知らせてはならず、さながら初めからその箇所が作者に依つて全然書かれてゐなかつたかのやうに演ずべしといふ「事項」を命ぜられたことがある。また或る俳優は脚本に「つまづく」と書いてあつたのを「ころんだ」といふかどで長期の拘留に處せられたことがある。

すべての之等に加へるに多額の興行税があり、又、野外劇を禁じる事の出來る警察犯處罰令がある。

現にこんな事が日本で行はれてゐるのを讀者諸君は信じることが出來るだらうか？

6、勞働者、農民自身の行ふ演劇の皆無。（一時的の例外はあるにしても。）

「創造的劇場」を書いたケルジエンツフエはプロレタリア演劇を殆んど勞働者自身の演じる演劇と解してゐる。少くとも彼は職業的乃至專門的演劇當事者を排斥してゐる。これは明かに誤りである。しかし此の事に就いては後で論じよう。兎も角、現在我々は勞働者、農民自身の劇團を一つも持つてゐない。勞働者自身の劇團が出來たやうな話を一二度聞いたことがあつたが、其後發展せずにしまつたやうである。農民の劇團に就いては、飯塚友一郎氏がその著書「農村劇場」の中に報告して居られるやうな、農村の氣風をよくし、お祭りの猥雜さを上品な演

劇に依つて置き換へようとする所の農村劇團は二三存在してゐるらしい。しかし我々のいふ農民の劇場は無論そんなものではない。それは農民を力强い×××要素に迄强めることに役立つものでなければならない。

千田是也の伯林からの報告は云つてゐる。

「——僕はこの勞働者俳優聯盟の Sprech chor の稽古を二三度のぞいて見た。勞働者街の小さな酒場の奥の部屋に、連中は一週に二度づゝ集まつてゐる。指導者はいづれも若い二十二三の人達である。しかし、五十、六十の年寄りの勞働者も來て、若い連中の云ふなりに、大きな聲で朗讀の稽古をやる。ぶきようなお婆さん達が若いものに叱られながら汗を流してやつてゐる。日本では見られない圖だ。大變いゝ事だ。——」

「——このバラライカ・オーケストラは——一九二七年八月二十二日（サツコ・ヴアンセツチの死刑の前夜）赤色救援會（ローテ・ヒルフェ）ノイキヨルン支部主催の出獄者歡迎會の有樣を書きながら千田は報告してゐる——このバラライカ・オーケストラは多分赤色救援會所屬の音樂團であつたと思ふ。さすがに音樂の國だけに勞働者の各團體は大がかりな樂師團を持つてゐる。皆しやれたルバーシカを着込んだ若い勞働者の男女達である。日本でもどうかして勞働者の音樂團が出來たいものだ——」

だが日本にはまだ無い。

四

以上私は現在の日本のプロレタリア演劇運動の特徴を述べた。

かうして特徴を知つて置いたので、我々は今割合に簡單に日本のプロレタリア演劇運動の當面の問題を問題にすることが出來る。

劇團の組織に入る前に、戯曲並びにその演出の形式について。

我々はよき戯曲の中から、上演する時期、場所、對象、上演の目的等に照らして、適當なものを選び出す。

何がよき戯曲であるか？

內容の方面から云へば、正しくプロレタリアの問題を掴み、その「仕事の發達と勝利に助力する」（ルナチャルスキー）ことの出來るものでなければならない。

形式の方面から云へば、確實に內容に適ひ、獨特で且つ大衆的でなければならない。（「形式はその內容に最大限度に適應して、それは最大の表現力を與へ、そしてその作品が當にしてゐる所の讀者（觀客）の範圍に最も强い影響を與へる可能性を保

證しなければならない。」――ルナチャルスキー)

更によい文學についてのルナチャルスキーの次の忠告を附け加へて置く方がいいだらう。

「プレハーノフも亦云つてゐる所の最も重要なる形式的規範――即ち文學は形象の藝術であつて、あらゆる露出しの思想、露出しのプロパガンダのその中への侵入は常に與へられたる作品の失敗を意味する、といふ規範を思ひ起す必要がある。此のプレハーノフ的規範が絶對的なものでないことは云ふを俟たない。明かにこの規範を犯してゐる例へばシチエドリン、ウスペンスキー及びフルマーノフの優れたる作品がある。しかしこのことは美文學的政論的性質の混合型の文學現象がある得ると云ふことを意味する外の何物でもない。全體としてはともかくもこれを警戒しなければならない。勿論輝かしい形象的性質を獲得した政論は、プロパガンダ及び廣い意味での文學の立派な形式である。しかし反對に、純政論的要素によつて滿された藝術的文學は、例令その判斷が如何に輝かしいものであつても、概して讀者を冷却せしめるものである。」

特に現在運動は現實的で鬪爭的で、面白くて、大衆的な戲曲を要求する。

直接のアジ・プロを目的とする移動劇團用戲曲としては、その場合の觀衆であるプロレタリアや農民が最も切實に問題としてゐるものを捕へて問題とした簡單明瞭で且つ面白いものを必要とする。

一方直接的アジ・プロの效果はさ程ないにしても、プロレタリア藝術確立のためにも役立ち得る戲曲もまた必要である。

云はば此の二つの「極」の間に、よき戲曲の種々な種類がある。

演出形式はその戲曲を最も力強く、最も印象的に、最も魅力的に、しかも當の觀衆に適して表現するものでなければならない。ブルジョア演劇、映畫、見世物に於ては、目下無內容な形式主義が氾濫し、かくて想像出來る限りの「根つこのない形式」が生滅してゐる。我々はそれらを正しく批判し、利用しなければならない。

我々は如何にしてよき演出形式を獲得し得るか？

それは他のすべてのプロレタリア藝術の場合と同じである。たゞ、演劇は目の前に特定の觀衆を置き、その觀衆と密接に結びつき、働きかけ、働きかけられつつ、波を高めて行くのだといふ所に相異がある。從つて演劇の場合に於ては、絕えざる實踐と、その效果の嚴密な批判とが他の藝術部內にも增して絕對に不可缺である。

さて、劇團の組織である。

組織は行動の前提だから極めて重要である。

まづ最初にプロレタリア藝術の全部門を結びつけるフェデレエションの組織の問題を述べるべきであるが、これは此處には省く。運動が發展するに從つて數度の組織の變更を重ねて來た統一的なプロレタリア藝術家團體である全日本無産者藝術聯盟（NAPF）が最近最も完全な組織に改められる筈になつてゐるから、就いて見られたい。此處にはただ各專門部每に同く結成された作家團、美術家團等々が一種の協議會で聯絡される聯盟體であるとだけ云つて置かう。劇團は他の部門とくらべてその機能が極めて地域的であり、且つ經濟的條件に依り、又目的に依り、異つた劇團として結成する方が便宜である場合が多いので、一地方に數箇の劇團が並存することがあり得る筈である。

ここに、前述の分類し方では、專門劇團に屬する左翼劇場を單獨劇團の組織の例として引かう。（最近聯盟體の組織が變更すれば當然劇團の組織も變更する。）

左翼劇場は演劇當事者に依つて構成され、技術的な分類に依つて演出、演技、美術、人形、衣裳、小道具、効果、經營宣傳の八班にわかれ、各班は班長を選び、この班長が小委員會を形成して各般の事務を進め計畫を立ててゐたが、後、小委員會は班長でなしに、一般に適當な人が選ばれて構成することになつた。左翼劇場は全日本無産者藝術聯盟東京支部の演劇部であり、演劇部長が支部執行委員會の一員となる。小委員會は必要に應じて召集され、部會は一週一回持たれる。成員はダブつてゐるが別に移動劇場を持つてゐる。（移動劇場に特種の技能を要し、且極めて繁忙であるから、將來當然獨立な劇團となるべきである。）

經營は一人月額十錢の部費を通信費プリント代にあててゐる他は、公演の時の收入と支出とを相殺させるだけで、個人の生活とは關係がない。成員の生活手段は種々ある。學生、學生ではないが學ぶべき暇を持つてゐる者、自由勞働者、會社員、文筆業者、雜誌記者等々。

左翼劇場、及びその前身であるプロレタリア劇場、前衛座、前衛劇場は數度、演劇研究所や短期講習會やを持つた。そこで新しい人が獲得され、または部員が研究した。

更に演劇の効果を一層確實なものとし、公演の可能性を經濟的にも大きくし、觀客を藝術運動乃至實際運動の陣營に送り込む等の目的を果す組織としてドラマ・リーグを持つてゐるが、それはまだ極めて不充分にしか組織されてゐない。

左翼劇場の組織はほぼ右の如くであるが、東京及び地方にある他のプロレタリア劇團のそれも大體同じものであらう。

しかしこれだけのものでは、プロレタリア演劇運動の任務は極めて不充分にしか果されない。

では緊急にどういふ方針が取られなければならないか？

全日本無産者藝術聯盟は一地方に藝術の各部門別に各一つの團體しか認めてゐないが、此の公式主義的な見解はまづ改められなければならない。

先にも云つた通り演劇運動は文學運動などと異り、極めて地域的に限られ、且つ、對象、目的、場所、成員、經濟等の關係上、一地方に數箇の劇團が並存することが望ましいばかりか必要だからである。

まづ、左翼劇場の如き專門劇團を問題としよう。

此の種の劇團の內容、任務は次の如きものであらう。

成員は時間に割合に自由な自由職業者か、自分で金をもうけなくても何とかして食へる人々である。何となれば此の劇團は職業的劇團でないから、働くことに依つて何等の物質的報酬も得られないばかりか、多くの場合電車賃其他の各自負擔となるからである。

すべてのプロレタリア劇團は當然出來るだけ安く、出來るだけいい芝居を、出來るだけ多くの勞働者に見せたいと思ふ。しかしこの種の專門劇團では他に收入の道がないので、勞働者自身の懐にたよらなければならない。所が勞働者は普通三十錢、最高五十錢の觀覽料でなければ、東京で一公演に三百人以上を吸收することは今の所出來ない。從つて上演のための費用は極端に切りつめねばならず、文學等と異つて費用を食ふ物的要素を多分に要する演劇としては効果を多かれ少かれ殺がれることをまぬかれ得ない。

專門的劇團はかういふ缺點を持つてゐる。しかしこの種の劇團は最も組織しやすいので、今迄のプロレタリア劇團は全部これであつたし、また當分、將來もこれが多いであらう。しかしこればかりではならないことは云ふ迄もない。

職業的劇團は、築地小劇場のやうに自分の小屋を持つてゐるか、或ひは興行師乃至劇場がそれを「買ふ」なり「分」で契約するなりしてくれなければならない。（サウエートの諸劇場のやうに政府から多額の補助金を貰つてゐるものも、座員が演劇することに依つて生活してゐる以上、職業劇團に數へていいと思ふ。）

この劇團員は專門劇團員と異り、演劇することに依つて生活し得るのだから、全時間をこの仕事のために投げ込むことが出來、從つていい俳優その他が生れ出るべき筈である。

しかし我々が今現實に職業劇團を組織しようとしても、これは非常に困難なことである。まづ金持をつかまへて劇場を建てて貰ふか、興行價値のある演出者なり俳優なりを仲間に獲得しなければならない。しかしいくら困難でもこの種の劇團を作ることは絕對に必要である。

何となればそれは就中、いい芝居を頻繁に安く提供し得、デ

そとしての大きなセンセイションをも起し得、更に、移動劇團の如き經營最も困難な劇團を補助することが出來る。また移動劇團員の如き最も多方面且つ練達な技能を要するものの養成といふ役目も、かゝる劇團が引き受けて最も有効に達し得る。

この劇團の陷穽は、「專門家」がプロレタリアから離れ、演劇が演劇のものとなるといふ所にうがたれてゐる。遂に解散したメイエルホリド劇場やピスカトールビユーネに（無論解散の原因は多々あつたが）我々はその轍を見るのである。しつかりした指導分子と、堅固な外郭組織とが決して缺けてはならない。

移動劇團にも、寄席廻り小屋掛けなどを主とするものと、爭議團員鼓舞、ロシア革命記念、メーデー記念、革命鬪士追悼、新聞讀者慰安、消費組合員懇親、其他の集會を彩り活氣づけるために出動するのを主とするものとがある。いづれにせよ、日常鬪爭と最も密接に結びついた重要な役目を果すものである。從つてここでは種々な演劇形態が自由に有効に用ゐられなければならない。モメントを巧みに捕へた一幕物、寸劇、レビユウ、活人畫、シユプレッヒ・コール、舞踊等々。更にこれは、音樂家團、映畫團等との協力に依つて、一層効果的に行はれ得るだらう。スペクタクル、幻燈、映畫、鬪爭歌の合唱、詩の朗讀、即席漫畫等々。

更にこの劇團は早急の出動に應じ得るため、多數のレパートリーを常に用意し、しかも觀衆の動きを察して即座にイムプロビゼーションを行ひ得る程に熟練してゐなければならない。費用の關係上、出動人員は少なければ少い程いいので、一人で種々の機能を兼ねなければならない。サウエートの「菜ツ葉服劇團」はこの點極めて我々の學ぶべき多くのものを持つてゐると思ふ。舞台裝置の如きも輕便で用途廣く、組立式に使はれてゐなければならない「菜ツ葉服劇團」では、裝置、照明、衣裳等一切の道具を各人の受持を定めて迅速にブラさげて出掛け、擴げ、運搬し、片附け、ブラさげて歸れるやうになつてゐるといふ。練兵場に行つて、軍隊の野營の練習を見ることは有効である。

私はここに左翼劇場所屬移動劇場の無數の活動のうち、一つの出動記録を紹介しよう。

（「戰旗」七月號、西澤隆二記）

「東海堂爭議應援」

二十四日、夜、東海堂爭議應援に出動。月島の合宿には百五十名餘りの爭議團員たちが集まつてゐた。廊下を中に狹んで向ひ合つた六疊間の一方を舞台にして、一方を觀客席にして背後に黒幕を張つて「炭坑夫」を上演した。セリフを言つてゐるすぐ足元に小店員諸君が集まつて、こつちの顏を見上げてゐる。隣室との境の押入れの襖をはずして、そこにも澤山顏と顏が

なり合つてゐる。どんな劇場でもこれ以上滿員になつたことはないに違ひない。一つのセリフが一つ一つみんなの胸にぶつかつて反響して來る。舞台が狹くて動きにくい事なんぞ忘れ、ブルゲルの最後のセリフの時には天井から赤いスポットを入れた。詩の朗讀を一つと合唱を三つした。歸りに外へ出ると、窓から首を出した小僧さんたちが、もう覺えてしまつた鬪爭歌を口々に歌ひながら元氣よく手を振り上げてさよならをした。」

移動劇團の活動は野外劇の自由を剝奪されてゐるために隨分と妨げられてゐる。我々は中世紀の車輪舞台や、宿屋の中庭劇場や、廣場の芝居や、行進劇や、咽喉から手の出さうな演劇形態を知つてゐる。更にサウエートの赤廣場に於ける革命記念の有名な大野外劇や、屢々行はれる街頭劇のことを聞いてゐる。

野外劇の自由を奪還しなければならぬ！

移動劇團は勞働者の中に、勞働者自身の劇團を芽生えさせるための刺激となり得、またそれを組織し、指導する役目をつとめることが出來る。

必要であるが然し日本には一つもない勞働者劇團を獨逸やサウエートは澤山に持つてゐる。

サウエートのそれについて、次のやうな報告がある。（「勞農ロシアの倶樂部演劇其の他」杉本良吉。「戰旗」十月）

「——勞働者倶樂部がサウエート聯邦の文化生活の中で可成り大きな役割を果してゐることは云ふ迄もない。倶樂部はコムミユニズムの工場であり、勞働者を鍛へ上げる鍛冶場であると同時に、彼等の休息の場所である。最近に於ける勞働者倶樂部の發達は目覺ましく、日一日と新たなる勞農大衆を獲得しつゝある。倶樂部の總數、五萬五千に及び、二百萬人の會員を擁してゐる。更にその外に、三萬を越える赤色文化、教育施設がある。そして此等のすべてが、種々の獨立部門、例へば政治、藝術、科學等々に別れ、その數七萬五千、その團體に屬するもの百五十萬、各自活潑な運動を遂行してゐる。その中の藝術部門に屬する演劇方面に目を通して見ても、勞働者のアマチユア俳優が約二十萬、一年の觀客の總數は一億を缺けないと云ふ莫大な數字を示してゐる。しかしこの勇敢な發達を遂げつゝある倶樂部劇も、それ自體の中に色々の缺點を含んでゐた。その最も大きなものは在來の倶樂部演劇部が素人芝居の領域を一歩も踏み出して居なかつたことである。その爲にかうした幼稚な倶樂部演劇を改良しなければならないといふ問題は最近に於ける文化建設の領域の中心問題をなして居た。その結果として、一九二六年の暮に至つて、人民教化委員會の努力に依り『職業倶樂部演劇工場』がモスクヴアに生れた。サウエート・ロシア最初の職業的な倶樂部演劇團體である。『職業倶樂部演劇工場』の使命は云ふ迄もなく、倶樂部演劇の技術を練る鍛冶場と成ることで

あり、又今迄の經驗に依つて聚集された知識を實行に移し、新しい形式の開花の爲に努力する事である。この工場の仕事は基本的に次の二つに別れてゐる。先づ第一に倶樂部演劇の上演、次に演劇文化より一層倶樂部演劇に接近するための理論的研究。『工場』は單にモスクヴアのみでなく、全露の各倶樂部その他のための上演を準備してゐる。そして廣い意味に於ける演劇實驗として、或ひは種々の戲曲の研究、或ひは上演プランの研究、或はその戲曲に關聯した文獻の研究等をなすと共に、一方に於いては或る勞働者倶樂部と協力して芝居を纏め上げることに努力する。獲得せられた理論は直ちに實際の仕事に移され、さうすることに依つて勞働者觀客への眞實の道を切り開いてゐる。」

農民劇場については我々はまだ殆んど端緒さへ持つてゐない。しかし最近日常鬪爭を通して頓に×××になつてきた農民が鬪爭の武器として演劇をも亦要求するであらうことは明かである。一方、都會人程多くの娛樂機關を持たない農民は我々が積極的に働きかけないならば、益々反動的地方廻劇團や映畫等に蠶食されるであらう。農民は都會のプロレタリアと異つて從來種々の祭りや盆踊などで演劇に近いものを演じる習慣を持つてゐる。獻身的な指導者があれば農民自身のうちから左翼的な劇團を作り出すことが出來るだらう。無論それは從來屢々あつたやうな、都會藝術のアンチテーゼとしての農民藝術といふ粗雜な考への上に企てられた農民演劇であつてはならず、少數のデイレツタントの周圍に集まつた孤立的な、ブルジヨア演劇の眞似事であつてもならない。（例へば嘗て福岡縣浮羽郡山春村にあつた藥會のやうな。）

我々の農民劇團は農村の特種な狀勢に應じて特種な内容と形式の演劇を演じ、特種な方法で農民大衆にそれを持ち込むであらう。しかしそれはまた同時にブルジヨア政府が熱心に設けつつある青年團、處女會、在鄕軍人團、何々修養會等の×××××農民を自由にし、組合、黨支部への組織のための媒介體として役立たなければならない。

五

プロレタリア演劇が遂に勞働者農民自身の演劇として、完成したプロレタリア演劇の花を開くのは、我々が政治的に勝利を占めた曉に於いてゞある。

プロレタリア演劇は、かくて解放戰線の一翼である。

純粹に演劇の範圍に於いてすら、我々の演劇は上述の通りの檢閲制度に依つて窒息させられてゐる。

我々は檢閲制度改正の運動を積極的に支持し、大衆の威力に依つて演劇するための合法性を我々のものとしなければならない。

――一八・一一――

安達謙藏論

馬場恒吾

既成政黨と無産政黨とを問はず、苟くも政黨人となつてゐるものには共通の煩悶がある。それは政黨資金を如何にして作るかと云ふ事である。政治運動には金を必要とする。其金の拵へ方が公明正大でなければ、其政黨人は沒落する。而して公明正大なる金の出所がさう澤山あるものでない。茲に政黨人の煩悶が始まる。

民政黨總務安達謙藏氏は代表的な政黨人である。彼れが政治運動に參加して四十年になる。然るに彼れは今尙政黨人として沒落しないのみならず、一度は內閣に列し、今後も益々發展するらしい。淸貧に安んずる事は、彼れでなくしても外にも出來る人はある。淸貧にして、而して、尙能く活潑な政治的活動を續け得る者は、現代の社會狀態に於て、珍とするに足る。其所には既成政黨の黨人に採つてのみならず、無產政黨の陣營に於ても、參考とすべきものがある。彼れの本領は何處にあらうか。

政友會を脫黨した後の小泉策太郞氏が一日安達を訪問した。小泉を見送つた後で、彼れは云つた。

『小泉は帷幄の中に謀をめぐらす人物だ。それが大臣にならうと思つたのが間違の元だ。飽くまでも帷幄の臣となつて居ればよいのに』但し安達は自分は飽くまで帷幄の臣として働らくとは云はなかつた。現に彼れは遞信大臣にもなつた。それ故に只の策士ではない。だが世間は彼れを策士であるかの如く云ふ。彼れは果して策士であらうか。

私の見る範圍に於て、彼れは決して策士でない。彼れを策士と云ふのは世間が評價を間違つてゐる。と云つて了へばそれは單なる私の獨斷に過ぎない。私は事實に就いて研究し度いと思

ふ。

蓋し現代の政治家の中で、安達謙藏氏ほど地味な政治家はあるまい。彼れの友人仲間ですら、安達は陰性な政治家だと云ふ。彼れが雄辯であるや否やは私は知らない。雄辯であるにしても彼れは滅多に演說しない。大抵の場合に彼れは樂屋で世話を燒く役に回はる。彼れに高遠な理想があるや否やをも、私は知らない。例へ高遠な理想があるにしても、彼れがそれを大聲疾呼しない。彼れを現代の他の政治家に比較すれば、彼れは川中の如く剽輕でなく、床次の如くヌーボー式に吞氣でなく、若槻の如く圓轉滑脫でなく、濱口の如く莊重でなく、江木の如く理屈屋でなく、伊澤の如く機略縱橫でなく、何が果して彼れの本領であるか、それが發見出來ないほど、彼れは多奇なき政治家である。併し私は此多奇なき政治家に深き興味を感じた。其平凡なる外皮の下に刻苦精勵の跡を見出すからである。

安達が策士だと云はれる原因には彼れの秘密主義がある。其秘密主義は現に故加藤高明伯に依つて實證された。大正三年に大隈內閣の時に、加藤は外務大臣として、安達を外務省參政官にした。外國語に堪能ならず、專門の外交通でもない彼れを何故外務省參政官にしたかと云ふ質問に對して加藤は云つた。

—外の省と違つて、外務省には國家の爲めに絕對に守らなければならぬ秘密がある。この秘密を守ると云ふ事が、政黨人としては中々出來惡い。秘密の外交文書だと知つてゐても、政黨人と云ふものはツイロを滑らす事がある。此秘密を守る點に於て絕對に信頼出來るのは安達だ。だから政黨人の中から外務省の參政官にするのは安達以外にない」

之を見ても、安達に秘密は守ると云ふ性格のあることは事實だ。それ故に彼れは常に秘密を守らなければならぬ地位に廻はされる。總選擧に際して、彼れは屢々選擧の總元締の役を勤める。黨の公認候補を決め、運動費の割當てをする。かうした場合には公認して貰はうと思ふ候補者が自己推薦に來て、競爭候補の惡口を云ふ。それが皆同じ黨派の仲間同志の爭いである。その場合の談話を、一々蓄音機的に開放して喋つた日には、黨の中は蜂の巢を突つゝいた如くなつて一日も治まるものでない。實際安達に面會して話して見ると、其態度は打とけて開放的に見へるが、秘密な問題に突き當ると、困つたと云ふ顏をして默り込んでしまう。彼れが秘密を守る術を知つてゐる事は事實だ。

今迄の彼れの行動が策士的であつた事も爭はれない。政黨の方向を決するやうな高等政策には彼れの劃策する所が多い。其當時は誰れも知らなかつたが、憲政會苦節八九年目の頃、大正

十二年震災後に山本内閣が成立したとき、彼れは政友會の岡崎邦輔氏と四五回秘密に會見してゐる。それは憲政會に屬してゐた岡崎久次郎氏宅で行はれたものである。其前に加藤友三郎内閣、今度は山本權兵衛内閣と云ふ如き、政黨を無視してゐる内閣が屢々出來たが爲めに、憲政會も政友會も共に氣を腐らしてゐたのである。安達と岡崎とは、立憲政治を確立する爲めに、政黨内閣の出來るやうに努力する事を話した。そして愈々其努力が成功する時の事を想像して、岡崎が後繼内閣の話しをすると、安達は憲政會の加藤總裁は永く野に在つて苦しんでゐるのだから、今度は加藤が内閣を作る事に贊成して呉れと云つて居る。岡崎は勿論ハッキリした返事をして居らぬが、安達が云ひ惡い所を我慢して、加藤の爲めに衷情を述べてゐる處は、此會見の談話筆記を讀むものをして、安達が、如何に加藤の爲めに忠實に働いてゐたかを思はしめる。

安達、岡崎の會合は山本内閣が虎の門事件で倒れ、淸浦内閣が成立した後迄續いて、最後の會合には、憲政會からは安達の外に加藤、若槻、濱口、政友會からは高橋是淸、横田千之助、山本条太郎が參加してゐる。かうして安達は一方に岡崎を通して政友會との連結を計ると同時に、之れと平行して、彼れは麻布の小泉策太郎氏宅に於て、屢ゝ横田千之助と會合して政黨内閣樹立の相談を進めてゐた。此方の會見は後に護憲三派の連盟に發展して、芝紅葉館に於ける大正十三年一月二十日三派有志の申合せになつた。其申合せの正文は

一、政黨内閣制を確立すること
二、特權勢力の專横を阻止すること
三、此目的を貫徹する爲めに將來も亦一致の行動を執ること
四、此趣旨に則り淸浦内閣を非認すること

此會合には政友會の横田、岡崎、小川、小泉、憲政會の若槻、濱口、安達、革新俱樂部の秋田、古島などが出席したのである。

若槻内閣の最後の幕である所の昭和二年春の議會は、政界突發事件に富んでゐた。最初に世人を驚かしたのは若槻首相が行つた三黨首妥協であつた。安達も之には驚いたと云はれた。併し安達が之を知らなかつたか否かは疑問である。私は寧ろ、安達は之を知つたが、併し若槻の意志の動かすべからざるものがあつたが故に、遺憾ながら之に追隨して行つたと見る方が妥當だと信ずる。

何んな事情があつたにしても、三黨首妥協は政黨としては失敗であつた。固より若槻には若槻丈けの理屈は備はつてゐる。昭和新政の初めに於て豫算を不成立にさすのは遺憾である。出來るならば豫算を成立せしめたい、それが黨本位でなく、國家

本位に考へて、首相として最善の途を取つたものだと主張する。併し結局は議會を解散するか、否かの問題が此主張の根柢に横はつてゐる。其當時は元老西園寺公すら寧ろ解散に贊成であつた。大正天皇御大喪を待つ時期とは云へ、宮中と府中とは別だ。國政を進行せしめる爲めに、議會を解散する必要があらば、解散して差支はないと云ふ意見であつた。併し若槻は解散の代りに三黨首妥協を行つた。

茲に於て憲政會は内閣を取つてゐる時機を利用して、議會を解散し、そして政局を安定せしめると云ふ希望を抛たなければならなかつた。飽くまでも黨人である所の安達は政局を安定せしめる策として、別の方法を考へねばならなかつた。即ち彼れは當時の第三黨であつた所の床次氏の政友本黨との接近を考へた。それは已に故人になつた加藤高明伯の意志を繼承する意味も加つたが、彼れは本黨と恒久的な聯盟を作ることを必要だと考へた。そして其聯盟を作る爲めに、本黨側の有力者たる榊田清兵衛氏と秘密に會合する必要を認め、其會合の場所を人に知れない所に求める事に苦心した。そして選ばれた場所は出入頻繁な駿河台の金杉病院であつた。大隈は市に隱れると云ふ古智を利用したのである。こゝで安達は、初めには榊田、終には床次とも會見して、憲本聯盟を作り上げた。それが瓶中の水の如く世間に發表されたとき、世間が驚いたと同時に、此芝居に取り殘された政友會は三黨首妥協に一杯喰はされた如く感じたのである。

これ等の事實を並べて見れば、安達は政界の大策士であるかの如く見える。然るにそれは安達を遠方から眺めてゐるものゝ批評であつて、彼れと共同して政界を馳驅してゐるものは、決して安達を策士だとは云はぬ。其云ふ所に依れば安達は策士たるには餘りに頑固で、餘りに正直過ぎる。寧ろ愚直一遍の男だと批評する。

革新俱樂部の犬養毅氏が政友會に入黨して内閣を辭し、安達が其後任として遞信大臣となつたとき、彼れは新聞記者の宴會に招かれて演説した事がある、曰く
『政友會や革新俱樂部は色々の策を施す。之に對して憲政會は餘りに無策だと云ふ批評を受けた。併し吾々は無策を大策とする。それが吾々の信條である』

策士としての彼れに對する批評はすべて彼れが三十九歲にして初めて代議士となつて、中央政界に乘り出して來てからのことである。然るに彼れの人間としての眞髓は其以前に彼れがまだ無名の政治家として東奔西走してゐた間に築かれてゐる。それには一應彼れの前半生を見る必要がある。

彼れが公人生活に足を踏み入れたのは彼れが二十六歳の時大隈の條約改正に反對して起つた時である。起つと云つても、彼れは只彼れの先輩佐々友房の使者として、東京に於ける條約改正反對の氣勢を熊本に傳へるべく、郷里に歸つた迄である。併し彼れは佐々の意を承けて、九州全體に條約反對の氣勢を煽つた。其結果として九州の各郡市、同日同時刻に條約改正反對の大會を開き、集る者八萬四千人、安達は熊本の大會で野天演説をやつた。其餘波が福岡の玄洋社から來島恒喜が上京して、大隈に爆彈を投じ、來島自身は其場で自殺すると云ふ慘劇に迄發展した。

其頃の安達は對外硬の思想に凝結してゐた。條約改正が中止になると、今度は日本は條約上の權利を徹底的に主張せよと云ふ所の、條約勵行の運動をした。それは固より佐々友房の指導に依つた事であらうが同時に彼れは同じく熊本人たる井上毅に私淑してゐた。井上は面白い議論を持つてゐた。

『日本は太平洋に向いて寢轉んでゐる。こいつは一つ寢返りをして、亞細亞大陸の方へ向かなければならぬ』

そして井上は西伯利に於て何か爲さなければならぬと云ふので、其頃の金三百圓を安達に與へて、西伯利に渡らす事にした。安達は西伯利に渡る積りで準備をしてゐたが其內に朝鮮の形勢が惡化して來た。當時は袁世凱の勢力が朝鮮の上下を壓して、日本の勢力は見る影もなかつた。日本の朝にあつた伊藤博文、井上馨は極端な軟弱論者で、朝鮮は濟度すべからず、あきらめて放棄すべしと云ふ意向であつた。安達はさうした腑甲斐なき意見に反對して、朝鮮を二分し、半分は支那に與へ、半分は日本が取ると云ふ意見を立てた。井上毅からは西伯利に行く爲めに旅費を貰つたけれども、西伯利よりは朝鮮の方が風雲急である。西伯利行きは熄めて朝鮮に行き度いと思つて、其頃病中で、世間と遠ざかつてゐた井上に其事情を話した。そして井上の諒解を得て佐々と二人で朝鮮に行つた。それは日清戰爭の前年即ち明治廿六年安達が三十歳の時であつた。彼れは釜山で朝鮮時報と云ふ新聞を出したのである。

日清戰爭は日本と支那の間の朝鮮の爭奪戰であつた。然るに其當時の日本の朝鮮政策と云ふものは全くなつてゐなかつた。當時の政府は伊藤博文が總理で陸奥宗光が外務大臣であつた。陸奥は朝鮮を何時迄も獨立國にするか、保護國にするか、或は中立國にするかに關して、根本方針を決定する事を閣議に求めた。然るに閣議はさうした重大問題を決する信念がなかつた。先づ當分間に合せの政策でやつて行くと云ふ方針位しか出て來なかつた。それ故に愈々戰爭が始まつた後に、公使として朝鮮

に乘り込んだ井上馨も其方針が一定しなかつた。初めは强制的に改革を行はしめたかと思へば、後には反對に朝鮮宮庭の意を迎へるのに汲々たる有樣であつた。日清戰爭で日本は勝つた。併し三國干涉で遼東半島を還附すると同時に朝鮮は極端に日本を輕蔑し出した。朝鮮と日本の關する限り、日清戰爭の效果は何處にあるかを疑はしめた。

　三浦梧樓子が朝鮮公使となつて行く時、彼れは政府に向つて、朝鮮を獨立さすか、併合するか、或は日露共同管理にするか、其根本方針を決めて吳れと請求した。政府はそれに答へなかつた。三浦は政府が無方針である以上は、自分は臨機應變に自由手腕を揮ふと決心した。果して彼れは王妃暗殺と云ふ極端な自由手腕を揮つたのである。安達は其事件に卷き込まれてゐる。

　安達は三浦公使が京城に來たとき、漢城日報を經營して京城に居た。その前に戰爭中に井上馨が公使となつて來たとき、彼れは井上の下に漢城日報と云ふ朝鮮字の新聞を創刊したのである。井上の後に來た三浦とは、安達は初めから懇意であつた。前に安達が條約改正問題で騷いでゐた頃、三浦とは屢々會見してゐる。三浦も條約改正問題に反對であつて、明治天皇に拜謁して反對の上奏文を捧呈した。其時明治天皇が

『これは見ておくぞ』

　と仰せられたと云ふので、三浦は非常に喜んでゐた。かうした關係で、三浦が朝鮮公使になつて來た初めから、三浦とは肝膽相許してゐた。三浦は朝鮮の禍根が王妃閔氏の權謀術數にあることを見て、王妃を暗殺して其禍根を除かん事を企てた。それには大院君を擁立して宮中に乘り込ましめ、其騷ぎに乘じて此目的を達せんとした。そして安達に相談して之に必要なる壯士を集めしめんとした。安達は澤山の壯士ならば鄕里熊本から電報で呼び寄せんと云つたけれども、其暇がないから、京城に居る安達の部下を集めしめた。後に王妃事件で捕縛された四十八人の中に、熊本縣人二十二人、漢城日報で安達と起居を共にしたものが十人居るのを見ても、此事件の實行には、安達が重要な役目を勤めた事が判る。明治廿八年十月八日午前三時に大院君は日本人が訓練したる朝鮮兵や日本人有志に擁せられて宮城に入つた。其混雜の際に閔王妃は殺害せられた。三浦公使は召還され、小村壽太郎が公使になり、此事件に關係のあつた日本人は悉く退去を命ぜられた。退去と云つても實は仁川から御用船に押込められ、宇品に到着すると直ちに監獄に入れられたのである。安達も退去を命ぜられた一人であるが、彼れは漢城日報を潰してはならぬと云ふ事を理由にして、小村公使に談判

し、退去命令を発して貰ふ事にした。小村は一時はそれを承諾してゐたが、後に突然又退去命令を出したのである。それ故に彼れ一人は後れて監獄に入つたが、獄中生活八十日、三浦公使以下皆無罪になつた。

玆に王妃暗殺の計畫あり、宮中進入の事實あり、王妃殺害の結果があつて、何故に皆んな無罪になつたかゞ問題とせられた。判決文を見ると、王妃は殺害されたが、被告の誰れが手を下したか判然しない。それ故有罪の判決を下す譯に行かなかつたやうである。後に其時の下手人は朝鮮の訓練隊第一大隊長李周會と其部下と云ふ事になつた。安達は李周會は偉い男だと感心してゐる。

王妃事件と其れに關聯しての獄中生活は安達の生涯の一轉機を作つた如く見へる。一轉機と云ふよりは寧ろ彼れの性格が其間に作られたと云ふ方が妥當であらう。今日醜聞紛々たる政界に立つた安達は金錢上の批難を受けない。それには獄中の經驗が少なからず原因をしてゐる。其經驗と云ふのはかうである。

京城に居る日本人が退去を命ぜられた時、公使館書記官杉村濬は一人前二百圓宛の旅費を出す事にして、それを纏めて安達に渡した。安達は悉く之を分配して、自分は一文も取らなかつた。と云ふのは、安達自身も旅費を貰つたのであるけれども、前に述べた如く、彼れは一度は京城に踏み止まるやうに、小村公使と妥協をした。それ故に、自分の分の二百圓は杉村に返へして置いた。後に廣島の裁判所で、杉村が此金を出した事を喋つた爲めに、金の行衛が精密に調べられた。そして杉村の出したと云ふ金額と、安達から貰つたと云ふ金額が毫厘の差もなく合致したので、安達の潔癖が證據立てられたのである。

彼れ自身の經驗が彼れ自身の教訓になつた。彼れは常に云ふ。政治家は無理をしてはいけない。無理をすると、金の事で躓くと。それ故に彼れは小心翼々として金の事で躓かないやうにする。政治に奔走すること四十年、彼れが今尚政治的生命があるのは此用意があるからであらう。

併し現代の政治は金を要する政治である。だから金の事で苦惱はないかと聞けば、安達は云ふ。苦惱はない。貧乏を苦惱だと思へば苦惱だけれども、これが當り前だと思へば、別に苦惱でない。無いものは無いのだ。それに一生懸命に活動してゐれば、無から有が生れる。要る丈けの金はどうにか、かうにか出來るものだと、大悟徹底してゐる。

だから外部からは陰氣な政治家と見へる彼れが、實際は樂天家である。彼れは自分の生涯を顧みて、

『自分には苦惱時代と云ふのはなかつた。人間が一番苦しいと

思ふのは矢張家族の誰れかゞ病氣になるとか何んとか云ふ事である。政治は行くべき道を行つて居ればよい。憲政會の苦節十年だなんて云ふけれども、何の事はないものだ』

政治は亢奮でなく、焦燥でなく、只勤勉に取つて行くべき實務であると云ふのが彼れの信條である。

近頃民政黨を脫して他の黨派に走るものは判で押したやうに、民政黨は人情味がない。冷淡であると云ふ。それは事實の一端を漏らしたものと云へやう。併し安達に云はしめると、政治は人情で繫がる親分子分の仕事でなく、志を同ふするもの丶共同働作であると言ふであらう。

政友本黨から民政黨と渡り步いた或政治家は却つて感心して云ふ。貧乏世帶を張る事になると憲政會系は節制が行き屆いたものだ。一寸飯を食いに行くと云ふとき、政友會であつたならば待合に行く、藝妓を呼ぶ。金が掛る。憲政會系になると、眞逆に牛肉屋とは云はないが大抵西洋料理で濟ます。之を人情味が乏しいと云へば云へるであらうと。

酒池肉林の人情味に乏しき事を以て、安達を冷酷と云へば云へるであらう。併し彼れとても人情を解しない男でない。朝鮮から退去を命ぜられた時、彼れは新婚の妻と共に仁川から旭丸に乘つて釜山に到着、其所で記念の爲めに夫婦して採つた寫眞が先頃の『朝日』に出た。釜山では鄕里から來た人に後事萬端を依賴して、夫婦は同じ船で馬關に向つた。船が馬關に到着すると、十數名の警官が來て、彼れに手錠をはめて馬關に上陸せしめた。妻君は甲板の上で彼れを見送つて、熊本に歸つたのである。

其夜彼れは監獄に入れられたが、疲れてゐたのでグツスリ眠込んだ。夜半に小兒の泣き聲でフト目を醒ました。監獄に小兒の泣き聲は不思議だと思つて耳を澄ますと、隣りの室に居る女囚の子が、乳を求めて泣くのであつた。母親が乳を飮ましながら、しきりに寢かし付けんとする聲が聞へる。秋の夜の冴へ切つた月が獄屋の窓から見へた。安達には其時まだ子供はなかつた。併し此時ばかりは人生の悲哀に打たれて、我を忘れる思いをしたと云つて居る。

廣島の監獄に移された時、男囚を入れる監房が滿員で、彼れは女囚監に入れられた。其所でも隣室に赤子を連れた女囚が居て、彼れは每夜小兒の泣き聲に目を醒ました。彼れは之を獄中の女難と稱してゐるが、實はかうした人生の悲哀に對しては深刻に同情する

安達自身は先年十八かになつた娘を失つた事がある。彼れは思出す度に淚が出る。それ故に夫人と申合せを作つて、以後は

娘のことはお互に決して口に出すまいと云ふ事にした。そして漸く涙の出るのを防いだ。

三派の申合せ、政友本黨との申合せよりは、此方が遙かに彼れの本領を發揮してゐる。馬關や廣島の獄中の女難を今に至るまで記憶してゐる彼の心が讀める。

彼れは一つの人生觀を有つて居る。彼れがまだ靑年で郷里の熊本に居つたとき、友枝庄藏と云ふ人に漢學を敎はつた。此人は朱子學の大家であるにも關らず、母親に孝行を盡くす爲めに、天下の志を捨て、漢學の塾を開いてゐたのである。安達は其所で漢學を學ぶ内に、王陽明の學流に入つて、知行合一を志すやうになつた。知つては必ず行ふ。實行出來もしないことを大言壯語することは彼れの主義でない。此信念が彼の性格を築き上げてゐるとして見れば、彼れの政界に於ける行動が一々成程と了解される。彼れの政治的行動は花々しくない。彼れは只實行出來る範圍内の事を一歩々々實行して行く。それが彼れをして小さく郷黨に固まる人物かの如く見へしめる。或は彼をして陰險な策士であるかの如く見へしめる。併し實際は彼れは只兀々として小石を積む如く、勉强してゐるのみだ。成功して笑ひもせず、失敗して悲しみとせず、平々淡々とした毎日の事務として政治に從事する。

其實例を云へば有名である所の彼の閻魔帳である。彼れは二册の帳面を何日も離さずに持つゐる。一册には各府縣郡市町村の有力なる黨員を類別的に記入して居る。代議士、府縣會議員、市町村會議員の候補者が此中から出て來る。此帳面で彼れは選擧の神樣となつてゐるが、種を明かせば克明に一人々々と知り合ひになつて、それを集積した政治的勢力に過ぎない。今一つの手帖には數多き來客の要談の手帳である。何日誰れが何と云つて來たと、記錄されてゐる。

所謂彼れの政治的手腕とはかうして兀々として勉强する所にある。其手腕の出來たのは蓋し彼れが國權黨時代の訓練に依るものであらう。廣島の監獄を出でて後七年間、彼れは佐々友房が率ゆる熊本の國權黨の常任幹事として働いた。佐々は大まかの人であつたが爲めに、熊本は安達が一人で切り廻はした。まだ三十代の彼れは、全責任を負つて、國權黨の勢力を張つて行く。其當時彼れは月に貳拾圓足らずの手當を取つてゐたが、其間に彼れ自身の政黨人としての素質は出來上つた。彼れは金を有たない。併し無から有を生ぜしめると云ふ自信を得た彼れは、最早金の事には苦勞をしなかつた。これぞ今日の無産政黨に對しても一つの示唆である。

熊本の地方政治家たること七年、それから代議士となつて、

彼れは帝國黨、大同俱樂部、中央俱樂部と稱したる官僚黨に屬した。彼れの先輩には佐々友房、大浦兼武子、桂太郎公が居つた。それが今日でも彼れが官僚的だと云はれる所以である。成程彼れは官僚政治家と事を共にして來た。併し彼れ自身の爲た仕事は純政黨人としてする仕事以外に何物もなかつた。それ故に、桂が沒後、加藤高明の下に働らくやうになつた後の彼れは、如何なる政黨人よりも政黨人らしかつた。

今日迄の彼れは多分に帷幄の中に働いた。併し將來何日までも彼れは帷幄の臣であらうか。必ずしもさうであるまい。今日民政黨と云へば誰れでも先づ安達を連想する。それは彼れが鬪志滿腹の男であるからだ。民政黨殊に憲政會系の政治家は何れも上品な紳士である代りに、鬪志滿腹の氣風が少ない。若槻、濱口が立憲的な政治家であることに何人も異論を挿まないであらう、併し彼等が立憲的なれば、立憲的なる丈け、非立憲な爭をば長所としない。安達になれば、立憲的な爭をもする代りに非立憲な爭に面しても平氣であらう。そして日本の立憲政治は屢々足を滑らして非立憲政治になるが故に、彼れの鬪志はまだ大に用ゆべき時がある。

例へば、若槻が三黨首妥協を行つた時、之を最も遺憾としたのは安達であらう。吾々が政府を取つてゐる時に議會を解散せずに、何日解散すると叫んだ。併し總理大臣に鬪う意志がなくなつた時は、外の大臣がいくら踏ん張つても、どうにもこうにもしやうがないものだと長嘆息した。

若槻は國家を考へ、安達は黨派を考へたと云へる。併し安達に取つては、政治は鬪爭である。鬪爭は黨派に依つて行ふ。だから黨派を考へずして、政治は考へられないと云ふ理論が立つ。尤も彼れは理論家でないから、かうした理論は考へずに、或は何事をも考へずに、只それを實行して行く。只鬪ふ興味の爲めに鬪ふかの如く鬪つて行く。彼れの鬪志は燃へてゐる。それは空を赤くする山火事の如く燃へないで、地の下を這ふ泥炭の火事の如く燃へる。花々しくはないが、最後の勝利は屢々かうした流儀の人に依つて握られる。

經濟時評

明年度豫算案を評す

牧野輝智

十月末三回に亘つて開かれた豫算閣議にて昭和四年度の豫算案は大體の決定を見るに至つた。其の決定による一般會計の豫算は歲入歲出各十七億五千二百萬圓である。是を本年度の實行豫算十七億九百萬圓に比較すると四千三百萬圓の增加であるが、議會解散のため不成立となつた昭和三年度の豫算案十七億七千六百萬圓に比較すれば二千百六十萬圓の減少である。田中首相が明年度豫算は引締つた豫算だと稱するのは此の點を誇張したのであらう。明年度豫算の大綱を數字にて示すと次の如くである。

歲　入（單位千圓）

	昭和四年度豫算	昭和三年度實行豫算
一、租　税	八九二、一二四	九〇一、四七六
一、税外の經常收入	六〇六、九六九	五八二、八八九
經常部計	一、四九九、〇九三	一、四八四、三六五
一、臨時の普通歲入	八〇、六八九	四五、一八四
一、公債金	九一、二〇一	六四、〇〇〇
一、剩餘金繰入	八一、五二一	一一五、五七六
臨時部計	二五三、四一一	二二四、七六〇
歲入合計	一、七五二、五〇四	一、七〇九、一二六

歲　出（單位千圓）

	昭和四年度豫算	昭和三年度實行豫算
一、經常部	一、二三〇、六七三	一、一九九、九八六
一、臨時部	五二一、八三〇	五〇九、一三九
歲出合計	一、七五二、五〇四	一、七〇九、一二六

各省別歲出概算表

所管別	經常部	臨時部	計
皇室費	四、五〇〇千円	—千円	四、五〇〇千円
外務省	一六、五三九	五、一七六	二一、七一六

內務省	四七、五一九	一七一、四二八	二一八、九四七
大藏省	三三六、九五三	四九、五五六	三八六、五一〇
陸軍省	一八〇、八九〇	五一、一八七	二三二、〇七七
海軍省	一四九、七七一	一一八、二八九	二六八、〇六〇
司法省	三五、二五三	一、八六〇	三七、一一四
文部省	一二三、六六四	一九、六三一	一四三、二九六
農林省	三一、四四二	三一、六六八	六三、一一〇
商工省	五、六九四	七、三二〇	一三、〇一五
遞信省	二九七、四九九	六五、七〇九	三六三、二〇九
拓殖省	九四五	—	九四五
計	一、二三〇、六七三	五二一、八三〇	一、七五二、五〇四

明年度豫算に於て容認した新規事業費は約一億一千萬圓、是に對する財源としては各省の整理が僅に六百萬圓程度に過ぎなかつたため、剩餘金の繰入れ公債金の增加等を以て歲計の汁褄を合せてゐるのである。

以上は明年度豫算の大綱であるが、之に對し私の所見を述ぶれば、第一に感ずることは歲出の總額が如何にも多すぎるといふことである。田中首相は『明年度の豫算は引締つた遣方で行く。うどんの延びたやうなのはいけない。此の際引締むるのは將來大に伸びんが爲である』と述べてゐるが、此の趣旨は私の大に共鳴する所であるけれども、出來上つた實際の豫算案にはどこにも引締つたと認む可き點がない。うどんの延びたやうな豫算である。それは豫算の總額が我財政の堪へ得ない程巨額の數字であることに依り、總括的の結論を下すことが出來るのである。十七億五千萬圓といへば、我國の豫算に於て本豫算として嘗つてない巨額の豫算である。放漫藏相として財界の信用を失つた若槻內閣の藏相片岡君が、昨年一月議會に提出した本豫算でさえ十七億三千萬圓であつた。今回の豫算より僅か二千萬圓ばかり尠い。尤も其の豫算(昭和二年度豫算)は追加豫算のため結局十七億五千八百萬圓に達したけれども、追加豫算をも加ふれば明年度豫算は更に大きい額となるのである。試みに最近數年間の歲出を揭げて見る。

大正十二年度歲出決算		一、五二一、〇五〇、三〇五圓
大正十三年度同		一、六二五、〇二四、〇七三
大正十四年度同		一、五二四、九八八、五九〇
大正十五年度	同	一、五七八、八二六、四二五
昭和元年度		
昭和二年度豫算		一、七五八、九六九、六六四
昭和三年度實行豫算		一、七〇九、一二六、二四九
昭和四年度豫算		一、七五二、五〇四、〇〇〇

大正十四、五年度には總豫算の歲出十五億圓臺であつたもの

が、其の後財界は不況がます〳〵深刻であるに拘らず、十七億圓率に增加した。是は財政は國民經濟の狀勢に適應して處理すべきものといふ財政上の重要原則に反するもので甚だ憂慮すべき現象である。而して明年度の豫算に至りては今出來上つた本豫算だけで既に昨年度豫算（從來の最高レコード）と同額に達してゐるが、今後幾千萬圓の追加豫算が年度開始前及び年度末近くに於て提出されることは明瞭であるから、前にも一言した通り明年度豫算は曾つてない大豫算即ち十八億圓に近い大豫算となるのである。與黨側では之でも豫算額が少い積極政策の面目が潰れるなどと稱してゐるが、是は遊蕩兒の寢言見たやうなものである。眞面目に相手にすべく餘りに亂暴な主張である。

然らば新豫算に計上された一億一千萬圓の新事業は何れも緊急を要するもの又は必要已むを得ざるものかといへば、其の大部分は不當の事業又は不用の事業である。一例を示すと拓殖省の新設である。英國には植民省がある。佛國にも同樣の中央官省がある。英佛の廣大なる殖民地、而して全世界に散在する植民地を統轄するために、是等の國に、獨立せる植民省の存するは意義あることであるが、我國の朝鮮臺灣樺太等は事情が全く異つてゐる。朝鮮總督府あり、臺灣總督府あり、樺太廳あり、此の他關東廳、南洋廳等ある外に、是等を統轄するために獨立の一省を置くの必要あるかが既に疑問である。況んやそれを急いで今回の豫算に實現せしむるの必要なきことは識者を俟たずとも明かであると思ふ。勿論我我とても今日の場合一切の新事業を廢棄せよといふのではない。國家は有機體である。時勢の進運に應じ種々の新施設をなすの必要あることは改めて辯明するまでもない。然しながら新施設の一面には既定經費の整理節約といふことを忘れてはならない。でないと國費は加增し膨脹するのみである。恰も節約することを知らず出費のみ嵩む家計が結局破產する外はないのと同樣である。古い財政學者には『私經濟では入るを量り出るを定むるが、財政は支出を定め、然る後歲入を定むるもので是が財政の特色である』などと稱してゐるものがあるが、是は時代遲れの財政思想である。私經濟でも生存上の最低必要費は收入に關係なく絕對に必要である。又財政に於ても國力の堪へ得ない支出は、何としても支出し難いものである。故に財政家は常に支出の効果と收入の影響と國民負擔の影響とを比較計算し、豫算を編成する必要があるが、今日の我財政經濟の實狀では、出來るだけ歲出を減少し國民經濟を改善し財政の基礎を鞏固にすべき必要に迫られてゐるのである。それは財界が連年不況であるからばかりでなく、公債事情から考へても、經常歲入の狀況から考へても、眞面目に國政を思ふものはその感を同じうする所である。此の點から考察して明年

度豫算は、決して財政經濟の根柢を改善す可き適切な豫算であるとは稱し難い。

明年度の豫算が曾つてない尨大な豫算であることは右に述べた通りであるが、然らば此の尨大なる豫算の財源を如何にして調達してあるかを考察して見ると、租稅收入は自然增收どころではなく、前年度よりか却つて減少してゐる。是は地租及營業收益稅を一千一百萬圓ばかり輕減（內地租三百五十萬圓、營業收益稅七百八十萬圓）することになつてゐることの影響もあるけれども、財界の不況の結果が稅收入の上にはつきりと現はれ、所得稅は八百七十萬圓、酒造稅は五百九十萬圓の減收になつてゐるのである。斯くて明年度の稅收入の總額は、八億九千二百萬圓と見積られてゐるけれども、此の見積さへ過大として危險がられてゐる程である。といふのは現內閣は財源捻出の必要上歲入を極度に多く見積り、此の不況時期に織物消費稅は五百萬圓、砂糖消費稅は四百萬圓の增收として收入豫算を立てゝゐる程であるからである。歲入豫算を努めて過少に見積り、是によりて生ずる自然增收の多きことを誇るの思想は間違つてゐるけれども、歲入豫算を過大に見積ることは歲出豫算の實行を不能ならしむるの危險があるのである。現內閣の豫算は寧ろ後者に屬するもので此の點からも堅實な豫算とは許し難い。

歲入を思切つて多く見積つても、其總額は經常部にて約十五億圓、臨時部にて八千萬圓であるから是だけでは尨大な歲出に對し不十分である。此の不足は公債金又は剩餘金繰入に待つの外はない。であるから明年度豫算は公債金による補充九千一百萬圓、剩餘金繰入八千一百萬圓を計上して、歲入財源十七億五千餘萬圓を調達し、是を既定經費及び新事業費即ち明年度の歲出豫算に應當せしめてゐるのである。明年度豫算の弱點は此の點に於て特に著しく看取されるのである。我國の今日の公債事情では出來得る限り其の額を減少すること、少くとも增加の趨勢を阻止することが必要であるが、我國の公債は年々激增一方で、其の總額が六十億圓（今から十年前の公債總額は三十億圓であつた）に達するはこゝ一兩年を待つまいと思はれる程である。現に明年度の豫算では、一般特別兩會計を通じて約二億圓の公債金を計上し、其の內一般會計の分だけでも、前年度の實行豫算の公債金よりか更に五千萬圓ばかり增加してゐる。三土藏相は公債を此の程度に防ぎ止めたことを手柄顏に誇つてゐるが、眼前の問題のみを考へてゐる其の日暮しの政治家としてはそれに滿足するも當然であらうけれど、財政の前途を憂慮する人から見れば、現內閣の遣方は少しも財政政策の根柢に觸れない而して病患を慢性的に惡化せしむる遣方である。決して眞面

目な財政政策とは稱し得ないのである。

それはそれとして明年度の豫算の特に變つた點は剩餘金の全部を使い盡した點である。最初大藏省の査定を終へ豫算閣議に提出された原案には、剩餘金繰入額七千四百萬圓として豫算案を組み立ててあつたが、閣議にて一部の復活要求を認めたため、更に剩餘金繰入を增加し、八千一百萬圓を明年度歳入部に繰入れることになつた。剩餘金の現在額は既に著しく減じてゐる爲め明年度は八千一百萬圓を繰入るれば剩餘金は之れで殆ど涸渇することになるのである。尙ほ此の計數を少し詳細に陳ぶると、昭和二年度の歳計剩餘金は二億五千六百萬圓であつたが、其の內から昭和三年度の實行豫算に繰入れた額が一億一千七百萬圓、對支出兵費等責任支出に充當した額が三千三百萬圓、此の二口合計が一億五千萬圓であるから差引剩餘は一億六百萬圓に過ぎない計算である。是が即ち現在の剩餘金額であるが、此の內から明年度の豫算に八千一百萬圓は繰入れるとなると、殘額は僅に二千五百萬圓に過ぎない計算となる。之だけでは差當り今年度の追加豫算として必要なる二千六百萬圓の財源にも不足することになり、明年度にありては追加豫算の財源もなく豫備金外の臨時支出に用ゆ可き資金も全然存在しないことになる。財界好況當時以來の産物ともいふ可き歳計剩餘金を斯の如くして使ひ盡すことは果して策の得たものであらうか。是も公債を償却するとか、減税を行ふとか有意義の事業に充當して使ひ盡したのならば何等憾む所はないが、黨利黨略のため不急或は不用の事業に充當して蕩盡し、而かも財政の前途に重負擔を殘す（繼續事業其他のため）やうでは、心ある人々は悉く遺憾の意を禁じ得ないのであらう。

私の希望を言はしむれば、明年度の豫算は金解禁の準備といふ點から考へても、本年度の實行豫算よりか更に幾分引締つたものであつて欲しかつた。財政計畫表の示してゐる明年度標準豫算は十六億五千萬圓であつた。我が財政を此の程度に取締むることは決して困難でない。斯くすれば公債を前年度よりか更に增發する必要もない。剩餘金を費消して仕舞ふにも及ばない。政府は今後の追加豫算財源として木材關稅の引上げを行ふ由であるが、そんな無理な算段にも及ばないことになるのである。今回出來上つたやうな豫算案では財政の基礎は愈々危うくなるばかりである。而して國民經濟の堅實なる發展に對しては少からざる害毒を與ふることを免れないのである。私は英米諸國の豫算編成の狀況に鑑みても、我國の政治家が財界の狀況などに頓着なく、年一年に尨大なる豫算に輪をかけて行くことに少からさる不滿足を感ぜさるを得ないのである。

――昭和三・一一・八――

社會時評

現代政治上の一重要原則

——民主主義は何故わるいか——

吉野作造

無産階級の政治的進出、之は洋の東西を問はず最近に於て最も著しい現象だが、殊に既成政黨の腐敗に苦しむ我國に於ては、新興階級の擡頭に由て或は廓清の效の擧げらるべきを思ふて之に對する期待と同情とは頗る大きい。併し今日我が無産階級の政治的運動はこの期待に應ずるだけの十分の用意と實力とを具備して居るだらうか。實力は之から段々時の進むに連れて增大するだらう、その用意に至ては今の中から之に心掛くべくして而も頗る等閑に附せられて居るの嫌なきかを私は恐るゝ者である。

實際の政治運動に於て常に心掛けられねばならぬ重要な原則は二つある。一は如何にして自家の抱負經綸を實現せしむべきかに關するものであり、二は如何にすれば常に最良最善の政策方針が凝滯なく行はれる樣政界の客觀的狀勢を作り上ぐべきかに關するものである。前者は事柄の性質上主として政治家自身の最も多く關心する所なるが故に、假りに之を政治運動に於ける主觀的根本原則と謂ておく。と云つて直接に政治運動に關係せざる第三者の一般民衆が概して之に無關心でいゝと申すのではない。最良最善と定つた經綸がスラ〳〵滯りなく實行せらるることは彼等一般の利害休戚にも直接重大の關係あるは云ふまでもない。之に反して後者はまた事柄の性質上動もすれば政治家自身からは看却され勝のものである。何となればこの立場は、政界に於て最良最善の政策方針と自稱する者の一にして止らざるの事實を豫想し、客觀的には何れが最良最善なりやは

易に分らないものと決めて政治家の輕々に政權を握らんとするを抑ふるものだからである。蓋し政治家としては一刻も早く自分の抱負を實行したいのである、誰が先づ實行の衝に當るべきであるかなどの詮索は之を念頭に浮べる迄さへ有たぬを常とするのだ。それだけに此點は實は局外の一般民衆に於て十分之を理解し以て政治家の行動を適確に監督せねばならないのである。よく立憲政治に於ては民衆的監督（ポピュラー・コントロール）が必要だなどと說かるるが、その所謂監督をして實效あらしむる所以の原則は即ち是に外ならぬのだ。斯う云ふ點から私は假りに之を政治運動に於ける客觀的根本原則と呼んでおかうと思ふ。客觀的と云ふは直接政權の運用に與る者を外部から牽制するの作用と云ふ點に着眼しての意味である。而して之は一面に於ては成る程政治家に對する煩しき拘束には相違なからんも、他面に於ては政治の墮落を防ぎ結果に於て政治家自身の公生活を完うせしむるものなのである。心ある政治家は必ずや這の方面にも十分の關心を有たねばならぬ筈と考へる。

政治運動に右の如き主觀的根本原則と客觀的根本原則との二方面を肝要とするは、丁度我々個人の日常生活に於て斷行と省察とを修養工夫の二大要事とするに似て居ると思ふ。我々は何をするに付ても最善と信ずることは勇敢に斷行しなくてはならず、又之を斷行するに付ての障礙は內部的のものは勿論外部的のものも假借する所なく之を排除して進まなければならぬ。併し乍ら單に之れ丈けを日常生活上の金科玉條としては、或は遂に飛んでもない過誤に陷らぬとも限らない、自分の一旦の所信が客觀的に果して最善であつたか否かは判らぬからである。是に於て最善でもないものを最善だと妄信して之に全力を傾投するの愚より自らを救ふ爲には省察が必要と云ふことになる。もッとより良き立場はないかと常に疑つて見るのである。斯く疑つて見て我々が常により良き立場へと一歩々々實踐の方針を向上せしむるとき、我々は始めて全體として眞に最善最良の立場を占めたものと云ひ得るのだ。この意味を或る人は斯う云ふ言葉で現はして居る、一旦正しいと思ひ込んだ事を何時までも正しいと固執すること程正しくないことはない、一番正しいのは常に正しからんと心掛けることであると。要するに斷行は省察を待て始めて倫理的の價値を發揚するのである。之と同じ樣に、政治に在ても客觀的根本原則を伴はざる主觀的根本原則の活動は、必ずや專制の弊に陷らずしては熄まぬものだ。故に私は曰ふ、政治に於て一番大切なのは、如何にして我々の抱負經綸を行ふべきかの問題ではない、如何にして最良最善の意見に

實現の機會を與ふべきかの方が寧ろより以上に重要な問題であると。

我々人類の政治生活を考へて見れば隨分永いものだ。この長い間の經驗は自ら我々に政界に於ける前述二大根本原則の相伴はざるべからざる所以を教へて居る。今玆處でその發展の歷史を詳に語る遑はないが、ただ之れだけを一言しておく、その發達の最高の段楷に立つものが實に民主主義（デモクラシー）の精神であると。

之を簡單に説明すると斯うなる。俺が最良の意見を有つて居る天下の爲に是非之を實行したいと云ふ者が事實に於て二人も三人もある。偶々その中の一人が天下を取れば、彼は凡ゆる便宜を利用して徹底的に他派を壓倒する。斯くして評價の基準は何等道義的意味を有たない腕力に置かれることとなる。反對派は機を見て恢復を圖るだらう。若しクーデターに依て政權の移動をもたらしたとすれば、是亦腕力を以て評價の基準たらしむるに變りはない。後者が事實前者よりも施政の結果に於て優れて居つたとしても、そは政權推移の大勢から觀て單なる偶然の現象に過ぎぬ。後者の優秀と云ふことが彼をして前者に代らしめた主要因ではないからである。尤も昨今は腕力を以て政權爭奪の武器とする時代は過ぎた。今日之に代つて政界の大勢を左右すと觀らるるものは「數」の力だ。是に於て今日の政治家は、昔の人が兵を養つたと同じ骨法で、民衆を地盤として培養することに腐心する。そこから瞞着、誘惑、はては買收、强迫等の憎むべき奸手段が弄ばれるのだとすれば、是亦所謂評價の基準を正義の觀念と全く分離するものではないか。最も正しいものが天下の料理を託さるるのではないからである。而して斯かる忌むべき趨勢に反抗し之が矯正を使命として起つたものが實にわが民主主義の精神なのである。

民主主義と云ふと、我國では之を頑なに歷史上の一潮流とのみ解して了ふ人が多い。例へば民主主義の時代は過ぎて社會主義の時代に這入つたと云ふが如き是れである。十九世紀の前半所謂第三階級が一般民衆の名を以て特權階級に權力の移讓を迫つた運動に對し、史家は普通に民主主義の名稱を附するのであるが、之を或は第三階級が一般大衆の爲と稱し其威力を利用して權力の讓渡を得たに拘らず、やがては之を獨占して却て一般大衆を壓迫するの武器とした、彼等の所謂民主主義はブルジョア政權を確立する爲に大衆を欺瞞するの役を勤めたものに外ならぬと解するあり、又或は第三階級は一旦政權を自家の手に握るや之を廣く一般大衆に分散するの義務を忘れ、遂に大衆の

覺的運動に迫られて今やその特惠的地位よりすべり落ちんとして居る、先きに彼等を促して民衆運動の先頭に起たしめた民主主義の精神は今や再び大衆自身の中に働いて第三階級の我儘を粉粹せんとして居ると解する者もある。民主主義を社會主義に代らるべきものと觀るのも一つの見方だが、所謂民主主義の精神は社會主義そのものをも包擁し、近代政治の全過程に亘り之を一貫する根本の重要原則だと考ふる方が妥當の見解である。

尤も民主主義は純然たる唯物的人生觀とは全然兩立するものではない。民主主義は人類の叡能の無限の發達を前提とする、從てその判斷は窮局に於て正しい筈だと決めてかゝる。但し之には人類をして障碍なくその當然の發達の道程を辿るを得しめなければならぬ、消極的には自由を保障し積極的には彼の活動を助長する諸般の施設を必要とする所以である。之等の用意を整へてさて一切の判斷を彼等に托する、即ち民衆多數の良しとする者を以て最善の經綸なりと決める。之を他の反面から云へば、自ら政權を爭はんとする者をして民衆一般の良心の地盤の上に善を營むことを競爭させるのである。斯くて始めて誰が擧げられるかの評價の基準が全然我々の道義的意識と一致すると云へる。即ち腕力や詭滑やが始めて正義に取て代らるるわけである。是が即ち民主主義の精神である。

併しこの民主主義は近代立憲政治の世の中となつてもなかなか理想的には行はれない、絕へず歪められて行くことは普ねく人の知る所である。此點に付ても語りたい事は澤山あるが今は略する。而して斯うした事實から自ら次の二つの現象が起つた。一は益々注意を深うして民主主義の精神の徹底を期せんとする運動で、他は早くもその容易に行はれ難きに諦めて民主主義的政治に反旗を飜さんとする運動である。その後者の重なるものに一時盛に唱へられたサンヂカリズム派の議會否認論や又は根本的國家觀念の鑄直しに發足する多元的議會說などもあつたが、今日に殘つて最も吾人の耳目を衝動するのは舊式の專制的善政主義にまでの復歸である。伊太利とロシアがその著しい例である。

つまり牽制機能の作用が鈍ると主動力が馬鹿に威張り出すと云ふ格好なのである。思ふ通りの政治が出來ない、出來ないのは牽制機關が邪魔になるからだ、善政を行ひさへすればいゝではないかと、紛亂の後にはとかく專制が行はれ勝なものである。伊太利は云はばムツソリニ一人の獨裁專制、ロシアは無產階級の名を以てする少數共產派の寡頭專制、その專制なる所以に至ては同一である。尤もこの二國に於ては或は一時の經過時

代として斯くならねばならぬ必要があるのかも知れぬ。それにしても自家の抱負を有效迅速に行はしめんが爲めに如何に多くの犠牲が拂はれて居るかは今日に於ても既に餘りに明白な事實となつた。いつまでも之で押し通せるものかどうか、私に取ては大なる疑問である。

私は私の結論に急ぐ。單にロシアや伊太利を學ばんとする者は論外だが、別に自家の抱負經綸の速かなる實行に焦慮するの餘り、牽制機能の必要なる所以を忘れて、單に經綸實現の爲の有效なる手段方法のみを考ふるのは、永い政治的經驗の懇ろに吾人を訓へて特に愼戒を求むる所たるを切言したい。どうしたら自分の考を一番有效に行へるか、之も政治運動に方ては最も重大な點だ。併し我々は同時に政界の客觀的狀勢をば常に最良最善の意見が實行の衝に上される樣に導くの責任あることも忘れてはならない。近代政治に於て斷じて看却するを許さざる最も根本的な一重要原則は寧ろこの方だと謂つていゝ。

民主主義がわるいと輕くあしらふ人の爲に敢てこの一小篇を作つた次第である。

無産黨合同論の先決問題

無産政黨は合同しそうに見えてなか／＼合同せぬ。之に就てはいろ／＼の理由もあらうが、その中の最も重なる原因は、合同を論ずるに先ちまづ第一着に決せられねばならぬ重要問題が未だ十分に攻究されて居ないと云ふ事ではあるまいか。然らばその重要な先決問題とは何か。曰く、一元政黨主義で行くか、多元政黨主義で行くか、是れ。

ロシアと支那とモ一つ伊太利では、たツた一つの政黨で國家が支配されて居る。唯一公認の政黨以外の政黨の存在を絶對に許さない。伊太利は暫く別問題とする、支那の國民黨は之を完全な無産政黨と認むべきや否やに多少の疑なきに非るを以て之も他日の論題とする。そこで現に唯一の無産黨が國家を支配して居る處と云へばロシアを擧げるの外はない。我國でも無産階級の政治運動を説く人の中には、ロシアを唯一の則るべき御手本としてあゝした單一政黨の支配の實現を其活動の目標と立つる者が尠くない。

無産政黨の未だ國家支配權を確立して居ない大多數の國に在ては、謂ふまでもなく多元政黨主義が行はれて居る。澤山の政黨が相並んで永年の慣行で作り上げられた一定の規道に倚り互に政權を爭ふのである。必ずしも既成政黨の存在を頭から否認はしないが無産階級を足場とすると云ふ現代的の強みに據つて勞働黨がヂリ〱と有産階級を壓倒して行く英吉利の政界などは、多元政黨主義の一好模型であらう。只不幸にして無産階級が完全に天下を取て而もそが數個の政黨に分れて居ると云ふ實例は未だない。近き將來の支那に或は之に類する現象を見ることなきやを想像するが、併し理論上から云へば、貴族政治を倒した跡のブルジョアが數個の分派を爲して對立した樣に、ブルジョア政治を倒した後の無産階級が二つ以上の政黨に分れると云ふことも絶對に在り得ないことではあるまい（すぐ二つにも三つにも分れる樣な結束の弱い無産階級に、一擧にブルジョアの政權を打倒し了するが如き力は始めから認め難いと云ふ議論にも、私は固より一應の敬意を表するものではあるが）。

政黨運動の行き方には右の如く二樣の方針がある。我國の諸政黨（姑く無産政黨のみに限らぬことにしておく）は果してそれ〱如何なる方針を執て居るのであらうか。（一）疑のないのは各政黨とも皆主觀的には一元主義を執て居ることである。自分ひとりで天下を料理しようとは政黨團結の根本義だから、我々は固より此事あるを怪まない。（二）但し客觀的形勢の判斷としては、少くとも在來の既成政黨は常に必ず反對黨の存在を前提して居る。之には例外はない。そこで若し茲に其間に伍して一元主義を固執し飽くまで他の一切の政黨を打倒し盡さずんば熄まずといきまく者ありとすれば、そは必ず無産政黨でなければならぬ。（三）然らば我國の無産諸政黨は皆一元主義かと云ふに左うではない。この點については大體二種の見解を分つことが出來る樣に思ふ。

（甲）所謂右翼の諸派は事實上多元主義を承認して居ると觀るべきであらう。即ち其の無産階級陣營内に於ける他黨の存在を否認せざる如き、又は既成政黨の間にさへ伍して議會政治の進捗に協動するを厭はざるが如き、之を證して餘りある。而して所謂右翼の特色は一つにはこの點にあることをも附け加へて置く。

（乙）之に反して所謂左翼の諸派が結局に於て一元主義を固執するものなることも亦言ふを待たない。既成政黨は絶對に之を承認せざるが故に、彼等と並んで議會に立つ場合と雖も、そは議會政治の進捗に協働するのではない、黨勢擴張に好都合だから之を利用するのだと云ふ。蓋し議會政治そのも

のが元來彼等の力を極めて否認する所なのである。この立場からして彼等は、既成政黨と眞面目に協働するを厭はざるものとして所謂右翼諸派の議會行動を難じ又之を糺弾するを忘れない。この外にも種々の根據はあるが、要するに彼等は自家の獨裁權の確立を唯一の實踐的目標として遮二無二突進せんと努めつゝあるものである。

そこで我國の無產黨には私の所謂一元政黨主義を執る者と多元政黨主義を執る者と二種類あることが分つた。而して之が無產黨合同問題に如何なる關係を有するのか。

前段末項に提出せられた問題に對してはまた二樣の觀方がある。

第一の觀方からすれば、所謂左翼の諸派は自家獨裁權の完全なる掌握を目標として進み、夫れが爲めには凡ゆる手段に出るを辭せざるが故に、その當然の結果として次の二つの現象があらはれる。

（一）近代式の宣傳を以て大衆に臨むこと。近代政治に在ては何と謂ても「數」が最後の力だ、之を握るには大衆を味方とするに限る、教育に依て大衆の聰明を拓くなど云ふは太平の逸民の譫語に過ぎぬ、自ら信ずることの厚き以上、宣傳だらうが煽動だらうが兎に角大衆を味方に牽き付けさへすればいゝ。斯くて彼等は遂に知らず〳〵安物を鳴物入りの騷ぎの間に大衆の懷にねぢ込むと云ふ圓本式廣告術を採用するに至るのである。之が民衆の眞の開發の上に如何なる影響を及ぼすかは姑く論ぜず、單に右翼の立場から云へば、この戰法で挑まれるは正に平和の鄕が虎狼の群に襲撃されたのにひとしい。左右兩翼の容易に和し難い一つの原因はたしかに玆に在るのではなからうか。

（二）自家の立場に對する事實上の最大障礙として右翼の多元主義を極力排擊すること。專制的覇者が動もすれば自分に最も近き者の間に一番深く猜疑の眼を馳する樣に、同じ陣營と普く世間の許す友黨の間から自分に取て最も大事な一元主義を否認して掛られるのは左翼の立場に取て何よりもの危險だ。宛かも天主教會の獨一主義がフリーメーソンの多元歸一主義を不倶戴天の仇敵と憎むが如く、左翼無產黨は乃ち何よりも先きに右翼無產黨の打倒に餘力を殘さざらんとするは怪むに足らぬ。或は無產階級を裏切るものだとか或は大衆を欺瞞して彼等をブルジョアに賣るものだとか、凡ゆる汚名を浴せて只管大衆と右翼無產黨との離間に浮身を窶すのは、實は左翼政黨に取ては生存の必要に促された當然の叫びと謂ふべきである。是れ他の一面に於て右翼諸派が根本的に相容れぬ敵として絕對に左翼との提

携を肯んぜざる所以である。左右兩翼を斯うした狀況の儘に放任して置いて、一般世間が無產政黨の合同をすゝめるのが抑も大なる誤りではなからうか。

次に第二の觀方からすれば、斯う二つの派が對立して居ては何時まで經つても無產階級の當然の威力は揚らない、既成政黨に依て代表さるゝ有產階級の專橫より速に無產階級を解放し了うせるには、孰方かが讓步して戰線統一の效果を擧げさせなくてはなるまい。斯う云ふ實際的見地から發足すると、今までの經驗は左翼の側に一段と豐富なる戰鬪力あるを思はしむるので、從て右翼の言分を立てては何時までたつても無產階級の解放は實現されないかも知れぬと云ふことになる。元來無產大衆は政黨のことなどは奈うでもいゝのである。右翼だの左翼だのと云ふは直接政黨的活動圈內に居る人達の勝手につけた名だ、自分達はたゞ一團となつて獨立の地位が認められ、有產階級の設けた有形無形の凡ゆる桎梏から解放されればいゝのである。たゞ此事は個々別々に精力を割いては成功するものでない。そこで政治的活動の戰線統一は、よく人の謂ふ通り、無產階級に屬する全大衆の一致した要望面も痛切なる要望だと謂へるのである。然らば速にこの要望に應ずるは即ち無產政黨に取て當面第一の目標であらねばならぬ。指導原理がどうの宗派的分裂主義がどうのと內輪で喧嘩されるのは迷惑の至りだ。是れ大衆代辯者を以て任ずる民間論客が、頻りに各無產黨の合同問題に忠實ならざるを責める所以であり、各無產黨も亦內心合同の可能につき何等の確信と成算を有せざるに拘らず、大勢に迎合して輕々に熱のない合同提唱を繰り返へす所以である。

他の觀點を一切論外におき單に有產階級との對戰と云ふ事だけから觀れば、今のところ左翼は世間の同情を獨り占めにし得る好地位に在る。何となれば彼等は道の鬪爭に於て最も大膽であり且最も勇敢であることが一般に承認されて居るからである。之に反して右翼の方は必ずしも妥協を厭ふべき事とせず、少くとも敵との抗爭に當ては常に手段の選擇を八釜しく云ふ。斯んな潔癖で如何してあの强敵に勝つことが出來るだらうか。軍國主義旺盛の國に於て腕ッ節の强い荒武者が一番に重寶がられると同じやうに、勞資兩階級の强烈な鬪爭に於てはボルシエヴイズムでなければ到底駄目だとされる。さうすると右翼派の所謂民主主義の固執は、自ら戰線の統一を妨ぐるものと謂ふことになる。斯く考へて始めて右翼も亦頑迷なる一分裂主義者と呼ばるゝ所以が分る。

上述の如く二様の觀方があるとすれば、その孰れの立場を執るかに依て結論の違ひ得ることが明であらう。階級鬪爭に於け

る成功を急ぎ所謂大衆の痛切なる要望を一刻も早く實現せんとする立場を取れば、一元主義の主張及び運動に加擔すべきだと云ふことになる。之に反して現存の諸政黨にそれ〲の獨立の立場を認めその互助的協動の下に戰線の合理的な統一を圖らうと云ふのであれば、斷じて一元主義を跨扈せしめてはならぬことになる。但し我々が何と云つたとて各政黨の當事者は遠慮なく各その方針に從て活動を續けるだらう。そこで今の儘に各政黨が勝手に活動を續けるのであれば、彼等の間には當分到底合同提携の見込はない。併しそれは政黨を主なる立場に置いての見解だ。未だどの政黨とも特殊の關係を持たざる我々第三者には亦自ら別の見解がある、即ち我々には窮局に於ける無產者の統一的政治活動を促がすと云ふ立場から、孰れの主義に加擔すべきかの選擇問題が殘るのだ。我々の選擇の方針如何に依ては、政黨當事者の見込如何に頓着なく、自らこの問題は適當に解決されるかも分らない。

孰れにしても政黨自身が進んで合同携提を說く以上、私は彼等に告げて次の問に對する明答を要求する、曰く一元主義をとるのか二元主義を執るのかと。這の重要なる先決問題を差し措いて合同論を語るは全然無意義である。

次手に云つておくが、今日の世界に於て一元主義のチャムピオンは云ふ迄もなくロシアと伊太利で、二元主義のそれは英國である。資本主義が如何に憎いと云つても、凡ゆる利器を擁して堅むるその金城鐵壁は容易に拔き難い。それだけ勇を皷し手段を擇ばず無二無二之に襲ひ掛らうと云ふ考にもなるが、又一擧に之を陷落するを不可能と諦めて一時之と妥協協調すると云ふ考にもなる。而して協調妥協は人を安逸に誘ひ切角の鬪志を鈍らすの恐れあり、從て過激派から云へば、無產階級の純眞を陷落せしむる毒素として嚴しく之を排斥するの必要がある。然らずとするも、斯んな遣り方が周圍に流行つては徹底的に資本主義と鬪ふと云ふ自分達の立場が脅かされ又之に對する精神的支持の薄らぐ懸念が十分にある。之が何よりも恐い。そこでボルシエヴイズムは何よりも先に社會民主主義の排擊に腐心するのである。ロシアが力を極めて英國を罵倒する所以も亦之れに外ならない。然り、ボルシエヴイズムに取て資本主義を打倒するの實踐的捷徑は社會民主主義の克服である。多元政黨主義の完全なる克服がその先決の急務である。我國の例で云つても、例へば勞農黨は先づ社會民衆黨を完全に克服した上でなければ既成政黨との戰にも勝つ望みはなかつたのである。そこで私は曰ふ、斯うした運命に在る者を既成政黨に對する戰の爲だからと

云ふて合同させようと云ふのは、一體何を觀て物を云つて居るのか甚だ了解に苦む次第であると。

玆に一寸ことわつて置くが、社會民主主義と謂ふても之には廣狹二義あることとである。資本主義を認めないと云ふ根本的な階級的立場を執ることには左翼も右翼も變りはないと思ふ。唯當面の實際政治の懸引に於て、その階級的立場を絕對的に主張するか相對的に主張するかの差が現はれる。英國の勞働黨は後者の例だ。ブルジョア政黨の治下に在つて仍ほ之との相當の協働を辭せないからである。獨逸の社會民主黨は戰後に於て却て英國式に移つたやうであるが、戰前に於ては孰れかと云へば前者の例たるに近かつたと思ふ。細かく實際の事例を擧げれば多くの例外もあるだらうが、主義としては皇帝萬歲唱和の禁とか宮廷伺候の禁とか又豫算協贊の禁などを勵行し、概して有產階級とは絕對に事を共にせざるの態度を表明してゐた。この點だけから云へば當年の獨逸社會民主黨が民主主義を執る者に非るは論を待たない。斯くして私は相對的にブルジョア政黨の立場を認め彼等と堂々輸贏を爭ふと云ふ意味に於て、英國の勞働黨を廣義の民主主義を執るものと云つて置かうと思ふ。

絕對にブルジョア政黨の立場を認めざる場合に在ても、無產階級の陣營內に於て理論上民主主義の行はるる場合のあり得ないことはない。尤もロシアではボルシエヴイズム專制の勢を馴致して一切の他の政治意見を彈壓して毫末も民主主義の行はるる餘地なからしめて居るし、支那でも共產黨一派を驅逐して以來は矢張一黨專制で貫いて居るやうだ。彼に在ては最左翼の專制、之に在ては右翼の專制、右と左と方向を一にせざれどその一黨專擅たる所以に至ては全く同一と觀てよからう。而してブルジョア打倒後の無產階級獨裁の政治は必ずこの形式に依るべきものかと云ふに必しもさうとは限るまい。不幸にして今日の所未だその適切なる實例はないが、例へば我國無產黨界の如きは、假りに遠からず既成政黨を克服し了らせたとして、その政黨關係は恐らくこの民主主義に依る協働連携を以て政權遞用の常則とするのではなからうかと考へる。

私は前に我國無產政黨の政治的活動の目標としては一元政黨主義を取るべきか多元政黨主義を取るべきかの問題あるを述べ、又我々第三者の民衆的立場としてはその孰れの主義に加擔すべきかを定めるの自由ある旨を語つた。あゝした二つの指導精神の對抗がある以上、我々は飽くまで選擇の自由を主張せざるを得ず、政黨自身が大衆的統一戰線論に我々を首肯せしめんとならば、彼等自身が先づ一黨主義と多黨主義との爭論を清算

して出直して來る必要があると思ふからである。

議論は姑く措き單に事實の觀測として、近き將來の我國に一黨專制の無產階級獨裁政治の行はれ得る見込があるだらうか。一體斯の形式の政治が如何なる條件の下に始めて行はれ得るものかは、能くロシアと支那の事情を考察すれば分る筈だ。ロシアで見事に行はれたから他の何んな處にも同樣に行はれると思ふのは、北方の寒國で降る雪を南洋の熱帶でも是非降らせて見せると力むにひとしい。レーニンの遺した巧妙なる組織、之は眞似も出來よう。この組織を運用する一部青年の熱意と奮鬪、之もその乏しきを憂えない。たゞこの組織と人との力でロシアの如く我國でも、大衆をつかむことが出來るか否かは問題だ。日本人は必ずしもロシア人の如く無智蒙昧を極めて居ない。彼等は云ふだらう、自分達こそ大衆の最も正しい代辨者なのだ、大衆の擧つて我黨の陣營に來投するは分り切つて居ると。所が斯んな主觀的見解に陶醉して居る自稱大衆代辨者は實は此處にも彼處にも居るのだから堪らない。大衆の方は既に今まで餘りに色々の立場を無理强ゐに聞かされてゐる。從てまた相當に耳が肥えても居る。ロシアの愚民と一緒になつて我國の大衆も亦漫然として鳴りものゝ響の大きい方へ流れて行くと觀るのは飛んでもない誤算ではあるまいか。

そこで一黨專制の實現は結局見込はないとする。然らば近き將來に於ける我國無產政黨界の客觀的狀況は、第一次的現象としては多數黨併立であると謂はねばなるまい。之を與へられたる事實として考ふるに、この狀勢から推して夫の無產大衆一致の痛切なる要望たる解放運動に全幅の力を糾めしむるの途は、唯一つしか殘つて居ない。即ち民主主義の基礎の上に立つ合理的提携乃至合同是れである。即ち各派の立場を承認し且つ相互に之を尊重しその隔意なき公正の協議に基いて大同に合流することである。之を外にして今の無產政治運動に戰線の統一を期する途は絕對にない。民主主義の固執を分裂主義と說くは一黨專制の可能を夢想する者の妄想だ。而して一黨專制の可能を日本の近き將來に期待するは、疑もなく、我國政界の現實に關する著大なる認識不足を自白するものである。

所謂無產大衆の要望

我國の無産大衆は、他の諸國のそれも略ぼ同樣であらうが、速にブルジョア專政の桎梏より解放せられんことを要望して居る。之を大衆一致の切實なる要望と云ふに些の異存もない。けれども若し之を理由として全國的單一無産政黨の結成が從てまた大衆一般の共通の要望であらねばならぬと說くものあらば、私は無條件に之に贊意を表することを躊躇する。

そは無産階級の解放が政治行動以外の手段でも完全に成就し得ると考へるからではない。無産大衆自身の政治的進出がその最も有效なる手段たることは私も亦之を疑はぬ。而して既に政治行動を以て最捷徑とする以上、大衆がその政治鬪爭に於ける戰線の分裂を喜ぶ筈のないことも明白である。夫にも拘らず、今日の大衆が必ずしも無理やりにたツた一つの政黨に纏まりたいと熱求して居ないと觀るのはどう云ふ訣か。

その訣は斯うだ。

無産大衆の熱烈に解放を要望して居ることは云ふまでもない。併し乍ら大衆は之を達成するの方法手段は必ずしも唯一つだけではないことを知つて居る。少くとも彼等は目前頗る有效だけれども後害を將來にのこす底のものと、差當りの利き目は遲いが永い後には大丈夫な結果をのこす底のものと二種類あることを心得て居る。腹の痛いときにモルヒネを服用すればすぐ止まる、にも拘らず少々の苦痛は忍んでも漸次に痛みを輕めて行くを安全とするやり方もある。於是患者には孰れの途を取るかの選擇の自由があるわけだが、之と同樣に無産大衆の政治的進出の問題に在ても、要望の目標は同一だが之が爲の手段は必ず一つと限らないと云ふことが認められねばならぬのである。

尤も無産階級解放の目的を達するにつき其手段に二つも三つもの方法のあらう道理はないと考ふる人はある。無産階級はブルジョアと鬪つて勝てばいゝ、勝つて自分達の管掌の下に社會を占領しさへすれば直にそこから總てのよきものが産れると主張するのだ。即ち唯物的人生觀を執る人から云へば、一つの目的に一つの手段、苟くも死ぬか活くるかの戰に於てやり方がどうの斯うのと云ふ閑問題はあり得ないと云ふのである。故にこの立場に據る人達が全國的單一無産政黨結成を大衆一致の要望だと錯覺するのを私はすこしも不思議と思はない。

更に一歩を進め、手段方法選擇の餘地あるを承認する立場に在つても、事態の急迫が緩くり之を省慮するの遑を與へぬと云ふ場合あることを注意せなければならぬ。徐かに考へればモルヒネで腹痛を止める樣な方策の決して本當の良案でないことは明かだ。唯物論者が說く樣に目前の痛みを遁れたとて直に健康其ものが獲られるのではないからである。けれども時として腹

の痛みが馬鹿にひどく到底この上我慢し切れぬと云ふこともないではない。斯の場合に始めて已むを得ず一時應急の便法としてモルヒネを使ふことが許される。許されるのではあるが、その唯物主義の立場に於けるが如く大びらに許されるのでないことは勿論である。

そこで結論は斯うなる、我々無產大衆にはその解放の目的を達するが爲に二種の方法が與へられて居る。ブルジョア階級との戰に勝つて自分達が天下を取つた時の建設的能力に傷をつけぬ樣今の中から戰鬪の方法にも注意すると云ふのが一つ、若し事急迫にして萬止むを得ずんば餘儀なく革命的手段に訴へても目標に驀進せねばならぬ場合があると云ふが一つ。

我々の立場から云へば、今日我々無產大衆がその政治的進出に方つて如何なる方法を執るべきかは一に繫りて對ブルジョア關係の實際的狀勢如何に在りとせられる。その狀勢如何に依てモルヒネを呑むか少々の痛みを怺えても根本的の治療法に倚るかゞ決まるのである。然らばその狀勢をどう觀るか。之がまた人に依りて一樣でない。先づ

（一）主觀的傾向に富む觀方と云ふのがある。客觀的狀勢の判斷に主觀的の要素が多分にはたらくのである。第一に此派はブルジョア階級のその在來の地位を維持せんが爲に執る所の惡辣陰險の手段なるものを概念的に作り上げ、その抽象的觀念に依て多少無理な解釋を現實の社會的鬪爭に向けて下す。資本主義の立場の今更辨護し難いのは云ふまでもないが、現にその柵內に活働する人達がどの程度に之を意識し又どの程度に惡意を以て無產階級を苦めて居るやは又別個の觀察を必要とする問題だ。この必要な事實の觀察を等閑に附して只管頭の中に描いた觀念に感激して了ふと云ふのがこの派の人達の通弊だ。日本の現實をよくも見ず西洋の經驗を本の上で讀んで社會運動に飛び込んだ人などに兎角誇張の言の多いのは之が爲めであらう。要するに斯う云つた傾向の人は、我國の現狀亦同じく頗る急迫の狀態に在るとの理由からも戰線統一の切要なるを叫んで居る樣である。次に之に對して

（二）客觀的傾向に富む觀方と云ふのがある。資本主義の許し難いと云ふ理窟は萬々承知だ、之が打倒の爲めに力を竭さねばならぬと云ふことも十二分に心得て居る。併し問題は此事の成功の爲にする全無產階級の有效なる總動員は今日のところ可能か如何の點である。自分の考はどうかと聞くのではない、問題の皆さんがどんな風に考へて御座るかを明にしようと云ふ問題なのである。之を明にするには二つの方面から精密なる觀察を進めて行かねばならぬ、一つは無產階級は現にどれだけブルジョ

ア階級から容められて居るかで、他は無産大衆が現にどれだけ之を苦悩と實感して居るかの點である。ブルジョア階級の我儘は暫く別として、永年屈從の生活に慣らされた一般大衆中には今猶ほ無自覺の醜態に惰眠を貪るもの尠くはない。速に之が自覺を促すの必要をつくづく感ぜしめられる訣だが、之を動員して彼等の現に深く興味を有せざる運動に加擔せしむることの困難なることも亦之を看過してはならぬ。斯くしてこの立場を執る人は我國今日の狀勢の判斷に於て、凡てを忘れた統一戰線の猛進的攻勢には未だ適して居ないと云ふ觀方を議論の出發點として居る樣である。

以上二つの觀方の孰れが正しいかは今こゝで論議する限りでない、二つの異つた立場を執る者同士が各々其所信に依り互に他を克服せんとして烈しき抗爭を續けることも我々に於ては差當り何の係はりもない。我々はたゞ第三者として現に斯うした二つの違つた立場のあることを知つて居ればいゝ、即ち我々は我々を指導する立場に在る人達の其の指導の方針に關する意見が二つに岐れて居るの事實を默つて見詰めて居ればいゝ。而して甲は他の言ふことが汝等無産大衆一致の要旨だと云ひ乙も亦同じ樣なことを云ふのだが、それには容易に迷はされない丈けの用心が無産大衆には必要である。斯く云へばとて我々が全然彼等の活動に無關係で居つていゝと云ふのではない。所謂切實な關係を有する第三者として自己獨立の判斷に基き自己の良しと信ずる所に從て或は甲に黨し或は乙に黨することは差支ない。甲なり乙なりから漫然と率ゐられるのではない、根本的には飽くまでも第三者としての超然的獨立の地位を維持しつゝ、自家の所信と一致する限りに於て其時々に應ずる聲援を甲乙兩派のいづれへかに送ればいゝのである。

つまり私が從來屢々既成政黨の對立に關して執るべき態度につき舊選擧民に對つて與へた忠告を、今また其儘無産大衆に向つても呈せんと欲するのである。既成政黨の地盤政策が舊式政治の一大禍根であり又選擧民の傀儡其者であつたと同じく、各無産政黨の輕薄なる宣傳より自家の精神的獨立を防衛することは、實に無産大衆の純潔を完うする所以であると同時にまた各無産政黨其ものをも純化せしむる所以であると考へる。」

東京帝大に於ける左傾學生の處分に就て

文部省が專門學務局內に新に學生課を設け、各官立大學並に直轄諸學校內にそれ〲學生（又は生徒）主事の任命を發表したその當日、恰度所謂左傾學生の處分に關する東京帝國大學評議員會の決議なるものが新聞に現はれ、たま〲その處分が意外に重いと云ふ所から圖らず世上の物議をかもし、東京朝日や東京日日の如き有力な新聞までが筆を揃へて陰に陽に大學當局を難じて居る。事は帝國大學生たる舊新人會員が過般豐島園に會合してその再興を議した件に關すると云ふ。帝大當局の處分が新聞所報の如く果して放校三名、退學二名、一年間の停學が十七名と云ふ重いものであるか否かは、此稿を草する時までは未だ確めて居ない。併し私は日夕帝大に出入して居る關係上、大學當局の最近の意嚮が所謂左傾運動に對しては從來とは全く違つた斷乎たる態度を以て臨まんとして居ることを知つて居るから、處分の格別重いと聞いても實は左まで驚かない。と云つて私は所謂嚴罰主義の威嚇を以て學生の思想を善導し得べしと考ふるものではない。この點に付ては東京朝日や東京日日の所論と全然同感である。けれども私は他方に於て、東京帝國大學の當局者が最近所謂左傾學生の取締に關し新に斷乎たる處置を執らんとせらることにも相當の理由あることを認むるものである。但し豐島園事件の處分に就ては前にも述べた通り未だ適確の報道に接して居ないから何とも批評することは出來ぬ、之は別の機會に讓ることにしよう。そこで私は茲に一般論として帝大當局が最近何故に嚴重なる態度を以て學生間の所謂左傾運動に臨むに至つたかを少しく述べて見ようと思ふ。此事はまた自ら今後大學當局の斯方面に關する行動を觀察理解する上に多少の參考ともならうかと考へる。

豫めことわつて置きたいのは

（一）少くとも東京帝大に關する限りその執る所の立場は絕對に獨自のものであることである。學生の思想上の取締に付ては監督官廳たる文部省の干涉を事實上排斥する程度に於て完全に帝大當局に委任されて居ると聞いて居る。從つて同じ問題に付て政府が如何なる方針を執らうと又他の諸學校が文部省の意を奉じて如何なる措置に出でようと、それは絕對に東京帝大の行動と關係はない。その反對にまた東京帝大の新なる行動は他方に直接の影響を及ぼす樣な關係にもあるのでない。一二の新聞に帝大今次の處分と岡山に於ける共產黨事件の公判などとを連關せしめ其處分から政府の新なる學生取締方針を見出さんと試みたものがあつたので、特にこの點を注意しておく。次にモ一ツ

（二）學生の所謂左傾思想乃至左傾運動が學內に於ける眞摯た

る攻學の結果として生じたものである限り之に對する大學當局の態度は今も昔も毫末の逡變のないことを特說して置きたい。

此點をモ少し詳しく云ふならば

（甲）單に所謂左傾思想を抱いたと云ふ丈けで學生を處分すると云ふが如き考は今以て帝大の當局者の頭にはないやうだ。尤もそは如何なる思想を抱いても一切放任すると云ふ意味でないことは勿論だ。苟くも高等の教育を受くる程の者が濫りに國法の禁ずる如き主張を爲す筈がないから、輕々人を誣ゆる者の流言に動かされて學生の思想の善惡を彙類する樣なことはせぬが、不幸にして學生の主張が國法に觸るるものあるが如き場合には、先づ之を司直の手に交附しその裁きに從て後徐ろに學內制規の處分を加ふべきは勿論であらう。

（乙）次に學外に於ける左傾的運動に關係したるの故を以て直に當該學生を處分すると云ふ考も無いやうだ。尤も斯の場合には多くは裁判所が先づ學生を糺問するだらう、その結果に基いて後に學校當局が相當の處分を加ふると云ふことはあらう。假りに裁判が無罪でも、學校としては戒飭を加ふる位の處置はするかも分らない。が　直接學業の繼續を不可能ならしめる底の嚴罰を濫りに課せざるべきは私の信じて疑はざる所である。」

然らば帝大當局の態度の最近に變つたといふのは何の點を云ふのか、又何が彼をしてその態度を急に變ぜしむるに至つた原因なのか。

即ち問題は要するに此點に在る。

帝大の當局自身が何と說明するか知らぬが、私は讀者の眼前に事態を明瞭に展開せしめんが爲に故らに無遠慮に云ふ、帝大當局の態度を急變せしめた原因は、所謂左傾學生なる者の中に一種融和すべからざる學園の公敵を發見した事であると。

先きに東京朝日や東京日日のことが引合に出たから假りに之を譬喩にして話を進めて見よう。玆に新聞社員の中に、現社會に於ける一切の資本主義的企業を否認し、就中東朝東日の如き大規模の企業は一日も存立せしむべきに非るを狂信せる者があるとする。さう云ふ考なら彼は一體速に其社を退くべきだと普通の人は思ふだらうが、彼は偶々其社に籍を置くことを倖ひとし、內部に在て其社の壞滅に努力するを寧ろ貴い自分の使命なりと心得、凡ゆる機會を利用しては其社の秩序をやぶり之に損害を與へんことを謀つて居るとする。彼の確信には一應の理由あり又その確信に基いて理想の實現に精進する熱情にも一面眞に敬服に値するものがあつたとしても、其社は彼を獅子身中の

黨として放逐せず、寧に彼の或はその志を飜すべきを期待して何時までもその策動を隱忍すべきであらうか。之を惜むべき裏切者として無暗に窘迫するは策の得たるものでないとしても、其社が適當の時期を見て斷乎たる自衞の策を講ずるは亦之を許さねばならないと考へる。

之と同じ樣な現象を帝大內部に見るのだと云つたら讀者は定めし驚かれるだらうが、實は斯く申す私は早くから之を發見し且久しい間之に惱まされた一人であることを敢て玆に斷言する。詳しく云へば、大學の秩序を破り學生々活の平和を傷け始めから大學當局と協戮するの意思の毫末もなきものが所謂左傾學生の中に尠からざるの事實を、昨今大學の當局も亦目に留めるに至つたわけなのである。

私の知つて居る者の中から最も著しいものを擧げるなら斯んなのがある。彼は大學生となつてから殆んど一回も講筵に顏を出したことはない。何故講義を聞かぬかと云へば、本當の學問を教へぬからだと云ふ。何を以て本當の學問でないと云ふのかと訊けば、ブルジョアの專制に寄生して居る大學教授に本當の學問の分る筈はないと罵る。そして彼は大學へは殆んど出席せず、平常何をして居るか局外の者にはさッぱり分らない。共產黨關係の何かの運動に係はつて檢束されたことも度々あるが、毎時僞名を使ふので長い間學校には分らなかつた（大學當局が學生の檢束者の氏名を警察から移牒されて其の多くが在籍名簿に載つて居ないのに面喰ふのは再々の事だ）。尤も時々校庭にその姿を見せることはある、併しそは學生の會合に出て煽動の役を勤むる爲か、又は學內公認の諸會合を同志の手に乘取らんとて大學生に變裝さした學外の第三者を引率し來り之に不正の投票を爲さしめる目的の爲などであつた。適々之を難ずると彼は昂然として曰ふ、ブルジョアの爲の設備としての大學を完全に壞滅し、出來るなら之を我々の手に占領するは私共に與へられた至高の任務であると。斯くて彼は何處までも籍を大學に置いて內部からその壞滅を企圖して居る。只私の一つ不思議に堪へないのは、替玉を使つてまで試驗の及第をはかることであつた。孰れにしても始めから斯う云ふ目的を有つて這入つて居る者は手に負へない。斯う云ふ目的を以て大學に這入つて來たのか、這入つてから斯んな考に變つたのか、其邊の事はよく分らないが、兎に角大學と云ふ設備を利用して眞面目に學業にいそしむと云ふ考のないことだけは極めて明白である。

單にそれ丈けならいゝ、彼等は之を一個の貴い使命として其實行に熱中する所から、自然周圍に澤山の仲間を作らんと焦るので面倒が起る。彼等としては固より當然必要の行動だらう、

併し彼等と考を異にする他の純良なる學生に取ては之が甚だ迷惑の至りなのだ。之等の純良なる學生の眼には、彼等の好んで爲す宣傳は宛かも靜肅なるべき場所で放歌高吟を恣にする傍若無人の振舞の如くに映ずるやうである。學生の多數が概して之に顰蹙して居たのも怪むに足らない。

斯う云ふ憂ふべき現象の始めて氣附かれたのは考へて見れば昨今の事ではないのだ。併し始めはその所由を學生一時の狂熱に歸し、時に及んで勸戒の効を見得べしと考へられて居た。不幸にして數年の經驗はこの期待の全然無駄なることを明示し、私などまでが早く既に遠くの方から此上不當に寛大であるべからざるを叫んだのであつた。私の觀る所では、大學としては隨分長い間よくも斯くまで隱忍したものと思ふ。併し乍ら何時までも自衞の道を講せずして居るべきでない。遂にこの春以來東京帝大當局の態度は俄然として變つたらしいのである。

帝大當局方針の變更を證徴すべき最近の著しい出來事は次の二つである。

（一）新人會に對する解散命令。　新人會が前述ぶるが如き大學反逆者の巢窟なりや否やに確證はない。只不幸にしてその嫌疑の相當濃厚なるを如何ともし難い。新人會にして全然之に無關係なるを證明し得ざる以上、學校當局が學内に於けるその公認を取消さないのは亦止むを得ない。尤も新人會のやうな特定の思想を奉じ特定の實行を目的とする會合を將來すべて許さずとする當局の方針でないことは云ふまでもない。要はたゞ前述の所謂大學反逆者の魔手より學生並に大學そのものを護らんとす所に在る。彼等の據る所となるの恐ありと觀たから、當局は新人會に解散を命じたのだとすれば、同じ懸念から、もう暫くの間は同種の團結を許し難いと云ふことも認めねばなるまい。只それは一時便宜の處置に過ぎずして、根本的に思想的運動の爲にする學生の會合を一概に禁ずる意向でないことは、明白にしておく必要がある。

（二）社會科學研究會の禁止。　社會科學の研究を標榜する會合も今日遺憾ながら公許されて居ない。敢て私は遺憾乍らと云ふ。此點は大學當局も同樣だらうと思ふ。そは研究の自由が大學本然の生命であることは何人よりも能く當局の心得て居る所だからである。只不幸にして近年前段の所謂反逆的左傾運動が、社會科學研究の名に隱れて無遠慮に活動した事實がある。社會科學の研究則ち左傾運動と云ふやうな憂ふべき奇觀を呈し、爲に却て社會科學の純眞なる研究が阻礙を蒙ること頗る多かつた。乃ち大學當局は眞實の研究を近き將來に公許するを期しつつ、一時の便法として先づ爆發的左傾運動に進出の機會を封じ

ようとて、さてこそ暫く社會科學研究團結の公認を阻んで居るものの樣である。此事外形は研究の自由を阻止するに似て、其實寧ろ眞の自由の擁護確立を目的とするは毫も疑を容れない所である。

社會時評

斯くて東京帝大の當局は、一方に於ては一時の便法に恃み暫く學生間の思想運動に對する制限を設くることに依りて反逆的左傾運動の擾亂より自らを保護するの途を講ずると同時に、他方に於ては在籍學生中現に所謂反逆者たるの實最も明白なる者に對しては假借する所なく斷乎たる處分に出でんことを決意した樣である。その斯かる處置に出づるを青年訓育上得策とするや否やは別論として、從來世人が安價に考へ來りし如く之を以て思想並に行動に對する單なる譴責と觀るの失當なるは明白であると考へる。

猶ひそかに私の洩れ聞く所に依れば、大學當局は斯くてもなほその當人の在籍學生たるの身分に顧慮し且つ或る點までは一種の信念に發足し必ずしも故意に惡事を敢てする者に非るべきを想ひ、犯行に應じて直に相當の罰を課するを避け、一應は大學の立場を懇ろに説明して之を遵奉協力するの意なきやを糾すことにしたさうである。之を肯定承認せる者には改めて一定の書式に依る誓約書を提出せしめ、以て從來通り學業を繼續することを得しめる。尤も他日その誓約に反するの行爲あらば之に由て直に今日の恩典を喪ひ乃ち改めて重き所罰を受くべきは勿論である。若し命ずる所の宣誓を拒んだら如何する。乃ち學校當局と協戮するの意思全くなきものとして、大學は彼に自發的退學をすゝめる。學校としては敵を我陣中に安住せしめなければいゝので、強て彼を惡性の者として所罰するの必要を認めぬからである。更にまた彼が自發的退學の勸告をも拒むときは如何。是に於て當局は始めて退學處分の權を實行するのである。斯れが最近に於て採用せられた方針であり又多くの學內諸機關に於て承認せられた所だと聞いて居る。

但し例へば今度の豐島岡事件に於て前記の方針が正しく適用されたか否かは別問題だ。個々の事件に對する適用の正否は別個の問題として、一般に帝大內部の最近の狀勢に鑑み、原則として右の如き方針を執ることの可否得失は特に世上の愼密なる考慮を煩したいと思ふ。學生の事だから一から十まで嚴罰主義を以て臨むなと斷じ去るは、一應尤もと聞くが、昨今の狀勢に對する具體的の非難としては、いさゝか事實の認識を缺くの議論たることを免れないやうだ。

最近の新聞から

十一月初旬の東京朝日「鐵箒」欄に早明第三回戰に於ける「美しい情景」を報告せる小宮山と云ふ人の投書が載つて居た。その中の一二節を拔萃する。

……當日は早明兩校應援團は殆んど一萬に上り、その猛烈な應援は實に未曾有のものであつたが、試合終るや双方共にエールを交換し、そして先づ勝つた早稻田が「フレー〳〵、メイジ」を三唱すれば、敗れた明治は之に應へて「ワセダ、バンザイ」を三唱して、お互にグラウンドでの別れを告げた。次いで數千の早大應援團が神宮外苑を長蛇の列を作つて出でんとすれば、其處には既に是亦數千に上る明大の應援團が脫帽して整列し、敵なる早大の校歌「都の西北」を高唱し再び「ワセダ、バンザイ」を唱へて勝つた早大を見送つたのである。一方早大應援團はこの敵軍の美しい祝福に對して淚を以て「ありがたうたう」と叫びながら、堂々たる隊伍を整へ早大中央校庭の故大隈老總長の銅像の前に至り戰勝を報告し、次いで早大野球部合宿の前に至り野球部萬歲を唱へて解散した……

筆者の附記する如くほんとに歎賞に値する美しい光景である。併し私がこゝに態々之を轉載するは、由て以て既成政黨の代議士輩に皮肉らんが爲めではない。腐爛し切つた者には幾ら訓へて聞かしても駄目だ。せめて無產黨の人達の眼にでも留めて貰へば幸だと思つて採錄したのである。

同じ頃の時事新報「春夏秋冬」欄に、御大禮參列の爲め入洛した犬養老と三土藏相とを客に迎へた藤井善助と云ふ富豪が、一つしかない風呂に誰れを先きに入れたものかと思ひ惑つてゐると云ふ記事が出てゐた。犬養老の方は政界ではずうツと先輩だけれども大臣を差措いて先きに湯に入れては惡からうと考へたと云ふが本當なら、藤井と云ふ人は可なりの低能と見える。若し夫れ三土藏相彼自身が大臣たるの故を以て當然先きに這入つていゝと心中に決めてゐたとすれば、之はまた藤井以上の低能だが、流石に新聞にはさうとは書いてなかつた。

維新後暫くの間は、縣知事に任ぜられた者の中には昔の大名氣取りで管內巡視の途上百姓に土下坐さしたものもあつた。初期の議會で樺山資紀が議會の壇上から喧々囂々たる議員を叱咤して「もの共默れ」と叫んだ頃は大臣の沽券も餘程下落して居た。昨今はその地位を利用して多少の隱れたる役得を貪ることと田舍者から先輩を凌いで風呂に先きに入れて貰ふ位の尊敬を

受くることが大臣の身分に伴ふ特別の餘光となつて居る。官吏が名實共に國民の公僕となるの日はまだ少々遠い樣だが、併し達觀すれば我國の官民關係も先づは當然の順路を辿つて發達しつゝあると安心が出來る。

蘆花全集の推奬

近頃無茶苦茶に出る全集物の中最も私を喜ばしたものは蘆花全集である。印刷や製本や裝禎や萬事に頗る行き屆いて居るも嬉しいが、編輯に親切なのと入念の有益なる解題の添えられたのは最も滿足に思ふ所である。全部二十卷を皆この體裁でやつて貰つたら私共は唯々感謝の外はない。

　併し私のこの全集を茲處に推奬するのは右の點からばかりではない。私自身の興味の立場からである。私はこの數年來明治時代の文化史を研究して居るが、此の點から觀て私共は最も有益なる材料を豐富に蘆花先生の著作集中に見出すのである。全部ではないが、先生の述作の大半はいろ／＼違つた形に於て實によく明治時代を語つて居ると思ふ。それも政治とか軍事とか實業とかの單に社會の上層を語つて居る斗りではない、文學に思想に乃至は社會問題にも理解を有する熱情的一青年が、時代を觀、時代に抗し、或は時代に壓せられ或は時代を率ゐんとしたその痛烈なる苦悶奮鬪が記録されて居るのだから、我々後學の者に取つて之れ程有益な資料はないのである。私はよく友人達から明治文化史を書けとすゝめられる。書く氣はあるが急に書けるといふ自信はない。君が書かないなら外に何かいゝ書物はないかと聞かれるとき、私は毎時答へる、德富蘆花の「思ひ出の記」を讀め、「黑潮」を讀めと。近頃では頻りに「富士」を讀めと云つて居る。其他「不如歸」にしても、甘いローマンスと云つてしまへばそれ迄だが、戀愛並に結婚に關する新舊思想の初期の鬪ひを展開するものとしては亦一個の史的文獻たるを失はない。夫れに描寫の態度は蘆花先生に在ては徹頭徹尾眞摯だ。眞摯だと云ふことが彼の作品の文藝的價値の上にどれだけの加ふる所ありやは私に分らぬが、史的文獻としての價値から云へば、之が同じ問題を取扱つた他の文藝家と彼とを區別する明白な標準になる。例へば同じくあの時代の戀愛悲劇を取扱つた小説は外にもあらう、而もそれは藝術品としては一層優れたものであるかも知れぬ。にも拘らず私共がひとり「不如歸」を顧みて他を念頭に置かぬのは、一に彼の筆陣に臨む態度に由來する。要するに彼の作品の或る者は實にその儘明治文化史の忠實なる繪卷物である。この點に於て彼の作品は單に藝術品とし

ての意味の外に一種の不朽の價値を有すると私は考へる。

斯んな意味で推薦されるのは或は故人の眞意でないかも分らず、又蘆花先生のファンに取ても斯んな事はどうでもいゝのかも知れぬ。始めからことわつてある様に、蘆花をして蘆花たらしむ所以の本領は私に解らぬのだ。だが私はまた私の解する範圍に於て彼れの作品を愛讀し鑑賞し時にまた私の仕事に利用もする。之は私の勝手だ。そして私は私の勝手で蘆花先生を優れたる而して一風變つた文明史家に祭り上げて居る。世間には私と同じ趣味の人も相當に多い。この私の推奬の辭は、つまり之等の人達に私の感想を語りて徐かにその樂みを頒たんと欲するまでである。

この私の眞面目な感想が出版書肆から賴まれての心にもなき宣傳と誤解されんことを恐れ、私は故らに豫約募集締切期の經過するを待つて之を發表することにした。讀者に購讀の機を失はしめた樣のことがあつたら甚だ申譯ないと思つて居る。

昭和三年 ドン底の記録

貧困と賣られ行く女

草間八十雄

細民の種類と人口

自己には少しの資産と云ふものがないので、勤勞によつて生活を營まうと日々孳孳として働いてゐる薄給の勤め人、職工、工夫、日傭人夫、小使、車力、配達夫、人力挽、屑屋、遊藝人、洋傘直し、羅宇の仕替、夜店商人、按摩、雜業など、かゝる業態にある人々は、其の働きによる收入では、怎うしても經濟上人並の生活が出來ないものが少なくない。即ち社會ではかくの如き少額收入者を細民と唱へ、更に下層社會と見做してゐる。其れならばどれだけの收入額を標準に細民と非細民を區別するかと言へば、月收額六拾圓以下のものは細民と見なされてゐる。此月收額六拾圓以下とは、世帶主一人でそれだけを稼ぎ上げるもの、或は世帶主一人の働きだけでなく、妻と兒も尚ほ勞働能力があれば、老いたる者も一家共々に稼いで、それでやッと六拾圓に足りないもので、其孰れによるも一世帶の月收額六拾圓以下のものを細民線に置いてある。處で、最近東京府社會課で市外の細民長屋に住んで居る四千八百八拾八世帶の所謂細民に就てその月收額を調べて見ると、總數の六割六分三厘強は六拾圓以下の收入で、酷いのは二拾圓以下のもの、二拾五圓以下のもの、或は三拾圓以下に過ぎないものが五百三拾五世帶に上つてゐる。殊に哀れなのは、月收額二拾圓以下のものに按摩が六人、日傭人夫三拾九人、屑屋二拾七人、屑職二拾七人、納豆アサリ賣り拾一人、洗濯針仕事拾六人、下駄の齒入四人、此の外行商、夜番、ラオスゲカヘ、物占、等々、何れも月收二拾圓以下で一家の生計を支へて行くのであるから、人間らしい生活の出來やう筈はなく、其窮苦の態は察するに足るのである。

然らば此廣い東京には、一體月收六拾圓以下に過ぎないで細民線に生活するもの丶數はどの位に上つて居るだらう。之れに就ては未だ的確の數は判らない。然し大東京に於ける世帶總數の二拾分の一は六拾圓以下の月收にすぎないものだと社會行政方面では言つてゐる。さうすると昭和二年拾二月末日現在で總

組織の調べによると、東京の郡市を併せたる世帶數は百〇三拾七萬〇八拾七世帶、此人口四百七拾四萬八千百拾三人となつてゐる。其處で此二拾分の一が月收六拾圓以下の細民とすれば、世帶數に於て五萬一千八百五拾餘世帶、人口に於て二拾三萬七千四百餘人のものは要するに細民線に在つて常に物質に惠まれない貧しい人々である。

斯る多數の細民が大東京の生活場裡に在つて、夜となく晝となく生きんがためにもがいてゐる。其ればかりでなく、此の他に不定居的細民と言はれる哀れなものが少くない。其れは俗に「ドヤ」と云つて、木賃宿又は簡易宿泊所或は「オカン」と唱へ宿るに家なく、縋らうとしても知邊に離れ、詮方なく人家の軒下、公園のベンチ、橋の下、或は空家、或は大きなゴミ溜にもぐり込み、そうして雨露を凌ぐもの、更に「サプリ」と言つて、郊外の森の中又は草叢の中へ蒲鉾小屋を建て、其處で寢起きをするものなど、世に謂ふ宿ナシものさへあつて、さうした酷い境涯にある人々は、昨日までは木賃宿に泊り、今日は簡易宿泊所に移り、明くれば何處かで野宿をして淡い夢路を辿ると云ふ果敢ない生活を續け、何日も西に東に漂浮として流るゝ不定居的の細民である。が斯の如き悲境にある細民の數は之れも的確には判らないが、概算にすると木賃宿が四百軒に上つてゐるから、此處に宿るものが一日一萬二千人、公設併に私設の簡易宿泊所が三拾ヶ所一日二千五百人、次に「オカン」と稱する哀れな野宿ものが其處此處を合せて八百人、更に「サプリ」と言つて小屋に宿るものは市外中野、野方、幡ヶ谷、の各森林に居るものと、池上の水泉の森、尾久の荒川端、千住荒川堤下、小松川放水路の草叢など、合せて百五拾人のサプリがある。然して此不定居的細民と云つても、木賃宿や簡易宿泊所に泊るものは上層の部類として見なければならぬ。オカンやサプリなどは方にどん底の又そのどん底にもがく哀れな人々である。

上來述ぶるが如く、此大東京の巷には月收六拾圓以下の細民線に在つて貧しい生活をなせるものが二拾三萬七千四百餘人、其れから不定居細民がドヤ、オカン、サプリ、を合せ一萬五千四百餘人であるから、常に生活苦と闘ひにもがいて居るものは總てゞ二拾五萬二千八百餘人の多きに上るものと見るのが妥當であらう。人口の增加と生存の競爭に延いて國內人口の都市集中を來すのは必然的であるから、大東京に於ける細民の數は增加する一方で、從つてどん底の淵は日に日に擴がり、更に段々深くなるのである。

細民窟の變遷と昔の生活狀態

細民は集團的に居住するものと、散在的に居住するものとがある。卽ち集團的に居住する處が所謂細民窟である。此の細民窟も時代の流れに押されて變遷を見るのであつて、江戶時代から明治大正の時代にかけ有名であつた東京の細民窟は、（一）芝の新網、（二）四谷の鮫ヶ橋、（三）下谷の萬年町で、此三つは世に謂ふ「ドン底」生活にもがく貧しい人々の集りであつた。尙ほ此以外に江戶時代から明治大正の頃にかけ大小の細民窟が形成されたものでは山の手方面に於て二拾一ヶ所、下町方面で七拾四ヶ所、合せて九十五ヶ所に細民窟を見るのであつたが、東京市の膨脹につれ、土地の騰貴と屋賃の値上げが主なる原因で貧しい者は段々場末に逐はれ、流石に有名であつた下谷の萬年町は大正七年頃までに、殆どボロ長屋だの棟割長屋は整理され、大震

災直前にはわづかに二拾餘戸の貧民長屋を見るに過ぎなかつたが、其れも大震災で燒失し、今では全く細民窟の面影がない。又、芝の新網は大正の初年頃から細民の數が減少し、大震災直前に於ける不良住宅は二百戸位であつたが、之れも震災で燒失し、今では集團の態を失つてゐる。四谷の鮫ケ橋も明治時代の末葉から段々と貧しい人の數も減じ、大震災では燒失をのがれながら、現に在る細民の集團場所は谷町一二丁目を合せ二ヶ所であり、而も其戸數は双方でヤッと六拾戸位に過ぎない。然らば此頃の大小細民窟は何處であるかと言へば、市外にその場所が多いのであるが、市內としては山の手方面に於て四谷の旭町がそれである。此處には二拾餘軒の木賃宿と細民長屋が百戸餘り在る。其れから小石川の坂下町には俚俗五拾軒長屋と言ふボロ長屋があり、又同區白山御殿町から氷川下町にかけ約八百戸の大きな集團がある。又同西丸町には「イロハ」長屋と云ふ約二百戸の細民窟が現にあり、下町方面では淺草區淺草町に百餘戸の木賃宿が營まれてゐるから、此界隈に細民が群居するのも已むを得ない。更に本所では業平町に木賃宿があるので、此處にもいくらか細民が集團してゐる。殊に此近くの横川町には百軒長屋と言はれてゐる酷い環境が目につくのである。深川方面では彼の木賃宿があるので有名な富川町に七拾軒餘りの木賃宿があり、尙ほ細民の住宅が連らなつてゐるから、此處は細民集團の場所としては大きいのである。所で、東京市內の以上に於ける細民窟の將來を考察すると、震災で燒失に遭つた下町方面の細民窟は、復興事業の進行と共に漸次整理されるは必然であるから、一二年の後には、此方面に殘るものは不定居的細民と點散的の定居細民だけとなり、集團的の定居細民は其環境を崩壞されるであらう。かくの如く明治時代から細民は場末に移され、更に今日では市外へ逐はれ、其市外の其處此處へ、細民集團の新らしい環境が形成されてゐる。

茲に細民窟の狀態と細民の生活狀態を說くには、どうしても昔と今の態を比較的に述べねばならぬ。今から三拾餘年の昔に於ける萬年町、新網、鮫ケ橋、此三つの大きな細民窟に住める貧しい人々の生活が、いかに悲慘なものであつたか、恰も生地獄のやうであつたか。

（横山源之助氏著日本之下層社會　明治三拾一年刊行　拔萃）原文のまゝ

「東京の最下層とは那處ぞ。曰く四谷鮫ケ橋、曰く下谷萬年町、曰く芝新網、東京の三大貧民窟即ち是れなり」と其當時の細民の集團地を表はし、次には此處に於ける細民の業態を語つてゐる。

「僅に外觀を見れば、荒物屋、質屋、古道具屋、米屋、燒芋屋、紙屑屋、殘飯屋、酒屋、古下駄屋、八百屋、損料屋、土方請負、水油出賣、煮豆屋、ムキミ屋、豆腐屋、乾物屋を見るに過ぎずと雖も、一と度足を路次に入れば、見る限り襤褸を以て滿ち、予輩の心目を傷ましめ、彼の馬車を驅りて傲然たるもの、美飾麗裝して他に誇る者と相比し、人間の階級斯くまで相違するものあるかを嘆ぜしむ。就て其稼業を見れば、人足日傭取最も多く、次いで車夫、車力、土方、屑拾ひ、人相見、羅宇のすげかへ、下駄の歯入、水撒き、蛙取、井戸堀、便所探し、ほうふりとり、溝小便所掃除、古下駄買、按摩、大道講釋、かつぽれ、ちよぼくれ、かどづけ、盲乞食、世界有らゆる稼業は鮫ケ橋萬年町新網の三ケ所に集まれり。請ふ章を別ちて彼等の生活、一日の生計費用、融通機關、貧民教育、木賃宿

等、世人に顧みられざる技術の道具を記して江湖の一考を煩はさん。」

次に當時の鮫ヶ橋、萬年町、新網の細民戸口を擧げてある。

	戸數	人口
四谷鮫ヶ橋	一三六五	四九六四人
芝新網	五三二	三二二一人
下谷万年町	八六五	三八四九人
合計	二七六二	一、二〇三一人

更に次に於て三拾餘年以前の細民と其職業による日收を表はしてゐる。

道路人夫三拾六錢、土方人足拾錢乃至拾二錢、(但し食事は親方の負擔)、工場人足三十四錢内外、石工手傳五拾錢、左官手傳四拾五錢、大工手傳三十三錢、車力五拾錢、立ちん坊一定し難し一日拾錢乃至二十錢、人力挽お抱一ヶ月拾二圓乃至拾五圓、やど車挽一ヶ月拾三四圓、ばん一日五拾錢、もらう一日五拾錢、屑拾ひ(一)紙屑拾ひ一日拾五錢内外、古繩古靴拾ひ七錢、硝子屑拾ひ五六錢、下駄齒入一日三拾錢、羅宇すげかへ一日二拾錢、大道講釋、かつぽれ、ちよぼくれ、辻三味線一日二拾錢乃至三拾錢。

いかに物價指數の低い時代とは云へ、細民の收入は以上の如くで、最も多いもので一日五拾錢、最も少額のものは硝子屑拾ひの一日五六錢と云ふが如き、如何にして其日の生計を支へたものか、不思議と言はねばならぬ。で、茲に明治三拾年拾二月、芝新網の門づけ藝人で、一人の母と二人の子供をもてる世帶の一日に於ける生計費が掲げてある。

米代(一升二合)拾七錢、薪炭代二錢、肴代四錢、酒代三錢、莨代七厘、石油代五厘、小供の小遣一錢、屋賃一日二錢五厘、布團損料一日二錢六厘、(但し四幅二枚)

合計三拾三錢三厘

尙ほ新網の車夫で四人家族の世帶につき其一日の生計費を見ると、米代、薪炭、副食物、石油、家賃、其他一切で一日四拾五錢九厘で支へて居るものが擧げてある。

其れで一日三拾三錢餘り、或は四拾五錢餘りで生計を立てゝ行けるものは良い方である。彼の立ちん坊の一日拾錢乃至二拾錢、屑拾ひの一日五六錢から精々二拾錢位の收入あるものは、どうして生きて居つたかと云ふ疑問が起る。處が斯るどん底では、その當時其れだけの收入で生活の出來る途があつた。

それは軍隊學校病院などから出る殘飯殘菜を買つて、それで口糊を凌いだのである。此處に殘飯屋で當時賣つた殘飯殘菜の値段を擧げて見よう。

殘飯上等百二拾匁一錢、(但し碗に四杯分)
殘飯下等百七拾匁一錢、(但し碗に五杯分)
殘菜 一人前一度分一厘
殘汁 同 上 二厘

一食に一錢の殘飯と二厘の殘汁と一厘の殘菜合せて一錢三厘で腹が膨れるのである。故に家賃、莨錢、石油代を別にして食費だけならば一日四錢で生きて行けるのである。

大正時代の細民生活狀態

以上の時代より星霜を經ること二拾三年に當る大正拾年拾一月に、内務省社會局では、東京市内に於て、最も醜い細民窟と言はれる四谷の旭町、淺草の淺草町、深川の猿江裏町、此三ヶ所の細民四百九拾七世帶に就き、綿密なる生計調査を行つたのである。當時歐洲大戰後の反動來で、世間は漸く不況に傾いては來たが、未だ好景氣の餘燼があつたので、財界もさうまで不況でなく、從つて下層社會にも潤ひがあり、失業に惱むもの減少に

泣くものなど少なく、調査の結果を見ると細民の懐中はさまで枯渇せずに其日を過してゐることが判つた。茲に當時の細民生計狀態の一斑を語ることにする。

調査を受けた世帶數は四百九拾七世帶、此人口二千八百六拾九人、一世帶の平均人口四人と三分四厘、住宅の狀態は一人當りの疊數僅に一疊、かゝる小さな住宅の家賃は一戸平均四圓二拾二錢である。そして世帶主の職業は概ね勞働者で、大工、左官、土方が百二拾人、日傭人夫、撒水夫、掃除人、厨屋が六拾七人、車力、人力挽、其他運輸に從事するもの九拾七人、物品行商或は販賣五拾一人、此以外は職工で、彼の明治三拾年新網、鮫ヶ橋、萬年町が細民窟であつたとき、其處にはカッポレ、チョボクレ、大道講釋と云つたやうな下等遊藝人が多かつたのに、今度の調査では、按摩が一人、遊藝人と見るべきものは二三人で、時代はそうした業のものを少くし、多くは産業方面に働くやうに向上してきた。そして世帶の收入額を見ると、中には世帶主一人の働らきで生計を立てゝゐるものと、又妻や兒と共々働いて收入を得て居るのと二つになつてゐるが、兎にかく勤勞收入は一世帶當り月收五拾九圓九拾錢、營業財産繰越金と云つて、間貸しをするもの、駄菓子店を兼業にするもの、貯金の利子、前月の殘金など七圓八拾三錢、合せて六拾七圓七拾三錢の收入に上つてゐた。

其後大正拾五年六月に東京府社會課で市外の品川、千駄ヶ谷、板橋、日暮里、三河島、南千住、千住、龜戸、其他數ヶ所の細民に就て調べて見ると、一世帶當り平均の月收額は五拾九圓程であつた。さうすると六年以前の大正拾年に、内務省社會局で、どん底の町として有名な深川猿江裏町、四谷旭町、淺草の淺草町を調べたときは、一世帶平均六拾七圓七拾錢强の收入であつたから、その時と比較すると、不景氣の度合が年々と高まり、其れが影響は下層社會に慘害を及ぼせることが頷かれる。

最近に於けるトンネル長屋

昨今に於ける細民の生活振りを探つて見ると、何處も不景氣に惱まされてゐる。其實例として見るべきは、市外南千住の三の輪に朝日館と云ふ「トンネル」長屋がある。震災前までは市内と市外にかうしたトンネル長屋は拾九ヶ所あつたが、今では此朝日館一つだけで、五間に二拾二間の二階建の長屋で、階上階下とも眞中六尺が通路で、其兩側に四疊の部屋がヅラリと並び、階上四拾室階下も四拾室合せて八拾室あるが、此頃は此處に約七拾世帶三百人からの貧しい人々が住んでゐる。晴天の日の晝間でも内に這入ると、薄暗いのと其形ちがトンネルに似てゐるので、俗にトンネル長屋と謂ふのである。此トンネル長屋を見ては、之れでも人間の住家かと思はれる位醜いもので、臺所も流しもなく、又此すきな長屋に便所は共用で五ヶ所あるのみ、通風換氣が不良で、邊りが不潔であるから、臭氣で滿ちてゐる。此長屋の世帶主は概ね其日稼ぎの人夫である。此頃の收入を聞いて見ると、一日壹圓三拾錢乃至壹圓八拾錢で、平均壹圓五拾錢位、一ヶ月仕事に就く日が精々二拾三日であるから、月收を見積ると三拾四五圓である。之れで一家數口の生計を支へて行くのであるから、家賃の如きも滯納に陷りやすい。此長屋は一ヶ月いくらの家賃ではなく、一日いくらの日拂ひ家賃で、此頃は一日拾五錢の家賃であるが、不景氣で銘々の稼高が上らないので、一ヶ月に二拾日分の家賃を拂へ

るものは成績の良い方である。

一度どん底に陥ち生活苦の波に漂つては、容易に其淵から浮ばれない。前に述べたる今から三拾餘年昔の新網、萬年町、鮫ヶ橋の貧民も、今日此頃の細民も、矢張り物質に恵まれないのは同じである。たゞ歐洲大戰の影響で黄金の渦がまいた當時は、どん底の淵に漂ふ人々も其餘波をうけ、幾らか人間らしい生活をしたのも束の間で、過ぎては漠々たる浮雲の如く、今や窮巷に落日を悲しむものが多いのである。

貧しい家から生まれる賣笑婦

例令トンネル長屋でも、又棟割長屋にでも住まへるものは定居的細民であるから、即ちどん底と云つても上層の類ひである。彼のどん底の下層は不定居的の細民である。「どや」「さぶり」「おかん」の類ひである。段々と調べて見ると、曾ては定居的の上層に在つたものが、下層に降り、浮浪者となり、乞食となるものが少くない。之れは定居的細民の境遇にあつたとき、(一)失業、(二)疾病、(三)怠惰、此等の中の一つが原因となつて生計に行詰り、第一に家賃が拂へない、又は間代が滞ると云ふ破目から、定居を遂はれるので已むなく木賃宿に移る。此度は其處に泊る資力さへなく、遂に漂泊浮浪の悲しむべき身空となるものがある。今年の七月四百七拾三人の野宿者に就て調べると、半數までは其れであつた。畢竟するに素寒貧であつて筋肉が唯一の資源である細民が、失業によつて其筋肉を働かせることが出來ない。又疾病のために活動が出來なければ、どん底の又どん底に陷るのは無理がない。然しながら斯る逆境、難澁のときに當り、兒女ある者は其女兒の肉體を商品化させて生計の行詰りを打破するものがある。かくして貧乏の上層線に踏み止るのであるが、其れは吾兒を賣られ行く女とするのである。即ち貧困と云ふ哀れな事情に捉はれて、年端の行かない拾才内外又は十二三の小娘さへ賣られて行くのである。かゝる小娘は概ね藝妓屋へ「仕込」と云つて賣られ、後後は藝妓となるのである。値段は百圓から三百圓止り、拾五六の娘は田舍の曖昧料理店へ酌婦に賣られて行く。拾八才以上では娼妓となるものがある。此廣い東京で一ヶ年にどの位の數が賣られ行く女となるかと言へば、驚くべき多數なもので、東京地方には俗に女衒と稱する藝娼妓酌婦紹介營業者が二百六拾人も上つてゐる。此女衒の手で紹介され賣られ行く女となつたものは、大正拾五年中に次の如き數に上つてゐる。

藝妓三千三百三十二人　娼妓八百六拾四人
酌婦九百六拾人　合計五千百五十六人

かくの如く最近一ヶ年間に五千百餘人の女が(東京)柳暗花明の色里へ賣られ行くのであつて、そして身代金は藝妓一人當り平均九百五拾圓、娼妓一千二百二拾圓、酌婦二百二拾六圓である、孰れも此身代金の内から女衒へ手數料五分を支拂ふ、(百圓で五圓の割合)更に不見金(ミズキン)と云ふて裝身具衣類を揃へるので二割位を引去るから、一千圓の身代金でも親の手には結局七百五拾圓位渡るにすぎない。(中には不見金を刎ねない抱主もある。)で、娘や妹を色里に賣るやうな家庭は假令日常體裁をつくつてゐても、内容は空虚で貧困と生活難の暗翳に掩はれた貧しい家庭であることは言ふまでもない。茲に昭和元年拾月(大正十五年)から昭和二年九月に至る滿一ヶ年間に吉原遊廓で娼妓稼業に就たものは六百八拾二人である。此等のうちには東京生れと田舍出のあることは勿論であるが、此者に就業せる六百八

拾二人の娼妓と其家庭の主なるもの、即ち世帯主の職業を擧げ、斯うして賣られ行く女を出せる家庭は、概ね貧しいものであることを認から。

小作農	一七九人	無職	九七人
漁師	三二人	日傭人夫	二二人
魚行商	一四人	飲食店	一二人
植木職手傳	一一人	雑貨商	一〇人
工場職工	一〇人	理髪業	九人
木挽職	九人	車力	八人
鍛冶職	七人	瓦職	七人
菓子行商	七人	車夫	七人
内職	七人	不明	七人
洗張仕立	六人	薪炭商	五人
鑛夫	五人	カザリ職	五人
石工	五人	料理屋	五人
土木業	四人	屑屋	四人
會社員	四人	紺屋職	四人
昆布商	四人	下駄歯入	四人
古道具商	四人	青物行商	三人
屋根職	三人	肉屋	三人
左官職	三人	雑貨行商	三人
使丁	三人	船乗り	三人
材木サイトリ	三人	俳優	三人
水菓子商	三人		

此以外養豚業、妓夫、表具師、牛馬賣買、樂器職工、鉄力職、商店員、ガス職工指物職、建具職、網細職、桶職、カハラ職、定傭人夫、洋傘直し、洋服職、イカケ職、彫刻師、ペンキ職、コマイ、職羅宇スゲカエ、印刷業、官公衙雇傭員、生來クリ職草履職、芝居出方、以上各二人

尚ほ電車々掌、時計直し、袋物商、水車業、モスリン女工、女髪結、新内流し、ゴム靴直し、行者、撒水夫、露店商、集金人、神主、鮨屋、周旋屋、帽子洗たく、各一人と外に色々な業につくものが九拾人に上つてゐ※る。以上の如く、六百八拾二人の娼妓の父や兄は、何れも其職業の上から觀て、無産階級である、貧しいものであるやうに思はれる。

私娼と女浮浪者の娼行爲

次に、彼の銘酒屋女と稱する龜戸、玉の井の私娼は、今やその數二千人に上らうとしてゐる。此種私娼につき、それとなる原因を以て、斯うして彼等の多くは、貧困に由るものか、或は自墮落ものであるか、又は誘惑されたものであらうか。茲に、玉の井の私娼二百五拾人につき、それとなる原因別を擧げて見よう。△

貧困ナル家計補助ノタメ	父母兄弟ノ醫療ノタメ	家庭借金整理ノタメ	夫ノ病氣醫療ノタメ	子女養育ノタメ	自己生活ノタメ	家出誘拐サレテ	家庭不和ノタメ	其他	計
一〇五	四五	二〇	二	八	四七	一四	八	一	二五〇

△總數の四割二分は、貧困なる家計補助のためで、即ち、貧しい家のために、犠牲的に此暗黒界に這入つたのである。尚、八分に當る數は、是又家庭の借金整理のためで、何れも貧しい家のために、肉體を商品化したのである。此以外、父母、兄弟、夫の病氣のために這入つたものは、實數四拾七人に上るのである。たゞ、此處に問題となるのは、自己の生活のために這入つたもので、此等は言ふまでもなく、貧困が主なる原因でなく、淺ましい

業ではあるが、他の職業につくより儲けが多い、享樂は縱まゝに出來るといふ自己本位から此途に就いたのであるから、言はば自墮落な女である。要するに此私娼も、その多くは貧困が主なる原因で、家のため、親のために賣られたものと見做さねばなるまい。

貧困と云ふ經濟的事情が主なる原因で發生する賣笑婦は、今やその數は各府縣を合せると、二拾三萬三千九百人の多きに上つてゐる。即ち藝妓七萬九千六百三拾四人、娼妓五萬二千三百二拾五人、酌婦拾萬一千九百六拾六人である。故に國勢調査による男性人口三千〇一萬二千八百二拾人に、之れを振り當てると、男子百二拾九人にそれが一人當りとなる。經濟的に又社會的に之れを觀るも、抑々重大な問題である。然も、此以外、其筋の統計的調査に上ることの出來ないものに、街娼がある。東京地方では、一ヶ年に密淫賣犯で檢擧された女は、昭和二年に三千七百二拾人の多きに上つてゐる。此中で、龜戸と玉の井で檢擧されたものが三千〇六拾六人で、此以外の六百五拾四人は各方面で檢擧されてゐる。然らば、街娼俗に謂ふ夜鷹、辻君はどの位ひ擧げられてゐるか、此等に就ては明確に判らないが、淺草の象潟と、日本堤の兩署で六拾一人を押へてゐる。本所の原庭署は五拾八人を擧げてゐる。即ち、此方面で檢擧された百拾九人の密淫賣婦は、概ね街娼と見做すべきもので、日本堤署で押へるのは、俗に「つれ込み」と稱し、淫蕩男の袖を曳き、淺草町の安宿へ連れ込み、其處で賣笑をなせるものが多い。又象潟署で擧げるのは、淺草公園に出沒する街娼であり、原庭署の方は業平町の木賃宿で押へる所謂つれ込みである。然しながら、以上の密淫賣は下等賣笑婦で、從つて相手の男も勞働者が多い。(例外は別問題)殊に淺草公園に出沒する街娼は女浮浪者で、今年の七月、私は四百七拾三人の野宿者を調べたとき、女の野宿者を二拾人見出した。此中で淺草では拾八人を見出したが、年齢は拾四歳から七拾歳までゝ、其七拾歳の老婆は「づけ」と言つて、料理店から出る客の食殘しものを貰つて其日を過ごす哀れなものであつたが、他の女は何れも淫れ男を相手にするもので、埼玉生れのお滿(四拾)の如きは淺草に出沒すること二拾年の長きに亘り、密淫賣犯で處分されたことが三拾餘回の多きに達し、栃木生れの、おきく(四十二)には七回の處分を受けてゐる。此外に五拾の坂を越へた、おいらんと云ふ綽名の女も二拾回から處分されてゐた。百鬼夜行の淺草にはかゝる女浮浪者で賣笑するものがゐる。二拾歳以下の女は家庭不和による家出、又は繼母の虐待に耐へないで逃げ出せるもの、或は幼ないときに兩親に死別せる孤兒で、此等は孤兒院の世話になつたことがあり、養育院に這入つたことのあるもので、前身は賣笑婦ではないが、三拾以上の年齢を越へてゐる女は殆ど酌婦又は娼妓の果てゞあるとか、さもなければ低能である。彼等に就て一々身の上を尋問して見ると、涙の種ならざるはなく、堅氣になりたくも相手はなく、又自墮落が習性となつて容易に節制ある生活は出來ず、中には自暴自棄から僅かな端た金で笑ひを賣り、その金で冷酒をあほつて終ふ。相手がないときは「づけ」で口糊を凌いでゐる。其實情を見ては心あるものは惻隱の思ひに堪へない。

上來述ぶるところは、昔と今の悲慘なる細民生活事態を說き、今も昔も貧しきものは物質の惠みに乏しく、自動的に其境涯を脫け出ることの容易でないこと、又貧困から生み出される賣られ行く女の悲哀を語り、こゝに筆

を描くことにする。

淺草公園深夜のグレ狩り

宮城護夫

一

淺草公園內に巢喰つてゐるグレ——浮浪人が、男女老幼取りまぜてざつと五百人ほどゐた。この夏のことである。それ等を象潟署總動員で、片つ端から狩り立てて檢擧したことがある。目的は、御大典も近づいたので、不良分子を一掃し、公園內を綺麗に片づけることゝ、浮浪人を夫れ〳〵に分類し、それ相應の方法で救濟してやらうといふのにあつたらしかつた。

今から八九年ほど以前に、これと同じやうなことをやつたことがあつたが、その時のは今度のほど大袈裟なものではなかつたさうで、だから今度のグレ狩りは、淺草公園始まつて以來の事件であるといふことであつた。署長始め、署員一同非常な緊張振りであつたことはいふまでもない。

先づ、夜半を過ぐる一時を合圖として、公園から外界へ通ずる要所々々を、官服私服の署員が二重に取り卷いた。鼠の子一匹逃がすまいといふ意氣込みである。かうして公園の周圍を完全に包圍してから、同じく官服私服の署員が數十人、夫れ〳〵手分けをして、公園內に入り込み、片つ端から蟲つぶしに狩り立てようといふ段取りであつた。

ところで、淺草公園內に巢を喰つてゐる浮浪人は、日本中の浮浪人のあらゆる種類を網羅してゐる。第一に乞食、第二に追つかけ、(立ん坊)第三にバッタ(廃溜から廃溜を漁るもの)第四に犯罪者、第五に淫賣婦、第六に不良少年少女、といふ工合である。そしてこれ等は公園內に所構はず雜居してゐるのではなく、自然と夫れ夫れの地域を占めて一つのグループを造つてゐる。富川町の木賃宿に寢泊りをしてゐる自由勞働者が、三疊の部屋へ三人で寢るのにも、自分の寢る疊をちやんと極めて置くといふことを知つた時、人間はどこまで陷ちても、常に最後の安住所を見つけて置くものだと私は思つたことがあつたが、公園內のグレも、橫たはるべきベンチ、凭るべき木、潛むべき蔭を各々定めて、さうして生活樣式の相似たものが相寄つてゐるのである。

大別すれば、仲見世の方から仁王門を入り、本堂の右側の方が乞食、追つかけ、バッタといふ種で、好人物で柔和な、消極的生活を營んでゐる人間達の棲む世界である。本堂の左側から後の方は、犯罪者、不良少年少女達の積極的生活者の世界で、これ等の仲間は時にドスを呑んでゐて、下手に近づいたりすると匕首をずぶりと刺して來る者もひそんでゐる。瓢箪池附近に徘徊してゐるものは分けても凄い奴である。彼等は、池一つを隔てた活動街の華かな灯の世界を冷やかに見詰めながら、そこに蠢めいてゐる幸福さうな善男

醜女を、餌食とすべき羊の群と見て、常に獅子のごとく牙を研いでゐるのである。それより更らに一丁ほど離れた幸龍寺の墓地を根城とした一團がある。これは不良少年で、しかも東京中で最も鋭どい感覺と神經を持つたいはやぶさの如き一團である。（勿論この夜、この墓地の周圍も包圍した）

さて、これ等のグレを相手とし、これ等グレ仲間の公娼である淫賣婦が三人ほどゐる。その一人はおきく婆と稱し、本堂の右側に棲む消極派のグレ數十人を相手としてゐるものである。遊興費は、、、、、、で、その、、錢さへ出せば、、、、、、、、、、、遊んでやる。、、、、、、、、、、、、、、、、、、である。衆人とはいふまでもなく、同じ彼等仲間であるが、これは實は環視してゐる衆人から一人當り幾何といふ、、を取り立てるので、見物人が多ければ多いほど彼女は職務に忠實であるのだ。昔の大名殿様には、さういふ點に何等の羞恥心もなかつたものがあつたといふが、彼女もまたそれである。その夜、狩り立てられて象潟署へ逆行される時、彼女は側の一人の署員に向つてから言つてゐた。

一ちえツ、俺ァ淫賣なんぞしたことアねえんだから」

「馬鹿野郎、昨日もしてゐたぢやないか、ちやんと見とるぞ一

「てへゝゝ、あれはちやんと、、、出したんだよ一

この言ひ草に依ると、彼女は無料の方を淫賣と心得てゐるらしい。食ふためにすることは如何なる手段も善である彼等に取つては、食ふ足しにならぬ事は凡て惡である。それだけのことであるのだ。

もう二人の淫賣婦、それは二人共漸く十四五才の少女で、一人の方の名を「ざんきりのおきみ一といふ。これは名の示す如く斷髪のモダーンガールの姿をしてゐる。他の一人は斷髪でもなく、自分の名も知らぬ低腦兒である。この二人は、、、、、、、、、、、、、、、中の一郎を占有してゐる。鐵の柵を境界として、謂はゞ此處は、彼等浮浪者の世界に於てのなかである。、、、ステーキを持參すれば誰でも大手を振つてこの柵を跨ぎ入ることが出來るが、その金を持たぬものは一歩も踏み入ることが出來ない。うつかり踏み入らうものなら、彼等仲間から死ぬやうな目に合されるる。即ち彼等の世界に於る儼然たる公娼である。

此處でもう一度繰り返して言はう。人間にどこまで陷ちても、常に最後の安住所を造つて置く。

二

さていよく狩り出しとなる。ちやうど糠のやうな雨が降り出し、木立に包まれた公園内は淺黄色に煙つてゐた。その中を、白ズボンの署員が劍をちやらくさせながら走る。はつぴ、擊劍の稽古着、ゆかた掛けに尻ッぱしよりの署員が飛ぶ。

「起きろ一

「立て」

「歩け一

さういふ聲が所々から起る。それは、石を打つて羊と化した昔の支那人の聖人の際に似てゐる。そしてその際に打たれたベンチの上の石、木の根元の岩がもくくと動き出して、手足のついた人間となる。やがて獸々として歩き出す。それがこちから三人、そちから五人と集り、本堂の左手の空地へ二列橫隊に並ばされるのである。

深夜の靜寂、ぐつすり寢込んだところだけ

に、彼等の驚きは一通りではなかつた。これまで何年かの間、觀音樣の加護に依つて、たとへ夜露を浴びながらも至極圓かな夢を結んで來てゐただけに、彼等の驚きは非常なものであつた。

「だれでえ、起しやがるなア」

そんなことを言つて、署員からどなりつけられてゐる奴もある。

最も驚いた仲間は、本堂の右側の消極派であつた。彼等の半數は、二疊、三疊、四疊の疊敷きの家を造り、一つの立派な家庭を營んでゐるだけに、深夜の不意の侵入者を見て、强盜ではないかと思つた。それも無理はない。彼等の中には、數十圓、或ひは數百圓を所持し、彼等仲間での大旦那であるものもゐるのだから。

「惡いやうにはしないから、さア出て來た」

さう言はれて、彼等は驚きながらも素直に着物を着て出て來た。この仲間は、家がなく地べたへ蓆を敷いて寢てゐる連中でも、大抵素はだかになつて寢てゐる。

驚くと同時に「手が入つたな」と感づいて、態と悠々と構へながら隙を狙つてゐるのは本堂の左手から瓢箪池の附近に棲む積極派の連中である。二遍や三遍の際では眠つたふりをしてゐる。尻をこづかれてやつと起き上る。あくびをしながらからだをぼり／＼搔いたりする。それから身のまわりのものを纏め始める。その樣子には驚くほどの餘裕がある。

「旦那、いま何時でがせう」などと、超然としてゐる奴もゐた。

消極派には夫婦もあり、一家族をなし、一通りの世帶道具を揃へ、犬まで飼つて（犬は寒中、布團の代りになるものである）共同生活を營んでゐるものもあるが、この積極派にはさういふものは一つもない。凡て一人々々の孤立者ばかりである。さうして着のみ着のまゝでごろ寢をしてゐるものが多い。しかし五人に一人ぐらゐの割合で、一通りの身のまわりの道具を持つてゐる。小ざつぱりした着換の一揃を持つてゐるものもある。垢のつかない單衣、へこ帶、鳥打帽、疊表の草履、ハンケチから眼鏡、扇まで揃へてあり、何かで懷中が暖かになると、先づ床屋へ行き風呂へ入つて、それから右の一揃へをぞろりと身につけ、眼鏡を光らし、しやら／＼と仲見世を出て行く。そして洋食、天ぷら、うなぎ、そんな所でお腹をつくり、チップをはずんで悠々と出て行く。行く先は吉原、洲崎、龜井戶、玉の井。そこでまた何處かの小旦那然と、綺麗に遊ぶのだといふ。しかもこれが月に二回乃至三回は出來るのだといふ。大學出たてのサラリー・マンなどには眞似の出來ないことである。

改めて言ふまでもないことであるが、彼等には生活難といふやうなことは先づないと言つていゝのである。起きてはヅケ（殘飯）を貰ひ食ひ、寢ては大空の下、大地の上に夢を結べば、生きるためには錢一文も不必要なのである。乞食をすれば月少なくも四十圓から六十圓の收入があり、追つかけ、バッタ、或ひは勞働をしても二十圓から三十圓にはなる。この金が悉く生活以外のことに當てることが出來るのだから、月に二度や三度の遊びの出來ることは少しも不思議はないのである。

「一杯やりやしてね、足元がふらつくもんで、一寢入りしてから家へ歸らうと思つてゐたんですよ」と、そんな風に言ひ拔けようとする奴もゐた。事實、ぷん／＼と熟柿の匂ひをさしてゐる。女よりも酒といふ奴は、その金に不自由はしないのだから、それだけはほんとうである。

「だが、お前の家といふのはこの園公（公園のこと）だらう」と署員につゝ込まれる。
「へッへ、御冗談でせう」
「野郎、ふざけるかつ！」
「へえ、これはどうも」
この積極派には、暗から暗へ栗鼠の如く飛び廻り、容易に正體をつかませない勇士もゐる。署員は懐中電燈を照らしながらそれを追跡する。繁つた木の枝の上に暗の塊のやうにしてとまつてゐるものがある。大木の根元にやもりのやうに貼りつき、右から廻れば左へ、左から廻れば右へと辷り逃げ、うつかりしてゐる間に向うの暗の中へ消えてしまふ奴もある。通り端に何でもなく置いてあるコンクリート管の中に、さなぎのやうに圓まつてゐる男もある。炭俵の中に縮まり、蓑虫のやうに石碑の横に立てかゝつてゐるのもある。丸太を立てかけた中に自分も丸太のやうに細長く延びてぢつとしてゐる奴もある。彼等は、かういふことに掛けては實に立派な忍術師なのだ。
この忍術に掛けては、その技神に入る、といふ感じの一團がある。それは幸龍寺の墓地に巣喰つてゐる不良少年の一團である。凡そ百人ほどゐるが、その夜の檢擧網には一人も引つかゝらなかつたといふ事實を見てもそれが解る。彼等は第六感を持つてゐる。實にちよつとした現象で、今夜は手が入るといふことを豫知する。そしてその夜署員の一隊が押し寄せた時は、影も形も見せなかつたといふ。幾百と立つてゐる墓碑の裏側にぴつたりと貼りついてしまつてゐるのだ。一つの墓碑に一人の割りで搜索しない以上、金輪際掴まらないのだ。彼等は、時に栗鼠であり、時にやもりであり、時に地鼠であり、時に暗であり、さうして時には空氣であつたりする。ひらりと動いた影を突き止めて見ると、そこには夜の暗しか殘つてゐないといふ有様、これには署員も腕を撫して呆れてゐた。

三

とにかくこのやうにして、二時過ぎる頃までには、凡そ三百人のグレが狩り集められた。それを本堂の左手の空地へ三組に分ち、各組を二列横隊に並べたのである。
一方には觀音堂の屋根が大きく兩翼をひろげて空を區切る。一方には大樹の梢が黒く高く盛り上つて大地を包んでゐる。この下に並べ立たされた三百人の浮浪者の列、——蓬々の頭、いが栗頭、頰かむり頭、鳥打帽、麥藁帽、ぼろぼろの着物、尻きり襦袢、印半天、素はだし、ごむ靴、はだし足袋、それ等が反面を強いアーク燈に照らされて默々と蠢いてゐる姿。私は未だ曾てこのやうな奇怪な人間の一群を見たことがない。たとへ豚でも三百と並べて見れば、そこに生きものとしての生氣と美しさがある。が、この人間の一群は何處一つさういふものを持つてゐない。只うぢうぢと蠢めいてゐる奇怪な物質の一團としか見えなかつたのである。
しかし彼等の一人一人をよく見れば、夫れ夫れ立派な一個の存在を主張してゐるのだ。どれを見ても一癖ある面構ひをしてゐる。人生の風雨、荒波と鬪ひつゞけて來た強さと深さを持つてゐる。愚鈍は愚鈍なりに一つの重厚な影を宿してゐる。そこにはぼつちりとも人生をお目出度く見てゐるやうな輕薄さはなかつた。
「俺達を何處へ引つ張つて行くんだらうな」
「刑務所さ」
彼等はさういふことをぼそぼそと話し合つてゐる。

「御大典の紀念事業に、俺達を救つてくれるんだとさ」
「娑婆の奴等に救はれちや一生浮ばれねえや」
　そこへ、
「默らねえか、一言でも物を言つたらひどいぞ」と大喝一聲。そこで彼等は首をすくめ舌を出して默りこんだ。
　二人の少女淫賣婦もいつか行列に加つてゐた。所謂「ざんぎりのおきみ」と、名なしの娘とである。さつき私はこれを斷髮のモダーンガールの姿と言つたので、讀者諸氏は、紅白粉を塗り立て、派出なメリンスの單衣でも纏つた玉の井邊の女の容子を聯想したかも知れぬが、それはお氣の毒さまで、その正體は、素はだしに、膝きりの筒つぽの縞目も見えない紺がすりの單衣、それに繩のやうな細紐をしめただけの姿である。髮は藁のやうに亂れて、一見男とも女とも判斷しかねる恰好である。一言で言へば、河童が立ち上つた姿である。銀座を横行するモガにも、身に纏ふ布に上下はあれ、一見し二見しても河童が歩いてゐるとしか見えないのがあるのだから、こつちが河童に見えるのは當り前のことではあらう。但しこちらの方がずつと本物の河童に近い恰好をしてゐるだけ、銀座の河童にあるやうな鼻持ちならぬ臭氣、不快さはないのである。
　彼女達は列の中に立ちながら、面を伏せて後を見、横を見て、頻に手をやり、肩を撫でたりして、純な處女のやうにきまり惡かつてゐた。
　署員は列を取り卷いて幾度か人數を數へた。さうしていよ〳〵象潟署へ送り込まうとしてゐる時であつた。私服の署員に守られて一人の人間が、木馬館の裏の方から現はれて來た。遠くから見ると、それは一つの大きなかたつむりが歩いて來るといふ感じであつた。腰が蝦のやうに曲り、その曲つた腰の上へ大きな荷物、彼の總財産を載せてゐる。その重さを二本の杖で支へながら、ずるり〳〵と歩いて來る。二本の杖はかたつむりの二本の觸角にも見えた。よく見ると彼は盲目でもあつたのだ。私はこの人間を傍に寄つて見た時、觀音樣のある淺草公園なればこそ、かういふ人間をも生かして置くことが出來るのだと思つたのである。さうして私は、この人間の姿が、彼等數百人の浮浪者の最後の姿をシンボライズしたもののやうに感じたのである。私は何かしら感激に似た氣持に包まれた。
　やがて行列は、數十人の官服署員に前後左右を圍まれながら、瀕死の長蛇の如くずるずると動き出した。さうして公園の裏門から象潟署に向つたのである。

四

　裏門から象潟署までは五六丁ある。寢靜まつた夜の街の中を、默々として動いて行くこの行列の姿もまた一つの奇觀であつた。百鬼夜行とはこゝから生れた言葉であらう。
　私はこの行列の進行中に、また二つの不可思議な感激を起させる場面を見たのである。
　その一つは、乞食の老夫婦であつた。二人共、霧雨に濡れたぼと〳〵の着物を引きずるやうに纏ひ、亭主の方はむき出しの頭で、女房の方は手拭をかむつてゐた。二人は手と手をしつかりと握り合つて歩いてゐるのである。うつかりしたら別々に離されてしまふぞ、と警戒してゐるやうに、ほんとうにしつかりと握り合つてゐる。その容子には、死なば諸共と云ふ感じが溢れてゐるのである。亭主の方、

脚氣なのだらう、脚を引きずるやうにして歩いてゐる。女房にまたそれを劬はるやうにして、とき〴〵耳元に何か囁いてやる。亭主は寂しさうにうなづいては歩く。私はこの夫婦を見て、この二人こそ生命と生命と結びついてゐるのだ、といふ感じを受けたのであつた。

も一つは、十二三の少年と、一匹の大きな犬とを連れた男であつた。この男はヂヤンバルヂヤンのやうな顔と容子をしてゐた。大きな風呂敷包みを肩に掛け、髯面を振り立てゝ大跨に歩く恰好も牢獄から出て來たヂヤンバルヂヤンを想はせた。彼はさうして歩きながら、とき〴〵犬の方を顧みた。犬は主人の危難を案ずるかのやうに、尻尾を垂れ、首を落として、周圍の人々を警戒しながらとぼ〳〵歩く。さうして歩きながらしきりと主人の顔を見上げる。その眼は恐怖と憂慮に輝いてゐる。

「この犬は貴樣が飼つてゐるのか」一人の署員がさう訊いて見た。

「へえ」

「こんな奴を抱いて寢たら、寒中でも寒さ知らずだらう」

「へえ」

象潟署の裏門へ行列が入る時、署員はこの犬を門内へ入れまいとした。すると犬は、主人と子供との間に割り込み、その二人の足に絡みついて離れようとしない。

「こいつうるさい奴だな」と一人の署員が犬を追つ拂はうとした。と、少年はその犬の首に抱きついて、

「小父さん、小父さん、勘忍してよ」と涙聲で言つた。それはまるで自分の兄弟を劬はり庇ふといふ風であつた。署員もそれを見ては勘忍してやらずにはゐられなかつたのである。

序でに一つ、署員一同苦笑して口を噤んでしまつた事件があつた。それは既に話した淫賣婦おきく婆のことである。おきく婆も、「ざんぎりのおきみ」と同じやうに、素はだしに筒つぽの着物、細紐をしめたきりの、これこそ男女の區別もつかない恰好をしてゐる。さうしてばら〳〵の髮を振り立てゝ、しれり〳〵と笑つてゐる。

署庭には豫め五六人の理髮師が傭はれて來てゐた。彼等浮浪者のぼう〳〵頭をくり〳〵坊主に刈り込んでやるためで、おきく婆もこの理髮師の所へ呼ばれた。

「お前も坊主になるんだ。こつちへ來い」

すると、おきく婆は、長い舌をぺロりと出して、

「あかんべえだ」と言ひ返した。

「何があかんべえだ」

「坊主になつたら、色男に怒られちまうよ」

これにはみんな苦笑して默つてしまつたのである。

署庭に整列させられた彼等は、そこで凡そ五つのグループに分類された。即ち、乞食、浮浪自由勞働者、未成年者、女、半浮浪者である。三百人を右の分類に割り當てゝ見ると、乞食が八十人、浮浪自由勞働者百人餘、未成年者三十人、女五人、半浮浪者が七十人餘であつた。さうして、乞食の仲間と、浮浪自由勞働者の仲間からは凡そ五十人ほどの癈疾者が發見された。大部分は、ヴイタミンBの缺乏から來る脚氣病者である。また浮浪自由勞働者と半浮浪者の仲間から十三人ほどの犯罪嫌疑者が出た。また半浮浪者の仲間からは、家もあり職業も持つた一人前の娑婆の人間が三十人あまり出た。これ等は、或ひは遊び過ごし、或ひは飲みすごして、公園内をうろつ

いてゐる間に網にかゝつた連中である。しやんとした洋服を着た青年紳士や學生も七八人現はれた。またその中には相當のなりをした商家の娘も混つてゐた。鰯の網にも時に平目や鯛が入るものである。

　ところで、そこでもう一度總人員を調べた結果、二人の人間が不足してゐることが發見された。それは例の「ざんぎりのおきみ」と名なしの娘であることが解つた。

「いつ、何處でずらかりやがつたんだらう」

「サア、確かに列の中に入つて來たんですがね」

　署員はさう言ひ合つてくやしがつたが、もう間に合はなかつた。かうした署員の言葉を聞いて、ひそかにほくそ笑んでゐるグレの仲間がゐた。即ちこのグレ仲間が、彼等王國のたつた二人の女王を逃がしてやつたのである。それは彼等の義務でもあるのだ。いつ何處で、どういふ方法で逃がしてやつたか、署員には想像もつかないが、忍術師の集りである彼等に取つてはてもないことであつたらしい。自らずらからうと企てた者は一人もなかつたが、彼女等二人だけは立派にずらかしてやつたところに、彼等の仁俠と意氣とが覗はれるのである。

五

　かくて、彼等の身許調べが開始された。未成年者と女は地下室へ連れられ、乞食の群は署庭の中に止められ、浮浪自由勞働者、半浮浪者は、擊劍の道場へ導かれて、一人一人に就て調べられた。調査の事項は、姓名、年齡、原籍地、兩親、身寄りの有無、教育程度、グレ出す前の職業、グレ出すまでの事情境遇、グレ出した年月、犯罪の有無等である。

　この調査事項を一つ一つ書いて見れば、玆にまた非常に興味ある事實が開展されるのであるが、玆ではその餘裕がない。只一例として未成年者を調査した有様を書いて見る。

「お前の名は？」

「田川吉太郎てんだよ」

「いくつだ？」

「十二」

「お父つアんやおつ母さんはどうした」

「どこにゐるんだか知らねえや」

「どこで生れた？」

「それも知らねえよ」

「學校は何年まで行つた？」

「二年生で止めちやつた」

「何處から學校へ通つたんだ？」

「園公から通つた」

「園公で乞食をしながら通つたのか？」

「うん。親方が俺を學者にすると言つたんだ」

「それは感心だね。いつ頃から園公でヅケを食ふやうになつた」

「知らねえ」

　こんな工合である。ある少年はせむしでちんばであつた。彼は東京にゐる母を訪ねて、はるばる北海道から、途中乞食をしながら歩いて來た。

「だけんど、おつ母さんは何處にもゐねえ」

さう言つて彼はぼろぼろと涙をこぼした。

　ある少年は、鳥取の方から誘拐されて來て、曲馬團に賣られ、そこを逃げ出して掻拂ひをやり、感化院へ入れられ、またそこを逃げ出して、たうとう乞食の仲間に入つてしまつた、と語つた。

　十七歳の青年が、これまでの身の上話をしながら、中途で泣き咽んでしまつた時には、署員も、言葉を柔らげて、

「よし〱、お前一人が悪いのぢやないのだからね」となだめずにはゐられなかつた。これ等少年達は、市の幼少年保護所、或ひは府の感化院へ送ることにしたのである。

乞食の處分法はなか〱の皮肉なものであつた。即ち、そのぼう〱頭をくり〱坊主にしてしまひ、ぼろ〱の着物を脱がせて、豫め用意してあつた小ざつぱりした着物を着せ、下駄まで新らしいのをはかせてしまつたのである。さうして商賣道具を奪つてしまへば、少なくとも當分は乞食が出來ないだらう、といふ考へからしたことであつたらしい。

浮浪自由勞働者、半浮浪者の大部分は、或る社會事業の團體へ依託し、夫れ夫れ職業を與へて貰ふことにし、脚氣の廢疾者は、養老院へ送ることにした。さうして、家もあり職もあつて引つ張られた連中は、一場の訓戒を與へられて歸宅を許された。

夜明方、第二次檢擧が行はれ、そこでまだ五十人ほどの純浮浪者が狩り集められて來たが、これ等もそれ〱に處分されたのである。

かうしてこの夜狩り集められたグレ共を通算すれば、ざつと四百人に及んだのである。五百人のうち、百人の不良少年共は、つひに全部を取り逃がしてしまつたのである。

かくて一夜は明け放れた。梅雨はまだ降りつゞいてゐる。私は、海嘯の後を見舞ふやうな氣持ちで、再び公園の中へ入つて行つた。そして、主（あるじ）を失つた乞食の家を一つ一つ見て廻つたのである。そこで私は、一種名狀しようのない感慨に襲はれたのであつた。

それは、トタン屋根を張つた四疊ほどの廣さの小屋であつた。雨戸こそないが、床には小綺麗なうすべりが敷かれ、臺所と居間とが自ら分れ、居間には居間の諸道具、臺所には臺所の諸道具が一通り備はり、そこには立派に人間一家族の生活が營まれてゐたことが感じられたのである。と見てゐると、奧の暗い隅の方から妙な動物の啼き聲がした。私は入つて行つて見た。するとそこに、一匹の小犬が、口から黒いものを吐きながら、四肢をぶる〱顫はして藻搔き苦しんでゐるのだ。そしてあたりは土足で散々に踏み荒されてゐるのだ。つひ二三時間前、こゝでどういふ事が演じられたか、見てゐるうちに、それが私にははつきりと想像された。私の心はいつか暗くなつたのである。

「娑婆の人間に救はれちや一生浮ばれねえや」といつた一浮浪者の言葉を私は思ひ出した。彼等が今日あるのは、一朝一夕にして斯くあるのではない。さうしてまたさういふ言葉も一朝一夕の生活から生れた言葉ではないのだ。

四百人の人間の生活――魂を一夜のうちに處分し盡せるものなら、人間社會に浮浪者などは一人も出來て來ないのである。（完）

細民窟の內面的記錄

中原啓造

一

一概に細民と云ふけれども、此の細民の間には又相當の階級があり、それが單に客觀的に其等の人々の收入の多少とか、或は住居の良惡などと云ふものに依つて差別がつくばかりでなく、彼等の心理傾向にもそれ〴〵の階級意識に依つて微妙な段層をなしてゐるのである。一般に貧民窟と云へば、それでもう既に性質的に別種の人々でもあるかのやうに考へられ勝ちであるが、彼等の如く小さくとも兎に角一戸を借受けて暮してゐる人々から見れば、木賃宿を泊り歩く人々は所謂「宿屋住居」と稱せられて、一枚下に扱はれてゐるのである。

所が此木賃宿生活者の世界も相當に廣い。私は嘗て木賃宿に泊つて側に寢てゐた印刷工と語り合つた折、彼が

「勞働者の泊つたあとは大變ですぜ。南京蟲がたかつてね」

と如何にも勞働者——彼の意味する勞働者とは日傭人足等の自由勞働者であつたらしい——を蔑すむやうな口吻で語るのを聞いて異様に感じた。アカデミックな社會問題研究資料などで、「萬國の勞働者よ、團結せよ」などと聞かされて、其處には資本家と云ふ難攻不落の城郭を目懸けて突貫する勞働者の一樣なユニホームの進軍のみを觀念してゐる頭には、其のユニホームの内に赤や黑のごちやごちやな不統一があることは一寸連想し得ないであらう。然し木賃宿に宿る人々は、總括的に見て未だ人間的な自尊心も虛榮心もあると云へよう。處が養育院や無料宿泊所に居る連中になると、もうすつかり人間的な氣力もなくなり、唯もう人に頭を下げてさへ居れば間違はないと考へてゐる。私は嘗て某無料宿泊所を視察した際、一人の男が新聞紙の包の中から、拾ひ集めの腐つた飯や澤庵を取出して、同居人に二錢三錢で賣つてゐるのを見てぞつとしてしまつたが、其處の所長さんが彼等の前で聲高く其仲買取引の說明をするので、はら〳〵しながら聞いてゐた。然るに彼等は一向平氣で怒る樣子もないので、後で所長に聞いて見たら、彼等は怒る氣力も恥しいと云ふ心持も全く持合さない樣子で、人間性の冒瀆と云ふものに對しても全く無關心になつてゐる、少し怒つてでも吳れるならば張合があるけれどもとの話であつた。

之等の人々は全く食ふだけの生存である。他の先天的本能たる性慾すら割り切つてゐるとのことである。それでも之等の人々はまだその食ふ爲めに人足に出たり、車の後押をしたり、ジミをして廻つたり、兎に角機會さへ與へらるゝならば額に汗して食ふことを知つてゐる。處が俗にグレと稱して、淺草公園を中心とする浮浪者の群に至つては、てんで勞働によつて食つて行かうと云ふ特別な欲求もなく、或者は猛獸の如く、或者は野良猫の如く、淺草邊一帶を根城にして餌を漁り廻はつてゐる。彼等は其外形的容貌からして一見識別される。目つかち、鼻低く、びつこ、耳無し、兎口、脊低く、頭でつかちそれに麻のやうな頭髮、髯、ボロ〳〵の着物、誠に特徵のある風體である。

此の八月、淺草の象潟警察署で之等のグレ三四百人を一齊に集めて、それ〴〵の保護處分を行つたことがあつたが、夜中薄暗い公園の常燈の下に、四列横隊に集められた彼等の姿は古い繪にある百鬼夜行そのまゝであつた。彼等の如きは、一般の人の目にはもう既に乞食と區別がつかないのであるが、彼等の大部分はまだ〳〵乞食よりもましだと思つて

ゐるらしい。

斯く觀じ來る時、人間社會の階級相と云ふものは、一概に細民と片付けらるゝ階段の内にも、斯くまで微細な節目があるかと啞然たらざるを得なくなる。君主や貴族僧侶の專制に激して起つた佛蘭西革命の第三階級は、つまりブルジョアもプロレタリアも含んだ平民階級であつた。何ぞ知らむ革命百年にして世界はブルジョアとプロレタリアと云ふ殆ど性質的に異つた階級の對立を見るに至つた。又誰か、此概念的な「プロレタリア」の胚胎する諸階層の分野が歴然と展開する日が來ないと斷言し得よう。それはともあれ、斯うした階級觀を以て見るならば、細民窟居住者は所謂ドン底生活者中の貴族である。彼等の生活法は一般中流の人々とさう隔りのあるものでない。それ故細民窟居住者の生活を記述するとしても、それは僅かな生活法の相違を語るばかりで、興味中心の細民研究家――それは實に恐るべき人間冒瀆であると思ふが――にとつては、細民窟にはさして興味を惹くやうな事項はないと云つても宜しいのである。

二

細民窟がどうして發生したか、之を個々のスラムに就いて沿革的に比較研究するならば、相當興味のある問題であると思ふが、今の所發生原因の科學的說明をなすまでの調査は出來てゐない。惟ふに細民窟の内に於ては、一般社會に於けるやうな面倒臭い拘束が少い。義理人情、禮儀作法と云つたやうな一般道德、習慣上の固い形式で縛られてゐない。借金を返へすまいと、怠けて寢そべつてゐやうと、不潔な風をしてゐやうと、特別排斥も受けない。皆お互樣である。金錢に不自由な人々が世間一通りの義理習慣で生活してゆくことは、さらでだに苦しい生活を一層窮屈にしなければならぬ。金でもあれば別のこと、何を好んで無理な眞似をしよう。それよりは一層のこと同じく物的に不自由な人々の間に於て、お互に何の苦勞氣兼ねもなく暮した方が樂である。斯うして一旦細民窟に足を入れ、其氣樂さに慣れるとどうしても足を洗へなくなる。陳腐な言葉だが類は類を以て集まるのである。

近代の細民窟と云ふものの發生の遠因は、富の分配に著しい變動を與へた產業革命に歸することが出來よう。それ故細民窟の位置は必ず都市の工業地域に多い。農村、又は著しく都市から隔たつてゐる郊外には存しないのである。多く都會の場末若くは大工場等の多い場所にあるのである。然も斯る地域の内でも最も住居地として不適當な場所、例へば低地であつて濕潤であるとか、或は洲地、袋地、路地であるとか、墓地の近くであるとか、下水處分場、火葬場の附近、機械の騷音、藥品原料等の臭氣の高い所總て斯うした住居地として不適當な場所が撰ばれる。一寸考へると細民窟が出來たから住居地として不適當となつたやうに思はれるが、實は斯うした住居に適しない所へは誰も寄付かない。從つて地代は著しく安い。其處で貪欲な家主等は――細民窟の家主と云へば必ず物凄い親分肌の人間である――安い材料で不良な長屋を多數に供給し、衞生道德の思想よりも家賃の安いことを第一と心得てゐる階級の人々を呼びよせるのである。

三

細民窟を外形的に特徴づけてゐるものは何と云つても其住宅である。普通長屋、棟割長屋、トンネル長屋、共同長屋が煤けた屋根を

並べてゐる。其陋屋たるや文字通り雨露を凌げばいゝので、大抵はトタン、ブリキがコールターで黒く塗られ、所々其修理の加へられてゐる個所は却つて一種の斑模様となり、醜さを一層増してゐる。一世帶の占むる間切りは二坪から七、八坪位までであるが、最も普通にあるのは、所謂九尺二間——實際は間口九尺奥行二間半の階級である。これ等の多くは先づ入つた所に二合五勺の土間があり、その側が五合の臺所で、其内容は二合五勺の流場と二合五勺の板張りの座席である。住居の主要部は四疊半即ち二坪二合五勺の一間が一段高く控え、裏側に五合の板間と二合五勺の便所があるのが普通である。だから疊數に對する一人の持前は一世帶平均四人として一人一疊やつとである。便所の最も不潔なのは細民窟特有の共同便所である。無くてもがなと思はれる板やトタンで汚物を隠くさうとしてあるのが、氣の毒に雨でも降らうものなら忽ち外に流出して臭氣甚しいのである。細民窟はさらでだに一種のスラム臭とでも云ふべき臭氣がある。泥水の臭氣、食物の腐敗した臭氣、ボロの蒸返へされたやうな臭氣の渾然とした惡氣が漂つてゐる。從つて細民窟は都市に於ける病菌培養圃の職分を務め、恐るべき傳染病等の源泉として絶えず一般都市住民の衛生を脅威してゐる。

衛生に次いで恐るべきは風紀の問題である。居は氣を移すと云ふが、不潔な狹隘な住居にゐては風紀の亂れるのも自然の勢である。女房が暗がりの壁を傳うて共同便所に行く。さると隣の亭主が先客となつて待構へてゐる。騒が起る、女房の親父が出刃庖刀を振廻して暴れ込む。斯うした騒ぎはよくあることである。若くは四疊半の一室に夫婦も倅も娘も同居人も雜魚寢をする。夏などは皆、眞裸である。八才になる女の子が寢ころがり乍ら「買つて頂戴買つて頂戴」と云ふ言葉を使ふ。此處に生れ落つるから育つた女は、幼少の頃からさう云ふ見様見眞似で性的の羞恥心と云ふものがない。下の非や龜戸の魔窟の女達の供給地は實に斯ふした環境であるとさへ云はれてゐる。細民窟の男女の約八割が梅毒淋病に冒されてゐると云ふ。

衛生風紀上の問題ばかりでなく、住宅の不潔不整頓は益々彼等を馳つて放縱狂暴ならしめ、飲酒、賭博、傷害等の犯罪は絶えることがない。細民窟に飛込んで活動してゐる社會運動家の異口同音に叫ぶ所は、細民の保護向上は先づ其住宅を第一に改善せねば、百の社會施設も徒勞若くは有害であると云つてゐるのも宜なる哉と思はれる。

實際に之等の不良住居の狀態が、衛生上、風紀上、保安上に及ぼす弊害は單に彼等細民が蒙るのみでなく、一般社會に對する危險であると云へよう。英國の如く細民窟の歷史の古い所では、早くから此點に着目して、法律の力に依つて不衛生地區の改善に努力し、相當の實績を上げつゝある。我國の細民窟は未だ世襲細民と云ふほどのものでもなく、一般人に對し立體的に明瞭な區別も認められない。併し之を自然の勢に放任して置けば數十年の内性質的にも異つた人間社會が現出せぬとも限らない。不良住宅地區の改善は芽生の内にせねばならぬ。

昨年不良住宅地區改善法なる法律が發布された。此法律の要旨は、公共團體又は公益法人は、内務大臣の指定した不良住宅地區の住宅を買收し、之を取拂ひ、其跡に改善せられたる良好な住宅を改築することが出來る。尚此費用の半額は國庫が補助し、殘りは四分八厘の低利資金を融通することになつてゐる。

此法律は先づ最初に六大都市の内外にある細民窟の撲滅を企て、現在東京、大阪、愛知等に於て改善事業の施行に着手してゐる。此の法律は其事業施行上の困難が多い爲め、果して我國に於ける細民窟全滅に至るまで、利用せらるゝかどうか豫斷を許さぬ所ではあるけれども、之が支障なく繼續的に施行せらるゝに於ては、社會政策上の一大功績を見るであらう。

四

細民窟の家庭の構成上には種々な特徴がある。先づ第一には家族員の比較的少いことである。全住民の六割位は三人家族、或は四人家族であつて、それも夫婦と兒といふ構成が全體の八割餘を占めてをり、此外に祖父母兄弟等の居る大家族式の家庭は殆どないと云つてもよい位である。之はつまり細民窟に如何なる動機で落ちたかを示す一根據ともなる。大家族の入るべく餘りに住宅の狹い爲め分居するのもあらうが親兄弟との面倒臭い義理合ひ筋合ひが無いか、あつても之を嫌うて只管夫婦者の氣樂無精から細民窟に落込む人の多いことを示すものと云へよう。それから年齡の構成上著しいことは、十八九歲から廿六七歲の元氣旺盛な者は極めて少く、多くは十五六歲以下と三十歲以上の者で占めてゐる。

大都市の人口構成は遊學者や出稼人の關係上、恰も此十五六歲から二十七八歲の人口が著しく多く、其他の年齡の人口は比較的少いのに、細民窟に於ては正に其反對の現象を示してゐる。之は我國ばかりでなく、諸外國とも共通の原則である。之は何を語るかと云ふに之等青春の血に燃ゆる連中は活動力も旺盛であるし、自己の周圍に對する反省も鋭い。從つて一人前の働きが出來るやうになると、此樣な醜い場所に居ることを潔しとせず、家を飛出し、何處かに今少し住易い場所を搜さうとするし、又兩親も狹い家の中に押込めて置くよりは、出稼にでも出して家計の一助にでもなさしめようとするのである。

細民窟住民の知識に惠まれてゐないことも著しい現象である。此人達の殊に女の約半數は全く學校に行つたことのない人々である。小學校でさへも中途退學した人々が多い。貧困の原因は怠惰、疾病、無智と云はれるが、無智であると云ふことは單に激しい生存競爭の劣敗者となるばかりでなく、低級な生活に無關心な爲益々貧困のドン底に落ちてゆくのである。

細民窟居住者の職業は工場職工、職人居職人夫手傳等の極めて普通なものから、鳶、井戶堀、車力、屑買、傘直、下駄齒入、飴賣、納豆、アサリ賣、ラヲ仕替、鑄掛屋、研屋、仕立屋、遊藝人、行者、等特殊な仕事が種々雜多にある。然し細民窟と云へば、すぐ屑屋や下駄齒入を連想するけれども、それは此階級にだけ特殊な職業と云ふだけであつて、數の上から云へばさう多くはないのである。一番多いのは人夫人足である。斯る藝なしの自由勞働者であるから、其職業の異動も激しく、五年以上同一職業に從事してゐる者は全數の五割に滿たぬ。其勞働日數は月の内廿日位であらう。「土方殺すに刄物はいらぬ。雨の三日も降ればよい」と云ふが、全く雨は彼等の最も恐るゝ敵である。

細民の生計に就いて一瞥するに、彼等の收入は素人の想像する程僅少なものではない。例へば、大正十五年現在東京府下の全細民窟の一世帶當り、平均收入は五十九圓四十五錢で殆ど六十圓に近い。百五十圓以上の收入ある世帶が五十四戶もある。此程度の收入は、

官廳の下級官吏や會社の下級社員等にざらにあるのである。然るに同じ收入であり乍ら、インテリゲンチヤならばさう見苦しくないやうに暮してゆけるのに、細民窟の人々は如何にも貧乏くさく見える。それはインテリゲンチヤは定額の收入を得て豫算生活が出來るのに、彼等は收入の不安定の爲めにその便宜がなく、何時も行き當りばつたりに必要な生活をしてゐること、又インテリゲンチアは消費經濟の知識によつてゴマカシがつくけれども、彼等は其知識に惠まれてゐない。例へば細民の生活費の最も大なる部分は其食費である。所が此食費の内嗜好品の費用が著しく多いのであるが、之は食費の節約を計らうとして榮養價の少いものを攝る爲めに、却つて間食にてんや物や菓子等を欲しくなり結局食費が殖えるやうになる。之は一例であるけれども、彼等が消費經濟の知識に暗いことは實に其生活を惨にする因となる。その外職業の相違上見榮を張る必要のあるなし等で同額の收入でも俸給生活者等と彼等とは著しく違つて見えるのである。

彼等の生計の收支狀況を統計的に見ると、常に支出超過である。そして其超過は常に借金で埋めてゐる形になつてゐる。細民窟には大抵因業な高利貸が附物である。此頃は公益質屋などが可成利用される。不思議なのは此借金である。利子に利子を産んで彼等の信用を害し、收入の途絶になりさうなものだが、之が何時までも融通される。尤も彼等同士の間の貸借は實に紳士貸借とでも言はうか、金を持つてゐて貸さぬと云ふ譯にもゆかず、無い袖は振られぬと濟ましてゐられる。唯高利貸や質屋を利用する人達は、何等か少しは信用のある人々であらうが、斯る不健全な家計の進み方では緩漫に益々より貧困の道へと辿りつゝあることは爭はれぬ。

五

細民窟の世相に如實に觸れんとするならば、抽象的な記述を聞くよりは、二三のケースの動きを見るのが一番よく分る。救貧事業にたづさはつてゐる人々の手記を拾ひ上げて見ると、淋々と彼等の生活相を摑むことが出來る。

或裏長屋に松本鶴二(假名以下全部)と云ふ六十歲ばかりの老人が女房と伜夫婦と暮してゐた。鶴二は煙管職をして細い煙を立てて居たが、伜の嫁がフトしたことから二人の子供を殘して病死した。伜は細民の若者特有の利己的な氣持ちで女房の死後直に其長男を里子にやり、次の子は年寄夫婦に放り投げて自分だけ家出してしまつた。年寄夫婦は孫の世話をしながら生活苦に喘いでゐたが、鶴二は寄る年に往年の元氣もなくなり、一寸した病氣がもとでとう／＼哀れな老妻を殘して死んでしまつた。殘された老婦は自分の口を潤ほすさへかつ／＼の所へ、夫に死なれ、伜に逃げられ、孫を抱へて生活のドン底に沈み、人の情にすがる身となつた。

お清は亭主の政吉と某工場に共稼で平和な暮をしてゐた。其處へ元神田邊で支那人の妾奉公をしてゐた姉のお滿が、妹を頼つてやつて來て住込むことになつた。お清は亭主の手前、實の姉のことでもあり、何かと取りつくろつて實意をつくしてゐたにも拘らず、淫亂なお滿は何時の間にか妹の目を盗んで政吉と情を通ずるやうになり、お清が之に氣付いた時はもうお滿は妊娠までし

てゐた。それからと云ふもの一家には波瀾の絶え間がなかつた。あつかましいお滿は自分が女房氣取りで妹親子を虐待するのである。さうした噂が立つて政吉は勤め先の上の者から忠告を受けたりしたけれども、一向に聞き入れず、お滿はお滿で益々增長して、或日妹と激しい云爭ひの末、妹も堪へかねて廚刀を叩付けて負傷をさせられ、警察沙汰とまでなつた。遂に政吉も斯うしたことが云立てられ工場を馘になつた。お滿は同情すべき節もあるので、法律上の處分を許されたが、姉は益々妹と睨み合ふと云ふ有樣であつた。さうかうする内にお滿も亦身重になり、姉も鄕里に歸ることになつたが、物的に惠まれぬばかりか、せめてもの寶であつた心の平和迄掻き破られる氣の毒な人々である。

岩田武夫と云ふ鍍金屋があつた。家族は女房との間に十五を頭に五人の子供と實兄に芳太郎と云ふ生來の白痴がある。以前は細細ながら煙を立ててゐたが、あの大震災があつてから武夫は急に重い枕につく身となつた。女房は一家の柱と頼む亭主に病付かれ、五人の子供を抱いて途方に暮れた。兄の芳太郎は子供のやうに近隣の小用足などをしながら、自分の駄菓子の料を得る位である。女房は市の配給米を受けたりして、精一杯の努力をつづけ、何とかして糊口をしのいでゐたが、とう／＼無理な働きがもとで女房も病に襲はれた。之につづいて子供等もばた／＼と病付いた。

さうかうする内に、看病をしてゐた同居人が病付いて死に、田舍から看護に上京して來た女房の妹も數日にして罹病し、四疊半の小室に莚をしいて一家七人の親子が呻吟してゐる有樣、流石に芳太郎の心にも此慘状が感ぜられたか、片言まぢりに道を尋ね、東奔西走して配給米などを貰ひ、粥などを造つて一椀づつ家族に分け與へてゐた樣子は、鬼のやうな心の持主にも同情の涙を禁ずることが出來なかつたと云ふ。

大工の治助は生來の怠け性である。若い内には親方から頭を叩かれて追廻はされたりして澁々働いてゐたものだが、年取つて來るに從つて生來の怠癖はつのつて來た。ことに惡所通ひで梅毒を患つてからと云ふもの、益々仕事が物憂くなり、大工としてはすつかり信用を失つた彼は、何かうまい仕事をして見たいとそればかり考へてゐた。或日電車通りで富豪の自動車に轢かれ、其自働車の主から相當な見舞金を貰つてから急に味を占め、時々故意に軌道にのめり込んだりして食ひ代を稼いだり、又人に惡口ついて毆られて強請ると云ふことを覺えた。彼の恐いのは惡家主の熊太郎ばかりである。

斯うしたケースは賀川豐彦氏や椎名龍德氏の著作、方面委員の手記等に澤山あるから餘りくどく述べないが、前述の通り、生活相の内容はケースの數を多く見るのが一番よく分ると思ふ。概して我國の貧民階級殊に東京の細民窟にゐる人々は人がよい。哀れむべく同情すべき人々が多く、憎むべく恐るべき性質のものではない。彼等は一般人の持つてゐる利己主義、蓄財心、虚榮心、同情心等を、實にちつぽけな見えすいたやり方で表はしてゐるやうに思はれる。其他に特別述べ立てる程の特異な心理傾向や生活状況等も認められないのである。

海外近事

フーブァ當選の意義

米國の大統領選擧は豫想された通り共和黨のフーヴァーが勝つて、民主黨のスミスが敗けた。

冷やかな議論からいへば、本年の米國の選擧において大統領の勝敗にのみ力を入れるのは理屈にあはないことである。誰も知つてゐるやうに本年米國で選擧されるのは、大統領だけではない。上院の三分の一と、下院の全部その他多數知事司法官なども改選されるのであつて、議會改選の重要性は決して大統領のそれに劣らない。極端に三權分立を確立さして居る米國では、大統領の權限の及ぶ範圍は自づから限定されてゐて、議會の協贊なくしては殆んど何事をもなすを得ないといつてもいゝ。殊に外交問題などにおいて然りで、先頃國務長官ケロツグが不戰條約調印にパリに行つた際 新聞記者から『この條約は上院が批准するであらうか』と聞かれて『それは分らない、出來るだけ努力するつもりだ』と答へたのも、苟くも閣員が議會の權限に言及することでもあると、手ひどく窘められるので、障らぬ神に祟りなしの手に出たものであらう。

◇

議會の重要性は何人も知つてゐるに拘はらず、しかも大統領の選擧戰に對して氣狂ひのやうに騷ぐのは、何といつても巨人と巨人との對立による勝敗が、人間の好奇心を惹くからであらう。又實際、今回の大統領戰ほど好個の太刀討はなかつたことは曾て本欄で述べた通りである。

米國の有名な政論家フランク・サイモンドはフーヴァーとスミスが米國民の理想の二方面を代表してゐるといつて曰く『フーヴァーは能率的米國（エフイシエント・アメリカ）の概念（コンセプション）を代表し、スミスは人間的米國（ヒユーマン・アメリカ）の理想を代表してゐる。フーヴァーは何よりもまづ機械（マシーン）の人であり、スミスはその政治的位置を人間性に關するかれの智識から得たものである。フーヴァーの全生涯は機械を圓滑に、能率的に運轉することにつひやされたのに對し、スミスの公生涯はその一票を投じた始めから、機械を人間に適應するやうに努力して來た。フーヴァーは經濟的浪費を失くした。スミスは人間の社會的法律をベターにするためにつくして來た。フーヴァーは決して階級鬪爭を意味するやうな資本主義的思想を代表するものではない。併し結局においてフーヴァーは科學者であり、スミスは人道主義者といふことが出來る』と。

この云ひ現はし方は、よく兩者の思想傾向を表現してゐる。そして米國民は『人道主義』をとらずして『機械』をとつた。『社會政策』をとらずして『繁榮』をとつた。そこに現在米國民が何を考へて居るかゞ現はれてゐる。

◇

今回の政戰で最も目立つたことは、政黨別（パーティー・ライン）が著るしく分れたことである。コロンビア大學總長バトラーがスミス黨になると、その娘は共和黨の選擧委員である。ラヂオ・コーポレーションの社長ハーボードは共和黨の會計委員長であるに對し、同社の會長オーエン・ヤングは民主黨の有力者である。民主黨員が共和黨に走り、共和黨員が民主黨に來た。凡

そかうした例は無數にある。

かうした混亂の結果は、民主黨の金城湯地たる南部十州の内三州までを共和黨に讓つてしまつた。これはスミスがカソリック教徒であることゝ、禁酒緩和論者であることが、最も大なる原因をなしたのは勿論で、その證據にはカソリック教徒の多いマサチユセッツ州の如きでは勝つてゐる。南部諸州の住民とても、永遠に民主黨を捨てたのではなくて、スミスに對して反對したのであるから、又復水盆に返るであらうことは明らかだが、南部に皺を入らしたのは何といつてもスミスの責任である。

併し南部諸州だけがどう結束してゐても、大統領選擧戰には勝てないし、この際清算した方が却つていゝかも知れない。殊に米國の産業は北部から漸次南部に移つて行つてゐる。從つてそれと共に工業黨たる共和黨が染み込んで行くのは單に時の問題である。何れにしても民主黨は、最早中央の大政黨としては存在する資格がなくなつた。この政黨が天下を握る機會は、例のハーデイングのやうにだらしのない大統領が出て、所謂オハイオ・ギヤングとして醜名を賣つた連中のやうに賄賂でも取つて、それが國民の指彈を受けるか、それとも共和黨が二つにでも割れる以外にはチヤンスはない。

◇

フーヴァーが天下をとつた以上は、米國では現在の政策狀態を繼續するものと見るの外はない。フーヴァーはクーリッヂ内閣の中堅で、同内閣の産業政策はかれの手になつたといつてもいゝ。たゞ將來は自由に人選が出來るので、例の能率主義を極端に發揮するであらう。

この選擧で儲けたのは農民である。今回の選擧で勝敗の鍵を握つてゐたのは米國中央部の農民である。從來政府の政策が工業家に厚いといふので、所謂コーン・ベルト（農業地帶）の住民は常に反逆を試みてゐた。そこでフーヴァーもスミスも、競つてこの人々に言質を與へたものである。即ち國家の繁榮は農家に負ふところが多いから、自分が當選した曉には乾度適當な施設を講ずるといふのである。

フーヴァーが約束したのは中央農業局（Federal Farm Board）であつて、この機關を政府部内に設け、農業家の消費、販賣、援助に當るわけである。

いづれにしてもフーヴァーを大統領に選んだのは米國ならばこそである。かれは鑛山技師の出身で、今でも技術家の域を出ない。驚くべき組織的天才はあるが、併し演說も下手なら、人との交際も決して上手くない。一言にいへばかれは政治家ではないのである。それが空前の大多數を以て大統領に選ばれたのである。米國々民が政治的に動かないで、經濟的に動く一つの證左である。

終りに一寸スミスのために辯じてをくが、スミスは表面四百四十四票對八十七票でフーヴァーに大敗して居るが、併し實際上の數字はそれほどではない。この文を書いてゐる時にはなほ結果は判明しないが、投票數からいへばフーヴァーの二千萬票に對し、スミスは一千五百萬票を獲得したといはれる。即ち選擧人數では五分の一だが、總數では四分の三をとつてゐるわけである。……が、それも

スミス側がいへば取け惜みにならう。米國の「繁榮第一主義」には、まだ社會政策だの自由主義などは用がないと見るべきだらう。

勞働黨の銀行國有論

英國の勞働黨で最近決定した最も重要な政策に、銀行國有論といふのがある。九月の終りに幹部から發表されて、それを十月始めのバーミンガムの同黨大會に附議され、マクドナルドの說明があつた翌日には前藏相スノーデンが贊成演說旁々說明役をつとめた。

銀行國有論といつても全部の銀行を直ちに國有にしろといふ意味ではない。まづイングランド銀行を現在の如くに少數の個人の手に托してをくのは不可だから、これを國有として、大藏省、商事省、產業、勞働者、コーポレーチヴの代表者をして運轉せしめよといふのが、その大要である。そこで試みにスノーデンの說明を紹介してみる。同君の說明は通貨の國際的安定問題から始まる。

銀行及び通貨の問題については學者の間にも定論がないが、たゞ一つ疑へないことは通貨の膨脹も縮少も商業の安定に不可であることで、出來るだけ安定せしめることが肝要である。物價が安定してさへ居れば、それが高いと安いとは長い間においては問題ではない。高ければ高いで俸給やその他の狀態は自然に落ちつくところに落ちつくのである。

通貨の問題は世界的問題であつて、これが解決はたゞ世界的協力によつてのみ解決出來るのである。故に物價安定は世界的協力を必要とするが、この安定には金の價値を安定せしめることを要する。予（スノーデン）は金本位制を可とするものであつて、この他に通貨安定に對し、より良き方法のあることを知らないが、餘りこれに執着しすぎるのは不可である。例へば現在イングランド銀行には約十七億圓の準備金貨があるが、假りにわれ等が同銀行に少しも金貨がないと思つたところで、何も變りのあるものではない。たゞ金貨貯藏の必要は爲替の變動をふせぐに過ぎないのである。からいふ目的のためなら成るべく金の量を少なくするために各國が協力することが出來る筈である。

から說いて來てスノーデンは銀行の國有論に移り、前日にマクドナルド君が說いたやうに信用と通貨の統制と、そしてその統制に關する行政に對しては一切政治的干涉影響があつてはならないことを說いた。第一に議會は、そのやうなデリケートにして注意深い問題を取扱ふに適する機關ではない。第二に政府はこれを利用して空景氣を起し一般的人氣を得ようとする目的のために使ひたがるものであるから、これに信用管理の任を委せるのは頗ぶる危險である。」とて例を引く。

「今商賣は不景氣である。われ等はこれから九ケ月後に總選擧があることを知つてゐる。この選擧において政府の最大の人氣を呼び得るのは何であるか。かりに百二十五萬人の失業者が現在あつて、これを廿五萬人に減ずれば一般の人氣はよくなるが、これは無責任なる政府が通貨と商業を管理する場合に可能なのである。併しこれは可能ではあるがその犧牲は頗る大で、われ等は早かれ遲かれ、これが代價を支拂はねばならぬ。」

勞働黨はイングランド銀行を議會によつて設定したる公共會社（パブリツク・コーポレーション）の手によつて管理されることを主張する。議會は大體方針を決定し、この方針によつてそのコーポレーションは實務をとるのだ。『私（スノーデン）はわれ等の社會主義は多く斯くの如くして實現出來ると信ずる。即ち公共會社（パブリツク・コーポレーション）は公衆によつて所有されるけれども、これが管理は公衆の利益のために最善の專門家、最善のビジネス・メンにより運用管理さるべきである。』

イングランド銀行の國有は主張するけれども、商業銀行の國有は時期尚早であるとスノーデンは說く。それは英國の商業の九割九分までは個人の事業であつて、かつ競爭組織の上に礎かれてゐる。かうした狀態では商人に對しこれに代る信用を發するところがなくてはならぬ。かりにこゝにたゞ一つの商業銀行しかなく、それが絕大な權力を有してゐるとせよ。この銀行は何人に對しても信用を與ふることが出來る。もしかれに信用を與へない場合には、かれは直ちにビジネスを閉づるの外なく、そこに働く勞働者は失業してしまふことになるのである。

これ等の銀行が、他のビジネスと同じ組織の上に立ち金融してやつてゐる以上は、少なくとも當分は現狀を繼續せしむべきである。また實際これ等の商業銀行は信用をコントロールすることには何の關係もないのであつて、それはイングランド銀行の權限下にあるのである。もしわれ等がイングランド銀行を國有化すれば、必要とする通貨の公衆による統制は可能になるのである。

以上のスノーデンの說――寧ろ幹部側の意見に對しては勞働黨內で異見が多く、激烈な議論が戰はれた。勞働獨立黨のマクストンは直ちに『スノーデン君の說明は本黨が同案を決定したと見るべきや、それとも個人の說なるや』と突込んで、議長から『本黨を拘束するものは本黨にて議決した政綱のみだ』と蹴られた。

ワイズといふ代表者は『スノーデン君の案は半吞半吐で不徹底極まるものだ、一九二三年にサー・アルフレッド・モンドは「勞働黨が內閣を組織して社會主義的法案を提出するやうなことがあれば、銀行は直ちに金融的（フイナンシアル）禁制（エンバルゴ）を施き、經濟的運用は直ちに止まるであらう」と云つたけれども、實際はそんな事は少しもなかつたではないか。商業銀行を國有にすれば國內八割の金融が直ちに國家の自由になるのだ。一體この案の提出者はイングランド銀行を國有にするといふけれども、實際そんな意志があるのか。何時まで待つのか』と憤慨した。

次ぎにダルトン博士はバーミンガムの方法に從つて、都市銀行（ムニシパル・バンク）を設立することが最も必要で、それが信用國有の第一ステップだといつて大體にスノーデン案を支持した。更にミス・ウイルキンソンはスノーデン氏の國有の意味が不明だといへば、幹部側のローレンスはこの案の反對者は經濟上の問題に無智なのだとやり返す。近來の花々しい論戰が行はれた。

併し結局この幹部案たるイングランド銀行國有案は勞働黨大會の承認を得たのである。



ロビン・フツドの叛逆

前田河廣一郎

1

ダグラス・フエヤバンクスといふアメリカの映畫俳優が、盗賊ロビン・フツドの歴史ローマンスを映寫したことがあつた。

このロビン・フツドといふ名詞は、それまではシカゴで屢々人から貰つた安葉卷のレツテルの名として、その異臭とともに印象深かつたものであるが、本名の由來は、映畫『ロビン・フツド』を見て始めてわかつた次第である。私がこの映畫を見たのは、日本へ歸つてからのことである。

ダグラスの『ロビン・フツド』は、例によつて『ドンQ』や『海賊』、『ガウチヨ』などの輕快な英雄主義の反覆に過ぎなかつたが、今でもあざやかに頭に殘つてゐる部分は、首魁ロビンとその乾分達の棲んでゐる森の山寨のデモクラテイツクな光景である。そのほか、大仕掛な群集の場面や、バツキンハム宮殿よりも高い城砦から美しい處女を救ふ場面や、飛行機のやうな勢で永遠に惡るい惡漢や物體の抵抗力に對して挑戰する曲藝などは、誰しもの知つてゐるダグラス式作畫術として、取立てゝ云ふがものはなかつた。たゞ、何かしら私の注意を惹いたことがあつたとすれば、この盗賊團のローマンスは、K・K・K團のやうな暴力的秘密結社ではなくて、その當時の浪人や不平分子の自然發生的な反抗運動であつた、といふ思想上のちよつとしたひきかかり

である。これで、私は、ダグラスもロビンも完全に忘れてしまつた。

しかし、人間は、あらゆる偶發事にも用意しなければならぬ社會を、眼の前に控へてゐることが生存の一條件になつてゐる。ひとまづかたのついた筈のロビン・フッドがその後再び私と妙な關係を持つことになつたのである。それは、もはや馬爪を燒くやうな葉卷や、輕業師にチョビ髯を生やしたやうなダグラスなどの形式を執らずに、意外にも一冊の古本となつて現はれたのである。といふのは、或る本郷の古本屋をひやかし過ぎた結果、何か買つてやらぬと氣の毒な破目に陷つたので、店で一番安さうな洋書を需めることとした、その本のタイトルが、『ロビン・フッド』であつた、といふまでの話である。

ここまでは、どんな普通の人でもの有ち得る種類の關係である。これからが、すこしややこしい。或る時、ドイツから歸へつて、繪も童話も芝居も社會運動もやるといふ、頗る能藝の村山知義君が、やはり私達の關係してゐた劇團の三回目の公演の台本として、戲曲『ロビン・フッド』といふものを書いたか書かうとしたかしたのである。この戲曲は、書いてゐる作者も六十何場になるか見當のつかぬうちに氣の早い便衣隊のやうなビラや立看板などが先に出來てしまつて、とど三部六十數場といふやうなパラドキシカルな觸れ出しのうちに公演されることになつて――舞臺に乘らずに終つた。どうして村山君の『ロビン・フッド』が上演されなかつたかは、この話と無關係であるから省くとしても、この間のいきさつが私をして盜賊ロビン・フッドといふものに俄然とした好奇心を起こさせたことは報告する義務がある。村山君の脚本も見ずじまひになつたが、一圓で買つて來た古本を開いて見ると相當に興味ある事柄が書いてあるので、なるほどこれなら葉卷製造者は別としても、ダグラスや村山君が、別々な立場から興味を持つのも無理はないと思はれた。本は、一九一二年版のハーパース・ブラザース出版、著者はルイ・リード、クリスマス進物向きの御目出度い物語で、裏には鉛筆で『クワノ入ヒロ』といふ古本屋の符諜が書いてある。貴婦人の前でも大聲で讀める本である。

そこで、この一冊の古本を土台として、私は『研究』といふと大袈裟過ぎるが、もうすこし委しくロビン・フッドとその時代のことを知りたい氣になつた。そして、不完全ながら纒め上げたのが、本篇である。――葉卷からここまで、私の意識の中に、ロビン・フッドは、彼是、十五六年も潜在してゐたわけである。

ロビン・フッドの傳記を調べるとなると、第一に困難を感ずるのは、彼れの存在は、正史から完全に無視されてゐたといふ事實である。ちよつとした字引を繰つて見ても、ロビン・フッドといふと、『虚構に近いローマンス』と同義語(シノニーム)になつてゐたりする。

と同時に、又、一八八九年版のベデーカーなどを開くと、僅僅五頁にコンデンスされてある英國史の、プランタゼネット王家のヘンリ第二世の條に、全文六行のうちの一行半を費して『森の盗賊ロビン・フッドこの時代に榮ゆ』などと特筆してゐる。同じベデカーの一九二八年版の英國篇のシャーウッドの森地方の說明にも、やはりロビン・フッドの山寨の遺跡のことは記入してある。私の買つた古本の著者のルイ君は、自分自身ロビン・フッドの活躍したシャーウッドやニードウッド地方に近い場所に生れたので、故老や民謠家の口碑傳記から判じても、ロビン・フッドは確實な存在であると力證してゐる。それから、ロビンを謳つたその當時のバラードが、黑で印刷されて、ケンブリッヂ大學に保存されてあるさうだ。ウインケン・デ・ワードといふ詩人が、一四八九年に書いたものである。その他後世の民謠も決して尠くはない。

これらの事實と、傳說に盛られてある內容とを綴り合はせ、歷史上の當時の社會狀態を照應して見ると、ロビン・フッドが正史に取扱つてない理由はほぼ見當がつかぬでもない。――即ち、當時の地方長官(シェリフ)を馬鹿にし、僧侶階級を極端に憎惡して機會あるごとに彼等を掠奪侮辱した犯人ロビン・フッドとその一味は、到底英國正史に載るべき資格を備へた榮譽ある紳士ではなかつた、何となれば、當時の歷史の記錄者は民間の事情を出來るだけ書くまいとした僧侶達であつたのだから。だが、ノッテンハムの地方長官の法廷記錄にはひよつとしたら、彼の事件の書き殘されたものがないとは限らないが、何人もまだそこまで熱心に調べてはゐないやうである。同じ事情を裏から見れば、彼等が民間の口碑傳說にのみ姿を殘した所以も尤だと思はれる。しかし、その傳說を粉本として書かれた傳記類はかなり多い。そして、一冊が書かれるごとに、もとは中世紀の地方的野盗群に過ぎなかつた彼等が、いろいろに理想化され、いつのまにか大人なみの大衆向きな英雄に成長したことも首肯される。宮廷や諸侯や僧侶階級のフランス語やラテン語の社交的辭令とは別に、ロビン・フッドの傳說は平民的なアングロ・サクソン語をもつて英國の民間にのみ傳へられてゐたのである。

そこで『ロビン・フツド』傳によると、彼は西暦十二世紀から十三世紀の中部イングランドに跋扈した盗賊團の首魁で、王室御用林であつたシャーウツドの森を占領し、續々地方長官の兵や、王室直屬の林務官の一隊と闘ひ、都市から都市への要路を扼して僧侶貴族の類を襲ひ、貧民婦女子を扶けて義を天下に唱ひ、白日變装の下に、或ひはスパイを使つて、一流のテロリズムをもつて當時の支配階級や富豪の心膽を寒からしめたものである、——といふ梗概になるのである。

ここまで書いて來ると、讀者諸君はすでに諒察されたことと思ふが、私の興味の中心は主として、當時の封建主義時代下に於ける一群のルムペン・プロレタリアートである彼等が、どんな形式で支配階級に衝動的ながらも彼等の階級鬪爭を挑み、それがどうして失敗したか、といふ徑路にあるのである。

大まかに云ふと、英國の中世紀の封建主義は「第十一二世紀に於て、その論理的完成と劃一的實行の絶頂に在つた」(エツチ・ジー・ウエルズ)と記錄されてゐるほどあつて、ウイリアム大侯がハステイングにハロルドの軍を壓倒して、アングロ・ノルマン王朝の基礎固めをしてから采領(フイウード)を根柢とする封建主義制度は、代一代と武装され、法文化され、組織化されて、ロビン・フツド出現當時のヘンリ第二世時代には、中世紀ヨーロツパを通じての痼疾であつた宗教と政治との分權問題の一兆候として、ローマ法王權を代表した僧正ベツケツトが四人の武人に暗殺された事件さへ生じてゐる。これは取りも直さず、王侯の政治的支配權の擴張を意味したのであつた。この上向期に於ける英國の封建主義に對して、ロビン・フツドは、その當時にはちよつと珍らしい叛逆運動を起こしたのである。珍らしい、と茲で云ふのは、彼等の叛逆は全然封建主義のイデオロギーと相反したもの、即ち一種のヒユーマニタリアニズムを機軸として出發してゐたからである。歴史によると、その當時、民間にあつて、アングロ・ノルマン王家へ叛逆するといふことは、同じ封建主義を奉じさへすれば間々あり得た事實らしい。中世紀四世紀間に於て、判明してゐるだけでも、三回の長期に亘る内亂、二度の王位簒奪、十人の王權僭稱者、三人の王の弑殺とがあつたと傳へられてゐる。(ヒレエア・ベルロツク『英國史』第二卷)それほど自由で、且叛亂し易い英國であつた。(同著)それは、その理由の一つとして、武士階級の道德的見解が非常に單純であつて、敵味方いづれに於ても勝敗の決定が直ちに善惡の標準になり得たからでもあつた。勝てば官軍、敗くれば賊、と同じことである。

かういふ時代にあつて、ロビン・フツド(本名、ロバート・フ

ツツーズ）は、身分は貴族の嫡子、即ちハンテングトンの伯であるウイリアム・フッツーズの長男で、スタッフードシャイアのロックスレーに居城を持ち、相應の地方の領主であつたのが、好んで野盗の群に投じ、中原に覇を爭ふことをせずに、封建的榮達の途を蹴つて、一生群盗の首魁に甘んじて暮らしたといふことは、ちよつと不思議である。その不思議は、ロビン・フッドの個人的動機から來てゐる。彼は、十五歳の時、ノッテンハム郡を通じての懸賞附御尋ね者の一人となつてゐたのである。若くして死刑の宣告の下に置かれた彼が、一生法律と軍隊とに尾けられて、貴族の子でありながら、惨めな被壓迫階級の反抗心理に生きたのも無理はない。しかも、傳説の記すところによると、彼が御尋ね者となる動機の林務官長を殺ろした理由といふのは、大部分、當時の傲れる役人の罪であつたのである。

十一歳にして母を失ひ、翌年アイルランド出征に出た父ウイリアムの横死を聞き、その後伯父のために領土、家畜、耕作地、村落、城砦のすべてを蕩盡されて、十五歳の時には無職無産の漂浪者として、王室直屬の射手にでもならうかと思ひ危ぶみながら旅立つた途上、彼は、醉ひしれた一隊の林務官に捕まつて、さんざんに愚弄されたので、やつきとなつて身に覺えのある弓術を示して彼等を呀と云はせようと青年らしい憤怒を感じたのであつた。標的がないので、折しも通りかかつた森の中の放し飼ひにしてある鹿の一頭を狙ひ、美事に動物をしとめて見せた。役人達は彼の武術を賞めちぎるかと思ふと、案に相違して、王室の財産である鹿を射た惡者は地方長官の邸へ引括つて行け、といふことになつた。後代シェクスピーアの前半生にも、よく『鹿泥棒』であつたといふ差し紙がついて廻はつてゐるやうだが、その當時から、この王室御用林の鹿を殺した現場を發見された人間は、左右の拇指と人差指とを切斷され、兩眼を剜ぐり取られて、そのまま何里四方といふ原始林の中へ放逐されて——白骨となつたのであつた。冗談から罪人になつたロバートは、同じ鹿の生皮に包まれてノッテンハムの官廳へ曳かれることになつた。

ここで、その當時の地方の法廷のことを挿入すると、大概の民事裁判は、地方長官が直接に見るか、領主や百人役といふ役人が審判するかになつてゐたが、政府の裁判官が巡囘的に地方の裁判を審理して、地方獨得の法律や私刑法と國家の法律とを漸次に置き換へようと力めてゐた。證人を召喚する習慣は、在來まで、土地訴訟のことにのみ關して行はれてゐたが、ヘンリ第二世代にはじめて民事や刑事にまで適用されることとなつ

た。いづれにもせよ、林務官といふ役人は、警察制度のなかつた當時に於ける政府直屬の巡回役であつて、同じく王室によつて任命される地方長官とは等位が違つてゐたものの、競争的な立場にある軍人達であつた。國法によつて定められた鹿殺ろしの罪科の如きは、直ちに現場に於て所罰さるべきであつたが、ロバートを拘引した林務官長は殊に地方長官との勢力上の確執からその鼻を明してやらうと考へたのであつた。

ノッテンハムへの途中で、一同はある酒屋へ立寄つた。そこで昔ロバートの父親の臣下であつた兵卒の一人が、ひそかに他の三人と語らつてロバートを遁がしてやらうと相談した。安全な場所まで遁げ終せる前に、五人の逃亡者は發覺され追跡された。その一人は役人の矢で斃れた。ロバートは得意の弓術をもつて、先に立つた林務官長を射殺してその場を遁れた。この事件があつた翌日から、地方長官は、ロバート・フイッツーズの首へ賞を懸けたのである。

ロバートと三人の軍人は、その後、北へ北へと脱走して、ヘンリ王のスコツトランド遠征軍へ變名の下に加はつて射手となつた。それから、彼が二十歳になつて、やはり林務官に縛ばられた盜賊二人の生命を助けてやつて、シャーウッドの盜賊の山寨へ立籠ろまで五年間といふものの彼れの生活は、暗らいあてどのない若い御尋ね者の放浪の旅であつたのである。

世界の大半の犯罪史と同様に、ロビン・フッドの上でも、法律が罪人を造つたのである。そして、罪人となつた當人が、常に支配者の法律を呪つたことは云ふまでもない。

3

ロビン・フッドといふ、田舎臭い變名を使ふやうになつたロバート・フイッツーズは、人に怖はがられるほど、强い獰猛な男ではなかつた。

外見から云つても、寧ろ優さ男の方で、うす髯を生やした、アセレテイツクな中肉中脊の英國人で、野外生活者が皮膚と、弓術家の澄んだ慧眼と、房々した金髪を持つてゐた。

武術にかけては、當代近隣に比肩するものなしと云はれた程どの弓術以外には、大概下手くそであつた。相撲擊劍六尺棒などにかけては、彼れの配下のリツトル・ジョンや、托鉢坊主のタツク和尚などの方が傑れてゐた。彼が、一群の、多い時には二百人以上の盜賊達をうまく牛耳つて行つたのは、彼の得意とする弓術と、次には膽力であつたのである。この膽力といふのは、前述の通り、虐げられたものの絶望的な人生観と、その時代の市民の義務であるところの武士道道德の遺傳といふ、

妙な混合から來てゐることが推察される。

ロビン・フッドがどうして乾分達を手馴づけたかを見ると、實に面白い。この事があるために、私なども、實はロビン・フッド存在の確實性を疑はない一人なのである。

リツトル・ジョンのやうな最後まで彼と行動を共にした一の乾分の如きも、その最初の出合は頗るユーモラスなものである。ジョンと彼とが、始めて小川の獨木橋を挾んで對面した時、彼は故意に對手を怒らせて喧嘩を賣つて出た。二三の賣言葉と買言葉があつたのち、二人は橋の脊の上に立つて六尺棒で猛烈な叩き合ひを始めたのである。傳說によれば、叩き合ふこと三十分、ロビンの上衣からは煙のやうな埃が立つたといふが、これはどうやらホーマー式誇張であるらしい。しまひに、ロビンはジョンのために川の中に叩き落され、無造作に揶揄はれた上に、參つたと、告白して、濡れ鼠になりながら這ひ上がると改めて乾分達を引合せて、一味に加はることを懇望した。

『ここにゐる六十九人の者どもは儂の仲間だ。毎年三着の新しいリンコルン綠の着換へと、取つた物は山分け。肥つた牡鹿を射殺すことは敎へて上げる、鹿の柔かいステーキを、泡立つエールで嚥み下す味は格別だ。それが儂等の生活さ、何と一緒に儂等と棲んで見ないか?』

流浪のジョンにとつては、かう云はれると、呆氣に取られて、差し出された對手の手を握るほかはなかつた。森へ案內して歸ると、ロビン・フッドは、山のやうな馳走を出しながら、一位の大弓を引き絞つて得意な弓術で半里向ふの大鹿を射止めて見せるのであつた。

甥のウイル・スカアレットの手續きも同じやうな喧嘩負けから始まつた。二人は出合頭に、鬪劍を拔いて戰つたのであるが、ロビンはしたたかに甲を斫りつけれ、流血淋漓となつて、始めて和議を乞ふた。名乘り合つて見ると、對手は自分を尋ねて來た甥であつた。托鉢坊主のタック和尙は、どんなローマンテイックな物語にも出沒しなくてはならぬ種類の豪傑肌の『花和尙』的人物で、ロビンもこの腥臭坊主を手下にするにはかなりの骨を折つた。二人は知つてる限りの武術の競技を行ひ、互ひに罵倒の限りを盡し、殆んど一日掛りで格鬪したのであつたが、やうやく午後の四時頃、かなはぬと思つたロビンは自分の乾分を呼び立て、和尙は二頭の猛犬を呼び出し、すはや血の雨が降らうとした時、彼は釋然と已が名を名乘つてタック和尙の入夥を勸めた。

醉つ拂ひのテンカーの如きは、最初は自分を捕縛しに來たスパイであつたものを、ロビンがこつぴどく叩きつけられること

によつて手下にしたのである。そのほか、アーサー・ア・ブランドのやうな人間にも、頭一面に毆りつけられて氣絶しさうになつたところを、やつと乾分に救はれて、型の如く名乘りを上げ、自由人としての生活を說き、御馳走をした上で、得意の弓術を示威的に見せることによつて味方の一人としたのである。

かういふ風に、ロビン・フツドの生涯を通じて、彼は、必死的鬪爭の場合以外にはいつも個人的格鬪に負けてゐたのである。つまり、彼は負けて勝つことを知つてゐる種類の指導者であつたにちがひない。だが、こゝに見逭してならないのは、乾分の連中が氣づかつて止めるにも拘らず、いつも敢然としてどんな對手にむかつても挑戰したといふ彼れのドン・キヨーテ的な勇氣である。この勇氣こそは彼をして一介の野盜から引き上げた叛逆精神から來てゐるものであつたことがよく窺はれる。そして、弓術に達したほどの慧眼な彼には、慥かに時代の反抗心理を見抜くだけの人心洞察術があつたにちがひない。

それから、當時の武術のうちでも、弓術は最も進步した、長距離戰の利く新鋭武器の一つであつたことも、徒らに個人對個人の鈍重な膂力の格鬪に比べて、遙かに浪人達や一本調子な盜賊達を幻惑したことには相違ない。まだフエンシングの發達しないその時代には、大概の人間は刀劍を帶びて居たものの、それは單純な劍と劍との毆り合ひにしか過ぎず、わずかに間柄をもつて對手を防ぐ術を講じたに留まつた。鎧と云つても、魚鱗のやうにつなぎ合はした皮製の胸當てを用ひ、時に鋼鐵の輪を皮へ縫ひつけた物を用ひてゐた。ヘンリー三世時代に至つて、始めて英國へは鎖で造つた本式の鎧が輸入されたのである。籠手臑當などが一般に普及されたのは、十四世紀のエドワード一世時代からである。この時代の格鬪は、如上の武器が說明してゐる通り、常に對峙者の互ひの奎膊の力にのみよつたもので、その點、やはり日本の鎌倉時代などの風習と酷似して居るやうに思はれる。

一藝に秀でた者の謙遜をもつて、ロビン・フツドが、いつも乾分と格鬪する際には、自分の得意な弓術を棄てて、寧ろ不得意とする他の武器を撰んだことは、最初郷里を脫出する際に犯した殺人罪が弓によつて爲されたといふデリケートな心理的考察は別として、乾分の生命を尊ぶ上からも蓋し理由のない選擇はなかつたやうに思はれる。

ロビン・フツドが當時の世の中の苦勞人であつたことは疑ひを容れない。それと同時に、一旦支配階級に判旗を飜へしてからの彼が、青年時代とはまるつきり別人になつたやうに樂天的な性格を發揮したのは、その時代相と對比して見ると深い原因

のあつたことだと思はれる。

盗人生活によつて彼は解放されたのである。どんな社會から彼が解放されたか？――これを當時の社會組織に見よう。

一言で云へば、當時は戰亂が稍安定しかかつた封建時代であつたのである。一方支配階級は武力を以つて支配するよりも、法律によつて治安を維持しようとする方法を講じつつあつたとともに、ローマの古風な農奴の習慣を全く脱却しきれなかつた農村組織が極端に民衆を壓迫してゐた。

その農村組織は大體こんな風の組立をされてゐた。國家での最大な資本家は王であつた。王は全國の面積の三分の一に該當する森(フォレスト)（これは森林、山、耕地、牧場、濕地、不毛地なども含まれた）を所有し、そのほかに直屬の莊園を有つてゐた。王の配下に貴族や僧侶や役人があつた。貴族は王によつて保管させられてゐる土地を、内地(インランド)と外地(アウトランド)とに二分し、自分の邸宅や耕地を内地(インランド)に有つとともに、臣下へは外地(アウトランド)一般を割り宛てて村を構成させてゐたのである。封建時代から戰爭に從事することだけを職業にしてゐた軍人やその家族は、土地を割當てられるとその耕作に從事しなければならなかつた。大概三十エーカーから、二十、十エーカー程度の土地を投げられて、村を造ると彼等は共同で耕作地に穀類、豆類の栽培、または牧畜に從事した。中には、全然土地を耕すことが出來ずに、日傭人夫となり、或は普通の村人(ヴィラニ)からは輕蔑される『コッタリー』、『ボルダリー』のやうな貧農となつた。農村民は外地の耕作からの收穫の一部分を主人に納め、その外、主人の内地(インランド)の耕作を行ひ、同時に各人一年四十日間の兵役に服し、村のあらゆる雜役を處理する義務を負はせられてゐたのである。この農村制度の最も慘酷な一面は、土地の世襲制度であつて、農民は生れながらにして先祖代々からの土地に縛りつけられて、絶對にその土地を離れることが許されなかつたといふ事實である。瘦せ地や横暴な領主に仕へた農民は、そのために常に封建制度を呪つてゐた。農村生活の不自由さを改革したものは、中世期後半の經濟的變動であつたが、それはロビン・フッドの出現から餘程後のことである。そして、その改革は、やはり各種の農民運動を待つて行はれたのである。こんな具合に、當時の英國は、最大多數の農民と、都會の小市民との基底の上に建つた專制政治のピラミッドであつた。

ロビン・フッドは、この窮屈な、憂欝な、土に束縛された生活から完全に脱却したのである。そして、その脱却は、彼自身が完全に地位と財産を失ふことによつてのみ獲得されたものである。もはや、彼には單純な恐怖を基準とした義務觀念はなか

つた。所有の觀念を無視した彼は、あくせくとして自己の所有を守る者を嘲笑つた。遠くの都の專制君主に對しても、またその專制君主の十字軍についても、アイルランド征伐についても、何等の關心を拂はなかつた。彼は、恐らく順當に父の財產や臣下を受け繼いで、ロックスレーの城に馬の蹄の音と侍臣の傭兵に拂ふ金の不足な報告に耳を傾けて苛々してゐたであらう自分を、弓を杖に山寨の石壁にもたれて雲雀や金翅雀(ひわ)の聲に耳を貸しながら、うつとりと思ひ泛べて苦笑したことだらうと思はれる。

私達は、先づ快活なロビン・フッドを、快活な彼の同僚とともに、シャーウッドの森に見出そう。

4

戰爭好きなローマ人は、英國を征服するとともに、その軍用道路の建設にも力を濺いだ。道路を造つたローマは滅びても、英本國を貫通した大道は殘つた。ワットリング・ストリートがそれである。

南端ドオヴアの港から、カンタベリー、ロンドンを過ぎて、スタッフオード、マンチエスターから北へ通ずる砥のやうな大道は、たしかに半永久性を持つた通路であつた。この大道をドーヴ河に添ふて東に外れると、タットベリーを過ぎて道はトレント川の谿谷に入り、ノッテンハムの市を東に見るのである。ノッテンハムから更に東行する道路を取れば、リンコルンの市がある。ノッテンハムとリンコルンの間の、ニユーステッド僧院から橫へ切れると、一面の沼地や河に取り圍まれた巨木の列が聳えてゐる。王室御用林のシャーウッドの森である。

森は樅やぶなや楡の木が多く、老木と老木とが絡らみ合つて、聲のない格鬪を上空に挑んでゐる。森の中ほどに、そこだけ伐り開かれた芝生の廣場に、雨のやうな日光が濺いでゐる。

一本の樅の木がある。根元は空洞になつてゐて人間が五六人這入れる位に刳り抜いてある。洞穴の底は揚蓋になつてゐて、それを降りると、暗らいトンネルになり、少し歩るくと石の壁に圍まれた廣ろい中庭へ出る。

この石の壁は、厚み六呎からあるローマ人の殘して行つた寺の遺跡で、窓もなければ扉もない、恐ろしく大きい石の桶みたやうな營造物である。壁に圍まれた內部には、北と南とに巨丈な櫓が二棟築かれてある。櫓の下側に廣大な洞穴があつて、切濾が設けられてゐる。

これらの櫓は石造りで、二つとも三層の室を持ち、螺旋形の

梯が上まで通じてゐる。北の櫓は、武器庫として使用され、第一階には鎧、小刀、匕首、劍、楯、弓、矢、鎗などが收められてある。第二階目は衣裳類で充滿し、その上階の室は、リットル・ジョンとウイル・スカーレットの幹部どこだけが鍵を保管してゐる金庫である。重い鐵製の函に、金銀寶玉や、袋に詰めた金貨がいつぱい入つてゐる。ほかの箱には、刺繍した絹布、天鵞絨、毛皮、飾物などが藏つてある。

南の櫓は四角で、その第一階は冬期の料理場として使はれた。第二階は不時の必要のある場合に役に立つ調理した食物が貯藏されてあつた。そして三階は穀倉であつた。この三階だけは表からの梯子で登るやうになつてゐた。南櫓の地下室は酒倉で、葡萄酒やエールの樽が芳香を漲らしてゐた。中庭は、冬期の外は滅多に使はれなかつた。毎日の料理は壁外の廣場の地端に設けた粘土の爐で行はれ、一般の仕事も、木から木へ懸け渡した草屋根の下の長い卓上でなされたのである。

全く世間から見放されたこの不思議な廣場には、終日鍛冶の音や金具の響が絶えなかつた。さうかと思ふと、騷々しく水を使つて、皿や盃やその他の食器をがちやつかせたり、鍋やナイフを磨ぐ音が忙しそうに響いたのである。一群の男達が鎌を鍛へてゐると思ふと、ほかの者は衣類や馬具の修繕に餘念なかつた。狩りに出た者が獸を殺ろして、六尺棒にぶら下げて持つて來ると、パン粉で半身白くなつてゐる壯漢達が笑ひに噎せまいとして傍を向いた。鳥を射て歸へる者もあれば、魚をぶら下げて來る者もあり、斧でせつせと薪を割つてゐる大男もあつた。――これらの人間は、決して普通の農場に見受けられるやうな、澁面を造つた勞働者ではなかつた。一樣にリンコルン綠のぴつたり體に合つた服を着け、きりりとした足拵へで、素破となると何時でも武器を掴んで飛び出せるやうな用意をしてゐたのである。――ここには、女氣と云つてはなかつたが、何かしら規律に類したものがあつて、共同の勞働が談笑の間にやすやすと行はれた。大概の男は、二十代から三十まで位の壯年血氣の者であつて、自分の筋肉の動きや神經の敏捷さに本能的な矜負をもつてゐた。かういふ集團生活で、第一番に問題になるのはいつも食物なのであるが、周圍の原始林は生物に不自由をさせなかつたし、穀物類はどの農民でも金さへ出せば賣つてくれるのだし、その金はヨークやハーフオードやリンコルンなどの寺々から、首都やカンタベリーへ旅する懐の裕かな肥つた坊さんや、さほど高名でない紋所を彫つた楯を光らせて馬の上で半分居睡をして通る地方の豪士などが、公道を通りしなに『通行税』として力づくで拂はせられたところから、鐵帯のジョ

とウイルとが忙しくて叱言を云ふほど、新しい鐵砲が殖えて行つたのである。

かういふ日毎の平和な營みの中に、ロビン・フッドは、どうして大勢の人間を食はして行けるか、彼等を食はして行くにはどれだけの武器が必要であるかを調べたり、指圖したりして生きて行つた。食物は、人類の歴史が創まつて以來、武器とは常に密接な關係を持つてゐるのである。彼は時々、廣場を監督してゐたディックやジョンや、ウイルやフイルなどを聚めて、重要會議を開いた。會議の内容は、大概、如何に何處で彼等の有効な武器を使用するか、その手段戰略襲撃地點などにあつた。尠くとも、密々の調査で、リンコルンシヤイアからノッテンハムシヤアへ掛けて、森の周圍五十哩四方の寺々町々邸の數は、彼等の掌に描いてあるも同様にわかつてゐたのである。

やはり、こん會議を開いてゐる、或る春の朝のことであつた。

襤褸を着た一人の男が、シヤーウッドの森を汗みづくになつて突き拔けると、廣場の手前の樅の巨木の前で留まり、そこで三度梟の啼聲を眞似た。

『おい、合圖だぞ。』誰かが廣場の向ふで呟いた。その方からも梟の啼聲が三度起こつた。そして、間もなくロビン・フッドと四五人の男達が會議をやめて、樅の木の下まで姿をあらはした。

『クレートンのトムか？何ぞ珍らしい事でも起つたか？』ロビンは悠長に口を切る。

對手はまだ息を喘ませてゐる。

『お頭、大變でございます。長官殿にはこの頃諸方の坊主共の抗議が起こりますので、ひどく御立腹の體でな、ついこの間ロンドンへ向けて出發したのですよ。一小隊の兵隊に自分はすつかり着飾つて、ヘンリ王に御謁見を乞はれたと思へば、王さまの御前に出ると貴方様の悪口やらある事ない事の嘘八百、つまり愚痴をこぼしにまかり出たのです。』

『それで、王は？』

ロビンは、ずんぐりと肥つた、赭ら顔の、怒り出したら狂人じみた感情家になる、その癖英國一の嘘の名人と云はれるほど才智のあるヘンリ王を眼の裏に描いた。

『王様の仰せには、長官、お前はそのために儂が任命した役人ぢやないか。國に掟があるんだから盗賊共はその掟に從つて罰すればいいんぢや。一々そんな泣言を云ふて儂の面前へ顔を出すなどとは見苦るしい。匆々立歸へつてそんなやくざ者を退治すればよし、さもなければお前はノッテンハムから引上げさ

すぞ、といかい御立腹でした。すごすご馬鹿面をして歸へつた長官殿は、あれでも怒つたはづみは相應の智慧が飛び出したものとみえて、ここ三日間ノッテンハムに市を立てゝ武術の試合に懸賞は金頭を頂いた銀の箭幹の矢を賭けて、貴方様を釣り出さうといふ計略を巡ぐらしたのです。』

このトムは、長官邸にロビンからスパイとして潜ましてゐる男であつた。ロビンは、よし、と大きく頷いて、トムを歸へした。それから一同は密議を擬らして、それぞれの手筈を定めた。それまで、平常の仕事場の物音しか聞えなかつたシャーウッドの森には、俄かに多數の人間の立働く氣配がし出した。中には、計劃があまり奇拔なので、高々と笑ふものさへあつた。盜賊達のあるものはの髭色を染めた。又、あるものは乞食の身態を裝ふた。留守居の者の外は緑衣を脱ぎ棄てゝ思ひ思ひの變裝に身を扮した。すつかり出來上つてしまふと、そこには軍隊式に身固めした群盜の代りに、乞食や、行商人や、鑄掛直しや、坊主などの雜多な群集が笑ひころげながら整列してゐた。それらの妙な一隊は、簡單なロビンの命令を聞くと、二人三人と連立つて、忍び隱くれに森の秘密な通路からノッテンハムを指して出發した。最後に古ぼけた赤い上衣を着たロビン・フッドがひとりで出た。公道には、地方から集る武士や浪人が武術の試合に勝利を得て、あはよくば仕官の道をでも求めやうとして、弓や六尺棒を曳摺つて來るものが多かつた。それらに交じつて、ロビン・フッドとその一團とはまんまとノッテンハムの城下へ忍び込んだのである。

矢場は市の郊外にあつて、一方になだらかな小丘をひかへ、そこへ設けられた座敷の上には地方長官や役人の妻女達がきらびやかに着飾つて掛けてゐた。その上には旗やリボンや吹流しなどが閃めき、警固の軍隊は槍や鎖胴着を閃めかして列を作つてゐた。

一方の草原には、朝早くから詰め掛けた群集が、列を亂しては軍人に叱られながらわいわい騷いでゐた。ともすると、林務官や長官直屬の軍人の數が見物人よりも多いやうに思はれた。ロビン・フッドをのぞく外の盜賊は、前からの手はずによつて悉く群集の間に散らばつた。ちよつとした式場あらためがあつて、角笛が三度鳴ると射手は溜りからぞろぞろと姿を現はして、めいめいの弓矢を檢査し初めた。そのとき、不審げに式場を見廻してゐた長官は、頻に頭を掻いて『あの緑の賊達は見えん樣ぢやな。』と呟いた後、大聲で、

『もう臆病者は見えんやうだから初めい。』と部下に命じた。

眞中に小さな的を圍んで、四つの大きい標的が矢場に立てゝあ

けてあつた。それらを目がけていろいろな腕自慢の連中が矢を射たのであるが、どれもどれもマークを射抜くものがなくて、後には二人の見知らぬ男と、セツスルベリーのロージヤーと、ムーアのヒユーと、もう一人赤い襤褸服を着て片眼を繃帶した男の五人が豫選に殘つた。片眼を繃帶した男は先刻から何一言も云はずにじろじろ長官の席を眺めてゐた。五人がかわるがわる妙技を竭したのち、ロージヤーは自分が射拔いた小さな的を、片眼の男の矢によつて眞二つに折られ、その男の矢が的の眞中に立つたのを發見してびつくりした。懸賞の矢は、長官の手によつて片眼の男へ渡された。

『さて、お前はなかなか秀れた腕を持つてゐる。見たところ大變貧窮しちよるやうだが、予の下に仕官する望みはないか？お前を隊長に取立てゝ、澤山の給金を與へてやり、あの馬鹿者のロビン・フツドといふコソ泥棒を捕へさせる役目に取立てゝやるが、どうぢや？』

かう云はれると片眼の男は繃帶をしない方の眼を向けてじろりと長官の顏を眺めた。『うんにア、儂らには御主人なぞは大嫌ひだ。』

その返事を聽いて長官は俄かに不機嫌になつた。

その翌朝、長官邸では近隣の諸侯を招待して祝宴を張つてゐた。主人がテーブルに立ちあがつて、尖つた神經質な顏を痙攣させながら、『お蔭樣で昨日は非常な盛會でありましたが、唯本官が遺憾とするところは、かの兇賊ロビン・フツドを捕へる――』と、まで云ひかけたときに、後方の窓から一閃の矢が飛んで來て、長官の眼の前にあつた丸燒の鷄の腹へぷつりと突立つたのであつた。

並ゐるお客は、最初何かの冗談かと思つてゐたが、侍臣のものたちが業々しく騷ぎ立てるので、初めて矢頭に結びつけた木皮の小片に氣がついた。長官は矢を拔きとると、木皮の表面に書いてある文字を讀んで、蒼くなりながら椅子の上に倒れてしまつた。木皮には皮肉な調子でこんな文句が書いてあつた。

『昨日、長官閣下より金の矢を頂戴せしは外ならぬコソ泥棒のロビン・フツドに御座候。』

かういふ事件も、食物の獲得を安全にするために起こつた。

5

この地方長官への最初の挑戰は、ロビン・フツドにとつて、終生の決鬪の端緒となつた。

事毎につけてロビンの一隊は、ノツテンハムの都會を荒しては、性急な地方長官の神經を苛立たせた。のみならず、惡戯者

のロビンが、彼れの夫人に、瀬戸物賣りの變裝をして近づいて甘心を買つたりしたことが、却つて長官の周圍にはいつもロビン・フッドが何かの變裝をしては肉迫してゐるやうな不安を抱かしめたのである。金の矢の事件から數年經つて、或る日彼は當時の暴力團の隊長である、ヨーク市に住んでゐるギスボンの子爵ガイといふ男を官邸へ招待した。

この零落した貴族は、放蕩三昧な生活を續けてゐた男で、いつも金に困つては村や都會の商人を荒して居つた。顏が極端に醜いうへに、内地外國の戰爭で切疵を受けてゐるので、ふためと見られぬ獰猛な猛獸のやうな姿をしてゐたのである。この男の好みの武裝は、馬の皮を頭からすつぽり冠むることで、全身を馬の鞣皮で包んだうへに、臀部には房々とした馬の尾を垂れてゐた。彼は五百磅でロビン・フッドの首を引受けた。

長官とガイとは三百人の軍勢を引連れてシャーウッドの森を襲つた。二人は騎馬の姿で手勢を引卒した。

一方、この不意の襲撃を知らなかつた山寨の盜賊達は、その朝も二隊に分れて森の中を狩りに出た。ウイルの率ゐた一隊と、ロビンとジョンの先頭に立つた一隊とは別れ別れになつて進んだが、いつも相互の間には角笛を吹けば應援に來られる程の間隔を取つて、同じ方向へ出向いたのである。暫く行くと、ロビンは木に寄りかゝつてゐる不思議な半獸半人の怪物を發見した。見れば長劍を帶び二本の匕首を腰に下げて、頭には馬の耳や鬣がつつ立つてゐたのである。そこでロビンは、またいつもの癖を出して、一人で相手になつてやるといひ出した。氣懸りになつたが、ジョンは命ぜらるる儘に、彼を殘してウイルの一隊と合隊すべく別れて行つた。少し行くと、ジョンは俄かに前方が騷々しくなつたのに氣がついた。常に覺悟はしてゐたものの、かうも早く長官の軍隊が來ようとは思はなかつた。馳しりだして最初に見たのは、仲間の二人が穴の中へ切殺されてゐる姿であつた。すかしてみると、百人あまりの軍人に取り圍まれたウイルが、狩立られた兎のやうに岩の上を逃げ廻つてゐるのが見えた。ジョンが弓を引絞つて、長官を射殺さうとすると、何かのはづみで長い弓はぽきりと折れた。さうしてゐる内に、彼は蒐がる敵によつて虜になつて木の幹へ縛られた。

何も知らなかつたロビン・フッドは、馬の皮を着た男の前へ進んで行つた。

『貴方の持つておいでになる弓からお察しすると、きつと弓道の名人に違ひありませんね。』と彼は呼びかけた。

『道を迷つてね、』馬の皮は答へた。『誰か案内して呉れるといいんだが。』

『御案内なら僕がやつてあげませう。』
『ところが、泥棒を探しに來たんですよ。ロビン・フッドといつてね、若し此處で會へるものなら、四十磅の金をやつても良い。』
『はゝア、さうですか、ぢやからお出でなさい。でも、その前にこの木の下でちよつとお互の技術を試めしてみようぢやありませんか、ひよつとしたら途中でロビン・フッドの奴に會はんとも限りませんでな。』
そこで、のんきな話だが、二人は弓術の比べくらをしだした。ロビンの得意な技術は、遠方に花環を立掛けておいて、その環の眞中を花瓣一ッ散らさずに射拔いてみせることであつた。その妙技に驚いたガイ子爵は、
『お前こそ俺の探ねる人間だ！』
と叫んで、劍の柄を握締めた。
『よしとも、用意は出來てゐる。貴樣なんぞに摑つてたまるもんか。』
かうおめき叫んで二人は劍を拔いた。ものの二時間も鬪ふと、ロビン・フッドは、千軍萬馬の間を往來したガイに比べて、甚しい息切れを感じて來た。と、思つた途端に、彼は木の根に躓いて、撞と倒れた。ガイ子爵は、倒れたのを見すまして一擊を加へた。この武士道をわきまへぬ卑怯な行爲は、ロビン・フッドを永い眠から覺ました。彼はどんな惡辣な盜賊でも、相手が倒れたときは起きあがるまで待つてゐて、その間劍を手元へ引くといふ永い間の武士としての習慣を守つてゐるのを知つてゐたのである。
『おのれ！この卑怯者奴が！』から言ひさま、起きあがると、上へ構へた劍を取りなほして、眞直にガイ子爵の胴體を突き差した。次に、彼は自分のリンコルン綠の獵衣を脫ぎ捨てゝ、敵の馬の皮を着ると、その腰にあつたラッパを吹き立てた。合圖の信號を聞いて、地方長官の一隊は集つて來た。長官はロビン・フッドが倒れたものと思つて、褒美の金を手渡さうとした。
『いや、金は要らない。もう頭梁を倒したからには、あそこにゐる一の乾分も切つて捨てたい。』
から云つて一人でつかつかとリットル・ジョンの傍へ行くと、彼を縛つた繩を切り捨てた。そして、手早くガイ子爵の弓矢を乾分に渡すと、あらためて馬の皮を頭からはねのけて、得意の弓を滿月のやうに引絞つた。
長官は馬に一鞭あてると、物をも言はずに逃げ去つた。
だが、山寨へ歸つてみると、ウイルの姿が見えなかつた。晩になつたら歸つて來るだらうと思つて、その夜は祝宴を張つて

待つてゐたが、いつまで待つても歸つて來なかつた、ロビンが手分けして探し出さうと言つて居るときに、ノッテンハムからのスパイが驅けつけた。スパイの報告によれば、いまノッテンハムの城の獄に監禁されてゐるウイルは、今朝城外の廣場で絞殺されるといふことになつたのである。そこで一同は、ノッテンハムの城を襲撃することに一決した。盜賊達は揃ひの獵衣を着、ロビンだけ頭から爪先まで赤い服を纏ふた。今度は堂々と天下の大道を通過して、地方長官を向ふに廻はして進軍するのである。村から村へと噂は噂を傳へて、ノッテンハムの城下は湧き返へるばかりの騷ぎであつた。

城が目睫の間に迫ると、ロビンは死刑執行の時間を聞き合せにタック和尚をその邊の葬儀屋へ使はした。死刑は即刻今にも行はれるかに傳つてゐたのである。かうしてる間もなく、城の大門が颯と開いて、黑い馬に曳かれた馬車が引出された。馬車の上には首に繩を打たれたウイルと、その傍に覆面をした死刑執行人が立つてゐた。馬上裕かに乘り廻はした地方長官が、この意外な捕物にほくそ笑みながら續いて姿を現はした。城壁を少し曲ると、市場の立つ十字路に絞首臺が仕掛けてあつた。黑い馬は、重苦しさうな木製の車を曳いて、歩一歩鍵の手になつた死刑臺へ近づく。そこへ突然飛び出したのがリンコルン綠のジョンである。

『ウイル、お前死ぬなら、その前にたつた一度仲間と別れを告げてくれ。』かう呼びながら彼は護衞の兵隊へ向つて、

『俺達、ちよつとこの男を借りるぜ。長官どうですね？』と尋ねた。

長官は即座に兵隊に向つて、その足の長い奴を引くくれと命じた。さう下知してゐる間に、足の長い奴は、ひよいと馬車へ飛び上つて、ウイルの繩を素早く切つて捨てた。

『大丈夫だ、みんなお前を援けにやつて來たのだ。』かういつて彼は、一人の兵卒の劍を拔き取ると、それをしつかとウイルの手へ握らせた。

この時、地方長官の胸へ眞直に糸を於いたやうな狂ひのない狙ひを定めて、弓矢を番へたロビン・フッドと、その一隊の盜賊達が姿を現はした。長官はとるものもとりあへず城門の中へまつしぐらに驅け込んだ。暫くの間、ノッテンハムの町は、綠衣の盜賊達によつて占領された形であつた。しかし、そこには掠奪もなければ、一滴の血も流さなかつた。

話は前後するが、シャーウッドの森へ、二人の女が加つて、殺風景な盗賊達の晩餐卓を賑はすことになつた。その一人は、若いアランといふ音樂者の妻で、もう一人はロビン・フッドの許婚であつた。

アランといふ青年は、あるとき森の中を泣きながらさ迷ふてゐるのを發見された。ロビンが樣子を聞いてみると、青年は金のために戀人と結婚することが出來ず、無理解な父親のために、娘は金持ちの爺さんとその日ハーフォードの寺で結婚式を擧げることになつてゐるといふ話であつた。一隊を引連れたロビンは、その寺を襲ふた。自ら音樂者の携へてゐた琴を掻き鳴らして、美々しく着飾つた式場の眞中へ行つて、お祝ひの歌を唱つてやると言ひ出した。僧正が、新郞新婦が動き出したから、歌を唱へと命ずると、ロビンはつかつかと新郞新婦の間へ割り込んで、金持ちのユーゴー・デ・フエリツコ子爵といふその婿を突き飛ばして、

『これは似合の夫婦ではないわい。こんな老ひぼれのがたがた脊椎の子爵が、水々しいこんな娘さんと結婚するわけはない。この娘さんは、好きな人と結婚するがよい。』

と言つて後方を差しまねぐと、二十人の弓矢を番へた盗賊が、アランを先立てゝつかつかと寺院の中へ闖入した。慾張つた父親には、婿殿の引出物に該當する一袋の金貨を與へて、式はタック和尚主命の下に首尾良く終つたのである。

このアラン青年は、それから山寨の唯一人の音樂者として調法がられ、時雨のする秋の日や、雪の冬などの洞穴に、荒らくれた盗賊達の耳を樂しましめた。

ロビン・フッドには、幼なじみのマリアンといふ許婚があつた。二人は別れ別れになつて、一生會ふことが出來ないやうな運命に置かれたのであつたが、或る時、マリアンの耳に、昔のロバートが、今はロビン・フッドといふ盗賊になつてシャーウッドの森に住んでゐるといふことが傳はつた。旅行が危險であるために、彼女はすつかり男裝して、長い道をシャーウッドの森まで辿りついた。その日、ノッテンハムを見舞ひたいと思つて、わざと汚ない身態をしたロビンは、森の出口の邊へ差しかゝると、若い男がつかつかと自分の方へ歩いて來るのを見た。彼は、長官のスパイでもあるかと思つて、わざと無愛相な聲で尋ねた。

『何か用かね？　この森を何處へ行きなさる？』

手下の泥棒だと思つたマリアンは、聲をとがらして詰問した。

『これが、お前さんに何だといふのかい？私は自分の好きたと

ところへ行くのだよ。』

そこで、ぐつと癪に障つたロビンは、劍を拔いて道に立塞がつた。

『いや、ならぬ。儂の許しを受けなければ此處一歩たりとも中へ這入ることは出來ないぞ。』

ここで青年も細身の劍を拔き連れて、ロビンの刃と打合はした。相手が相手だつたもので、ロビンは急所を突すまいと用心して戰つた。青年はそんなことは知らずにむきになつて鋭い劍を閃めかした。油斷の隙に、ロビンは頰に切りつけられて血だらけになつた。

『待て、若いの、待つた。儂はこの森のロビン・フッドだ、儂と一緒に山寨へやつて來ないか。』

マリアンには聞き覺えのある聲だつた。名乘り合はしてみると、それは相思の許婚であつたのである。自分の女房と戰つてさへ、氣の弛るみに乘じて頰を切られるロビン・フッドであつた。しかし、これこそは彼が生涯に一度受けた疵の痕だつたのである。

7

どこか、世の中の高い處に、ゴシックの塔と磨きあげた大圓柱に圍まれて、王と僧侶とが、國家を治めてゐるものと信じて、政治を談じてゐた。彼等は、美しい言語としてフランス語を用ゐ、古典の優作なる知識としてラテン語を使つた。いつも、彼等の卓上には、芳香を放つ珍らしい果物が銀の盆に盛られてあり、彼等の胴衣は高價な酒の滴でよごれてゐた。

政治を談ずる王と僧侶とは、格別に悧巧な顏をしてゐるのではなかつた。王は、血のついた甲を脫いだばかりのやうに、王冠の痕の食い込んだ額に、見るから癇の昂ぶつた青筋を立て、巨きい手は、いつも何かを掴んで放すまいとするやうに、貪慾な動作を含んでゐた。僧侶は、重たるい二重頤に、けだるさうな欠伸を噛んで、酔に爛れた眼をしよぼしよぼさせながら、黃金の十字架を肥つた腿の上にもてあそんだ。むしろ平凡なこの二人を、實質以上に崇嚴に思はせたのは、彼等の密議室を取り圍んだ、威めしい警護の武士達の群であつたらう。

これらの武士は、いつでも戰爭の準備をしてでもゐるかのやうに、足の尖端から嚴重な、きらびやかな武裝をしてゐて、ある者は紋章のついた楯を持つてゐると、ほかの者は覆面の中に長い鎗を閃めかしてゐた。彼等は、密議の室の重たるい織物の前や、高い圓天井からたぎり落ちる蒼白い日光の屆かぬ隅など

に、造りつけの置物のやうに、長い間、拍車の音一つがちりとさせずに立つてゐるのである。この幾十人もの靜止の狀態にある武士が、突如としてその白刃を閃かする場合を想像すると、何人と雖も、彼等の訓練と沈默を、恐怖をもつて目撃しないわけには行かない。そして、幾通りもの大理石の廊下を隔てた中庭には、双刃の闊劍（だんびら）を拔いた隊長が、白い馬に跨がつて、交替の番を待つ一隊の武士に、逞ましい髯の間から號令を掛けてゐるのである。これらの大勢の武士に對する恐怖は、その重圍の中に平氣で談笑してゐる王と僧侶との表情を見ると、忽ち錯覺的な畏敬の念に變ずるのである。

巨きい掌を持つた王の所有權には、地圖に描き得る限りの土地があつた。その土地から生じる穀物、生物、製産品、租税などゝ共に、一切の城砦、武器、船舶、車輛、機械、營造物と人民とがあつた。彼は、それらの物がすべて、自分の掌へ數百萬の糸でつながつてゐて、いつでもその一本を曳くと意のまゝにそれらが手元へ手繰よせられるものと信じてゐた。

眠むげな顏をした僧侶は、神の代理人として、國土を治め萬民を使役してゐる王をさへも、己が掌の中へ自由自在に操縱し得る特權を持つてゐる聰明と知識と叡智と精髓の結晶であることに堅い自信を抱いてゐた。

そして、二人とも、旗を飜へした櫓門、銃眼をくり拔いた城壁、鐵鎖で食ひ留めた跳橋、斥候の屯ろする國道のそとへは一歩だに歩み出ないのである。――彼等の視線から遠去かつてゐるものに、極く間近の都會にうようよしてゐる貧民や小商人の人口があつた。市の東側には、先代の王の建てた塔が聳えてゐたが、それから少し離れると、城門の脇に飼つてある獅子や虎の吼える聲が聞える程の距離に、木造のぺしやんこの家が、荒された戰場の跡のやうに續いてゐた。そして、兩側の煤ぼけた家並に挾まれた道路は、狹く汚なく穴だらけで、王樣や僧正の大きい車は通れなかつたのである。

王樣と僧正の密談の席へ、侍臣に案内されてハーフオードの僧正が伺候した。慌立たしいこの僧正の伺候は、今迄曾て王室を騷がしたことのない緊急な問題をもたらしたのであつた。彼等三人は、それから暫くひそひそ聲で、英國の地圖を指差しながら何かを相談した。そして、王が高い椅子からすつくと立ちあがつた時には、拳は制しきれぬ怒でぶるぶる慄えてゐた。厚い織物の蔭に居る近侍の侍が呼び立てられ、その男の甲冑が廊下から中庭へ響いて行つたと思ふ内に、忽ち城の内外には軍馬の嘶めく物音が聞えたのである。かうして、ヘンリ三世の時の、ロビン・フッド討伐隊はワツトリング・ストリートを北へ向つた。

あらゆる運動の主動者のやうに、ロビン・フッドも、自分の

氣の迷い乾分達によつて一生を過まられたのである。彼等の一人が地方長官によつて絞首臺の露と消えた。その復讐をするために、地方長官を引摺り出して乾分達は死刑に處したのである。それを聞いたときに、ロビンは我が事終れりと嘆息した。一同の盜賊を集めると彼は、當然來るべき時が間もなく一同の上へ來るだらうと告げて、泪を流しながら訓戒した。彼は、地方長官や軍隊を怖れたのではないが、尠なくともその宣傳によつて激昂する民衆を怖れたのである。間もなく、スパイの一人が來て、王は五中隊の射手と騎馬武者を率ゐて、森を討伐しに北上したと告げたときには、ロビンは厳かな聲で乾分達に告げた。

『同志達、皆櫓の上へ登つて行つて、持てるだけの寳物を取り出せ。決して不公平な分配をするた。それを取り出したら、何處へでも好きなところにかくして置け。だが決してこの附近ではいけない。これから諸君は、めいめいに自分自身の主人となるのだ。何處へでも勝手なところへ行くが良い。儂自身もこれからフオンテンスの僧院へ暫時姿を忍ばせる。決して明朝までこの山峯に留まるなよ。』

から言ひ殘して、彼は弓矢を持つただけでジョンともう一人の青年を連れて樹立の中に姿をかくした。その頃には、妻のマリアンは病死してゐたのである。一同の群盜が、泪ながらに首魁の命令通りに、森の財産を分配して、那邊ともなく引揚げた晩に、松明を點した國王の軍勢が、シャーウッドの森深く分け入つて、盜賊の一人にも出合さぬ腹立ちまぎれに、黎明を合圖に、櫓を取毀し、樅の巨木の下の揚蓋を粉微塵にし、可燃燒物の一切合財を火に投じた。

フオンテンス僧院のロビン・フッドは、平凡な老衰人の最後であつた。唯一つ、この有名な弓道の達人らしく思はれるエピソードは殆んど足腰も立たぬ末後の瞬間に、窓から外を見ると、一本の節くれだつた樅の大木が彼の眼に入つた。その樅の木を目掛けて、彼は弓矢を番へると最後の矢を放つたのである。矢はすつくと大木の幹に止まつたが、木からは一枚の葉も搖り落ちて來なかつた。

この樅の木は、ロビン・フッドが一生全力を揚げて挑戰して來た英國王朝の封建主義のやうに、深く地中に根を張り、大空に青い葉を擴げてゐたのである。ロビン・フッドは、恐らく自分達の叛逆の『失敗』をその一本の矢に見て、苦々しい眼を瞑つたに違ひない。

偖て、現實に立戻つて、私達が英國案内書の何年版を繙つて見たところが、『フオンテンス』僧院の樅の大木が見つからないと同じやうに、これほどロビン・フッドが挑戰した封建主義も英國から根こそぎ轉覆されて、今は無いのである。　（了）

『わしが國さ』の考察

外骨

去る八月下旬、仙臺放送局の懇請に應じて同市に行き、二十五日夕「昭和の御大典奉祝を如何に記念すべきや」、二十六日夕「ゆかしなつかし宮城野信夫」といふ二題の講演をやつたが、此第二は同市にちなむ「わしが國さ」の考證であつて、普通にシヤベレば一時間以上を要すべき長講であつたのを、放送局の定規たる三十分間にやらねばならぬので、短縮省略その梗概を述べたに過ぎなかつたのである、それを物足りなく感ずるので、今回中央公論のステーヂより再び放送する事にした、隨つて訥辯ながら講演口調で申上げる

わしが國さで見せたいものは
　昔や谷風今伊達模様
　　ゆかしなかつし宮城野信夫
　　　外にないぞへ松島ほとり

これは江戸時代の末期より昭和の現在に至るまで、全國人一般が、奥州人のお國自慢として傳唱する有名な俗謡ですが、私は此俗謡に就ての考察と批評を述べるのであります

先づ此俗謡は何時頃出來たものかを考へて見ますと、谷風梶之助は寛政七年の正月に四十六歳で死んだ力士でありますから、それより一昔後とすれば文化二年頃、二昔後とすれば文化十二年頃、三昔後とすれば文政八年頃でありますが、伊達模様といふハデ姿が江戸で大に流行したのは、文化の末頃より文政の末頃までの間でありまして

伊達模様紅葉襠　　伊達模様判官染
伊達模様雲稻妻　　伊達模様廓寛濶
裏模様菊伊達染　　櫻舞臺幕伊達染
伊達姿辰巳八景

などいふ戯作物が出來たのも、文化十二年より文政十年までの間でありましたから、此俗謡は文政四年七月、江戸の河原崎座

で白石噺の演劇があつた頃に出來たものらしいと見るのでありま す
それから次ぎの問題、此俗謠は果して奥州人の作であるか否かと云ふことでありますが、私は仙臺地方で出來た俚謠でないと信ずるのであります、これは『碁太平記白石噺』の作者たる江戸の烏亭焉馬か、若しくは焉馬に縁故のある者が作つたものと見るのであります、其考證旁々此俗謠の解釋を述べませう

わしが國さで見せたいものは

これが第一の疑問です、明治元年十二月に新政府は「陸奥を分けて磐城岩代陸前陸中陸奥の五ヶ國とす」とされたが、此俗謠は谷風といひ伊達模様といひ、宮城野信夫といひ、松島ほとりと云ふなど、其擧示の實例が舊仙臺藩内に限られて居るので、今の陸前岩代地方の俚謠と見ねばならぬが、此陸前岩代地方では「我」を「わし」といふ方言は無かつた、「我」の俗語は「おら」である、次ぎは「わしが國さで」の「さで」といふ語、これも同地方の方言ではない、「國さ行つた」とか「國さ歸つた」とか云ふ語はあるが、それは「國へ行つた」とか「國へ歸つた」とか云ふ場合に使ふ語であつて、「さ」は「へ」或は「に」といふべき所に使ふ助詞である、それ故「わしが國さで」と云へば「我が國へで」であつて、動作に伴ふ助詞と場所を示す助詞とを併用した事になつて意義を成さない

「さ」は「様」の約で「國さ」は「國様」である「我が國様で見せたいものは」と云ふに不思議はないとの說を唱へた人が近頃ある、山さ行く、川さ行く、湯さ行く、芝居さ行くなど云ふ現存の方言も「へ」又は「に」でないとすれば、山様行く、湯様行くであつて助詞なしのヘンな語となるではないか。

これと同じ誤用の「さ」が『碁太平記白石噺』に多くあります、信夫の言葉として

「どこもかもお光り申して、おしやらくの櫛さ見るやうに塗りこべつた簞笥さ」

「私ら國さア奥州だ、だゝアがアまに樣子あつて別れ申してお江戸さアはあらく盛る所だアと聞き」

奥州人は斯かる場合に「櫛さ」「お江戸さ」とは云はない、『白石噺』には此外方言の誤用が少くないのであるが、それは作者の焉馬が吉原の妓樓に流連中、隣座敷に居た奥州人から奥州の方言を聽き取つて、『白石噺』の臺詞に綴り込んだのであると云ふから、一夜漬の方言聽き書き、入れ智慧の附焼刃、其誤用は免れないであらうと察せられます

昔しや谷風

明治二十七年出版で仙臺住の內藤彌一郎といふ人が編輯した『谷風叢話』といふ本に「昔白石の領主片倉氏の抱力士に谷風といふ者あり、刈田郡宮驛の生れ、强力云々」其二代目が有名な谷風であると記してありますが、これは無稽の虛構である、私は谷風梶之助の事に就き充分の調べをして居るので、東京經濟雜誌社が明治十九年に出版した『大日本人名辭書』の初版に、仙臺谷風ばかりを擧げてあつたに對し、彼は二代目である、初代は讃岐高松人であると辨明したので、同書の第二版以下には私の原稿通りに谷風四人の略傳が載つて居ります

初代の谷風梶之助は享保年代に勇名を鳴らした力士で、大阪相撲に屬して居て土つかずの勝つゞけであつた、當時大阪の商店では、客が品物の代價を値切ると「谷風です」と答へて、マケナシの意義に使つたといふ位であるが、只一度堺の八角楯右衞門との取組に「待つた」連發の策に乘ぜられて負けた事だけが、一生の不覺とされた程の人氣者であつたのであります。

其後寬延三年八月八日に奧州宮城郡霞目村の農家に生れた金子與四郎が、田舍相撲に加つて秀ノ山と名乘り、拔群の譽れを得て仙臺藩主伊達徹山侯より伊達ケ關の名を賜はつたが、藩侯の姓を冠するのは恐れありとて、自ら「伊」の字を省つて達ケ關森右衞門と名乘る事にした、そして

「當時江戶の名力士關ノ戶億右衞門、故鄕へ歸省の節、達ケ關の體格と技量を見て大に感じ、此者天晴無雙の關取にも成るべし、斯かる好力士を田舍に置くは惜き事なりと深く賞美の末、終に江戶へ伴ひ歸りて己が門弟となしけるが、是よりして達ケ關の强名は天下に響き渡り、朝日の勢を以て昇進し、安永四年の春二十六歲にて小結に上りける、却說享保の頃、讃岐高松出にて谷風梶之助と名乘る剛力無雙の名力士あり、其評判都鄙に喧傳しけるが、其歿後襲名すべき程の力士なかりしを、江戶相撲の年寄共協議の上、達ケ關に襲がしむる事と成り、達ケ關は其號を弟武四郎に讓りて、己れは谷風梶之助と改名し、翌安永五年より關脇に成りて彌々强名を博しける」

此一節は、蜀山人太田南畝直次郎が官用で長崎へ行つた際、路銀の餘りで大阪の書肆より夥多の書物を買つて歸つたので、妻がアツケにとられたといふ逸話を生んだ其書物の一たる寫本『相撲今昔物語』中に記述されて居る事である、實物は現に東京上野の帝國圖書館に收藏されて居る

斯くて二代目谷風は、達ケ關時代であつた明和の末より寬政六年即ち歿去の前までに、全國所々の晴場所で取組んだ相撲の總數は二千七百六十四回であつたが、其中で負けたのは僅に二十

五六回に過ぎなかつた、それで天下無雙の横綱を張るに至つたのでありますが、關東地方には今尙「谷風麥」と唱へる麥の一種があつて、幹が丈夫で暴風暴雨にも倒れない强い麥といふ意義に使はれ居る位ですから、奥州人が谷風をお國自慢の一に擧げるのも無理ではないが、谷風は江戸で名を揚げた力士で、童幼にも其名を知られて居るのであるから、江戸人の代作としても、谷風を擧げねばならぬ所でありませう

今伊達模樣

今とは文化末年頃より文政十年頃までの間であらうと前に述べましたが、此伊達模樣と云ふ語には變遷があるのです、抑も「ダテ」と云ふ語原は、男立、腕立の「立(たて)」で、立物、立役などの「立」と同じく重立(おもだち)の義であります、寛文延寶頃に全盛を極めた寛濶六方の俠客「やッこ」が派手な大形模樣の衣服を着たので、それを「立者」の模樣「立模樣」と云ふ事になり、後の「下谷一番ダテ者でござる」といふダテ者も、立者の如く派手好きの人と云ふ義であります、それをイツシカ、否明和の初年頃に誰かゞ「立」たる「ダテ」に「伊達」の二字をあてはめたので、それを後の似而非考古者が、伊達模樣の伊達に囚はれて、仙臺藩の者が派手な模樣を好いて着用しもたものとコヂツケたのであります、其說の無稽である事は天明以後の考證家が書いた數種の隨筆本に出て「伊達家の小者が風なりなど云ふは附會の說なり」と斷言してあります、要するに伊達模樣といふ語は仙臺に少しも緣故のない語であり、又仙臺藩人が他に異る派手な模樣を好いて着用したと云ふ事實も皆無であります、それを知らないで、無學の駑馬などもヤハリ仙臺關係の語と見て「今伊達模樣」と云つたのであらうと察します、文化末年より文政十年頃までの間ばかりでなく、仙臺で特に派手な模樣が流行したといふ時代、他にない派手な模樣を製出した時代があつたと云ふ確乎たる文献の徵すべきものが出ない限りは、此推定を否む事は出來ますまい——

尙こゝに一つ「わしが國さで」の俗諺は、仙臺藩人の作でないと云ふ有力な傍證があるのです、それは仙臺藩人が藩侯の姓氏たる「伊達」といふ語を呼び捨てにする事は斷じてないと信ずる一證が、これも古い隨筆本に出てゐます、攝州三田の藩主は九鬼家であつたので、同藩臣は節分の追儺に唱へる通用語をそのまゝ「福は內、鬼は外」と呼んでは、九鬼樣を外に追出すと云ふ事になつて不敬不忠の至りであるとて、「福は內、鬼は內」と唱へた、仙臺藩ではサカナの「鯥(むつ)」を「ムツ」と云つては、藩侯の伊達陸奥(むつ)守樣を呼び捨てにする事になつて恐れ多いとて「むつ」を「六ツ」として「六の魚」と稱したとある、これが事實であつたことは、今も仙臺藩人が認めて居る所であります、此外にマダ一つ馬鹿氣た一話があつて人々を笑はせました、それは

ある夜仙臺の市中を通行する若者が大聲で「竹に雀は仙臺様の御紋」と謠つたのを一武士が聞き咎めて「町人フゼイの者が我殿様の御紋の事をドナルのは不埒である、斬り捨てるぞ」と睨めたので、若者は低頭平身して、イヤ〳〵私は左様なことを謠つたのではござりませぬ「酒にスルメは三百と五文」と申したのでありますと辯解したが、武士はそれを聽いて「然らばゆるしてやる」

これは何人かゞ作つた落語でありませうが、それにしても階級制度の嚴酷であつた一證と見るべき事で、仙臺藩人が殿様の姓氏たる伊達を呼び捨てにする「伊達模様」といふことを云はない筈との例證でありませう、前に述べた谷風が藩侯より賜はつた伊達ケ關といふ名乘りを、藩侯の御姓を冠するのは恐れ多いとて「伊」の字を削り「達ケ關」として「達」を「ダテ」と唱へず「タテ」と唱へて居たのも亦一證と見るべき事であらうと思ひます

ゆかしなつかし宮城野信夫

仙臺女仇討といふ白石在の百姓の娘たる姉妹が父の復讐をしたと云ふ事は、由井正雪の陰謀事件を演劇に仕組む際、事實のまゝでは變化もなく面白味もないので、女の仇討といふ軟硬の珍事を作つて嵌め込んだものである、そして矢倉姉妹（姉おすみ、妹おたか）が父四郎左衛門を殺せし田邊志摩を仕留めたといふ筋の古狂言を烏亭焉馬等が改作して『碁太平記白石噺』と題したのであつて、百姓與茂作、代官志賀臺七、姉宮城野、妹信夫などといふ名前は、悉く變作したもので、事の根本が假作であるに、其假作を變作したのであるから、吉原の遊女に宮城野といふ者はなく、其妹に信夫といふ者があつたのではない、

從來仙臺女仇討として由井正雪の陰謀事件に仕組んだ演劇は、觀客の受けがアマリよくなかつたのであるが、焉馬等がそれを江戸の吉原へ持つて來て、姉を大黒屋の傾城宮城野太夫とし、妹をポット出の信夫として、ダ、ア、ガアマの怪しい方言を入れたが、吉原を無上の樂園とし、遊女を天女の權化と見て居た江戸市人の氣に投じたので『碁太平記白石噺』は首足胴體を去つた臍のあたりと見るべき「新吉原の段」だけを演ずる事になり、隨つて宮城野信夫といふ虚構假作の名が實在人の如く傳へられたのであります、低級の浪花節や講談物が思想善導の藥になるか否かは別問題としても、演劇のソラゴトを史實と信じて愛憎毀譽の標的とする事は、この外にも幾多の例があるので皆様御承知でありませう

矢倉姉妹の復讐といふ事が全然無根の空説であるとの事は、今の伊達家に於ても證明して居り、又白石の領主であつた片倉家にも何等の記録が存して居ないとの事が、三田村鳶魚氏の新著『芝居ばなし』中に追記として出てゐます

私が仙臺放送局でやつた講演は、此文を主として「ゆかしな

つかし宮城野信夫」と題し、其梗概書には「宮城野信夫は安永八年作の『恭太平記白石噺』に初めて現はれた假作人名である、其假作人名であるにも拘はらず、それを實在人として、ゆかしがり、なつかしがり、果は其郷土に碑石を建てるに至つたのは、太古の神話を事實非事實に超越した批評外の事として尊重するが如く、これに史家者流の攻究を加へない所に、奥州人の熱烈な愛郷心と絢爛たる詩的情操が流露してゐると褒めちぎるのである」と記し、私は當夜マイクにも此言を吹き込んだのでありますが、其眞意は皆様のお察しを願ひませう

さて、宮城野信夫は斯く虚構假作の人物人名であるが、これを仙臺人のお國自慢に加へたのは「わしが國さで」の誤つた方言及び「今伊達模様」の語と共に、ヘンな疑問であるばかりでなく、寧ろ自己推擧で此「ゆかしなつかし宮城野信夫」の一句を入れんが爲めに、駑馬若しくは駑馬派の者が仙臺人の作らしい俗謠を僞作したものと見るのであります、當時の戯作者氣質に其傾向がホノ見へ、且つ駑馬の性格としても、老翁の死花としても、自己若しくは麾下の者が僞作したものに相違ないと、例示獨斷的にきめて居るのであります、それは無茶だと云ふお方のがあるのならば、御面倒ながら相當の反證を列擧しておし下さい、確信を妄信として取消すことには吝ならずです

外にないぞへ松島ほとり

此句の「外にないぞへ」を「浮かれまいぞへ」としたのもあり、又「松島ほとり」を「松島ほたる」と改作したのもありますが、其「浮かれまいぞへ」では自慢の力が薄くなり、結尾を「松島ほたる」としても、松島は螢の名所でないと思ひます、此例で推せば、宣傳流行の當世、今に「松島ホテル」と改作して、観月白鷗の二樓と共に停車場の看板に出るかも知れません、そこで日本三景の首位たる松島、風化浸蝕の幾萬年、天工の妙を極めた絶景を、お國自慢の一に擧げたのは、何人も異議のないところでありませうが、此一句も亦仙臺人の作でない事が、語勢語調にあらはれて居ります

しよんがいな

「さんさ時雨か萱野の雨か、音もせで來て濡れかゝる」といふ夜遣の俗謠は、仙臺地方の古い俚謠でありませうが、仙臺人はこれを伊達政宗が作つた凱旋歌であると曲解して、合唱句の「しよんがいな、お目出たく／＼」を「勝凱な、お目出たく／＼」と語呂合せの字を書いた笑はせ事もありますが、其「勝凱な」を「わしが國さで」にも附けて、凱旋歌のお目出た仲間に入れて居るのは一層の滑稽ですが、維新後の仙臺人が「わしが國さで」を江戸人の僞作であるとも知らず、土着の俚謠と信じて陶醉歌舞の悦に入る其無邪氣さは、これも郷土愛の表象と見て「お目出たく／＼」と申し上げて置きませうよ　（了）

文壇早稻田派の思ひ出

近松秋江

序談

雜誌又は新聞紙なども、人間と同じやうに、成長發達、やがて老衰退歩といふやうなことは、必然あるべき運命と思はれて、ちよつと記憶に上る著名の雜誌にしても「國民の友」「早稻田文學」「太陽」などの、ある時期の間榮へて、やがて衰退し廢刊したことは、實に惜みても餘りあることのやうだがそれは恰も偉人名士の死を惜むと一般、人の情として誠に無理からぬことではあるが、畢竟、それ等の雜誌が働くだけ、はたらいて、各自の職分を盡して一生を了つたのであるから、生者必滅の理と思つて諦めねばならぬ。

人間ならば、太閤が六十三歳で死んだからとて、太閤の人物としての價値を生前に比べて割引して考へはせぬ。日露戰爭の大立物兒玉源太郎が五十五歳で死んだからといふ理由で兒玉はつまらない人物であつたといふやうな、愚かな論理は生じて來ない。

それと同様に、「國民の友」は廢刊した。廢刊したから、詰らぬ雜誌であつた。「太陽」は廢刊したから惡い雜誌であつた。「早稻田文學」もそのとほり、「文學界」も「帝國文學」も、「日本」新聞も亦た廢滅したから詰らなかつたと思ふものがあつたならば、それは、しか思ふ者の單純で、淺はかな見解であるのだ。「國民の友」それについで「太陽」は、私の少年期のおはり頃から青年期の終まで、私の好ましき伴侶であつた。私とほゞ年齢を同じうするその時代の青年にとりて、殆ど凡ての青年にさうであつたらうと思ふ。

しかし、私は、こゝではそれ等の雜誌について語ることを斷

念せねばならぬ。これより以下語らんとする所は、本誌主幹の需に應じて、主として「早稲田文學」を中心にして起つた早稲田派の文士の動靜について、過去のいろ〳〵を、ひとわたり思ひ起してみようとするのである。

一

そも〳〵「早稲田文學」は、今日でも少しく年配の文學者は皆な知つてゐるとほり、坪内逍遙博士の創刊した雜誌であつて、それに就いて、發刊の年代とか、登載資料とかいつたやうなものは、今、宙には委しく記憶して居らぬが、博士の沙翁劇の飜譯とか、「桐一葉」「牧の方」といつたやうな史劇は、それに連載されたものであつた。博士は——その頃はまだ博士でなかつた。——一方それ等の努力精進の結果になるものを載する傍ら、當時の文壇に就いて論評をなし、一代の文藝の氣運を促進することに最も力を注いだのであつた。

當時博士と相對立して明治二十年代三十年代の文藝氣運の促進に効勞のあつたのは、故森鷗外博士であつたことも今更絮說するを要せぬことであつた。

ところで、文藝にも時期によりて、その氣運に消長のあるは免かれないので、暫く私自身の記憶を中心にして回顧してみるに、私が始めて早稲田の文學科に入つた時分の前後は、その前數年間、——明治年代の文學史上の黃金期ともいふべく最も榮えてゐた文藝の氣運が既に衰退期に陥つた時代であつたのだ。

即ち前記の逍遙鷗外二博士の他に、純創作家として最も著名なる人に尾崎紅葉、幸田露伴二氏が華々しき活躍をしたのは、明治二十六七年より三十年前後にかけての數年であつた。その他樋口一葉女史が彗星の如く顯れて忽ち消へていつたのも、その間のことであつた。

才華一世に唄はれた紅葉山人も明治三十一二年の頃は、その最後の作「金色夜叉」の結末を持て剩してゐたし、露伴も漸く小說以外の文筆の餘技と讀書に退かんとしてゐた。鷗外漁史も「めざまし草」を廢刊して、その官職上止むを得ず東京を去り、九州小倉師團附の軍醫として遠き任地にあつた。坪内逍遙博士は、純文藝教育が、子弟の實生活上の人間行路を誤ることを痛感して、一面教育家である責任上、早稲田文科の門弟等をして、純文藝に志を向けしむるよりも、むしろ中等教育に身を投じて、先づ實生活の基礎を築かしめることを奬勵したのであつた。その頃（明治三十二年頃）のことであつた。鷗外氏が遠く九州の小倉にあつて、遙に東京の文壇を評して末流文壇と罵つたことがあつた。（その文章が登載せられたのは二六新聞で

もあつたか？）それについて島村抱月氏が讀賣紙上において、「末流文壇とは何ぞや」といつた言葉を用ゐて、氏一流の穩健なる筆法で鷗外氏の嘲罵を反駁したことを覺えてゐる。兩者の說の當否は暫く措いて、鷗外氏がそんな言葉を用ゐたほど、日淸戰爭（明治二十七八年）を中心として、その前後に榮へた明治三十年代の文壇の黃金期は過ぎて漸くその後の沈衰期に入つてゐたのであつた。

坪內博士の「早稻田文學」が休刊したのも、その沈衰期と因果的關係を成してゐたのであつた。廢刊はたしか三十一年か二年であつた。（今明確に記憶せず。）その廢刊の辭に島村抱月氏の筆で、簡潔明淨で、しかも哀愁の底にも尙ほ一分の不撓の意氣をほのめかしてゐた「……吾等同人は暫く水底の沒人となりて云々」といふ句のあつたことを記憶してゐる。

前の「早稻田文學」が、われ／＼の學生時代に廢刊になつた一事は、學校が尙ほ今日の如く繁昌せず、恰も坪內博士門下の私塾の感のあつた當時のことゝて、文科學生の意氣の消長に影響するところあつたことは爭はれなかつたが、その實私共未だ全くの學生であつて、所謂文壇といふものとは恰も別世界に住んでゐたので、たゞ遠くの出來ごとを噂に聞くぐらゐのものであつた。

私共はそれから明治三十四年に學校を卒業した。こゝで私の立場から、ちよつと橫道に入つたことを語らねばならぬ。それは「太陽」の全盛期を招來せしめたところ高山樗牛の文藝批評であつた。評論の種類、着眼點等は異つてゐるが、蘇峯氏の「國民の友」が、「早稻田文學」と同じくたしか明治二十九年か三十年頃に廢刊して、評論壇が頓に寂寞を感じた時分に當つて、高山氏が「太陽」に文藝時評をかきはじめた。その壯麗なる文章は、號を追ふて文學愛好者を魅惑した。凡そ、小說にあらずして評論の文章を以つて讀者の多くを有した者は、之を先にして蘇峯氏あり、後にして樗牛であつた。かくいふところの私などは、最も愛讀者の一人であつたのだ。蘇峯と樗牛との文章あれば、以つて吾が讀書欲を飽滿せしむるに足るとさへ思はしめた。ゆゑに、鷗外氏が末流文壇と嘲つた時代の文壇に立つて、獅子吼したものは一人の樗牛氏あるのみであつた。しかし、是等の史實は、今更こゝに繰返す場合でない。

たゞ「早稻田文學」同人は、暫く水底の沒人となつたが、樗牛の「美的生活論」登張竹風のニイチエ讚美論に對して默つてゐられず、坪內逍遙氏が匿名にて「馬骨人言」といふ、圓轉酒脫の評論を「讀賣新聞」に連載して論壇を賑はしたことを思つてみると、水底の沒人は遂に全く水底の沒人となり切ることが

出來なかつたのであつた。

二

島村抱月氏が、早稻田大學から留學生として歐羅巴に出立したのは、明治三十五年の二三月の頃であつた。抱月氏は、その時より二三年前明治三十三年の九月の新學期から私達三年級のために美學の講義を始めた。それまでは高山樗牛氏が美學を講じてゐたのであつたが、高山氏は、京都帝國大學から審美學研究のために歐洲留學を命ぜられ、早稻田の講師を辭することになり、島村氏がその後を繼いだ次第であつた。しかしながら高山氏は間もなく宿痾の肺患が惡化して、遂に留學は中止になつた。

島村氏は靜に早稻田の教室に於て私達の爲に美學を講じてゐた。その講義は、私の智識を以つて批評する能力はないが、つまり美學史を叙述するにほかならぬものであつた。氏は左樣に諄々乎として吾等初學生に美學を講じつゝも、病魔の爲に留學を斷念すべく餘儀なくせられた高山樗牛氏の文章が倍々冴へを生じて、「太陽」の文藝時評が、獨り、文壇の視聽を集めてゐたのを、競爭心なしには見てゐられなかつた。所謂水底の沒人となつて、じつと觀念の眼は瞑つてゐても、前記の坪内博士の評論といひ、何といひ、斯といひ、早稻田は、その文壇的爭覇心のために自己内訌をしてゐたのであつた。

たうどう抱月氏多年の希望であつた留學は實現せられる日が來た。一度氏は、私に向つて、こんなことをいつたことがあつた。

「僕があちらから歸つて來たら大いにやるから、要ふるに足りない。その間に君達も勉強して置きたまへ。轡を並べて進出しよう。」

と、自己の決心を語り、且つ私を激勵した。

抱月氏の性格もなか〱複雜であつて、その異つた半面は、不幸にして、氏のさういふ方面に接觸した者は皆な經驗し認めてゐるところであるが、先づひとゝほり温厚篤實な紳士であつた。後進に對しても深切鄭寧であつた。後には、事に觸れ場合によつては、可なり狹量な點を見せたが衆を愛し、人を容れる雅量にも富んでゐた。坪内博士が、昔から後進の面倒を見られたことは、限りもないことだが、抱月氏もその點においては博士の後繼者として早稻田を背負つて立つだけの資質はあつた。

私が、抱月氏をはじめて知つたのは、私がまだ早稻田の學生であつた明治三十三年の初秋時分でもあつたらうか。前、いつた、氏が私達に美學を講ずることになつた前後のことゝ記憶し

てゐる。私はその時、氏の飯田町の寓居に氏を訪問した。その時は、他に話すこともなかつたから、論文か何かの起稿について訊いたりしてみた。それについても氏は深切に、手取り早く間に合ふ參考書を敎へてくれた。

その後、翌年の春時分でもあつたか、又訪問すると、今度は、その頃、氏が編輯してゐた讀賣新聞の月曜附錄の文藝欄に毎週何か書かねばならぬのが、忙しくつて困つてゐる。どうだ、君達文科の友人の間で、そんな方面に興味のある人があつたら、三四人で手傳つてもらへまいかといふことであつた。私は、ひどく喜んで、即座に、そんな人間の心當りを數へてみた。あんまり多くつてもいけない、四人か五人くらゐ、五人は少し多過ぎるかも知れぬといふやうな氏の話であつた。他の人の名は、後に文壇の方に進まなかつたから、こゝにいふ必要はないが、正宗白鳥氏が、私が、抱月氏に向つて指名したその一人であつた。

それで、私は早速、その事を、翌日學校にいつて、それ等の人々に打明けて、抱月氏の意を傳へ、間もなく次の木曜日か金曜日の晩に抱月氏の宅に初會合をすることになつた。その頃抱月氏の宅は、以前の飯田町であつたか、どうだかよく記憶して居らぬ。飯田町といへば、その頃は勿論今のやうに電車などは通つて居らず、まだ、ところ〳〵に昔の武家屋敷の、黒い格子窓を取付けた、それが白く埃にまみれた、長屋などの續いてゐた狹い通りであつた。神田から牛込の方への一つの要路になつてゐながら今では殆ど考へられないほど、割合に靜かな、狹隘な通りであつた。

餘談はさておき、はじめて抱月氏の宅に會合して、いよ〳〵吾々も評論の筆を執つて合評をしようとなつた時、抱月氏は、吾々を顧みて、一つ諸君の號を附けなければならぬ、何としようといつて吾々の意向を訊ふた。他の二人は、前から、何か知ら文章や詩を作つてゐた人間で、もう、ちやんと號があつた。

抱月氏曰く、可矣（よし）。

「それから君は？」と正宗忠夫君に向つて訊ふた。

「僕はそんなものは、まだないんです。……白い鳥が好きなんですが。」と、口ごもりながらいつた。

「可矣（よし）、ぢや正宗白鳥としよう。いゝ名だ。……正宗白鳥。」と、抱月氏は口の中でいひながら、さら〳〵と紙に書いた。

「それから君は：……何か、もうありますか。」と、私の方を顧みた。

「いや、まだありません。」と、私も羞むやうにいつた。「私は、秋の寂びた入江とか、湖水とかいふやうな風景が好きなんです

から秋江と書いてみたりしてゐるんです。」

「うむ、秋江……秋江も好い。……皆な好い名前だ。」と、いひつゝ、又紙上に、さらさらと書きつけた。白鳥も秋江もその時から用ゐはじめたものであつた。

話が本筋に戻つて、抱月氏は、明治三十五年の二月に目出度く鹿島立ちして横濱から渡歐の途に上つた。

「船は郵船會社の讃岐丸といふのに定めました。琴比羅様に因緣のある名で、海上平穩の辻占かも知れない。」と、微笑しつつ、乘船の定つた時に、その頃の納戸町の宅で語つた。

抱月氏の渡歐は、實に全早稻田を擧つての重望を負ふた留學であつた。高田、坪内の二博士をはじめ、早稻田文科の校友等は悉く、氏の前途に早稻田派の文學の浮沈の運命を繫けて期待してゐたのであつた。

殊に私などは、抱月氏が遠くへ立つていつてから、頓に據りどころを失つたやうな頼りない氣がしたものであつた。勿論坪内博士には指導せられたこと、いふまでもないが、博士と私共との間には、あまり地位の懸隔があり過ぎて、心で思つてゐることも、平易に吐露出來なかつたが、抱月氏に向つては、それが出來た。

抱月氏が立つていつてから、それでも日は一日一日と過ぎた。去る者、日々に疏しではないが、いつとはなしに氏の居なくなつた寂しさも忘れかけてゐる間に、「新小説」に滯歐文壇の第一信が載つた。――その時既に滯歐文壇と題したかどうか、ちよつと宙には記憶せぬが、それから、ずつと、ひきつゞき氏が英國在學三年有半の「滯歐文壇」の筆は「新小説」卷軸を飾つたのである。滯歐文壇の評論雜筆は、思ふに、氏一生涯の評論文として、最も高潮にして、傑出せるものであらう。歸朝後正面を切つて「早稻田文學」の卷頭に書いた論文よりは遙かに、肩の張らない、却つて滋味に富んだ藝術鑑賞が伺はれるのである。名優ツリイに依つて演ぜられた「復活」の演出の詳細なる批評の如きは、私は再三再四繰返して讀んだものであつた。

三年有半の歲月は、過ぎて見れば實に早かつた。その間に日露戰爭があつた。その戰爭に對する英國の輿論の表現である彼地の有力なる新聞雜誌の批評を、抱月氏は、紹介記述して滯歐文壇に載せた。その頃（三十五年の九月）は高山樗牛氏も死んで、「太陽」の文藝時評欄は、甚だしく振はなかつたが、「新小説」の滯歐文壇が代つて一時評論壇の視聽を集めた概があつた。私は、初め論題のスケールのやゝ狹隘で貧少な點で樗牛に比べて抱月氏に慊らぬところがあつたが、滯歐文壇の評論雜筆、殊に、日露戰爭當時の通信文を讀むと、抱月氏も亦偉いと思はさ

るを得なかつた。意氣冲天の概があつた

三

三年有半の長い英國留學をおはつて、米國經由で抱月氏が横濱埠頭に歸り着いたのは、忘れもせぬ、明治三十八年の九月十日頃（今、宙には、たしかに日を記憶せぬが）のことで、かの、日比谷公園で、小村ウイッテの媾和條約不滿足とあつて、國民的暴動の勃發した時から數日の後であつた。私達は横濱棧橋に氏を迎へて、氏の姿が見えるまで、少時の間そこで談笑してゐた。後藤宙外氏などもそこにゐた。すると私が、抱月氏の顏は、寫眞で見ると小村大使にどこか似てゐるぢやないかといつて、皆なでどつと笑つたりした。

抱月氏が、歸朝の途次、まだ米國を旅行してゐる時分から、もう既に「早稻田文學」再刊の計畫が内に持ち上つてゐた。その計劃者は、いろ〳〵あつた。今はどうしてゐるか、殆ど私たちには消息の分らない中島孤島氏は、その頃の早稻田出身者中で最も評論壇に文名を馳せてゐた新進であつた。私や正宗君よりも卒業年度は、一二年先輩で、長谷川天溪氏などより一二年後であつた。その頃、島村抱月氏のほかに中島孤島君が、なか〳〵巧い文章で讀賣紙上に評論漫筆を書いてゐた。又、他方後藤宙外氏の主宰してゐた「新小說」にも、評論小品などを載せてゐた。しかしその評論といふのは、自己の見識から出たといふよりも、主としてリテラリイ、ダイゼストなどの外國雜誌の評論を手際よく抄譯翻案したものであつた。しかしながら、孤島君の文章はたしかに巧かつた。前來繰返しいつた、坪内博士の「早稻田文學」の廢刊した後は、早稻田派文士の舞台がないので、「讀賣」の文藝欄と「新小說」とに據らなければならないのであつたが、といつて、當時の早稻田派文士に、島村、後藤二氏以外に格別時文壇に活躍しさうな人もなかつた。その間にあつて長谷川天溪君、中島孤島君などは、先づ異數の人であつた。中にも孤島君は、文章が巧みで、當時の時文調を最もよく代表してゐた。高山樗牛の獨り舞台の觀のあつた文壇にあつて、早稻田派文士の若手としては、むしろ注目せられてゐた。リテラリイ、ダイゼストといへば、一寸例へれば、新潮社の「文章クラ部」といつたやうなものであらうが、そのダイゼストからトルストイとニイチエの評論を抄出して來て、「十九世紀の二大敎說」と題して、堂々とこの二家を賞揚したものであつた。今からいふと論旨など、極めてありふれたものであつたらうが、何しろ時文調の文章が巧かつたので、讀賣新聞の文藝欄殆ど一ページに近い量のものが載つたので、文藝志望の青年學生の間で

は、かなり注意を惹いたのであつた。——それは、たしか明治三十四五年の頃でもあつたらうか——以つていかに當時の時文壇が幼稚で狹少であつたかが分る。そしてそれは評論壇の注意をひくといふよりも、むしろ早稲田派部内で一つの物議を醸したのであつた。といふのは既にいつたとほり、高山樗牛や登張竹風のニイチエヤニズムの推讃宣傳に對しては、坪内博士は「馬骨人言」でその反對思想の立場から諷刺的批評があつたりしてゐた前後のことであつたから、中島孤島が早稲田派の後輩の身を以つて、樗牛や竹風などの尻馬に乘つて、彼等の宣傳するニイチエなどを讃美するとは怪しからぬことである。彼は實に、早稲田派の異端者であるといふやうに、極めて狹隘固陋なる黨派的見地から非難する者もあつたが、私などは、そんなことは、どうでもいゝ、中島孤島が、リテラリイ、ダイゼストくらゐを種本にして、十九世紀の二大教説などと、仰々しい文章を書くのがお可笑しいと思つたが、しかし文章は、度々いふごとく、なか〳〵巧みでその頃の文學志望の青年の愛讀を得たものであつた。それが又、早稲田の先輩には、早稲田の統制を紊るといつて、内々物議の種にもなり、又中島孤島自身には、その爲めに文學青年の訪問を受けたりして得意でもあつたのだ。恰も、「新潮」八月號の、片岡鐵兵の「少年の友」の中の小説家とその友の大學生との關係に類する程度のものであつた。

話が隨分前後するが、その頃赤門派によつて發行せられてゐた「帝國文學」は、前期の「早稲田文學」が廢刊した後も、尙ほ盛に氣焰を揚げてゐた。「帝國文學」は、明治二十八年頃、高山林次郎、笹川臨風、大町桂月、武島羽衣、岡田正美、藤田劍峯といつたやうな人達を中心にして初めて發行せられた帝國大學の文藝評論の雜誌であつたが、何といつても高山林次郎（樗牛）が、その主盟であつた。後に登張竹風が編輯を主宰してゐた時代に「太陽」の樗牛と相應呼して、盛にニイチエヤニズムを煽つたのである。そんな次第で孤島は早稲田派からは、排斥せられてゐたが、却つて帝國文學派からは賞讃せられるといふ形であつた。思慮の單純な、若い孤島はそれで大いに得意になり、大家氣取りであつたものだ。中島の眼中には、島村抱月などは何でもなかつた。抱月の居ると居らぬとには關係なく、どうしても早稲田は「早稲田文學」を再刊しなければならぬといふ意見であつた。その意見を坪内博士に披瀝して、屢々博士の再起を進言したのであつたが、博士は、孤島の意見を諒としながらも、何も斯も抱月氏の歸朝後まで待つことにして孤島等を宥めてゐた。孤島は、樗牛竹風等のニイチエヤニズムの宣傳に附和したりするところから、いささか坪内博士の忌諱に觸れて

ゐたのだが、彼は、博士の甥坪內銳雄君とは早稻田文科三十二年度卒業の同期生で、銳雄君が首席で孤島は次席であつた。二人は非常に親交があつた。銳雄君は、一年志願兵であつたから日露戰爭に出征して遼東の野で敵彈に中りて戰死した。孤島は唯一の親友として、銳雄氏の葬送前後の事には最も務め、それによつて一層坪內博士に接近した。そんなことでも、博士の心を幾分緩和することを得た。

その頃、他にも一人「早稻田文學」の再刊を企てゝゐた者があつた。それは德川時代の俗文學者として知られてゐた水谷不倒氏であつた。水谷氏は坪內博士とは、多年殆ど親類同樣の間柄であつた。その水谷氏は、大阪每日新聞社員として十年以上も大阪にいつてゐたが、最近每日社を退いて歸京し、何か雜誌の創刊を志してゐた。それが坪內博士の承諾を得て、「早稻田文學」の名を襲ふつもりのものであつたか、どうだか、その邊のことは、私は知らないが、とにかく水谷氏が十年住んでゐた大阪を引揚げて東京に歸つて來るについては、生活問題として雜誌でも創刊しなければならぬといふ內情を、師友たる博士に向つて打明けて來たことは想像するに難くない。親戚舊故に厚い博士は、水谷氏の問題が生活に絡んでゐるだけ、最も眞面目に考慮せられなければならぬ事柄であつた。島村抱月氏が歸つて來たら、「早稻田文學」を復活したいといふ本人の希望もあり、又、早稻田出身の有志者間にも、「どうか、そんなことになればいゝが」と口にしてゐる者はあつても、必ずしも直接に生活問題に觸れるほど緊迫したものではなかつた。

それからもう一人、そんな計劃を抱いてゐた者があつた。それは三四年前死んだ東儀鐵笛であつた。東儀鐵笛君は、以前から、獨逸協會中學校の幹事か何かであつて、片手間に教科用書籍の賣捌取次ぎのやうなことを、自宅に於いてしたりして居つて、何か利益になる雜誌なら、やつてみたいと思つてゐたし、もと〳〵一寸早稻田の文科に籍を置いたこともあつたり、坪內博士の「近松研究」といふ有名な書には「國性爺」樓門の場の洋樂の譜を附けたりしてゐる。坪內博士邸へは、以前からのお出入りであつた。そこで島村抱月氏が歸朝して、「早稻田文學」を再刊するなら、自分の方で金方を引受けたいといふことを坪內博士に申出た。

も一つ最後に、私の困つたことは、私のクラスメートに朝山勇四郎君といふのがある。これは正宗白鳥君などもよく知つてゐる、好人物である。文科にはゐたが、筆を執る人間ではない、教員向きでもない、その頃何か出版物を一つ二つ出してゐ

た。義兄に當る人が、堅實な實業家であるところから、その人から出資してもらつてゐたものだらう。その朝山に私が、「早稻田文學」再刊希望のことを話すと、それは、是非自分が引受けて發刊したいから、自分にやらしてくれるやうに、君から坪內先生に話して置いてくれ、資本は何としてゞも拵へるからといふので、私は、それを坪內先生に話したところ、先生も、さうか、「早稻田文學」をやらしてくれといふ者は他にも二三話があるが、もし朝山に資本の都合が出來れば、朝山にやらしてもよいといふ、好い返事である。ところで、一方島村抱月氏の歸朝は差迫つたが朝山はその資本を工夫するのだといつて關西の方にいつたきり、一月立つても二月立つも音も沙汰もない。その間に抱月氏は歸つて來た。雜誌を出すことになると、可なり金も入るので、坪內博士も、水谷不倒氏のへそ繰り金を使ひ果たさせたくはない、東儀鐵笛の引受けるといふのも資金のほども心元ない、それで德田（近松）のいふ朝山の調達するといふ資金ならば、確らしいと思はれたものか、大分私の話を當てにして居られたらしい。ところが朝山は旅先から葉書を一二度越して、近日歸京するから、坪內先生の方もよろしく賴むといつたきり、一向姿を見せない、その都度、葉書の文句のまゝを坪內先生に傳へておいたものだから、私は朝山のいふことを信じて、べん〳〵と坪內先生を拔いた結果になつてしまつた。朝山は、何でも三四ケ月ほどして、十月の末頃狐憑きが落ちたやうな顏をして戾つて來たが、金は一文も出來ず、戾りの旅費さへ、やうやうであつたらしい。私は後に坪內先生から小言をいはれたが、どうも爲方がない。そして、朝山の義兄に當る實業家は、律義な商人であるが、大の讀書好きで、もし坪內博士が、光榮ある「早稻田文學」の發行を義弟に許して下さるなら、資本金は、何とでもしようと、朝山の姉さんにまで打明けてあつたのだが、朝山はそれを知らずに關西地方まで空しく資金の探求に出掛けてゐた。

　そのうち、今日では、何うしてゐるか殆ど消息を聞かない文淵堂主人金尾種次郎君が島村抱月氏の處へお百度を踏んで「早稻田文學」の發行元たらんことを懇願した。文淵堂金尾は、出版狂といはれた人間で、勿論資力のほども不安であり、出版業者として、その頃既に信用はなかつたが、金尾は、一に「早稻田文學」の再刊の發行元たることによつて、世間から見限られてゐる自己の信用を回復しようとしたのであつた。金尾は哀情を披瀝して抱月氏に泣訴した。さうなると情に脆い抱月氏は、金尾の窮訴を憐んで金尾に引受けさすることにした。水谷不倒氏は、大阪に居つた時から、文學雜誌などを出版して、大阪

で散々失敗した金尾（金尾は大阪育ちの坊ちである。）の遣り口を知り抜いてゐるので、島村氏が、人もあらうに金尾文淵堂に「早稲田文學」の金方を引受けさしたことを、呆れ且つ驚いたのであつたが、いくら坪内博士と水谷氏との交誼は深いにしても、まさか、もう水谷不倒氏では再刊の「早稲田文學」の聲價の維持してゆける道理はないといふことは、博士には十二分に分つてゐるので、その邊のことは一切萬事抱月氏の任意にして置くのほかはなかつたし、又博士自身にしては、今更ら雜誌經營などの雜務に當る心は毛頭なく、抱月氏を凡ての後繼者と思つて居つたのである。

　私がある日、抱月氏のところへ往くと、氏は例のおとなしい口調で、

「早稲田文學をたうどう金尾にやらすことにしました。」

「あゝ、さうですか。」私も實は驚いた。

「あんまり、うるさくいつて來るものだから、たうどう根負けしてしまつた。」抱月氏も、金尾文淵堂に「早稲田文學」を引受けさすることの不可なることを、水谷氏からも、坪内博士からも、東儀鐵笛氏からも、隨分愼重に考慮するやう注意せられてゐたので、金尾にやらすことの危險は十二分に承知の上で、「それならば、かうしてくれるか」と、いろ〳〵な條件や要求を、抱月氏の方から提出して、それを悉く金尾が承知したところで、むや君に引受けさゝうといふことに一決したのであつた。條件といつたところで、格別むづかしい難題でもない、編輯は一切抱月氏の方でする。それについて、兎や角容喙しては可けない、假ひ差出口をしても、一切聽かない。編輯費として月額貳百圓（であつたか貳百五拾圓であつたか今では十分に記憶せぬが）滞りなく毎月初に、その月分を抱月氏の手許に差出すこと。

　といふのが、重なることであつた。しかし抱月氏及び周圍の人が危んだに係はらず、金尾は毎月それを支拂つた。少くとも、私が創刊一年間關係してゐる間、編輯費不拂ひで問題は起らなかつたやうである。後になつて、どういふ事情で金尾の手を離れて、更に、いかなる筋道を經て、東京堂が編輯費を支拂すやうになつたものか、もう、その時分の事になると、私は全く與り知らない。

　抱月氏が、金尾に「早稲田文學」の金方を引受けさした事情は大體前述のとほりであるが、も一つ立入つて氏の胸中を察してみたところ、水谷氏や東儀氏に資金方を擔當さしたところで、おいそれと、それが圓滑に調達するものでもないし、又是等の連中が資金方を擔任するとなると、自分の思ふとほりの編輯が出來にくいと考へたので、一々條理のきく金尾の頭を抑へ

付けて編輯費を出さす契約をしたものであつたらう。

四

抱月氏の立場は、早稻田派はいふに及ばず、當時の文壇一般に興望を背負つてゐたので、衆人環視の表面に立てば立つほど、一面氏の覇心を滿足せしめると同時に、一層氣骨も折れた次第であつた。しかし、その氣骨の折れることも、自分から遠く懸隔してゐる、一般文壇に對しては、これは、何人も同樣に感ずることであるから、特に抱月氏の場合がさうであるといふ譯にはならぬ。むしろ抱月氏は、その溫和な人格のために、洋行前、前期の「早稻田文學」同人として又後藤宙外氏等と「新著月刊」といふ文藝雜誌に小說などを發表して、早稻田の實力ある作家として賣り出した時分から、常に德望のあつた人で、留學より歸朝後は、それに幾層倍した興望又は嫉視を以つて文壇に迎へられたのであつた。

話が又、横に外れかけたが、「早稻田文學」を創刊するについては、外に對する文壇的戰鬪よりも內に對する——即ち早稻田派の內部に對する、いろ／＼な嫉視、反目、競爭に氣苦勞が少くなかつたのであつた。私は、二十餘年後の今日でも、尙ほその事を思ひ起すと、抱月氏の當時の立場に同情せざるを得ぬ。

しかし、抱月氏も、また一寸、誤算をしてゐた點もないではなかつた。それは、これから順々に語るとして、坪內博士はもう、いはゞ、すつかり、世帶を後繼者に讓つてゐるので、恰も秀忠を二代將軍に押し立てた後の大御所といつたやうなものであつた。家康は大御所の名の下に政治と戰爭との實權を握つてゐたが坪內博士もそれに類した點がないでもなかつた。勿論早稻田文學科の經營については、當時尙ほ坪內博士の監督の下に在つたことはいふまでもなからうが、一雜誌「早稻田文學」に關しては、敢へて、干渉することを欲しなかつたのだ。

しかし抱月氏とは友人同志であるとか、又は後輩であつても、出處進退に關して何等抱月氏の息のかゝつてゐないところの水谷不倒、東儀鐵笛、中島孤島諸人は、抱月氏の爲す所に意に滿たぬものがあると、これを大御所に持つていつて訴へ洩らすのは、勢の自然といふものであつた。坪內博士は、もう、うるさい事は一切耳に入れたくないと思つてゐても、中島孤島が小姑のやうに、いろんな抱月氏に對する不滿を持つて來て訴へると、そこは、門弟思ひ、早稻田全體のことを思ふ博士として默つて聽いては居られない。といつて、一々中島等のいふことを取上げて抱月氏のすることに差出がましい口をきくことは、博士の好まぬことである。しかし、いろ／＼な不足があらう、

らも、こちらからも耳には入つて來る。

　ところで抱月氏が、傍から何といふ、うるさい差出口があつても、「早稻田文學」の編輯だけは、頭として自分の欲するまゝにやる。その代償として、自分は、金尾から持つて來る編輯費貳百五十圓から鐚一文も身に着けないといふのが、抱月氏の方針であつた。

　文學上の主義思想、又その性格、交際等の上で、私も可なり抱月氏の長と短とを見てゐたつもりであつたが、その當時からして、私が、心の底から、これは島村といふ人の最も及び難い美點であると思つて感心したことは、氏が金錢欲に恬淡であるといふことであつた。それは氏の先天性から來てゐるものであつた。政治家などは勿論のこと、又文壇に於いても、一黨一派の主領となり、親分となるほどの人間は、自己に奉ずること極めて薄いものである。それは、その人の天性にもよるが、又、努めてさうしなければならぬ。ところが、抱月氏は努めてさうしたのでなくして、天性金錢欲に恬淡であつたのだ。氏は一派の親分らしいところも勿論あつたが、子分に對して派手に金錢を與へるといふのでもない。自分に物質欲が乏しいから、從つて自己に奉ずる金もないのであつた。これは努力してさうであつたのでないから、或は倫理的價値は無いといへるかも知れぬが、天性の恬淡寡欲であることに一層稀有味があるともいへるのだ。

　そんな譯で、金尾から毎月提供する貳百五拾圓は恐く、他へ割り振つてしまふ。今日でこそ貳百五拾圓は大した金額でもないが、明治三十九年――即ち今から二十二年前の貳百五拾圓であることを思ふと、當時の原稿料に比例すれば、それが今日の金に換算して、大凡そ幾らくらゐに相當するかゞ分る。七倍に當るとして千七百五拾圓、四倍と安く見積つても壹千圓である。今日では、千七百五拾圓は、たとひ二千圓あつても三千圓でも、あんまり富裕な編輯費ではないが、二十二三年前には、貳百五拾圓は、「早稻田文學」の編輯費としては、そんなに乏しい金でもなかつた。抱月氏は、その金を先づ大體半分に割いて、百圓乃至百貳拾圓を原稿料に割り當て、あとの金を、私達社員の給料に當てた。

　こゝで又、一寸談が停滯しなければならぬが、抱月氏の底意を割つていへば、抱月氏が今更水谷不倒氏などを道連れに、折角新鋭の氣を負ふて「早稻田文學」を刊行しなければならぬといふのは、實に迷惑千萬なことであつたのだ。ところが、「早稻田文學」といふ看板は、何といつても坪内博士の物である。先生が、最も信じ且つ最も推愛するところの抱月氏にその看板を讓渡すのは、固より、親がその愛兒に遺産を讓ると同じく愉快

なことであるにしても、情誼に厚い博士は、水谷氏を見殺しにすることも出來ない。抱月氏にも亦たそれは十分に解つてゐる。そこで、水谷氏に編輯長といふ名を與へて、月給參拾圓(であつたか貳拾五圓であつたか)を割り當てた。

それから東儀鐵笛、これも、表向き一と〻ほりは、世間、東儀を知れる者が一様に、さうだと思つてゐる如く瓢逸無邪氣の人物ではあつたが、利益のありさうなところに割込んで來るだけの、一種の厚顔と太々しさとを持つてゐた。彼が「早稻田文學」の編輯に參劃しても何等の清新なるものを寄與する所なきは知れてゐるのであるが、島村氏など早稻田派の幹部を中心として、その接近者は悉く文學者肌の樸念仁ばかりの手合であつたに引換へ、東儀は、圓轉洒落で、世間も幾らか廣かつたから、彼はその點で必要なる緩和劑であつた。大きな例をいへば政友會の故野田大塊のやうなものであつた。嚴格なる坪内博士をはじめ、島村とか金子筑水博士とか、いつたやうな人達の中で、東儀が、無邪氣な、腹藏のない調子で一度び駄洒落れでもいつて、あはツ〱〱と哄笑を發すれば、それで他の人達の氣分も忽ち解けてしまふといふところがあつた。しかし、その東儀も、あれで、實際生活はなか〱切迫してゐたものと思はれて、何でもい〻から仕事に有附いて、少しでも儲けなければ家族が養へなかつたのであつたらうと考へられる。抱月氏は、その東儀に、必要なる調和劑として、月手當金拾圓を提供した。しかし、表向き調和係りといふ譯にもいかぬから、外交費とか何とかいつたやうな名目であつたかと思ふ。

それから今度は、孤島と私とだ。二人が、下の記者といふ名目で貳拾圓づつを割り當てられた。一寸前述の金額を訂正して置くが、金尾から初め提供した金は貳百圓で、その内八拾圓を前記四人の給料に當て、殘金壹百貳拾圓を原稿料に使つたのであつた。

これから、話の行きが〻り上私の立場を少しく説明しておかうと思ふ。一體中島は、前に一度いつたとほり、抱月氏の歸朝を待たず、自分で、坪内博士から、「早稻田文學」の看板のお許しを頂戴して、雜誌を發行したいといふ腹であつた。孤島といふ人間は、なか〱思ひ上つた、自惚れの強い男で、文章を書かすなら、島村などより、フン俺の方が遙に巧いなどと思つてゐた。何もその抱月などを當てにしなくつてもい〻、俺達の腕で「早稻田文學」はやれる、島村は學校の先生で澤山だ。そして、孤島の俺達といふのは、自分と私交の深い薄田斬雲などのことをいつてゐるのであつた。彼は自分が頭になり斬雲を手下に使つて「早稻田文學」の看板を坪内博士から許してもらつ

て、島村抱月氏の不在中にやり出さうといふ腹であつたが、自分で自惚れてゐるほど、さう問屋で卸してくれなかつた。今度いよ／＼抱月氏がそれをやるについては、あんまり好い氣持ちはしないにしても、原稿を載せてくれる舞台は欲しいし、何ぼ少少でも月收は咽喉から手の出るほどほしい。背に腹は代えられぬので貳拾圓の月手當てに雌伏してゐなければならなかつたが、德田（今の近松）などと同格に取扱はれて、德田と同じやうに、寄稿家を訪問したり、談話筆記に出掛けるのは厭だ。自分はもう德田などのやうな雜誌の走卒ではない。儼然として文壇の大家であると思つてゐるので、抱月氏の節度を奉じ、指令に甘従することを敢へてしない。一體孤島は、坪内博士を動かして、德田を排斥し、斬雲を推擧したのであつたが、それも自分の欲するとほりにならなかつた。私には、そんなことは見え透くほどよく分つてゐたから、私にもし他に生活の方法があるなら、まるで、××が猪の肉を分けるやうなことをして、貳拾圓ばかりの月給に有附かないで、どうかするのであつたが、私はその頃最も貧困のどん底にゐた。原稿を書いたところで金にはならず、（もとより碌な物も書けないが）月給の仕事にははぐれてしまひ、毎日々々足を摺りこ木のやうにして、心當りといふ心當りを探ねて、就職口を求めても、そんな口は見附からない、覺束ない飜譯をしようとしても、買つて載せる處もない。その時分のことは、嘗て雜文その他に度々書いたことがあるから、こゝでは省略するが、小石川音羽九丁目の谷底のやうな、泥溝（どぶ）ぞひの裏通りに逼迫して、月五圓五拾錢の棟割り長屋の店賃を、やう／＼二度に割つて家主に持つていつた。どうかからかお米にだけ有附けたといふのは、その頃の同棲した女の實家が、以前は相當な米屋であつて、後には、これも、ひどく零落してゐたが、それでも一人の兄が、微々に米の小賣りをしてゐたので、私もお蔭で露命だけは繋いだ。私は、それから二十何年後の今日とても決して生活は樂ではないが、その時分の貧乏の辛い味を十二分に知つてゐるので、今の贅澤な文士が、近頃間々生活苦を訴へるのを聞いても、少しは經驗にそんな味を嘗めるのがよいと思つてゐる。

そんな次第で「早稻田文學」から貰ふ貳拾圓の金は實に今日の五百圓にも換へ難い尊い金であつた。その頃は私と同棲の婦人と二人きりで月參拾圓もあれば食べることだけはどうかからか出來た。

これほど大切な金であつたにしても、たつた八拾圓ばかりの金を四人に分けて、水谷、東儀といふ手合まで「早稻田文學」で扶養しなければならぬことを考へると、私はつくづく人

聞といふ者の心が淺間しく考へられた。いくら孤島が坪内博士の手前この德川を排斥したにせよ、孤島が月收わづか貳拾圓の端た金にすら眼をくれなければならぬ窮狀は分つてゐる。又、たとひ野郎尊大の孤島が、抱月氏に楯突いて、頑直に抱月氏の節度に服さぬにしても、そこは何とか孤島を說得しても「早稻田文學」社員として働かせねばならぬと、私は思つたのであつたが、感じの鈍い水谷不倒やいけ圖々しい東儀鐵笛などが、金尾から提供する編輯費中原稿料百貳拾圓を差引いたあとの八拾圓に眼をくれて、のめ〳〵と參拾圓を支給せられて平然としてゐるのは、隨分慾の好い爺兒さんだと思つて、私は內心呆れてゐた。どんなに生活が困難なか知らぬが、大阪每日に十年も勤續してゐた、相當有名な水谷不倒ともある人間が、たつた八拾圓の中の、又たつた三拾圓を抱月氏から「へえ、さうですか」と受け取つてゐる心が知れなかつた。東儀鐵笛だつてさうだ。調和劑として早稻田同人間に重んぜられるなら、「早稻田文學」社の小さい世帶から拾圓の端た金を受取らないで、そんなことを超越して鐵笛特得の性格を賣り物にしておいた方が清い。孤島や僕などはまだ係累の殆どない氣樂な生活であり、不倒や鐵笛に係累があるにしても、鐵笛などは、その頃牛込の仲町の一等の場處に地所住宅を持つてゐた。そんな端た金に眼をくれぬがよいではないかと、私は心の中で考へてゐた。しかし、抱月氏としては、假ひ少々の金でも、皆なに總花を振り撒いて、自分は鐚錢一枚、その中から貪らず、その代りに「早稻田文學」といふものを、自分の好きなやうにやつてゆきたい。東儀は固より編輯のことなど分りはせぬが、それでも水谷不倒は、古い德川期俗文學程度の頭で何か知ら編輯に容喙するかも知れぬといふ憂ひがあるので、いはゞ、その箝口令に拾圓なり參拾圓で金轡を嚙ましたものとおもへばいゝのだ。

五

話が隨分前後するが、前にも既にいつたとほり、抱月氏が歐洲留學三年有半の新智識を積んで歸朝するや、早稻田の連中はいふまでもなく、文壇の興望は大變なものであつた。歡迎會も再三催されたが、最も廣い範圍にあたつたのは、歸朝後間もなく芝山內紅葉館で開かれた、それであつた。勿論廣い範圍といつても、文壇に限られたことであつたが、つまり早稻田派以外の一般文壇にわたつて來會者が多かつた。それでも今から二十二三年も前のことだから、今日ほど複雜な文壇ではなかつたが、抱月氏を中心として、氏と面識のある人が可なりの範圍にわたつて來會した。僕は早稻田の親睦な間ばかりでも一會來

らずの歡迎會を開かうといふ話もあつたので、私などまだ文名もない者が、そんな席に出るのは、ちと出過ぎたやうで氣怯れもし、遠慮もせられるのであつたが、それよりも四圓とか五圓とかの會費が重大な負擔で出席を躊躇してゐたところが、抱月氏が、「どうして出ない、出たらいゝでせう。」と、あの、おとなしい眼でじつと私の顏を見守り、「もし會費がないんなら、私が出しときますから、ぜひ出たらいゝでせう。」といつて深切に勸めてくれたので、出席した。時はいつであつたか、十分記憶せぬが、まだ單衣を着てゐる時分であつたから、九月の下旬、歸朝後半月も立たぬうちであつたらう。なか〳〵の盛會であつたが、私は、坐席がやゝ酒に崩れかけた九時過ぎに引揚げて出て來たとおもつてゐるが、その後で、當時の文壇に最も活躍してゐた小杉天外氏と廣津柳浪氏とが酒機嫌で喧嘩をし、それに例の酒を飲むと一層元氣のいゝ、國木田獨步が飛込んで來て更に喧嘩の花が咲いたといふやうなこともあつた。

その會には、多分、帝國文學派の人達などは來なかつた。（それは惡意の間でないから）が、時の文壇の主力は殆ど來會した。就中その小杉天外氏が、小說の方では、最も活動してゐる最中であつた。評論家の樗牛が三十五年の九月に歿し、更に作家の帝王尾崎紅葉がその翌三十六年の十一月に死んだあとは文壇が一時寂寞を感じたが、硯友社の一派では廣津柳浪氏が一人尙ほ活動をつゞけてゐるほかには、紅葉門下の諸氏は、實力はとにかく、地位の點で、尙ほやゝ若輩を以つて見られてゐた。そして小杉天外氏が紅葉歿後——後の自然派の勃興に至るまでの期間の大立て者であつたのだ。天外と柳浪、この二人は、こんな譯で隱暗の間、利害が衝突してゐたものと思はれる。或は衝突するかの如く感じたものと見える。抱月氏が、翌日だつたか私に向つて語つたところによると、初は二人で何かいつてゐたが、段々聲が高くなり、柳浪氏はおとなしく受身で答へてゐたが、そのうち酒氣を帶びた小杉氏が德利で柳浪氏を打つか、どうかしたので、喧嘩になつた。そこへ獨步が飛び出していつて、

「天外を毆つてしまへ！」と叫んで　ビール瓶で小杉氏の頭をなぐり付けた。しかし、傍に居る者が一度に立つて、皆なを抱き止めたので、大事にならなかつた。結局主賓の抱月氏が、仲に入つて天外柳浪二氏を和解したといふやうなこともあつた。これは、一場のエピソードであるが、以つて當時の文壇の主力が奈邊にあつたかゞ伺はれるのである。

それから、少し秋涼になつて　十月の中間でもあつたか、牛込の清風亭——この清風亭は今はなくなつたが、早稲田の連中

の何かの會合といへば、定つて赤城神社脇の清風亭にもつていつて開いたものであつた。その清風亭で早稻田文科校友の少數が水入らずに抱月氏の歡迎會を開いたものだ。その晩は後藤宙外も來てゐた。宙外氏は既にいつたとほり、春陽堂の新小說主幹として、文壇に一つの勢力を張つてゐた。が、その頃は東京には定住せず、鄕里の秋田縣に歸住して月の中十日くらゐ出京して編輯を監督してゐた。後藤宙外氏は、明治二十七年早稻田文科第一回の卒業者で、島村抱月氏が首席、宙外氏が次席で、常に抱月氏と拮抗して賣り出してゐたが、小說は寧ろ抱月氏よりも宙外氏の方が優れてゐたかも知れぬ。後に宙外氏は、坪內博士の門下からや丶遠ざかつて、紅葉の硯友社の同人に加はつたりした。抱月氏と互に兩雄並び立たずの點があつたものらしい。風采の素樸な、まるで田舍紳士であるが、あれで、なかなか皮肉な、人の悪いところがあつた。私など、原稿をあんまり買つてもらへなかつたからいふのではないが、殊に私が抱月氏の傘下に馳せてゐるといふので一層好意を以つて迎へられなかつたものだ。

で、清風亭で少數の歡迎會を開いた席上、後藤氏は、酒が始まり早々、がぶ／＼飲んで、大いに祝意を表した次第であつたが、ひどく醉つてしまひ、抱月氏に向つて、いかにも自分の腹の底が見え透くやうな、抱月氏の今のグロリアアスた境地を羨望するやうなことを、くど／＼と醉に乘じていつた。

抱月氏はこれから「早稻田文學」を創刊しようとしてゐるところへ、も一つ福の神が天下つて來た。といふのは、その頃故加藤高明伯（まだ子爵でなかつた。男爵くらゐか）が、英國大使を辭して歸朝してゐて、日本で新聞をやつてみたいといふ希望から、丁度賣り物になつた、伊東巳代治多年の根城であつた「東京日々新聞」を買取り、すつかり從來の面目を一新して、加藤高明氏の新聞を作つたものだ。その時文藝部を創設し、その方面の事を擔任する者が一人欲しいといふことになつた。ところで、加藤大使とは、在英當時既に抱月氏とは相知つてゐる。加藤さんは大隈侯をはじめ、高田早苗博士とも親交のある間であつたから、抱月氏は、留學する時に、もう、加藤氏にあてた高田博士の紹介狀を携へてゐた譯であつた。そんな次第で、抱月氏は加藤氏の所有に歸した「東京日々新聞」の文藝部を主宰した。

後藤氏は醉ひに乘じて

「島村君、君は大變にえらくなつたものだなあ、どうか少し僕を引立てくれたまへ。」と、くだを卷くやうにいつた。

抱月氏は本來酒が好きであつたが、心臟が弱いといふので

切に禁酒――節酒してゐた。そして、あのとほりの諧謔一つ樂にいへない方であつたので、爾汝の間柄である宙外氏から、そんなことをいはれて、一寸返答に當惑した顏をしながら、

「引立てなくつても、君だつてえらいじやないか。」

抱月氏がさういつても、宙外氏は、そんなことは耳にも入らぬもののやうに、

「ねえ君、昔馴染だ。僕を引き立つてくれよ。偉くなつたつて、そんなに澄ましてゐないで、今晩は大いに飲みたまへ。」といつて、酒盃を差しつける。

抱月氏は爲方なしに、それを手に受けて、

「澄ましてはゐないさ。…………しかし後藤君は相變らず元氣がいゝぢやないか。」

「うむ……いや、もう元氣はなくなつたよ。」

「そんなことをいつてゐては可けない。郷里(くに)へなど引込んでゐないで、東京に出て來たら、どうだネ。」

さういはれると、後藤氏は、醉つてゐても、ちよつと眞面目な顏になつて、

「それには、いろんな、君、事情があるんだよ。」

「それは、事情は、幾らもあるだらうさ。しかし、その事情を一排(ばい)するんだねえ。」

「その一排が、なか／＼困難なんだよ君…………まあ、そんなことは今晩はよさう。さあ大いに飲まう。」といつて、後藤氏は重ねて徳利をとつて、抱月氏の酒盃に波々と注いだ。そして一つところに拘泥はるやうに「日々新聞は、君、岩崎から金が出るんだらうなあ。」

「さあ、そんなことは僕は知らない。」

「日々新聞と早稻田文學と兩刀使ひぢや、君には歯は立たないよ。」

「まあ、そんな冷かしは、もう、よさう。」抱月氏は微苦笑しながら「それより飲みたまへ。」と、いひつゝ、今度は抱月氏が徳利をとつて、宙外氏に波々と注ぐ。宙外氏は、ふるえる手附で、それを受けながら、

「僕を引立つてくれたまへ。」

「また、そんなことをいつてゐる。」

「いや、本當だよ。…………僕に、日々新聞に小説を書かしてくれないか。」

後藤氏は醉つぱらつた調子でさういふと、抱月氏は、一層眞面目な顏をして、

「うゝ、それはいゝ。ぜひ書いてくれたまへ。」と、引受けたやうにいふ。

「本當に書かしてくれたまへ。君、お願ひだよ。」といつて、宙外氏は醉つた調子で、こくりと、抱月氏に向つて、一つ頭を下げた。

先刻から、この早稲田派の二大先輩の容姿を默つて傍觀してゐた私は、こゝに於いて、後藤氏も亦た善人であるなあと、心の中で、ひそかに思つたのであつた。

抱月氏が「日々新聞」の文藝部を依托せられて間もなく、宙外氏の「月に立つ影」(?)といふ連載小説が表はれたのは、さういふ經緯を通つたのであつた。しかし抱月氏は、單に舊友を推薦したといふよりか氏自分で、眞實宙外氏の價値を買つてゐたものらしかつた。それは、後に「月に立つ影」といふ題が定つた時に私に語つた口吻によつても察しられた。

宙外氏の醉は段々まはつて、後には玉山崩れるといふ、美しい形容詞では、ふさはしくない、むしろ醜態を呈して來た。かの、デスペレートカラクタアに見るところの惡醉ひになつてしまひ、

「僕は醉つた。」といつて、苦しさうな表情に變つてきた。「ああ、苦しい。」と呻吟してゐたが、やがて、ついと立つて廊下の方に、よろめいていつた。

抱月氏は、

「僕が介抱してやらう。」といつて、すぐ立つて、後を追ふた。それから、庭の方に向いた向うの方の緣先にいつて、げいげいいつてゐたが、抱月氏は女中を呼んでコップに水を運ばしたりしてゐた。間もなく宙外氏は、眞靑な、それでも、やつと胸の輕くなつたやうな表情をして、又坐に歸つた。それからは後藤氏も大分鎭靜に復したやうだつた。

私は、その坐の光景の始終を視てゐて、將來の自分の鑑戒となさなければならぬと思つて、深く胸に刻んだ次第であつた。

そんなことを思ひ出してゐると、次から次へと、いろ／＼なことが聯想に浮んで來る。文壇の非常な期待を以つて抱月氏の「早稲田文學」が創刊せられるについては、この文の冒頭に於いていつた如く、私や正宗白鳥氏が抱月氏によつてお披露目をしてもらつたり、源氏名を附けてもらつたり、(抱月氏が名まで附けたことは世間の人は知らぬが)「讀賣」の月曜文壇で、ともかくもはじめて白鳥、秋江などの名前を活字に組まれた因緣から、抱月氏の傘下には、必ず正宗白鳥氏が加はるであらうと想定してゐる人間が、生半可に早稲田のことを知つてゐる者の間にはあつた。むしろ早稲田に近づきの人間にあつた。ところが白鳥氏は、その頃「讀賣」にゐて、文藝部主任記者をしてゐた。

劇評も書いてゐた。その記者の職業は、今日でも時々正宗氏が何かにつけて感慨を洩らすとほり、決して難有いものではなかつたが、少くとも、私や孤島氏の月給金貳拾圓よりは、もう一寸餘計に、（その倍額くらゐ）月給を貰つてゐたことゝ思ふ。とにかく私共の如く全く浪々の身でもなかつた。扶持にだけは有附いてゐた。尤も、何度もいふとほり、すばらしい人氣で抱月氏が「早稻田文學」を再刊して、都の西北に鮮かなる文壇の旗色を飜へさうといふ、その風を望んでは「讀賣」などにぐづついてゐては有達の上る機はない。これより盛に文壇の潮勢に乘り出すには、どうあつても抱月氏の傘下に赴かなければならぬと、誰れしも思ふ所である。白鳥氏自身も多分、さう思つたこともあつたらうと私も考へたのであつた。恰も孤島が薄田斬雲などを引張らうとしたやうに、私は、孤島よりも、出來るなら、白鳥を誘ふて月曜文壇の場合、抱月氏の傘下に並んで筆を執つたやうにありたいものだと思つたが、「早稻田文學」のお台所の内情は、前述の次第であつて、とても、そんな餘裕はない。假ひ薄給でも現在既に扶持に有り附いてゐる者が、それを放棄して馳せて來るほどのものでもないと思つて、その前後の模樣を詳細に手紙に書いて白鳥に通じたことも再三であつた。

けれども、世間では（生半可通）さういふことは解つてゐない。むしろ世間並の通俗論として、「正宗白鳥君はえらい、孤島や秋江のやうな俗物でない。」といふ者が、そつちこつちにもあつたらしい。そのうちいよ〳〵早稻田文學創刊の披露會が富士見町の富士見軒で開催された時、それは主として早稻田派關係の人ばかりを招待したのであつたが、例の醉ばらひの兒玉花外（まだ生きてゐるだらう）が、醉餘抱月氏に喰つてかゝつて、

「「正宗白鳥君は潔白な人間です。中島孤島や徳田秋江は俗物です。」と、怒鳴つてゐたことを、今日でも尙ほ牢記してゐる次第である。これを、天に口なし、醉漢花外をして、いはしむといへば、なるほどと肯けるかも知れぬが、その實、粗笨極まる花外の通俗論であつて、他の場合に於ける人物評はいざ知らず、その時抱月氏の傘下に馳せ集つて、早稻田の文學社の社員になるのが俗人でも、ならぬのが潔白でも何でもありはせぬのだ。吾々は月給貳拾圓にでも有り附かねば、もう干ぼしになる、どたん場なのだ。孤島には、可けないこともあるとは思つてゐたが、前にもいつたとほり、金尾から抱月氏に提供する、なけなしの八拾圓の金の中から參拾圓も水谷不倒氏などに分割するなら、孤島や秋江にそれをもつと多く割り振るのが本當で、抱月氏の意中も明々白々さうであつたが、何にしても坪内博士に對

する重い義理から水谷不倒を袖にする譯にもいかぬ。抱月氏の「早稻田文學社」が、對島海峽で全滅した、日露戰爭のバルチック艦隊なら、抱月氏が水谷氏と雜誌を共にすることは例へていへば、ドレッドノートの新式艦が、五十年も前に進水式をした老朽艦を足手まとひに引率してゐると異はなかつたのだ。(この、つづきは又、後でいふ。)

その時、生眞面目な抱月氏は、醉漢花外から、そんな、デリカシイを缺いだ言葉をいひかけられて、辟易してゐたらしかつたが、間もなく席をはづして歸つてしまつた。

しかし、「早稻田文學」の傘下に馳せ參ずる者が利害の打算に怜悧だと、外觀上考へられてゐたほど、それほど、抱月氏の「早稻田文學」に對する人氣期待は大變なものであつたので、

私など、何度もいふごとく、實際は、目先きの貳拾圓の月給にでも有附かなければ食つていけぬから社員となつて働くことになつたので、「早稻田文學」によつて文壇の潮先に乘り出さうといふ氣は、さまで考へてゐなかつた。(少くとも私一己は)孤島氏などは、月給もほしいが、むしろ文壇的の舞台にしたかつたことは再三繰返したとほりである。何故、私が、そんなに考へてゐなかつたかといふに、――私として、全くそんな考へから、超越してゐた譯ではなかつた。勿論これから段々好い物を書きたいと思つてはゐたが、その實私には、まだ碌に文章も綴れなかつたのが、主なる一つの理由であつた。故に專ら編輯事務を働いて、そのうち追々といふくらゐな、謙遜した考へでゐた次第であつた。

けれども、後に創刊後一年ばかり立つて、早稻田文學社を退き全くの瘦浪人となつて、さて書いた物を賣らうとする段になると、私が早稻田文學社に居つたことが、ひどく祟りを成したことを感じた。その具象的實例はこゝには語ることを省くが、醉漢花外のいつたやうな通俗論に禍せられたこともあつたらうと信ずる。

さて、抱月氏の意には、私から、いろいろの話を聽いて、いふやう、正宗君に、今のところ、社の會計が月給を上げるといふ譯にもいかないし、それに「讀賣」の仕事を持つてゐるのだから、遠慮は、吾が黨の同人同志決して入らぬから社員同樣に文學社に遊びに來ることにしたらいゝでせう。君から、私が、さういつてゐると、よく話して下さいと、いふやうなことであつた。が、白鳥氏は、あまり抱月氏の處へは來なかつた。そして、後藤氏の春陽堂へは「讀賣」への往きかへりに屢々寄つてゆくやうな話であつた。そして宙外氏からひどく厚遇款待せられて、「新小説」に小説を度々發表したりしてゐた。白鳥氏が、

抱月氏の處へやゝ往訪するやうになつたのは、私が一年の後同社を退いてから後であつたやうだ。

六

話が又前後するが「早稻田文學」は改めていふまでもなく、明治三十九年の一月第一號を發行したのであつたが、さて、いよ〳〵金尾が編輯費を引受けることになつて、これから、ぼつぼつ編輯準備に取りかゝらねばならぬことになつたのは、三十八年の十月頃でもあつたらうか。私の仕事は專ら寄稿依賴に出歩くことゝ、前の坪內博士の「早稻田文學」で世評の好かつた、二段組みの文壇思潮の彙報を作ることであつたが、それを孤島が主として評論界を擔任し、私が小說界の傾向を擔任することになつた。

ところで何處の世界の人事關係も六ケしいもので、早稻田派の內部も亦たその例に漏れなかつたといふのは、抱月氏の全盛振りが餘り著しいものだから（その癖物質的には極端に地味だが）抱月氏同輩程度の連中、それには、無論水谷不倒、中島孤島などの反感も合流してゐる、或は導火線となつてゐるだらうが、總括していへば、坪內先生門下の高弟の間にアンチ島村熱が醱酵して來たものだ。私などは、簡單に、これから「早稻田文學」の編輯に働けばいゝと思つてゐると、ある日抱月氏の込原町（か、喜久井町であつたか）の宅を訪ふと、氏は、一寸改つた調子で、しかし、例のとほり靜かに、「昨夜も亦た、東儀君の處（牛込仲町）で吾々古い連中ばかりが寄り集つて。………いろんな相談が持ち上つた。」といつて、抱月氏は、微笑の瞬きした。

「へえ、どういふ相談です。」

「昨夜、實は僕と金子君と、ひどい議論をした。……」

「へえ、どういふ譯で？」

「それには、いろ〳〵理由もあるんだが………ひどく兩方で昂奮してしまつて。」抱月氏は、昨夜遲くまでその座にゐた昂奮の餘焰のまだ殘つてゐるやうな顏に微笑を湛えながら、

「しまゐにまあ、東儀君が仲裁して、吾々二人が、今の場合喧嘩をしてゐては、早稻田の爲に非常に不利益だから、結局又、これまでのとほりに提携してやらうといふことにはなつたんだが、一時二人とも、ひどく激昂してしまつた。」抱月氏は、昨夕の事を思ひ出して、ひとりで耻ぢるやうな、又、これでは將來なか〳〵面倒だといふやうな表情をした。

「それで又話が大きくなつて、この機會に、早稻田文學ばかりでなく、坪內さんが多年計劃して居られる演劇事業の實現に着手しようといふ話が持上つたんだ。それには文藝協會といふや

うなものを組織して、ひとり早稲田のみでなく……無論それは、坪内さんを中心にして始める仕事だが、廣く世間一般に會員を募つて、まあ、いはゞ文藝改良の社會事業ともいふべきものを創設しようといふことになつたんです。」

「へえ！」私は、それを聽いて、心の中で「おやおや。」と思つた。何といふ早稲田といふ處は、世間知らずの學究ばかり揃ひもそろつて寄り集つてゐる癖にして、とてつもない大風呂敷を擴げることを考へてゐるのだらうと思つた。なるほど私自身も學籍からいふと、早稲田の出身者であり、又、坪内博士をはじめ、島村抱月氏には世話になつてゐる。その點からいへば、自分も何處までも早稲田の後輩として、先輩の足跡を踏まなければならぬ筈だが、實のところ、文藝の眞の仕事は、飽くまでも個人的の仕事である。直前の實例が、三年前に死んだ高山樗牛を見ても分るではないか、彼はたゞ一管の筆を持つて、「太陽」に據り、洛陽の紙價を高からしめたではないか。坪内先生でも抱月氏でも、目下折角計劃を進めつゝある「早稲田文學」に、どうか立派な文章（戯曲でも、小説でも、評論でも）を書いていたゞきたい。何も、文藝の促進事業が、早稲田の一手販賣ではあるまいし、たゞ傑作名篇を發表しさへすれば、文藝の天下は、自から、その歸向するところを知つて來るのだ。と、私はその時、腹の中で信じてゐたから、抱月氏の顏を見て、

「へえ、それは大變ですねえ。」と、たゞいつてゐた。

「えゝ、さうなると、大變な仕事になるんだ。」と、抱月氏も、さすがに持て剩すやうにいつたが、しかし、そこは、物質欲の恬淡たると反對に、權勢欲の極端に强い、アンビシアスな抱月氏のことであるから、

「その代りに又、張合のあるアンビシアスな事業だ。」と、自信の面持でいつて、あの細い口元を、きゆつと嚙みしめた。

私は、昨夜の東儀邸には行かなかつたから、金子氏と島村氏とが、どんなことを言葉に出して、いひ爭つたかの詳細は、永久に知らないことになつたが、只今抱月氏のいつた、その夜の結論と、先達つて中の、抱月氏を中心とした「早稲田文學」發行に關聯した水谷不倒、中島孤島氏等の間に去來してゐる不穩な雲ゆきなどから察して、大凡その想像はつくのであつた。

「早稲田文學」の明治三十九年の第一月號であつたか二月號であつたか、（多分第一月號）の社告欄を披いて見ると分るごとく、「早稲田文學」創刊と同時に、ここに始めて文藝協會といふものが設立せられて、さながら、文藝の促進運動は早稲田の一手販賣事業でゝもあるかの如く、いや、早稲田文學主任島村抱月だの、いや、美術研究主任紀淑雄だの、いや哲學研究主任

子馬治だの、いや中桐確太郎が何主任だのと、凡そ、その時代の早稻田の先輩に一人洩れなく何々主任といふ總役割りを振つて、ずらりと文藝協會の事業の內容の空名を書き並べてある。何でも、その時、抱月氏から後藤宙外氏をも何々主任に引入れやうとしたが、宙外氏だけは結局應諾しなかつた。實に笑はせるではないか。……その後、文藝協會なるものは、島村抱月氏が松井須磨子を私したことを一つの導火として、形跡もなく崩壞してしまつた。その頃の私は、今日にも增して固より微力成すなき者であつたが、逍遙博士と抱月氏と、最も親密なる關係の師弟があんな悲痛な經緯で袂を別たねばならなくなつた時にも、「新潮」誌上だかに偶感を書いて、とにかく、そんな仰山な、大がゝりの社會的事業などに手を染めようとするよりも、たゞ單に、この先生と先輩には一管の筆を生命として傑作名章を書いていたゞきたいと繰返へしたのであつた。三十八年の十月に、私が心の中で思つたことも、四十五年の春（?）の頃、文藝協會が分裂しさうになり、ついに大正二年に坪內博士に反抗して抱月氏の藝術座が旗上げした時分にも、私の考へは少しも變動してゐなかつた。「早稻田文學」が三十九年の一月創刊號を出した時分には、まだ、それほど賣り出してゐなかつた夏目漱石氏が、結局一管の筆によつて、あれほどに賣り出し、文藝協會が崩壞するまで、僅々數年の間に漱石氏は文壇第一人者になつてしまつたではなかつたか。（尤も漱石氏の藝術價値論は別問題だが。）抱月氏がもし、一意專念早稻田敎授の傍ら「早稻田文學」のみを守り、そして、文筆にのみ從事してゐたら、夙に文學博士に推薦せられ、又、死後の全集も今の狀態より遙かに豐富なものとなつてゐたらう。尤もスマ子によつてあの金玉の歌は作られたのであつたらうが。

七

又、話が前に戾つて、抱月氏はアンビシアスの癖に、手先きですることはとかく鈍い人であつた。「早稻田文學」の編輯をするにも、抱月氏は、何より肝腎の早稻田大學の講義の準備があつたり、その他いろ／＼の事に頭が多忙なためか孤島などの方がどういふ體裁にして、どんな組み方にするかなどといふことになると、ずつと具體的の工夫に富んでゐた。孤島は、それを、賢く包んでゐないで、どうかすると、冷笑的態度で抱月氏に向つて、露出したものだ。そんなことでも抱月氏は、又人に負けるのが嫌ひで、實に小我が强かつた。

すつた揉んだで、たうとう三十八年の十二月のたしか、三十一日の晩までかゝつても　抱月氏は雜誌の表紙を、どんな裝幀

にするかといふことが決定しなかつた。

やつと、まあ、創刊號を出すことは出したが、孤島は依然として抱月氏の節度に從はない。不倒氏は初から自宅に趺坐を掻いたきり、社用は殆どやらない。たゞ、いたづらに高祿を食んでゐるだけだ。そこへ持つて來て、後藤宙外氏が「新小說」には多年中島孤島の原稿を買つてやり、殆ど「新小說」のお蔭で孤島の文名を賣つたにもかゝはらず、宙外氏自身の競爭者である抱月氏の傘下に赴いたといふので、宙外氏の腹は煮えくり返つてゐたので、一日、坪内先生を訪問した際、宙外氏は、うんと孤島を讒誣したものだ。坪内先生は前にいつたとほり、孤島の妙な性癖は知つてゐても、故鈴雄君と親友であつたりした關係から眼にかけてやつて居つたのだが、宙外氏の讒言もあり、それを抱月氏に打明けて、「どうか、中島にも困るだらうが、よく言つて聞かして使つて下さい。」といふやうなことであつた。實は坪内先生に對する義理一片で爲方なく孤島を使つてゐた抱月氏は、それを聞いて、內心、得たりと、卽座に孤島の早稻田文學社員たることを謝絕してしまつた。抱月氏は、そのあと間もなく、「坪内さんに、中島君を斷つてしまひました。」といつて、後藤氏の中傷の一條を私に話つた。

その後金尾は、抱月氏が、一文も自分では取つてゐないことを知つて、ある日私と、近處の牛肉屋で（牛込の原町）で牛鍋をつゝきながら、「水谷さんになど、私の方では差上げるつもりは少しもないんです。私は島村先生に差上げてゐるつもりなんです。」と、例の大阪訛りで、ひどく溢したことがあつた。私から抱月氏にその事を話すと、後に抱月氏と金尾と又話があつて、金尾は五拾圓を追加した。抱月氏は、私の月給に拾圓追加をしてくれたことなどあつた。

何でも、それから半歲ばかりして水谷氏も退社して「趣味」といふ雜誌を、故人の西本波太の出資で發行してゐた。

それから三十九年一ぱいは、私が殆ど一人で專ら編輯雜務に働いてゐたが、九月から新に大學を卒業した片上天弦、白松（今の杉森）孝次郎二氏が入社した。私は段々抱月氏と相合はぬことがあり、翌四十年（創刊第二年）の一月にたうとう退社した。私が退社して間もなく抱月氏は、自然主義の波に乘り出した。その前「早稻田文學」創刊當時よりの傾向を見ると、自然主義とはむしろ反對した傾向の文藝的主張であつたものが、俄然として自然主義に何故早變りしたかについて、詳細に話したいのだが、あんまり長くなるので、一と先づ擱筆することにした。（三年八月九日稿し了る）

發賣禁止內輪咄

立花高四郎

六

『近代文藝筆禍史』の著者齋藤昌三氏は、文藝市場近代筆禍文獻號（大正十五年十一月發行）增補近代文藝筆禍史（一三八頁）の中で『一體文藝作品の筆禍は、その殆どが風俗を亂すものとしての禁止であるが、近代にちかいものには治安妨害も亦少くない。これも時流を知る上の一資料でもある。然し明治十六七年代までは春本以上の露骨な描寫も不問に附されてゐた時代とて、筆禍の多くは風俗上からでなく、一種のモデル問題からであつたことは注意すべきであらう（中略）要するに筆禍は、治安上に關するもの丶外の大半は風俗上看過し難い作であるが、就中多いのは社會道德上許され難い姦通事件や、局部的描寫の劣情的な作は無論不可能とされてゐることは、今更玆に說明するまでもないが、最近にはかなり不謹愼な字句を弄する詩文の多くなつたことなども、研究上注意すべき一事實である。』と記述して居るが、演劇映畫以外でモデルが問題になるなどは、全く時流を知る材料であるかも知れない。それで『風俗壞亂』の文字は明治十六年新聞紙條例以後に於て見られるもので、明治八年九月三日布告第百三十五號出版條例罰則第六條には、『猥褻俗ヲ亂ルノ圖（小說歌謠彫畫ノ類淫褻ニ係ハル者ハ皆同シ）ヲ著譯シテ出版スル者ハ禁獄三十日以上一年以下罰金三圓以下ヲ科ス』（山田一隆著出版警察三五頁）とある、宇野法學士著出版物法論では、猥褻俗ヲ亂ルとある。左樣な文字の詮索は兎も角もとして、大正十三年フランス美術展覽會でロダンの彫刻「接吻」が公開禁止されて、世論が大分やかましかつた際、草野豹一郎氏は『繪畫彫刻と風俗警察』と云ふ論文を法學新報第

三拾四巻第七號誌上に發表して居るが、その中に「風俗を害する」とか「風俗を壊亂する」とか「風俗を紊る」と云ふ意味はどうであるか、『學者によりては、風俗壊亂と云ふことを解して三つの意義ありとして居る。其の一は男女間の劣情を挑發せしむるが如き所謂猥褻の事項を意味し、其の二は父子相姦と云ふが如き亂倫事項を意味し、其の三は被服廠跡惨死々體の寫眞を見て感ずるが如き厭惡不快の念を招く殘忍事項を意味するとなすのである（宇野學士「出版物法論」第二九九頁以下參照）。併しながら、所謂風俗壊亂と云ふことを斯く廣義に解せざるべからざるや否やは、尙ほ研究を要すべき問題ではあるまいか。何はともあれ、所謂猥褻事項が風俗壊亂事項に該ることは疑ない所である。それに就て想起せらるゝは大正三年二月十四日の判決である』（大審院判決錄第二〇輯第三巻第一四二頁以下）として、判決を引用して居るが、これは風俗壊亂の標準を示したものと見れば見られるもので、出版法第十九條の「風俗ヲ壊亂スルモノト認ムル」や、新聞紙法第二十三條の「風俗ヲ害スルモノト認ムル」と關係のあることであるから、誰もよく知つて居なければならぬものである。

『風俗壊亂の問題は新聞紙上に掲載せられたる文章又は圖畫が單に兩性の戀愛に關する表情的動作を描寫したるの一事のみを以て、風俗を壊亂するものと謂ふことを得ず。掲載せられたる動作が醜劣なる情慾の發動を連想せしめ穩健なる國民の道義的良心を反撥せしむる場合に於て、始めて其文書圖畫に風俗壊亂の名稱を冠することを得るものとす。

然り而して、男女兩性が互に握手し相抱擁し相接吻するは（事案は大阪毎日の男女が相密着して佇立し握手して居る挿畫であつた）社會上の禮儀として又其相愛の至情を表徴するの形式として歐米文明諸國の風俗習慣に於て一般に認められ、歐米人の道義的良心は之が爲め毫も傷けらるゝことなしと雖も我國古來の傳習に於ては、之を以て一種の淫猥なる動作とし健全なる道義心を有する者をして嫌惡せしめたる所なり。是れ、東西其風俗慣習を異にし、從て是等男女兩性間の動作の道德性に付き彼我其感想を異にせるが爲めなり。然れども歐米文明國との交際漸く親密となり彼我の往來亦從て頻繁となるに及び歐米諸國の風俗慣習其思想感情が我國民の理解する所となると同時に道德風俗に關する思想に一轉機を來たし、現今の道德思想は男女兩性間に交換せらるゝ此種の表情的動作を以て絶對に淫猥の行爲なりとせず。斯る背德の觀察を離れて、之を觀察することを可能なりとするに至れるを以て、最早是等の動作を絶對的に醜陋視したる我國の傳習的

道德觀のみを標準として、其動作の善惡美醜を判斷することを得ず。其動作が當事者の姿勢態度其四圍の情況に依り、陋劣なる情慾の體現を想起せしむる場合に於て、之を以て風俗を壞亂すべき淫猥の行爲なりと認むべく、其男女兩性相愛の心情を表徴せるに止まる者は假令我國古來の慣習に適せず又之を穩健なる道義的良心に訴へて其批判に多少の餘地を存するものとするも、之を以て風俗を壞亂すべき醜行とし、之に對するに淫猥なる行爲の名稱を以てすることを得ず。』

とあり、大正十二年三月十四日の判決にも、

『風俗を壞亂するものありや否は、現時に於ける社會一般の普通觀念を標準として、客觀的に之を決すべきものにして、……現時に於ける一般讀者をして情慾の發動を連想し羞恥厭惡の感を惹起せしむるものあるを以て、法に所謂風俗を壞亂する文書に該當す』とある。

七

草野氏がロダン問題に就いて意見を發表されてから後、當時の圖書課長であつた宇野內務書記官は警察協會雜誌二九五號（大正十四年三月）卷頭に、『藝術と風俗警察の立ち場』と題する評論を發表して居るが、風俗壞亂でよく問題となる文藝作品の場合に於ても亦、同樣なことを繰り返してよい樣に思はれる、即ち禁止意見の發動する經過を說明して居るものと謂へるのでないか。以下この要領を摘記して見よう。

『藝術品特に繪畫彫刻や若くはこれを縮寫したる繪葉書等の鑑賞は文明の進步、美的情操の發達に伴つて、文明人の熾烈な要求である。此の種藝術鑑賞に關する各種の催しや、文藝に關する出版等が、昨今の財界の影響に何の掣肘も受けないのを見ても、明瞭に這般の消息を窺ひ得る。然るに一方に於て國家は、健全なる社會の發達善良なる風俗の維持の爲めに、假令純粹なる藝術品であつても、それが風俗を害する虞れあるものであるならば、當然或る程度の干涉を爲さねばならぬ。換言すれば鑑賞慾が不純なものでなくとも、善良なる風俗の維持と兩立しなかつた場合は、咲き誇る藝術の園にも、野蠻な鋤鍬を入れねばならぬことは、又必ずや認められねばならぬと信ずる。況んや不純な動機から人間の弱點に乘じてさなきだに逸し易い情操を狂奔せしむる、假面を冠した非藝術は、其處に寬容さるべき何の理由をも見出し得ない。……顧ふに藝術は永久を生命とし、藝術の「價値」それ自身については「時」の觀念に拘束さるべき性質のものでない。反之警察は常に現在を目標としたもので、理想でなくて現實を捉え

んとする。そこで、現代の社會秩序人情風俗を飽く迄も標準とした警察と、現代を超越した藝術とが根本に於て既に喰ひ違つて居る。藝術と警察の凡ゆる矛盾反噬は此處から出發して來ると思ふ。既にして藝術尊重すべく同時に社會の風俗法益亦保護せざるべからずとせば、此の兩者の矛盾は或る程度に於て、調和妥協を計らねばならぬことと論を俟たぬ。』

と述べ、文學美術の取締標準に就いて、抽象的に取り極めることは困難で、客觀的標準によるべきものであるが、それにしても次の如くなければならぬと言つて居る。

そこで客觀的にも、美術文學上の作品たることが決定したにしても、所謂藝術鑑賞能力のみが、唯一絶對の取締標準となすならば大なる誤謬である。創作や藝術について、相當の理解を必要とすることは、論のない所であるが、創作家藝術家の如き批判力を以て之を俟つことは、決して認定の標準とすべきものではない。所謂味噌も糞も一緒にする底の沒常識は、無論忌避すべきであるが、取締の任に當る者は、寧ろ所謂藝術鑑賞の能力を有せざる一般民衆の批評眼を中心とすべきである。社會全般の法益保護を念とする以上、多數民衆が、その作品に依つて受取るべき影響を最大眼目となすべきであらう。小數者の藝術心の滿足を犠牲にしても、社會公衆の最大幸福を擁護すべきであることは論を俟たない。」

所で、多數民衆と小數者の割合であるが、アメリカのある人は、パブリックは十五パーセントの、知識階級と八十五パーセントのモップから成つて居ると言つて居たが、取締の標準は八十五パーセントを目標とすべきものであるかも知れない。それから猥褻出版物は概して外國では非常に自由であつて、日本だけが拘束嚴格であると云ふ人があるのに對して、「取締の標準は飽く迄で現在の我國の風習であらねばならぬ。保護さるべき客體が我國の風俗法益である以上、これは議論の餘地がない」と言つて居る。國際聯盟が各國にオブシーン・パブリケーションに就いて十項目ばかり質問を發したが、白耳義其他數ケ國は解答して居る、その內の第二項のオブシーンと云ふ言葉の定義で、丁抹は There is certainly no need to insert in the Convention a definition of the word "obscene," as the meaning of this word may undergo changes in course of time. It would therefore be preferable to leave the various countries and their courts to give it whatever legal meaning they may consider desirable. ポーランド政府は又次の如く答へて居る。 It would be desiralcb to leave the States full liberty to define the word "obscene" in acco-

rdance with the spirit of the national language, the degree of moral development reached in the country and the different kinds of offences in this domain.

斯様な次第で、禁止標準の明示なぞは出來ない相談であるかも知れない。そして本年三月督保委員會を通過した改正出版物法では、禁止事項は列擧主義になつて居り、これまでの風俗壞亂の文字は『亂倫、猥褻、殘忍其の他善良の風俗を害する事項』と置換へられて居る。それにしても亂倫とは、猥褻とは、殘忍とはと問題は殘つて居る、然も其等のもので、どの程度までが認容されるか、抽象的には既に十二分に說明されて居るが、現物で例示されないだけに心もとなさに於ては、不滿足に思はれてならぬかも知れない。

八

如何に禁止事項を詳細に渉つて列擧して見ても、例示的に禁止事項を排列した様なことのないのは、出版物自體が持つ特質で仕様がないが、映畫の場合には、やゝ明確になる様に思はれる、參考までに一九二一年三月紐育市にある米國活動寫眞事業協會が映畫改善協議會を開いて決議した禁制事項十三、ペンシルヴァニア州の檢閲標準などを翻譯して見る。

禁制事項

(A) which emphasise and exaggerate sex appeal or depict scenes therein exploiting interest in sex in an improper or suggestive form or manner.

(B) Based upon white slavery or commercialised vice, or scenes showing the procurement of woman or any of the activities attendant upon this traffic.

(C) Thematically making prominent an illicit love affair which tends to make virtue odious and vice attractive.

(D) With scenes which exhibit nakedness or persons scantily dressed, particularly suggestive bedroom and bathroom scenes and scenes of inciting dances.

(E) With scenes which unnecessarily prolong expressions or demonstrations of passionate love.

(F) 省略

(G) Of stories which make drundenness and gambling attractive, or with scenes which show the use of narcotics and other unnatural practices dangerous to social morality

(H) (I) (J) 省略

(K) Of stories or with scenes which are vulgar and portray improper gestures, posturing and aititndes.

(M) 省略 (Catechism on Motion Pictures by W. S. Chase から)

ペンシルヴアニア州檢閱標準

(1) Prostitution and procuration with views of houses of ill-fame.

(2) The ca, ture of young girls and their induction into "white slavery."

(3) Adultery, fornication and incest.

(4) Betroyal and seduction of woman and the keeping of mistresses.

(5) The Consumation of marriage, and other indelicate sex situations.

(6) Nudity,

(7) Birth control.

(8) Gruesome strangulation and murder scenes.

(9) Stabbing and profuse bleeding.

(10) Torture of human beings, or cruelty to animals.

(11) Vulgar exhibitions of ...

(12) In decorous and suggestive dancing.

(13) Drunken scenes carried to excess.

(14) Sensual love s enes.

(15) Bedroom scenes in which men and women are shown together.

(16) Brutal and prolonged fighting.

所が一九二二年二月二十一日のロンドン・タイムスに見えた英國映畫檢閱標準なるものを見ると、六十七項目に分れて居る。その中から風俗關係のものを抄錄して見ると左の通りである。

(8) Making young girles drunk.

(10) Brutality and torture to women.

(16) Murders with realistic and gruesome details.

(18) Cruelty to children.

(19) Excessive cruelty and torture to adults.

(20) Fights showing extreme brutality and gruesome details.

(23) Woman fighting with knives.

(25) Nude figures.

(26) Ofensive vulgarity and indecent gestures.
(27) Improper exhibition of feminine underclothing
(28) Impropriety in dress.
(29) Indecorous dancing.
(36) Disparagement of the institution of marriage.
(43) Advocacy of the doctrine of free love.
(44) Seduction of girls and attempts thereat treated without due restraint.
(45) Attempted criminal assaults on women.
(46) Scenes indicating that a criminal assault on a woman has just been perpetrated.
(48) "First night" scenes.
(50) Indelicate sexual situations.
(52) Infidelity on the part of husband justifying adultery on the part of wife.
(53) Bedroom and bathroom scenes of an equivocal character.
(54) Prostitutions and procuration.
(60) Women promiscuously taking up men.
(67) Suggestion of incest.

それにしても、どの程度までの段になると、檢閲する人の認定によることであつて、宇野氏が謂はれた『或程度の妥協』に意味深長さを感ぜぬ譯に行くまい。ダヴリユー・リツプマン氏は輿論の起るプロセスを說明して、事件や動作を文字に依つて描寫する、それを讀むだものは、その人の腦裡に事件や動作の心畫を描く、その心畫に對して何かしら心的反應が現はれて、それが事件や動作を描いた文章の影響となる、と云ふ意味のことを同氏著『パブリツク・オピニオン』の中で記述してあつたやうに思ふが、風俗上危險味の多い小說物語の場合に、檢閲する人の心畫の描き方如何が、その認定と微妙な關係を持つのでないかと思はれる。だから描寫技巧が拙劣であつて、豐富な想像力や、檢閲官自身の經驗等の援助なくては、容易に、讀み乍ら、瞬間的に、立派な現實的な心畫が描けない場合は、禁止は問題でなくならう。もつと突き詰めて言ふならば、如何に濃艷なラブシーンを描いても、拙文ならば無事で、麗筆であるが爲めに禁止處分になる場合があり得ると云ふ事になる。心畫を描く、之れは記憶にある繪を呼び起すことであつて、繪畫的に表現する場合は、記憶喚起の多數がかゝらぬだけに、その反應も的確に迅速に現はれる譯である。其處で、文章と靜止又は動く繪畫に對し檢閲官の態度が變るのは、當然であると言はねば

ならぬ。

九

尚『猥褻』に就て、關口泰氏は東京朝日紙上『出版物法案を評す』（昭和二、三、五から連載）の題下、『列擧された禁止事項』の中で、文書圖畫の猥褻なものは刑法猥褻罪で罰せよ、それを出版法規に入れるのは、トルストイの小說にある嚴粛な性慾苦惱も、谷崎潤一郎君が描く美しい變態心理も、春畫同樣に取扱はうとするのである、檢閱の標準は勿論警察の立場からで藝術の立場からでないことは解つて居るが、それは藝術を理解しないでもいゝといふ意味ではない、人を見たら泥棒と思へ、女を見たら淫賣婦と考へ勝ちな警察官憲は、藝術品をその眼で見て、故意に藝術の着物をぬがせ、味も香ひもとつて、猥褻の裸にして罰しようとする傾向が常にあつた、と云ふ樣な手嚴しい評言をなされて居るが、『猥褻事項』が如何なるものであるか、宇野氏は說明して居る。一體讀者をして淫猥の情を招き羞恥の感を起さしめると云ふのは、その事項よりもその用語行文の如何によるものである、學術上の硏究や眞摯な藝術品と云つたものは、道德良心を損傷することは滅多にない、稗史小說が社會の暗黒面を題材としてもよいが、醜怪な事實、卑陋な心理狀態を見逃せしめ、挑發せんとする[illegible]、[illegible]文章の上に發露して居る場合は看過する譯に行かない、だから記事掲載の動機や目的やは、之が認定に重要な役目をするものでないと解すべきであると云ふ意味のことを言つて居る（出版物法論二一八頁）

以上で『猥褻』の內容が大體理解されやうが、次に出版物法草案にある、『亂倫』『殘忍』とは如何なるものか。亂倫は非倫な兩性間の關係を謂ふので、描寫の如何にかゝはらず、嫌惡不快の情念を抱かしめるから、道義的良心を損壞する。尠くとも民法第七六九條（直系血族又ハ三親等內ノ傍系血族間ニ於テハ婚姻ヲ爲スコトヲ得ス但養子ト養方ノ傍系血族トノ間ハ此限ニ在ラス）に禁止した近親婚姻ノ程度は亂倫になるであらう、だから事項自體がよろしくないので、敍述に淫猥な言句を用ふる用ゐないは重要問題でない。大正五年大審院判例「新聞紙上不倫ノ事項ヲ掲載スルモ措辭平淡ニシテ些ノ波瀾ナク其間更ニ煽情的若ハ淫靡卑猥的ナル文字ノ使用ナク從ツテ讀過ノ際人ヲシテ厭惡羞恥ノ念ヲ惹起セシムル虞ナキトキハ現代ノ社會通念ニ於テ未タ風俗ヲ壞亂スルノ程度ニ至ラサルモノトス」と爲したのと、吾人との見解は相容れないと宇野氏は言つて居る（出版物法論二一九頁參照）次に殘忍事項は、記事や、繪畫で、その

描寫が殘忍慘憺を極めて、一見悚然として肌に粟を生ぜしめる底のものは、人の道德上の感覺を害して、不快目を蔽はしむるに足るものであり、道義的情緒を攪亂し、殺伐の風を養ひ、殘忍性を誘發する虞があるからであると、同氏は解釋して居る。

以上で大體主義標準めいたものを記述した積りであるが、次節以下に於て、香しからぬ前例や、事故發生の場合なぞに就いて研究の歩を進め度い。

十

先づ猥褻出版物から言ふと、閨房の痴態悲語即ち性交又は自慰の方法、狀況若くは陰部の形狀、又は陰部を露出して居る人物の姿態等を、挑發的な淫猥な文字を以て記述した『淫本』同一内容を圖形で示した『春畫』等は問題でない、到底公開を許さる可き性質程度のものでない。所で浮世繪の研究者尾崎久彌氏は、浮世繪の戀愛描寫は五階段あると云つて居る、(一)輕度の戀愛描寫、(二)重度の戀愛描寫、(三)挑發態(あぶな繪風)、(四)大首繪の催情的表情、(五)大首又はシーンの閨事の暗示、であつて、文章でラブシーンを描く場合にも左樣な階段があるとすれば、(二)の場合から相當警戒線内に入つて居ると思はなければならぬ。それだから、初夜のこと、童貞を破らるゝの記、男色關係記事、好色本地方俗謠のあるもの、流行歌、狂歌川柳、人情本、滑稽或は淫猥な奇事異聞集、落語、等、凡て醜交の露骨な描寫は愼しむ可きである。さすがに最近は計畫的に秘密出版するものを除いては、極々猥褻なものは見當らぬ樣で、それ程によく誰にも如何なるものが猥褻かは解るのであるが、地方新聞なぞで、夏枯れの材料拂底と云ふ場合、ポスト欄ゴシップ欄、花柳記事のなかなぞから發見されないとも限らない。かと思ふと新聞雜誌なぞに廣告して、二度と再び、この機會を逸しては入手出來ない、本統に千歳一遇の云々と大分誇張した文句で、賣りつけやうとする、題名だけでは立派に猥褻本らしく思はれる出版物があるが、その大部分は内務省に納本濟で、頒布發賣差支なしと見られて居るものである。

次に、部分的には一向に淫猥な字句は發見されないけれども、全篇の結構、又は前後の記述相關係して、漸次讀者の腦裏に淫猥な印象を與へるものがある。つまり×××とか、○○○等でブランクにしてあるが、印象が蓄積して穩やかでないと云はれる場合もある。描寫は露骨でないが、筆力で自然とあるものが暗示される場合を言ふのである(姦通小説なぞに多い樣な氣がする。)斯樣な譯で、娼家待合等で遊興することの記述、又は諸國遊廓の案内紹介、内外各地性的探檢記、カツフエの内幕素

破拔等は愼重な態度で取扱はる可きである、些少も遊蕩心を挑發する樣なことがあつてはならぬのである。

不倫なもの、假令ば兄妹相通じて、兄の種を宿し、嬰兒壓殺、次で裁判所へ廻る、その時の法廷だよりである。神聖なる法廷の報道である、あるがまゝに、あつたがまゝに記述して何等差支なし、然もそれが公開の場合であつたりすると、司法記者はその決心を强くするらしいが、不倫事項は依然不倫事項である、注意を怠つてはならないと思ふ。一體創作家が體驗の記錄や、新聞記者が事實の報道をする場合に、事實體驗を絕對自由で書かれるものと誤信される場合があつた樣である。

その外に、淫猥な好奇心を挑發して、異性誘惑の方法を教示する出版物がよく禁止になる。男女交際術、ラブレターの書き方、惚れられる迄、人心收攬自由自在と云つた題名を附せられるもので、通信販賣業者がよく取扱ふものである。所が此處に、筆者が執筆の動機は公益の爲めであることが明白であつても、發表された出版物は行政處分になる場合があるのである。その一は、不良少年少女の誘惑を防禦する方法の記述、その二は、愛の假面を被つた男の陷穽に落ちた女の僞らさる告白と云つたもので、何れも內容紹介が詳細になつて居て、防禦方法もさること乍ら、先づそれ自體からの印象が面白くないからであらうと思はれる。斯樣な譯で、如何にも無邪氣に見えても、活動女優ラブレターの公開などある程度の危險性を持つて居ると言へやう。

それから性慾生殖器の作用等を說明した出版物で禁止になるのが相變らず相當にあると見受けられる。著作者は充分科學的なり、學術的なりに記述した積りであつたらうが、當局者には左樣に取らなかつたものと見るべきであつて、此頃は婦人團體あたりが大に輿論に訴へて何とかしようとして居るものである。この項にはその上に、產兒制限の實際方法を記述したもの又は生殖器崇拜記事も含めて考へてよいので、婦人團體が社會問題化した、婦人雜誌の流行記事「性關係記事」の如き、種種なる觀察が行はれて居るが、教育家が叫むだ性教育、これを雜誌業者が通俗一般化した、その通俗化が面白くなく、穩當を欠ぐと云ふ樣に解されると思ふ、そして當局に嚴重な取締を要求して居る。どの程度でモダレートと認められるか、容易に推測を許さない問題であると私は思ふ。而して此の種出版物の廣告引札にはまゝかなり突き込むで書き過ぎ、廣告された原本には、廣告文の如きものは隨所に散見するばかりで、左程に强烈な印象を與へないけれども、廣告文は終に拔萃の集合體といふ別種なものとなり、單個なものとして獨立し、如何はしく思は

れるのを折々發見するが、是等はウランカナ感情が極度に昂騰し、出版常識を失ひかゝつたものと謂ふ可く、私が初頭に於て言つた『廣告も亦記事なり』の標語に就いて反省を促し度いものである。斯の種出版物廣告の以外には、待合遊廓等の廣告にも非常識なものを發見することがないとも言へない。

十一

性交の實寫々眞、春畫の寫眞が、閨畫艶畫笑繪春畫等と同様の取扱を受けるのは當然過ぎるが、裸體繪葉書はどの程度まで流布販賣を認められるか、裸體畫にも二種類ある、生物裸體と形象裸體とで、前者は肉體裸體の寫眞であり、後者は彫刻繪畫の裸體畫を謂ふ、假令それは裸體畫の三色版印刷であつても、極めて寫實的で、如實感、迫眞感が強烈である場合は、その印象の點から見て、黑白二色寫眞版よりも特種のあるものがあるかも知れない譯である、またそれと正反對に、實物裸體寫眞であつても、所謂工藝美術で裸體像を應用するが如くに、デコラチヴに取扱ひ、シンボリカルであるとか、ラインだけしか見えて居ないとか、形が小さいとか云ふ場合には、普通裸體畫からの印象量ほどもないことがあらうと云ふのだ。またポーズの如何は裸體畫を[illegible]

葉書の場合に就いて注意警戒線を述べて見ると、(一) 如何にも美術的に價値がある樣に見える裸體の繪畫、又は彫塑像の縮寫であつても、其の容姿や、その周圍に排列した物體や、着色の爲めに好色氣分が漂つて居るもの、挑發的催情的に表現されたものを云ふのである。(二) 印刷が粗惡不鮮明であり、寫影が小さく美術上の價値を認められないもの。(三) 美術上の參考資料などに供する目的で發行されず、それ以外即ち劣情刺戟の目的で發行されたもの。(四) 原畫は差支ないものに、惡い意味の修正を加へ、陰部に加筆した樣なもの。(五) 態度や向きの如何を問はず全裸體の肉體を撮影したもの、近頃流行の藝術寫眞と關係の深い點で、多産的である場合により多く問題になり、展覽會などに陳列された場合は、出版法以外の法令で取締られる筈であるから何とも言へないけれど、陰毛など露出したものは何れの場合でも公開は許されまいと信ずる。(六) 肉體の寫眞で、半身又は局部に布片を纏はしてあつても、其姿態表情の醜惡なものは不可とされやう、海水浴場の美人寫眞、マックセン・ネットのバッシング・ガールのスチルなど正にこの好適例であるかも知れない。(七) 男女抱擁接吻 (兒童を除く) の繪畫彫塑像の縮寫やそれ等の寫眞であるが、抱擁接吻は[illegible]の場合に依つてより多[illegible]

繰り返へされる。映畫に於ては公開が認められて居乍ら、繪葉書の場合に何故不可とされるや、長い〳〵接吻なれば兎も角、フラッシュ・バック的なものは、インスタントリイに消え行く、併し乍ら繪葉書となつたものは、永久の接吻である、然も机上又は机前にかゝげて鑑賞する場合は、映畫の場合とは一緒にならないと言へやうと、その反對說も左樣に容易に成立すまいと私は思ふ。接吻と言へば法律新聞第二八一〇號所載、播磨辯護士の『讀横田博士の法窓思ひ出草(四)接吻の法律觀』(昭和三、三、二五)を一讀する必要があるが、大正十五年四月菊池寛氏の『第二の接吻』が映畫化された時に、映畫檢閲官に對する世論が隨分やかましかつた樣で、仝年五月五日附朝刊東京朝日紙上で、內務事務官柳井美男氏は個人としての意見と云ふ前置で接吻觀を述べて居る『接吻は外國に於ても風俗上好ましくないある特殊の意味を有するは勿論であるが、それにもまして尊敬、挨拶、愛情等を表徵する慣習上一般社會又は家庭の生活樣式となつてゐる。で、このことは今日となつては我が一般民衆の十分理解するところである。であるから外國映畫について慣習上認められてゐる生活樣式としてのキッスは全部制限する必要はないと思はれる。つまりウェット・キッスといはれる樣なものだけに注意を拂へばよいことになる。然るに我國に於てはこれと事情を異にする關係上、接吻は性的預備行爲であるか、乃至はこれを許容する實感的意味以外に、一般社會の生活樣式とまで進んではゐない』云々で、繪葉書の接吻には、挨拶や、尊敬の意味でなされてゐるものは僅少であると思ふ。

そして裸體繪葉書のことでは、よく外國では……(極めて自由であると云ふ意味であらう)をよく耳にするが、明治卅三年十二月出版局和泉橋警察編輯『警務要覽』(七六三——七六五頁)には、日本人で支那地方へ猥褻寫眞を輸送販賣するものがあるから、精密檢査を遂げ相當處分せよと河津刑事部長から警視廳へ通牒が來て居る、所がそれに外務大臣宛波多野承五郎領事の照會文が添附されて居る、全くの溫故資料として少しばかり掲げて見る。

天津駐留前領事波多野承五郎ノ具報ニ據レハ近來本邦ヨリ猥褻ノ寫眞ヲ天津北京等ノ諸所ヘ輸入スルコト益々多キヲ加ヘ甚シキニ至テハ公然露店ニ陳列シテ公衆ヘ衒賣致シ候樣相成然ルニ歐米人等ハ右樣ノ寫眞ハ全ク本邦商人ノ輸入セルモノナルヘシトノ誤解ヲ爲ス者有之現ニ在北京外國宣教師中ニハ此儀ニ付帝國公使館員ヘ對シテ帝國商人ヲ非難候事モ有之旁以テ天津領事館ニ於テハ右寫眞販賣之義嚴重禁止方淸國其ノ筋官員ヘ及照會候處爾後右樣ノ寫眞ヲ賣買禁止致スヘキニ付

帝國ニ於テモ亦之ヲ輸出候事嚴禁候様致シ度旨回答有之候趣將又右寫眞ノ製造地ハ大抵大阪地方ニ有之又輸入ノ寫眞ハ其數巨多ナリト雖モ撮影之圖様ハ僅々數十種ニ過キサルヲ以テ寫眞師ハ僅ニ三四人ニ出テサルヘク又大阪地方ヨリ天津ヘ向ケ輸出候モノハ多クハ支那人ニシテ其最重モナルモノハ神戸ニ支店ヲ有スル恒豐盛號ナル淸商ニ有之候云々ト有之候右ハ甚タ不都合ノ次第ニシテ帝國商人ニ取テハ其名譽ヲ殞シ信用ヲ害フヘキ儀ニ有之候ヘハ右事實ハ探偵ノ上犯罪者ヲ按シ充分相當ノ處分有之候様其筋ヘ御指令相成様致度最刑法第二百五十八條ニ據レハ「風俗ヲ害スル冊子圖畫其他猥褻ノ物品ヲ公然陳列シ又ハ販賣シタル者ハ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ニ處ス」トアリテ之ヲ製造スルモノハ其罪ヲ問ハサルヲ以テ該條ハ本件ノ如キ場合ヲ取締ルニハ未タ以テ盡セリト云フヘカラス誠ニ不完全ナル様思考致シ候云々

猥褻寫眞の國際問題も久しいものだと謂はざるを得ない。尙繪葉書の中にも風俗以外の理由、即ち安寧を紊亂する理由で禁止になるのもあるけれども、數量に於ては甚だ僅少であらうと思ふ。また化粧品のポスター、映畫のポスター・グラフイツタ等にも裸體畫の挿入するものがあつて、今後は益々増加する傾向が見えるが、繪葉書の場合の要領で、愼重な態度で取扱はれなければならぬ。以上で風俗關係を終り、次に安寧關係に及ぶ豫定であつたが、誌面の都合で一先づ擱筆する。（完）

精神に生きよ早大野球部

飛田穂洲

今秋の六大學リーグ野球試合は、慶應テームが早明兩テームを問題にせずして十戰十勝といふ華やかな新記錄を作つたので、期待されたゲームの總ては全く興味索然たるものであつた。これは慶應が餘りに強きに過ぎた爲めなのか、或はまた明治、早稻田が餘りに弱きに過ぎたのか、所詮見樣が二途に別れなければならない。立教に連敗した早稻田、早稻田に敗れた明治が、慶應に敗れたのに何んの不思議があるかといふ論法で行くなら文句がない。勿論此の際慶應の强かつたことに異存をさしはさむ者のあらう筈はないが、野球技術乃至は野球精神といふやうなものを多少でも心得てゐるものは、單なる勝敗の形式に依つて戰跡を葬り去るわけには行かぬ。

勝者は甲の緒をしめて更に明春の優勝を期すべく、敗者はテームの脆弱なりし所以を考究して所謂捲土重來せねばならない。殊に明治なり早稻田なりの選手素質を見るならば、慶應に比してさしたる懸隔ありとも思はれない。自分は今早稻田の微々たる一先輩として早稻田は何故敗れたるかについて話すべく命ぜられたのであるから重に早稻田のことのみについて卑見を述べることにするが、自分は新聞記者になつて以來、テームの內情に通じてゐないから多くは皮相な觀察に過ぎないであらう。然し選手の技術比較等については、從來各選手が殘した成績、或は淺薄ながら自分が有する經驗によつて當らずと雖も遠からざるものがいひ得ると信ずる。

早稻田は昨年以來試合に負ける度投手難を叫んで來た。竹內が卒業してから竹內級の投手は正に早稻田には存在しない。昨秋の早慶戰、今春の對明治第二回戰の如き實際早稻田に好投手なきを嘆じさせないではなかつた。しかし親しくゲームを見、仔細にその敗因を探究したものには、投手難の專賣特許だけでは何んだか物足らぬやうな感じを抱いたに相違ないと思ふ。實に早稻田の敗因は投手難ばかりではなかつたのである。

昨秋以來の大試合に於ける早稻田の成績を試みに摘錄して見るならば、昨秋の早慶戰には二回とも零敗(一回は六對零――二回は三對零)同早明戰には一點を得たのみで連敗(一回は一對零――二回は六對一)今春の早明戰(慶應は渡米不在)は合計三點を得たのみで同じく連敗(一回は四對三、二回は九對零)今秋の早慶戰は第一回戰が二對零、第二回戰が四對零といふ記錄であつて、合計八回の內六回零敗を喫してゐる。自分は曾つて得點なき試合に勝ちたるためしなしと嘆息した、稍皮肉に過ぎるけれども、得點なき試合を續けながら投手難のみを喞つことは不穩當ではなからうか、無論この八敗の中には投手が散々打

たれた場合もあつたけれども、奮戰よく努めた場合があり、殊に今秋の如きは投手力には何等不足を唱ふるせきがなかつたやうに思はれる。

投手が相手方テームを零敗に屠ることは理想であるが、此の理想を前提として攻撃作戰を樹てられては投手たるもの丶迷惑これより甚だしきはない。昨秋以來早稻田によつて殘されたる零敗記錄は、慶應の十戰十勝の記錄より不思議な記錄であらう。相當強い大學テームが、中學テームを相手にした場合に於ても九回の內六回を零敗せしむるなどは容易の業ではない。野球試合には如何にチヤンスが尠ない場合も、前後を通じて一回乃至二回位は好機が到來し、失策、安打、四死球、盜壘等によつて一二點は齎らされるもので投手が零敗記錄を獲ることはむしろ幸運であると考へるのが普通であらう。故に攻擊作戰といふものは、味方の投手に二點を勘定してかゝらねばならぬから、味方は三點以上を相手から奪取して勝たなければならない。竹內は彼の全盛時代强敵明治と大事な試合をなす前、『今日は具合がいゝから二點取つて與れたら勝ちますよ』とベンチの私を顧みて微笑したものである。その時私はいつも『馬鹿をいへ二點や三點なんかで相場が定まるものか、四五點取つて置かなければ』といつて一同を激勵したものであるが、事實投手が自ら好調を信じ切つてゐた場合でも、どうかして調子を外づし、谷口や竹內のやうな名投手でもコロリ二三點思はぬところでせしめられることがある。とても安心の出來たものではない、だから平生四五點は何時でも取れるやうな打擊走壘の練習をして置かねばならね。

早稻田は由來バツテングのテームとして許され、慶應は守備の優秀なテームとしての評判であつた。勿論長い月日の內には慶應が打擊を誇り、時に早稻田が守備に長けた時代もあつたけれども、大體に於て早稻田は打擊に特長を持つてゐた、吾々の先輩は確に打擊助長に全力を打込み、それを我々に傳へたものであつた。試合を積極的に勝て、此れが試合に對する早稻田野球部のモツトウであつた。

ところが昨年以來その打擊力が夥しく衰へて見える。練習は相當に行はれてゐるに相違ないが、濱崎の球も、宮武中村の球も思ふやうに打てず、今秋に至つては水原井川二新進のタマすら打てずに貧打の範を示してゐる。投手難を叫んでゐる內に、いつしか恐るべき打擊難に陷つてゐた。

しかして早稻田の顏揃を見るなら山下宮武の如き巨人はゐないとしても、曾つては天才打者として錚々たる一流打者の名聲を占めてゐた井口新次郎があり、伊丹安廣や水原義明は相共にリーグの第一位打者ともなつた強打者であり、それに新進矢島や森を加へたなら、慶應の多士濟々には及ばなくとも結構物になるバツテングが見られなければならないと思はれた。如何なる強テームでも一から十まで揃へることは困難で、大學テームにあつては五六番までに相當な打者が揃へば先づ滿足せねばならない。現在の早稻田の打者の素質を見るなら一二の選手を除いては必ずしも人後に落ちないものといつていゝ。しかるに事實は早慶戰に現はしたやうな貧弱なる打擊で全然手の下しやうがなかつた。安打數やその他の出場數を委しく述べる必要はない。一の快打なく一の得點なく五千の應援隊は悄として聲も出し得なかつたといへば、感傷的になるが、試合にならぬ試合を最後まで汗みどろになつて應援これ努めた學生達には本當に氣の毒であつた。早稻田はいつも

強よし、試合はいつも勝つものだと思つて敗戰に憤慨するものがあればそれは隨分我儘勝手であるが、早稻田ファンとしては、應援學生としてはせめて、試合らしき試合に敗戰を慰めたかつたであらう。技術的に見るなら或場合の勝利には價値のないやうなものもあるから一概にはいはれないが、觀球者としては內容に觸れる前、勝負になる試合を欲するのが當然である。

一人で角力をとつてゐるやうな勝負が二日も續く（今秋は慶明戰を加へて四日）ことは單なる見物としてもありがたくないことである。それも實際力が違ふ場合は見る方のものも別な興味を以て接するからさう苦痛を感じない、けれども早慶、慶明の場合の如きは直にその勝負を待ち焦れ、最初から手に汗を握つてゐるのだから、あゝいふ結果になると、握つた手のやり場に困らう。

しかれども誰れとて試合に負けることを主眼に試合場に出るものはない。敗戰に至るまでには汗も流し、人知れぬ苦心をしたに違ひないのであるから、それ等の苦心に經驗あるものは死屍に鞭打つやうなことをしたくない。只自分は稻門出身者といふ關係ばかりでなく、野球の一ファンとしても早稻田の野球部が沒落してはならないと思ふ、早稻田が弱くなつても他が強くなれば全般の野球界から見て何等差支へないではないかと說くものもあらうが、歷史ある野球部とかなんとかいふことを拔きにして、早稻田が依然勢力を保つことは、大學リーグに二つなり、三つなりの好試合を增すことである、そこに早稻田の勢力維持には意義も生じよう。尤も自分はそれを強テームの持續を以て強調しやうとは思つてゐない。近時學生テームの商賣化の聲が高くなり、六大學リーグは今春の法政若林問題等に關してもさうした聲明書を公表したりしたが、要するにテームを強くせん爲めに中學から或は實業團から著名な選手とか、有望な選手を勸誘して來る。それが競爭的になつて學資の負擔から親もとへの補助までも保證するやうな惡風を誘致せんとする傾向にあるので、リーグの幹部の或ものはかなり頭腦を惱めてゐるらしい。然しこれ等は何にも他のテームが買ひ込むから此方も買込みをやらねばならぬといふ問題ではない。人が墮落したから自分も墮落せねばならぬといふやうに下品な考方をする必要は毫末もない、假りに皆んながさうした手段方法を講ずるなかに、毅然として學生テームの眞面目を保つてゐるテームがあつたら、それは純理論からは普通でも濁世には淸く咲いて野球界の對面を保つことである。

自分は連戰連勝して呉れるよりも安部先生によつて造られたる野球部精神が何時までも殘存されんことを希望する。早稻田野球部に流れた正義に對する強烈なる精神、それが漸次彼等の技風に現れなくなれば、傳來の早稻田は內面的に崩壞したものである。早稻田の野球部の心強さは決して屈しない點にあつた、吾等の先輩達は明治三十八年日本最初の米國遠征から新智識を得て歸へり、歸朝第一戰の早慶戰に五對零に敗れた。早稻田に對する期待が大きかつただけ世間からはかなり手酷しい批評をうけたさうであるが、洋行歸りに有頂天になり練習の不足せることに氣がつくと、翌日から默々として戶塚のあのグラウンドに火の出るやうな練習をして、第二回戰にも第三回戰にも勝利を得た。然るに今日は立敎に敗戰すると間もなく早慶戰を前にして宇都宮まで練習に出掛けた。夏期練習すら戶塚で行つたテームが氣持轉換や惡野次回避などの理由（單にそれだけの理由のみではないかも

知れぬが）で先輩が尊き歷史を編出したグラウンドの土から離れるなどは上分別ではあり得ない。清淨なる道場へ來て惡野次を飛ばすやうな不心得な練習見物がゐたら、ドシ／＼退場を命ずるがいゝ。自分の地內だ、何んの遠慮が入るものか。

敗因はかうした點にばかりあつたのではない、打擊練習の不備とか、一定の打法强要などの不便が、バッテングの粘りを失つたにもよらうが、立敎に敗れて怖氣づいた鼻を更に突如計畫された地方行練習に早慶戰といふものを一層恐怖づけて仕舞つた。早慶復活戰（大正十四年）に時の慶應は選手を京橋の或る旅館に罐詰にして外界との交渉を絕ち早稻田に必勝を期した。此の報を聞いた時、合宿があるのに無用のことをするものだと思つた、果せるかな慶應の選手は翌日の試合に昂奮度を失つて平常の技倆を發揮し得ず十一對零に敗れた。四年目の今日その慶應の罐詰に奇異の觀を抱いた早稻田は遠く宇都宮に選手を罐詰にして、當時の慶應と同じやうな運命の連敗を蒙つた、何んだか因緣話のやうであるが、試合作戰には極めて周到綿密な代り、その他は却つて放膽に行動しなくてはならぬ。試合の時も平生の練習の時も全く同一であることが選手生活の理想であらう。試合の前だからタラ腹御馳走を喰ひ、餘計睡眠をとり試合場には自働車で乘りつけるなど、他の競技の場合は知らないが、野球選手には必要でないことだ。粗衣粗食で結構な安打を打ち得る。田中勝雄は舊合宿の破屋に住み、たまに試合の時、カツレツを食べさせられたゞけだが立派にホームランキングとなつた。同じく谷口五郞や久慈次郞もさうした中から生れた。

早稻田は試合に負けたことを猛烈に悲觀しなくてもいゝ。負惜しみをいふと思はれることは、本意でないが、早慶戰に今後野球のある限り繼續されることであらう。負けた早稻田が勝つことがあるに相違ない。それよりも早稻田は早稻田としての傳統を尊重し、吾等の先輩が築き上げたところの精神を飽まで持續して生きてゐなければならない。

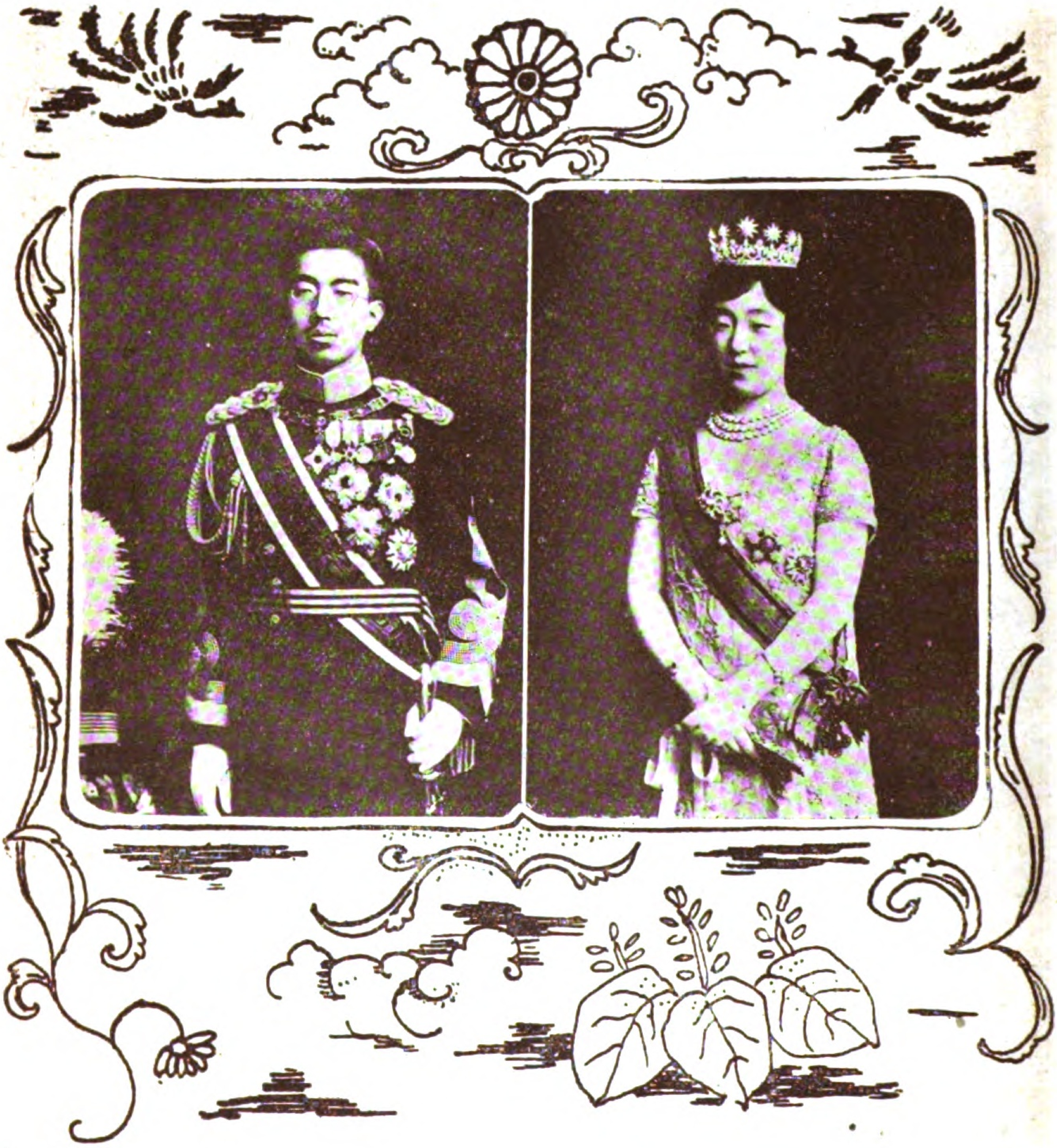
食ひついて行く氣魄は練習によつて培れる。昔一高が强かつた時代には、そこに獰猛を意味する一高式練習といふものがあつた。今の一高にはそれがないと彼等の先輩は嘆息してゐる。今日の一高が弱き所以ではないか。早稻田には早稻田としての練習があつた、練習は形式に流れてはいけない。常に實戰的に精神を傾倒して行ふところに生されざるテームが生れる。

勝敗のみに拘泥する必要はなくとも、强烈なる精神さへ選手の脈管に流れてをれば多少選手素質には不足があつても試合には勝つものである。一高の選手が大正年代に屢々早慶を倒したなどはその適例であらう。精神に軟弱さがあり責任感が薄らぎれば、勝ち得べき相手にも勝ち得ない。自分は野球部精神を十分に體得させ、血を吐く程の練習さへ與へることが出來たら選手の素質などを問題外としても遺憾なき試合がなし得るものだと信じてゐる。況んや選手素質に於て人後に落ちざるテームでありながら技倆を發揮し得ざるわけがない。

恐るべきは精神的に缺陷あることである。野球テームなどは特に時世に順應しなくてもいゝ、昔のまゝの野球部習慣を墨守し、只技術上に進取的であれば足る。

以上述べたるところは本誌の注文したポイントを外れてゐるかも知れない、しかし私としては此の邊で勘辨して貰ひたい。强くたる爲めには精神に基礎を置き、これを技術に及ぼし習慣としてグラウンドを馳驅する選手を造らねばならない。

聖壽萬歲





明治天皇の天覽芝居

飯塚友一郎

明治廿年四月廿六日から四日間に亘つて、時の外務大臣井上伯の麻布鳥居坂の邸で、空前絶後の天覽歌舞伎が催された。外國の例から見れば決して珍らしい事ではないが、江戸時代傳統の差別的待遇に隱忍してゐた芝居者にとつて、此の御沙汰は正に寢耳に水の恐懼であり驚喜であつた。勿論、德川幕府の演劇政策と雖も、凡ての演劇を惡風の源としたわけではない。幕府は能樂を以て、「國劇」と宣言し、能役者には扶持して其の生活と地位を保證し、國家の慶事には必ず能樂を催して士分に拜見を仰せつけたのみならず、時には町入能と稱して、町人等にも窮屈な裃を着けさせて、この神聖な國劇の拜見を仰せつける恩惠を垂れた。たゞ歌舞伎芝居だけを、何か穢れたものゝ如く見て、大名などが芝居小屋の前を通行する時には駕を高くかゝげさせて通るのであつた。

そうした見地から、此の天覽芝居は、明治文化史上、娼妓解放や××の解放と同様な、劃時代的の歌舞伎解放を意味するものであつた。

さて、圖には兩陛下御同列のやうにあるが第一日が明治天皇の天覽で、「勸進帳」と「高時」と「操り三番」と「花見踊」の番組と番外に「山姥」と「曾我夜討」で、餘程御機嫌に叶つたと見えて午



後二時から十一時迄飽かず御覽になつた。辨慶を勤める團十郎は一週間前から潔齋沐浴して、その前日からは食事も咽を通らず、夜も眠られぬ程、恐懼したが、いざ舞臺に至尊の間近に立つた時には、流石の名優もがた〳〵と胴慄ひが止まらなかつたといふ。富樫の左團次も、義經の福助(今の歌右衞門)も、恐れ多くて病人のやうな調子であつたといふ。

二日目は皇后陛下の行啓で、「寺子屋」と「伊勢三郎」と「土蜘蛛」に番外御所望で「忠信道行」といふ番組であつたが、「寺小屋」が殊の外、陛下の御意に叶つて、例の文庫から經帷子の出る件など御涙を流され、お附の女官もみなハンケチを濡らした。舞臺の役者もこれを拜して感泣して居ると、舞臺裏から係の役人がひそかに聲をかけた。「これ〳〵其樣にお泣かせ申上げては恐れ多いぞ、注意せえ〳〵。」還御はやはり十時過になつた。

三日目は各國公使の招待で、「勸進帳」、「寺小屋」、「伊勢三郎」、「高時」といふ番組。四日目は皇太后陛下の行啓で、「勸進帳」、「靭猿」、「忠臣藏」、「吉野落」、「六歌仙」といふ番組で、何れもいたく御意に叶つて、十一時頃まで御覽になられた。

井上伯は當時の演劇改良會の主唱者の一人で、其の八窓亭といふ茶室開きに臨幸を仰ぎ、此の機會を利用して、歌舞伎芝居の一弱點であつた品位の向上を計つたのであつた。



巣林子の像

三田村鳶魚

先年巣林子の墓を尋ねて久々智の廣濟寺へ往つて、供養塔なのを知つた時、途中で近松さんの木像がありますと教へられ、寺で聞くとないといひ、だが正本屋九右衛門の像ならあるといふ、何にせよ見せて貰ひたいと頼む、漸く塵埃に塗れた厨子を持つて來た、開けて見ると睡餘小錄のとは面體は違つて居るが、略々同型のものだ、像の背に當寺本堂本願人大阪高麗橋一丁目俗名正本屋山本九右衛門、法名金波院受樂日久、臺坐に久々知山廣濟寺開山日昌花押とある、九右衛門は寛保元年十一月十三日に沒し、日昌は元文三年十月六日に示寂した、それで此の像が日昌の示寂以前に製作された證據になる、日昌の示寂は九右衛門よりも四年早い、像背と臺坐との筆蹟は無論違つて居る、さうして厨子の兩扉に九右衛門夫婦の忌年月日と法名とが書いてある、像背のも扉の後に書いたもので、最初は臺坐へ日昌が自書したゞけであつたらう。

是が山本九右衛門の像でないことは、正本屋の亭主が斯うした風をして居る筈がないので知れる、それなら何故に正本屋夫婦の俗名法名が厨子に書き附けてあるのかといへば、是は九右衛門の寄進なのだから、一般の例に依つて施主の名を書き附け、歿後の冥福を禱つたのだ、我等は別に近松門左衛門の像でないといふ證據のなき限り、土地の父老の云ふがまゝに巣林子の木像たることを肯定する、のみならず近松の筆蹟を決定し難い今日に於て、自讃のある畫像といふものゝ方を疑ふ、斯く云ふのには多少の理由があるる、それは別叙することにして、爰では近松の供養塔（久々智は彼の埋骨地でないから墓碣とは云へぬ）のある廣濟寺に、巣林子の像のあるのは最も筋の好いものと考へる、誰かれも顧みられぬ此の古い厨子は決して閑却すべきものではあるまいと思ふ。



歌舞伎の歐洲進出

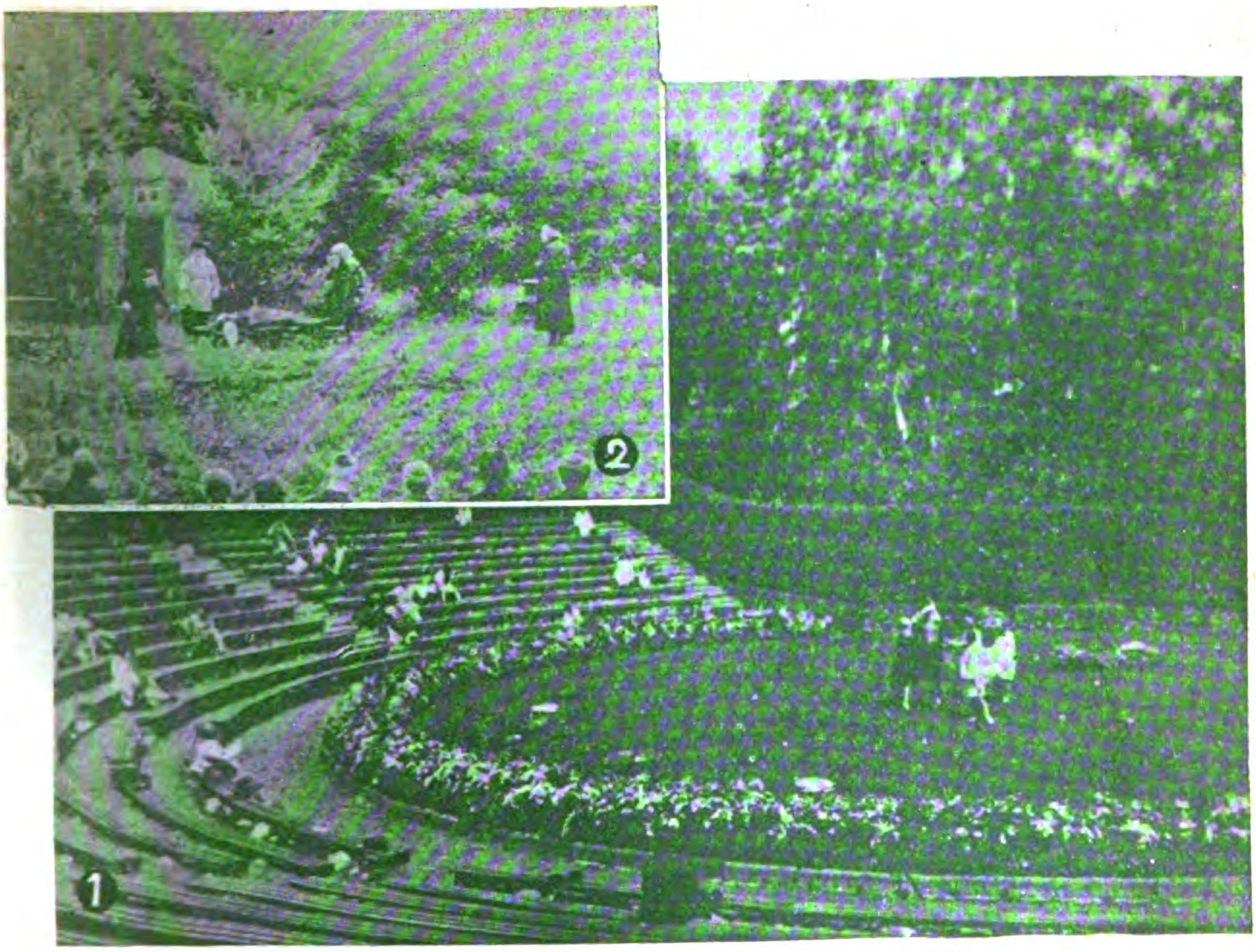
――宣傳パンフレットの刊行

尾瀬敬止

ロシヤへ日本の芝居をもつて行くといふことは大分問題だつた。「本統にわかるのか知ら？　判らずじまひになつちもうのぢやあないか？」。そんな噂が、左團次の一座が花々しく鹿島立たうとする間際にも、こちらでは滅法に喧しかつた。

もし、若しさうだつたら、第一には、はる〴〵左團次を呼んだ文化聯絡協會（ВОКС）の顏が立たない。で、大いに宣傳するつもりで――新聞や雜誌にも助太刀させておいて――協會自身が奮發して出したパンフレットが是れ。一つは日本通をもつて聞えてゐるコンラード教授が書いたもの。一つは同教授をはじめ、その他のいろんな人達の紹介文を集めたもの。ともに、表紙繪は、隨分こつたものだが、自分どもがくど〳〵しく說明するにも當るまい。このパンノレットの刊行が果してどれだけ利き目があつたかどうかは神ぞ知るだ。萬一、靈驗あらたかで無かつたとしても、誰が珍しい文獻でないと言ひ得よう。

とにもかくにも、歌舞伎の歐洲進出は大成功だつた。「歌舞伎」が「舞歌伎」などゝ稱せられた事もあつたさうだが……。そして、「高島家ア、バンザイ！」、「左團次、バンザイ！」の聲は、ロシヤ全土にすつかり鳴りひゞいたと聞く。（本誌前號所載にかゝる『歌舞伎と靑い眼』を參照）



野外劇

八代清夫

屋根のある建物と、額椽式舞臺と、幻影式演出と、人工光線と、サロン的觀客とから解放された、押つ開いた場所での、眞に民衆的な演劇形式としての野外劇が、要求され初めてゐる。

ギリシャ、ローマ時代の半圓形劇場、圓形劇場はあまねく人の知る所である。中世紀、シエークスピヤ劇場以前の演劇は或ひは圓い堀を掘つてその中を舞臺とし、幾つもの臺を並べて順々にその上で一場づゝ演じたり、或ひは街路に沿つた家並のやうに一列に舞臺を並べ建てゝ順々に一場づゝ演じたり、或ひは車の上を舞臺とし中を樂屋として廣場から廣場へと行進しつゝ演じたり、或ひは宿屋の中庭を假の舞臺としたりした。劇場が出來、人工光線が發明されて以來、野外劇は特別の祝祭の時か、又は農村劇以外には行はれなくなつた。しかし近頃又、享樂的因習的な劇場から解放されたいといふやうな主旨からや——アメリカにこの例が多い——觀念的な「民衆の中へ」のスローガンからや——獨逸に多い——ギリシャ、ローマに對する憧憬からや——諸所にある——野外劇が行はれ初めた。

プロレタリアートはこれ等とは異つた意味で、野外劇の形式を尊重する。街頭劇、工場劇、農村劇、大廣場での劇。サウエート露西亞は旣にその多くの例を持つてゐる。

寫眞は今年度の獨逸の野外劇である。

1. 伯林、フオルクスパルク・ユングフエルンハイデの野外劇場に於けるシエクスピヤの「眞夏の夜の夢」。演出者リンド、

2. フランクフルトに於けるハウプトマンの「沈鐘」。演出者ヒルビツヒ、エーデルホーフ。



3. ハイデルベルヒに於ける「眞夏の夜の夢」。演出者ハルトウング。

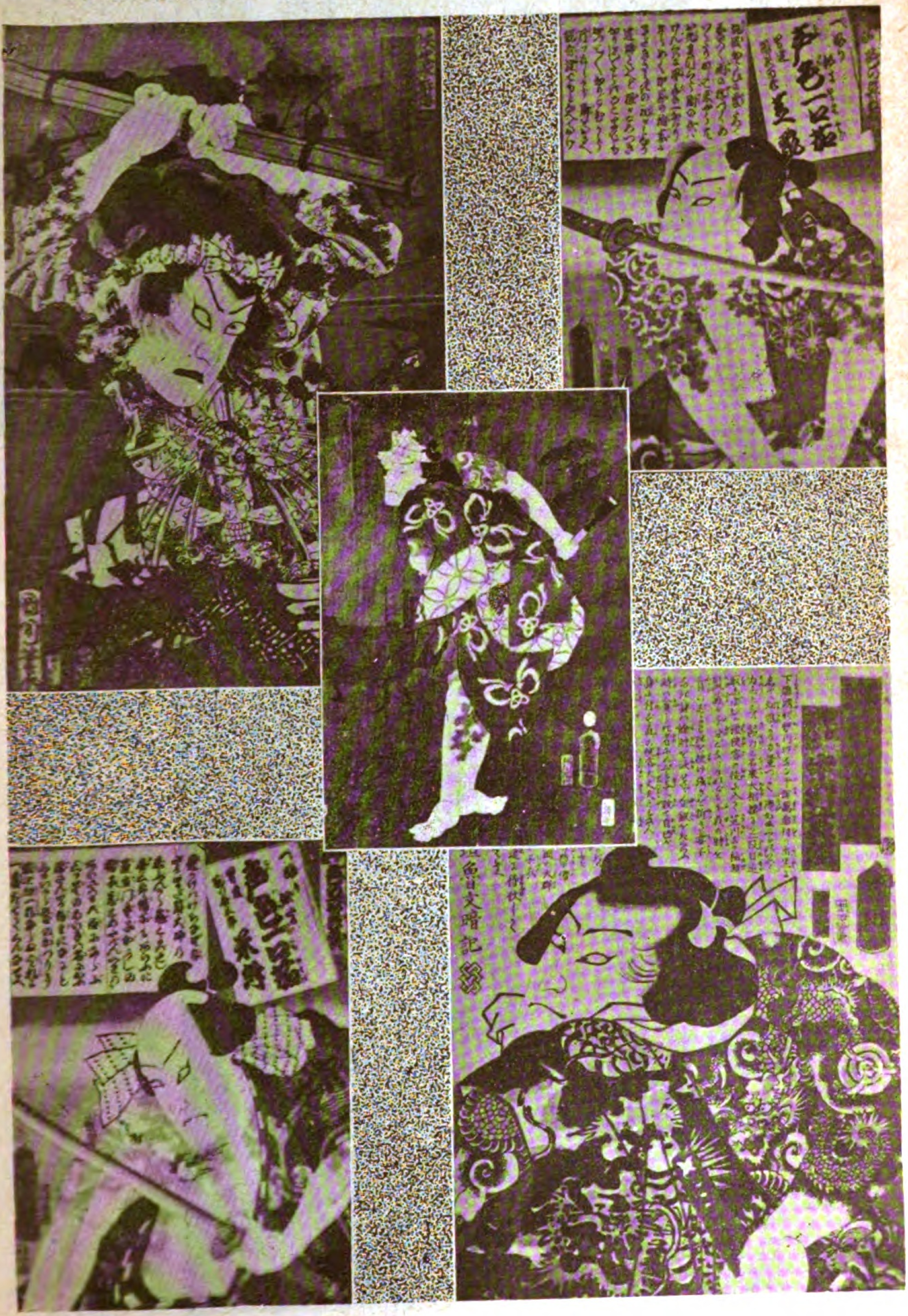
4. ツオツポツトの「森のオペラ」で演じられたワグナアの「神々の黄昏」。演出者メルツ。

5. 同じく「ワルキユーレ」。





刺青の錦繪　（本號ハポイント欄參照）　永見德太郎



八ポイント欄

一、「この八ポイント欄」は有名無名を問はず、普く世の篤學者、趣味家、好事家、旅行家のために開放して隱れたる智識と漏れたる珠玉とを集めて之を天下に紹介しようと思ふ。故に「八ポイント欄」への投書を特に歡迎する。

一、原稿は出所責任を明かにするため筆者不明のものは採らない。紙上の變名も許さない。そして掲載した分には十圓以上の謝禮をするが、枚數は四百字詰五枚以內にコンデンスして頂きたいことを希望する。

上海的生活往來

馮　夷

(一) 假召租

上海へ來て西と東との區別がつくやうになると、待つてゐましたと計り、神田で買つたレデイー・メイドの背廣は邪慳に脫捨てて、大きな聲では云ひたくないが實は矢張りレデイー・メイドで買つた支那服を着込み、黑塗のお椀見たいな帽子を頭の上へ載つけてみた。——これで今までの糞面白くもない文筆勞働の垢が多少は洗ひ落されたやうな氣がする。月賦で自殺してゐるやうな、三流ペンマンの碌でもない生活の垢が。

なまなかに親から貰つた緣喜でもない名前を振廻してゐるから何時まで經つてもウダツが上らないのだ。こいつも新規蒔直しにやつけて姓を馮、名を夷といふことに決めた。

間の拔けた面構えも時にとつては都合が好い。支那服を着込んだ筆者がぶらついてゐると、何か話しかけてくる支那人がある。相手の言葉は無論聞取れない。いや、てんで分らない。

『アラ、ズウ、ケントンニン、ソンヘーオーブショタヤ。』

俺は廣東人だ。上海語は分らない——この手で逃げてしまふことにした。

だが、日本人の下宿屋に轉がつてゐては東京の下宿屋住ひが想出されて、忌々しい文筆勞働のありし日が眼の前に浮んでいけない。

ある日、思立つて貸間を探しに出掛けた。勿論支那人の家の貸間を。

支那人の用ひる貸間札は赤紙で、それに召租と書いてある。その下側に間代の廉いことやその他の條件の書いてあることは東京の素人下宿と變りはない。尤も「大學生に限る」なんかといふのはないが。

貸間札を見當にしてある路次を入つて行くと、探ねる家は直ぐに分つた。

入口の標札には「義源公館」と記してある。公館？ さて何のことだらう！

だが公館の詮鑿は後廻しにして置いて、前夜讀んで置いた「上海語會話」の文句を口の中で繰返しながら、筆者は門を叩いた。

出てきたのは十五六の下女らしい小娘である。部室を見せて貰ひたいといふと、頷首いて筆者を招じ入れた。

入口のその部室は應接室になつてゐた。見廻すところ、椅子、卓子、一切支那風のものであるが仲々どつしりしたものが揃つてゐる。

『こんな家でも部室貸しをするのかな？』

と考へてゐるところへ、扉が開いて奥の方から二十三四の女が微笑を含みながら出てきた。

『部屋がお入用なのですか。』

『さうです。』

『上海語會話』で答へると、女は先づ小娘に命じてお茶を運ばせた。

筆者は暗誦するやうな語調で、部室は幾つあるか、部室代は幾らかといふなことを訊いて見た。

『二間ありますが、どちらにも寢室がついてゐて、毎月二十元負擔することになつてゐます。』

寢臺付きで二十元、高くはない。早速借る氣になつて、先づ手付金として十弗紙幣を一枚卓上に置いた。

すると相手は媚るやうな眼で、

『十元は餘り少なくはありませんか。どうぞ五十元だけ先拂ひにして下さい。』

から云つてますます奇怪な視線を投げかけてくるのである。

筆者は五十元の先拂ひに面食つた上、少々薄氣味惡くなつたので、席を立つたと承知して貰ひたい。と、女は慌てて筆者を捉えて放さなかつた。

その時だ、忽然として二人の大男が奥から躍出して來て大聲に怒鳴つた。

『何處の狂人だ、勝手に他人(ひと)さまの家へ入つてきやがつて、‥‥歸しやしねえぞ、ふん縛つて巡捕房へ連れていつてやるからさう思へ。』

筆者は唖然として佇んだ。

『何を吐しやがるんだ、‥‥』

とばかり喉啊を切りたくとも、そんな言葉は生憎と「上海語會話」には載つてゐなかつた。

二人の大男はつかつかと寄つてきて、筆者の兩腕を捻上げながら、金入れ、時計だといふものをすつかり取上げてそれを女に渡した。

・

惡く抵抗すれば二つとない生命が危い。筆者は門外へ突出されるや否や、黄包車を呼んで一目散に逃げて歸つた。

何といふことだ。處で老上海人に聞くと、その邊は珊家内といふ暗黒街で、召租の張札をしては、女が金を捲上げたり、それで不可ないときには例の大男が強奪を行ふので有名なところだと云つて笑はれたのだが、‥‥こんなのが假召租といふ稼業だそうだ。

（二一）女拆白黨

文字だけを見ると何だか肩が凝りそうな氣がするが、實はこれが軟派不良少女で、しかも甘い男の金を、ただ金を捲き上げることを商賣にしてゐる連中のことだといへば安心するだらう。

さて、ある晩のことだ。彼に銀座街に相當する南京路の鋪道をぶらぶら歩いてゐる内

に何時の間にか西藏路の角まできてゐた。
懷中時計は八時半過ぎを示してゐる。歸るには早いし、と頭を上げた途端に側に華やかな袍を着けて頭髮を短かく刈込んだ女が佇んでゐるのに氣がついた。

彼は技巧的な視線を投げかけた。女も脣に微笑を浮べながら眸を回した。

村松梢風氏の「支那漫談」を讀んだ方々は御承知であらうが、かうした顏面筋肉の運動を吊勝子（チャウパンツ）といふ。して、この吊勝子は相手と場所の如何を問はず何人も思ふ存分、勝手次第に行使して差支へないといふ有難い不文律が支那には存在してゐるのだ。

程なく彼と女とは鋪道の上を一緒に歩いてゐた。女は名を阿花とかいつた。二十一才で閘北の長興里に住つてゐる。

東京のデパートメントと同じ具合に、南京路にある永樂公司、先施公司、新口公司等々のデパートも買物以外に若い人に利用されてゐる。

その翌日、彼は新口公司の屋上庭園へやつていつた。

午後の鈍い陽光を受けて搖いでゐる支那家屋の雜然たる甍の波を眺めてゐると、約束通り阿花がきた。だが、彼女には十九か廿歲ばかりの女が蹤いてゐた。

『このひと、私の親しいお友達で桂貞さんといふのです。』

阿花はさう紹介した。

桂貞も阿花と同じやうに頸筋を刈込んだ斷髮娘で、楚々たる足取りには捨て難い趣きがあつた。

新口公司の屋上には娯樂場がある。三人は芝居を見たり活動寫眞を見たりして時間をつぶした。

夕方になつた。彼は二人の女を西藏路の大興樓へ伴つて晩餐を共にした。

三人はそれから近くの大中華旅館へ同行した。

斷つて置くが、支那の旅館へは男一人が入つて行くと却つて怪訝な顏をされる。晝でも夜でも。

三人が部室へ通つたときは既に十時に近かつた。阿花は彼の耳元に口を寄せて囁いた。

『私は兩親がやかましいものですから泊つて行くことは出來ませんけれど…桂貞さんは構はないそうです…そしてねえ、あのひと五十元ばかり借金があつて、いまひどく催促されて困つてゐるのですが一時立換えて置いてあげてくださらない？…そのお金さへ出來れば安心して泊つて行くと云つてゐるのですから…』

から持ちかけられて「ノウ」と云ひ得る男は餘程の利口者か、でもなければ鈍感至極な奴に極つてゐる。

ところで彼はその孰れでもなかつた。そして「オーライ」と許り、氣前よく且つ欣然として答へたのだ。

阿花は早速桂貞の側へ行つて、低聲で何か話してゐた。彼は椅子に坐つて煙草を吹しながら話の終るのを待つた。

三十分…一時間…一時間半…二人の話は何時まで經つても盡きない。

十二時に近くなつた。家へ早く歸らねばならぬ筈の阿花はそれでも歸る氣配すら見せ

ない。いと熱心に話し合つてゐる。

『もう歸らなくちや遲いだらう。』

彼は阿花を促す機會を覗つてゐたが、どうも好い時機が來ない。仕方なしに無暗と煙草を燻らせながら手を束ねてゐた。

矢鱈に欠伸をして見た。それでも彼女たちは我關せず焉として喋り續けてゐる。

到々根敗けして彼は眼鏡を外し、上衣と胴衣とを脱いで寢臺の上に横になつた。そして暫くは女の話聲を忌々しく耳にしてゐた。

『いやに靜かになつたな。』

彼がさう思つて眼を開いたときには、窓に曉方の淡光が射してゐた。

『女たちは！』

と慌てて部室を見廻した。しかし、女たちの姿は杳として影も形もなかつた。それだけではない。上衣も時計も眼鏡もない。

『お連れの方は二時ごろお歸りになりました。』

部室のボーイは輕さうな口調で答へた。

× × ×

『初めて女族目覺に引掛りましたよ。念のためその翌日長興里へ行つて見ましたが無論阿花といふ女は見當りませんでした。』

支那モボの陣小峰はかう云つてにやにや笑つてゐた。

『眼鏡、時計、上衣それから現金を合せると百五十元計りしてやられた譯でしたよ。』

刺青の錦繪

永見徳太郎

歌舞伎の登場人物の中で、辨天小僧や團七九郎兵衞等が、双肌脱ぬぎとなつて、見せびらかす刺青は、グロテスクな持ち味と共に、強さ・勇ましさ・凄さに、一種の美的衝動を、觀客に投げかける。

「錦繪のやうだ。」といふ稱讃の言葉は、現代の歌舞伎にも、用ひられてゐるやうに。

實際、古典劇の場面は、浮世繪である錦繪に依つて、數く傳へられてゐるが、ことに刺青を、さらけ出すに至つても、鑑賞しおたい美を、誰しも感ずるであらう。是を批評するに「錦繪のやうだ」は、適當な讃辭と思つてよい。

刺青は、人情劇のクライマックスを、表現する一つの方法とも言ひ得よう。

初代豐國の門人に、柏谷孫三郎といふ者が居た。彼の才能は、紺屋渡世で終りを結ばうとしなかつた。畫名を歌川國芳と名乘り、「通俗水滸傳豪傑百八人之一個」に、懸命となつて、九紋龍史進だの、小旋風柴進・浪子燕青等の豪傑を描きあげ、畫面に力を注いだところは、肉體であつた。刺青であつた。九疋の龍・龍宮・牡丹に瀧・猛虎・九尾の狐・大蛇・荒鷲・雷神・風神・唐獅子・孫悟空・櫻花等に興味を持ち、兩國の加々や、堀江町の伊場仙を版元として、六十九枚を世に出したのである。

その頃彼は、一勇齋國芳と名乘つてゐた。

此錦繪を手にした人達は、豪傑の力強さや、その刺青の精緻さに、眼を見張らぬ譯にはゆかなかつた。

苦心は酬いられて、國芳は一躍、浮世繪名家の列に入る事を得た。

好事家は、刺青師に、水滸傳を頼みに來る者が多くなつた。國芳の繪は、針持つ者にとつて、唯一の手本となり、彼の繪は、益々喧傳せられ、好劇家の間では、刺青物のステージに、惚然となる人が、少なくなかつた位であつた。

刺青は、江戸にてはほりもの、京阪にてはいれほくろと稱へられ、卑語ではもんもんとも言はれた。文字は文身・剳青・剳刺・黥靑・膚剳とも書く。

起原に至つては、詳かでないが、上古未開の民族間に、行はれた風俗と傳へられてゐる。

後漢書倭人傳に、「男子皆黥面文身、以其文左右大小別尊卑」と記されてゐるから、今日の熱帶地方にある蕃民と同じ好みだつた事が分る。

流行となつたのは、近世であつて、文化・文政以後であらう。而して、その先驅となつたのは、相思相愛の起請彫で、互ひに心變りせない表徴をする方法として行はれたのである。左腕又は右腕に命・一命・唯命などと彫りつけたのであつた。初代歌川豐國の錦繪には、命と彫つたおさん茂兵衛の一枚繪が殘つてゐる。

寛政時代となつて、その技術が、愈々精美となつて來ると、皮膚の一部分でなく、身體全身に完膚なきまで、朱墨を交へて刺青するやうにさへなり、鳶人足・駕舁夫の如き者は、入れざれば恥と心得たのである。

年老いて笑はれ草と思へども
ほらればならぬ鳶の附合

と或作事師が、狂歌一首を、彫りつけた事に依つても、その頃の樣子が知れる。實際、刺青は、靑年期のもので、ヨボ〱な老人となつた頃、皺の中に刺青の形が崩れて見へるほど、見にくいものはあるまい。

馬鹿氣た迷心の爲に、お呪禁として、陰部に、河童・蟹・蜘蛛・蚊等を彫つたものさへあつたのである。

維新後、刺青は嚴禁せられ、今日に及ぶのであるが、未だ全く廢絶したといふことは出來ない。

その他、刺青は、罪人を遠島等に流す場合、その土地に依つて定められた簡單な印しを、手に入れたこともあつたが、國芳の錦繪が現はれてからは、一層各自工風した模樣が、男子ばかりでなく、女の間にも、競ふて流行し初めたのである。

人氣を呼んだ錦繪の刺青は、その後、芝居繪の中に、よりよく描寫され、華飾絢爛なものとして、大衆に呼びかけ、歡迎されるやうになつたのであつた。

日本酒史漫筆

鴇田英太郎

寒くなると、同じアルコール分を飲むにしても、なんと云つても日本酒が戀しくなる。そこで、この有難い日本酒の供養にもと、いささかペダンチックな嫌ひはあるが、日本酒史について述べてみよう。

日本で酒がいつ創造されたかは、朝廷祀ル酒神於造酒司ニ凡六座大宮賣神四座酒殿神二座（延喜式）大宮賣盃大物主神也宗神帝七年天下有災帝使ニ大田々根子（崇神紀）祭ニ大物主神ー災異自止八年夏以ニ高橋邑人活日ー爲ニ大神掌酒ー冬令ニ大田根ー設神酒日擧ニ神酒ー獻ニ帝ー歌曰此酒非ニ吾酒ー大物主醸之帝設ニ宴神宮ニ（日本紀）とあり又もう一つ、漢相被ニ酒斬ニ蛇素盞嗚尊醉蛇斬之斬ニ蛇一也其所以用ニ酒則大異などとあるから、なにしろ遠い昔から在つたものにちがひはない。また、伊勢にも酒殿があつて、豐宇氣比賣神を祀り、古の酒神也と云はれてゐる。山城の綴喜郡にも酒屋ノ神社があり、河内丹北郡にもまた酒屋ノ神社がある。

或る時代に於ては、日本でも酒を禁じたことがあつた。孝德帝二年三月禁ニ諸國百姓農月飮レ酒食レ肉や嵯峨帝弘仁二年五月勅農人飮レ酒食レ肉禁惟久而國司寛縱無レ意糺勘ー令ニ須道使加ニ禁察などとあり、また、孝謙帝天平寶字二年二月にも禁じたことがあつて、これを犯すと、五位已上一年の封祿を停され、六位已下は見任を解かれ、それ以下は杖八十に處せられた。聖武帝の天平九年五月には半役を以て酒を禁じてゐる。平城帝大同元年九月には、左右京及山崎津難波津の酒家の甕を封じた。これは水旱爲レ災米價騰貴するが故であつた。後深草帝の建長四年十月には征夷大將軍宗尊親王が、大筆を以て酒を禁じ、鎌倉中家の酒壺三萬七千百七十四口を毀し、家に一壺を留して、之を用ひて酒を醸したものは罪科に處した。なほ此の外にもある。

次に、名酒について書いて見よう。酒を以て名者、攝津東生郡に酒人郷あり、安房の長狹郡に酒井郷あり、上野甘樂郡に酒甘郡、下野河内郡に酒部郷、陸奥菊多郡に酒井郷、同じく志太郡に酒水郷、越前今立郡に酒井郷、播磨の加茂郡に酒見郷、伊豫温泉郡に味酒郷、豐前宇佐郡に酒井郷、肥後の託麻郡に酒井郷があつた。これ等は皆、上世、酒を醸した地であるが、今はすなはち無聞也。

後世、河内の天野酒、奈良の奈良酒、關東の江川酒や、加賀の菊酒など、それから筑紫の練酒などが天下にきこえた。また攝津の池田伊丹なども名酒をもつて聞こえた。河内の米に、非常に醸酒に宜かつたので、昔つては御酒米を貢したものである。なかにも錦部郡天野山寺の酒が尤もよかつた。所謂天野酒である。豐太閤が、吉野に觀花した節に、諸國から自慢の名酒が獻されたが、やはり、天野酒が第一等の榮を得た。

大和の奈良酒と云ふのは、一條兼良が所謂の南京名物と云ふのがこれである。

伊豆の江川にあつたのが、三年酒と云はれたもので、所謂江川酒である。北條氏政がこれを、織田公に贈つたものだ。

加賀の菊酒と云ふのは、一條兼良の所謂賀州宮腰である。源賴朝は之を菊花と謂つた。越州豐原の酒と並稱されたものだが、豐原之酒と云ふのは後に聞くところがない。

筑前宗像の社務には、酒氣のある、深さ測り知られざる窟が在る。市杵島姫命が此處で酒を醸したと傳へられてゐる。後世、博多の練酒と號し絶品となす。その色が練絹に似てゐるが故にさう名付けられたものである。

攝津豐島郡の池田の人が、猪名川の水を汲んで酒を醸した。之を池田酒と云つた。河邊郡伊丹の酒家六十餘戸では、伊丹酒を老松と名付けて京師に貢したが、その餘りを多く關東に輸出した。輸出額は一ヶ年三十餘萬石が平均であつた。これを運ぶには、木罌缶を以て酒包席裹、號を上に署し、その號の新を爭ひ奇を鬪はし、殊に更へ月に革めて、人目を聳し美觀を衒すことに努力した。坂上と云ふ人は、唯黒畫にて一縱一横、劍鋒菱角の如き狀を爲り、昔からこれを未だに改めないために、其の號を天下に轟かし、世にこの酒を、劍菱と稱した。天下の酒の値段がこの劍菱によつて左右された。なほこの伊丹酒の醸造に使用した袋を、猪名川で濯つたもので、人々は其の餘瀝を乞ふて飲んだが、其の味醴の如くであつた。以て酒の多きを知るべきである。

河内の石川郡では、葡萄を多く植ゑ、それから酒を醸造した。甲斐の勝沼と岩崎の二村もまた葡萄で聞こえた。

八丈島には所謂酒と云ふものがなかつた。ただ、濁醪があつた。或ひはまた、玉蜀黍甘藷で醸造した。

琉球國には、燒酒があつた。燒酒に就いては、「南島志」にかう書いてある。「造法蒸レ米和レ麹各有二分劑一不レ須レ下レ水封醸而成以レ甑蒸二取其滴露一如二泡盛一之甕中密封七年而後用レ之其俗名二泡盛一」

終りに、酒器に就いて書いて見よう。

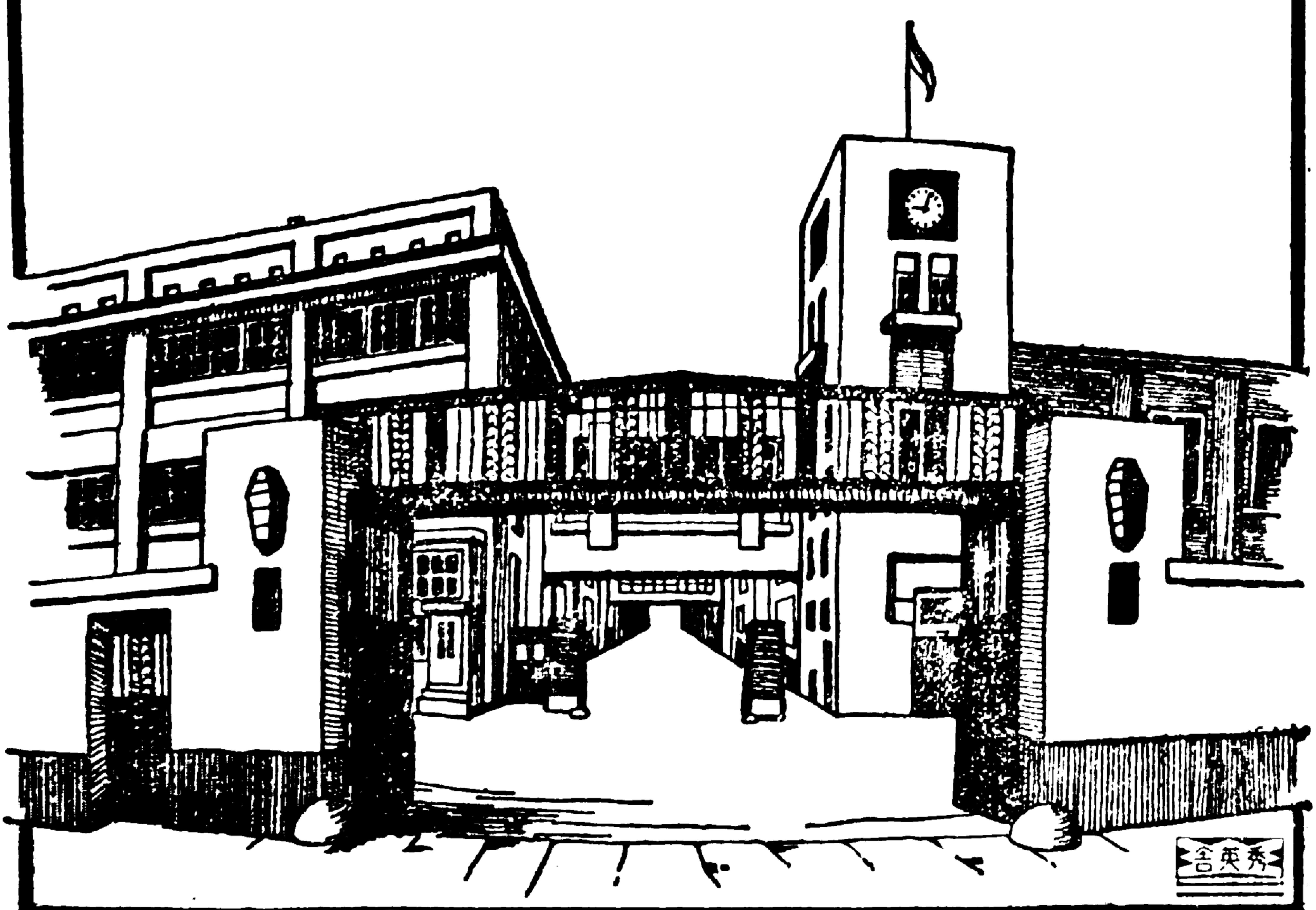
古、筑紫では、杯のことを浮羽と呼んだものである。是與二西土羽觴一相似。古の酒器には酒海と云ふものが有つて、諸節供御の酒器には、金銅の酒海を用ひた。また、酒垂と云ふものもあつた。

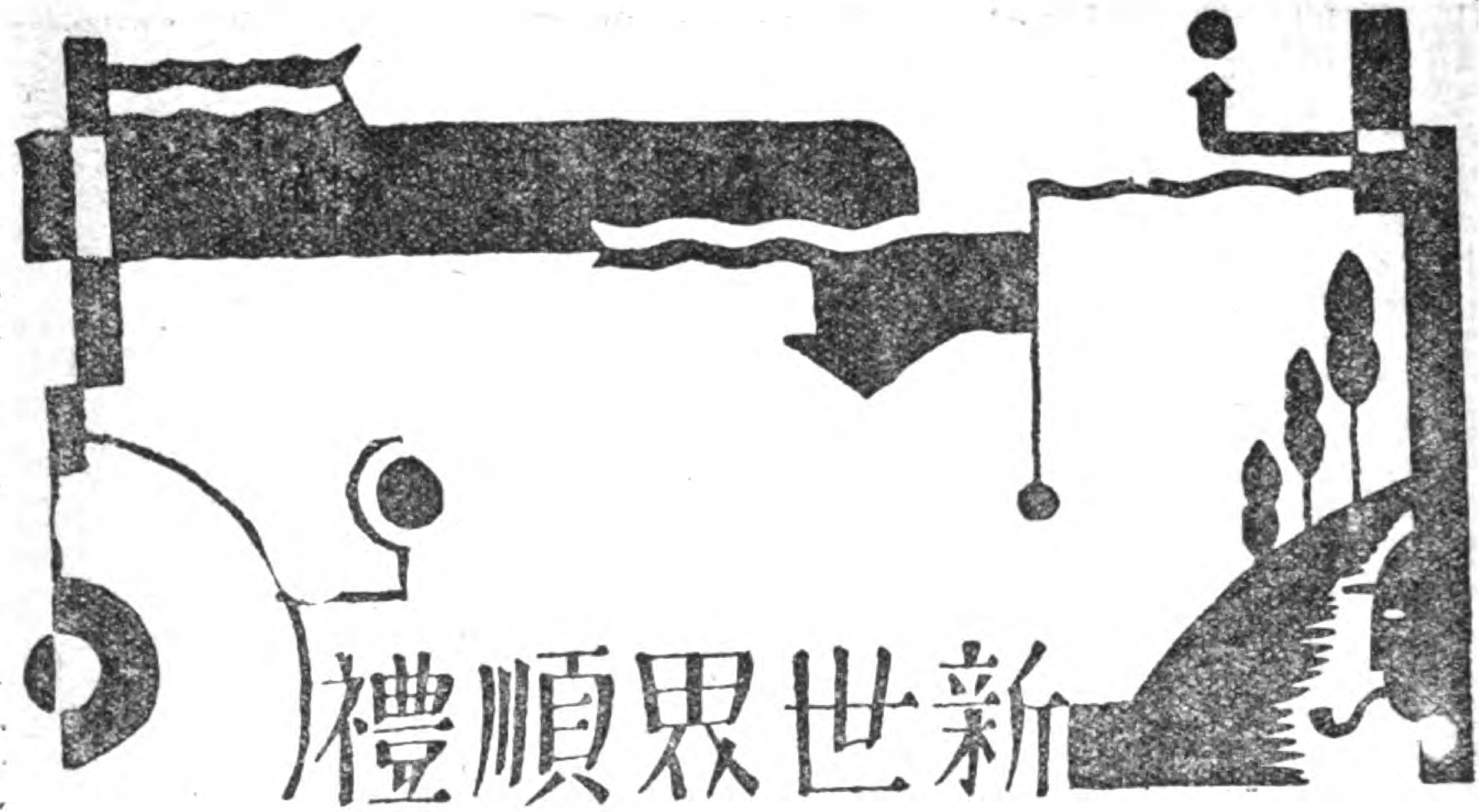
酒盞は古は、土器を用ひた。故に諸國は、土師酒盞を貢したものである。藤原氏が權を乘つて奢侈尤甚しきとき、攝政家が宴を設けて、會するものに飯菜を備すことを命じた。そこで、朝光は、膾を銀盤に盛り、濟時は鮓を銀桶に盛つたが、何人も、酒盞に金銀器を用ひたことを聞かない。しかし、天子が銀器を用ひたことが「延喜式」に見えるし、「聚樂行幸記」には、金盞使用のことが書いてある。

紀長谷雄有二八角盃一銘曰盈レ杯久視循來有レ味と「本朝文粹」に書いてあり、「鎌倉志」には鎌倉玖恩寺藏二一酒杯一似レ皿而淺内外黒漆金描二梅花一傳爲二平重衡遺物一と出てゐる。「醉客漫興集」にはこんなことが書いてある「其侯藏二一大杯一傳爲二和田義盛遺物一平而淺容二一升一黒漆金描作二鶴刀及飛鶴泳之狀一」近來は大盃朱杯を使用するが、古は黒杯を用ひたのだ。

伊豆の伊東氏には、大螺杯があつた。傳ふるところによれば、曾つて之を朝廷に獻じた。ところが、朝廷に於ては、此の大螺杯一個のために閣議を開いて論じ合ひ、その無用なることが決議されて、之を返し賜ふたと云ふ。

藤原則季は人麿を祭るに鸚鵡杯を用ひた。鸚鵡杯とは即ち海螺のことである。上杉謙信は、多くの酒杯を造つておいて、戰ひのたびごとに、將士を酒杯によつて賞賜した。之を春日盃と稱して後人の題咏が甚だ多い。


秀英舎



白夜幻想曲

谷譲次

秋の靜物

旅は、この散文的な近代にのこされた只ひとつの魔法だ。

ある日、まつたく系統のちがつた一社會（コミユニテイ）に自分じしんを發見する。その異國的な、あまりに異國的な、ときとして all-at-sea の新環境を呼吸するにいそがしいうちに、調べ革のやうに自働的に周圍がうごいて、またまたほかの不可思議な現象と驚異と感激と恍惚が私たちのまへにある。

たとへばこの朝、鉛いろの日光に驀然とかゞやいて大きくゆたかにひろがつてゐる「北のアテネ」に、私達はぽつかりと眼をさました。

北のアテネ――でんまあく・コペンハアゲン。

さうすると、この一個の地理的概念に對して、私は獵犬のやうな莫然たる

動物本能に驅られるのだ。旅行者はすべて、まるで認識生活をはじめたばかりの嬰兒のやうに、あまりに多くの事物に同時に興味を持ちすぎるかも知れない。

What is IT?

What is THIS?

What is THAT?

だから、露骨で無作な好奇心と、他愛のない期待とが一刻も私をおづとさせておかない。さつそく私は、憑きものでもしたやうな眞空の狀態で先づ街上に立つ。町をあるく。どこまでも歩く。つひそこの角に何かゞあるやうな氣がしてならないからだ。この「つひそこの角に何かゞあるやうな氣」こそは、旅のもつ最大の魅力であり、その本質である。そして角をまがるといつも正確に何かゞある。小公園だ。浮浪者が一夜をあかしたベンチが、彼の寢具の古新聞とゝもに私を待つてゐる。腰を下ろす。

この時、私の全身は海綿（スポンヂ）だ。

なんといふ盛大なこの吸收欲！　何たる、by the way, 喜劇的にまで「カメラの用意は出來ました」こゝろもち！

なによりもさきに、私は町ぜんたいを受け入れて表補しなければならない――この場合ではコペンハアゲンといふ對象を。

第一に、ひくい雲の影だ。

それが一枚の炭素紙みたいに古い建物の並列を押しつけて、眞夏だといふのに、北のうす陽は清水のやうにうそ寒い。空の色をうつして、何といふこれは暗いみどりの廣場であらう。その、煤粉がつもつたやうに黑い木々が、ときどきレイルを軋ませて通り過ぎる電車のひゞきに葉をそよがせて立つてゐるまん中、物々しい甲冑を着たクリスチャン五世の騎馬像――一ばんには單に馬（ヘステン）と呼ばれてゐる――お滑稽なほどの武威をもつてこの1928の向側のビルデイングの窓を白眼んで、まはりに雜然と、何らの組織も配置もなく切花の屋台店が出てゐる。空のいろを映して、まつくろに見えるほど濃い色彩の結塊だ。少年がひとり、過去の幽靈のやうな王様の銅像の下を小石を蹴つて行く。ちひさな靴のさきにいきほひよく彈かれた石は、ひえびえとした秋風のなかを銀貨のやうに光つて飛ぶ。そして、二三度バウンドしてから落ちたところにおづとして少年を待つ。すると彼は、からかはれたやうに憤然と勇躍して石のあとを追ふ。かうしてどこまでも搜し出して蹴つてゆく。ゴルフと同じ興味のやうに見える。いや、この北ようろつぱのひとりの少年にとつて、それは目下路上の一信仰なのだ。なぜなら、一度石が乗馬像（ヘステン）の下の鐵柵内へ逃げこんだときなど、かれは歩道にし

やがんで白い手を延ばしていろいろに骨を折つたあげく、やうやう石を摘み出して、非常な滿足のうちにまた脊高く蹴つて行つたくらゐだから——小石と一しよに吹き溜まりの落葉が茶に銀に散亂する。あまり玄妙に石が光るので、よく見たら、その小石だと思つたのは壜の王冠栓だつた。おつかひに行く途中に相違ない。少年はうちを出た時から一つの心願として道ぢう蹴りけりこゝまで來たものだらう。

旅は流動するセンチメンタリズムだ。つねにいさゝかの童心を伴ふ。

この私の童心に「コペンハアゲンの朝の廣場(プラザ)を小石を蹴つてゆく丁抹の少年」は何といふ歡迎すべき「時と處」の映像であつたらう！　じつさいその、青い服にかゝあき色の半ずぼん(ニッカアス)をはいた、貧しい、けれど清々しい少年の姿は、私にとつていつも完全にコペンハアゲンを說明し代表し、コペンハアゲンそれ自身でさへあり得るのだ。

一たいこんな凡庸(カマンプレイス)な街上風景の片鱗ほど、力づよく旅人を打つものはあるまい。旅にゐると誰でも詩人だからだ。あるひは、すくなくとも詩人に近いほど羸弱な感電體になつてゐる。それは、周圍に活動する實社會とは直接何らの關係もない淋しさでもあらう。だから旅行者はみんな發作的に詩人であると私は主張する。

What is IT?

私は見る。それぞれのEN・ROUTEに動きまはつてゐる男と女と自動車。それらの發散するおびたゞしい歷史と清新と自負と制度の香。C'est tout de même? しかし、この瞬間、彼らが何を思ひ、どんな人生をそのうしろに引きずり、底になにが沈澱してゐることだらう？——すると、色彩と系統をまつたく異にした一有機體に、私はいま直面してゐる探檢意識を感ぜずにはゐられない。男は足早に、女は食料品の籠をかゝへて飾り窓を覗き、自動車は義務としてこれら善良な市民と、より善良な市民の神經とを絕えずおびやかしながら、すべてが樂しく平和に——コペンハーゲンはこんなにも秋の靜物だつた。

その「彼はすこしの土地を買つた」市の、こゝは最も古い區域の中央「王の新市場(コンゲンス・ニウトルフ)」といふ名の一つの廣場である。

What is THIS?

コペンハアゲンは私たちのまはりにある。

ふたゝび歷史と新鮮と自負と制度と——縮圖英吉利(ミニアチュア・イングランド)のにほひがぷんぷん鼻をついて、北國らしく重々しい空氣に農民的な女の頰の赤さ。それに、いふところの國民文化の高い國だけに何もかもが智的——智的(インテリヂェント)な牛乳と智的な乾酪、智的な玉子と智的

な——とにかく、ながらく表面から忘れられてゐた種族が、近代産業革命の餘波にあほられて片隅にうかびあがり、「學術應用」のあらゆる小完成を實行——それはじつにアングロ・サクソンに酷似した slow but sure な實行力だ——して今やみづからの經營にすつかり陶醉しきつてゐる光景を眼のあたりに發見してゐる私達のすぐ横手、つまりこの「あたらしい王さまの市場」から一ぽんの狹い往來が左へ延びて、凹凸のはげしい石疊・古風な構への家々・地下室から鋏の聞こえる床屋・作り物のバナヽを軒いつぱいに吊るした水菓子屋・そのとなりのやうやく身體がはいるくらゐの露路へ夢のやうにぼやけてゆく老婆の杖・瀬戸物の店に出てゐる日本の Hotei・朝から夕方のやうな紫の半闇・ゆつくりと一歩々々を味はふやうにあるきまはつてゐる北歐哲人のむれ・そして、建物の屋根を斜めに辷る陽ざしが、反對側の二階から上だけを明るく染め出してゐるコンゲンスガアドの町——「こぺんはあげん」は身邊のどこにでも轉がつてゐる。

むかし、ロスキルドのアブサロン僧正といふ坊さんが、こゝバルチツク海の咽喉ズイランド島に「すこしの土地を買つた」。この「彼はすこしの土地を買つた——He Bought a Bit of Land」といふ文句を丁抹語でいふと、取りも直さずクブンハアフンで、かくのごとく一つの完全な意味をもつくらゐの比較的長い文章だから、このデンマアクの首府ほど各國語によつてそれぞれ自國風に異なつた發音で呼ばれてゐるところはあるまい。それがいま人口七十萬を擁してアマゲル島の一部に股がり、その市政、その博物館、その教育機關と社會的施設——。

What is THAT?

じつに色んなものが私の視野を出たりはいつたりする。

まづ、歌劇役者のやうな伊達者の若紳士が、白の手袋に白いスパッツを着用し、舞臺の親王さまみたいの胸を張つて私たちの眞向ひの絹絲屋へ消えた——と思つたらすぐ、今度は帽子なしで羽ばたきを手に店頭へあらはれ、職業的ものしづかさでそこらの塵埃を拂ひ出した——のや、蕪と玉葱と百姓を滿載した FORD——フォウドは何國でも蕪と玉葱と百姓のほか滿載しない——や、輕業用みたいにばかにせいの高い自轉車や、犬や坊さんや兵士や、やがて、惡臭とゝもに一輛の手押車がきた。羊か何かの剝いだばかりの皮を山のやうに積んで、車輪から敷石まで血がぼたぼた落ちてゐる。私達が思はず鼻を覆つたら、車の主の、焦茶色の僧服みたいなものを着た、ベトウヴェンのやうな顏の老人がひどく私に make-face して行つた。が、間もなく彼は、そこの角で制服の偉丈夫に掴まつてぺこぺこおじ

ぎしてゐる。そんな物を運ぶには裏町を通れ——とでも叱られてゐるものとみえる。制服の偉丈夫なら巡査にきまつてるから——。

HAHAGH!

さうすると、空の色をうつして薄ぐらい街路を、眞夏の秋風に吹かれて紙屑が走り、空のいろを映してうす暗い顔の北國人が右に左にすれちがひ、往き來るさの車馬と女の頬の農民的な赤さ——この丁抹的雰圍のまんなか、正面クリスチヤン五世の騎馬像（ヘステン）に病人のやうな弱々しい陽脚がそゝいで、その寒い影のなかで、花屋の老婆が奇麗な無關心さで客の老婆に花束を渡してゐる。

What is IT?

What is THIS?

What is THAT?

つねにあまりに空を意識してゐる街——それがこぺんはあげんだ。

女の頬の赤さと青年の眼の碧さと。

農民的な叡智。

旅人はこの可愛い社會に親しみ得る。

繪のない繪本

夕方、當てもなく場末の通りを歩きまはつたことがあつた。ヘルゴランス街（ガーデ）をちよつと這入つた横町に、古道具店——とより屑屋といつたはうが適確なレクトル・エケクランツの家がある。レクトル・エケクランツは猶太系のでんきあく人で、漆黒の髪漆黒のひげと水腫れのした咽喉と美しい娘とを持つてゐた。そして、彼の商店兼住宅は、およそ近代人とその生活に用途のない、想像し得る限りのすべての物品をもつて文字どほりに充滿してゐた。クリスチヤン五世の吸物（スウプ）皿も公爵夫人の便器も大學生の肌着も、どこかの會堂から盜み出されたらしい緑いろの塗りの剝げた木製の燭台も、貧民窟からさへ拂ひ下げになつた底のとれた水差しも、兵卒の肩章も、石油こんろも大椅子も寢台掛けも、みんな同じ強さの愛着でレクトル・エケクランツを惹くとみえて、そこでは、それらのすべてがめいめい過去と地位を自慢して大聲に話しあつてゐた。そのわんわんいふ聲が暗い店の空間を占領して、四隅ではいつも魑魅魍魎が會議をひらいてゐた。が、この一見こんとんとして猥雜・病菌・不具・古着の巣窟みたいなレクトル・エケクランツの店は、不思議とそれだけでひとつの調和を出してゐた。その効果は成功だつた。レ

クトル・エケクランツ自身が猥雑・病菌・不具・古蒼を兼備して、彼の商品たる魑魅魍魎のひとりに化けすまし、おどろくべき安穏さ（アト・ホウム）でそれらを統率してしゐたからだ。

じつさい、貰物の黒圓帽をかぶつて貰物の煙管をくわへたレクトル・エケクランツは彈ね（スプリング）のない貰物の大椅子に腰を下ろして——つまり貰物のひとつになり切つて眼のまへの狭い往來を眺めくらしてゐることが多かつた。私たちは何度となくこゝを行つたり來たりした。それは巾三尺ほどの延々たる露路で、何世紀にも決して日光のあたることはないらしかつた。だから、しぢう濡れてゐる敷石から馬尿のにほひが鼻をついて、大きな銀蠅が歡聲をあげて戀を營んでゐた。日がな一にちレクトル・エケクランツの水つぽい瞳（め）が凝視してゐる壁は、おもて通りに入口をもつ賣春宿ホテル・ノルヂスカの横ばらで、そこには雨と風と時間の汚點（しみ）が狂的な壁畫を習作してゐた。

その晩私たちは、レクトル・エケクランツの店の赤つぽい電燈の灯かげで一冊の書物を買つた。何べん目かに前を通つたとき、佛蘭西風の女用上靴と一しよに端近の床にころがつてゐるのを發見したのだが、這入つて、默つて手に取つてみると、私は妙に身體ぢうがしいんと鳴りをしづめるを感じた。それは西班牙語の細字で書かれた十二世紀の合唱集（アンチフオナリイ）だつた。各頁とも花のやうな肉筆に埋まつて、ふるい昔の誰かの驚嘆すべき努力が褪色したいんくのあとに見られた。表紙は動物の皮らしかつた。それに唐草（ドラマスク）の模様があつて、まはりに眞鍮の鋲が光つてゐた。ゴセツク式の大きな釦金（クラスプ）がそのまゝ製本の役をつとめてゐた。

かういふと異常な掘り出し物のやうに聞こえるけれど、ほんものか何うか私は知らない。その、踊つてゐるやうな讀みにくい字を西班牙語だといつたのも、また、この本は十二世紀に出來たのだと請合つたのも、賣つた當人レクトル・エケクランツの鬚だらけな口ひとつだつたからだ。だから、あるひは全然旅行者向きの作りものだつたかも知れない。全く、十二世紀のスペインの合唱本がこのコペンハアゲンの裏まちに、しかも安賣りに出てゐるといふことはちよつと考へられない。が、私は何でも構はないのだ。たゞこの古い——もしくは古いやうに見える——書物を、こぺんはあげんヘルゴランツ街の露路（ガアド）の奥のレクトル・エケクランツの家で手に入れたといふ場面だけが私を滿足させてくれる。ほかのことは何うでもいゝ。But still 私としては彼の言を信じてゐたい。なにしろ、赤黄いろい電燈のひかりのなかで、その照明にグロテスクに隈どられた顔とともに、水腫れのした咽喉を振り立てながら、あのレクトル・エケクランツ老爺が、その品物の貴なることを肯定して、かうつ

づけさきにうなづいたのだから——。
『AH! ウヰ! ウヰ・ウヰ・ムシユウ——。』
かれは奇怪な——たぶん十二世紀の——ふらんす語を話した。

で、この十二世紀のすぺいん語の合唱本である。その眞僞は第二として、私はこれがコペンハアゲンを生きて來たといふ一事を知つてゐる。なぜなら、コペンハアゲンそのものが「こまかい花文字でべつたり書かれて、唐草(あらべすく)模様の獸皮の表紙に眞鍮の鋲を打ち、ゴセツクふうの太い釦金で綴ぢてある」一卷の美裝史書だからだ。

そして十二世紀! こぺんはあげんは十二世紀に根をおろした市街だ。もつともその後一度火事で大半燒けたけれど。

けれど、私の概念において、この一書はたしかにコペンハアゲンの化身に相違ない。私たちはいつでもその頁(ペイヂ)を繰つて、一枚ごとにまざまざと北のアテネの風物と生活を讀むことが出來るだらうから——それは私達にとつて繪のない繪本なのだ。いまもこれをところどころくりひろげていかう。

私のコペンハアゲンだ。

ひらく。

第一頁。

新しい王様の市場(コンゲンスニユウトルフ)。馬像(ヘステン)の主クリスチヤン五世がつくつた廣場(プラツ)。そのむかう側のシヤアロツテンボルグ宮殿は五世の后シヤアロツト・アメリアの記念。現今は帝室美術館。

第二頁

美術館に近い廣場のはしに帝室劇場。代表的北歐ルネザンス建築。そこの大廊下にあるサラ・ベルナアルの扮したオフイリアの浮彫りは世界的に有名だ。

第三頁。

クリスチヤンボルグ宮殿。いまの國會議事堂。灰いろの石の威厳ある立體。

ある頁。

トルワルゼン美術館。

ベルテル・トルワルゼンは北歐羅巴の生んだ最大——すくなくとも量だけでは——の彫刻家で、伊太利に遊び、その影響の多い作をたくさん殘してゐる。この美術館は彼の生涯の仕事のほとんど全部があつまつてゐて、大きな二階建ての廊下から各室をうづめつくしてゐる大小の彫刻がすべて彼ひとりの手に成つたものだといふから、まづその工業的な生産力に驚かされる。希臘神話と聖書に取材したもの多く、中庭にはその精力的多産家の墓があり、墓のうへに花壇がつくられ——何しろ往けど

もゆけども靜止する人體裸像の林で、出る頃には誰でもその神話中の一人物のやうにへうべうとしてしまふやうに出來てゐる橋を渡ると名物魚市場だ。雜色的な人ごみ。空のいろを映して黑い河の水と、低い古い建物を背景に、それは玄怪きわまる言語と服裝と女小供と海産物とが、じつに縱橫に無秩序に交錯する「北海の活畫」である。

また或る頁。

堀割りにそつて曲りくねつたボルスガアドのでこぼこ道を辿ることとしばし、またクニッペルスボロの橋を過ぎれば、蕭々・貧困・荒廢が何世紀かの渦をまく寥々しい裏町アナガアドの通りだ。

ユニイクな建造物がある——われらが救ひ主の教會（フォルフレルセルス・キルケ）。風變りな二八〇呎の高塔。一六一七年、時の建築家ピンスボルグの建てたもので、塔の外側を奇妙な階段が螺旋狀に卷いて頂上に達してゐる。この螺線段が、塔の内部でなしにそとについて、太陽をめがけて昇つてゐる、つまり太陽を憚れないものだ、じつに恐しいほど大それた設計である。各々方、左樣では御座らぬか——といふんで、當時の人たちが寄つてたかつてさんざんピンスボルグをきめつけて異端者あつかひしたので、可哀さうなピンスボルグはそれを苦に病んだ末、たうとうこの自分の建てた塔のてつぺんから地上へ身を投げて儚ない最後をとげたとのこと。いかにも十七世紀らしい話しだ。そのピンスボルグの怨靈か何うかは知らないが、塔上の立像が、一八〇一年にネルソンの砲射を受けて片脚すつ飛んでしまひ、それからこつち片つぽだけかはりに木の義足をつけてゐる。

また或る頁。

水晶街の角にも有名な三位一體教會の圓塔といふのがある。このはうは外部にもなかにも階段はなく、たゞ急傾斜の道が内側をまはつて上に出てゐる。傳說に曰く。ピイタア大帝——ついでだが、この人ほどいたるところに色んな足あとを遺してる大帝もない——そのピイタア大帝、四頭立ての馬車を驅つて塔内を驅けあがる、と。

ほかの頁。

TIVOLI。特色ある北國の遊園。ひろい地域に壯麗な樹木・芝生・音樂堂・劇場——アポロ、スカラ、パレス等——がちらばり、東西に二大料理店あり。アレナとウイヴエルス。後者は交響樂に名をとつてゐるが、食べさせるものは兩方ともかなりに乙（シック）。

また他の頁。

市の西北にロウゼンボルグ城あり。城外の庭園に「世界の子

の友」アンデルセンの像。

また他の頁。

コペンハアゲンの人ぜんたいがみんな自分のものとして愛してゐるといふ市役所(ラアドハス)。市民的に宏大な廣間(ホウル)に用のなさそうな人影がちらほら動いて、「市役所」の感じはすこしもない。宛然「市樂所」の空氣だ。横へ出たところに植込みをめぐらしたあき地があつて、雪のやうに眞つ白に鳩が下りてゐる。母や姉らしい人につれられた子供達が餌をやつてゐるのだ。

すぐそばの通りにふるい大きな家がある。

多くの風雨を知つてゐるらしい老齢の建物だ。それを「老人の都會(シテイ・オヴ・オウルド・エイヂ)」と呼ぶ。名の示すごとく養老院で、收容者のなかで手の動くものは何かの手工藝をして一週間一クロウネづゝ貰ふ。一クロウネは約わが半圓である。私は想像する――あの窓からこの廣場の鳩と子供のむれを見おろしながら、覺束ない指さきで細工物にいそしむ、やつと生きてゐるやうな老人たち。彼らにとつて一週一クロウネは何んなにか待たれる享樂であり贅澤であらう！　何故ならお爺さんはそれでたばこを買へるし、お婆さんは、日曜着の襟のまはりに飾絹(レイス)を飾つたり、それとも、好きなおぢいさんへ煙草を贈ることも出來やうから――。

醫師、床屋、賣店、庭園、演藝場、その他、日常生活に必要なすべてがこのなかに完備してゐて、年老いた人達は一歩もそとへ出ないで濟む。それじしんさまざまな小事件と感情とをつゝむ一つの社會であらう。だから「老齢の都」といふ。この「都會」の窓から、その老市民たちが弱々しい手をふる。市役所の空地には子供と鳩との歡呼の聲がある。すると、これらに應(こた)へて、ひとりのせいの高い紳士が、そこの町角に立ち停まつて笑ひながら帽子に手をやつてゐる。王様だ。コペンハアゲンの街上で人なみ外れて長身の紳士に出會つたら、現陛下クリスチヤン十世と思つて間違ひない。じつさい陛下は普通人より首ひとつ高く、そして暇さへあるとひとりで町を歩くのが、その何よりの Royal hobby だからだ――かうしてこの「老人の町」と市役所の鳩と子供らと、微笑する巨人王クリスチヤン十世陛下とを結びつけてそこに一風景を心描するとき、私は、コペンハアゲンの、といふより丁抹の全生活をはつきりと見るやうな氣がする。

また他の頁。

夜。一哩の長線道(ランゲリイネ)を自由港まで散歩。片側は城砦。いつぱうは海峡の水。コペンハアゲン訪問者の忘れてならない一夕のアドヴエンチユアだ。

附錄の1。

七哩北に丁抹の國家的誇りのリングビイ教育町。グルンドトリッグの國民高等學校・リングビイ農業學校・丁抹國立農民博物館SETC。

附錄の2。

二日がけでフイエン島のオデンス市へ。バングス・ボデル街のかどにH・Cアンデルセンの生家。いまは記念博物館。小父さん小母さんの聖地（パレスタイン）だけに日本の「おぢさん」巖谷小波、久留島武彥なんかといふ名刺も散見。グラアブルダ・トルフ街郵便局のそばに、またアンデルセンの像。

附錄の3。

買物。コペンハアゲンには世界的に權威ある店が二軒ある。ともに陶器店で、ロウヤル・ボウセリンとケエレル。妻は、日本へ歸つてからお菓子鉢にしたいといつて、オステルガアドのケエレルで波斯青（ペルシャン・ブルウ）の一器をもとめる。

ついでに、旅行中彼女の集めてゐるものを列擧すると、第一に、方々の郷土服を着けた人形。第二に各地の手提げ（ハンド・バッグ）、第三に——これはぜひ特筆大書を要する——各國婦人の美點」

私の「趣味の蒐集」——舊煙草の容箱。見聞。一ぷいはくくなちしきに 各國文明の長所。喫煙と嗅煙。

附錄の4。

でんまあく印象。

滿足せる少數の牛と、最新式耕作機具と、健康な食慾と文藝物の家庭圖書館——おもに史劇全集——とを有つ、由緒ある小農の一家族。

コペンハアゲンは、スカンジナヴィアの「奥の細道」における白河の關だ。

女の頬の赤さと青年の眼の碧さと。

海峽の風

Helsingør は沙翁が發音どほりに Elsinor と書いてから、この名によつて多く知られてゐるデンマアク海峽の突鼻の町で、一脈のふるい水をへだてて瑞典のホルシングボルグに對してゐる。歩きにくい敷石の通りと、黑ずんだ昔のままの塀と、塀の根元の雜草のしげりと、何かの間違ひでいまだに存在してゐるやうな家並みと、それからクロンボルグの古城とを有つ、傳說そのもののやうに歸港的な僻陬の小市だ。

が、このエルシノアの町へ時代を逆に杖をひく旅人の絕えないのは、その蒼然たる古色味の雰氣でもなければ、クロンボルグ城の特徵ある建築でもない。たゞここと シエキスピアとを結

びつける因緣ばなしにすぎないんだが、エルシノアには、ハムレットのお父さんなる王様の幽靈が出たといふ現場と、もう一つ「ハムレットの墓」と稱する珍物があるのだ。

雨が降つてゐた。日光のなかを日光といつしよにふる小雨だ。それが歩きにくい敷石と黑ずんだ塀と、その根元の雜草を濡らすのを、いきなり飛びこんだ名だけ洒落てる路傍の料理店カフエ・プロムナードの窓からぼんやり眺めながら、のつぺりした美男給仕人の運んでくる田舍料理をつついたのち、私たちは、雨のなかをバアバリイに身を固めて先づクロンボルグの城へ出かけた。

せまい道りを幾つか曲つて、やがてだんだん海へ近づいてゆくと、老樹の並木路を出はづれたところに、草と堀と橋と石垣に埋もたれ古城があつた。堀の水は青く淀んで、雨脚が小さな波紋をひろげてゐた。第一の城壁の上から高い木の枝が覗いて、そのむこうに太いずんぐりした塔が水氣にぼやけてゐた。橋には大きな釘の頭が赤く錆びて、欄干は、人間の自己保存の本能を語つて訪問者の記念のナイフのあとを一ぱい見せてゐた。

G・H・W――NYC・USA。
J、S、B――Epping, England. Gune 2, 1911.
A・L――ダンジク獨逸。
その他無數。

橋をわたると鐵の城門だつた。上に「1630」と大きく彫つてある。ちやうど守備兵の交替時間で、中庭で軍樂隊の奏樂につれて、奇妙な軍服の兵士たちが木製の機械人形のやうに直線的に四肢を振つて動きまはつてゐた。それを近處の子供たちや遊覽客がかこんで見物してゐた。私たちが這入つてゆくと、樂隊も兵卒も顏をこつちへ向けて珍しさうにまじまじと見守つてゐた。

第二の堀と橋を過ぎると、お城は屋根が綺麗だつた。銅板がすつかり綠りに變色して、それを日光とともに小雨が濡らしてゐた。

門を出て、雨中の山坂道を右手へのぼつていくと、潮鳴りの音の聞こえる丘の上へ出た。

舊式な大砲が幾つもいくつも並んで、草むらに砂利がまじつてゐた。赤煉瓦で築いて、うへに土を盛つて草を生やした土手のやうなものがかなり長くつゞいてゐる。ハムレットのお父さんの幽靈の出たところは、その土手が砲列へ近く切れてゐる端しの、右側の地點である。赤土に雨がしみて、草の葉が泥にまみれて倒れてゐる。風に海の香ひがする。ばらばらと雨滴が大きくなつた。ぢつと立ち停まつてゐると、ハムレットの暗い鉾

台面が眼にうかぶ。私たちはいまその現場にゐるのだ。海峡の沖に團々と雲が流れて、あたまのすぐうへで風が唸つてゐる。鳥かと思つて見たら、砲台の柱に高く、雨を吸つて重い丁抹の旗がはためいてゐた。

こゝでも、木柵の肌は遊子のナイフのあとで一ぱいだ。

G・H・W――NYC・USA

J、S、B―― Epping, England. June 2.1911.

A・L――ダンジク獨逸。

その他無數。

王子ハムレットの墓は、城からすこし離れたマレニストの森のなかにある。大木の根に三角形の石をほうり出したばかりの、いかにも「ハムレットの墓」らしいあやふやなもので、屋根みたいな三角の兩面に、英吉利と丁抹の帝室紋章がほりつけてあつた。ハムレットの墓といふより沙翁の記念碑と稱すべきだらうが、それにしてもいさゝか賴朝公十八才の頭蓋骨の感がないでもない。が、旅行者に批判は必要ない。すなはち低徊顧望よろしく、雨に打たれて森のなかをうろついたわけだが、何でも記錄によると、一五八六年に、英吉利から渡海してきて時の丁抹王フレデリック二世の御前で芝居をした一座のなかに、ひとりの若い役者がゐて、こゝでかれが三百年前の古い物語を聞いて書いたのがハムレットの一篇、その年少の俳優こそ沙翁だつたといふ。ぢつたい丁抹といぎりすは昔からその皇族の血縁關係なんかもずゐぶん入りくんでゐて、近い話しが、前丁抹皇帝クリスチャン九世に三人の內親王があつたが、この姉妹の三王女のうち、ひとりだけ生國にとゞまつてデンマアクのクヰイン・ルイズとなり、他は後日英吉利のクヰイン・アレキサンドラ、もう一人は露西亞のダグマア女皇陛下と呼ばれるやうになつた。そして、デンマアクのクヰイン・ルイズもいぎりすのクヰイン・アレキサンドラも既に世を去つてしまつたが、ロシアのダグマア―― Emprcs Dagmar のみはまだ存命してゐる。露西亞名をマリア・フエタロウナといつて今年八十二才。この人こそは、先年のロシヤ革命に、その頃またエカテリンブルグといつたいまのスウエルドロフスクで共產軍の血祭りにあげられたロマノフ王朝最後の皇帝ニコライ二世の生母である。

エルシノアからの歸途、自動車は「北歐リヴイラ」の名ある坦々たる海岸の道を走るんだが、スネツケルステンからニヴア、ラングステツドからスコツズボルグと宿場を縫つてドライブしてくると、間もなくクラツペンボルグといふ小さな村へさしかかる。さうしたら氣をつけて、右の傾斜面に建つてゐる一軒の灰色の住宅を見逃さないことだ。立木に取りまかれてゐるが、

そのすきまから悲しい窓が覗いて、私の通つたときはすつかりレイスのカアテンが垂れ、人の氣はいもなかつた。

これがダグマア前露女皇、いまのマリア・フエタロウナの家で、忠臣のコザツクたちに守られて晩年を送つてゐるんだが、まぎらすことの出來ない息子や孫たちの悲慘な死が老ひたるたましひを覆して、彼女はすこし精神に異常をきたしてゐるといふ。ハムレツトよりもつと深刻な人生と國家興亡の悲劇であると私は思つた。

私達は西比利亞をとほつてスウエルドロフスクを知つてゐる。私の紀行にはかうある。

もとのエカテリンブルグだ。ニコライ二世はじめロマノフ一家が殺された町である。寶石アレキサンドリアを賣つてゐる。皇帝の涙が凝り固まつてゐるやうで、淋しい石だ。

ウラルの風。

――と。いまかうしてクラツペンボルグのマリア・フエタロウナの家のまへに立つてゐると、「運命の老女」が朝夕あそこの窓から見るであらう浪と村と人々の生活――その小さな世の中には何の移りかはりはなくても、何かしらそこに、マリア・フエタロウナを一生のかなしみから脱却させ、諦めさせ、慰めるものがなければならないやうな氣がする。

私はあたりを見まはした。

低い押戸の門の下に、やはり雜草が雨に叩かれてゐるだけ――

――海峽の風。

邸内に咲いてゐた野生の花。

きつねのちようちん。

たんぽぽ。

くろうば。

日本の春の花だ。

買ひ出しにでも行つたとみえて、女中らしい若い女がひとり、大きな紙包みを抱えて私の横からさつさと裏門のはうへ廻つて行つた。黒い木綿の靴下にべつたりはねが上つてゐた。

雨後・坂道・寒空

もつと北へのぼらう――ノルウエイへ。

そこで、薄暮。

うら淋しいクヴスタスプルンの波止場からS・S王(コンゲ)ホウコン號へ乘りこむ。

船客。

あめりか人の漫遊客夫婦二組。遠く北の内地へ狩獵にいくといふ英吉利の老貴族とその從者。諾威へ歸る兄弟の實業家。ふ

らんす話に「磨きをかける」ため巴里へ行つてきたベルゲンの富豪のお婆さん。ブダペストから來た埃及人の醫學生。亞米利加ネブラスカ州から小さな錦を飾つていま故郷の土を踏まうとしてゐる移民の一家族。猶太人、陸軍士官、この邊を打つて廻る歌劇團、金ぴかの指輪だらけの手で安煙草をふかしつゞける其の一行のプリ・マドンナ。彼女の鼻のそばかす。家畜のやうな北歐の男と女と子供の大軍。貧しい荷物の山。

カデガツト海。

たちまち、霧に濡れて食欲的に新鮮な小群島（アウテベナヨ）が私たちのまはりに。

北へ北へと機關が唸つて鷗が追ふ。これからオスロまで海上一晝夜の旅。やがて諾威クリスチヤニアのフイヨルドが私たちを迎へるだらう。

が、いまはこの白夜の暗黒を點綴して、船にちかくあるひは遠く、わだかまり、伸び上り、寢そべり、さゝやき合ひ、忍び笑ひし、爭つてうしろへ流れてゆく島・島・島の連續だけだ。

灯を吸つて赤かつたコペンハアゲンの空は間もなく消えた。エルシノアの砲臺にぽつちり見えてゐた旗も、一せいに斜めに倒れてゐた砂原の小松林も、段々に碎ける浪の線も、もう完全に過去へ歿した。たゞ、しらじらとした殘光を海ぜんたいに反映する空の下を、コング・ホウコン號の吐く煙りがながく揺曳して、水を割いたあとが一本、雪道のやうにはるかに光つてゐる。

そして、島。

神出し、鬼沒し、隱見する多嶋。

食後――ついでだが、北の食事は奇拔な儀式をもつて開始される。まづ、何らの心的用意なしに食堂へ這入るすべての外國人を驚愕させるに足るほど、一歩踏みこむや否、中央卓子の周圍に行はれてゐるひとつの不可思議な光景が眼を打つのだ。それは、ありとあらゆる、およそ人間の腦力で考へ得る限りの動植物――鑛物はないやうだつた――の hors d'auvre を幾種といはずテエブルの上へ開陳してあるのを、めいめい皿とフオウクを手に、眼に異常な選擇意識を輝かして勝手にとつてきて食べるのである。かういふと何の變哲もないやうだが、これが實際に當ると仲々の訓練と勇氣と進取の氣象を要する。何しろ、食堂ぢうの人が立つてきて、われなにを飲み――もつとも飲み物はないが――何をくらはんかと狹い場所で堂々めぐりをはじめるんだから、何となく本能をさらけ出すやうで面映くもあるし、さうかと言つて、暇所に事務的であるためにはあまりに雜齊してゐる。こゝにおいてか、いぎりすの[illegible]氏は不器用な手つき

で一片のトマトのために大の男——しかも紳士！——が汗をかき、あめりかのB氏は瞳をひらめかしてあれかこれかと徒らに検査して歩き、C夫人は、この衆人環視のなかでいかにして最も上品に一匹の鯛——すでに死去して罐詰にされてるやつ——をおのが皿の上に釣りあげるべきかとひそかに苦悩し、諾威産のD氏はそれらを尻目に逸早く自己の欲するものを發見し捕獲し、この群集に揉まれもまれて一日本婦人——彼女——は食卓へ近づけずに悲鳴をあげ、それを救助すべく良人なる日本人がフオウクを武器に持前の軍國主義を發揮して人の足を踏み、さういふうちにも青菜は刻々に減り、腸詰は見るみる姿をひそめ、人はふえる一ぱう——と言つたやうに、はじめての人は誰でも度膽を抜かれる。そしてその間、幾多の悲喜劇を生じて、この結末果して何うなることか？　と手に汗を握つてゐると、そこはよくしたもので、どの人さわがせなオウドウヴルが全滅すると同時に、各人安心して騒動もしづまり、秩序は回復し、それからのちはけろりとしてこゝに初めて他のどこの文明國とも同じ食事の順序が運行されるのだが、これも慣れてみるとなかなか趣きのあるもので、私の思ふところでは、この習慣は、海賊時代にぶんどり品を立食して大いに盛氣を鼓舞した頃からの傳統に相違ない。しかし、食前にあれだけの競爭をふるふんだから、自然運動にもなつて近代人にはことに適してゐるだらう。北のはうのオウドウヴル一ぱんにこのやり方だから、氣取つて内氣に構へてゐたり、平和論者として冷静に客觀してゐたりすると、これを相當さきに食べさせる氣であとは比較的簡單なため、あわれ翌朝まで空腹を押さへる運命に立ちいたらなければならない。

たゞ一言、鰯に似た鹽づけの魚で、ブレスリンといふ怪物がある。一試の價値あり。美味。その他得體の知れないものには注意を要す。モットウとして、經驗ある隣人の皿を白眼んでそれにならふこと。

で、食後。

甲板。

白い夜にキャンヴス張りの寢椅子を並べて、おそくまで語る。彼女と私と、狩りに行くいぎりすの老貴族とベルガンの女富豪と、あめりかの觀光客と埃及人の醫學生と。

世界のあらゆる隠れた國々の物語に、星がまたゝき、潮さゐが船をつゝみ、時鐘が鳴りわたつて、ときのうつるのを忘れる。

翌日。

ちよつと諾威のホルテン港へ寄る。海軍根據地のあるとこ

ろだ。飛行機がマストとすれすれに船をかすめる。ひくい丘の中腹にお菓子のやうな色彩的な家の散在。無線電信の杵に大きな鳥が何羽も群れとんでゐる。

ミュレル・トュルベンテー

ミュレル・トュルベンテー

聲がする。はだしの子供たちが船の下の棧橋で何か呼び賣りしてゐるのだ。

みゆれる・とゆるべんてー

一種の櫻んぼである。ミュレルがさくらんぼなのか、それともトュルベンテがそれなのか、とにかく、

櫻んぼ（ミュレル・トュルベンテ）一束十錢！

といふところであらう。彼らじしん、船の入港するのを山の上から見て、そこで早速そこらに成つてゐたのを摘んで賣りに來たものに相違ない。いさゝかの木の實を大きな葉へのせて、昂奮に眼の色を變へながら右往左往してゐる。

ミュレル・トュルベンテ！

ミュウ――レル・トュルベエインテ！

That's that

フイヨルドへ這入る。木の生えた岩石の島がちらばつて、ジグ・ザグの小半島が無數に突出し、如何すべからざる角度に附側から迫つてゐる。ところどころに石油のタンクが見える。低い島を浪が洗つて、船は、そのあひだをかわして進む。高い寒い空、無そのものゝやうに澄みきつた大氣、赤と青と黄色の別莊、モウタ・ボウトの上から手を振つていく人。すつかり秋――といふよりむしろ冬のはじめのひやりとする氣候だ。

早朝から一日いつぱいフイヨルドは舷側について走る。

夕方ちかくオスロ。

OSLO――もとのクリスチヤニア。諾威の首府だ。タキシがないので大學通りのホテルまで古風な馬車を驅る。

雨後。坂みち。さむぞら。

何といふ北へ近い感じであらう！なんたる、生れのいゝ孤兒のやうな、氣品ある「もののあはれ」がこのオスロであらう！

そこへ、夜だ。暮れるともなくぼんやりと明るい北の白夜――さうすると、街角に立つ人影も、尾を垂れて小路へ消える犬も、港の起重機のかすかなひゞきも、すべてがひとつの浪漫のなかに解けこんで、人はごく自然に、最も陰鬱な人生のトラジディさへ肯定出來る心狀（ムウド）に落ちるのだ。

雨後。坂みち。さむぞら。

以下、オスロ探檢記。

一ばん先にブロガアドといふ場末のとある貸丁へ行つてみ

る。十五世紀に出來た町と、家と、人と風俗がそのまゝに殘つてゐるといふのだ。アケルス河の小流れを渡るとすぐのところに、珍奇な木造の小家屋が、すつかり考へこんで傾いて並んでゐる狹い町がある。これだ。歩道には大きな自然石が出鱈目に敷かれて、漁村のやうな原始的な建物が櫛比してゐる。通りの巾は一間もあらうか。それが、じつさい十五世紀の眼拔きの場所はかうであつたに相違ないと思はれるほど、クエイントな商店街の形式をそなへてゐるんだから、十五世紀のメトロポリス！ What a find!といふんで、大いに勇んだ私たちがどんどん這入りこんで行かうとすると、そばの家の軒をくゞつてばかにせいの高い若者があらはれ出た。これも確かに十五世紀の人物とみえて、びつくりするやうな大男で、何かしきりに話しかけるんだが、十五世紀にしろ現代にしろ、諾威語は私には少しも通じない。で、ことばの判らない時の用意にもと絶えず貯藏してある奥の手を出して、例のにやにやをやつてみたが、先方には一から反響しないどころか、しまひには自分でいらいらして何やら耳のそばで我鳴り立てる仕末。巨人だから聲も大きい。しかも、ゆつくり言へばわからない筈はないとでも思つてるらしく、一語々々はつきり句切つて嚙んで含めるやうに言ふんだが、早く言つたつて遲くいつたつて、知らない言葉は解りつこない。何うも馬鹿なやつで、世界ぢう諾威語をしやべつてると信じてるらしい。いつまで經つてもこつちがへらへら笑つてるもんだから、十五世紀の住人はたうとう肝癪を起して一さう大聲を發する。すると、海のむかうからノルマン族かゲルマン族でも攻めて來たと思つたのだらう。家といふ家から十五世紀の老若男女と猫と雜物が飛び出して來て、見るとそこに、一組の黄色い夫婦が不得要領ににこにこしてゐるのを發見したので、さすがに今度は十五世紀のはうがぎよつとしたらしく、一同鳴りをひそめて凝視してゐる。よつぽど引つ返して通辯兼護衛でも雇つて出直さうかと考へたが、私だつて意味の判然しないことでさうやすやすと追つぱらはれるのは業腹だ。第一、十五世紀の建造物なんかはさらにあるが、ひとつの町として現存してゐるのは珍しい。これあ何とあつても踏みこんでやらう。かう決心して、氣味わるがる彼女を引つぱつて突入しやうとすると、眼のまへの群集がさあつと逃げて、そこへ、最初の若い巨人と、もうひとり中年の男とがひどく英雄的な態度で立ちはだかつた。そして、憤怒の形相もの凄くひとりで勝手に猛り狂つてゐる。

・・・・わ・わ・わ・わ・わあつ！

る・る・る・る——う・るう！

といふやうなことをつゞけさまに喚くのだ。のみならず、驚いたことには、ひとりばしきりに桃色の上着のポケットを叩いてゐる。それも十五世紀のことだからピストルぢやあるまい。ナイフだらう。が、とにかくこれは立派な威嚇である。この聖代に容易ならない事件だ。とは言へ、何だか譯のわからないこと夥しいが、察するところ彼らは、自分たちの町へ外來者、ことに異人種の私達なんかが見物にくるのを好まないらしい。そんならさうと早く言へばいゝのに——もつとも、むこうにしてみれば散々いつたんだらうが、なにもこつちだつてそんなに嫌がるところへ無理に侵入しやうとは言やしない。

『何だ? 君たちは一たいなにを騒いでるんだ? 歸つたらいいんだらう。歸るよ。』

かうなると私も日本語だ。

わ・わ・わ・わ・わあつ!

私は、出來るだけ悠然と彼女の腕をとつて大通りへ退却した。さうしたらやつぱり廿世紀の日光と安心と感謝が私に返つた。が、覗いたゞけで私は滿足してゐる。十五世紀なんて、ちよつと聞くと浪漫的だが、なあに、いやに原色が好きで、氣が利かなくて、不潔で不備で喧嘩早くて、田舍者がみんなわいわい言ふばかりでちつともわけの判らない、要するにおそろしく滅茶苦茶な時代だつたに相違ない。私は現に見てきて、このとほりひどい目にあつたんだから——。

わ・わ・わ・わ・わあつ!

ろ・ろ・ろ・ろ・ろうつ!

Hush! What a hell!

雨後・坂みち・さむぞら。

郊外へ出ると到るところに植民住宅(コロニイ・ハウス)といふのがある。ちひさな田園に小さな家が建つてゐて、一季節四百クロウネで夏のあひだ勞働者の避暑に貸す。そして、廿年經つと家も土地も自分のものになるといふ仕くみ。市の經營である。

ホルメンコウレンの山へ行く途中に市の病院を見る。貧富にかかはらず一日二クロウネ半が、手術から醫藥から看護から間代食費まですべてをふくむ入院料だといふ。植民住宅といひこの病院といひ、スカンヂナヴイアの國々はどこへ行つてもかうした社會施設が完備し發達してゐるのを見る。土地の人は、だから赤化しないんだと威張つてゐる。

野外博物館。オスベルグの海賊船(ヴイキング・シップ)。

雨後・坂みち・さむぞら。

フログネルセテレンとフオクセンコレンの山へのぼる。頂上偉人トマス・ヘフテイの公園寄附した森林公園で、はうばうに

オスロ青年團の建てたヘフテイを記念する石柱がある。白樺、落葉松の木。桔梗、あざみ、しだの類。瀧、小湖、清水のながれ、岩――首に鈴をつけた牛が森の小路で人におどろいてゐる。かみの毛の眞白な子供たち。山上からフイヨルドは一眼だ。鳥瞰する小群島と半島の複雑さ。

カアル・ヨハンス・ガアドのつき當りに宮殿がある。そのまへの公園にイプセンの物で有名な國民劇場。兩側にイプセンとビヨルンソンの像。兩方とも考へぶかさうに直立して、イプセンの肩に落葉が一枚引つかゝつてゐた。

イプセンと言へば、諾威國立博物館本館の階上で、イプセンの書齋を見た。死後そのまゝこゝに移したもので、窓かけも椅子も敷物も茶つぽい緑りの一色、簡素な部屋だ。原稿もすこし保存してある。

ウレウエルストフアイエン街の墓地に、イプセンとビヨルンソンのお墓詣りをする。

廣い墓地内をうろうろしてやうやう探し當てたイプセンの墓は、白樺の疎林を背に生垣と鐵鎖の柵をめぐらした廣さ六坪ほどの芝生の敷地、左右の立木に挾まれて高さ三間あまりの上の尖つた黒い石が立つてゐた。石の表面に鐵槌の彫刻、根にダリヤとデエジイと薔薇と百合の花束をりぼんでしばつた鐵の籠物、下の平石に HENRIK IBSEN と讀める。右に鈴蘭、左に夫人の墓石――枯葉が散りかゝつて、ごみのやうな小さな羽蟲が一めんに飛んでゐた。

すこし離れた小高いところに、ビヨルンソンの墓。これは巨大な平面石が、白樺の大木の下に半分蔦におほはれて倒れてゐる風變りなものだ。階段が上をかこみ、石の旗が下を飾つて、中央に Bjornson, 1833―1910と彫つてある。すべてが立體的に凝つた感じである。

小さな松の林に小鳥が下りて、朝日に萩が咲いてゐた。土の香と秋晴れの微風。參詣の人がちらほら見えて、喪服の女が落葉を鳴らしてゆく。赤や黄の前掛けに手拭ひのやうなものをかぶつた老婆たちが、そこにもこゝにも熊手を持つてそのポプラと白樺の葉を掻いてゐる。私達はいつまでもベンチに腰かけてゐた。

雨後・坂みち・さむぞら――これが私のオスロ風物詩だ。

では、これから瑞典へ出て、ストックホルムへ行かう。

といふので、オスロ・ストックホルムのあひだ退屈な一日の車窓をもつ。

アモトフオス――イダネ――フアエラス――スクラトコフ――スタアナス――オルメ――スワルタ――フアラ――これがみんな停車場の名。すでに名だけで充分なところへ一々とまつ

て、おまけに長く休むんだからやり切れない。

　この間、滿目の耕野に灌漑の水の流るゝあり。田園の少婦跡切りに群立して手を振るあり。林帶小驛に近く、線路工事の小屋がけの點々として落日にきらめくあり。夕餉の仕度ならん、はるか樹間の村屋に炊煙の糸引くあり。紅がら色の出窓に名も知れざる花の土鉢をならべたる農家あり。丘あり橋あり小學校あり。製材所・變壓所・そして製材所。アンテナ・アンテナ・アンテナ。それらを遠景に牛と豚と牧翁の遊歩するあり――で、やうやくにして宵やみとゝもにストックホルム市へ着けば、巷の運河に一〇〇八の燈影がゆらめいて見慣れない電車に灯がついて走り、タキシの溜りへ旅行者とスウツケイスが殺倒し、それを巡査が自信と熟練をもつて整理し、柳の幹に寄席の廣告が貼られ、其の下に戀人を待つて女が立ち、橋をゆるがせてトラツクが過ぎ、遊覽船からラヂオのジヤズが漂ひ、帆柱は交錯し建築はあくまでも直角に――Here we are in STOSKHOLM.

三つの王冠

未知の町を掴まうとする場合、最初の方法として一ばんいゝのは高いところに上つて見おろすことだ。

これに限る。そして、それにはストックホルムは有難いといふわけは、シユルガルデン市街島の丘にスカンセンなる公園兼屋外博物館（オウプン・エア・ミユウジアム）があつて、そこにべらぼうに高いブレダブリクの塔――二四六呎――が立つてゐるから、その頂上へ登るとストックホルムとその近郊は指顧のうちだ。

　ストックホルムのぷろぐらむからこのスカンセンは省略出來ない。北歐諸國の動植物と民族的記錄の寶物がこゝ七十英町の變化に富む地形に集まつてゐて、ことにヴイスビイ島の模形市街、ラップ族の生活狀態などは學術的にも著名である。出かけるには夕方を選ぶといゝ。それも、ダンスプラン瑞典各地方の踊りのある日でなければ駄目だ。この民俗だんすは、女たちが昔ながらの其の土地々々の服裝をつけて踊るんだから一度は見る必要がある。晩餐はイデユンハレン料理店の戶外の一卓でしたゝめること。音樂と夕陽と鄕土服の女給たちが、スウエイデン料理とゝもに一夕の旅愁を慰めるだらう。

　かうして陽の沈みかけるのを待つて、さ、ブレクブーツクの塔へのぼらう。

　塔上、北歐のネロを氣取る。

「北のヴエニス」は脚下にひろがつて、バルチツクの入江とマラレンの湖水。みどりの森野にかこまれた「古い近代都市」のところどころに名ある建物がそびえ、水面に小蒸氣がうかび白

亞の濱を自動車が辿り、この刹那凝然としてゐるストツクホルムのうへに、北の入り日は七色の蜘網を投げる。

寺院が見える。いくつも見える。そのなかで「瑞典のパンテオン」と呼ばれるリダルホルムス教會(キルカ)——騎士の島といふ語意——この歴代の王様を祀つてある壯麗な拜殿の内部、古い木の尖塔(スパイア)の反對側の角のところに、日本先帝陛下を記念し奉る御紋章が安置してある。菊の御紋の周圍に王冠と獅子頭が互ひちがひに鎖狀をなしてゐる金の裝飾、おそれ多くも下にかう書かれてあつた。

H M. Kungleg
de gakon
YOSHIHITO
Dc.25－1926

御崩御の電報がストツクホルムへ達したときこの「騎士島(リダルホルムス)」の寺の鐘は半日市の低空に鳴りひゞいたといふ。私たちが參拜したのはあとのこと、いまはまたスカンセンの塔へ歸らう。

三つの王冠——この國章はどこにでも見受ける——が陽にきらめいてゐる水邊高層の樓閣——ストツクホルムが世界に誇る新築の市役所である。旅人は必ず誰にでも「もう市役所はごらんになりましたか」と訊かれるだらう。正面入口まへの芝生にストリンドベルグの裸身像。拔け上つた額に長髪、兩手を胸に陰慘な顏をして立つてゐる。それはいゝが、この市役所の時計台には大金をかけてユウモラスな仕掛けがしてある。高い壁に小さな戸があつて、支那人みたいななりの人形が番人然と構へてゐるから何かと思つたら、正十二時に、金製(きん)の小人形が四つ、流れるやうに順々に出てきて向側の戸へ消えるのだ。私達はわざわざ正午にでかけて行つて見たんだが、その四個の時計人形は士農工商を象徴してゐるらしい。單なる好奇な飾りだらうけれど、それにしても、生眞面目な金いろの小さな人形が四つ、ひよこひよこ出て來て引つ込むところは如何にも現代ばなれがしてゐて、北の水鄕大人(うし)たちのお伽噺趣味をよくあらはしてゐる。諧威から來てどことなく明るい感じのするのは、ことによるとこの人形のせいかも知れない。

さて、ふたゝび塔の上から眼を放つと、市のはづれの小高い坂の角に、城寨めいた囲い家が注意をひく。

これはグルドブロロプス・ヘメツトといふ國營のアパアトメントで、大いに曰くがある。一九〇七年に死んだオスカア二世が、その前年の結婚五十年記念に、國民のお祝ひ金で建てゝ遊に一般公衆へ寄附したもので、結婚五十年の歷史——再婚や三婚や四婚や五婚、以下略、はすべて資格がないんだらうと思ふ

――を有する老夫婦――五十年經てばたいがい老夫婦に違ひあるまいが――なら誰でもはいれて、間代だけは國家もちで生活出來るのだ。つまり、よく五十年も我慢した、兩方とも豪い！といふんで、國民的勇士としての榮譽と待遇をあたへるわけなんだらう。これを目的にして國ぢうの「われなべにとぢぶた」が、鍋も蓋もぢつとして、あんまり「自由」を求めたり急に「自我意識にめざめ」たりしないとすれば、人間オスカア二世は仲なか何うして意氣なおやぢだつたに相違ない。

塔をおり、木の下路のうすやみをくゞつてスカンセンを出る。

ある日、ぶらぶら町を歩いてゐると、突然歩道に立ちどまつた彼女が眼を圓くして言つた。

『あらつ！　おみおつけのにほひがする！』

とこれはじつに容易ならぬ發表である。私は思はず急きこんだ。

『え？　ほんとかい――。』

が、ひるがへつて常識に叩くに、このストツクホルムの眞ん中にぷうんとお味噌の香がするといふことは首肯出來ない。しかし、この彼女の一言は俄かに私たちふたりを驅つて發作的ノスタルヂアの底に突き落すに充分だつた。それによつて私は、北の都の中央にあつて豆腐屋のらつぱを聞き、夕刊配達の鉢卷きを見、さうして日本の「たそがれ」を思つたからだ。あたりに表情のない石と鐵と機械の生活――自然はすべて西洋の世界を見すてゝゐる――なんかと、そんな述懐はあとまはしにして、そこで私は考へたのである。これはきつと日本の神様が彼女をしてかく叫ばしめ、つまり「味噌汁の香」なる一つの民族感覺を中介(ミデヤ)としていま何事か私たちに知らせやうとしてゐるのではあるまいか――。

『ことによるとこの近處に日本料理の家があるぜ。』

『まさか――。』

『支那めしでもいゝぢやないか。とにかく御飯が食べられるんだから――。』

といふので、夫婦相携へて矢鱈にそこらを歩きまはつてゐると――またもや彼女が眼をまるくして叫んだ。

『あ！　ありますよ彼處に！』

見ると、なるほど廣場の角に大きな看板が出てゐる。MIKADOとパゴダ式に縱の電氣文字だ。やれ嬉しやと手に手を取つて駈けつけて見ると、なあんだ！　飾り窓にやくざな色ちよみのキモノが並んで、けちな東洋雜貨の店だつた。みそ汁のにほひはつひに彼女の錯覺だつたのである。だつてほんとにしたんですもの――と、彼女はいまだに頑張つてはゐるが――。

アルセナルスガタン通りを散歩してゐたら、そこの一番地に「日本美術」と日本字の看板が下つてゐた。これは！と思つて入口を覗くと、ちやんとかう御叮嚀な日本語の標札まで貼つてる。

瑞典國ストックホルム市
　ヤポンスカ・マガジネット支配人
　　エスキル・アルトベルグ

アルトベルグさんは學者肌の中老の紳士で、私達が戸を排したときは、ちようどお客のお婆さんに日本の紡績絣を一尺ほど切つて賣つてゐた。店内は日本の品物をもつて埋まり、蓙・雨傘・浮世繪・屏風・茶碗・塗物・呉服・小箱・提灯・人形・骨董・帶地・着物・行李・火鉢・煙草盆――一口に言へば何でもある。ことに鍔と「ねつけ」の所藏は相當立派なものらしい。寫樂、歌麿、廣重なんかも壁にかかつてゐる。珍客――私達――の出現にすつかりよろこんで、お客のはうは女店員に任せつきり、いろいろ江戸時代の繪を出してきたり、自分の著した"Netsuke"と題する研究的な一書を見せたり、そのあひだも、何にするのか女中のお仕着せみたいな染め絣が一尺二尺とよく賣れて行く。

アルトベルグさんは非常な論客だ。ほとんど完全に近い智識階級の日本語でまくし立てる。

「日本はほんとにいい國です。私も度々行きました。また行くつもりです。しかし、もうあんまり掘出し物はありませんな。高價いばかりで。いや、たかいの何のつて、私なんかにあ手が出せません。この寫樂はいいでせう――が、このへんになると何うも――それから廣重――と、氏は讀みにくい昔の日本字を自由に讀みこなして――東海道五十三次掛川之宿。何うですこの藍の色は！え？嬉しいですね。さあほうら！歌麿です。この線――憎いぢやありませんか。ねえこの味が判らないんだから、毛唐なんて私あみんなけだものだつて言ふんです。』

とだんだん昂奮してきて、

『それあ私も西洋人ですけれど、西洋の文明はもうおしまひですね。退歩しつつあります。なつちやあゐないんですからねえ。まるで泥棒ときちがひの寄合ひだ。自制なんかといふことは樂にしたくてもない。一に金、二にも金、が、金が何です！金よりも心でせう！強いこころこそ國と人のたからです！――まあいゝ。こいつらがかうやつて物質にばかり走つて好い氣になつてるあひだに、日本はどんどん心の修養を怠りません。その筈です。心のないところに何があり得ませう！じつさい私は「東洋の心」（オリエンタル・マインド）といふものを幾分か理解し、そしていつも尊敬してゐます。』熱して來ると、いつか眼にいつぱい涙を持つてゐた。

古いストル・トルグの廣場――一五二〇年丁抹の暴王クリス

チャン二世がこゝでスウエイデンの貴族達を虐殺したといふ、歴史に有名な「血の浴み」のあと。株式取引所のまへ。黒い石畳。

こゝへ行つたら、ついでに近くの、ベルマン時代からある地下室料理デン・ギュルデン・フレデン――オステルランガタン五一番――へ寄らなければならない。畫家アンデルス・ゾルンが買ひ取つてアカデミイへ寄附したもので、場處それ自身も藝術的に面白く、おまけに料理がいゝ。この家を訪はずにストックホルムを去るなかれ。

帝室公園の森の奥に「建たなかつた宮殿のあと」といふのがある。いはれを聞いてみると、グスタフ三世がヴエルサイユと同じプランで一七一八年から九二年まで十二年かゝつてやつと土台だけ出來た時に暗殺されてしまつたのだと。だから「建たなかつた城のあと」で、疊々たる石垣と地下室と隧道が草にうづもれ、大きな松、小さな松――苔で足が滑る。

森の入口、カペテントといふ野外カフエへ這入る。十七世紀の近衛兵營舍。門に一風致。お茶一杯一クロウネ十四オウル。

郊外ドロットニングホルムでは「王の小劇場」だけでも見なければならない。近代的なプロンプタアBOX、天使の降りる雲、その天使や惡魔の消滅する仕かけ等すつかり備つてゐて、觀覧席には當時のまゝの標字が殘つてゐる。騎士席、侍從席、侍女席。ずつと上のはうに宮廷理髪師席、宮廷靴磨き席、宮廷料理人席――何と華やかな笑ひ聲の夜をこれらの席名が暗示することよ！光る鎧と粹な卷毛の鬘と、巨大なひげと絹のマントと、股引きと道化者と先の尖つた靴の世！

エレン・ケイが死んでから二年になる。

二日がけで西南バトン湖に沿ふヴアッドステナ町に彼女の家を訪ねた。家の名はモルバッカ"morbacka"、女史の遺志により今は一種の婦人ホウムになつてゐる。湖畔の一夜。

さうだ。

もつと――もつともつと北へのぼらう。

バルチックを横斷してフインランドへ――となつて、そこで或る海暮。

うら淋しいスケプスブロンの波止場からS・Sオイホナ號へ乘りこむ。

雨の出港。濡れる灯のストックホルム。

バルチック海。

と、たちまちまた小別莊、松、燈台を載せた小群島が私たちのまはりに。

舷に近くあるひは遠く、蹲まり、伸び上り、寢そべり、さゝやきあひ、忍び笑ひし、手つてうしろへ消えていく驚くべき多

島——これから芬蘭土ヘルシングフオウスまで海上一晝夜の旅だ。やがて新興の Land of Thousands Lakes が私達のまへにほゝえむだらう。

風が出た。

鐵索（ワイヤ）のうなりが一晩耳につく。

SUOMI

フイルランド共和國は歐羅巴の最北端に位し、北緯六十度と七十度のあひだ、しかしその割りには暖かくて、夏のおはりがちようど日本の四五月だつた。深夜たびたび停船して水先案内を乗せたオイホナ號は、島の多い、といふより凸起した陸地の間にわづかに船を通すに足る水の、フインランド灣の岸にそつて、午前十時ごろ、半島の町ハンゴへ寄り、それからまた原始的なアウチペラゴのなかを午後おそくこの國最大の都會ヘルシングフオウスへ入港した。途中あちこちの小島の岩に大きく白く Hasselholmen などと島の名が書いてあるのを見る。夏のヴイラがあつて人が住んでゐるのだ。

フインランド國——芬蘭土語ではスオミ Suomi ——の首府ヘルシングフオウス——芬蘭土語でヘルシンキ——は、密林と海にかこまれた、泣き出したいほどさびしい貧しい町だつた。一九一八年に露西亞から獨立したばかりで、そのとき四個月間「人民の家」と稱する共産黨政府に苦しめられたことを人々はまだ惡夢のやうに語りあひ、ソヴイエツトの風が北部西歐へ侵入してこやうとするをこゝで食ひとめる防壁（ブルワアク）をもつてみんな自任してゐる。そのためと明らかに公言して、國民軍の制度が不必要と思はれるほど異常に發達し、四個月の軍事教育のゝち屬する國民軍なる大きな團體が政治的にも社會的にも力を持つてゐる。これに對立して露系共産黨の策謀あり。この北陬の小國にもそれぞれの問題と事件と悩みがあるのだ。何だか「國家」の眞似事をしてゐるやうで妙に可愛く微笑みたくなるが、しかし、同時にその素朴さ、眞摯な人心、進歩的な態度、フインランドの將來には何かしら健全で清新なものが約束されてゐる氣がする。が、世界で一ばん古い獨立國からの旅人の眼に、この世界で一番あたらしい獨立國は、たゞ雪解けの荒野を當てもなくさまよふやうにへんに儚なく映つたのは仕方ないだらう。歴史的そして地理的關係上、瑞國の影響をいたるところに見るのはいふまでもない。國語もふたつ使はれて、上流と智識階級はスウエデン語を話し、他はフイニツシである。だから町の名なんかすべて二つの言葉で書いてある。語尾に街（ガタン）とついてゐるのが瑞典語、おなじく何なに街（カツ）とあるのが芬蘭土語で、地圖も看板もそ

のとほりだから、旅行者はすくなからず魔誤々々してしまふ。

ホテルでは、日本人の夫婦が舞ひこんで來たといふんで大さわぎだ。それには及ばないといふのに、番頭が大得意で案内に立つ。

『これが郵便局です。何うです、素晴しい建物でせう？それからこれが停車場、あれがグロウヘラアの要塞――。』

一々感心したやうな顔をせざるを得ない。人には社交性といふものがあるし、それにこの單純なフインランド人を失望させたくないから――そこで、ありきたりの建物にも最大の讃辭を呈し、寒々しい大統領官邸にも最上級の驚嘆を示し――番頭は上機嫌で商賣なんかそつちのけだ。

エイラの島の絶景に大いに感心し、つぎに船着場の花と菜の市場にまた大いに感心し、それから「異國者(フオリソン)の島」の博物園では十六世紀のお寺と、お寺の日時計・砂時計・禮拜中に居眠りするやつを小突くための棒・男たちの wicked eye から完全に保護されてゐる女だけの席・地獄の繪・裁判の作り物・うその告白をした女を罰する足枷――それらにまんべんなく感心してしまふと、もうありませんな、と番頭のはうが困つてゐる。可哀さうで、まあ君、これだけ見せて貰へば澤山です。さう悲觀したまふな、と慰めたくなる。

その他、ついでに感心すべきものを附記すると、S・Sデゴロといふ船で一夕の島めぐり。夕陽をとかす水、島、岩、松、白樺、子供、渚を渡る風、小棧橋、「郊外の住宅へ歸る」やうにデゴロビユウだのヴオドだのイグロなんかといふ恐しげな名の島へ上陸して行くヘルシンキの勤人、家の窓からそれを見て小徑を駈けてくる若い細君、船員が岸の箱へ押し込んで廻る夕刊と郵便物、今朝頼んでおいた砂糖やめりけん粉の買物を船長さんから受取るべく船を待つてゐる主婦たち――こゝにも同じやうな人間の生活が營まれてゐることをいまさらのやうにしみじみと思はせられる。

それから、こんどは美術館(アテネアム)に感心しなければならない。ミレイとコロウとドガが紛れこんで來てゐる。

もう一つ、お土産品を賣るといふんで自他ともに許してゐる箸のミカエル街ピルチの店に、硝子と埃りと好意と空氣のほか何ひとつ買ふ物のないのに最後に感心。

近處に常設館がふたつあつて、夜になると不思議にも電燈がともる。一つを「ピカデリイ」、他はオリムピアと誇號し、前者はいま――といふのは私のゐたとき――ロン・チヤニイ主演「刑罰」、後者はアイリン・プリングルとチエスタア・コンクリン共演の喜劇を上映してゐた。ほかのいはゆる先進國・ことに日

本の私たちは、もつとシンプルな享樂を享樂とし、より謙遜な歡喜を歡喜としなければならないことを、この中學生みたいに若々しい人々によつて敎へられたやうな氣がした。

プランス公園のうらの小池に The Waiting Girl と題する少女の裸像があるが、この、どんよりした沼のまんなかに蹲まつてゐる田舍の處女の姿こそは、私の印象するSUOMIの全部だ。

どこからでも見えるもの――舊ニコライ堂。

どこにでも見かけるもの――OSAKEといふ廣告(サイン)。と言つても、禁酒國だから酒場ではない。「オサケ」は會社のこと。

フインランドの産物――挽かない材木と挽いた材木。ランニングの選手、ヌルミとリトラとその幼蟲。

さて、もつと、もつともつと北へ進まう――となつて、涙の出るやうなさびしい、けれど充分近代的で清潔なフインランドの汽車が、内部に私達を發見した。

夜行。奥地の湖水地方へ――イマトラ――サヴオリナ――プンカハリユウ――ヴキプリ――And God knows where!

奥の細道

イマトラの瀧。

ヴアリンコスキの急流。

イマトラでは早取寫眞のお婆さんに一枚うつして貰ふ。待つてるうちに濡れたまゝの寫眞を濡れたまゝの手で突き出す。何うやら見やうによつては人らしくも見えるものがふたつ浮かび出てゐて、あたひ金五マルカ、邦貨廿五錢也。

ヴオタセニスカといふ村へ辿りつくと、この機を逃さず珍亞日本人を見學せばやとあつて、黑土道の兩側に土着の人民が堵列してゐる。逸早く私たちの來ることを知つて、小學校の先生が學問の一部として生徒を引率して見せにきたに相違ない。いやに子供が多い。子供とより「餓鬼」といつたはうがぴつたりする。その餓鬼の大群集がぽかんと口をあけて、探檢家然と赤革の外套なんかを着用してゐる二人とふたりの持物に飽かず見入つてゐる。日本でも、よほどの田舍へ異人さんが行くと今でもかうだらうが、かうして自ら異人さんの立場に身を置いてみると、これはなかなか愉快な感情である。ちよつと「街上で發見された」名優の舌打ちに似てゐる。迷惑は迷惑だが、底に満足された虚榮心のよろこびといつたやうなものを拒み得ない。じつさい餓鬼は餓鬼を誘ひ、弟は兄を、姉は妹を、おふくろは父(ちやん)つあんを、婆さんは爺さまを、鷄は牛を、犬は馬を、みんなを呼び出してきて、驚異と讃嘆をもつて遠くから研究的に見物す

るんだから、こつちで私たちが、ふたりで何か話して笑つても、私が煙草に火をつけても、彼女が鼻へ白粉を叩いても、それがそつくりそのまゝ、何のことはない、まるで無聲の芝居になつてゐて何うも弱つてしまう。そこで照れかくしに彼女がチヨコレイトを出してそばの一幼兒に寄贈したんだが、さうするとわれも吾れもと四方八方から手——なかにはかなり大きな手も——が突出してきて、かうなるとチヨコレイトの倉庫を控へてゐても間に合はない。隙を見て遊覧船へ避難し、ほうほうの態でヴオクセニスカをあとにサイマ湖へ出た。

サイマ湖！

A日！ 私は悦んで告白する。いまだかつてこんな緑の太ひ、そして神そのものゝやうに、深く黙りこくつてゐる自然の寶座に接した記憶のないことを。神代のやうな靜寂が天地を占めるなかに、黒いとろりとした水が何哩も何哩もつゞいて、島か陸地か判然しない岸に、すくすくと立ち並ぶ杉の巨木、もう歐羅巴の文明は遠く南に去つて、どこを見ても家や船はおろか、人の棲息を語る何ものもないのだ。

サイマ湖！

南方に行はれてきた、こましやくれた「文明」とその歴史に關興せず、お前は一たい何時の昔からこのフインランドなる深林の奥に實在してゐたのだ！ 重油のやうな湖面に島と木と空の投影が小ゆるぎもしないで、鳥も鳴かず、蟲も飛ばず、魚も浮かばず、およそ生を示すもの、動きをあらはすものは一つとして耳を訪れず、眼にも觸れない。何といふ潜精力を藏する太古の威厳であらう！ なんたる吸引的な死湖の魅魔であらう！何かしら新しい宗教の發祥地として運命づけられてゐなければならないこのサイマ湖！ 末梢神經的な現今の都會文化はこゝへ來て木つ葉微塵だ。この恐怖すべき湖の沈默、戰慄せざるを得ない紀元前の威壓、嚴然として木の葉も戰もそよがない凝結、これらの前に立つて誰かよく頭を下げやうとしない近代のプロデガルがあらう！

サイマ湖！

こゝで私は倫敦の霧芥を想ふ。巴里の灯、伯林の街上をえがいてみる。

さうすると「約束されたる裁き」の済んだ世に、それらすべてを過去のものとして、これから又た新規の文明が伸びやうとしてゐるやうな感じがするのだ。事實私は、このときサイマ湖上の無韻の音をその生長の行進曲と聞いたのだつた。

白い閑雲が古代の湖水に落ちる。一日一晩、船は神秘のサイマ湖を航行した。

少數の土地の人が便乘してゐるきり、旅行者としての船客は私達だけ。萬事に特別の待遇を受ける。老船長とゝもに食事、半夜快談。彼は英佛獨語をよくし、デレツタントな博學者である。獨逸における現勢力としての猶太人・ジョルヂ・サンの性格・倫敦の物價と税・シンガポウルのがらくた市場で買つた時計の正確さ・ロコヽ式の家具・バルビゾンの秋——轉々たる話題。老人は袋のやうなサイマの水路を自分の掌みたいに心得てゐて、そしていつも船橋に立つてアナトウル・フランスを讀んでゐた。

カマラの村へ着くまで人家は一軒もない。カマラでは、私たちの船へ乘り込む青年を見送つて、祖母らしい人が棧橋に凭れて泣いてゐた。

カマラからサヴオリナ。

スウラホネといふ、名も實も變なホテルに一泊。オラヴインリナの古城を訪ふ。一四七五年、最も露西亞へ近い防線の一つとして建造されたもの。水からすぐ生えたやうに高く湖面にそびえてゐる。小舟で往復。雨、ときどき降る。

また別の船でサイマ湖を奥へ進む。

プンカハリユウ——木の繁つたせまい陸地が橋のやうに七キロ米もつゞいて、對岸プンカサルミへ達してゐる。代表的なフインランドの湖水風景だ。私たちのほかは誰も下船しない。棧橋を出たところで泥だらけの馬車を掴まへて、ホテルまでやつて貰ふ。坂と森林だけで、どつちを見てもみづうみがある。ホテルが一つ。町も何もない。

ホテル・フインランデアといふ。客の來たことをまるで奇蹟のやうに家ぢう驚いてゐた。

このプンカハリユウでの鎭靜的な五日間は私たちの生涯忘れ得ないところであらう。湖水に陽がかんかん照つて、物音一つない世界だつた。通り雨がときどき森と水を掃いて過ぎた。私たちは朝早く分水線(リッヂ)を渡つて、一日ボウトを漕いだ。どこへ行つても人つ子ひとり會はなかつた。水は澄み切つて底が見えてゐた。赤い水草の花が舟を撫でてかすかな音を立てた。その音にぞつとさせられるほどのしづかさだつた。手を出して取らうとすると舟が傾いて何うしても屆かなかつた。それを無理に掴まうとすれば、ボウトは轉覆したに相違ない。私は知つてる。さうやつて人を呑まふとするのが、湖水の精のあの花だつたから——。

私たちはいつまでもプンカハリユウを愛するだらう。二日といふのを五日に延ばしたのだつたが、それでも、立ち去る時、彼女は耐らなく殘り惜しげだつた。必ずもう一度行かう何時(いつ)か——私と彼女のあひだの、これは固い「指切り」である。

一たい芬蘭土はほとんど外國語が通じない。ことにから奥へ

這入ると完全に絶望だ。この五日間、私達も何から何まですつかり手眞似で用を足した。おかげでこの「無言のエスペラント」は素晴らしい上達を見たくらゐである。

その夜の汽車の窓はいゝ月夜だつた。

すこしく英語を解する「村の辯護士」ヴァンテカイネン氏なる人物と同車する。ほとんど戰々兢々たる態度で私たちに望むから、何うしたのかと思つてゐると、やがて、日露戰爭に勝つて呉れてまことに有難いといふ。すつかり恐縮して、

『いや、何う致しまして。』

と辭退したが聞き入れない。昔から虐られて來た露西亞に勝つた日本だ、その國の人が乘つてゐると傳へきいて、はるばる他の車室から、かはる交る顏を見にくる。すつかり英雄扱ひである。

『ムツヒト陛下さま、クロキ・ノギ・トゴウ――私たちはまだ血の多い青年でした。あの興奮はまだ強く胸に殘つてゐます。』

じつによく日本と日本の固有名詞を知つてゐる。日露戰爭は私の五歳の時だから、私にとつては歴史と現實のさかひ目にすぎない。しごくぼうつとしてゐる。が、この際ぼうつとしてはゐられないから、そのうちにつひ私も奉天旅順日本海とめちやくちやに轉戰し、何人となく「ろすけ」を生獲りにしたやうな顏をする。その顏を、ヴァンテカイネン氏と氏の同胞は穴のあくほど感に耐へて見てゐるのだ。氏を通じて、みんな日本に關する色色な質問を呈出する。それがかなり高級で、わりにピントが合つてゐるから、一々いさゝかの吹聽意識をもつて答へてやる。

これよりさき、彼女を包圍した婦人達のあひだには早くも語學のお稽古がはじまつてゐた。

サヨナラ――ヒュヴァステ

アリガト――キヰイドス！

『あれ。』と窓をさして、

月は――クウ。

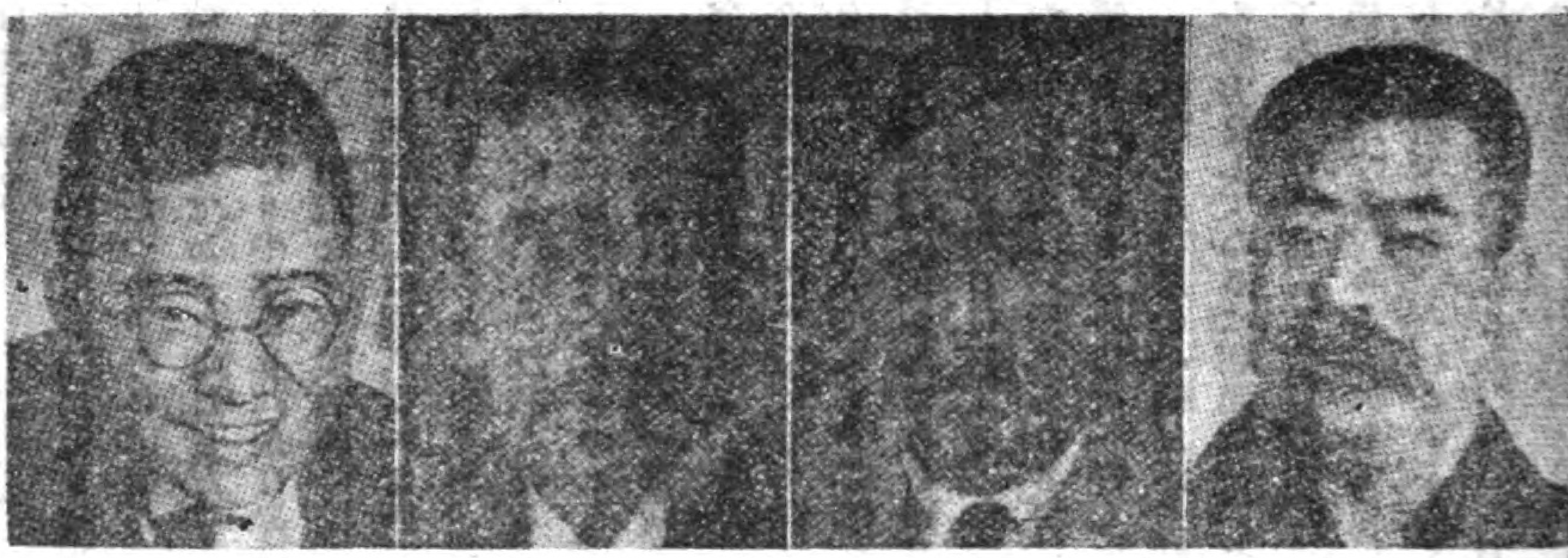
芬蘭土語を三つ覺える。

アントレアを過ぎ、ヴヰポリの町で招かれて私たちはヴァンテカイネン氏の客となる。そして其の深夜、十三世紀の圓塔（ピヨリア・トルニ）内のキャバレで、貧しい音樂に悲しいまでにたのしげに踊り狂ふ兵士とその戀人や、賣子娘とその相手や、町の女、町の男達をぼんやりと眺めながら――異國者はつねに浮氣だ――私はすでに歸りの旅を思つてゐた。

RIGHTO！S・S・リュウゲン號でエストニアのリヴアル經由、獨逸ステテン港へ上らう、と。

二晝夜のバルチック海がこれから私たちの行手にある。

白夜よ、「ヒュヴァステ」！



（野間清治）（下中彌三郎）（佐藤義亮）（山本實彦）

人物評論

出版界四天王論

佐藤義亮氏（新潮社）山本實彦氏（改造社）
野間清治氏（講談社）下中彌三郎氏（平凡社）

四人四色

高畠素之

一

野間講談、佐藤新潮、山本改造、下中平凡——この四人の中で野間清治君だけは同鄕人だが、幸か不幸か未だ本物を見たことがない、佐藤義亮君とは、商賣上の用件で一度だけ合つた。山本實彦、下中彌三郎兩君には再々お目にかかつてゐる。

隨つて野間君のことは、人物印象として何も書けぬ。只だその營業振りなどから見て、人物の一般は推し得る。兎に角、帝大の一書記から出版界の『四天王』の一人とまで漕ぎつけたほどの人物だから、何にしろ非凡には違ひない。その營業振りを見るに、下品ではあるがズバ拔けてゐる。出版界に講談社張り獨特のものを植えつけたことは爭はれぬ。編輯、營業のすべてに亘つて、野間氏の特色が濃厚に現

はれてゐる。

彼れ自身師範出の教員上りであるところから、使用人にも同郷の教員上りを驅りあつめ、それに彼れ一流の獨裁的氣息を吹き込んで、同族的結合を固めてゐるとのことだ。小僧一人雇ふにも、いきなり社へは出さず、一年なり半年なり社長自身の身邊に置いて、あらゆる雜役にコキ使ひ、且つ擊劍などを强制的に教へて、嚴格な修業を積ませる。十中八九はこの修業煉獄に堪え切れないで逃げ出すさうだ。無事にパスした者が社員にとり立てられるのだが、その時には旣に十分、野間式訓練を仕込まれて、完全にその奴隷と化し、一々指圖しなくても主人の意の通り働らくやうになつてゐるとのこと。

講談社の成績の重要な一要素は、全國小賣店との交渉に於いて非凡な努力を厭はざる點にある。それには、社員が直接手足となつて駈け廻る必要があるが、右の様にして仕込まれた小僧たちは殊にこの重要な役目を果たすべき地位にある。講談社の小僧が絶えず市内小賣店の間を駈け廻つて、亂雜に置かれてゐる雜誌を整頓するとか賣れ工合を調べるとかしてゐるのは注目に價する。勿論その場合、他社の雜誌なども整頓してやつて小賣店に有難がられるだけの如才なさを發揮するが、實は自家の雜誌を目につき易い場所へ押し出すのが目的である。

これなどはほんの一例だが、社内勤務の連中も、それに比敵するだけの努力をしてゐるに相違ない。その效驗は返品防止上の成績にも現はれてゐる。けふ日、雜誌の返品率は四割五割が普通となつてゐるが、百萬突破を呼號する、キングにして僅に五六萬の返品率とは噂だけにしても大した成績である。それといふのも、小僧はじめ使用人一同の驚くべき人足的活動に依るところが多いのであつて、畢竟各小賣店間の賣行過不足の調査が行屆いてゐる結果であらう。

二

佐藤義亮氏とは、頃ろ出版上の交渉は大分深かつたが、現物を見たのは一度きり。頭の良い、精悍味の溢つた、一種歯切れの良い人物だと感じた。私自身の好みにもよるだらうが、これ等の點では、山本君や下中君に比べて一段すぐれてゐると見受けた。彼れ、病身の故もあらうが殆んど門外に出ず、社長室の象牙の塔に立籠つてゐるらしいが、その言行は甚だ現實的で、出版は勿論、思想、文藝その他の方面にも可なり堅實な識見を持つらしいのは感服の至りである。加ふるに、その手足的事務總官として、中根駒十郎といふ福德圓滿と事務的奔走との外に何等とり柄のなさ相な人物が控えてゐるのは、鬼に金棒といふべきであらう。

新潮社は、財政上の實力では他の三社はもとより、全出版界を通じての有力者の一人と目されてゐる。それも文無しから出發した彼れ佐藤君の頭腦尖鋭と努力健鬪の賜物であらうが、金が出來ると損をしまいと力めるのは人情である。元來、佐藤君は一面では地みちな貯金主義者のやうでコツ／＼働いてコツ／＼貯めるといふ行き方だが、一面では機を見て大バクチを打たんとする抱負も自信も持ち合はせぬ人ではない。といふのは、どうせ小錢をコツ／＼貯めたところで段階的に大きく實力を進めることは困難である。そこで、一方では貯金、一方ではバクチの兩天秤を掛けるその行き方は營業振りにも現はれてゐる。普通の單行本では損を絶對に避けて石橋を叩き、機に乘じて大規模な豫約物などをやる。世界文學全集、長編小說全集等、可なりな大冒險をやつてそれ／＼相當な成績を擧げてゐる。

しかし何といつても、金があるから大事をとり過ぎるきらひは免かない。隨つて、同じバクチを打つにしても、一か八かの大冒險は見られぬ。他人をさし措いて、自ら先鞭をつけることが出來ない。新規軸は他人に出させ、いよ〳〵大丈夫と見屆けた上で、二番乘りあたりをためる。優に新機軸を出し得る頭の持主と思ふが、金のあるため他人の尻ばかり追ふのは、ちと見苦しい。世界文學全集などにしても、改造社の日本文學全集が冒險的に道を開いて呉れたから、その後を追つたまでのことである。案そのものだつて何等獨創がない。翻譯文藝專門の新潮社としてなら、どんな馬鹿だつてあの位の計畫は立たう。

營業の點でも、浪費を省くに努めるのは是非もないとして、使用人數など極度に緊縮する結果、全集物にかかるとそれだけに全力を吸收されて、單行本に身を入れる餘力がない。全集流行で單行本がうまく行かないのは事實だらうが、そこを何とかしないのは、あれだけの納簾と格式に對して釣合がとれず、將來の發展の根を枯らす所以でもあらう。新潮社ほどの店なら、一つや二つ目前の利害を超越した永久的大文獻の出版に目をつけるのも、時にとつての罪亡ぼしではないか。

三

この點、改造社の山本君はなか〳〵面白いところがある。一つの全集を計畫して營業を擴げ從業員を殖せば、そのまま規模を擴げ放しにする。全集だけを當座的に考へる他店のやり口と違ふところは面白い。他店では或る臨時の大仕事が一段落を告げると人を減らすが、山本君はさういふ姑息なことをなし得ぬ性質を持つてゐる。隨つて、大規模な仕事を企てる毎に使用人が雲霞の如く蝟集して營業の膨脹を來たし、厭でも出し物を多くする必要に迫られる。だから、數種の圓本全集物をやりつつも絶えず單行本は出して行く。見てゐて決して氣持が惡いことでない上に、これが何程か改造社の存在を超營業的に思はせる刺戟ともなる。

山本君には幾度か會つてゐるが、打見たところ、無智愚鈍、その上存外の小心者らしく、それ以外の特色が果して奈邊にあるのか呑込めない。頭が惡くイモ蟲のやうに鈍劣で、一向に要領を得ない。一言でいへ阿呆といふのほかないやうだが、單なる阿呆ではあれだけの仕事は出來ないから、何處かに偉いところがなくては叶はぬ。流石に西鄕さんの遺鉢をつぐ芋づるの特色とでもいふのだらうか。それが呑み込めないのは、我々關東人だけで、向ふ樣では、苦もなく呑み込めてゐるのかも知れぬ。

彼れは愚鈍ながらも一沫の機敏さを閃かし、時折の思ひ切つた冒險振りに大向を唸らせる。が、それも頭や腹から來る冒險ではなく、二進も三進も行かなくなつて苦しまぎれにサイコロを抛げる場合が多いやうだ。それもこれも、佐藤君などと違つて、惜しむに足る程の財力もなく、身輕に思ひ切り暴れ廻ることが出來るからであらうが、いづれにしろこの點に彼れの荒武者的な長所がある。圓本元祖の日本文學全集にしても、あれは頭から生れた仕事でなく、營業行き詰りの四苦八苦的窮地から、自棄的冒險と出掛けたもので案そのものは誰れにも考へられさうな至極平凡なのである。强いて獨創味といへば、あの分册に對して一册一圓と出た新規軸であるが、斯ういふヤケ糞冒險的な新規軸が、彼れの唯一の身上であらう。

改造社は左傾本屋の大王といはれ、共產黨の手先とか後援者とか頻りに或る方面から非難されてゐる。この點でも、山本君の行き方は無軌道

の軌道を走るが如き興隆の觀を呈してゐる。改造社の左傾看板は確かに事實だが然らば改造社は左傾本で儲けてゐるかといふに、必ずしもさうでない。文藝、思想いづれの方面でも、左傾物は餘り賣れてゐない。マルクス物にしても、自分で言ふのも可笑しいが、私の物以外にしても大して賣れたのはないらしい。ところが、その私は左傾を冷かすことを商賣にしてゐる。賀川豐彦君あたりの物まで左傾部類に入れないかぎり、改造社の左傾物で四五千の發行部數を突破したものすらいくらもない。然るに、山本君は只管左傾物に心醉するらしく、左傾著者の或る者に對しては、著者對出版屋以上の關係をもち、そのためには隨分無駄な金も使つてゐるらしい。

これは、ソロバンづくでは無意味な話である。が、他面から見ると、全然意味がない譯でもない。改造社の左傾看板には、一種獨特の生命がある。刺戟とテンポに動く現代社會に於いて、弘く世人の注目を集めるには、努めて强烈な刺戟を與へる必要がある。改造社の左傾看板は、この點で大きな效果を擧げてゐる。山本君がそれを自覺してやつてゐるかどうかは知らないが、彼れの左傾著者款待は、この點に於いて必ずしも無意味でない。

山本君は、自分は單なる素町人、單なる學商でないと頻りに言觸らすやうだが、これは必ずしもコケや羊頭狗肉の手管ばかりとは思はれない。何處にか、人間として、單なる營業人以上の素質を具へたところが見える。單なる營業人以上の人間味を加味してゐるらしく見えるのは、佐藤君などに比べて人物的に餘裕がある。佐藤君は營業上出すべきものは出すが出すべからざるものは鐚一文も出さぬといふ行き方で、出すべきものを出さぬために出すべからざるものを出すのに比べればこれは確かに商人道の正道を行つたものだが、山本君になると出すべきものを出した上に、時々は出すべからざるものをも出したがる誘惑に打ち勝てぬところが見える。そこが彼れの純商人になり切れぬところで、この素人張りが、改造社の營業に一種の愛嬌と人氣を添へてゐることは確かである。

雜誌改造は一頃ろ從來の行き方から新局面を開いて、左傾的にゴツゴツなものでなく、一般向に丸味をつけたものにする考であつたらしく、定價を五十錢に引下げると同時にその行き方で五十萬突破を企て、私なども大いにそれを煽動した一人である。この計畫が美事に當つて、一時は二十萬近くの讀者をあつめたらしかつたが、いつの間にか內容も元の默阿彌に逆戻りし、讀者の數もそれと比例的に減少した。今では發行部數十萬、返品四割と見て、六萬位の實數しか捌けてゐないのではないかと思ふ。あの分量に五十錢の定價で、六萬の賣上實數では、缺損が當然で月々一萬數千圓の持ち出しであらう。一度あつめて追ひ散らした讀者は釣り損ねた魚と同樣、二度と容易に寄りつかぬものであるから、雜誌改造の將來の發展は當分絕望であらう。發展するには、あの無味乾燥なギコチない內容を根本的に改造して、編輯の獨創的新味を圖らねばならぬがそんなことには山本君の鈍根は極めて不向である。

出版方面でも、思想物は餘まり左傾的に深入りしすぎて世間の反感を買ひ、マルクス・エンゲルス全集の如きも、岩波一派をヘタバラセたとはいふものゝ、僅々二萬前後の成績ではどうにもならぬ。今度の經濟學全集にしても、約三倍の宣傳費を使つて辛うじて五分の成績を擧げるといふ始末では、改造社として何の面目ぞといひたくなる。改造社の將來は恐らく、左傾から掻き込んだ衍厄介をどう捌くかに懸るであらう。

四

最後に下中君だが、この人は他の三人に比べるとホンの駈け出しで、最近入幕したばかりといふところだが、それにも拘らず一躍四天王の一人に入選したのは驚くべき出世といはねばなるまい。營業上の實力からいへば、春秋社の神田豐穗君、日本評論社の鈴木利貞君などの方が上かもしれぬ。しかし、ジャーナリズムの呼物としては、必ずしも閲歴や實力のみでなく、何處かに活動振りの華々しさと人物的個性の突起を必要とする。この點から、下中君の入選はそんなに不公平でないといへやう。

下中君もポット出の新米出版屋といふではなく、大分以前からボツボツ目立たぬ出版を續けて來た。それが本當に手足を伸して活躍し出したのは大衆文學全集以來のことである。大衆文學全集の開始當時は、ハタの目にも氣の毒な狀態であつた。仕事の初めに一番大事な內容見本すら一時に所要の全部を刷ることが出來ず、二萬刷つては一息つき、三萬刷つては金算段に奔走するといふ有樣だつたらしい。世間の反響が大きく思ひのほか讀者が出來るらしいといふ芽出度い豫想すら、小賣店のうちには、平凡社にそんな大きな仕事が果して行り通せるかとの懸念を抱くものがあつたといふ。

ところが、大衆文學全集もあの通りの成功を收め、追つかけ發表した世界美術全集も至極みごとな成功を見た。で、餘力の及ぶところ、雜誌平凡の活動となつた譯だが、下中君の考ではなか〳〵十萬二十萬の發行部數では足れりとせず、キングを目標に百萬突破を目掛けてゐるらしい。

兎に角、彼れはズバ拔けたことを行り得る素質をもち、この點、野間山本兩君と一脈相通ずるものがある。どのみち、佐藤君のタイプではない。下中君は今こそ出版屋であるが、元來社會運動にも可なり深入りしたことがあり、出版を始めてからも兩天秤かけて來た男で、社會上の思想理論に十分の理解を持ち獨自の見識も具へてゐる。それだけに、會つて見ても人間としての尊敬を拂はしめる。この人に、あれだけ思ひ切つた大營業をなし得るといふのだから、世の中も面白くなつて來た。

下中君はあの圖體で、一見鈍重そのもののやうにみえるが、氣立はやさしく、腹も座つて居り、何處かに新味、獨創味がある。逸早く大衆物に目をつけたところなど、偉いとせねばならぬ。改造社が俑を開いて以來幾多の圓本全集が出たが、その中で內容的に獨創を發揮したのは下中君である。大衆文學全集も美術全集も圓本の形そのものは模倣だが、案の內容は極めて新規軸を出してゐる。今日でこそ、總クロース一千頁近くの大册が圓本の標準となつたが、下中君は卒先この冒險をやつた。當時あの立派な製本、分量で、一圓はベラ棒に安いとの感があつた。この意味で、山本君が圓本の元祖といひ得る如く、下中君は總クロース一千頁圓本の元祖といひ得る。この點、佐藤君などの行き方はシミツたれでどうせの二番乘りなら世界文學全集も初めから總クロース一圓で大きく出ればよかつたのだが、金があるためにケチな打算に陷り、途中から競爭に脅かされて總クロースに改めたなどはヘマの骨頂、世界文學全集の落伍率新記錄も故なきに非ずである。

今のところ、下中君の將來は雜誌平凡の實績如何に懸つてゐる。若しこれに失敗すれば、元も子もなくなる。若しこれに成功すれば、一躍講談社の一敵國を成し天下の視聽をあつめるであらう。未成品ながら大きな將來をもつ花形役者の一人として下中君の前途に囑望するのは、必ず

しも私ばかりであるまい。

山本の勇・佐藤の智

無名氏

岡本の第一先駆を着けたのが山本實彥氏で、それから思ひ付いて二番乘りをしたのが佐藤義亮氏であつたか、又は下中彌三郎氏であつたか、その違の先後のことは十分記憶して居らぬが、山本實彥が岡本の旗を揚げて背水の陣を布いた心事については、實に非常なる決心があつたらうと思ふ。新潮社のやうに相當の資産が出來てしまつては、そんな苦しい思ひで背水の陣を布く必要もないのであるから、從つてそんな切迫詰つた思ひ付きもでぬ。山本改造は、のるかそるかの瀬戸際に立つたので、勢ひ、あんなことを思ひ付いたのであらうから、どちらが智勇があるのかといふことも、一寸辨別がつかぬ譯であるが、もし此の智男といふ成語を無理に分析して山本改造と佐藤新潮とに割り振つてみると、山本は勇者であり佐藤は智者である。

ところで、山本は勇の他に智の要性も多少備へてゐるが、山本改造に智が含有されてゐる分量よりも佐藤新潮に勇氣の含有されてゐる分量の方が遙に乏しい。佐藤といふ人は、實に申分のない智者であつて、賢いには賢いが、その結果として勇氣といふのを厭る嫌いでゐる。しかし、佐藤氏が今日の成功に達してゐるところから判斷してみるのに人間といふものはそんなに勇氣といふものを持ち合はせてゐなくつても、或る程度の成功は遂げうるのだと考へられる。佐藤氏がその好適例である。出版書肆としての新潮社の事業、色彩、特長といふやうなものを綜合的に考察する時は、あれだけの特色を築き上げてゐるのだから、無論創始的の才幹識量を具備してゐる人物には相違ないが、しかし、嚴密なる批評をする時には、彼は、賢い適應の智者才人ではあるにしても、眞個の獨創家ではないのだ。新潮社創立以來三十年、その獨創的出版振りといふものは、殆ど見當らない。

改造社は、その事業創始の歷史からいつたならば、わづかに新潮社の三分の一の年月しか閱してゐないにもかゝはらず勃然として新興勢力を現はして來た。あまりに明白な實例のやうであるが、新潮社と改造社との比較關係を歐洲大戰前の列强の關係に比較すれば、新潮社は英國の如く賢實であり、改造社は獨逸の如く新興勢力勃勃としてゐる。これを、出版界全體の上から見る時は、新潮社を英國に比するは當を得てゐない、もつと歷史の新らしい出版書肆といはねばならぬかも知れぬが、改造社とのみの比較關係では、英國と獨逸との比較に類してゐた。ところが、國家としての獨逸は歐洲大戰以後一時的に國勢停頓してゐる。つまり、カイゼル及び彼を圍繞せるところの軍國主義の政治家が、あまりに調子に乘り過ぎて、退一歩の工夫を缺いだゝめに、たうとう躓づいてしまつた。山本改造は智も多少はこれあり、勇氣は大いに持つてゐるが、ともすると、あまりに蠻勇に驅られて過ぎて、動もすれば傍觀者をしてはらはらさせるところがある。

そこになると佐藤新潮は賢明の度を通り過ぎて實に老獪狡猾である。彼は、いまだ嘗て、自分から進んで、他の瀕踏みといふことをしたことがない。毎に他人の爲ることを觀察してゐる。しかし、その觀察の仕方は

實に軍鶏の如く恐ろしく鋭い眼を向けて冷然凝視してゐる。さうして、彼自身の進止の標準、用意からいつて、愚かなる第一人者がもし失敗するやうなことがあると、やゝ茶目坊式な、皮肉な冷評を與へて、自己の賢明なる思慮の優越感を愈々鮮かに意識して、納まり返つてゐる。又、もし、第一人者の先鞭を着けたことが有利であり失敗でないといふことを看取するや、疾風迅雷の如き勢を以つて、先登者の後を追掛けて走り出す。

山本改造は實に悲痛なる背水の陣を布いて、日本文學全集の圓本の豫約出版を思ひ付いた。今でも思ひ起す。孜々道を行く者は、東京市内外の到る處の街路に於いて、改造社の廣告文字を染抜いた齊金木綿の肩襷を着けた男女が引札を播いてゐるのに出會はした。從來他の商品販賣には、そんな手段も用ゐられたが、書籍の販賣法としては、あまり知らなかつたことであつた。改造社は、書籍出版者としての誇りも譽まれも拋つて、こんなことまでしなければならないものかと思つた。もしあれが失敗に了つたならば、改造社は世に恥だけ殘して破産したかも知れなかつたが、背水の戰陣は首尾よく成功におはつた。成功してみれば傍の見る眼にも忍苦屈辱の商賣と思はれた計劃は、忽ちにして無數の模倣者を續出した。

その第一の模倣者が新潮社であつたか、春秋社であつたか、平凡社であつた知らぬが、新潮社が世界文學全集の圓本豫約募集に奮起したのは改造社が大正十五年の十、十一月の頃であつたに遲れること、わづかに一ケ月にも足りなかつた。改造社の〆切りは同年十一月末であつて、新潮社が初めて、廣告を公開したのは、十二月の末か、翌年の一月初めであつたから、新潮社は、無論、内々出陣の戰術を整へて、改造社の成敗の觀察を怠らなかつたに相違ない。果然、世界文學全集は、さすがの新潮社自身も意外とするほどの大成功を以つて〆切つた。〆切當時の豫約總數は無慮四十萬に達したといふことだ。しかし、こんなことは、世間周知のことで、今更らしく繰返へす用もない。たゞ、佐藤新潮氏は決して衆に先んじて、千萬人と雖も我れ往かんといふ勇者でなく、山本改造氏は、文王を待たずして翻然起つ者であるといふことだけは確かだ。そのかはりに、佐藤氏は堅實であり、山本氏は奇兵を用ゐて猛襲を企てるだけに、傍人をして鬼胎を感ぜしめる。

而して、資本的成功者としてその利益を分つ場合にも山本改造は、可なり進歩的なところがあるが、佐藤新潮氏は何處までも堅い。彼は聰明なる常識家ではあるが、山本より、十年ばかり年長者であるだけに、その常識は保守的である。そして等しく文化的營利業者であるにしても、佐藤の方は思想的方面に主力を置かないで、藝術的方面に主力を置いてゐる。それも亦た佐藤が青年時代に文學青年であつた痕跡が、その終生の事業にまで殘つてゐる次第であつて恰も山本改造が思想的政治的青年から起つて遂に文化的營利業者に落着いたと同じく、いづれも自然にして無理のない歸趨であるといはねばならぬが、佐藤新潮は、もう數百萬の資産を成してゐるだけに、今後も順潮にその資産を殖やすだけの事業を續行するであらうが、山本改造のやうに、將來に驚目的期待を抱かしめるやうなことはない。そのかはり、前いつたとほり、山本は冒險的な危險を感ぜしめるが、佐藤は極めて安泰である。それだけに彼は既に完全に資本家としての羽翼を成してしまつた。勿論、新潮社の恩澤によつて生息してゐるところの文筆勞働者は、この大資本力に對して抗爭し自己の利益を擁護主張する氣力など持ち合はしてはゐないが、新潮社自身の方

もいへない。

佐藤が感傷的な文學青年から出發して、三十年後の今日五十幾歲、昔の感傷な衣裳を蟬脫してしまつて、冷然として、英邁なる資本家に成り功つた點には、修養多年の工夫を積んだ立志傳的の人物であるといはざるを得ぬ。彼は商賣實利を尊重するといふのか、凡そ商取引の關係においては厘毫の儲といへども、不合理の讓步といふことをせぬ。それは、しかし必ずしも彼が吝だとか物が解らないとかいふことから來てゐるのではなくして、實は、あまりに明察にして、頭がよく、對手の不合理その事に對して讓步しないのである。故にこれは決して彼を咎むべきではないにしても、そこに一縷の情味といふものがあつてもよいと思ふ。

山本改造は性來豪放なところもあるが、又、ひどく細心な點もある佐藤の徹頭徹尾細心で固つてゐるのとちがひ、山本に數段の面白味のある所以である。彼は一面ひどく荒けづりな處がある。その點はいゝが、それとともに彼には、自己の成功優勝を意識して喜ぶ稚氣がある。とともに又、相手を見て頭を大きく下げたり輕く下げたり、笑顏で人を迎へたり、素氣なく迎へたり區別を置くだけの客氣も持つてゐる。佐藤もその點では同じことだ。否なそれは二人に限らず、凡ての人間が、さうであるのは當然であるが、しかし、佐藤は、さすがに老熟してゐる所がある。山本はその點になると、正直に自己を顯はしてしまふ。

自分は、同じ大衆文學で、錢儲けをしても下中彌三郎に對しては、少しも反感を抱かない。下中彌三郎が、山本改造の日本文學全集や佐藤新潮の世界文學全集の如き所謂藝術物には、もう最初から諦めてゝかゝり大衆物で邁往した點に悲しい諦めと男らしい氣象とを認めてゐる。ところが德孤ならずで案外の成功をした。自分には、內容の詰る、つまらないに係はらず下中の大衆的立場がひどく氣に入つてゐる。しかし、「平凡」によつて、野間の講談社物に摸倣するに至つては、唾棄するに値する。講談社の馬鹿大きい廣告を見るごとに、自分は、野間を、毎時大阪の有田音松に聯想してゐる。蓋し、自分と同感の士は世間に少くあるまい。東京の有田音松と大阪の野間淸治といひたい。もう、こゝになると文化的營利商賣も極的に露骨に、營利一天張りになつたといはねばならぬ。

出版革命の勝利者

大宅壯一

ヂャーナリズムは、一般資本主義の一分野ではあるけれども、他の分野では見られない特殊な機能をもつたものである。何しろ、人間の頭を自由自在に操らうといふのだから、やつてみてこれ位ゐ面白いものもない代りに、又これ位ゐむづかしいものもない。從つて出版資本家として成功し得るものは、世間にざらにある資本家と違つて、實際千、萬人の中から一人しか出ない「天才」である。

敎育の普及と共に、急激に讀書層が擴大され、知識的植民地が素晴らしい勢で開拓された。近年に於ける通俗雜誌の發行部數の激增と圓本の驚異的成功とは、隨分おくれてゐた出版界に於ける產業革命を完全に遂行せしめた。そしてこの產業革命の潮流に乘つて群小出版書肆の上に蔽

然頭角を見し、明日の出版界に君臨しようとしてゐる男が四人ある。

佐藤義亮——四人の中で、私にとつては一番近い存在である。「社會問題講座」以來滿三年の間接觸を保つて來たがこの頃になつてやつと私に彼の本質が大體わかつて來たやうな氣がする。

彼に接することによつて、私は、資本家といふものは如何に勤勉なものであるかといふことを初めて知つた。朝はおそくとも四時には起きて全集物の校正に目を通してそれから廣告文案の作製に取りかゝる。「世界文學全集」などは、少くとも三度は眼を通す。語學は、英語がほんの少し出來る位ゐのものだが、大抵原書なしに誤譯を嗅ぎつける。しかもそれが殆ど百發百中だから驚嘆する外はない。新聞の廣告文案も、全部一人でつくりあげる。

彼は道樂といふものを知らない。酒も煙草ものまないし、中村武羅夫氏や加藤武雄氏の保證するところによると、妻君以外の女は知らないさうだ。たゞ、時々仕事の暇に大手といふ製本屋の爺さんと將棋をさす。(この爺さん以外のものとは決してさゝない。)それが又恐ろしく早い將棋で、一時間に十二三番やるのだ。所が、この爺さんは、兩馬をおろしてもらつて、やつと十番に一番位ゐしか勝てない。つまり、この簡單な遊戲によつて、佐藤氏はその道樂慾と、鬪爭慾と、征服慾と、勝利の快感とを最少の時間を利用して最大量に滿足させてゐるらしい。

私は彼のやうに精悍な、彼のやうな負け嫌ひな男を知らない。從つて彼の人物批評は、極めて辣くて辛辣である。彼は明治大正昭和に亘る文士を殆どすべて直接個人的に知つてゐるが、若し彼にそれらの文士の裏面批評を思ふ存分やらせて見たら、確かに天下を驚かせるに足るものが出來るだらうと思はれる。いつか中根駒十郎氏の名で發表された永井荷風氏に對する公開狀などもその一例で、時々さういふことで彼自身の「資本」によつて封ぜられた筆を活かし、內心ひそかにほくそえんでゐるらしい。

彼は一種の文章家である。殊に鬪爭的な文章が得意である。昔、秀英舍の植字工をしながら、十九歲で雜誌を出し、高山樗牛などに盛んに食つてかゝつたものである。だから、彼が若しもう二三十年おくれてこの世に生れて來たら、今頃は「戰旗」か「文藝戰線」の優秀な鬪士になつて盛んに論陣を張つてゐたかも知れない。プロレタリア評論家としての佐藤義亮——なんと愉快な想像ではないか。

山本實彥——佐藤義亮氏が北國的事業家であるのに反して、山本氏は南國的事業家である。よく彼を豐臣秀吉に譬へ、佐藤氏を德川家康に譬へるものがあるが、實際山本氏のやり方は、派出で、冒險的で、見てゐてはら〳〵させられるが、それだけ又愉快でもある。

人間としての山本氏については、私はあまり立ち入つたことを知らない。しかし彼の周圍には私の親しい人が多勢ゐるので大體はわかる。

彼は常に大膽な、陽性的な、意志的な面ばかりを社會に向けてゐるが他の半面に於て彼は、小心な、陰性的な、感情的な男である。實際はむしろ後の半面の方が優性なのであるが、彼はいつもそれを抑へてゐるら

しい。所が、時々ふとした拍子にそれが出て來るから面白い。いつか「新潮」に出た彼の日記を見て、ほろりとさせられたことを私は今も覺えてゐる。前齒で脣をかみながら、殆ど吹鳴るやうな調子でものを言ふときの彼の面には、暗い、陰慘とでもいひたいやうな影が漂うてゐるやうな氣がする。彼の性格彼の文章、彼の事業を蔽うてゐる一種爆發的な熱と力とはそこから生れて來るのではあるまいか。

野間淸治――この男については、私はいふべき何物をも持たない。

下中彌三郎――どこまでが茶目でどこまでが眞面目なのか、いつまでたつても見當がつかない例の山崎今朝彌氏が、嘗つて「ステキズム」といふものを發見した。これは彼の說明によると、「ステート・アナーキズム」の略稱で、「國家主義」と「無政府主義」の二つの概念をちゃんぽんにしたものである。さういふものはあり得ないと、大抵の人は考へるであらうが、不思議なことには、日本にはこの「ステート・アナーキスト」が尠からずゐるのである。所謂「敎育社會主義」の中から出て、二三年の間に一躍「出版四天王」の一人になつた下中彌三郎氏の如きも、その一人のやうだ。彼は最近まで無政府主義系の農民自治會などを援助しながら、一方では又大西鄕に心醉したりする一面もあるのである。

今のところまだ彼は完全なる資本家になりきつてゐないし、商賣も板についてゐない。一見茫漠としてつかまへどころがないやうな印象を受けるが、しかしそこに、大西鄕からでも得たらしい裕容迫らざるゆとりがあつて、「社長」らしい風格がちゃんと具つてゐるのは、流石である。

大出版業者としての彼の地位は、今漸く出來かゝつたばかりで、他の「三大王」に比べるとかなり危つかしい。恐らく今度出した「平凡」の成績が彼の運命を決定するであらう。幸にして同誌が、「キング」や「富士」や、今度博文館から出るといふ「朝日」などを壓倒するか、或は少くともその間に伍して堂々たる存在を持續することが出來れば、それこそ「ステキズム」だ。

出版界のリーダー四人男

饒平名　智太郎

講談社の野間氏、改造社の山本氏、新潮社の佐藤氏、平凡社の下中氏其の人と事業の短評。

○○○

野間氏は僕の中學時代の國語の先生だ。其頃の野間氏は快活な放膽な、敎育者といふよりは一個の遊子ローマンテイストだつた。國語の時間に、よく八犬傳を聞かせてくれたものだ。氏の逸話は、學生の間にも

知れ互つてゐたから餘程遊んだものらしい。それの轉開策として當時の中學校長だつた大久保氏に世話して貰つたのが、今の野間夫人だ。氏の事業の根幹に、先づこの結合のあることを認識しておかねばならない。氏は、どつちかといふと、善良な、人から擔がれやすい性分だが總べずそれを牽制する者は夫人だ。妻君といふよりは、眞によい共働者だ。

雜誌『雄辯』を創始し、それのみで終始してゐたら、氏も今頃は、やはり敎育界の片隅に不遇を喞つてゐたかも知れないのだが、『講談倶樂部』を案出したといふことが、氏の運命を決定的にした。それも初めの頃は賣れなくて、友人に勸說して引受けさせようとしたが、誰も貰ひ手がなかつたといつたやうな時代もあつた。講談社を今日にした影の人に淵田氏がある。

野間氏は、何んと云つても日本の讀者大衆を理解してゐる點で第一人者だ。『キング』の創刊がそれを實證する。最近の全集物は、卽ち野間氏の『キング』における冒險の上に、組み立てられ、示唆されたものである。

氏が、今日の雜誌王國を築くまでには、幾多の涙ぐましい苦難があつた。彼の體力と、勇猛心とがそれを突破する上に有力なるファクターであつたには相違ないが、それには又社の内外に良友を持つたといふことにも依存してゐる。今日、世に傳へられるやうな野間觀は、眞に野間氏を傳へるものでない。氏を大西鄕に例へるような人が出て來たが、それは野間氏を知らず大西鄕をも理解しない者の言である。氏の持場は、王道ではない。

野間氏と氏の事業に全日本を抱擁する規模はない。氏の存在は反動日本を象徴し、講談社の運命は、反動日本の運命である。

改造社長山本氏を最近批評した者が、彼はシャイロックだよと云つたさうだが、氏もさぞ、むきになつて怒つたことだらうと思ふ。なるほど、氏は利に聰い人ではあるが、必ずしも利のみによつて動く人ではない。氏にとつての强い誘惑は權勢だ。これあるがために、氏の事業を華々しくし、又常に同業者間から危懼を以つて見られる所以でもある。

氏は創造の才はないが、——改造社の事業で氏のみの立案に係つたものは少い。『改造』といふ名からが他人の智慧である——人の考を實行する點において天才的だ。

あれ位長所を備へ、あれ位に短所を持つた人間も稀らしい。たゞしかし其の短所は、決して彼の事業の光芒を滅するものではないが、氏の感傷に今少し成長の餘裕を與へたならば、氏も人間的にもつと完成して行くであらう。

改造社の事業に缺けてゐるものは組織だ。其の點、氏は野間氏に讓らねばなるまい。

「雜誌王國」講談社時代から「出版王國」改造社時代を來らせようには氏も先づ此點に思ひを致すべきであらう。改造社か大きくなるにつれ、雜誌『改造』が低下し、其の發生意義を喪失し行く傾向のあることは、思想界に關心を持つ誰もの慨くところである。

新潮社長佐藤氏は何んと云つても、我國文藝市場の大御所だ。事業そのものと、實にぴたつとした人だ。

新潮社の事業は堅實一點張りだ。單行本など、決して濫獨に廣告を出さない。完成された觀である。それだけに溌剌とした新味を見出すことは出來ない。

「全集戰が決濟された後に尙殘るものは、新潮社位のものだらう」と云はれる。この評言は誇張に偏するやうだが、佐藤氏と其の事業振りを批評した言葉として受取れると思ふ。事業が完成されれば、主宰者個人の色彩は薄れるものではあるが、佐藤氏が、世間に名を出さうとしないところ博報堂の社長瀨木氏と、其の行き方を一にし、態度、實利に於て克得しつつある點があるであらう。

平凡社の出現は、出版界の驚異とするところだ。教育界の異端者下中彌三郎氏の名を聞くことは、久しいものだが、平凡社長としての御手並みを拜見させられたのは、極はめて最近だ。まるで出版界の横紙破りだ。ナイイブで素人々々した活躍振りは、近來の偉觀だ。

雜誌『平凡』の發刊は、何處に其のレーゾン・デートルを求めようとするか、われ〱には不可解だが、今迄のところでは、營利的に見ても成功ではなささうだ。矢張り素人だからこそ、出來る仕事だ。

個人的には全然知らないが、下中氏は、如何にも新時代の通曉力を持ち、從つて將來に期待される可能を持つかのやうだ。平凡社は危いといふうはさはよく聞かされるが、しかし、埼玉財閥が極力支持してゐるといふことであるから、大丈夫であらう。氏に、うんと仕事をやつてもらいたいものだ。

出版界も、今や他の產業の過程と同じく、資本主義が確立されて來た。資本の集積に妙を得て資本を理解する者の頭上に、勝利の榮冠は落ちて行く。だが、窮極に於て、彼等は小數金融資本の大魔手に身動きも出來ないまでに摑まへられるといふ運命に遭逢する。王子製紙と富士製紙と三菱製紙等々の製紙界を統制するそれと、秀英舍、共同印刷等々の印刷業を統制するそれと、博報堂、電報通信社等々の廣告取次業を統制し、それ等一切の上に君臨する大金融資本の諸魔王の前に跪くわけだ。

新著月評

地方自治と東京市政

菊池愼三著

蠟山政道

東京市會に於ける腐敗事件に關して、近頃種々なる意見や對策が出てゐるが、その中で本書の著者である東京府內務部長菊池愼三氏の諸提案が注意すべきものゝ一つである。氏の諸提案の中で、殊に度々力強く主張されてゐるものに市政機關に於ける總務局の設置なる主張がある。これは、我々行政學の研究者にとつては、西洋諸國の學者經驗家の說いてゐる所から、机上の議論としては逸早く學んだ所であるが、氏のやうな我が內務行政の實際に當られてゐる人の口から市政の實際的改革案として力說されてゐるのを見て、學說と實際との融合が裏書きされてゐるのを感じて非常に愉快を感じた。

そこで、僕は氏がどういふ機緣で、この主張をされるに至つたかを詳しく知りたいと思つて、氏の最近に出された本書『地方自治と東京市政』を相當丁寧に讀んで見た。氏には、本書を出される前既に『都市行政と地方自治』、『都市計畫と道路行政』なる二論文集があり、氏の地方行政一般に關する研究や見解を見るには、寧ろこの二書に據らねばならぬ。本書の前半を占むる諸論文も亦、この二書に收められてゐる諸論文と同じ種類のものである。兎に角、僕が本書を讀んだのは、行政學の學徒としての興味からであるが、ここに本書をこの欄で紹介しようと思ひ立つたのは、氏の都市行政及び地方行政一般に關する研究に就てではなく、本書の後半を占むる所の氏の東京市政觀に就ての諸論文が一般市民に興味のあるものと思惟したからである。

本書の前篇第七章から第九章に亘つて、初期の東京市政に就て、主として澁澤子爵の業蹟を中心としての記事がある。東京市政の現狀を知る上に過去の歷史が必要であることは云ふを須ひないが、我々は未だ市政研究者の批判的な見地からする東京市政の正史を與へられてゐない。そこで、明治二十一年の市制以前の帝都自治制の沿革や、その後十年間の三都市制特例に據る職務管掌時代や、明治三十一年の特例廢止に據る自治制確立以後に於ける變遷、わけても明治四十四年及び大正十五年の市參事會の權限縮少に關する改正の市政に及ぼした影響などに就て、サイドライトを投げる記事が甚だ有益であると共に、市政の內面を知る上に興味があるのである。澁澤子爵の活動や業蹟を傳へることは子の個人としての偉大を示すものであると共に、東京市民の自治生活の無能を語ることともなるもので、氏の記事もそうした觀點から甚だ面白い資料を提供してゐると思ふ。

本書の後篇は「東京市政を管掌して」と題されてゐるが、氏が昨年の十二月西久保市長辭職の結果として、職責上東京市政の事務を管掌された、一ケ月足らずの間の經驗を中心として、平素の研究に據る意見を敍べられたものである。その中に、氏自身が都市行政に興味を有たれ、殊に東京市と因緣の淺からぬ所以をも語られてゐるが、そうした氏の經歷や關係あればこそ、かうした敍述も生れたものであらう。それだけ氏の意見は一朝一夕の偶感でない丈け尊重に値するとも言へる。尤も、市長職務管掌によつて得た市政觀と言へば、この前即ち大正十三年の秋、その任に就いた堀切善次郎氏の發表されたものもあるが、本書の著者は氏の意見をも全部載錄してそれを註釋し自己の意見をも附加されてゐる。著

者たる氏の東京市政に對する意見は、二つの點に重心を置いてゐる。その一つは市高級幹部の組織に關するもので、彼の注意を惹いた總務局設置案もこの中で主張されてゐるのである。これは、行政學上で謂ふ所の行政組織の結合原理に關するもので、中央政府の場合で言へば大藏省主税局と大臣官房の諸課とを併せたやうなゼラネルボールドの事である。或る特定の分科した行政部門、卽ち土木、衛生、敎育、と言つたやうな應用的社會的任務を目的とするものでなく、これらの行政の爲めの行政を一般的に行ふ機關である。かうした機關があつて始めて尨大な、複雜な行政組織の統合(インテグレーション)と事業の繼續とが可能となる。東京市のやうに、首腦部の更迭頻繁なる行政にかうした機關の參備を見てゐないのは、市政の羞恥と不能率とを二重に來す所以である。氏の提案が、市政の實際を觀察した所に基いてゐる丈け、單に學理の上から丈けでなく、一層傾聽に値すると思ふ。

氏の第二の意見は、復興事業にからんだ市財政策の一端である。復興事業といふ特別の負擔を負ふてゐる東京市政の財政的現狀が極めて困難なものであることは想像に餘りあるが、氏はこの問題を一般的に都市財政權及び制度の上から論ずることを忘れずに、東京市の特殊的狀態の政善策を提唱してゐることは、その立論の用意に於て我々を服せしむるに足るものがある。最近に於て、市來市長の財政計畫が一度發表され、今日停頓の狀にあるを見る時、我々は著者の如き研究家の言に聽いて、眞に十年、二十年の大計の樹立がなさるることを望まざるを得ない。

この外、氏の東京市政雜感や市長職務管掌日記などを讀むと、東京市政の內面的事情がいろ〳〵の方面に就て垣間見られるやうな氣がする。東京市政改善の對策を系統的に論究する前に、あるが儘の市政の內容や動きに就て、適確な智識を持つ必要がある。かうした趣旨から見ても、本書の如きは、市政に就て心ある者の一讀に値するものと思ふ。(菊判三〇〇頁・定價二、六〇・東京小石川區水道町四七・良書普及會)

歌舞伎概論
飯塚友一郎著

三田村鳶魚

無二の書物である伊原君の日本演劇史があ

現代の哲學問題(得能文著)　本書の特色は何と云つても哲學と生活の融合に主點を置いた所に在る。現代哲學思想の一般を說いて哲學を冷徹な思辨から引下して、文化と精神生活とに結緣させ、殊に初學者にも理解出來るその平明な叙述は、一般讀書人の望むところであらう。(菊版二五〇頁・定價一、八〇・東京麴町區一番町五・第一書房)

茶話抄(薄田泣菫著)　泣菫氏の隨筆の持味は今更吹々するを要しないが、然し氏の多識多趣味には一驚を喫せずには居られない。全卷百五十餘項、茶話としてはあまりにこくがありすぎ、舌頭宛轉の妙境を忘れ難からしめる。(四六版三二〇頁・定價一、二〇・大阪市西區靱上通一ノ三一・創元社)

文學の發生(土田杏村著)　前著國文學の哲學的研究の第二卷で、本卷では日本文學の發生卽ち上代歌謠及萬葉時代から平安朝初期迄を對象として、これらの文藝思想を歷史的社會的文化生活の內面的な立場から取扱つたものである。(菊版三九〇頁・定價二、五〇・東京麴町一番町五・第一書房)

ところてん(勝田主計著)　現文相勝田主計氏の隨筆俳句集である。手向草、鎌倉草庵の記、隣に咲く花、支那紀行等とりどりに面白く、又挿畫の書翰スケッチも興深いものがある。(四六版四〇〇頁・定價一、二〇・東京日本橋區濱町二ノ一四・日本通信大學)

高山幽谷を尋ねて(武市雄圖著)　續篇日本文化史と別名せる如く、我國の社會史經濟史を編纂を主とした立場から考察した實に

るのみならず、歌舞伎に關する有力な古人の記錄や著書乃至隨筆漫錄まで、眞に汗牛充棟といふほど、活字版になつて世間に出て居る、其の上に現代の人々が此の方面についての著書の刊行される分量は殆ど計數し難い程なのだが、取纏つたもので手近く歌舞伎芝居といふものを簡明に納得させるものはと云へば、誠にお生憎樣だけれども、未だ無いやうだ、それは決して我等が知らないのではあるまい。

今日歌舞伎芝居を知らうとする者に取つて、知らせて置かなければならぬことを纏めて書いたものは、我等は他に本書に比ぶべきものがあるまいと思ふ、舞臺を中心に善く行屆いた說述は、此の上もない概論である、別に創見とか新說とかは見へないが、是非とも知つて居なければならないことだけは盡してある、云はゞ丁寧親切な歌舞伎研究入門なのだ、廣く世間から歌舞伎芝居を見て、其の交涉聯絡の樣子を考へる仕き方や、細長く歷史的に沿革變遷の經過を尋ねる仕き方にしても、其の前に歌舞伎概論だけの智識がないと、手を下すのに何處から始めて好いのか知れぬ、一體歌舞伎芝居といふものは、坊さんのいふ般若は旋火輪のごとしだ、旋つて居る火の輪では手の附けやうがない、全く手の附けやうがないのだと云つても、それが何故だか、歌舞伎概論を讀まなければ此の譯さへ知れまい。

菊版で六百六十九頁、序論緒論八章四十二節、決して勘い分量ではないが、それで簡潔明瞭に書いてあるのだ、下手に冗漫な云ひ方をすれば、必ず此の幾倍かの紙數にならう、それほど歌舞伎芝居を舞臺に限局して見ても、彼の自體が複雜な綜合から釀成されて居り、それが形跡の求め難い程に融化されて居るから、其の解折條暢は容易な事でない、著者は善く此の困難な作業に堪へ、殆ど一目瞭然といふ程に仕上げた、特に一々參考書目を擧げてあるから、讀者は更に手掛りを得て、其の上の研鑽に取附けもしやう、又た入念な索引も附いて居るから、此の大冊を手輕に利用することも出來やう。(菊判六六九頁・定價六、〇〇・東京小石川區戶崎町四六・博文館)

カジヨリ初等數學史

小倉金之助
井出彌門　譯

平林初之輔

奇拔な研究である。(四六版四〇〇頁・定價一、八〇・東京日本橋區數寄屋町・六合館)

政治學に於ける方法二元論(今中次麿著)社會科學的方法論を以て新しく政治學を見直さうとしたのが本書である。諸思想家の政治哲學及國家觀を檢討し、政治學の基礎概念、國家統制論等創意に富む。(菊版三七〇頁・定價二、八〇・東京本郷區湯島切通坂町一九・コゴス書院)

面白き蟲界の教材(松村松年著)面白い蟲界百般の現象は又人間生活を暗示するものがある。本書は蟬、螢、螺蛉、蜻蛉、紋白蝶、蝶の話、長脚蜂、胡蜂の話、蜘蛛の十種に亘つて詳細に述べてゐる。(菊版三三〇頁・定價三、五〇・東京神田區表神保町三・東京堂)

天然紀念物及名勝調査報告(三好學著)天然記念物名勝調査報告の中本書は植物の部第八輯で、山梨・岡山・香川・高知・青森・秋田・栃木・長崎・佐賀・福岡・山口・奈良・三重・滋賀十四縣下の部が收められてゐる。(四六倍版八〇頁・寫眞版四〇葉・定價三、五〇・東京神田區北甲賀町二三・刀江書院)

月下の一群(堀口大學譯詩集)前に公にした二つの譯詩集月下の一群と空しき花束を打つて一丸とし、それに新譯數篇を加へたのが本書である。堀口氏の譯詩に就いては世評が定まつてゐるが、特に附記すべきは本書の裝幀の豪美な一事である。(四六版七〇〇頁・定價三、五〇・東京麴町區一番町五・第一書房)

萠えいづる草(吉地昌一詩集)社會意識をもつてかゝれた傾向詩である。(四六版二〇〇

およそ學問と名のつくものゝ中で數學ぐらい無味乾燥なものはないと考へられてゐる。そして數學ほど中等學校の生徒を閉口させ、中等學校卒業後は專門の學校に向ふものを除いて數學程完全に忘却されてしまふものはない。これは中等學校に於ける數學敎育の方法にもよるだらうし、就中、數學に興味を起させるやうな書物が一册もなく、數學は受驗のためにいや〳〵ながらも學習しなければならぬ厄介な學問だと頭から決められてゐるからであらう。

數學史の世界的權威フロリアン・カジョリ教授の名著「初等數學史」は數學に對するからした考へ方を一變せしめる。本書は原始民族の數へ方、記數法から說きおこして、專ら初等數學のみの最近までの發達を記し、各國の數學敎科書の批評、數學敎育に關する近代的運動に至るまでを親切に說いてゐる。本書に於て私たちは原始人から文明人への數學發達の歷史のうちにさながら幼年時代から成年時代に至るまでの個人の數觀念の發達の歷史を辿ることもできると同時に、數學の發達を中心として人類の一般文化發達のあとをも辿ることができる。實際數學史ときいて最初二の足をふむ讀者も本書を讀み出したら卷をおほふのが困難な位である。

一般には譯書は原書よりも劣つてゐるのが飜譯の性質上當然なのであるが、本書の場合はその例外である。といふのは譯者が日本數學界の權威だからといふわけではなくて、原書にない多數の脚註と二百の數學敎育史に關係のある得難い挿畫が附加されてあるからである。譯文は平明にして飜譯的臭味は全くない。中等學校の參考書としても有益であらうが、私は特に國民の一般敎養の書として本書を推薦したい。（菊判五一〇頁・定價五、〇〇・東京神田區北神保町・山海堂出版部）

佐藤鶴吉著　元祿文學辭典

眞山青果

狹くにも世に出づべき筈の此種の編輯が、篤學の著者によりて完成されたのを、先以てわれ等の欣びとしたい。大正震災の前後と記憶するが、文章俱樂部といふ雜誌の廣告文に西鶴の言葉（?）と題して、西鶴文學の難解語に註釋せる小辭彙の連載せらるゝを知つた。その雜誌の內容と不似合なる發表と訝しみながら、早速雜誌を購ひ求めて見ると、署

頁・定價一、四〇・東京神田區小川町四一・淼文館）

時計讀本（米國ウオルサム時計會社編）ウオルサム會社が御大典紀念出版として、時及時計に關する全般的な知識を輯編して、實費を以て頒たんとするものである。此種出版物の世に出る事は稀しい。（四六版二〇〇頁・實費〇、六五・東京麴町區有樂町一ノ一・米國ウオルサム時計會社）

農村問題の社會學的基礎（土田杏村著）農村問題の解決は現代日本の前に横たはる大なる疾患である。本書は都會と農村との根本關係を明かにし、文明問題としての農村問題を解決する根本原理と方策とを示し、新社會運動に於ける農村の役割を說き示唆に富む。（菊版一四〇頁・定價一、二〇・東京本鄕區湯島切通坂町一九・ロゴス書院）

價値學說史（第一卷——正統學派の價値學說）（波多野鼎著）本書は正統學派の代表的經濟學者としてスミス、リカアド、マルサス及びミルを選び、それ等の學說を叙述すると共に之に內在的批判を加へつゝ、價値學說の史的發展を檢討したものである。著者は序文に於て本書は「學問的精進への貧弱なる一里塚である」と謙遜してゐられるが、かゝる堂々たる體系的研究を公表せられたことは學界の喜でなければならぬ。（菊版三二九頁定價二、八〇・東京神田・巖松堂）

子供研究講座第一卷（育約出版・東京本鄕區駒込上富士前町一〇九・先進社）

アイルランド文學の闘爭過程（帆足圖南

名に佐藤鶴吉氏とあつた。正直に云へば、その研究にはかなりたど〳〵しいところもあり、解釋にも妥當ならぬ點も見えるが、たゞ然し、著者が乏しい資料ながらも、それに食ひついて離れぬ熱心ぶりと、いかにも質朴無華なる研究態度には注意すべきものがあつた。新潮社長橋香君を訪問して筆者の經歷などを問ふたが、「埼玉縣熊谷邊の人にて、加藤武雄君の知人」とのみにて、詳細をつくし得なかつた。その後も注意してゐると、一昨年頃からボツ〳〵と、「國語と國文學」「國語國文學の研究」「俳屋」などの諸雜誌に、同氏の西鶴難解語の研究が發表せらるゝやうになつた。その業績を見ると、果してその研究範圍も一歩づゝ確實に擴張せられ、鶴翁の小說を出て俳諧の部門に進み、姉妹文學たる近松物八文字屋本にも及び、且つ渉獵引證の文獻も次第に藩籬をひろげて行かれるのを見て失敬ながらわが着目の誤らざりしを悅ぶと共に、未知の同君のため又學問のために、必ずその研究の大成さるべき日のあるを期待してゐた。

それといふは、自分は兼てより本邦國語學の研究は、今一進歩して、近古の時代語辭典の完成を急ぐべき時期に到達してゐると信じてゐるからである。西鶴などの場合を云つても、その文學の鑑賞的批評的研究はかなり多いやうだが、それ等の人々でさへも、果して完全に彼の著作を讀み、西鶴が聞かせやうとした言葉の内容を、誤りなく彼の著書に讀み得た人が、何人あるであらう。自分は現代の讀書生が近頃際立つて、近代日本國語に對する感銘情操の把握が失はれゆくのを見るにつけて、時代文學の討檢には、先づその時代語の精到なる研究を急務とすべきものと痛感してゐる。西鶴文學に對する諸研究家は、何よりも第一に、彼翁の著を正しく完全に讀むことから始めねばならぬと思ふ。然るに在來の元祿時代語の解釋は、遺憾ながら十分と云はれない。これを辭書に見ても、上田松井兩氏の大日本國語辭典落合芳賀兩氏の言泉なども、元祿語彙の採拾には甚だつとめてゐられるやうだが、各時代語を通じて元祿期の言葉の解釋に最も誤謬多く、信賴なしかねる點が少くない。その意味に於て自分は、三田村氏林氏などの諸先輩が率先して西鶴輪講會を開き、西鶴の研究をその作品を正しく讀むことより始めやうとつとめ、又未見の篤學者樋口慶千代氏が、近松を中心とする元祿語辭典の編纂に盡力せらるゝと云ふ消息を聞くのは、われ等

夫著・四六版二一六頁・定價〇、八〇・東京市外杉並町高圓寺五五一・思想教育研究所）

櫻の國地震の國（堺利彥著・ユーモア全集第五回・東京神田區表神保町六・小學館集英社）

政治學要論（今中次麿著・四六版二七〇頁・定價〇、八〇・東京本郷區湯島切通坂町一九・ロゴス書院）

生命の學級經營（今宮千勝著）學級經營の理論と實際から、教育哲學の究明及教授法の原理及應用を說いて、教育及教育者と社會との聯結に及んでゐる。此種の著書として出色のものであらう。四六版三一〇頁・定價二、二〇・東京牛込區赤城元町三四・文教書院）

詩劇集戀の黃昏（田中清一著・四六版二四〇頁・定價一、二〇・東京市外世田ケ谷町下北澤九二五・詩神社）

靖獻遺言講話（加藤咄堂著・菊版二八八頁・定價二、〇〇・東京小石川區原町六・丙午出版社）

戲曲集沓掛時次郞外五篇（長谷川伸著・四六版三〇〇頁・定價一、二〇・東京下谷區上野櫻木町四五〇・柳蛙書房）

世界經濟年報第二輯（ヴァルガ著・經濟批判會譯・四六版三六〇頁・定價一、〇〇・東京牛込神樂町二ノ一一・叢文閣）

朝鮮風土記（難波專太郞著・四六版二二〇頁・定價一、三〇・京城府本町一ノ二八・大阪屋號書店）

愛讀者のために福音とすべきであらう。而して又今こゝに、佐藤氏のこの好著をその間に加へ得たのは實に學徒のために、欣幸とすべきことゝ思ふ。わたしは藤井、藤村、吉澤の三博士が同書卷頭に序言せられたる感嘆文に全然同意を表して、この書の刊行を祝福する。

偖て、最後に、本書繙讀の際に感じたる二三の不滿を述べて、本文を結びたい。それは決して白璧の微瑕ともいふべき些末なる缺點を穿鑿して、自らを快とするためではない。編者佐藤氏の撓まざる努力と研究とは、この書を第一期編輯として、必ずや將來元祿文學の中辭典大辭典の結成があるべきを信じて、著者の再考に資したい微意に外ならない。第一に感じたことは、編者は餘りに既成辭典に權威を認め過ぎはしなかつたらうか。或は又編輯を急ぐ事情などのために、疑を置くべき筈の既成辭典の解釋をも容易に信じて、研究心を降されはしなかつたかと思ふ。その二三例を云へば、いまおり(今織)を今風の織物と解し、はしらかしじる(走汁)を手輕にこしらへた汁と解き、なゝところこしらへ(七所拵)を刀劍の部分をそれぞれ專門の者に拵へさせたものと云ふが如き、大日本國語辭典や言泉の誤謬をそのまゝ踏襲された點がかなり多い。これはやはり最う一步踏み出して、(一)その時代に京都織出しの金襴地。(二)落し味噌汁、實なし汁。(三)緣、頭、目貫、折金等の七所を對にして、彫細工を揃ふるものとするまで、兎に角既成辭典に對する疑を深くして、研究を別途に進むべきではなかつたらうか。次に氣のつくことは、著者の專攻課目以外のため、己を得ないことでもあらうが法制經濟に關する術語、當時の商習慣に關する用語等に、目立つて誤謬の多いことであらう。例へば帳切銀、唐へ投銀、江戸爲替、二口拂、片見世、掛目安等の解釋は、その概念すら得がたく、又株、十分一銀、樽代のやうな必要なる語彙を多數に逸したごとき、西鶴の作品が飽迄も實世間的常識に立脚して書かれてゐるだけに、特別精確なる調査と記載とが望ましく思はれた。次に、自然の時、時分がら、斟酌、なる程とのその時代の慣用語訛用語については、現在使用の意義との差異をもう一段詳細にして、時代語としての特徵を明かにされた方が、初學の人々に對する深切であつたやうに思はれる。(四六判七一〇頁・定價二、八〇・東京牛込區矢來町三・新潮社)

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルディング七七六區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内 二〇六番

代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金はなるべく振替を御利用下さい。
御註文の際は郵税をお忘れなく。
宛名は必ず「中央公論社代理部」として下さい。

前號の本欄で代理部の取次販賣を發表して以來、多數讀者諸君の便宜に投じたと見え、續々註文が殺倒して參ります。そのために代理部員一同大いに力を得て、益々優秀品を精選して皆様の便益を圖る事に努めて居ります。
本社の代理部は、信用のある物品を責任を以て簡便確實にお取次する事を信條といたします。奮つて御利用下さい。
又物品の撰擇に迷はれる方には調査解答もいたしますし、左記物品以外の御希望もありましたら御遠慮なく御申越下さい。

バーバリー・レインコート

スプリングコート兼用

英國製と同様の生地を用ひた純國産品です。多額の運賃と少からぬ關税とを仕拂ふ必要がないだけそれ丈、品質も仕立も非常に吟味されたものです。これならばスプリングコートともなり、天候の危ぶまれる日の外出にも安心して着て出られます。
色は紺・テツ・茶系統の常に最も嶄新な流行色で、寸法は襟下餘尺二尺六寸から二寸毎に三尺二寸までそれぞれ取揃へてあります。

各色共一着 金拾九圓
送料東京市内十二錢 内地十八錢 鮮土四十五錢
見本は二錢切手封入御申込の事

純良レインコート

純良なイートジー印のレインコートをお頒ち致します。上等の羽二重に良質のゴムを裏附けしたもので、尚裏面には上品な縞柄が染出してありますから、その氣品の良さは從來の舶來品の比ではありません。
色はネヅミ及茶系統の最も嶄新な流行色を選んだもので、現在盛んに海外に輸出されつゝあるものです。
寸法は何れも襟下餘尺二尺六寸から三尺二寸まで二寸毎に取揃へてあります。

各色共一着 金拾參圓
送料市内十二錢 地方十八錢 鮮土四十五錢
見本は二錢切手封入御申込の事

シエービング ローション

顔剃り、髭剃りの後には、安物の化粧液をつけると、顔にぶつぶつが出來て、却つて惡い結果になりますが、女のやうにクリームをつける譯にもゆきませんから、今度髭剃りの後につける化粧料が創られました。これは一種の皮膚の保護劑の效果を持つ一方、ニキビなどにも特殊なきゝめを持つものです御試用をおすゝめいたします

定價 壹圓五十錢 送料十八錢

パルナシヤン ヘヤートニック

油をつけるとベト〳〵し、何もつけないと髪の毛が惡くなる一方ですが、今度理想的なローションが創製されました。

それは從來ありふれたふけ取り香水のやうにアルコール分の多いのではなくて、ふけ取香水の爽かさと、香油のやうな滋養劑を含んで皮膚を刺戟するので、絶えずフケを除き、脱毛を防ぎ、香水のやうな芳香を持つ凡ての點で優秀な品です。國産奬勵の意味で、外國品に優るとも劣らぬ自信のある品です。男の方にも女の方にも共通に使用出來ます。

定價　壹圓五十錢　送料十八錢

美麗なるケース入ですから進物用にも好適です。

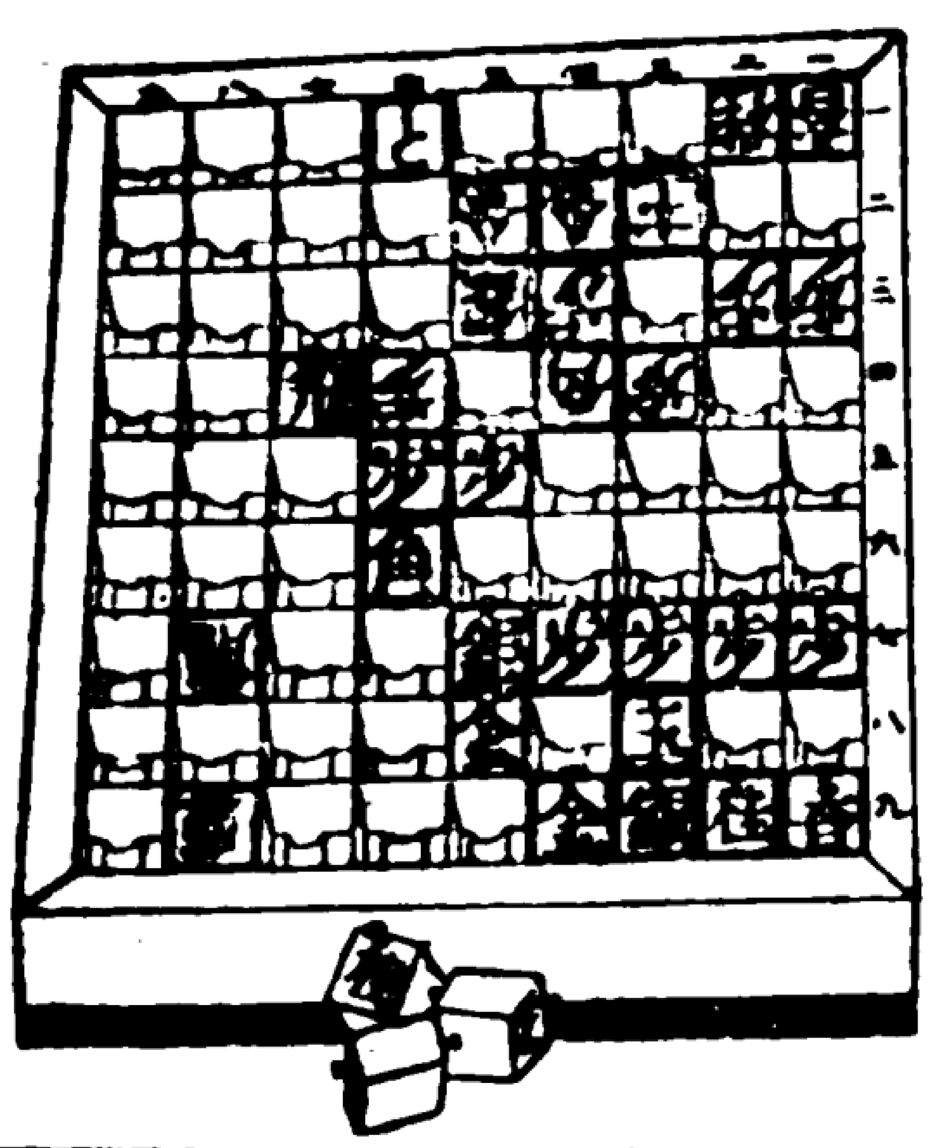
携帶用

輕便將棊盤

縱三寸七分橫三寸二分厚サ五分の輕便將棊盤です。木とアルミニームで造られてありますから、ポケツトに入れて少しも重くなく駒には一個一個鐵針が附けてある等婦女子の眼にも可愛らしいものです。

駒は標準文字を用ひ盤には縱橫に數字が記されてありますから、新聞を見乍らの研究には一層便利です。

其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。



定價（駒全部附）　金壹圓八拾錢
送料市内十二錢　内地十八錢　鮮臺四十五錢

河瀬トンビ襟

和服用二重マワシの何れにでも取附け自由に工夫されたカワウソのトンビ襟です。

春暖の日には簡單に取外しが出來て、嚴寒の候乃至新春の禮服の上を被ふ二重マワシの襟にこれがあるだけによつて少からぬ重々しさを加へます。

種類は餘りに贅澤に渉らない最も實用的な左の四種類とし、何れも確實なものばかりを選びました

定價一號　金七拾五圓
二號　金五拾圓
三號　金參拾五圓
四號　金貳拾五圓

送料は何れも市内十二錢　内地十八錢　鮮臺四十五錢

舶來・自働研式

バレイ安全剃刀

安全剃刀には多種多樣あります が、バレイほど完全かつ簡便な優秀品はありません。巧妙な機械裝置によつて、いかなる素人にも立派に砥げます。從つて毎日使用しても一枚の刄が半年以上はもちます。その切れ味に就ては賣光の古銘刀のそれに匹敵することが既に證明されてゐます。

C型（革砥、替刄三枚つき レザー箱入）　一圓八十錢
同　同　二圓
B型（革砥、替刄一打つき ニツケル箱入）　十三圓五十錢
送料市内十二錢　内地十八錢　鮮臺四十五錢

強精劑リンプリン

一時性の昂奮劑ではなく、其の吸收性は極めて敏活で、血肉細胞の新陳代謝を旺んにし、全身神經を強壯して、特に神經衰弱に偉效を奏する最新強精劑であります。

純白色の錠子に造られた本劑は極めて佳快な獨自の芳香を放ち、藥劑の服用を慊忌する婦人であつても喜んで用ゆる事が出來ます。

定價（二週間分）　金參圓五拾錢
送料市内十二錢　内地十八錢　鮮臺四十五錢

紋染紙製

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備し、シカモ布よりも丈夫で洗濯が出來るといふ重寶な品です。この紋紙製品は婦人公論代理部で好評を博してゐますので、本誌でも特に格安にお取次いたします。

定　價（大）一圓廿錢　（小）八十錢
送料市内十二錢　内地十八錢　鮮臺四十五錢

滿洲旅暦

田山花袋

△

今度は成るたけこの前に行かなかつたところを見やうと心がけた。從つて蒙古もあちこちからのぞいて見たし、ロシアの國境近くまでも行つたし、興安嶺の山の中廿六露里のところ近くまで馬トロに乘つて行つて見たりした。中でも殊に困難だつたのは、吉敦線を敉河まで行つて、そこから敦化に入らうとした時だつた。それは馬賊も怖かつたがそれ以上にその土地の排日が恐ろしかつた。試運轉の日に乘せて貰はうとして、何うしても乘せて貰へず、殆ど突飛されるやうな眼に逢つたことを記憶してゐる。

敦化の山の中のことは、その時かなりに詳しく聞いた。ピストルを持つてゐるために殺された話や、またさうかと言つて武器を持たずには旅行出來ない話や、馬賊の他に猛獸なども多く、猪や豹は言ふまでもなく、豹や虎にも常に出會すことを覺悟しなければならないといふ話などを聞いた。敦化から額穆、額穆から寧古塔あたりは、北滿を旅行するものの是非とも入つて行つて見なければならないところだが――でなくては渤海や高勾驪のことなどもはつきりとはわからないやうなところだが、今まで誰も入つて行つたものはないらしかつた。

つまり朝鮮の東南境――琿春、會寧あたりまでつゞいてその中に長白山の一大山脈を包んだ地區、そのあたりのことをもう少し深く細かく探究することが滿洲旅行者に取つて非常に必要であることをつくづく感じた。

この山の中は今度吉會線が出來るので、次第に旅客の注意を惹くやうになるであらうが、歴史的にも地理的にも面白いところであらねばならなかつた。金や淸の發祥地が全くその山の中にあつて、それが唐時代の渤海大氏のつゞきであることなどがいろいろに考へて見られるやうなところだつた。

△

五年前と今とでは全く空氣が異つてゐて、長春まで行つてもまだ內地のつゞきであるやうな氣がしてならなかつた。ちつともさびしくなかつた。またちつとも曠野といふ氣がしなかつた。それといふのもあたりが樹木で十分に彩られ、楊柳の綠が非常に多くなり、野が落花生や野菜で靑々としてゐるためであつたらう。やつぱり人間の力だといふ氣が深く深く考へられた。

日露戰爭の時に上陸した貔子窩あたりも金福線の汽車の內から見て通つた。あの上陸した時に最先に登つた靑雲山が樹木で靑くなつてゐながらもそれとはつきり指すことが出來た時には、何とも言へないなつかしさを感じた。あのあたりは關東州であるだけにことに內地の人達の努力が目に立つて、その時とは丸で別のところのやうな氣がした。高粱の畠、玉蜀黍の黃い收穫、海近い鹽田、貔子窩から城子疃に至る間はことに秋の收穫の色の鮮かで且つ明かであつたことを記憶してゐる。

營口はこの頃いくらか復活したやうな形を見せてゐた。しかしとても戰時に見たやうなあの繁華を見出すことは出來なかつた。あのドイツ生れの美しい妓だちの徜徉した遼河の畔の小さき公園はそれでもまだ依然として殘つてゐたにはゐたけれども、一二本の柳がたゞさびしく靡いてゐるだけで、花壇の花などはその面影をそのあたりに見せてゐなかつた。

遼河の濁流はすさまじい光景をあたりに漲らせてゐた。それを私達のランチは上流から次第に下流へと下つて行つた。溝幇子に行く支那の汽車の發端驛の建物が、あかく下流に朝日を帶びてかゞやいてゐるさまは何となく大陸的氣象を感じさせるに十分だつた。

△

十年經てば成功する。その十年經つた果樹園が關東州の到るところにその鮮やかな鈴生の實を見せてゐるのは見事だつた。主として林檎に鴨梨。ここに旅順と金州と普蘭店と熊岳城とがその盛んな形に於て目に立つた。今では土地の名物になつてゐるらしく、到るところで編んだ籠の中に新しい採り立ての林檎を入れて置いて賣つた。何でも土地の話では、滿鐵をやめた人だちのやる仕事としては果樹園が最も適當な仕事だといふことだつた。たゞ十年、その十年を經營するのが難儀だが、それさへ通過すれば必然に成功する。私は此前行つた時に果樹園の希望なき嘆息を常によく耳にしてゐたので、今度は到るところの沿道の果實の鈴生を一種祝福したいやうな心持で見て通らずにはゐられなかつた。

林檎も青森や北海道のものよりは好いと思つたが、鴨梨は一層大連の秋の果物として他に期待することが出來ないほどの旨さを持つてゐるのを私は感じた。日本の梨などはとてもくらべものにはならない。たゞ惜しいことは、腐れが早くて五日と持たない『何うかして持つて行つて二つ三つ食はせてやりたい……。』それを食ふたびに何遍となく私はかう口に出して言つたが、しかもとても內地まで持つて歸ることは出來ない。それがまたこの鴨梨の珍重される所以かも知れない。

△

展望車で見た落日の美しさを私はこゝに書きたい。それは奉天から四平街へと向つて行きつゝある時。三面の玻璃窓。それをすいすいと掠めて通つて行く黃葉した楊柳。滿洲では主としてこれが秋の色を代表してゐるのであるが、それを透して大きな日輪が光焰もなく地平線の上にころがるやうにして落ちて行く。車內には空いた椅子もなしに、滿鐵の重要な

人達の家族や、美しい娘や、若い貴族の子息などが竝んで乘つてゐて、何のことはない近頃流行する新聞小說の一のシインに似た光景をあたりにひろげてゐるのであつたが、それには頓着なしに夕日は次第に低く低くなつて行つて、遠く長いスロオプを成してゐる丘の上に靜かに靜かに落ちて行くのだつた。普通なら、常に私の傍にゐるI君に、（好いねー）とか（何とも言へんね！）とか言ふのであるが、それさへ口に上らぬほどそれほどあたりは靜かだつた。夕日は一刻毎に次第に落ちて、たうとうその形は餘照ばかりを殘すやうになつた。そしてその間を展望車は大風の吹くやうな響をあたりに漲らせつつ一望際涯ない曠野の中を全速力で走つて行つてゐるのである。

△

長春からハルビンに至る間では、全く荒漠とした原野を味ふことが出來た。ところどころにさびしさうに立つてゐる停車場、その傍の柵によりかゝつて汽車の通るのをさもめづらしさうに見てゐるロシアの子供等、その驛舍を疎く取卷いてゐるアカシヤと楊柳の黃葉、高粱の收穫の後の落穗を拾ふために無數に野に集つて來てゐる鴉の群、ことに遠く天にくつつきさうになつてゐるところにポツポツ點を打つたやうに立つてゐる樹木、近く遠く豕と牛と羊とが雜り合つて、またそれと同じやうに人間も雜り合つて、或は大きな群を、或は長い列を、或は丸い圈をつくつてゐるのを見ると、渺々とした感じがひしと私の胸を襲つて來て、宇宙の大きく寫廓の濶く人間の小さくはかないのをひしひしと感じさせずには置かないのだつた。そしてその地平線の上に、何の事はない丁度蜃氣樓か何ぞのやうに、塔を、瓦甍を、白堊を、丘の上に半ば凭るやうになつてゐる樹木と家屋を、低く凹く落ちてゐる市街の向うに大きく濁つた松花江の光つてゐるのを目にした時には、私は思はず聲を擧げた。

△

ハルビンではロシアがすつかり支那側に押されてゐるのを私ははつきりと感じた。それは五年前に兩方が互ひに對抗し

てゐたのを見てゐただけそれだけ一層さういふ氣がしたらうと思ふ。それにしても支那の中央部が政治的にさうさせてゐるのではあるまいが、兎に角ひとり手に入り込んでゐる漢人の進出！それはあの潮のやうな山東の苦力ばかりではない、相應資産を持つた人達もぐんぐんこの曠野を目がけて突進して來る形が著しく眼に附く。傅家甸のあの賑かさ！郊外に大きく建てられた孔子廟や極樂寺の立派さ！それを見ただけでも支那人がいかに落附いてこの曠野の中に生活してゐるかといふことが指さゝれる。それと比べたら、ロシアは東部からぐつと手を引きはしないか。こつちの方面は出やうにも出られない。まアその中時機が來るだらう、それまで待て。かう言つて引込んでゐはしないか。そして東部よりは西部、庫倫、賓貫城邊から支那の西北に食ひ入つて行かうとしてゐはしないか。その結果がこの春から夏にかけてのコロンバイル事件となつたのではあるまいか。またそれに連繫して、支那の兵隊が興安嶺の向う側——ハイラル、マンジュリア附近に多く集められてゐるといふ形勢もその間の何等かの狀況を語つてゐはしないか。それにつけても支那の漢人の進出力の根强さ——日本でもロシアでもとてもそれは太刀打の出來ないのを到るところで私は眼にした。

さういふ形から言つても、ハルピンは地勢上重要な一つの點であるといふことを私は痛感せずにはゐられなかつた。從つて一朝事が起つた時には、必然なこととして三國は三國ともこゝを完全に攫むことについて努力するに違ひない。私は松花江の濁つた奔流に對してそんなことを考へながら長い間立つてゐたことをこゝに記して置きたい。

△

ワゴンリイの寢臺は兩方が板の面になつてゐるので何となく欝陶しいやうな氣がするけれども、長く足を延ばして寢られるやうになつてゐるのが好い。成ほどこれなら一週間でも十日でも樂に長い旅が出來るわけである。後には食堂に行くのに倦きて、私達は汽車を下りて湯を貰ひ麵麭を買つた。

夜中に昂々溪驛を通つて次第に興安嶺の方へと行つた。

前夜が中秋で、ハルピンの街では商賣を休んで店を閉めたやうな家が多かつた。支那ではやつぱり今でも舊慣を捨てずに、一年一度の佳節を祝つて月を中空に仰ぐらしい。それにしてもハルピンの中秋の爽さ！乾反葉（ひそりば）がガサガサと散つて、さえた夜空に敷石の上を行く馬車の馬の蹄の音が高く響いだ。『これでは紅葉も何もないね。もうすぐ冬になるのだね！』などと言つて、高い空から寒い氷のやうな月を仰いだ。ところが十六日も月が明るくて、それが私達の乘つてゐる寢臺の窓からさし込む。それが行つても行つても離れない。次第に興安嶺になつて、低い丘陵のやうな山がなだらかにその下にあらはれて來て、それがいつまでもいつまでもつゞく。私達は目さめては眠り眠つてはまた目さめる。しかも夜もすがら月がその低い山の上にあるのが何とも言はれず私の旅の心を惹いた。

名をきいただけでは興安嶺は非常に深い大きな森林の濶く連つてゐる山嶺のやうに思はれるが、行つて見てこれほど豫想の裏切られるところはない。汽車で通つただけでは山とは思へないくらゐである。また山にしても、白樺の木がところどころにポツポツ生えてゐるくらゐなもので、森林などは藥にしたくもない。しかしチ、ハルからゆるい勾配で長い間のぼつて來てゐるので高距は千米から千五百米ぐらゐはあるらしい。何の事はない、淺間の裏の草津高原のやうな感じのするところである。ある停車場で支那の苦力が石油の罐に何かきたならしいものを一杯入れて賣つてゐるのを、ロシアの貴婦人だちが頻りに手で掬つて味つて見てそれを買つてゐるのを目にして、何かしら？と思つたら、それは苔桃で、それを採つて賣ると立派に一日の勞働に値ひするといふことである。高山地方の一つのシインとすることが出來るであらう。この間に停車場が二つ、長いトンネルが三つぐらゐある。汽車は丘の間でも縫ふやうにしてぐるぐる廻つて通つて行く。

イレクテで下りて二十六露里近くまで馬トロで行つた。此間の荒寥としたさまは忘れられない。そこには雉や鷹や鹿がゐる。豺も豹もゐる。オロチョンが馬が欲しいのでそれを盜みに來る。銃なしには行けないやうなところである。路は扁平（ひら）たい山の間をぐるぐると廻るやうにして通つて行く。山の峽には二三日前に降つた雪がまだところどころに殘つてゐ

る。白樺の幹が明るい午前の日の影の中に光つて見えてゐる。ことに美しいのは所謂興安嶺の蛇行水である。それは汽車で通つて見ただけでもその兩側に滿ち溢れて折れ曲つてゐる水を見出すことが出來るが、山深く入ると、一層それが草地の中に人知れず隱されて流れてゐる。無論溪流ではない。さうかと言つて澤（さは）の水でもない。瀑でもない。或は所謂武藏野の逃水と言つたやうなものではあるまいか。武藏野も原始的な時代にはかうした逃水（伏流）があつたのではあるまいか。そんなことが考へられる。從つて水は何處を源として何ういふ風にして流出してゐるかといふことは不明である。何でも土地の人の話では、旱魃の時には、さうした水は全くなくなつて了ふさうである。その蛇行流ではをりをり大きな魚がすさまじい音を立てゝ躍り上る。何でも鮒も鯉も非常に大きなヤツがゐるさうである。『澄如素鏡新蟾影、殷似溪山春漲聲、嶺路興安蛇走水、伏流百道不分明。』こんな詩を私はそこで口吟した。

△

イレクテの一夜も忘れられない。そこはロシアに近い曠野の一軒屋と言つて好いやうなところだが——家の中はペチカで暖められて丸で春のやうな暖かさである。またロシア人は夜遊ぶことを樂しみにしてゐるので、晝とは丸で異つた賑かさをあたりに呈する。ピアノは鳴る。ウオツカは出て來る。御馳走は竝べられるといふ風である。ことに愉快なのは、さうした山の中の一軒屋にラジオがかゝつてゐて　東京のでも、大阪のでも、大連のでも何處のでもきかれるといふことである。その夜そこの主人公の夜のお茶から歸つて寢やうと思つて自分の室に來ると、丁度そこがラジオの器の置いてあるところになつてゐて　家の内の人といふ人が主婦も娘も婢も皆なそこに來てラジオを聞いてゐるといふ始末である。何でもその時かゝつてゐたのは朝鮮の京城ので、東京のはぐつと早く、いつも五時頃にはおしまひになつて了ふといふことである。地球の面の時間の關係がそれとはつきりと指さゝれるのである。

お茶に呼ばれたその家の主人公にもおもしいロオマンスがあるらしく、ロシアの帝政派の美しい娘がその細君になつて

ゐて、トルストイやチエホフの話などをしてゐた形も私の興味を惹いた。何でも主人公はもと軍人であつたのが、チタあたりでこの娘とラブに落ちて、それで職をやめて、材木局の監理になつてこの山の中に住むやうになつたのであるといふことであつた。

二十露里のところにある保線のロシア人の住宅では、完全にロシアのムジックの生活を見ることが出來たやうな氣がした。飛びつくやうにして烈しく吠える五六匹の犬、寒いのでシュウバなしには外に出てゐられないらしい樵夫、小さな屋根の低い民屋、それでゐて室内は煖かく、奥の一間は華氏の六十度ぐらゐを常に保つてゐるらしく、子供が毛布を一枚かけて露はに足を出して寢てゐるのなどを私は目にした。そこで私の同行者が僅かな錢で鹿の角を二つまで買つた。

『來て見て、はじめていろいろなことがわかるね――。こゝの材木公司の出來た所以は別にあるのだね。材木が碌々なくつたつて、君だちがこんなにして此處にゐたつて別に不思議はないわけだね！』

『何うしてです？』

その人達はのんきさうにまたいくらかはぐらかすやうな表情をして笑つた。

四國の面積と同じくらゐの濶さを持つた興安嶺――それをかうして材木司で占めてゐなければならない理由は、說明がなくとも私にははつきりとわかつた。

△

奥に入るにつれて、あたりの荒漠さはいよいよはつきりと感じられて行つた。もはやそこには島といふものを見ることが出來なかつた。高粱島すらも。たゞ廣い穹窿と丘陵との中にをりをり牛や羊の群のかたまつてゐるのを目にするばかりだつた。ともすれば駱駝が繋がつて車を曳いてゐるのなどをめづらしく眺めた。ある時はまつくろな雲が空を蔽つて、急霰のやうな雨がすさまじく汽車の窓を打つた。マンチユリアの車の岡の紀車の立つてゐるところでは、長い間夕日に向つ

てじつと國境近い山嶺の綏かにあたりを取卷いてゐるさまを眺めた。此處に來ると、あたりはすべてロシアの氣分である。ツルゲネフやチエホフの作中にあらはれて來た田舍のさまである。野の牧畜を趁つて幾群も幾群も夕を家路に歸つて來る人達のさまもそれと到るところに見られるし、草を四角に束ねてそれを秩序よく積んで動いて行く車などもそこゝに指さゝれる。ことに、その粉車の向うの窪地を成してゐるやうなところに、白く家屋のかたまつてゐるを同行者が指して、そこには零落した帝政派の避難民が住んでゐることを話した時には、行つて見る氣はしなかつたけれども、言ふに言はれないさびしさのひしと身に逼るのを何うすることも出來なかつた。何でもそこでは美しい娘などが身を鬻いで纔かに饑を免れてゐるといふことだつた。私達はとつぷりあたりが暗くなるまでじつとそこに立ち盡した。

△

嫩江は松花江の一幅射流であるが、それが洪水で暴漲して、昂々溪と洮南との連絡が長い間とまつてゐたが、それを私は數日前やつと舟連絡で通れるやうになつたといふ時に通つた

朝の六時に自動車で旅舍を發つて、そこから三里ほどある昂々溪の驛へと走らせた。その朝の爽かさは私には竟に忘れられなかつた。そこには朝の草市がある。草をのせた車が一面に連つてゐる。そしてそのあたりを朝霧が斑らに籠めてゐる。人聲が賑かにその中かに洩れてきこえて來る。蒙古氣分が一面にあざやかに漲つて、遙い天外の低い山脈に朝日が半ばのぼりかけてゐるさまが何とも言はれない旅心地を誘つた。私は阿城から此方へかけて金の當時のさまを思はずにはゐられなかつた。金は朝鮮の東北境から此方へと出て來て、阿城にその最初の根據地を置いて、巴林に今でもそのあとをとゞめてゐる遼の上京を背後から脅かすやうな姿勢を取つた。そして一方は東方の山地から今の長春、開原の方へと出て行つたのである。私は深くその時分のことを頭に浮べながら、湖水のやうに潤くひらけた嫩江の長い堤防の上に立つて、連絡するためのヂヤンクの次第に此方へと近寄つて來るのを待つた。

新年號豫告

島崎藤村氏がこのほど突如として結婚されたのは、新聞の報じるところである。氏の身邊がそれを必要としたのは云ふまでもないが、その他の最も重大な理由の一つとして、最近氏が維新を題材にした大作に筆を執られるに當つて尚更その結婚を必要とせられたといふ風に新聞は傳へてゐる。大作と結婚との間にどんな必須的關係があつたかは知らないが、氏が畢生の事業として未曾有の大作に從事してゐられることは事實である。題して「**夜明け前**」といふ。前、中、後篇の三部作より成る、劃時代的作品であることは、曾て報ぜられたこともあるから、知る人は知つてゐる筈である。然し、それが本誌中央公論に掲載せらるゝといふこと、言ひ換へれば、氏の好意によつて本誌中央公論のために執筆せらるゝものであるといふことは、知つてゐる人は少いと思ふ。一回七八十枚から百枚の見當で、隔月、若しくは二ケ月おきに發表せられて、二年三年は愚か、それが完結されるまでは本誌上に文壇革命的の異彩を放つであらうことは申すまでもないことである。これが新年號よりの我等の喜びの一つである。次ぎに

正宗白鳥氏が洋行せられるといふことも、此間の新聞が突如として報じてゐる。これも事實である。氏は多分十一月二十三日出帆のコリア丸で、御夫婦揃つて歐米漫遊の旅に上られるであらう。氏は先づアメリカに渡つて彼地の物質文明を見、それからロンドン・巴里に渡つて歐洲各地を巡遊される豫定である。豫定といつても、氏のことであるから、氣が向かない處へは足を踏入れられよう筈もないが、たとひ踏入れられても、氣に入らなければ直ぐに引返されるであらうし、その代り氣に入つたら、いつまで其處に滯在されるかわからないであらう。人生を當てのない旅だと心得てをられる氏には旅といつても別に行かねばならぬ處もなし、また歸らねばならぬところもないのである。

かうして旅に出られる氏の心境に、歐米諸國の文物制度風俗人情、それらのものが如何樣に映るであらうか？また犀利炯眼にして皮肉な氏の心眼に、それがどんな姿で宿るであらうか？――は我等が持つ最も大いなる日本人的興味

でなければならぬ。さうして更に、氏一流の明快透徹な筆によつてズバリ眞向から打ち下される腕の冴えこそは、實にそれこそは、我等が久しく渇望してゐたところのものである。幸なるかな、中央公論の讀者諸君よ、諸君の愛讀讃嘆せられた、そして本誌と最も馴染みの深い、夫の白鳥氏の「文藝時評」は今や舞台を歐米の中心に移して、再び讀者に見えようとしてゐる。紀行、感想、隨筆、並びに創作、そのいづれを問はず、一選一筆と雖も氏の筆に成る珠玉の名篇は今後海を超えて同じく本誌上に運ばれるであらう。是れ新年以後の本誌の喜びの二つである。次ぎに今日、及び今日以後の我々日本人の最重最要の關心事は支那である。日本を知る前に支那を知り、世界を知る前に支那を知らねばならぬ、ことほど左樣に重大である。その意味において新年以後の本誌が三つの喜びを持つものは、前田河廣一郎氏と村松梢風氏の支那行である。この二人は已に十日程前に日本を出て今や彼地に在る。さうして最早已に第一稿の筆を執つて居られるかも知れないのである。一は支那を背景とし、支那を題材とした純創作に、一は「支那情話」風の側面觀測に、いづれもその特色を發揮して新年以後の中央公論を飾るであらう。前田河氏のプロレタリア的、梢風氏の說話的觀察と筆致は、同じく支那を題材としても、その見るところ、その接するところを異にし、兩者兩樣の支那を描き出して其面目を發揮するであらう。さうして兩者合せて其完璧を得るであらう。梢風氏の「新支那訪問記」と前田河氏の長篇小說「支那」は昭和四年度文壇の最も大いなる讀物であるを信ずる。

その他新年號の用意と準備は最早十分に整つてゐる。創作に、論文に、說苑、わが讀書子を驚かすに足るの手配は十分である。然しながら、猥りに樂屋を覗かせることによつて、舞台の興味を殺いではならない。たゞ昭和四年度劈頭の新年號を特に「**新時代の開幕**」と號した所以のものは、將に正に始まらんとし、始められつゝある新時代を最も進步的に、また最も確實に把握せんがために他ならない。

どんなに堅牢な建築物でも、又どんなに立派な大厦高樓でも、一定の年所をふれば搖ぎを生ずるものである。所謂破損が廻るものである。當座の繕ひ、應急修理は姑息を免れない。その意味において、今回社長の更迭を敢行した中央公論社は、根本的に建直つたものである。新時代は新人の世界である。新しく建直つた中央公論の行く道は新人の新世界である。若さと華やさに充ちた世界である。「**新時代の開幕**」は中央公論が新時代への進出をも意味する甦生記念である。待たれよ、新年號の出づる日。そは遠からず、また諸君を失望せしめざるや必せりである。

編輯者雜記

○

新年號の仕事を進めながら歳末號の編輯をやたつので今度は目眩しいほど大車輪の努力が續いた。それでも忙しいほど編輯は活氣がある譯で努力の結果は十分誌上に現れてゐることを信ずる。これからは新年號の編輯に大馬力をかけるべく部員一同大活動を開始してゐる。今日此頃の編輯室は全く亂鬪氣分で充滿してゐる。

○

新年號の附錄は大體別掲豫告の如くであるが、例に依て論文に、讀物に、創作に其精粹を誇り得ると共に、其の內容は新時代を表徵する意義あるものたらしめたい。新時代の新使命を持つて生れる本誌新年號は、それだけ編輯に於いて內容に於いて自負する處が多いが、讀者は今から出來榮えに十分の期待を以て待つて頂きたい。

○

昭和三年歳末の社會相を窺ふ「どん底の生活」は近來の興味ある好讀物であると共に、一個の社會文獻である。ありきたりの探訪記事的興味ばかりで讀んで頂きたくない。我等は社會のどん底にうごめく人々の生活を通じて深刻な現代の社會的事實に觸れると共に、其惱みに對して多分に冷靜な社會的批判の眼を向けずにはゐられない。

○

先月號所載十一谷氏の「唐人お吉」は果然問題を惹起した。が、氏としては未だあれだけで十分に書かうとする所を盡してゐないので、本月號に再び續稿を掲載することになつた。前號の分を讀まれた方は勿論、讀む機會のなかつた方も、本月號と併せ讀まれたい。本年創作壇の一大力作たることを信ずる。

今氏の淸新な作は轉換期にある氏の立場を明にするものとして注目すべきである。

塚原氏の一篇は久振の發表であるが永く沈潜してゐた氏の十分に力を發揮した努力の作品で、氏の最も自信のあるものといふべきである。

×

最近新聞に報じられた通り正宗白鳥氏が愈々洋行せられることになつたのは、我等の最大の悦びでなければならぬ。篤學博識の白鳥氏が、歐米諸國を巡遊して我等に何を齎らされるであらう？　此の期待にこそ我等の胸を躍らせてやまぬものである。玆に、諸君と共に、心をこめて氏を送り度いと思ふ。

×

昭和三年は正に「圓本時代」として永く文化史上に記錄さるゝであらう。日本の津々浦々まで如何なる家にも如何なる人の手にも、日本文學、西洋文學、マルクス、エンゲルス、大思想、經濟、法律、etc、が普及したことであらう。そして、博士達ですらも、帝國大學の授業料よりも遙に低廉なる費用を以て帝國大學以上の智識を穫得し得ることを保證してゐるではないか？（然しながら「圓本學士」の稱號を文部省が認むるや否やは誰も知らない！）

×

何はともあれ、續々として低廉なる書籍を一般民衆に提供した彼等に感謝しなければならぬ。それ故に、假令、圓本は彼等の營利的企業を唯一動機にして市場に供給された商品であるとは云へ、彼等に感謝の微意を表し、且つは文化史的記錄の意味に於て、本號に「出版界四人男」を掲げることにした。



青褪めた田園

今東光

毎日、村外れの街道に白い埃を見ない日とてはなかつた。さうして朽ちかけた村の火見櫓(ひのみやぐら)を根こそぎ揺り動して吹いてゐた西風が、時とするとはつたりと止んで氣味の惡いやうな靜かな日が、昨日も、一昨日も、そして今日も續いた。

軈て春が來るのである。

さういふ朗らかな日は萌黄色の空に眞綿のやうな千切れ雲がふわりと浮んで、紫の振袖を長々と曳ずつたやうな筑波山が、艶めかしくくつきりと眺められた。雲母(きらゝ)を撒いたやうな日中、花粉が香しく飛び散る日の次は、絓糸(すがいと)を縱に織るやうな細かい雨が音もなく降り注いだ。さうして中禪寺湖から溢れて流れ落ちる清冽な鬼怒川は、淙々と音を立てながら下總の平野を貫いて、お吉の立つてゐる土堤の下を流れて行く。

お吉は先刻から川で洗濯をしてゐたがひどく大儀で、渦を巻きながら流れる川水を見てゐるとくら〳〵と引き入れられるやうな眩暈をさへ感じた。肌襦袢や腰卷を洗ふことが出來たが足袋までは洗ふ元氣がなかつた。お吉は洗濯盥を小脇に抱へて立つと、ふら〳〵と傍の猫柳の幹につかまつた。額にはじつとり油汗をかき、手の甲には青い靜脈の筋が節くれ立つて見られた。ひどく氣落ちを感じてゐる瞬間

『お吉ツ。阿魔。何しとんのけえ』

嫂の尖つた聲にはツとなり、彼女は茅の叢をそそくさと分けながら家へ歸つて行つた。茅の露が素足にこぼれ爽やかな心地がした。

『ちいと熱がある………』

お吉はさう思つた。

お吉が崎房新田のお大盡どんの家から宿下りをした日は、さむさむと雨が降つてゐた。去年の秋の洪水に水をかぶつた飯沼のほとりを、柳行李と小さな風呂敷包と新しい水色の蝙蝠傘を持ち込んで、吐き出したいのを堪へて三里餘の道を乘合馬車に搖られ通した。鋭い地層の斷面が生傷のやうにいた〳〵しく剝き出された新開道路は、泥濘にぬかるんで車の轍をどつぷりと浸した。そのためよけい動搖が激しかつた。村の手前で無理に馬車から下りても、まだ芬と馬の汗ばんだ肌の匂ひが鼻に付いたのを覺へてゐる。さうしてお吉はぴちや〳〵泥跳をあげながら家に戻つた。

『おイや。お吉ぢやねえのけ。何しに今頃戻つて來たのけ』

嫂はぎろりとお吉の濡れた姿を土間に見出すと、睨み据えるやうに言つた。

『身體が惡いんだアわ』

お吉はやつとそれだけ答へることが出來た。旦那に買つて貰つた水色のパラソルを濡らすのが惜しいので、結び立ての

銀杏返しに手拭を懸けたが、それでもお吉の細い肩のあたりは慘めなほど雨に濡れそぼち、身體の心まで冷えこんだかと思はれるくらゐである。彼女はその晩から發熱し、三日ばかり寢ついて仕舞つた。

翌る日、ほのぼのとした曉かけて父親や兄は野良へ仕事に出て行つた。嫂は乳呑み兒にぶらんとしたへちまのやうな乳房をくわへさせながらお吉の枕邊に座り込み、實母散を煎じ出してくれながら

『お前えもお大盡がで身體を樂に扱つてんからア、直ぐに病氣なんどにかゝるんだアわ』

と言つた。そろそろ厭味をいはれるのかとお吉は身の縮む思ひがした。

『お吉。お前え何だつて暇なんど取つて歸つたのオ。お前も知つての通り貧乏してる中に、また俺は此頃見るもんも見ねえのよ。それにお前えまで加はつちやあ、はもう口數ばつかり殖えて、どうすることも出來ねえかんなあ』

『あ』

お吉は幽かに口の中で返事をしながら、ひやりとした。

『お前え惡くとらねえでくろうよ。お吉』

『あ』

『何だつて旦那、暇呉れたのオ』

『……………』

しかしお吉は唖のやうに默つてゐた。お吉が崎房新田のお大盡のところへ女中奉公に行く時には、もう前金で八十四圓といふ大枚の金を受取つて仕舞つてゐた。この土地では百姓達が纒つた錢が欲しさに、都會とは比較にならない低廉な給金を承知の上で年期奉公に出すのであつた。それなのにお吉は未だ一年にならないのに歸つてみれば、歸つて來た理由はとにかく、奉公殘りの月給は當然辨償しなければならない。それが嫂には何よりも辛かつた。さうして此方の苦勞も知らぬ

氣にのこ〱と髮を結つたり、銘仙の着物を着たりして戻つて來たお吉が憎くかつた。

『お前えも身體が癒つたら、また行くんだつぺな』

嫂は釘を差すやうに言つて、ぷいと立つた。お吉は暫く床の中で、その言葉を反芻した。

しかしそれから何となく嫂が不氣嫌なので、連れ添ふ親身の兄までが、お吉には邪險に見へて來た。そのために人の好い父親も何となく不愛相に構へてゐるのが感じられ、彼女は寢ても居たたまらない氣がした。

お吉は出來るだけ自身、床の中からはひ出すと、爐に實母散の茶瓶をかけ獨りで藥を呑むやうにした。誰も居ない隙間を見つけては、煤けた佛壇の奥に悄然と後から來る佛を待ち侘びてゐるやうな母親の位牌に向つて苦澁な涙をこぼして見るのであつた。さうすると少しは心持がからりと晴れた。

實際お吉は、嫂の愚痴を聞くまでもなく家がひどい貧乏のどん底にあることを知つてゐる。初めは少しばかりだつたが畑も持つてゐた家が、目の廻るほど高い税金を搾られ、百姓の手には負へない高値な肥料代に追はれ、のみならず母親の長患ひのために、一握りほどの麥や、ぽつちりの蕎麥だのを取りあげても全く合はなくなつて仕舞つた。揚句その畑を泣くやうな思ひをして手離し、他人の畑を借りて桑の栽培をやり、養蠶を眞似事ほどやつて、漸く少しばかり息を繼ぐことが出來るやうになつたのだ。お吉の給金も多分な働きをした筈だつた。そのくせ兄は晩酌のほろ醉ひ氣嫌に

『好え働き盛りの阿魔つ子に、ぶら〱やつてゐられちやあ外聞が惡くつてなんねえかんな……』

などと聞えよがしに放言した。これもみんな嫂が突つついたのだとお吉は思ひながら凝つと唇を噛んだ。しかしながら兄がそんなにまで外聞を憚る村方の衆とは、大輪村四十戸ほどのうち小數の自作農家を除けば、どちら向いても殆んどお吉等の家とは餘り大差のない貧乏な小作人ばかりなのだつた。

『フフン………』

お吉は腹の中で思ひ切り嘲笑した。油氣のなくなつた赤茶けた縮くたれ髮を箱枕から滑らせると、兄の氣に懸ける外聞がお可笑しくさへ思はれて來る。こんもりと庭木の茂つたお大盡どんの十二疊の薄暗い、上品なお座敷など兄は見たこともないのだ。書院造りの床、違ひ棚を背景にして、東京の大學を出た御當主樣の御書見の席へ、拔けあがるほど白い足袋を穿いて疊觸り爽やかに、お茶を運んだ自身の映像を想ひ描くと、兄の棲む小さな世間の外聞は隨分質の違つたものに思へたりした。

お吉は三日ばかり臥せると、もう明くる日から男のやうに紺の股引を穿き、腿をすぼめるやうにして畑へ出た。

『餘り無理すんな。お吉』

それでも嫂は義理一片とばかりは思へないやうな柔しい言葉をかけてくれた。しかしお吉は實際足許がまだふらつくやうに感じられた。眞黑な生々とした柔い人肌のやうな土を踏んだ時にお吉は、ふとまたお大盡どんの家の磨き込んだ鏡のやうな廊下を思ひ出した。彼女はすんなりした自分の指をみると、何時の間にか自分が百姓の娘でなくなつてゐるのに輕い驚きを感ぜずにはゐられなかつた。

鬼怒川の朝霧がほのぼのと晴れわたつてゆく後から、女の皮膚のやうに滑らかな洲が現れ、生毛のやうな蘆荻がなよなよと川風に靡いてゐる。滿々と水を湛へた鬼怒川の川面に白い小波が泡立つて擽ゆく見へる。軟風はお吉の髮のほつれ毛から立ち初めるやうに思はれた。

『お吉。汝いつ歸えつたのけ。大くなつたな』

村方の衆は萬能や鍬を各自ひつさげて土手を通りながらお吉に聲をかけた。村の人々は逸早くお吉の姿を嗅ぎ出した。

『そんだで言はねえこつちやねえんだぞ』

兄はまだお吉の噂に就いて何一つ聞いてもゐないのに、つけつけとお吉に向つて言つた。働き盛りのお吉のぶらついて

ゐる姿を見られたといふ事だけで、兄は何かしら侮蔑を感じ、お吉の甲斐性の無いことを歯搔ゆく思つたのだ。

エメラルド色に耀いた桑の嫩葉は子供の肉體の感觸を與へる。華麗な桑の幹をのろ〳〵と這ひづり廻つてゐる蟲を取りながら、お吉はしみ〴〵と

『歸つて來なければよかつたけえ』

と考へたりした。

お蠶樣が眠つてゐる間に、桑はぐん〳〵目に見へて生長した。鶴田、十文字、魯桑などと他人の桑畑の桑はそれ〴〵みつしりと生育してゐる。お吉等の桑畑の桑も、こんな貧乏の淵にのぞみながら、それでも他の桑畑のに負けない位に立派に生長した。他所の土地では桑の栽培も容易なことではなかつた。しかしこの地方の桑は他縣に比較すればずつと見事なものだつた。

鬼怒川は八月になると水が殖え、二百十日の頃には定つて三年に一度は氾濫する。下總の茫漠とした平野を灌漑する代り、一度出水となると、この廣々とした大平野をどつぷりと水に浸し、家や人や家畜を濁流の中に卷き込んで押し流して仕舞ふ。大輪村のあたりは徳川時代に人柱を立てて造つた土手のお影で、土手下の桑畑はすつかり水に浸るけれども川水の損害は極めて僅少だつた。彼等はこの愛すべき鬼怒川によつて甚大な被害を受ける一方、なみならぬ利益をも蒙る。川が溢れ、檢水竿が殆んど埋歿し、さうして數日の後にさしもの大水が颯と引くと、彼等の桑畑には思ひも寄らない洪水の殘滓を置いて行つてくれる。土地の人々はこれをえごひと呼んでゐる。さうして彼等は桑畑に些しも肥料を與へないでも濟むのである。かういふ栽培法を流作と呼んでゐる。お吉等一家に取つて、こんなことでもなければ人並みに養蠶など出來るのではなかつた。

お吉は床から離れて畑へ出た翌る晩、西隣の家へ貰ひ風呂に行つた。鬼怒川に夜霧が立ち、高瀬舟が西岸の竹林の影に

夜泊の仕度が出來上つた頃、嫂と二人で連れ立つて行くと土間には近所の女や若い衆などが集つて來てゐた。

『おイや。お吉かね。此方へ寄らつせえ』

『今晩は………』

お吉は情のある聲で忍びやかに答へた。若い衆は夜業(よなべ)の繩を綯ひながら、發達した彼女の背姿を飽かずに眺めた。

勿論その坐ではお吉の村へ歸つて來たことが話題の中心となつた。しかしお吉はなるたけ言葉寡なに受け答へした。彼等が一番知りたがつたのは崎房新田のお大盡どんの家庭の內部の話だつた。けれどもお吉はその事になると、いこぢなほど默つた。

『嫂(あね)さん。風呂が明いたよ』

赧ら顔の鼻に汗の小粒を浮せた一人の內儀さんが、手拭で額のあたりを拭きながら言つた。

『おいや。さうけえ。ゆつくりすればよかつたつけな』

嫂はそれでも御愛相を言ひながら、お吉の腕から子供を抱き取ると

『お吉。主(しゆ)も一所に這入(へえ)つたらよかんべえ』

と眼で合圖しながら言つた。お吉はぎよツとするやうに眼を擧げたが、貰ひ風呂のことだから我儘も言へなかつた。泣き出したいのを堪へて

『あい』

と答へると嫂の後について湯殿に行つた。豆ランプの黃色い燻(くす)んだ光があたりをほのかに照らし、風呂の焚き口にしやがんでゐる女の顏を怪奇なものにして見せてゐる。嫂はすつぱりと裸になると、股の間に子供を狹むやうにして風呂桶から湯をかい出した。

『湯加減はどうだね。ぬるかつたら一燻べ焚くからア…………』

『恰度好え鹽梅えだアわ』

嫂は風呂の中から顏を覗せながら、しみ〴〵うつとりした聲を出した。お吉はする〳〵と帶を解くと膝を折つて行儀よく着物を脫いだ。肉付の好い、艶のある張ち切れさうな眞白な肌が濛々とした湯氣の中にもけざやかに見へ、嫂はお吉の所作を眩しさうに見て見ぬ振りをしてゐた。お吉は小桶で湯を二三杯浴ると、嫂と代つて風呂にはいつた。芬と體臭の融け込んだ湯の香が鼻を衝き、水垢でぬる〳〵してゐる風呂桶が何だか氣味が惡かつた。嫂とお吉とは何度も湯につかりながら、次第に身體が暖まるにつれて生き返つたやうな氣がした。色の淺黑い嫂は背中の灸の跡をお吉の方に向け、顏をごしごし洗つた。お吉はシヤボンの泡をぶく〳〵立てながら、つるり〳〵と柔かく撫で廻すやうに洗つた。

『お吉。お前えシヤボン使ふのけえ』

嫂は仰山に驚いて見せた。そのくせ

『己にも借してくろ』

と言ひながら遠慮會釋もなくシヤボンを手拭になすりつけては膨んだ黝（くろ）い腹のあたりを洗つた。

『お吉。己は先に出つかんな』

嫂は顏を猿のやうに上氣させながら風呂の中から言つた。お吉が嫂と代つて風呂にはいりに立つた時、嫂はお吉が片手で前を押へ片手で乳房のあたりを隱すやうにしてゐるのを下から見上げた。さうして嫂はお吉の腕の下から顏をチヨとのぞかせてゐるむつちりとした乳首が葡萄の實のやうに色づいてゐるのを發見した。

『おやツ』

と嫂は驚いたが、お吉が乳房を意識的に隱すのを知り、萬事を了解した。嫂は、お吉が不意に歸つて來、家内の用事を

足してゐる隙に、床の中から脱け出したお吉が背戸の影でげえ〳〵吐いてゐたのを思ひ出した。さう言へばお吉ほどの年格好の女にしては、めつきり食事の分量が少いのもたゞ身體加減が惡いばかりではなかつたのだと思はれた。乾餅の煮付け物などを、まるで姙婦のやうに好んで食べてゐたお吉に、少しも氣が付かなかつたうつそりさを、嫂は自嘲に近い感じで思ひ返した。お吉は子供を背負ひ、嫂はお吉の紺の股引を持つてやつて、下駄の背を立てて歸つた時分、またばら〳〵と降つて來た。

森閑とした夜だつた。

煤けた天井からランプを低く吊り、父親はぱち〳〵算盤をはじいてゐた。爛れた眼をしばたゝきながら何か呟いてゐる。兄は土間に蓆を布き、その上に胡坐をかいて繩を綯つてゐた。うらぶれた夜業(よなべ)も彼の一家に取つては欠くことの出來ないものだつた。破れた枕屏風の影に子供達やお吉は一所の蒲團にくるまつて寢た。遠い田圃から蛙の鳴きしきる聲がする。嫂は佝く添乳をして横になつてゐたが、すや〳〵子供が寢息を立てはじめるのをみると大儀さうに起き上つて、前を合せながら、ひそやかに言つた。

『お父つあ。お吉は腹が大(でけ)えどオ。今夜風呂で見たつけえよ』

瞬間、父親と亭主とはびくりと頸を顫はせたやうだつたが、誰れも何とも答へずにお龍の顔を凝視した。

『本當けえ。お龍』

亭主の仙太郎はしやがれたやうな聲を漸く出した。

『本當だアわ。お吉の乳房えかく黒えわ』

父親はがちりと算盤を膝から滑り落すと

『お吉イ…………』

と押し潰されたやうな聲を咽喉許から振り絞つて呼んだ。

お吉はうと／＼してゐたうつゝから覺めると、のつそりと起きて來ながら

『何だちけ……………』

と言つて父親の前に坐つた。

『お吉。嘘言ふんでねえど、お前え腹がえけえてえが本當かあね』

お吉は唇の色を颯と變へると次第にうなだれた。

『言つてみろ』

『……………』

お吉は然し何と言はれても頑として返事をしなかつた。

『どうして汝れやあ、腹なんぞ大くして戻つてくさつた。しらばくれやがつて、どうしたんだよオ』

と叫ぶと父親は堪らなくなつたやうにお吉の頬を擲つた。お吉はよろめきながら辛ふじて疊へ手をついた。

『俺がの家で姓氏無し子を生むだのは汝れ一人だど。この業晒し奴。誰がの子だ。言つてみろ』

『……………』

『言つてみろッちんに分んねえのか』

父親は苦しさうに肩息を吐きながら、鋭く詰問した。しかしお吉は袂で顔を押へたきり、「死んでも男の名は言ふまいと思つてゐた。寂然とした部屋内で石油の煮える音がし、やがて父親の男泣きに啜り泣く聲がさめざめとした。

『そんだから言はねえこつちやねえんでがすと。どうも變だと思つたつけが、崎房の旦那から暇出されたんだなえ』

兄はのつそりと土間に立ちはだかりながら言つた。さうしてお吉の折檻は夜が白々と明けるまで續いた…………

翌る朝も、お吉は泣き膨らした眼をしばたたきながら手拭を姉さん被りにし、赤い襷をかけ、甲斐々々しく桑畑へ出た。彼等はおよそ不味い飯を食べた。言ふべからざる不快な憂欝が皆を支配した。

毎晩のやうにお吉が訊問された。しかし彼女はどうしても唇を綻ばせなかつた。お吉は見る／＼痩せた。嫂は、誰も居ない時を見はからつて言つた。

『お吉。お前え一層墮したらよかつぺな。』

『嫂さん。そんげな酷いことをオ………。』

『さうだに大え腹を突き出して歩いたらア、他人に云はれつと、はあ』

しかしながらお吉は、そんな風にまでして持ちかけられゝば持ちかけられるほど腹の子が愛しくつてならなかつた。三里餘のでこぼこ道を乘合馬車に揺られ通してまで、少しも障りのなかつたほど丈夫な腹の子だと思ふと、どうかしてもお吉は満足に生みたいとひたすら希つた。彼女の内に次第に完成されつつある母としての自覺が、村の淫奔な娘の皆な爲る所行を悉く避けしめた。さうしてお吉は夜な夜な様々な夢をきれ／＼に見るのであつた。

健康に發育しつつある桑の畦の間に、厳しい冬を精一杯に越した薺の類が、まるで虐げられた私生兒のやうに、しかしながら季節の恩みを受けて小さな白い花をつけてゐる。それを見るのはお吉にとつて、せめてもの喜びであつた。暖い南方の日の光の運行に浴しながら、ともすればお吉は陶酔に似た思ひ出を繪巻物のやうに繰りひろげる。

………ペルシヤ絨緞のやうな青い麥畑のうね／＼した畦道を赤つ茶氣た髮の毛をひつつめに結ひ、ごつ／＼の手織木綿の衣物を着て、桃色のメリンスの帶を嬉しさうにしめて鬱金色の風呂敷包を抱へた小娘こそ、お吉が初めて奉公に行く時の姿だつた。

鬼怒川は無數の毛細血管のやうな枝流が流れ注いでゐる。そうしてそれ等の枝流の流域には豆粒ほどの村落が點在して

ゐた。崎房は南北七里、東西一里の水垢の浮いた飯沼沿岸に開墾された新田である。そうしてお大盡の家は飯沼を俯瞰する事が出來る丘陵の上に、かなめ垣を城壁のやうにめぐらして欝然と聳へ立つてゐる。お吉は脅え切つた眼付をして裏門からはいつた。お大盡の家は實際、彼女が想像してゐたものとは比較にならないほど大きかつた。お大盡の家に御奉公出來るのを身の幅にしてゐる娘達が多勢ゐた。それは彼女が後になつて知つたことであつたが、彼女等の中には三ケ年の年期奉公で二百圓位で殆んど買ひ取られたやうにして來てゐるのもあつた。さうしてそれ等の女共の數だけで十五人以上もあつた。

はじめお吉は直ぐには御座敷へは出られなかつた。女中頭の下で彼女は三月ほど上働きの躾けを受けた。何時もきちんと髮を結つてゐなければならないこと、必ず眞白な足袋を穿かなければならないこと、絶對に羽織を着てはならないことなどを申し渡された。軈て小間使として御隱居様付となり、何故か御隱居様の御氣に入りになつて朋輩に羨やまれるやうになつた。

お吉にはしつかりしたことは判らなかつたが噂によると、お大盡どんの家では年に米が千俵以上もあがると聞いた。朋輩達はまるで自分の物のやうにしてその事實を誇つてゐた。事實、三十人近くの百姓が毎日家に寢泊りしてゐた。彼等は殆んど家族のやうに暮してゐた。お吉には彼等と主人との關係を知ることが出來なかつた。しかしながら彼等以外、崎房一圓の百姓は悉く御大盡どんの土地を耕作することによつて生きてゐたのは言ふまでもない。

お吉は長い〱廊下をする〱と白足袋で裾をさばきながら御用を足した。そんな時にふと若い村の男衆をチラと樹の間に見かけることがあつた。しかし彼女は彼等の誰とも一語も交換する事が出來なかつた。それほど上働きの女共は遮斷されて暮した。それでゐて若者等は眼付のふつくらして來たお吉の、情を含んだ黒い瞳をその睫毛の下に感ぜずにはゐられなかつた。お吉の朋輩で斯ふして馴染みを重ねる女達もないではなかつたのだ。お吉自身、そんな情景をよく心に描い

た。しかしながら若い衆の逞ましい腕は、どうしたことか誰もお吉までとゞいたものはなかつたのである。

　びつしりと雨が續けて降り、飯沼は雨を聚めて膨れあがつた。その後はからりと晴れた日が續き、お吉等は凝つと座つてゐても身體に汗をかいた。爽やかな田園に初夏が訪れると、お吉は自分の村の百姓等も忙しい日を送り迎へてゐるであらうことを思ひ廻した。眞新しい白い菅笠を意氣に被つて、咽喉が破れんばかりに戀慕調を歌ひながら、青田で働いてゐる娘達の上を想ひ描きながら、彼女は陰鬱な御大盡の家の數奇を凝した小庭に面した茶室で、欠伸み嚙み殺しながらお茶の御相手をしてゐた。お吉はうづくやうな情感をこんな侘びしい生活の中に埋めてゆく自身を顧みて、時としては居堪らないやうな焦燥を感ずることもあつたのだ。

　心許なげな雲が透明な青空に徂徠して、いち早く秋が循環して來た。その時分、御大盡どんの御當主が海から眞黑になつて戻つて來た。御隱居樣は俄かに元氣になつたかと思はれたが、お吉も若い御主人を迎へて、心は知らずにはしやいだ。お吉はこの若い主人にも氣に入られた。さうしてこの事實は若干朋輩の嫉妬を招いたほどだつた。軈て間もなく若い主人は東京へ歸つて行つた。また無爲な、お吉にはとりわけさう思はれる日が續いた。例年の崎房新田を貫いて流れる飯沼川が決裂した。さうして鬼怒川が溢れた噂が逸早く崎房に聞へた時に、お吉の家は手を組み合せたやうなしつかりした堤防の篠の根によつて、辛ふじて流失の慘害を免れたといふ知せを受けた。野分が葉末をさら〳〵と弄り、木枯が御大盡どんの閉め切つた大戸を訪ふもののやうに吹き鳴らした。こんな晩は、廣い土間に八分心の大きな空氣ランプを煌々と點じ、その周圍に多勢の男女が群つては猥らな話がはづんだ。

　その年の正月は暮にはいると雪が降り、うららかな日光が稀に照つた日でもさらめのやうな粉雪が降つた。遠山もすつかり化粧をし、お大盡どんの庭の竹林はのつこりと雪をかぶつて、時折りばさつと凄まじい音を立てて雪を跳ね返した。さういふ陰慘な空合の或る午後、出迎への年寄と共に若い主人は石下の驛から二里の道を、逞ましい栗毛の馬を飛して歸

つて來た。

古風な年賀が終ると、若い主人は終日炬燵の中にもぐり込んで小說本などを耽讀してゐた。

『小旦那は今年は鐵砲打ちに行かねえのけえ』

『さうともよオ。お吉が留めてるんだつぺな』

『さうかもしんねえな』

奉公人達はそんな影口を叩いて笑つた。お吉はしかし惡い氣持がしなかつたのを覺えて居る。お吉は

『有繫及びもつかねえ戀だけんどもよ……』

と半ば以上は諦觀してゐた。しかし限りなく慕はしい若い主人であつたのだ。

それは朝からしん／＼と牡丹雪が小止みなく降つてゐた日だつた。お吉は若い主人の部屋にお茶を運んで行くと、ふと本を脇へ押しやつた小旦那は

『寒いね。お吉』

と言つた。お吉はぶるツと身體を顫はせながら

『はい』

と答へた。

『お前も炬燵へおはいり……』

小旦那は何氣なく言つた。お吉は思ひ懸けない言葉にどうして好いか途方にくれて仕舞つた。夕まぐれのやうに薄暗い小旦那の部屋で、友染縮緬の炬燵蒲團だけがけざやかに映えてゐる。お吉は泣くやうな聲で

『アレ。いけません……』

と確かに抵抗したやうに覺えてゐる。しかしすつかり上氣したお吉は、跳くやうな昂奮と疼くやうな情感に眩惑して蒼白となり、兩の膝頭に力を籠めながらまるで失心したやうになつてゐた。

その事があつて、小旦那が歸京した後はお吉は、まるで放心狀態で何にも物が手につかなかつた。

お吉が屢々繰り返す思ひ出の一場景は、彼女が小一年も奉公してゐた間のどんな重要な事でもなく、たゞ一度きりの小旦那の雪の日の愛撫ばかりだつた。彼女はその歎語を噛みしめることによつて、哀感に誘はれる。冬の景色が推移して春がめぐつて來ようとする時、お吉は月經の止つた事に氣が付いた。さうして彼女は何といふ事なく暇を出されたのである――お吉は姙娠したことの餘りの喜びを偏ることなく小旦那に書き送つた。人の寢靜つた小夜更け、鉛筆の心を嘗めながらたど／＼しくかいた手紙に對して若い主人からは何の音沙汰もなかつた。さうして暇を出される時、一目小旦那に逢ふことが許されなかつたことを彼女は遺憾に今でも思つてゐる。

お吉の腹が人目に着くほど膨れて來たので家の人達は野良へ出ることを好まなかつた。嫂はお吉のぼつてりとした孕み腹を尻目にかけながら、彼女が彼女の言ふことを聞かないで墮胎しないことに不滿を事毎に爆發させた。父親や兄は桑の出來や、繭の相場の話ばかりに沒頭した。

この近在で養蠶をやつてゐる百姓達の最低の生產費は六圓内外だつた。その三割六分八厘は勞銀が占め、種園に對する金利、或は小作料（他地方では肥料代など）が三割五分六厘で、合計七割二分四厘。桑葉代と勞銀が全生產費の三分の二を占めてゐる。桑が不作だつたり、繭の相場が下つたりすると百姓達は、その副業が全然徒勞に終る場合が稀でない。

鬼怒川の水は上流の水門のあるところから咽喉の乾いた田へどん／＼落してやるので、川水はめつきりと枯れ／＼になつた。ふつくらと濡れた洲にもさ／＼と篠が生へ、その鮮やかな綠色の密生した篠がさら／＼と吹き靡いてゐる間に、川の洲の上部はから／＼に乾いてゆく。苗代の稻の穗はぐん／＼と生長する。早い家ではもう田植をはじめたところもあ

る。百姓が謂ふ所の農繁期に這入り、無性に人手が欲しい時に、彼等は

『餘り忙しいで、俺の家でも嫁でも貰ふツかね………』

と言ふ。さうして事實かふいふ理由と必要に基いて花嫁を娶る農家も少くはない。

『お吉ことも嫁にやんべえかね』

兄は猫の仔のことでもあるかのやうに言つたことがあつた。

『うむ。こんな阿魔でも欲しいち野郎があんだつたらア、呉れてやんがな』

父親は煙管を口にくわへながら苦々しく吐き出すやうに言つた。

『持參兒があつちやア貰ふ奴もあんめえな』

嫂が止めを刺すやうに答へた。

しかし誰もお吉の一家などに注意してゐる家はなかつた。お吉の身體に相場を立てるより、繭の相場の方に皆は夢中になつてゐる。さうして何所へ行つても不景氣話ばかりが轉つてゐた。

『去年くれえ繭の安かつた時はあんめえな。一貫目三圓平均だかんね』

誰も彼もそんな不平を洩しながら、今年の相場に一縷の希望を繋いでゐた。養蠶をやる百姓の男も女も身體に蛹の匂ひを沁み透らせながら、等しくほうと溜息ばかりついてゐた

彼等の唯一の願ひは、たゞ繭が高値に賣りたいのだつた。それ以上の要求はなく、それ以外には考へ及ばないのである。だから何故こんなに繭價が法外に低落したかといふ事を一度も考へた事がない。彼等は威勢の好い繭買ひ商人が村落から村落を訪れて、一貫目幾らといふ代價を握らせるまでは何にも知らない。彼等はその代金を掌の上に見出すと初めて周章てて

『ひどく安くなつちやつたなあ………』

と、不服と不安と不平とをこきまぜて抗議する。すると繭買ひ商人はへら〳〵笑ひながら

『近頃どうも相場が安くなつてなあ』

と囁きながら貫目を算へては若干の金を置いて行く。さうして斯ふいふ最も狡猾な仲買人は、安く取引することに腕の誇を感じながら鐚一文も餘計には出さない。

大正十五年度の統計によると二百六十萬三百五十一戸の全國養蠶家が、八百六十七萬六千八百八十三貫の繭を生産し、この價格六億六千百四十萬四千七百三十七圓といふことである。しかしその内どれだけが此等の養蠶家の懐に落ちたかは判明しない。去年の春の金融大恐慌は凄まじい暴風を捲き起し、夏秋蠶などは殆んど底の知れない安値にまで蹴落され、少しでも金を掴まなくてはならない貧農達は、言ひなり放題の安値で眼を瞑りながら子供のやうにして育てた生繭を手離さなければならなかつたのだ。相場の變動、更には相場それ自體に對して關心を持たない彼等は、繭價が糸價に左右される事に對しても無關心だつた。繭價の騰落率は糸價以上である。何故なら繭の産出は天然的に且つ有限性を持つてゐる。それであるのに生糸製造の釜數は人爲的に且つ自由に制限し得られる。從つて繭價の景氣變動に對する反應率は糸價よりも敏感で強い。好景氣には急激に騰貴し、不況時には急激に低落する。それゆゑに少しでも豊かな、それゆゑに怜悧だつた自作農家は、高低する相場に制御されないために乾繭で取引する。しかしながら多くの貧しい百姓達は堪らへ性もなく生繭を手離して仕舞ふためにいよ〳〵貧乏しなければならなかつた。

お吉は實際、これから生れる子供の前途を思ひ佗びて考へた。こんな狀態の家で、自分が無事に安産出來るかさへも不安なのに、どうして女一つで育てて行くかを思ふと、崎房の小旦那が時として怨めしく、時として尙ほ更ら戀しかつた。さうして毎日のやうにお吉の腹が問題になつた。

……お吉は餘りの寒さに眼を覺した。床の中で足の爪先が氷のやうに冷えた。森閑とひそまり返つた夜陰の中にさく〳〵さく〳〵といふお蠶樣の桑を食べる物凄い音が幽かにする。彼女は未練つぽくまじ〳〵と床の中で目を覺しながら、珊々と珠數を繰るほどの爽やかな物音に聞き入つてゐた。それはまた如何にも逞ましい生命が犇めき合つて成長しつつあるのを思はしめる物音だつた。お吉は人間の童子よりも幸な蠶兒を羨やましくさへ思ひみるのであつた。軈て彼女はそつと起ると丹前をひつかけ、ランプに火を點けた。晝の疲れと晩酌の陶然とした醉ひ心地で父親も兄も高鼾で寢てゐる。寢相の悪い嫂は子供を蒲團から突き出して、口から涎を垂し頭を木枕からがつくりと落して寢入つてゐる。お吉は足音を忍ばせながら納所へ行つた。障子を靜かに開けるとぷーんと青臭い匂ひが立ち罩めてゐる。お吉は桑の葉を一枚〳〵拭ひをかけ細く刻むと、ぬつと首を擡げて食物を猛烈に欲してゐる蠶兒の頭の上からはら〳〵とかけてやつた。さうして石油鑵の火鉢の炭團を掻き立ててから、寢床にもぐり込んだ。

それから何時間經つたかお吉にはわからない。突然、お吉は鋭い物音に呼び起された。まだ夜はすつかり明けてゐなかつた。桑畑の方角からざわ〳〵人聲がした。お吉はむつくりと起きると開け放された戸の隙間から表へ出た。父親や兄はもう畑へ出てゐる。お吉は寢卷のまゝ畑へ駆け出して行つた。

『霜だッ………』

遥かな畑から沈痛な叫び聲が起つた。

お吉は何かしら胸を突かれ、齒がガチ〳〵と顫えた。さうして棒立になつたきり身體の慄えが止まなかつた。

『霜だよオ』

『霜だ』

『霜だ』

『霜だ』

『霜だ』

『霜だ』

『霜——』

軈て彼方此方の畑から湧き起るやうな叫喚が次第に呟きに變つてゆく。お吉は急に氣溫が低つて一夜のうちに霜が降り、もろ〳〵の桑の葉が霜枯れて仕舞つたのを覺つた。兄の畑から嫂の啜り泣く聲が喞々と聞えて來た………

ぬつと日輪が昇つた。

桑の葉は異人の髮の毛のやうにちり〳〵に縮んで霜焼けて仕舞つた。村の衆はまだ田の畦に腰を下し、低く頭を垂れながら石のやうに沈默してゐる。さうして霜がまるで嘘のやうに解け、彼等に殘されたものは依然とした本來の空なるものであつた。一日中、村はことりとも物音も立てないで暮した。

明くる日の新聞は此の稀有の天災を逸早く報導した。村の人々は一枚の新聞を手から手へ渡しては息を詰めて讀み耽つた。彼等はそこに彼等と同じ樣な悲慘と不安と絶望に喘いでゐる仲間を見出すことが出來た。關東地方を襲つた不可思議な霜害によつて蒙つた桑の被害高は、殆んど彼等の頭では算換してみることも出來ないほどだつた。八萬四千八百十九町歩の面積を持つ桑畑の桑が痛められ、二千百八十九萬一千圓の價格に見積られる損害高が彼等の負擔となつたのだ。この他に茶だとか、果樹だとかも全然回收する見込の立たない損失を受けたが、とりわけ麥に於いて甚大な痛手を蒙つた。お吉の家では皆な氣拔けがして仕舞つたかのやうだつた。誰も畑に出やうとする者もなく兄は酒ばかり飲んだ。當り所のない父親は

『お吉ッ。汝こんな時にその父無し子を生んでみろッ。踏み殺してやつかんな』

さう言つてお吉に八つ當りした。

二三日經つと全く桑が欠乏した。もうどんなにしてもお蠶様を養つてゆく術がない。さうして丹精して育て軈て間もな

く繭を作らうとする間際になつて彼等はそれをみす／＼餓死させなければならない。お吉はもう身體がすつかり透き徹つた蠶を箸でつまみ大きな籠に取り入れながら勿體ないと思つた。

『寢覺めの惡いことだなえ………』

近所の女共は汚れた前垂で目頭を拭ひながら泣き笑ひを洩した。さうして彼女等はぞろ／＼と手籠を抱へて鬼怒川の堤に集つて來た。

『何時まで言つても埒明くめえにな』

『さうだともよ』

川邊に下り立つた五六人の百姓女は思ひ切つたやうにして籠を逆に振ると、中の物を颯つと川にぶちまけた。川一面にふんわりと浮んだ白い小さな蟲は、軈て瞬く間に川下へ押し流されてゆく。所詮生かすべき望みのない蠶ゆゑお吉も亦眼を瞑つて川へ捨てた。さうしてこれ等の生物の覺束ない行方を憮然と見送つてゐるうちに、お吉の瞼も何かしら熱くなるのであつた。

『アレ／＼。お蠶樣だなよ』

土手の猫柳の下に立つてゐた一人の女が指して言つた。

『さうら見ろ。上でも流したんだなよ』

『厭だなア俺あ………』

『さうだに力落すなよ。仕方あんめえな』

『さんでもあつたらもんだからよ』

彼女等はお互ひに力を付け合ひながら慰め合つた。さうしてゐるうちにも上流からは素早い早さで一塊になつた蠶がどん／＼流れて來る。彼等はそれ等の一つ／＼に對して愛惜と痛歎とを交ぜて見送つた。さうしてこのうらぶれた葬式は終

つた。

お吉も、この流産にも似た忌はしい出來事の後は一頓に氣拔けがしたやうに思はれた。これからの彼女は一通りでない責任を分擔させられるであらう自身の位置を痛感した。さうして果して彼女はそれに堪へてゆかれるであらうかと想ひ案じた。

實際お吉は近頃になつて、漸く自分が小旦那に見捨てられたのではあるまいかといふ悲しむべき疑惑に囚はれることがあつた。しかしながらお吉は、たゞの一度も小旦那におもちやにされたといふ記憶を持つてゐない。この事實が纔かにお吉を不幸のどん底に突き落しはしなかつたのだ。さうして此の思ひ出が彼女を拘束しないもののやうに見へた。

しかしながらそれにしてもお吉一家は、これからどうして食べて生きて行つたら好いかわからない。それは誰にも判然とわかつてはゐなかつたのだ――揚句、お吉は彼女の白い身體に相場を立てなければならないことに思ひ極めた。

窮乏は切迫して村を襲つた。

年を取つた百姓はその老軀を捨てるために野田や流山に落ちて行つた。壯年の夫は北海道の鑛山や炭山に行き、その妻や娘は女工や女郎に身を賣つた。

お吉の父親はもうお吉を叱る氣力もなく、大輪村から小一里も下流の渡し守に傭はれて行つた。父親は、それでも家を立つ時に言つた。

『お吉。身體を達者にして、孫を抱かせてもらあべえぞ』

父親は云ひたかつた言葉を初めて云ひ終ると淋しい影を殘して出て行つたのだ。

間もなく兄の仙太郎が銚子に出稼ぎに行つた。兄はしかしお吉に白い眼を剝いて、何にも言ひ置いては行かなかつた。

壁が落ち、醬油色をした障子がおんぼろに破れた家に殘つたのは、嫂のお龍とその子等とお吉だつた。

或る月の出の遲い晩、お吉は珍しく鏡台をひきづり出した。水銀の剝げ落ちた鏡の前に座り、固くなつた鉛の多いすみ

い」

れ白粉をごし〳〵とかして化粧した。

『餘り長い事で、化粧の方法も忘れてしまつたつけよ』

お吉はふと呟くやうに言ひながら小頭をかしげて獨言つた。思へば永い間、白粉の匂ひを嗅がない。

こんもりとした鼻のあたりに白粉を濃く刷いて、玉蟲色に口紅を指すと、少し大きめな口の欠點も隠れ、近頃の面窶れさへ消え失せて、生々とした若やいだ氣持が幽かに甦つて來る。一番人に褒められる情を含んだ眸を、お吉は吾と我身に見入りながら、少しばかりは嫂への遠慮も兼ねて

『嫂さん。ちいつと白くはあんめえか』

と言つた。

『さうだに白え面で何所の色男に逢ふんけえ』

嫂は他意なくそんな事を言つて笑つた。石鹸を使つてさへ意地惡く驚いて見せたりした嫂の豹變を見ると、お吉はぎくりとした。お吉は美しく化粧をし、晴の銘仙の袷を着返んで、西岸の堤をぶら〳〵歩きながら

『妾一人で澤山だつけ……』

と思ふのであつた。

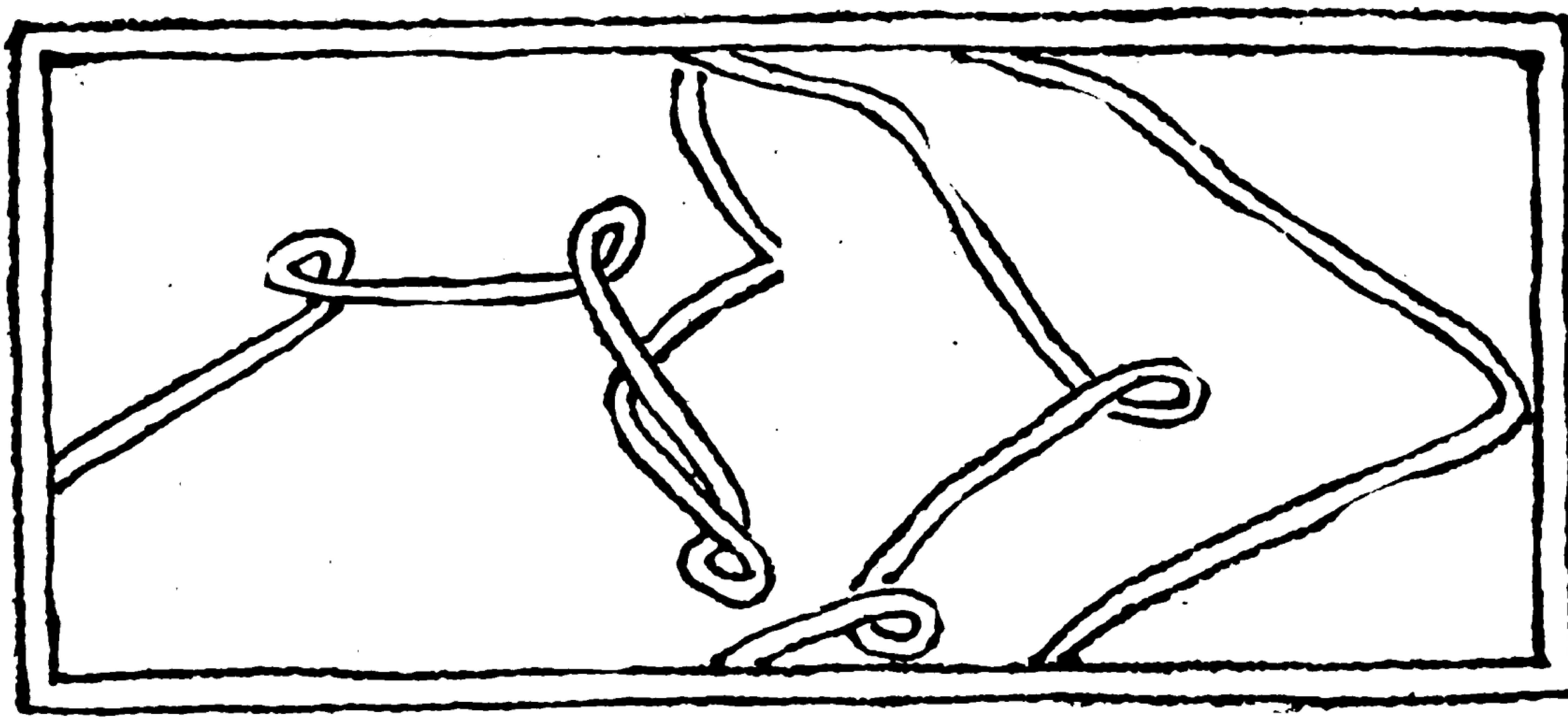
村外れの河岸端に夜泊の高瀬舟が五六杯懸つて居る。

お吉は思ひ切つて、土手から高々と鼠泣きをした。さうしてゐるうちに泣くまいとすればするほど涙が、硬ばつた頬を傳つて流れた。

せじの戸が開いて黒い男の影法師が動いた。

恥しさが、お吉の胸を凍らせた。

しかし次の瞬間、朗らかな嬉しさがお吉を冷めたい草の褥へ誘つて行つた。



小僧

塚原健二郎

牛部屋の前の池で、私が顔を洗つてゐると、隣家の庄左衛門が、背後からおどけた調子で

「よう、信公、いよいよお立ちだね——」と言葉をかけた。庄左衛門は、綿工場の職人で、日頃私を、信公と呼び、可愛がつてくれるのだつた。

「あゝ」

「信公も、いよ〳〵番頭さんになるか——、だけど、時々お母の乳をのみに來なよ、え」

庄左衛門は、髯の深い口端を歯磨の粉でまつ白く塗りたくりながら云つた。

私は、さう云はれると、自分の小諸行が、長屋中へ知れ渡つてゐる——今日から、誰だつて、信ちやんとか、信公とか呼ぶものはなくなる、小僧つて呼ぶだらう、

の小僧と――

水の落ちる樋口の下で、鯉の跳ねる音がした。

「常小屋（芝居小屋）の紫さんの二番目と同じ店だつてな――」

「うん」

私は、打切ら棒に答へて、長屋の方へ歸りかけた。牛舍の戸があいて、牧夫が二頭の種牛を小さな牧場へ追ひ出してゐるのが見えた。

長屋は、牛舍につゞき蠅が多かつた。夏の夕方になると、壁に無數の蚊が、しみをつくつてゐた。

母は、牧場の垣根の裾で、汁の實にするにらをつんでゐた。

「村田がご氣嫌でね、てるが（腹違ひの姉）袷を持つて來た――

母は、私をみると、そんなことを云つた。

「昨夜のこと知つて居つた？」

「知るものかな」

母は、笑つた。笑ふたびに、前齒のない上唇がひきつつた。母は、砕けた義齒をそのまゝ外してゐるのだつた。鼻の下に濃く生へた髯が、顏の感じを淋しくしてゐた。私は、ふと五十八と云ふその年を思つた。自分が此所にゐなくなつたあと、一人で殘る母に同情した。

てる姉の家は、牧場の向ふ側にあつた。養兄の村田は、私が彼の意志通り、小諸の雜貨店へ小僧に行かないので、此ト日間程、毎夜おそく醉拂つて歸り、姉を手古擂らせた。手古摺らせると云つても、彼のは、少し念が入り過ぎてゐた。まつ裸で、まだ餘寒の厳しい庭にとび出して、竿を振り廻すのだつた。

「信をつれて來い、信を――」

お腹に五月の子を抱へてゐる姉が、近所や、義理のある母の手前、はら〳〵して明日はきつと、信を說き落すからと、手を合せるばかしにして、家の中へつれ込んでゐるさまが、牧場の柵の間からみえた。

「信、おまへが今强情を張つて、小諸へ行かないのは、母さんに首くゝらせるやうなもんだぞ――村田が憤つて、兄さんに學資を送らなくなつてみろ、何うするつもりだ、それこそ兄さんに生涯怨まれるぞ、そんなことぐらゐ十四にもなつて分らねいこと、ねいずら――」

母はよく云つた。

「いやだ、小僧に行く位なら、活版所へいつた方がましだ、活版所なら字を覺えられるで」

私は、飽くまで頑强にでた。すると母は、袖口で眼のふちを拭きながら

「信――母さんだつて、何うしておまへを手許におきたくねいことがあらず、だけど、それが義理だ、あゝいやだ、いやだ、村田のどなる聲きくたびに、壽命が縮るわい」

父の死後、私達の一家は、町へ出て義兄の持家に移つた。姉はそこから、六文錢といふ町の製糸場へ勤め、私は高等科に通つた。義兄はある製糸場の會計を勤め金廻りがよかつた。彼は父の達者なうちから、醫學生だつた兄に學資を送つて居り、死後は、自づと私の一家の主權者のやうな位置ができかけてゐた。彼は私に、此春で學業を打切らせ、小僧にやることにきめた。母は間に入り、困つて東京の兄に訴へてやつた。母宛に、兄から手紙が來た

信二儀、飽迄商人になることを拒み、やれ勉强の中學のと申し、村田兄上の言に逆らへ居るは、日頃母上の甘やかされたる結果と申すの外なく、もつとも、小生に取りても、義理ある一人の弟に候へば、中學にも、大學にも通はせ勉强させ度きは山々に候も、今、村田兄上に逆らひては兄弟、共倒れになるの外なく、さすれば、××家再興の望みを絕へ、吾等

の前途暗澹たるものにて――

私は、母に代つて兄の手紙をよみ、じくじくと泣けて來た。

「母さん、小諸へ行くよ、小諸へいつて――」

「ウン、さうしてくれ、行つてみて、勤らなかつたら、出てくるまでも、一度は行かなきア、納らないでな」

母はすぐに村田へいつて話した。てる姉がとんできた。

「信が承知してくれたで、どんなにわたしが安心だか知れねいだしさ、――うちの父さんだつて、惡からずと思つて小諸へやるつて云ふんじやねい、みんな、信のため思つてのことだに――」

姉は、涙を流して、實はもう十日も前に、私が小諸へ行く時着る袷の反物を義兄が買つてきたのだと云つた。

「やだ、やだ云つたつてさ、行つてみないことにはネ、常小屋の留息子だつて行つてるんだし―な」

留息子といふのは、町の劇場に賣店をもつてゐる八百繁の二男で、私と同級生だつた。

私は昨夜、母と製糸場へいつてゐる姉を誘ひ、（姉は、此頃になつて、通ひでは五時の始業時間に間に合はぬので、合宿所に泊つてゐた）芝居にいつた。芝居は、慶長曾我と云ふ外題で、曾我物語と、山椒太夫をつき交ぜたやうな親子悲劇だつた。閉ねて十二時近く歸つてみると、村田の家は、ひつそりとしてゐた。それでも、私達は生垣の外を通る時、下駄をぬいで足袋はだしになつた。母は、萬事村田へ氣を遣つて、日頃好きな芝居もみに行けぬのだつた。彼女は、三十八で六人の子のある父に嫁ぎ、四十一で製糸場へいつてゐる姉を生んだ。

壁の向ふで起る馬の床を蹴る音がした

「昨夜は、一睡もしなかつた、馬の背が耳について、な、それに、あの芝居が惡かつた」

母は、朝飯のあとで、袷のあげをしながら云つた。

「厩の隣りはひどい――」

私は、窓に立つて、ぺん／＼草の青く芽を出した裏の墓地を眺めてゐた。牛舎の主人は、新しく手に入れたアラビヤ種の乗馬を牛舎のはづれにつなぎ、白い鼻梁をなでにやつてきた。神経の鋭い母は、夜中に馬のひづめの音に眼をさまし、枕元から長いきせるをとつた。

私は、袷をきて、母について村田の家へいつた。

義兄は、陽射の明るい座敷で、店へ持つて行く土産物の包を拵へてゐた。彼は

「仕度はできたかい――」と振り向いた。素面(しらふ)の時の義兄は、別な人のやうに、温和な感じがするのだつた。

私は、母に云はれてゐた通り、彼の前で着物の禮を述べた。

「奥へは、菓子折で間に合せたが店の諸君へは、數のあるやうに、櫻餅にした」

義兄はいつた。

「父さんも（母は義兄をさうよんでゐた）なか／＼大變だ、物入りが嵩んで――」

母は、お茶盆をもつて入つてきた姉の方を向いた。

庭の樹の枝で、雀が歡聲をあげてゐた。鳥影が、時々障子へ石のやうに落ちた。

「店へいつたら、旦那や、番頭さんの云ふことよくきいてな、何んでも、ハイハイつて、云ふんです、尻の重いのが、一ばん惡いで――」

姉はいつた。

「信が年期をしまつて、歸つてくる頃には、清美だつてもう、立派な醫者だ、さうすれば、協力でいくらも店を開いてや

れる、十五年と云つたつて、經つてみればすぐだ」

義兄は、一つの包には、達筆に粗菓と記し、も一つの大きな方に、お店諸君へと書きつけた。

私は、腹の中で、さつきから自分の年に、十五、十六、十七と、十五年を加へては崩し、加へては崩し、してゐるのだつた。私は、軀が生温くなり、床の間の店人達の顔が、いくつにも見え出した。

「何んです、泣いたりなんかして、信は

母は、たしなめるやうに云つた。私はうつ向いて、きゆつと下唇を噛んだ、涙が止らなかつた。

長屋の人達が別れにきた。私は貰つた餞別を何うしようかと母に相談すると、傍から義兄が、

「年期中は、店では金を持たせないきめだから、お母さんに預けとおけ」と云つた。で、私はその通りにした。

私は、馬車屋へ行く途中、義兄につれられて、城趾に近い世話人の大野氏の家へ寄つた。大野氏は、眼科醫だつた。まだ、暖くなり切らない陽が、藥局のガラス窓に碎けてゐた。夫人は、今の（私の入る店）主人の姪に當り、常小屋の留三もこの人の世話だつた。診察室の横手の明るい座敷で、書生體の醫者に會ひ、添書を貰つて外に出た。町端れの、立場には、母が荷物を持つて、待ち合せてゐる筈であつた。

田圃の桑畑の中に建ちかけた製糸場の煙突に鋲をうつ音が、間遠にカーンカーンと傳つてきた。町裏の淺い流れで、三人の女の子が、紅い手を水につけてゐた。しどみをおつてゐるのだつた。女の子の髮が、藁のやうに、風に吹かれてゐた。

半布を腰にまきつけた馭者が、立場の表に立つて、ラツパを鳴らしてゐた。馬車には、あかくしした二頭の馬がついて、もう出るばかりだつた。母が、寒いといふ顔をして、私達の方へ早足に近づいてきた。

「ご苦勞さんです」

母は、改めて義兄の前で頭を下げた。
「荷物は？」
義兄がきいた。
「馬車屋さんが、積み込んでくれた」
義兄は、帳場の方へいつて切符を買つた。その間に母は、帶の間から、小さな紙包を出して、
「これ、池田の宮のお砂だ、肌に、つけておゝき」と、低聲で云つた。
「ウム」
私は、受取つた紙包をぬひあげの深くに挿し込んだ。母は、村の鎮守まで、いつの間に行つて來たのだらうと考へながら――。
「お宮まで、庄左衛門に自轉車をとばして貰つた」
母は説明した。そして、私の着物の襟がよく合つてゐないのをみて、「襟を合せて、手拭は、チヤンと腰に挾んでおくんです」と叱るやうに云つた。
馬車の中に、七八人の客が膝をつき合せ、頭を屈めてゐた。私は義兄と對ひ合つて、割り込んだ。少し高くなつた位置で、道に立つてゐる母を眺めると、餘計淋しげな感じがした。私は欠伸を噛んで、泣けて來ない用意をした。
ラッパが空に鳴り渡り、がたつと函が動き出した。
「信、達者でよくお店を勤めるんですよ、小諸は風の名物だで――」
「あゝ」
私は、口の中でうなづき、母から顔を背けた。

距離が少しづつできた。町より、やゝ高い台地にある私の村が、製糸場の建物の間にせり上つて來た。

屋代で、汽車に乘り込んだ。

列車は、水の涸々な千曲川に添つて走り出した。私は、景色の變らない窓の外を眺めながら、頻りに常小屋の留三のことを思ひ出してゐた。私達が、學校で留三と遊ばなかつたのは、彼が町の劇場の中を、幕合ひに、駄菓子の箱をかついで、高い聲で賣り歩いたからだつた。——その留三が、自分より、先に店にいつてゐる！

「昨夜は、何所へいつたね」

隣席から、義兄がだしぬけに訊いた。

「昨夜！」

私は、窓枠から、顏を引込めた。

「早くからランプが消えてゐたね」

「芝居です」

私は正直に答へた。心にぎくりとして、——

「面白かつたかい」

義兄は笑つてゐた。

停車場が七つ八つ過ぎた。

起伏する山脈のひだとひだとの間の一ととところ、砂を盛つたやうな突起を義兄が指した。

「ほら、淺間が見えるよ、——あの裾の所が小諸だ——」

私は、窓に立つて、遙な方角に眼を凝らした。よくみると、晴れた空に、淺間の噴煙が、うつすらとなびいてゐるのだ

つた。その裾の傾斜面に、無數の白壁の集積が、くつがへした玩具箱のやうに眺められた。――

「とうとう來た」

私は、さう思ふと得體の知れない感動に胸がどきどきし出した。――それで、拳を固めて、體を窓枠にもたせてゐた。――

天井の一方に、四角に切られた天窓があつた。その下の神棚では、灯が點つてゐる――

私は、今の小座敷で義兄の横に、體を石にして坐つてゐた。そこへは、店で起る物音がつきぬけに聽えてきた。算盤を彈く音、けたゝましい電話のベル、荷物を引合せる聲、表を通る荷馬車の響――

私は、急に暗い所へ入つたので、眼の底がづきづきした。俯むいて、郷里にある角店（呉服店）のだるまに似た主人の顏を思ひ出してゐた。――店の主人は、あの人のやうに、肥つてゐるだらうか――

黑眼鏡をかけた、背の高い、四十格好の人が、爪先で疊を踏みしめて入つて來た。瘦せて、蒼白い顏をしてゐた。瞬間、私は、これが、主人かな！と、本能的な畏怖に打たれた。しかし、まもなく、義兄との會話で、それが、支配人をしてゐる、主人の弟だと云ふことを知つた。――

挨拶のあとで、義兄は。――

「ほんとの初奉公でして、お役に立ちますか何うですか」と云つた。

「ひとツ、正直に働いて貰ひませう」

支配人は、私の方へ眼鏡の顏を振向けた。そして、

「信二は、留三を知つてゐるか」ときいた。

私は、此主人がいきなり、信二と呼んだので、驚いて顏をみつめた。名前を呼び捨てにされることは、少しも豫期しな

かつたので——すると、黒眼鏡の下の眼が自分の心を見拔いてゐると云ふ氣がしてきた。で、一所懸命に答へた。
「はい、同級です」
「あれも、もう自轉車に乘ります」
　支配人は、見えない眼で、煙草盆の火種をさぐつて、刻みを吸ひつけた。
「信さんも、早くさうなつて貰ひたいね」
　義兄は、私を煽り立てるやうに云つた。
　やがて、大野氏の話が出、義兄が風呂敷から土産物を取り出した。
「こちらの方は、お店の方へ、お仲間入りのしるしです」
「ヘイ」
　支配人は、かるく受けて店へ向つて「重吉つ」とよび立てた。
　店から、簾をよこわけにした、若い番頭が入つて來た。主人の背後に膝を折つて
「ご用は」と訊いた。
「ウム、今度來た信二だ——、店へつれて行け、それからお土産をいたゞいたぞ！」
　支配人は、物靜かな調子で云つた。
　番頭は、義兄にお辭儀をして、「來てごらん」と、私の方へ向いた。
　義兄が、云つた。
「皆さんに、お會ひしておいで、」
　私は、腰に煙草入と竝べて、洋銀の矢立をした番頭に跟いて、店へ出ていつた。

火鉢の前に、二三人づつ一塊になつて、店の者が坐つてゐた。重吉は、まづ、帳場にゐる若主人から、帳方の佐助の所へ行き、順次、店先の仲間の所へつれていつた。

「信どんです、宜しく――」

私は、さう云ふ重吉の髄に隠れるやうに寄り添つて、一度一度にお辭儀をした。私には、この小さな仲間達の顔が、揃つて、意地の悪い嘲笑を浮べてゐるやうに思はれた。その時、火鉢の横で、前垂に灰をつけて、矢立を磨いてゐた小僧が、突然顔を上げて

「おい――」と笑ひかけた。

私は、一寸の間、それがさつきから心にかゝつてゐた留三だと思へなかつた。彼は見違ひるほどませて、大人びた顔をしてゐた。私は、彼の前でも、丁寧にお辭儀をしなければならなかつた。

「おめい、信どんを知つてゐるのか」

重吉が留三をみつめた。

「知つてゐます」

「じや、信どんを奥へつれて行きな、それから、倉と」

重吉が云ひつけた。

それで今度は留三が代つて、私を奥の人達の所へつれて行つた。私は、此同級生が、一年の間に、自分よりずつと智力の勝れた人間になつてゐるやうに思へて、おづおづして、口も利けなかつた。背も高い――

奥座敷は、廣い勝手につゞく、廊下の突き當りにあつた。半襟のかゝつた同じような着物をきた女の人が、火鉢を圍み合つて、いり豆をつまみながら、お茶を呑んでゐた。

「お店へ來たのかい、何所からだネ」

一ばん年取つた、柔和な感じのする婦人が顔を上げた。

「松代から來た信どんです」

留三が敷居際に坐つて、背後に立ち竦んでゐる私に「大お上さんだよ」と云つた。

「え」

私には、それが、おほかみさんときこえたのだ。

「大旦那のお上さんだよ」

留三は重ねて云つた。

私は、まごついて、がつくりと頭を下げた。一座の視線が、ぢろ〳〵と自分の上に集つてゐる――

「松代から、ぢや、大野さんのお世話だネ、留三のお友達かい」

「ヘイ」

留三は、ちらと、誇かな微笑を浮べた。

「大野さんでは、皆さんお達者――」

私は、今度は、自分が答へなければならないのを感じた。

「はい」

これらの會話の間、外の女達は絶へずいり豆をつまんでゐた。――それが、私にソト箱の中の白兎を想ひ起させた。

「いくつだい――信は」

「十四です」

よく、お店を勤めておくれ」

婦人は、やさしく、含めるやうに云つた。

奥座敷を出ると、留三は土間に下りて、倉の方へ歩き出した。

古い倉の壁土は、さら〳〵と音を立てゝくづれてゐた。

洋酒倉、穀倉、油倉、紙倉――どの倉も、濕つぽい、地の底のやうな臭氣が立ちこめてゐた。高い所に、方形の小窓があり、そこから斜めに落ちる光線の矢が、よどんだ空氣を斷ち切つてゐた。蝿が、きらりと、光りのやうにとんでゐた。――

「松川も此町へ來たつてな」

私は、紙倉の前にでた時、留三に向つて初めて友達らしい口を切つた。松川は、同級の肴屋の次男だつた。しかし、留三は、それには答へず、

「信どん、おめい上の者に、なつて云ふと、毆られるぜ――」と云つた。

「なつて――」

「おめい、松川は來たつてなつと、云つたらう、あれは、來たつてねつていふんだよ」

「あゝ」

しかし私は、此なと、ねとの使ひ分けのために、その後、仲間達からしば〳〵たしなめられた。

留三は、倉々を廻る間、私から、故郷にゐる友達の消息をきゝ、自分も店の容子を傳へるのだつた。入店して一年位は、庭を掃くこと、それから、ランプ掃除、與長町の支店に一年勤め、歸つてくると、倉掛りになり、ずつと役が上つて出張――彼自身は、今庭掃であるが早く支店の方へ轉任したいこと、――そこで、彼は話頭を奥に一轉して、間もなく、三番目のお嬢さんが結婚すること、それで大主人は、買物のために上京中であること、支配人の眼の悪いのは、若い時遊

満した酬ひであること、犬が二匹ゐること、犬の方が、時々自分達より、おいしいものを喰ふこと。——

裏庭へ引返してくると、一人の小僧が井戸の前に立つて、キイキイと車を軋らせてゐた。

「留どん、庭掃上り？」

「ウム、もう二三日だ」

留三は、私の方を振り向いて、「政どんに代つて、水を汲んでみ、風呂番になつたら、おめいだつて、毎日汲むんだから」と云つた。

それで私は、近づいていつて滴の垂れる、太い繩にとびついた。つるべはきら〳〵と清水の玉を井戸の底へ揺りこぼしながら上つて來た。私は、打つつゞけに、つるべを三度手繰り上げた時、耐り兼ねて、繩を投げ出した。呼吸がはづんで、心臓が破裂するかと思はれた。

「駄目々々」

留三は笑つて、繩をめがけて、蛙のやうに、かるくとびついた。そして、忽ち一つの桶を一杯にした。しかし、私は此蛙の動作を二十度繰返さなければ、庭男の作蔵の荷つて行く二つの桶が一杯にならないのだときかされて、眼をまるくした。

店に戻つた。

土間で荷作りをしてゐた重吉が、私に向つて云つた。

「信どん、兄さんは歸つたよ」

「え、」

私は、どかんとして突立つた。義兄は、わざと逢はずに歸つたのだ——そんなふうに邪推された。唇を前歯の下に、切れ

るほど囀んだ。私には、いつの間にか、此新しい癖がつきだしたのだつた。

庭掃は、留三を頭に、政吉、豐吉、私の四人だつた。私は、みなと同じやうに着物の裾を端折つて、道の馬糞を取つたり、荷作りのあとの繩屑や、砂糖の空俵を片付けた。政吉は十八で上田の呉服店から來た中年者だつた。豐吉は、十二だだつたが、私より四日前に店に來たため、矢張上の者だつた。片付が濟み、私が箒をもつて土間に立つた時、此小さな仲間は、いかにも、先輩らしく、口を尖らした。

「信どん、水をまいて箒のうらを止めて掃くんだぜ」

ランプ係の松吉が、一つ一つランプを配り出した。店では、そろばんが始つてゐた。若主人が抑揚をつけて、一日の賣り上げを讀み上げるのに合せて、帳場の前に坐つた五六人の番頭の指が、敏捷に球の上を走つた。木琴のやうな、冴えた音が流れ出した。

倉番が、鍵束を鳴らして、重い倉の戸を閉て切つて歩いてゐた。

私は、店々がばた〳〵と戸を鎖し、長い街道が薄墨色に塗られて行くのを眺めると、限りなく、遣瀬なかつた。箒を動かしながら、郷里の家の壁にかゝつてゐる父親の引伸し寫眞を眼に描き、十五年經つたら、俺はいくつになるだらうと、今度は五十八といふ母の年に、一つ一つ十五年を加へてゐた。

馬糞に、紙屑に、小石と一緒くたに掃込んだ重いゴミ取を持つて、私達は裏へいつた。ゴミ捨場は、門の外の石垣の片隅にあつた。輪廓の朧になつた火山からは、星くづの光り出した空に、煙の塊がむく〳〵と上つてゐた。

私達は、手を洗ふために、坂の下にある清水へいつた。向ふの崖の中腹で、水車が薄明りの中に、白い歯をむいて、勢よく水をふき上げてゐた。清水から流れ出す樋で、手を洗つて店の方へ引返した。——

私は、夕飯の後で、火鉢の前に坐つて、此まゝ店に留まらうか、それとも、朝になつたら、あの牛部屋の隣りへ逃げ歸らうかと考へてゐた。千曲川に沿つた線路をずんずん歩いてさへ行けば――、

店は、もうすつかり夜であつた。土間に㊎の字の入つた明り障子が嵌つて、澤山のランプがぎら〳〵と、珍らしい、花のやうに咲いてゐる。

突然、帳場の後で、怪物のやうな口をもつた電話のベルが――私は、ずつと後まで、此機械になじめなかつた――劇しく鳴り出した。勝手から、生意氣に、小揚枝で歯の隙間をつゝつきながら出てきた松吉が、電話室にとび込んだ

「ヘイ、ヘイさようです、ビールにサイダーを一ダースづつ、それから、青豆の罐詰が二本、ヘイ、馬場裏の醉月さん――」

松吉は、送話器に向つて、がん〳〵喚いてゐたが、電話室を出るや否や、私に向つてどなつた。

「信どん、配達――」

私は、キヨトンとして、立ち上つた。松吉は、上店から竹製の籠を持つてきて、四角な仕切の中へ、棚のビール瓶をとつて、一本づつ詰め、形の小さいサイダーの方を、その隙間へ倒にしてつつ込んだ。それから、青豆の罐詰を㊎と印の入つた錢袋の中へ轉し込み、私に持たせた。

「何所だい、配達は、」

火鉢の前で、食後の煙草を吸つてゐた重吉がきいた。

「醉月です、受取りを下さい、彼處の上さんは、やかましい家だから」

松吉は云つた。

「よしつ」

重吉は、下帳場へいつて、賣帳に註文品を書きつけ、算盤を入れた。

「そら、――〆めて、四圓十八錢だ」

重吉は、ぺたりと朱肉の鮮やかな判を捺した書き出しを、ぽんと盤の上に投げ出した。

「信どんをつれて行きます」

松吉は、尻ぱし折をして、下駄をはいた。私も、土間に下りた。

「おい、提灯をもつて行きな」

重吉が浴びせた。

「二人だからいりません」

「いかん、持つて行け」

松吉は、頬ぺたを膨らまして、不精々々に、勝手へ名入の弓張を取りにいつた。

私は、提灯を持ち、松吉の先に立つて外に出た。いきなり、風が眞正面からたたきつかつてきた。私は、風が名物だと云つた母の言葉を胸に浮べながら、兩側に默々と大屋台の軒を並べてゐる町を歩いていつた。所々明り障子から泄れる灯が道に落ちてゐる外、町は殆んどまつ暗だつた。スーと、夜空に斬り立つてゐる倉庫の屋根で、星が手の屆きさうに光つてゐた。松吉の背中で、竹籠がギシギシと鳴り、いかにも重さうだつた。

「重いだらうネ、それ――」

私は、振り返つた。松吉と、二人切りで話すのはこれが初めてなので、切り出すのに、かなりな努力だつた。

「ウム」

松吉は、何か、腹を立ててゐるやうな口調でうなづいた。私は、穏穏なく、又默りこくつて、彼の先にとぼ〳〵と歩いてゐた。彼は、道の曲り角にでるたび、右、左と、——體操の時の教師のやうに素氣なく呼んだ。

町役場の柵について右に折れた。すると、一所道の上に、末廣形に灯がにじんでゐた。植込の向ふから、三味線の音が、夜氣の中に滴つてきた。

「此所だ」

松吉は、呟いた。

打水に洗はれた飛石に傳つて行くと、入口が二ツにわかれてゐた。

「左」

松吉は又云つた。

土間には、女下駄が、亂雜に脫ぎちらされてゐた——、明るいランプの下で、若い藝者が鏡台の前に坐つて、掌で白粉をつけてゐた。

「ビールを持つて參りました」

松吉は、敷台へ後向きに籠をどしつと下した。

「おビールが來ましたよ」

藝者は、料理場の方へ、白い首筋をねじ向けた。

「ご苦勞さま」

柵の蔭で、やさしい女の聲がした。

松吉は、私に手傳はせて、一本づつ瓶を棚の上に竝べた。私は、罐詰を出した。

二十位ゐの、眼の涼しい女が、奥から蟇口をつかんで出て來た。髮の毛を、背中一杯に浴びて、咽喉に白い布をまいてゐた。――

私は、この女をみたとき、ふと去年死んだ牧夫の娘を思ひ出した。私は、この娘に、中學へ入つたら、上等のごむでんまりを買つて貰ふ約束だつた。――

「おいくら？」

女は、蟇口を開けた。

「四圓十八錢です」

「重吉さんに、洋傘（かさ）の荷が入つたら、みせて下さいつて――」

女は、金を算へながら云つた。

「ヘイ」

松吉は、袋の中へ、金をしまつて、外に出ると、私の前に、小指をつきつけた。

「あいつ、重どんのレコだぜ――」

「え、」

私は、此レコの意味が分らず、ひよいと顔を上げたが、相手は來る時と同じに、無口な松吉にかへつてゐた。――

大通りに出、ある菓子店の前にくると、松吉は、ふと、提灯を吹き消した。そして、軒隣りの、古着店の軒下に、私を引張つていつた。

「信どん、甘納豆を買つて來い、」

松吉は、呆氣に取れて、闇の中で彼の顔をみつめてゐる私の手に、手應へのある紙包を握らせた。

私は、初めて提灯をもつて出ることを拒んだ意味が分り、少しづつ松吉に對して恐怖に似たものを感じ出した。
私は、明るい菓子店で、包をひろげた時、中の金がそつくり銅貨だつたので、わけもなく、どきりとした。
松吉は、體を猫のやうに、古着店の雨戸に吸ひつかせ甘納豆をくひ出した。
「おめい、留どんと同じ所だつてな、おらア、あいつ嫌いだ、あいつは、おべつか使ひだ——」
私は、松吉がばらばらと、掌にあけてくれた豆を口に入れるのが怖く、一粒づつ足元に捨てた。そして、何くはぬ顔で、答へた。
「同じだけんど、遊んだことないや」
それで、松吉はいくらか氣嫌を直したのであらう、「おめいに矢立をやらう、小刀のついた、眞鍮のだぜ——」と云つた。
松吉は、喰ひ残りの菓子を懐ろにねぢ込み、大人のやうに落付拂つて、提灯に火をつけて、さつさと店の方へ歩き出した。

四五日經つた。私は、停車場前の倉庫や、與良町の支店へ留三に伴れられていつた。與良町は、此長い街道町の入口にある軒の低い町で、支店には、一番々頭の茂平が、主人格で納つてゐた。留三は、子供の時から人に接して育つた故か、性質が晴れやかで、何所へいつても、可愛がられてゐる風だつた。
「留どん、又浪花節やれよ、甘泉堂おごつてやるぞ、ほら、自轉車で一つとび——」
雜貨と、雜貨とに挾つた小さな帳場の中から茂平は、五十錢銀貨を卓の上に投り出す、すると、留三は
「ヒヤツ、今日は先潮ひだな、凄いぞツ——」と、仰山にとび上つて、店の前の自轉車に、かるがると身を躍はすのだつた。
彼は、一ケ月前に、庭園を上つてゐた。——私は、小さな仲間達にも馴染み、夕方運動の時に、示し合せて、少し早めに裏

庭へいつて、ボール投げをしたり、犬の首環をつかんで、引廻したりした。

窓の外に、ぶつ〳〵と大粒な雨の音がしてゐた。私は、店の者の行李の置場になつてゐる上店の二階で、ビールの空箱の上に、書簡箋をひろげて、松吉から貰つた矢立の墨で母に宛てゝ手紙を書いてゐた。

母上さま

悲しき悲しきお別れをしてから、はや十日立ちました。こちらは今日は雨です、御主人はじめ、店の人達にも馴れ、毎日樂しい日を送つて居ります、御安心下さい。常小屋の留どんにつれられ、支店や倉庫にも行きました。支店長の茂平さんは、もう一年で年開けです、留どんは、私が來てから庭はきを上り、六月から支店の方へ行きます、私は、朝六時に起き、十一時に寢るので、居眠りがでて困ります。笑はれるので、眠るまいと思つても、何うしてもだめです。家にゐた時、母上の云ふことをきかず、それのみ殘念です。

その他、奧のこと、姉や長屋へ宜しくと云ふこと等々——、

私は、手紙を懷へ入れて、じつと障子の間から、屋根を掠めて、斜めに道の上に降り注ぐ白い雨脚を眺めてゐた。時々、油瓶を提げた客が、ぼつんと雨の中に浮び上る、——城趾の松林も、濡れて鮮かな綠に光つてゐる——、と、この時、私は棟つゞきの隣りの部屋に、音とも云へないほどの音を——人の氣配を——かんじておやつと、耳をそばだてた。隣室は、庭男の寢部屋で、小さな窓が道に向つて一つ切られてゐるきりの天井裏だつた。

裏庭へぬける狹い土間が、店を二つに斷ち切つてゐる、店からきて土間にかゝつてゐる橋を渡ると、上店になり、そこに踏むたびに、キーキーと安樂器のやうな音を立てる階段がある——この階段を上ると、私のゐる二階と、一方庭男の寢部屋へ行けるのだつた。——

私は、立つて足うらを、床板に吸ひつかせ、境界の板壁に向つて近づいていつた。板には薄い紙の厚さほどの隙間があつた。私はそこに眼をくつけた。すると、臓物の露はになつた爼の上に這ひつくばつた男の半裸體が眼にうつつた。——その傍に、留三が私の方へ横顔をみせて小さな瓶をつかんで屈んでゐた。煤けた屋根裏が、低く二人の頭の上に追被さつてゐる——、留三は、相手の背中に、何か藥でも塗つてやるのであらう、瓶の中へ穗の白い筆をつつこんだ——私は、これだけの光景に、すつかり怯え切つて、思はず顔をひつこめた。——もとの場所へとびかへつて、箱の蓋に顔をつつ伏した。」

「誰だらう!」

顔を上げて外をみた。雨はまだ歇まない——いや、雨脚は、だんだんつよく窓扉をうち、心の底まで濕つて、じつと眺めてゐる外景が、いつの間にか、長屋の窓からみた牧場に變つてゐる——、

私は、庭掃の時に、留三に天井裏のことをきいてみやうと考へた。薄暗いのでよく分らなかつたが、何んとなく、重吉のやうな氣がされる——しかし、私はなぜか、此話を留三にすることができなかつた。恐い——、いや、恐いと云へば、いろいろなものが恐かつた。夕方になり、ランプがつき出すと、此古い建物の隅々が、一つ一つ私を脅やかした。料理屋へ配達に出る暗い町も恐かつた。往きは、荷物の重さで夢中だつたが、歸りは、體中ぐつしより汗を掻いて、半ば駈けるやうに歩いた。

丘の桃畑と、城跡の櫻が、一せいに花をつけた。列車毎に花見客が吐き出され、町の中が雜踏した。中空で、花火がぽんぽんと彈けた。

私は此頃になつて、重吉と交替に新宅へいつた。新宅は、支配人の家で、二つになる女の子があつた。朝晩、眼の惡い支配人を店へ送り迎へする外、女の子の守をして、公園や、停車場へいつて時間を過した。停車場に行くと、すぐに家

のことを思ひ出した。本棚につかまつて、向ふの丘の方へ滑つて行く汽車の窓を眺めると、明るい希望が涌き幸福であつた。――今日も又、汽車は、自分の心を郷里へ運んでいつた――そんな氣がした。私は、店で小型の手帳を買ひ、それに品物の値段を、留三から教へられた符牒で書きつけ、いつも懐に忍ばせておいた。私は、値段を覺えること、自轉車に乘れるやうになること、すべて豐吉と競爭だつた。私は、店の仕事の中で、夜の使ひの次に此子守が嫌で堪らなかつた。背中で子供の泣くたびに、體をゆすつて、新しく主人の子供達のやる蓄音機で覺えた軍艦マーチを歌つた。それでも泣き止まない時は、崖の水車の所へつれていつた。すると、子供はびつくりして、ぽかんと口を開いたまゝ默つた。でなくとも、泣き聲は、水車の音に搔き消された。

東京から歸つた主人は、よく清水へ頭を冷やしに來た。彼は腦が惡い――半白の頭に濡手拭をのせて、坂を上つて行く大主人の後姿をみて、私は一年前に死んだ父を思ひ出した。父も、やはり、腦が惡かつた。

ある晩、私は自宅に戻る支配人について店を出た。風も生溫かく、街道は、暈をかぶつた月の光で、うつすらと煙つてゐた。城趾の夜櫻をみに行く人が、ぞろ／＼と傍を通つた。――

私は、ずつと前に、丁度こんな風な晩に、父であるか、母であるか――とにかく、二人のうちの何方かに手をひかれて歩いてゐたことがあつたやうな氣がした。――すると、今手をひいてゐるのは、薄氣味の惡い、黑眼鏡をかけた人ではなくて、もつと優しい、お父さんとよびかけたら、いきなり、自分を抱いてくれさうな心地がした。私は、ぎり／＼と、つかんでゐる大きな手を握りしめた。突然、道の眞中に立ち止つた支配人の聲が、私を現實へ引戻した。

「信――われは、あざみを知つてゐるか――」

「はい――」

私は、びつくりして顏を上げた。

「一寸、いつてくれ」

それで私は、馬場裏にある小さな料理屋の方へ歩き出した。

「信、われは悪いことをするな、悪いことをする奴は、顔色で分る、何所で誰が何をしてゐるか、旦那さまの方には、ちやんと分つてゐるのだ――」支配人は、ぽつりぽつり云ひ出した。「何うだ、誰か、夜店をしまつてから外へ出るものはねいか、旦那様は決して怒るんじやないぞ――われ達は、みんな親から預つてゐる大切な子供だで、間違ひのねいやうによく云つてきかせなくちやならねい――」

私は、ちらと、松吉が菓子を買ふ時に渡す銅貨のことを思ひ出した。支配人の顔をみた。黒い眼が、じつと、一つ所をみつめてゐる、――私にはその眼が恐い。――

あざみに着くと、顔馴染らしく、小さな髷をのせたお上が、いそ〳〵と出迎へた。

私は、ひとり、玄關の裏手の薄暗い部屋で、主人の用の済むのを待たされた。向ふの板の間に、ランプの灯が、寂しく砕けてゐ、料理場の流し元で水をつかふ音が、寂然とした家の中に、一さう物淋しい感じを起させる。――

女中が、菓子を盆にのせて運んで來た。

私は、菓子をくひながら、片側の机の上から表紙のばら〳〵になつた雜誌をとつた。口繪を眺めた。藝者や、舞妓の寫眞ばかりだつた。雜誌を投り出して、じつと、中庭の方へ耳を澄ました。時々廊下の外で、料理でも運ぶらしい足音がした。ずつと、離れた所から、三味線の音が、ぽつんぽつんと聞え出した。――

私は、懐から今朝屆いた母の手紙を取出して、暗いランプの光でよみ出した。私が母に手紙を貰つたのは、それがはじめてだつた。で、私は緊索から引上げた糸屑を、やたらに引継したやうな分りにくい、變體假名の手紙を、店の飾棚の陰で讀み、外出する時も懐から放さなかつた。――文面は、初めの方は、繰返し私の體のことを注意し、長屋の人達のこと、

製糸場の姉――終りに村田のことに及んでゐた。――てるたちも、おまへがたつてからたいへんよくしてくれ、しばゐにもにどさそはれました。けさわはぎ（たばこ）をひとふくろこどもにわたしてよこしました。いへのことは、なにひとつしんぱいありません。くれぐれもおみせをよくつとめてください。なほ、さくじつ、うしべやのくろのほうのめうしがしに、ながのより、じゆうゐがきました――など、書いてあつた、

黒の牝牛は、六頭の牛の中の唯一のホルスタインで、私の好きな牛であつた。この一頭の牛のゐなくなつたことが、私を、故郷の町が半分失つたやうな淋しさの底へつき落した。

「ホルスタインが死んだ、ホルスタインが――」

私は、いくども心に呟いた。

「番頭さん、――旦那がお歸りですよ」

女中に、肩を揺ぶられて、私ははつとして眼を醒ました。――私はいつか、手紙に顏をくつつけて、假睡をしてゐたのだつた。母の手紙が、顏の下で、唾液にぬれて、皺くちやになつてゐた。私は、いそいで、手紙を懐にしまつて、玄關に出ていつた。

支配人は、ひどく、好氣嫌だつた。ぞんざいに、卷煙草をくはへて、手をとつてゐる藝者に、

「おこま、こいつはまだ遊ぶことを知らねえ――」など云つて、やつと探し當てた私の頭を、捻じ向けた。

私は、ランプの灯影で、初めて藝者の顏をみた時、何んとなしにはつとした。あの女だ、いつも、醉月で長火鉢の前に坐つてゐる――と思つた。

私は、外にでてから、今夜支配人があさみにきたことは、重吉に關係がある――そんな氣がした。

私は、仲間達からいろ〳〵なことを教へられた。縣下でも、五指に算へられた店も、鐵道が布設されてから、だん〳〵衰へて、今では取引先も半減したこと、舊式で、まだ給金制度に革めないから、店の者が絶へず代ること、——私は、時々紙谷や、天井裏へもつれて行かれた。そこで仲間達は、棚から鑵切をもつて來て、鑵詰の蓋の上に、馴れた手付で、文廻しを描いてみせるのだつた。又、彼等にも、人並みな讀書慾があつて、毎夜袋を貼る机の下に坊ちやんや、思ひ出の記を忍ばせてゐる——、私は、漱石も、蘆花も知らなかつた。松吉から、初めて「信どん蘆花をよんだかい」と、きかれたときには、主家の中學生から、フランスの語で、話しかけられた時のやうに、ぽかんとした。私は、品物の値段の外に、この蘆花も知りたかつた。配達の歸りに、よく書店の飾り窓に立つて、やたらに、手帳の端に本の名前を書きつけてきた。——

私は、店の仲間達の前で、胸で手を組み、豐吉が上店の傘箱の中で、仰向けに眠つてゐる格好をしてみせた。

「上店で、豐どんがネ、豐どんが——」

「チエツ、」

ランプの下で、袋を貼つてゐた松吉が、机の前を放れて、上店に突進していつた。して、たゞ、蓋をあけて揺り起したのでは興がないと考へたのであらう、——油場からねり油を指の先にくつつけてきて、ちよつぴりと、着物の裾の喰み出てゐる傘の箱に近づいていつた。私は、最初の夜の甘納豆以來、彼のすることが——自分はその頃、この文學好きな仲間によほど親しみかけてゐたが——妙に不安だつた。私は、後から足を運びながら、だん〳〵後悔に似たものをかんじ出してゐた。——松吉は、箱の蓋に手をかけた。——小さな體は、箱の中にきつちり嵌つてゐた。頬の上にまつ毛がかすかな翳影をつくつてゐる——。

「およし、ね、およしつたら――」

私は、此靜かな死人の鼻孔と、眼と口に松吉がねり油を塗りかけた時、相手の腕をつかんだ。呼吸が止つてしまふに違ひなひと思つたからである。豐吉は、額をいびつにして、手の甲で鼻や口をひつこすつた。――

「信どん、メリケン粉を持つてきな」

松吉は、私の手を振り拂つて、「早く」と云ふ顏付をした。そして、私のためらつてゐるのをみると、自分で箱から、一つかみのメリケン粉を持つてきて顏中へ振りかけた。

「こいつ、此顏で店にでゝくるぞ、いいか、みておれ――」

松吉は、此たちの惡いいたづらを終へると、さつさと店へ引上げた。

豐吉が店へ出て來た。仲間達は、その剝げた面のやうな顏をみた時、どつと一時に笑ひ出した。豐吉は、シク〱聲を嚙んで、泣きはじめた。それで、面は汚れて、白い粉をばら〱と疊の上に振り落した。

「松吉！」

上段の火鉢の前に坐つてゐた敏感な支配人がきゝつけた。

「ヘイ」

松吉は、青くなつて、支配人の所へいつた。いきなり、手にあつた主人の煙管が、松吉の頰にとんだ。しかし、松吉は、初め主人の前に坐る時から、煙管のとんでくる心構へをしてゐた。煙管が横に拂はれると同時に、彼は體を引込めた。主人は、焦れても一度打ちかけた。が、この煙管の受け見合で、大概相手の性質をみる習慣がついてゐたらしい――きうに、煙管を投り出して、「來い」といつて、松吉を奥の大主人の所へつれていつた。――

この一夜で、私の心は、初めて店に來た日にとびかへつた。恐怖で、がた〱慄えながら、上店にいつて、松の所へ長

長と手紙を書き出した。

母上さま、

毎日庭掃のあとで、店の裏の石垣に立ちて遠い遠い故郷の空をながめます、あの空の下に母上さまがゐるんだと思ふと、空をとぶ鳥が羨しくてなりません。この前の手紙に書いたのは、みんな嘘です、此店の人達は、主人も番頭もざんこくです、きせるで頭をうちます。私は主人の子供を負つて、よく停車場へ行きます、停車場で汽車をみる時だけ幸福です、汽車にさへ乗ればと思ふからです、私のいやなこと、子守と、夜の配達、――私は家に歸りたいけれどがまんします、母上さまと一緒なら、庄左右門と綿工場へいつても樂しいと思ひます、お手紙を下さい（自分で書いて）何、去年長野へいつた時、城山の早取寫眞でうつした寫眞があつたら送つて下さい。――

私は、自分が子供の守をすることを知つたら、母はどんなに悲しむだらう、――と考へながら、手紙の封を糊づけにした。そして店の前に立つてゐる、町に一つぎりない、赤い、玩具のやうなポストへ投げ込んだ。

翌日、私は松吉と一緒に、石油を配達する田圃の養雞所へいつた。――松吉は、いつになく悄氣て鑵を背負つた體を、少し猫にして、町端れの坂を下つて行く――足を運ぶたびに、砂埃がかるく舞ひ立つ――町端れの橋を渡つて、かまどからむくむくと黒煙の上つてゐる瓦燒の前にくると、松吉は振り返つて、口笛を鳴らした。ジョンが四つ白の足を宙に浮かせて丸のやうにとんできた。道は、ここから緩かやな勾配をみせて、千曲川のふちにある養雞所まで、まつすぐにつゞいてゐる。

「信どん、一休みしす」

「うん」

松吉は、雑草のつくる緑の土手に背中の鑵を下ろし、「昨夜はぎんなりした」と淋しく笑つた。

私達は、土手に腰かけて、坂の途中で買つてきたカリン糖を喰ひ出した。

犬は、體を押し立てゝ、二人に向つて、ぐわつと吠えた。私が菓子を投げてやらうとすると、松吉は「いかん」と怒つたやうに叫んで、意地悪の子のするやうに、菓子をくはへた口を犬の鼻先につきつけた。

犬は猛然と吠え出した。

松吉は菓子の袋がからになると、今度は、巻煙草を出して火をつけた。しかめた顔を空に向け、煙を鼻から吐き出した。突然、嘲るやうな眼付をして

「信どん、おめい、東京へいかないか」と云つた。

「東京！」

その時、白い雲の塊が、頭の上に兜のやうにひろがり、松吉の横顔に暗いかげをつくつた。

「こんな所にゐるのは、十五年どぶへ捨てるやうなもんだぜ――おめい、六さん（通ひ番頭）のやうになつて、なにうれしいだ、おらア、明日、店をでるぜ――」

「嘘！」

松吉は、嘘ではない――昨夜おそく主人の所から戻ると、すぐに荷造りをした、東京へいつたら、簿記學校へ入り、傍ら牛乳でも、新聞でも配るつもりだ、それでも、店にゐるより何の位ましか知れない、店では、何うせ年期近くなれば、何か落度を探して追ひ出す方針だからなど云つた。

私は、先夜支配人があさみにいつたのはそれだ、きつと重吉を店から出すためだ――と心に思つた。私は、親しい松吉がゐなくなつたあとの店を考へると、ひどく寂しい氣がされた。東京へ行かうか、――そしたら、勉強もできる、毎日子守をしなくてもすむ――しかし、東京では、今より何倍かの距離が母とに間にできる――、これは、思つてもたまらない

ことだ。それに、義兄が恐い、私が無斷で東京へなど行つたら、母はどんな目に合ふだらう――私がためらつてゐるのをみて、松吉はたゝみかけた。

「おおい、いやか――」

「いやじやないけれど、旅費がないもの――」

「いいよ、旅費なら、おれあるよ」

松吉は、云ひながら、吸ひかけの卷煙草を草の上において、いきなり、肌につるしてゐるおまもりさんを外した。――

私は、松吉が袋の中から、細かく折りたゝんだ五圓紙幣を三枚取出したとき、急に二人切りでゐるのが恐くなつて、土手からとび下りた。

「行かうよ」

鐵橋を通る列車の響音が、がうつと、一瞬、物靜かな高原の春を搔き亂して過ぎた。――

「おれ、先にいつてゝ、よぶぞ、いいか」

松吉は、ひとりできめて、完全に灰になつた吸ひがらを足元に投げつけた。草の葉を捲つて、口端をこすつた。汁が散つて、プンと青臭い匂ひが漂つた。口に殘つた煙草の匂ひを消すためだつた。――

今度は、私が代つて石油の鑵を背負つた。

夜――

私は、鑵詰のペーパーを貼つてゐた。

裏町のいかけ屋の伸三が、店先に現れた。突然食指を、袋を貼つてゐた政吉に向けた。

「これは？」

むかし、政吉はたゞ、親指を示されただけでは、支配人か、それとも、大主人か分らなかつたのだらう、「大旦那？」ときゝ返へした。

「さうだ！」

「奥だ、よんで來て上げようか」

「いや、俺が行かう」

仲三は、膝を立てた政吉をとめ、さつさと奥へ姿を消した。

私は、仲三の來た時、すぐに、庭掃の後で松吉の荷物を持つて停車場へいつたことを胸に浮べて、どきりとした。松吉は、下倉に隠しておいた大きな行李のまん中に棒を通して、私の先に立つて、淸水の坂を下つていつた。ジョンがついてきた。すると、彼は小石をつかんで、犬をめがけて投げつけた。

「こいつの顔は、人間に似てけつかる！」

小石は、獲物を外れて、淸水のふねの中に落ちた。水の面で、月がちかちかちかと砕けた。人に逢はないやうに、わざと崖下の小徑を歩いていつた。向ふから、黒い影が近づいてきた。それで、一歩叢の中へ、體を避けた。黒い影は、松吉をみると、

「松どん、何所へ行くだい、今ごろ」と聲をかけた。仲三だつた。

松吉は、にや〱笑つてゐた。停車場につくと、彼は荷物を一時預けにした。——

仲三は、きつとあのことを云ひにきたのだ、——今すぐ、奥から松吉を招びにくる、——私は、惧れで頭がくら〱した。松吉は！

松吉は、さつきビールの配達に出た切りまだ戻つて來ない！私は、柱の大時計をみた。時計は、十時を過ぎてゐる！——

私には、頻りに松吉の歸つてくるのが待れる——しかし、歸つて來たら駄目だ、自分も一緒に奥へ招ばれる、主人達は、きつと追ひ出すだらう！

仲三が、再び店先に現れた。何か重吉と話してぢろりと、私の方をみて歸つていつた。——

「あいつ、大旦那に何んと云つたらう。」

時計が十一時をうつても、松吉は歸らなかつた。持物が調べられた。勿論、無い——、本箱の中には、ぎつしり、紙袋の斷片が詰つてゐた。店の者は昂奮した。——店をしまつて、床に就いてからでも、容易に、昂奮が——多分に羨望の交つた——靜らないといふやうに、ひそ〳〵と話聲が聞えた。昂奮は、だん〳〵高まつて、はては、闇の中で枕を投げつけたり、つかみ合つたりする音がきこえ出した。

私は、夜が明けたら、自分は奥へよばれて、家へ歸されるに違ひない、——と思つた。義兄はどんなに憤るだらう、その位なら、何故一思ひに松吉と一緒に東京へ行かなかつたらうと悔ゐられた。

私は、枕元に六角をつけて、光の洩れないやうに着物をかけ、又母に宛てゝ手紙を書き出した。いつものやうに、冒頭に母上さまと書き、わざと理由は書かず、——都合にて二三日中に家に歸ります、枕にひゞく河の音とも、ぢきにお別れですなど、感傷的な文句をやたらに書きつらね、封筒を枕の下に押し込んだ。

手紙を書くと同時に、私の心は、完全に郷里へ引きつけられた。母と二人で暮した時の幸福なことのみ胸に浮んできた。義兄も、兄もなにもなかつた。——私は、天井の闇に、げつそりと、こけた口でうまさうに煙草を吸ふ母の顏を描いてゐた。——さうだ、誰もみてゐない時に、母の好きな刻煙草だけは、荷物の中に隱していつてやらう、——と考へた。それも、なでしこや、はぎでなく、支配人の吸ふやうな白梅にしてやらう——

翌朝、倉庫の軒下に、松吉の持つて出た配達箱が投げ出されてゐた。——

私は、一日中、支配人の黒い眼に脅やかされた。大主人を初め、奥の人も、氣のせゐか、自分の方ばかりぢろ〳〵見てゐるやうな氣がされた。——

私は、店先に坐つて、明日の朝になつたら、逃げ出さうかしら——もう、手紙が母の許へつく頃だなど考へてゐる。——

上店の砂糖場から、蜜蜂のうなり聲が、かすかに流れてくる、微風が、地面に白い砂ほこりを上げてゐる。——

「臼田のヨへ、石油が二十、岩村田の仝へメリケン粉が十袋、よしきた」

兼吉は、道に立つて、佐久通ひの仙太から受取つた注文書を讀み上げ、適齡前後の青年らしい身輕な動作で、店にとび返つて、倉庫へ渡す傳票を書き出した。——仙太の馬は、道の上に長い小便をした。

仙太は、やがて傳票を腹がけのどんぶりに押し込み、手綱を笞にして、馬の尻にくれてから、ゆつくりと停車場の方へ曲つていつた。道の上で、白い小便の泡が、ぶつ〳〵と、音を立てゝ消える。——

私は、向ふ店で、小賣店行の雜貨の山に立つて、番頭と引合せをしてゐる留三の下膨のひろい顔をみて、彼にだけは、店を出ることを話さうかと思ふ、——ちらりと、あいつは、おべつかつかひだぜと云つた松吉の言葉が、頭を掠める——。

次の日の晝頃、私は吉本の叔父の來てゐる停車場のつる屋へいつた。吉本は、母方の姓で、叔父は初段の碁を打ち、長野で碁會所を開いてゐる——。

私は、電話のかゝつて來た時、頭ががん〳〵鳴つて、胸は破れさうだつた。——叔父は、何んしに來たのだらう、母が病氣なのではないか、それで、自分をつれに來たのだ——きつと、さうだ。——私は、二階の荷物の所へいつて、砂糖でべとべとする前垂れだけ、別のにかへ、店を出た。近道なので、鹿島神社の境内を突切つた。拜殿に、淺間の歸りらしい三人

の學生が、リュックサックを下ろして、足を投げ出してゐた。豐吉が、女の子を草の上に伺はせて、デヤボロをしてゐた。つなの兩端を持ち、まん中の皷を小さくしたやうな玩具に、十分よりをくれて、青空へ向けて、投り上げてゐる、——玩具は、空中でくる〳〵廻轉しながら落下してくる、——それを巧みに、つなで受けて、再び投り上げる。——

「信どん、何所へ行く？」

豐吉は、私を認めて、遠くから聲をかけた。

私は、心が急ぐので、眼で笑つて、鳥居の方へ驅け出した。つる屋へは、時々配達にくるので、番頭も女中も顏を知つてゐた。店先で車夫と、將棋をさしてゐた番頭は、私をみると、女中に

「八番さんへ御案内だよ」と、いつもとは別な人のやうに、やさしく聲をかけた。女中も、愛想もよかつた。先に立つて、二階に上り、はづれの部屋の障子をあけて、滑かな東京辯でさゝやいた。

「お客さんは今、お風呂ですからネ」

私は部屋に入り、隅のみだれ箱の中に解き捨てゝある帶をみて、すぐに母だ、母が來たのだ——と思つた。手提袋も母のだつた。私は眼の底に淚がじく〳〵と溜つて來た。母に逢へる、逢つたら、何んと云はう、母は手紙をみて迎へに來たのだらうか、こゝからすぐに、連れ戻るつもりなのだ、——それで、わざと吉本なんて僞名をつかつたのだ——。

母はなか〳〵湯から上つて來ない、——私は焦れて、廊下へ出た。よく晴れた空を限つてゐる鹿島神社の森が、店から見えるのとは、丁度反對の方角にこんもりと立つてゐた——、裏の馬小屋で、まだ馬車の前に引き出される前の二頭の馬が、まぐさをくつてゐる。そこからとび立つ蠅の一隊が、夏の近いことを思はせる大氣を切つて、きり〳〵舞ひをつゞけてゐる。——

私は、再び部屋に入り障子を立てた。母は、何うして金をつくつて來たらう、——義兄から借りて來たのだらうか——

（母は、村にある家から上るごく小額の屋賃を義兄から貰ひ、それに姉が製糸場から取つてくる給金を足して生活してゐた）私は、何んとなく、氣になつて母の手提げをひろげ、蟇口を探し出した。蟇口の中に五圓紙幣が一枚と、銀貨が入つてゐた。私はすつかり安心して、涙が零れさうだつた。——

足音が近づいて來た。障子をあけて母が

「早かつたネ」と微笑つた。

「ウム」

私はわざと平氣を裝つて、出窓に腰かけて、足をぶら／＼させてゐた。

「おらア、叔父さんかと思つた」

「母さんだと云つたら、お店へ顏を出さずには、すむまい——」

母は帶を結んでしまふと、茶餉台の前にきて茶を入れ、茶碗を客にするやうに、茶たくにのせて、私の方へさし出した。

私には、母がキチンと髮を上げ、よそいきを着てゐるせゐか、家にゐた時より、三つ位若く見えた。

「信が立つてから、村田じや大騷ぎだつた。社の金を一萬圓も足らなくしてな、警察じや家捜しにはくるさ——、社長が仲へ入つて表沙汰にならなかつたが——」

母は、私の手紙のことにはふれず、話題に村田のことを持ち出した。

私は、それほどの金を、義兄は何んに使つたのだらうと考へた。いつも、母がその自分の金を取りに行くたび、彼は三十分位、默々と母の前で煙草をふかした揚句、漸う心を決めたやうに、簞笥の方へ立ち上るのだつた。

「信が、店へ行かないつて、當り散らしたのも、その方のことがあつたからさ、おれはちやんと睨んでゐる。」

母は、細い煙管をとつて、吸ひつけた。

まもなく、母が云ひつけておいたものとみえ、女中が二人分の酱飯の膳を運んで來た。

「此間から、誰か度々石灰を流したんで、お魚が浮いてしまひましたの、やつとこれだけ」

女中は、云ひわけするやうに云つて、鹽燒にした鮎の皿を、台の上においた。

「あとは、こちらでします」

母は、女中を下げ、私の茶碗に飯をつけながら、

「信は、ご飯はまだだらう」

「あゝ」

「わざとこれを賴んだよ、こゝの鮎は名物だから、――」

私は、母の心づかひに涙ぐみ、箸をとつた。妙に泣けて來た。族の宿屋で、母と向ひ合つてゐる――さういふ感じがぐんぐん胸にきた。――母は、早く手紙のことを、切り出してくれゝばいい、――手紙はまだ屆かなかつたのだらうか――、

顏を上げて、母をみた。

「信、おめいは、店のお金を失くしたんぢやなかつたかい」

母は、だしぬけにきいた。

「え」

「手紙をみて、ひよつとそんな氣がした」

私は首を振つた。そして、分つた、それで母が出て來たんだ――と思つた。

「村田じや、母さんのきたことを知つてゐる？」

「知るものかな、――そんなこと知つたら、またひともめだ、てるには、長野へいつてくるつて云つて出てきたい――」

母は、ちりめん皺のできた鮎の小骨を、きように箸の先で放し、飯を喰ひ出した。

私は、店を出るつもりだ、そして長屋へ歸つて、何んでもして働く――さう云はうと思ふのだが、だんだん云ひそびれて口が綻びぬのだつた。

「それでも、村田じや、信がよう辛棒するつて悦んでな、この間は、わざ〳〵夕飯におれと、とみ（姉）をよんだつけ」

母は、私が二杯で箸を置かうとするのを、「親のとこへきて遠慮することがあるかい――」と云つて、無理に三杯目をつけた。私は、胸が喘ぐやうで、腹が一杯なのだ――。

店の話が出、時間が經ち、母がきいた。

「信――あの手紙は、何うしたのい」

私は、今正直に云つたら、母は「それこそ、母さんに首くゝらせるやうなもんだぞ――われ――」と云つて、いきなり、泣き出しさうな氣がして、「あれ、もう、すんだ」と云つた。

「それで、おれも吻っとしたわな、過失（あやまち）したら、旦那さまにお詫びする、――それが辛棒だでな、――どんなことがあつても、われ、兄さんの學校の終へるまで、店にゐろ、いいか、母さんの賴みだ」

母はとう〳〵、袖口を眼に當てゝ、鼻をすゝり出した。

私は、義理のある六人の子供と、自分達姉弟の間に挾つて生きてきた、母の忍苦の生涯をそこにあり〳〵とみたと思つた。今、店を出ることは、母を苦しめるだけだ、母を安心させるためには、やつぱり、店に止らなくてはならない――

私は、ぎり〳〵と、辭の唇を噛み出した。母は！　母は煙草を吸つてゐる。牛舍の隣りでのやうに、上唇をひきつらせて――あの煙草入の中のははぎだ、――母だと知つたら、昨夜、こつそり、行李の底へ忍ばせておいた白梅を持つてくれば

よかつた。――

「母さんは、泊つて行く――」

私は、氣を換へるやうに云つた。

「さうも、して居られない、――四時のにする」

母は答へた。そして、時間の經つのを、店に氣兼する容子で「もう、歸れ遲くなるとわるい」と云つた。

私は、尚三十分ほど居り「ひまをみて、もう一度くる」と云つて起ち上つた。

「われが貰つた餞別やるぞ――」

母は、笑ひながら蟇口の中から、二圓出してくれた。私は、店にゐれば、金は要らないと云つて、ことはつたが、母は「お腹の空いたときに何か買へ」と云つて無理に掴ませた。

母は、私について、下駄を穿く所まで送つて出た。

私は、表に出るとすつかり、世界が明るくなつたやうな氣がした。店に歸つたら、生れ變つたやうに働かう、若し、松吉のことで叱られたら、正直に云つてあやまらう――など、子供らしい考へで、胸をはづまながら歩いた。

店の前で、頭に濡れ手拭をのせて、淸水から歸つてくる大主人に逢つた。私はお辭儀をした。

「つる屋のお客さんは、どなただ」

大主人は、眼のつつこぼんだ顏を向けて、やさしく訊ねた。

「叔父さんです」

私は赧くなつて答へた。

「ウム」

大主人は、中店で砂糖の俵をボンドにのせて、目方を計つてゐる作藏に、何か用を考へたらしく、つか〳〵と、その方へ近づいていつた。

四時少し前、私は車をひいて、倉庫へ砂糖を取りに行き、序にも一度、つる屋の方を廻つた。ぢか足袋を穿いてゐたので、番頭に母を階下へよんで貰つた。

發つばかりに仕度のできた母は、階段の中程で私の變つた姿に眼を瞠つて

「まア、そんな大きな俵が引けるのかい」と呆れた。

「平氣だ」

私はすまして答へた。番頭が傍で

「どちらのお店の方も、なか〳〵重いものをお引きです」とお追從を云つた。

母は、下駄を穿いて、表に出てきた。そして

「今、城跡の方へ行つて來たが、小諸は坂が多いね――」と、しみじみ云つた。

「時間は」

「まだ、二十分ある、遠くから信の店をみておかうか」

母は、相談するやうな眼をした。

私は、車を引く所を母に見られるのはいやだと思つて、少し憤つたやうに

「母さんは、鹿島さまの庭を通つていつたらいい」と云つた。

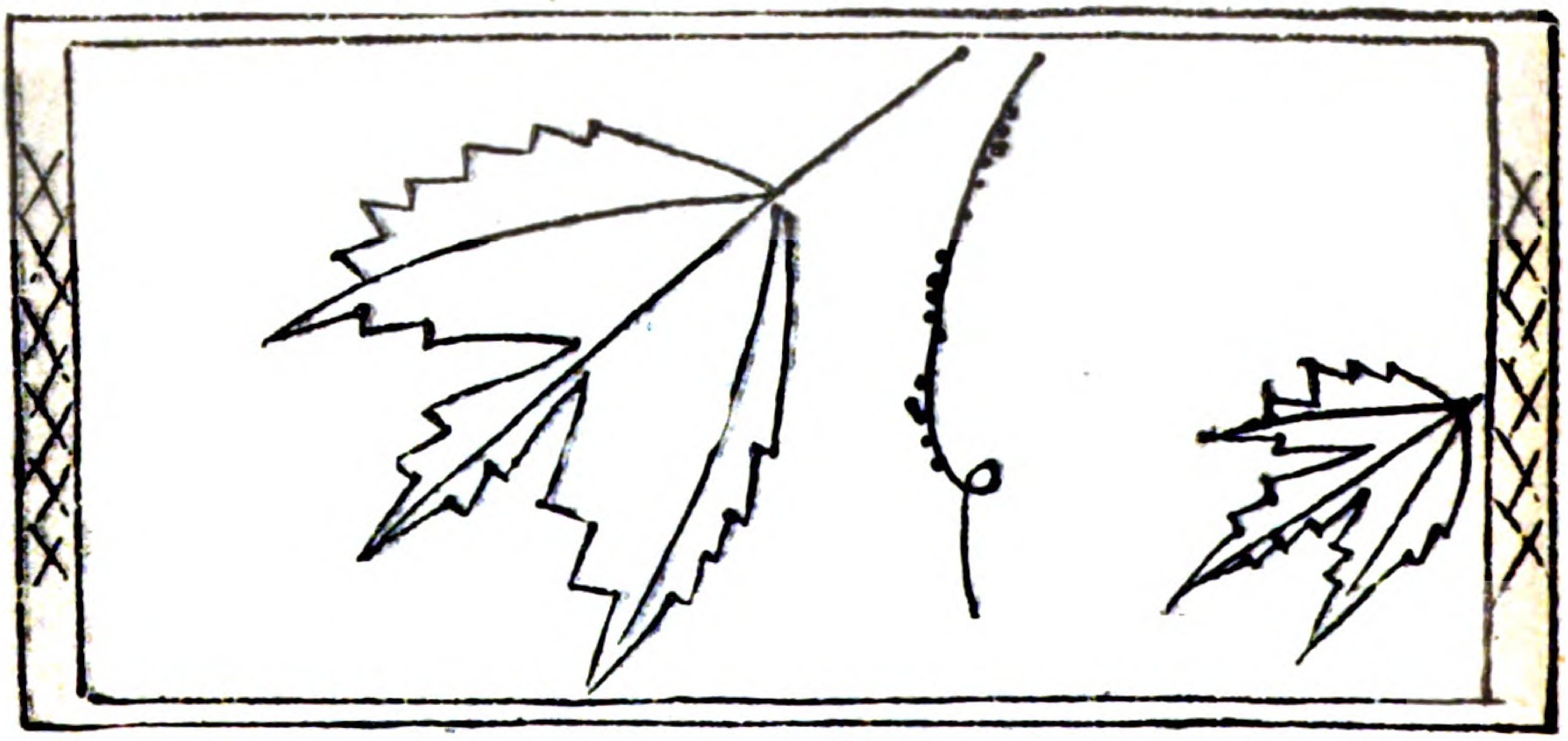
「そんなにしなくつたつて、車から少し離れていつたらよからうず」

母は、私が母と一緒に歩いてゐる所を店の者に見られるのを懼れてゐると思つたのだらう。――

「ウ・ユ」

私は、何にかまうものか、ぐん〱引張つてやれ、母を驚かしてやれ――と思つて、勢よく、梶棒を上げて、車を引き出した。停車場の通りを過ぎ、大手の坂にかゝつた。母は五六間の間隔を保つて、車の後から跟ひてきた。私は時々、後を振り返つた。――僅か二俵の砂糖で、目方にしたら三十貫なのに、母がみてゐる――さう思ふと、へんに心の統一がとれず、足がたぢ〱として、車が後へ戻つた。そのたび、遠くではら〱してゐる母の顔がまざ〱とみえ、餘計力が入らなかつた。肌に汗がだく〱して眼がくらみさうだつた。店の横手の坂にかゝつたとき、踏みしめてゐた足が、たわいなく、五歩ばかり引戻された。すると、その拍子に、何うしたのか、急に車が輕くなつて、もとの所まで進んだ。私はびつくりして、振り返つてみた。母が、氣極り惡さうに、顔をまつ赤にして、體をこゞめて、車の尻につかまつてゐた。――油氣のない髪の毛が、ばら〱に風に吹かれてゐるのが、ひどく淋しい感じで眼に映つた。私は胸が、へんに切なく迫つてきて、後を見ずにうんうん車を引張つた。

坂を上り、やつと店の見える所までくると、母は立ち止つて、體を捻ぢつた私に、默つて手で行け行けと云ふ格好をした。私はペコンと頭を下げて、そのまゝくるりと、向き直つた。今、別れたら、永久に母との別れになる――きつと、もう逢へない――私はそんな淋しい豫感に、ひし〱と心を打たれながら、再び車を引き出した。いきなり、唇を嚙んで、泣き出すまいとした。このだしぬけな努力のために、顔中の肉がひきつり、涙が梶棒の上に、ぽた〱と落ちた。――



（續）唐人お吉

——種播く人と彼女——

十一谷義三郎

「予は、日本に在住すべく、文明國から派遣された最初の代表者だ。予は、日本の新しい秩序の初めだ。余は、日本のエポック・メイカーだ。余は、お丶日本よ！余は……」と、老コン四郎氏は、あの鼠の荒れる禪寺の、燈心草の疊の上を、皮沓のま丶で、行つたり來たりしながら、ゲンコの甲を額に當て丶獨語する。

どつちの手の指も、從つて、浮いた指輪（ゆびぬき）の味を知らずに、硬く鐵んでる彼だ。

彼は、七日め毎に、きつと、安息日を守つて、どんなに海港の奉行が掛け合つても、その日には、まるで死灰のやうにコン四郎館に籠つて、てんで振り向きもしない。さうして、變に若い次中音（テノル）で、切支丹のお禱りをやるのだが、彼のこの「余は、余は、」と、氣負つた獨白は、まあそのお禱りを丸めて、ぼんぼんにして、始終、口に啣えてるやうなものだつた。

身長は、五呎五吋弱。體重は、百五十ポンド餘。髪も口髭も、眞綿みたいに白んでゐるが、腰は輕敏に伸びて、どんな仕草にも、ぢゞむさいところが無い。彼は、肺活量の大きい營利堅人だ。彼の赤血球は、にう・よるくの煤煙を、活潑に消化して、出來上つたものだ。

日本へ來る前の六年間を、彼は、WESTWARDHO! と花旗を翳した商船や軍艦の上で暮した。彼は、えげれすの都の霧を吸つた。彼は、天竺の罌粟畑の中を歩いた。彼は、また、マニラの竹小屋の間にも住んだ。絹と茶と陶器を積んで、唐のかんとんから、さんふらんせすこへ戻つたこともある。日本渡來の直前には、しやむろの、白絹の日傘の下で、星鷲の封印のある國書を捧げてゐた彼だ。

彼のテノオルには、新興國民のカンが震へてゐる。彼の擧措動作には、甦へつた民族の生氣が、火むらを立てゝゐる。海豹と海狸の皮を、年に三十二萬枚、帆船に積んで、東洋の市場へ押し出した民族――ハワイの白檀を、金袋へ食つてしまつた貪食民族――太平洋の鯨を、片ッ端から還銀して、一年に、千三百萬ドルラルを積みあげた若い勤勞國民――その若さ故に、隨分「無鐵砲で、侵略的で、遠慮知らず」のやんきいず……そんな祖國の、觸角の一本になつて、白頭を高らかに擧げて、いまや、日本のこの、最初の開港場へ來てゐる彼だ

いや、それに彼には、また、あの、二世紀前の、處女地開拓者としての清教徒の血が、沸々とたぎつてをつた。

折り〱、彼は、火の消えた葉卷を、口の隅で、もぐもぐと廻しながら、彼の「使命」を考へる。

――あゝ、予は、如何にして、この日本を、ドルラル化すべきか!?

――あゝ、予は如何にして、この日本を、十字架へ解放すべきか!?

まつたく性質の違つたこんな二つの命題を、彼は、いかにも營利堅式に、何の矛盾もなく、一緒こたに、威勢よく考へ込むのだ。

だが、どうにも、まだるつこい「日本一」が、彼の前にあつた。それは、まるで、象形文字みたいに幼稚で、迷宮のやうな執拗い困惑を感じさせる。

ケンプフエルや、モンタヌスや、ヘロリその他の先輩から彼が得た智識に依ると、キリストを文字通りに踏み躙つたり、罪人を釜茹でにしたり、ハラキリ自殺の習慣を持つたりする奇怪な未開人種で、それは、むろん、豫期して來たが、さて實地に當つてみると、もつと不可解で、もつと癇に觸る國民だつた。

彼等は、刺のやうに昂然と迫つて來る。かと思ふと、僅か四呎に三呎半ぐらゐな Kago ん中に、足も脊骨も無い軟體動物みたいに、樂々と安座して往來する。

みんなモンゴル式な顔をしてゐて、その弱點を緩和するつもりらしく、いつぱし入念な工夫が、彼等の頭髪に凝らされてゐるのだが、あの丁髷は、あの大髻は、何と突飛で有閑な hair-dressing ではないか！

彼等は、しばしば、兩手で、鄭重に白紙を擴げて、顔の下半部を蔽ひ、鼻汁の排泄をやる國民だ。

彼等の刀劍には、馬來土人のそれと、そつくりの亂れ燒が見られる。しかも、彼等は、羅典民族を壓倒する程の禮儀好きだ。

實際、彼等の態度は、あんまり拵らへ過ぎて、何處に心臓があるのか、見當がつかない。あんまり慇懃で、實に皮肉だ。たとへば、時々彼の事務室へ來る奉行所の上役連だが、みんな酒好きで、シエリー酒を除けたほかは、三鞭でも、ヰスキーでも、火酒でも、どれも生のまゝで盛んにコップを干す。さうして、當然彼等のオリーヴ色の皮膚に、アルコホルの反應がハツキリと現れるのだが、しかも、彼等は、決して、その緻密な禮儀を崩さない。それはもう、人情が、心臓を脱け出て、彼等の折り目正しいスカートの間へ住み替へしてるやうな彼等だ。

それから、彼等は、事を定める前に、恐ろしく長い思案を持つ。いや、彼が、あの、馬を買つた一件が、いつさいを

語つてゐる。

ある日、彼は、御用所で、狐と綽名のつい奉行の DEWA-NO-KAMI-SAMA に逢つた（中村出羽守――安政三年下田奉行、無小狐の如し、剛硬犯すべからず、と當時の人物評に見える――作者附記）

彼は綿の厚い日本絹のクッションを置いた支那椅子に掛けてゐた。隣りのヒユウ助君も、机の向うの、ふおつくす氏及びその幕下の「第一市長」も、天鵞絨張りの腰掛けに坐つてゐた。少し離れた日本机に、書き役二人――ところで、日本の阿蘭陀通詞君は、いつものやうに、机の側の燈心草の敷物の上に、ぢかに、蟇みたいにつく這つて、競々と冷汗を額に浮べてをつた。

この通詞君は、他の總ての通詞君と同様に、前世紀の死語か、でなければ、ひどくブッキッシュな、また、とても下等な單語を、恐る〳〵、兎の糞みたいに、吐き出すのが彼の役目だ。（阿蘭陀の甲比丹の齎つた國書に、「世界は愈、自由平和にて」とあつたそのふれいへいどが判らないで、「大千世界彌益々我儘に成行候形勢に有之」と譯して、後代へ話柄を殘したそんな程度の通詞の一人だ――作者）

手間のかゝる用談が濟んで、日本の小姓が、足を摺つて茶を運んで來、それを啜りながら、ふと漫談式に、彼が、馬のことを云ひだした。

「馬を飼ひたいと思ふのですが。戸外運動のために。」

さう云つて、何氣なく、通詞君へ視線を移すと、彼は、相變らず、一個の奴隷が、國家の重大事件を取り次ぐと云つた風に、机の根もとに兩手をついて、見窶らしく、頬を顫はせてをつた。

「通詞君にも、腰掛けを與へて下さい。」と突然、彼は、おのテノオルで叫んだ。

ふおつくす氏は、ちよいと肩を聳かして、鋼鐵のやうに笑つて答へた。

「彼奴は、微碌者でござる。」

通詞君が、とても哀れに狼狽へて、やつとヒュウ助君に、それを傳へ終ると、そのまゝ、床に、鼻を擦りつけた。その様子が、一層彼を刺激し、そこで、彼はびいんと響く調子で、云つたのだつた。

「こんな差別待遇は、文明國には見られん。是非、彼にも、われわれ同様に、腰掛けを與へて下さい。」

だが、ふおつくす氏は、やつぱり、ちよいと眉を動かしたきりで、數字を讀むやうに繰り返した。

「彼は輕輩でござる。彼は身分の低き者でござる。此の席に控えるさえ、彼の名譽でござる。」

それを、いちいち、通詞君が、喘ぎながら、通詞るのだ。

彼は、抜けあがつた額の、白髪の根まで紅くして叫んだ。

「いやしくも、予は、Government of the people, by the peole, and for the people から、(と、リンカーンの先蹤らしく)選まれて、貴國へ參つた者だ。予は、花旗國の代表者として、こんな不愉快な形式を伴ふ外交談判を潔しとしない。もしどうでも、通詞君をあんな風に、犬扱ひされるなら、これで、御免を蒙るよりほかありません。」

通詞君が、極度に困惑して、手の指まで、蒼黄いくなつたのは云ふまでもないが、這のふおつくす氏も、第一市長も、この彼の亢奮を不思議さうに眺めながら、例に依つて、兎に角、黒船のまぼろしに慄え、結局、腰掛けが一つ運び出されて、問題の彼が汗を拭き〳〵水平線へ浮びあがつた。

そこで、ふおつくす氏が、もうまたあの、特徴のある微笑を、浅黒い顔に堪へて、云つた。

「馬でしたね?」

彼も、からつとして答へるのだつた。

「さうです。どうも、戸外運動をしないと、あんな寺ん中にばかりゐると、目方が毎日減つていくやうです。」

「いや、承知しました。何んとか、取り計らひませう。」

「どうぞ、よろしく。」

で、その日は別れた。だが、例によつて、日本官吏の思案は、實に長く、おほかた、また、江戸の「Tycoon（大君――將軍）へ、あの「予は、夷敵が、予の漂流民を送つて、予の領土に來たるよりも、むしろ、予の臣民の捨てられんことを望む？」と付つて彼の先輩に公言したあんな君主へ、天城越しに、馬買ひの指令を仰いでゐるのだらうと、ヒユウ助君と話してると、しばあらく經つて、その馬が、三匹、通詞君に連れられて、コン四郎館へ屆いた。

一匹は仔馬、一匹は老馬。もう一匹は、營養不良の病ひ馬。

それらが、みんな、蹄鐵でなしに、草鞋を穿いて、溫和しやかに、境内の日溜りに並んだ。

さうして、通詞君が、ふおつくす氏の代理として、脊中を丸くして、實に慇懃を極めた挨拶を述べ、それに附け加へて、親愛なるふおつくす氏の、行き屆いた好意を說明して聽かせた。

「貴官は、老體であらせられます。もし、じやく〱馬に乘られて、間違ひでもあつては、貴官を派遣せられた花旗國に對して、まことに申し譯のない次第です。そこで、出羽守サメは、御覽の通りの馬を撰まれるために、想像以上の苦心をなさいました。どうぞ、出羽守サメの御高配を、お汲みとり下さいますやうに……」

むろん彼は、深甚な感謝と共に、三匹の中から仔馬を撰んで、享け收めた。そして、暫く日を隔いて、改めて、悍馬一匹と、馬具ひと揃えの購入方を、ふおつくす氏に依賴した。

そこでまた、隨分日數が經つて、こんどは、鼻腔の大きい黑鹿毛が、齒をむき出して、彼の馬小屋へ來た。

「おゝ自由よ。」と、彼は、その牝馬を、即興的にさう呼びかけ、それから、その西洋鞍式にすんぐりと据わつた首を撫でながら、滿足氣に呟いたのだつた。

「これなら、二十哩は樂だ。」（當時、外人の遊歩區域は、海港を中心にして、十四哩以内に規定されてをつた）

兎に角、馬の一件は、かうして終つたが、たゞ最後に、御用所から、勘定書が廻つて來、そこに現れた數字が、彼を眩惑させた。

肝心の馬が　十九兩で、一ケ月の飼養料が一兩三分。さうして、附屬の馬具は、實に、三十兩だつたのだ！

彼の博大な常識と、めりけん式にすばしこい算掛術をもつてしても、日本の物價の標準は、まつたく見當がつかない。

彼は、彼の菜園と花壇を作るために、百五十坪餘りの土地を借りた。その借地料が、一年にたつた二ドルラル（一兩二分）だ。彼は、日本人を五人使つてゐる。給仕が二人に、園丁、馬丁、雜役夫が各一人づつで、住居と食事は、それぞれ自分持ちだが、それで、彼等の一年の給料合計が、百三十二ドルラルに過ぎない。別に彼は、支那人のコツクや洗濯夫などを四人置いてゐるが、この方は、寢床と食事をこちらで持つてやつた上に、日本人のそれの約六倍を支拂つてゐるのだ。

彼が、このコン四郎館に這入つてから、半年目に、食料品や九州炭や、その他の買ひ物の請求書が、一綴ぢになつて御用所から來た。そのシメ額（だか）を見ると、「二百八萬七千九文」と、驚くべき數字で、米貨にすると、僅に五百ドルラルに足りなかつた。

つまり、此處では、一ケ月百七十ドルラル弱で、文明國最初の代表者――花旗國のコンシユル・ゼネラールの生活が、堂堂とたつていくわけだつた。

從つて、もし、こんな標準から、この「太陽の根」の人間と、土地とを、ドルラルに換算するなら、それは、あのナポレオンからとつた質流れのフロリダの如く、あゝ何と安値な買ひ物ではないか！

ときどき、彼は、自分の書いた大判洋紙（フールスカップ）のレポオトを眺めながら、まるでもう「日本」をポケツトへ抛り込んだやうな

氣になつて、そんな風に考へる。

だが、この樂天的な胸算用は、彼の活潑な頭が、ちよいと浮氣をしたゞけのことで、その證據に、彼のレオポオトそれ自身は、隨分鬱陶しい日本でいつぱいだつたのだ。

第一、この人民は、人口にも産業にも、「統計」を持つてゐない。それから、もちろん新聞紙も無いし、輿論も無い。日本官吏のある者は、十字架を否定するやうに、輿論を否定した。またある者は、「山羊がまつたく存在せぬのと同様に、そんなものは、日本には見られない。」と説明した。

農民は、ひどく幼稚な耕作法を、默々と固執してる宿命論者だ。商人も、工業家も、いつさい「報告書」を作製しない。それに、サムライと云ふ不可解極まる階級が、その生産層の重石（おもし）になつて、社會の流通を窒息させてしまつてゐる……

何處へ、いつたい、氣孔を穿（あ）けたら好いのか？　何處を、いつたい、彼の、換銀玉（マイダス）のこぶしで、叩いたら好いのか？

先づ、祝砲の説明から、先づ、國際禮儀のＡＢＣから、いちいち仕込んでかゝらねばならぬ厄介な、太陽の根！

彼は、丸い腮をあげて、古びた草屋根の冠さつたコン四郎館の、格子天井を睨まえる。銀紋の散つた襖紙が、急ごしらへの洋室氣取りに、その面を蔽ふてゐる。腮に、白髪が芽を出して、ずん／＼伸びていくやうな氣がする――トプシ・ターヴイ日本だ。

あの海港町の、邊鄙な賑かさからさえも、半道ばかり、隔離病舍みたいにはなれたコン四郎館――嘘つきの（談判を長びかすために）日本官吏の言葉によると、江戸へは、山越しに五日路ださうだし、ほんこんへは九日。さうしてさんふらんしすこは、にう・よおくは、日本の漂流民が、うやうやしく、お上へ申したてたごとく、「足のうら」のうらの國の、飾り釦で――とにかく、文明も、人種も、社會も、何もかも、いつさいがとほどほしい漁村の丘の背の、花旗の下に、この老い

た唐人は、朝から晩まで、につぽんマニヤの熱氣をたてながら暮してをつた。

彼は、松の一寸板で、寢棺のやうな浴槽を作らせた。彼の部屋の紙の戸の外の、細長いヴエランダをちよいとゆくと、朽葉のつもつた、蔬菜置き場みたいな、こほろぎの聲のする木小屋が出張つてをる。それが彼の浴室で、毎朝、彼は、太陽と一緒に支那絹の寢卷きのまゝ、そこへ飛び込んで、その湯槽の冷水をかぶる。

頭髮が、額に銀のより糸のやうに靡き、唇が、白髮ん中に、處女のやうな明紅色を點じ、さうして乾いた手拭でゴシゴシと擦る膚（はだ）には、あの若いアメリカの地圖が、薄桃いろに生々と顯れるのだ。

彼は、老いてはならぬ。彼は、健康であらねばならぬ。彼は、五十三だ。

彼の雞小屋には、彩紋のまばゆい首飾りを持つたキジバトが、陽氣な太陽に上氣して、羽搏きしながら群れてゐる。彼の牝雞は、小さな雞冠と腮の垂衿（たれえり）を眞紅にして、生みの悅びを叫んでゐる。豚小屋では、舌と齒に好い小豚が、庖丁を待つて蠢めいてゐるし、厩のあの「自由」は、黑い鬣を振つて、床の敷藁をしきりに叩く。

花壇に、しやくなげ、しやくやく、ぼたん――それに、面積以上に豐かな收穫（とりいれ）を持つ蔬菜畑。

彼は、金頭（きんがしら）の杖を振つて、絹の高帽子を冠つて、天鵞絨襟のついた羅紗の燕羽織（フロツク・コオト）を著て、ときどき、これ等の彼の所有を見て歩く。まるで、貴族の都市享樂者が、小五月蠅い田畑帖を調べに農園へ歸つたと云つた風な、そんな雖かしい顏を扮つて。

彼は、未開國に、たつた一人ゐるコンシユル・ゼネラトルだ。一歩、彼の部屋の、唐更紗の帷幕の外へ出たら、たとへ、コン四郎館の園ひうちでも、それだけの身裝りと、それだけの威儀を、始終、備へてゐねばならぬ。

時によつて、彼は、そのまゝ、花旗の下の小さい黑い冠木門を潜つて、小刻みに積みあげた石段をくだる。それから二三町、松や檜や藥屋の間を、濱邊へ散歩に下りていくのだが、その藥屋の庇の下に、また、その樹立ちの隙き間に、そん

な場合には、きつとあの「踏ん込み」支度をした頰のこけた Yaconins（やくにん）の姿が、獵犬のやうに現れて、こちらを監視する。そして、ある者は、妙な笑ひを浮かべて、兩手の掌を揉み、ある者は、眼をとがらして、霧のやうに消える。彼は、むろん、髭を嚙んで、胸をつきだして、空を眺めて、彼等を默殺してしまふ。

　曾つてあのふおつくす氏は、彼の旅愁を慰めるために、日本の官吏を、コン四郎館の一部に同居させやうと、例のごとく、深切な提議をした。それを、一も二もなく斷つたら、すぐに、笠を冠つた五十人許りのサムライが、コン四郎館の門前の、そちこちの藥小屋へ詰めかけた。そこで早速嚴重な抗議を申し込むと

「貴官を護衛するためで、別に他意はないのです。」とふおつくす氏が云つた。

「何のための護衛ですか？」と彼が反問した。

「浪人と云ふ不良青年に對してゞす。」

「おゝ、あなたの Tycoon は、そんな有力な不良青年を持つのですか？」

　ふおつくす氏が、薄手な腮を据ゑて、脣を震はせながら、叫んだ。

「斷じて、そんなことは、ありません。たゞ貴官に、間違へがあつてはと、それを懼れたゞけなのです。」

「いや、ありがたう。然し、御心配は御無用です。いやしくも文明國の代表者たる予の五體を護る者は、別にあります。あの護衛隊は、即刻、徹退させていたゞきませう。」

「しかし、萬一の場合、それでは、こちらの責任が濟まぬ。」

「責任？、予は、地球上で、もつともそれを重んじる國家の代表者だ。予はむしろ、貴國の政府ならびに貴官らが、予の一身に向つて示して下さるだけの責任感を、ヘロリ條約に對して示されんことを切望する。」

「判りました。早速江戸へ通じて、なるべく御希望通りに取り計らひませう。」

「江戸へ？　江戸へ！　それなら、予が廣東へ出かけて、東洋艦隊に乘つて、ぢかに江戸灣へ引き返す方が、手ツ取り早いではありませんか。」

で、型の通り、彼は、彼の不快なサムライ連を追つ拂ふことが出來た。彼は考へるのだつた。

――予は、まだ、五十人のスパイを、公然と、領事館の前に配置するこんな幼稚な政府を知らない！…………

彼の散歩は、いつも颯爽としてゐる。彼は、孤獨や憂鬱やそのほか、漫ろな氣持ちに甘える散歩を持たない。彼には、默殺したり、觀察したり、自分を印象づけたりする必要が、餘りにも多くあつたから。

彼は、また、羅紗の丸帽子をいたゞき、おなじ丸羽織を着、長袴を穿いて、あの判青の濃い肌をむき出した馬丁を連れ、町へ遠乘りに出かける。

低い家波の二階の、格子うちが透いて見える高さを、綺らびやかなふくりんの鞍に据わつた彼の上半身が、靜に搖れながら通り過ぎる。黑い丸帽子の下に食みだした白髮、年と共に裂れ目の深まつた二皮眼、明るい大氣に心持ち紅潮した頰、白狐の毛束を弓なりに懸けたやうな口髭――

彼の「自由」が脫糞し、馬丁が何か呟く。

彼の手綱を輕く撮んだきゝ、作り物のやうに向うを見てゐる。

曾つて彼の先輩は、大統領から「伯爵」の肩書を貰つて、支那へ談判にいつた。彼もその「アメリカ伯爵」の如く、端然としてゐるのであつた――

だが、むろん彼は、また、一方で、この未開人種に出來るだけ接近しやうと努力した。彼は、「人民の名に依る政府」の代表者だつたから。彼は、散歩の途上で出逢す農夫や百姓やその他、あの役人と、サムライ以外のみんなに、精一杯、親

しげな片言と微笑を投げた。ところが、彼等は、腰の蝶番ひの實に滑らかに利く良民で、こちらへ眸を向けるよりも、寧ろ彼等の頭越しに垢づいた首筋を現して、敬意を示す方が多かつた。それから、ある者は、何か怯えた氣配を殘して、ふいと彼の前から消えたし、ある者は、露骨な音と一緒に、板戸の中へ隱れた。たゞ、彼に近づいて來るのは、小さな慾を持つ子供だけで、それも、彼の足もとから銅錢を拾ひとると、すばやく何處かへ去つてしまふ。さうして、白々とした路が、いつも卒氣なく彼の前につゞいてをつた。

こんな「公人の散歩」が濟むと、彼は、日によつて、奉行所を訪問したり、でなければ、彼のカーテンの外の事務室、つまり、本堂の正面の、須彌壇も燈明も聯も、和尚と一緒に拋り出してしまつたあとへ、なめし皮色の事務机や卓子、それに、がつちりとした椅子などが、いかにも前世紀のフレガツト軍船の船載品らしく、素朴な光澤を帶んで疊の上に並んでる薄暗い部屋で——そこへ出て、向うのカーテンから出て來たヒユウ助君と二人きりで、お互の碧眼を暖めあひながら、總領事の事務をとる。

ペロリが、日本の戸を開いた、と、定說になつてゐるが、それは、むしろ、武人式に打ち破つたと云つた方がよく、その戸を繕つて、そのバネに、彼一流の文明主義の油をさすのが、老コン四郎氏の仕事であつた。だから、貿易も、居留民も、まだこれからで、本國船の入港は、滿月よりずつと稀だし、むろん、訓令も來ない。請訓のしやうもない。それに、持つて來た國書さえ、日本の執拗い愚さゆえに、まだこのコン四郎館に置いてあるのだ。

彼は鵞ペンを握つて、彼の手控えや、ヒユウ助君の談判速記などをもとにして、レポートを作る。それから、奉行への打合せの手紙を書いたりすると、あとは、コン四郎館の世帶の問題だけで、それは、大抵、ヒユウ助君の掛りだし、そこで、また、彼は、彼のカーテンの中へ引き返して、こんどは、給仕(ボーイ)の竹三少年を呼んで、しばらく、實物敎育式な、日本語の練習をやる。

彼は、これに、うつてつけな國民性と生れつきを持つてゐる。彼は、羞んでる給仕の腕を摑んで、その十二疊敷の部屋ん中を、ぐる〱と廻る。そして、日本市場(バザー)で買ひ物をするように、花瓶や燭臺を指さしたり、また、部屋の隅の戸棚とか、奥の六疊の寢室との仕切りの襖を叩いたりなどして、いちいち、給仕について FA-NALIKE, FU-SHU-MA などと怒鳴つて歩く。部屋が濟むと、そのまゝ給仕を引張つて、明り障子の外の椽側へ出、そこで、手近の柿や石ほとけなどを怒鳴つてしまひ、それから、最後に、片手を擧げて、鼻のさきに盛り上つた高見を指さす。

「はか。」と、教師の竹三給仕(ボーイ)が叫ぶ。

「FA-KA」と、彼は、急に聲を落して、そちらを見凝める。

あのヘロリが殘していつた、十字架を刻んだ、水兵の石碑が、そこに、西日に染まつて、雜草の上に見えてをるのだ。

彼は、默々と、肘掛椅子に戻る。彼は、手を振つて給仕を退(さ)げる。

「FA-KA－FA-KA！」

この犧牲の表徴が、例のにつぽんマニヤを、彼の心頭に燃えあがらせる。その、思念の火照りを眼ぶちに浮かべて、彼は、ぢいつと椅子に沈む——

そのうちに、部屋の紙明りが薄れ、庭に、ヒユウ助君が領事旗をおろす氣配がし、太陽のまつたく落ちた佗しさが迫つて來る。彼は、からだを起して、まほがにの卓子に兩肘をかけて、獨りきりの部屋を見廻して、いちんちじうで初めて、大きな溜息を洩らす。

彼が、公人コン四郎氏から、一個のタウンゼンド・ハリスに還る替りめが來たのだ。

彼は、何よりも、この瞬間を懼れる。この替りめに起きる氣持ちの隙きを輕蔑する。それは、彼の、サタンの棲み家だ。それを退治てしまはねば、彼は、彼の「使命」を果すことが出來ない。

だが、彼の白髪の當然に持つ廻想と、それから、しみじみとした距離の感じが、そんな彼には無頓着に、ずんずん彼の頭を占領する。

彼は、緊く嚙みしめた口を、いつの間にか、子供のやうに開けて、耳を欹てゝゐる。あの岩山に、賑かな星條旗船の入港つた合圖の狼煙が、いまにも聽えるのではあるまいか！匂ひのうつるやうな新聞紙と、舌觸りの好い牛肉と、若々しい掌を持つた「人間」を、みんな山のやうに盛りあげて、揚々と入港する星條旗船！…………

「いかん。これはいかん！」と彼は、恰も、日本官吏に向つて談じつけるやうに、白麻の襯衫が倒三角形に現れた胸を、ぐつと反らし、それから、白髭を震はして怒鳴る。

「亞深！（支那下僕の名）ランプ！亞・深！」

亞深は、然し、事務室とヒユウ助君の部屋を距いて、つまり、この本堂とは別棟の、青筵を敷いた庫裡にゐるのだ。誰も、返事をしない。

彼も、まるで、ひとりでに聲が發したと云つた風に、その「アメリカ伯爵」式に、胸をつき出したまゝで、頭髮から肩へ、障子の薄ら明りを纏うて、それつきり、ぢつと口を緘む。

鍍金の剝げたぼんぼん置時計、秋の草花を抛り込んだ切り子の花瓶、トメ金のついた皮表紙の聖書、紫ガラスの燭、縮模樣のある氈緞、そのほか、ふだん彼に親しんでるいつさいのものが、いまや、突然彼の愛撫の外に立つて、仄暗く、彼の孤獨を眺めてゐる。

いや、たつた一つ、ふとこの瞬間に、彼の眸を捉へて、彼の注意を獨占してしまつたものがあつた。それは、季節外れの灰を浴びて、部屋に附屬した板の間に、とぼんと忘れられた、秋のストーヴ！

彼が、軍船から此の寺へ移つた頃は、毎日、寢室に、雁を描いた紗の日本蚊帳を吊つてゐた。それが要らん風が吹き、

彼は、この板の間の壁の一ケ處に、煙突孔を穿つた石を嵌めさせた。そこから、いま、煙みたいな夕明りが射してゐるのだ。その下の、影の淀みに、煙突のとり付け口や焚き口が凝り〳〵と錆びた鐵のこのストーヴが、朦朧と姿を現して、彼に呼びかけるのだ。

彼は、だんだん、また、背中をこごめ、そつと卓子に兩肘をついて、冷い指さきを縺らせる。

あかあかと焚き火の焔が、その古ストーヴから燃えあがる。つゞいて、薪木のハゼる音が、陽氣に、小刻みに、耳をうつ。と共に、爐邊的な回想の旋律が、一瞬間、鋭い餘韻を殘して、彼の眼の前を流れ去る。ちやうど、人が、臨終のひときに、彼の一生の全體を想ひ出すやうに。ちやうどまた、無數の小さな妖精の列が、てんでに不思議な踊りをおどりながら、ふいと、夢を掠めて通るやうに――――

彼は、何の飾りもない皺のよつた、毛のひしやげた兩手の指を、かつきと組み合せて、力無く、瞼を閉ぢる。

彼は、さんでぃ・ひるや、にう・よおくで、文字通りの肉身團欒（ファイヤ・サイド）を味はつた。然し、それは、常に、兩親や、兄や、兄の一族と共にしたそれで、彼自身のファイヤ・サイドは、曾つて持つたことが無かつた。彼のミスAが、ミシズBになつた爲だと、そんな評判が立つたり、また、彼の理想のあんまりな高さ故に、そちらへの機會を永遠にとり逃したと、さう考へる者もあつた。どちらにせよ、彼が、人生に、一つ大きな忘れ物をしてゐたことは確だ…………

だが、彼は、たちまちに、ぱつと眸を見開いて、その、まぼろしの消えた「秋の古ストーヴ」を睨み据ゑながら呟くのだつた

「これあいかん。こんなこつちやいかん。」

それから、皮沓で、どしんと疊を踏み鳴らして、例の聲をしぼる

「亞深！ランプ！ランプ！亞ア深！」

こんどは、それを取り次ぐヒユウ助君の聲が木魂のやうに、向うの部屋に聴え、やがてランプの頭錘の柄を握つた亜深の、顴骨のトがつた、辮髪を鉢卷にした顔が、カーテンの切れ目に現れる。

「まだ五分ほど早うございますが、點火しませうか？」

「五分？」と、亢奮の餘熱の殘つた聲で叫び、戸棚の上の置き時計を見て

「あゝ……間違ひ。間違ひ。いつもの時間でよろしい。大事な石油だ。」

で、亜深は、その臺ランプを卓上にそつと置いて、いつてしまふ。

彼は、立ちあがつて、も一度反抗的に肩をそびやかして、もう灰色になつた部屋ん中を歩き廻る。

五分はぢきに經つて、この、障子とカーテンに挾まつたお寺の本堂の妙な部屋に、臺ランプと燭がともされる――やがて、あのお吉の姿が現れる。

人生に、重大な忘れ物をして來たこんな老コン四郎氏に、氏らしく――コノ未開人種ノ女ハ、こーかさす人ノヤウナ腦ヲ持ツ――と、そんな「科學的」な發見を、先づ、徹底的にさせた唐人お吉が……………

お吉は、ほとんど一昔前に、あの坂下の草家から、をばさまの青桐の家へ、「天上の亢奮」を味はつた。あれは、善かれ惡かれ、大きな階級的飛躍を意味した。しかし、現在の彼女は、何と云つたら好いか、彼女が、毎月、奉行所の手を經て受けとる金は、幕府の大奥の一流女官のそれに六倍したし、彼女が駕籠で通つた時に、奉行所から差し廻された人數などの格式は、云はゞ男爵級の旗本以上に相當してゐた。さうして、彼女の勤めは、あの海港の六錢二厘五毛級の、屯田女隊に髣髴とした、お抱えの、通ひの、らしやめんだ。

現在から三年後には、江戸に集まつた各國公使達(ミニストル)やその屬官達が、ほとんどみんな、てんでのらしやめん(横濱屯田女郎)を持ち「らしやめん番附」に、「兩國人民ノ間ニ存スル親睦ヲ守」——(老コン四郎氏の言葉)——つた證跡を留めてゐるが、お吉の場合は、まつたく違ふ。

彼女は、たとへば、あのヘロリが、三年前に持つて來て、試驗して見せたテレガラフや小火輪車のやうに、日本に最初の、唯一つの社會的存在で、どの階級にも屬せず、從つて、それだけに寂しい惱みを持つてをつた。

おゝ、コン四郎氏よ、氏は、この點でも、たしかに、「日本の新秩序の始め」だつた！

實際、これまで、いつさいの環境を無雜作に消化(こな)して、それぞれの場合に、眩耀(まば)しいほど花咲いて來たお吉だつたが、コン四郎館とコン四郎氏とは、さう簡單にはいかなかつた。これまでは、をばさまや、町や、時代の手に依つて、水に投げ込まれると、氷になつて、その都度、周圍の禮讃を獨占した。だが今度は、彼女は、火に抛り込まれて——灰になるかも知れない。

ひと足、コン四郎館の冠木門を潜ると、彼女は、まるで「犬の毛を逆さに撫でたやうな」惡臭にうたれる。さうして、老コン四郎氏の傍(そば)へ寄ると、「蟲が脊背を下る」やうな、人種的の惡感に襲へるのだ。それに、第一、疊の上を沓で歩く生活が、彼女のこれまでのいつさいの生活基準を、根柢からぶつ毀してしまふ。併つて、彼女は、をばさまの、あの、ちりめん臍きの香脫のある家で、折紙のやうな禮儀を學んだ。いまは、彼女は、棒の如く剛爽くあらねばならない。さうして、寢部屋だが、——つまり老コン四郎氏の居間のあの FUSHUMA の奥——彼女がつゝましく坐つて、天と地と人に、花を扮るであらう床の間に、うつしすたんどの手水盥が載つかつてるのは、まあ好いとして、壁に寄せた鐵の柱と木の臺の寢床——それも好いとして、その下に、綴錦緞の疊の上に、椅麗らしく置いてあるあの西洋瀬戸の器物——それが、ちやん

ぶるぼつとの尿瓶とは！　此處は、もと、和尚さまの居間だつた。

もし、コン四郎氏が、「日本人のアルコホル漬」の積りで、お吉を、阿墨利加へ持つていくなら、たちまちに、天稟を振つて、にうよるくも、さんふらんせすこも、阿墨利加をみんな、消化して、ある種の華々しい存在となる筈の彼女だが、いまの彼女は、にんぽん最初の和洋生活者で、その二つの生活樣式が、彼女の頭の内に、無慚に分裂して、彼女の足を拘ひ、彼女の溜息を絞りとるのだつた。彼女には、「あの坂下の、松風のかげに、丸窓を持つ板葺の家が、コン四郎館と共に、常にあつた。をばさまの、ひつしの氣紛れの泌みついた家——鶴の、涼しい眼を宿した家……をばさまには、しばらく前に、みそはぎの水を手向けたし、鶴は、それ以前に、彼女を棄てゝ「苗字」を貰ひに、江戸へ發つてしまつた——孤獨の凝つた家だ。

この惱みの上に、ヘロリ以來、「唐人禍」の海嘯を越えて、ずつと、町の陽氣のシムボルにされ續けて來た彼女で、從つて、彼女は、そんな目標を失つた町の失望と、反感と侮蔑とを、當然、引背負はねばならなかつた。

海嘯でいつぺん消えてしまつた町は、持ち前の、先祖累代式な、潜勢力を揮つて、もう殆ど舊態通りに建ち揃ひ、藁の具足も、石と土の鎧も新しく、例の如く、脊低く蹲まつてをつた。そのどの一軒からも、いまや、冷たさと憤りが、彼女へ迫つて來るのだ。

まるで、地獄へ墮ちた亢奮のうちに彼女は、百五十ポンドのコン四郎氏を包んだ支那絹の寢卷の火照りを感じた。

「コン四郎は、いま、日本の死命を制してる男だから……」と、そう云つた意味のことを、からなる前に、海港の第二市長から聽かされ、それに、鶴を失つた諦めと、持ち前の素直な勤勞癖とから、彼女は、初めのうち、文字通り夢中で、この地獄のコン四郎館へ通つた。

あの、コン四郎氏特製の、壯大な、「アメリカ伯爵」式な乘物を、町の騷ぎの大きさゆゑに、一週間ばかりで廢してからは、コン四郎館詰めの、「五十人のスパイ」組から來る迎へも、自分から斷わつて、獨り町の眼を浴びながら、徒歩で通つた。

その時分は、老コン四郎氏と、フシユマの内の、紫ガラスの燭の灯ん中へ、二人つきりで籠ると、グロテスクな、まるで、惡夢のやうなテタ・テトで――

舌ツ足らずな、量のある聲が、彼の唾の滲んだ唇を洩れて、にぶく彼女の開花耳に震へ「おんどる・しよるつ――づろーわるす――しとつけん……」などと、皺んだ大きな指さきが、自分の胸から下へ、そんな實語經式な、教授を獨白したりする。

床の側へひきつけた小卓の上の、保命酒の德利と切子のグラスを越えて、火氣のやうな息が、ぱつと彼女の高島田の上へ、吹きつけることがある。

兩手の掌が、巨大な鳥の足さきみたいに、彼女の肩を摑んで、太い白髭が眼近く來、やがて、くるりとあちら向かせ、彼女の領脚に吸り聲が立ち、それから、彼女のしなやかな指が、燭のま傍で、彼の眼と手と髭に、さんざ弄られる……

完全に沒表情な勤勞意識で、彼女は、いつさいの勤めをつとめる。

彼女は、シングル・ベットの、亂れた毛布と白布を整へて、彼の首もとまで着せる。彼女は小卓の上を片づける。彼女は、彼の上襦袢や肌襦袢や首卷や、その他の濯ぎもの、繕ひものなどを、ちゑすとをふづろーわるすからとりだして、彼女の締めた緞子の帶の脇に抱へる。片手に、汚れたグラス二つと保命酒の德利を載せた木の盆。

白髮と白髭の間の皮膚が、點々と紅潮した彼の首が、ふいと「アメリカ伯爵」になつて、傲然とうなづく。彼女は、枕もとの燭を消して、須彌壇の方へ通じる唐紙を明けて出、闇い板の間を上草履で渡つて、つき當りの唐紙の中へ這入る。

行燈のともつた日本間。彼女は、汚れものを庫裡への通じ口へ片寄せて置く。彼女は隅の机の上から硯箱と半紙綴ぢの覺え帖を持ち出して、仕立屋へ廻す繕ひものや仕立直し――頭巾、襦袢、下股引などを書きとめる……

やがて、空間を一定の方向へすうと流れて行く物體のやうな、形のきまつた、だが、芯の淡い、そんな感じの、彼女の寢姿を、朝まで、この部屋に、われわれは見出す――

やはり、こんな獸劇時代の、ある、日の出前のこと。

彼女は、ふとこのコン四郎館の、本當の、本堂の前の庭に、何かしら不安な氣配を感じて眼を醒ました。濁つた聲音が、四五人入りまじつて聽え、話し聲が低くし、ちよいとしいんとなつたと思ふと、ふいに、悲調の籠つた牛の嘷き聲が、ひとこゑ、餘韻をひいて消えた。それから、急に、何か亢ぶつた氣配が、太陽の昇る頃まで、庫裡と庭の間に、つゞいた。

その朝、歸りがけに、彼女が庭を見ると、片傍の露のキラめいた佛手柑の下に、赤黑いものがいちめんに地べたにこびりつき、そちこちに毛屑が散り、それを馬丁が箒で掃いてゐた。

「やつたあ。」と、彼は、刺靑の濃い手で斧を打ち下す眞似をした。

そして、そつと顏を寄せて來て

「大將、食つちやうんだよ。」と、本堂を指さしながら、彼女に囁いた。

彼女は、眼ぶちに薄く蒼味の滲んだ眼を、傳向けて、弱々しく微笑んだ。ろびんそん・くるうそー風小屋をたつたキジ鳩が、門わきの椿に縛りつけた高い花旗と共に、空に靡いてをつた――

同じ朝。

冠木門の石段を下りて、彼女は、樹立ちと、藁家の間を、いつものやうに、まつすぐに向うを見て歸つてゆく。

「やあ、御苦勞。」と樹立ちの間の藁家から聲がひゞく。

例の「スパイ組」の一人だ。そんな風に、皮肉でなしに、彼女へ呼びかける者は、いまの彼女には、この連中位のものだつた。

それから五六間いつた時、ふいと、彼女が顏を震はせた。そこの一瞥に、麥の刎ね様にまで、こんな時刻に、人が寄つ

てゐた。低い讀經の聲が、その暗い家ん中から聽える。死人のあつた家だ。

彼女は、そこに寄つた人々の顏が、いつせいに、こちらへ振り向いたのを感じた

「ほんとに、葬式も、出せない！」と、いつものやうに、啖のやうな調子が、彼女へ飛んで來た。

彼女は、花旗の下に群れてる檀家に、そんな陰鬱な不平の鬱積してることを知つてゐた。和尚は須彌壇と一緒に隱居所へ移つてゐるんだし檀家の墓は、コン四郎館の圍ひ内で、唐人の穢れを浴びてをつた。だから、彼等の家には、苦情が、いつまでも迷つてゐ、土葬の棺桶は、彼等の菜園のひと隅に、始終不安を訴えてゐたのだ。

彼女は、少し眼を俯せ、忙ぎ足に濱へ出た。そこから、町の入口の渡船場までは、あの岩山の下の濱沿ひの小徑で、彼女は、たゞ――青い島の散つた海を見ていけばよかつた。

やがて、彼女は、あのをばさまに手を曳かれて、「眩しい、怖い、悪い」人々の街を避けて、散步に來た思ひ出のある砂濱へ來る。

それから、町の前觸れの、渡船場だ。

で、町――北の端から、南の端の、大工町の天邊にある彼女の丸窓の家まで――白眼の冷々と充滿した街。

その町を、今朝は、いつものやうでなく、被布の肩をすぼめて、ほとんど小走りに家へ戻つた。さうして、一皿のものも何も、身につけたものは、いつさい、拋り出して、とり換へてしまひ、頭も、潰して束ね、それから、もつとコン郎氏を落すために、錢湯へ出かけやうとして、ふいと、二三日前、其處で、屯田藝者が、彼女に笑ひながら言つた言葉を思ひ出した。

「お吉さん。お痩せなすつたね。」

それは、この海港の凡ての女が、唐人に向つて持つ迷信を、代辯した言葉だつた。

彼女は、勝手もとに、立つたまゝ、つゞけざまに、茶碗酒をあほつた。で、ふらふらと、裏口から、隣りの、素枯れた姉の家の土間を表へ出、坂を下へ、湯道具を抱えて、よろめきながら、下りていつた……

この彼女の「監獄の亢奮」時代には、コン四郎氏は、彼女にとつては、たゞ赧い、眼の窪んだ、どれを見ても一緒の、唐人でしかなかつた。

だが、そんな亢奮のうちにも、彼女は、いつの間にか、無意識に彼女の明鳥のやうに、彼女のえげれす語を呑み込んでしまつた。さうしてそれが、次第に、彼女の亢奮を靜もらせ、彼女の唐人意識を解し、そしてまたコン四郎氏のうちに、幾分かの「人間」を認めさせた。

彼女は、彼の白子のやうな手の指の運動にも、何か「表情」の潜んでることを知つたし、また、彼の、どろんと濁つた眼にも、それを感知することが出來た。隨分ぶつきらぼうな、彼の手足の動きにも、何處かに細かい氣持ちが籠つてるやうな氣さえするのだつた。

それに、あゝした勤勞辨を持つ彼女で、從つて、この彼への理解は、そのまゝ、むしろ、幾倍かに、彼へひゞいていき、その結果が、また、彼女に木魂して、そしてそこに、妙な二人の氣持ちを醸しだした。

人生に、大きな忘れ物をした彼と、「唐人」お吉!

ある夜、彼女は、皮椅子の脊に脱ぎかけてある彼の對衫織を始末しやうとして、ふと、その牡丹の穴に、桃色の雛菊が挿さつてるのを見た。

それを、そつと撮みあげて、ベツドの老コン四郎氏の眼の先きへ持つていくと、

「おう!」と上機嫌に微笑み、床ん中から手を出して、それを彼女の指ごと握つて、彼の白鬚にこすりつけ

「これは、アメリカでは、獨り者が戀愛に成功した時に、ボタンの穴に挿し込む。」と云ひ、さて、一層紅々と笑つて、その、説明の英語を彼女に呑みこまさうと、一語〱始めかけたのだが、どうしたのか、ふいと、花も、彼女の指も、つつ放して、ぎゆつと鬚を撮み、いつもい合圖の右手を大きく振つた

「去け！」

彼女は、汚れ物を持つて、紫ガラスの燭を消して、唐紙を靜に明けて、須彌壇の板の間を渡つて、向うの行燈の部屋へ――だが、其處へ這入ると、急に、よろけ、ヰスキーも保命酒も盤に流れ、そん中へグラスが二つ轉がつた――彼女は、邸つ拂つてをつた………

彼女が、あの牛乳を、そつと搾らせて――それは、指の尖へ滴らすと、すうと三日月型に膨れちぢまる、もつとも生の牛乳で、もしかすると、日本最初の、搾乳かも知れない――五勺ほど切子のとむぶろるに入れて、すゝめ、老コン四郎氏を挑ばせたのも、以上のやうな氣持ちからで、コン四郎氏は、その返禮に、二十個の琥珀の玉を縒り糸で繋いだのを、そつと、彼女の、首にかけた。

だが、老コン四郎氏は、常に、「アメリカ伯爵」だつたし、お吉は、ますゝ酒に親しんだ………

拾度、コン四郎氏が、あの吉「ストーザ」のまぼろしに、感慨を深めた時分のこと――

海港に、熱病が流行し、そちこちの低い藥家や土藏家が陰慘な呻き聲を吐いてゐた。家々の「史門」、が頑强に太陽と風に反抗し、小川は、常に濯ぎ場と食器洗ひ場を兼ねてゐる、そ云つた開港場で、從つて、こうした熱病の場合にも、それ相當の陰氣な治療法が、町の人々によつて實行された。

さうして、此の場合――

藥家の庇の下に、惡脈拂ひの火がチロゝと燃え、その煙の隙きに、全身のところゞが瘤型に隆起した患者が、眼と鼻と、骨を氣味惡く際立たせて、呻いて居つた。土藏家の鰐口に開いた庇下には、そんな病人を取り卷いて坐つた人々の、手から手へ、大きな、くろずんだ、珠數の球が、鈍く動いてゐた。出來たての、白木の棺桶を載せた荷車が、街を通る。啜り泣の聲が、ひどく。海港の生命の船旅や、料亭の騷ぎさえ、途絶え勝ちに低まり、氣紛れな馬鹿騷ぎは、却つてそれだけ、町に鬱陶しさを加へる。

そ云つた雰圍氣に包まれた街を、お吉の、海港獨歩の綺羅びやかな被布姿が、ふらふらと、醉歩を踏んで唐人館へ、辿つてゆく。

病人は、張り裂けるほど瞼を開いて、彼女へ齒ぎしりする。百萬遍の珠數が、だらりと動きを留め、人々が、いつせいに彼女を睨まへる。

「唐人お吉！」

彼女は、手をだらりと垂れ、脱げかゝる荷蘭緒を、踏み締め、濶大なあの烏睛を向うの夕空に注ぎ、きりつと唇を嚙みしめて、よろけながら渡船場へ――

そんなある夜。

コン四郎館の灯りの無い本堂――

左右に黑く垂れたカーテンの内らのランプの灯が、天井に窩り、何本かの太い圓柱の首を、黃いろく半圓筒狀に浮きあがらせてゐる。

多分、コン四郎氏は、嘘つきの日本官吏の操縱策でも練つてゐるのであらう。多分、ヒユウ助君は、日本通詞の阿蘭陀文に頭を捻つてゐるのであらう。しばらく、しんと靜まり、やがて、皮沓で、燈心草の敷物を小刻みに踏む音が、左手のカーテンのうちにし、つゞいて

「オキチサン！」と、例のテノオルが、心持ち低く亂れた調子でひゞく。

右手の奧の、控え室の唐紙が、すうと明き、お吉のあの姿が、行燈の灯を負うて現れる。

と、同時に、左手のカーテンの一部が撥ね返り、老コン四郎氏が上半身をつき出す。

「オ・キ・チ・サン」

「はい。たゞいま。」とお吉が、須彌壇の板敷の途中の闇がりん中から答へる。

「お・い・で・な・さ・い。お・い……Come here, my dear」

コン四郎氏の右腕が、すつと闇へ伸び、闇ん中で、掌を上わ向きに、指さきを掻き返へらせる。まるで、犬を呼ぶやうに！――お吉には見えない。

お吉の姿が、事務室を斜にそちらへ、上香の音を擦つて、近づき、ふいと、椅子に躓いて倒れる

「ぱア！」

コン四郎氏の姿が、馳け寄つて、彼女を抱きあげる。

「また酔つてる！オキチサン！」

「えい、コン四郎さん。」

「いかん！いかん！酔つて來ちあ！レデイが、そんな、酔拂つて道を歩くなんぞ！いかん！いけない。今日は、歸りなさい。お歸り！去ね！」

「はい。コン四郎さん。」

お吉の姿が、立ちあがつて裾を整へ、お辭儀をして、もとの控えの間へ、靜にひき歸す。

老コン四郎氏も、俯向き加減に、もとのカーテンへいき、そこに立ち止つて、そちらを注視する。

お吉は、腰を屈めて、唐紙をあけ、上香を揃へて脱ぎ、こちらへ膝まづいて、そのまゝすうと唐紙を閉ぢる。

老コン四郎氏が、さつと、カーテンの中へ消える。大跨に歩く跫音。

さて、もし、われわれが、控えの間の唐紙を、この瞬間に、開けるなら、われわれは、お吉が、心持ち亂れた足どりで、彼女のあの濯ぎ物や繕ひものなどの覺え帖と硯り箱をとりに、一隅へゆく姿を、見るであらう。

もし、コン四郎氏を見るなら――いや、それは、書かないで置かう。

定價

	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい 郵劵代用は一割增の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和三年十一月十八日印刷
昭和三年十二月一日發行
（禁轉載）

編輯兼發行人 島中雄作
印刷人 高木鳥三
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同長野三二〇五番

神經衰弱
不眠症



▼岡田醫學博士▼伊藤醫學博士
▼福田醫學博士▼ロビンソン博士證明推奨

レーベン

レーベン は米麥等を主食とせる日本人の體質に適應する植物製劑にして絕對に副作用の憂なし
レーベン は腦の重要なる榮養素たるリンサンを多量に含有し積極的治療劑として健腦强精の卓効を有す

主効病狀

腦病・神經衰弱・ヒステリー・頭痛・頭重・逆上・便秘・不眠症・耳鳴・眩暈・記憶力減退・勉學過度・憂鬱焦燥・心身衰弱・遺精・夢精・陰萎等の生殖器障害

注意

學者、銀行、會社員、學生、著述家、技師、官吏、其他平素腦を使用する人は必ず常用せよ

◉進呈

増田博士森常持兩學士共著神經衰弱療法精神療法は申込次第贈呈

藥價

一圓・二圓・三圓・五圓・(徳用分)拾圓(試用分)五十錢
全國到る處有名藥店にあり

◀發賣 東京市京橋區弓町 大阪市天王寺上汐町六 中南定太郎藥房▶

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.